
風神の墓標

白馬 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風神の墓標

【Nコード】

N9841Q

【作者名】

白馬 黎

【あらすじ】

自国兵士の襲撃を受け村を焼かれた娘ウラル。陶芸窯の中に隠れていた彼女を助けたのは義勇軍の頭目ジンと、もと盗賊の青年フギン、獣なみに嗅覚や聴覚の鋭い大男アラーハら八人の仲間だった。押し寄せる異国に隣国は滅び、ウラルらのリーグ国も風前の灯火。巻き込まれたウラルは受難の道を歩み出す。

原稿用紙換算1000枚超の大長編異世界ファンタジー。できるだけ週1（週末）更新……を心がけたいんですが、ただいま超絶スランプ+多忙につき更新停滞中。

(重複投稿：本家サイト「Empty Air」)

序章 「泣かない子ども」

壁にあいた穴から真つ赤な空が見える。空を赤く照らしているのは村の屋根や煙突からあがる炎だ。消す人もいない火はどんどん燃え広がり、小さな村は全部が炎にのみこまれてしまいそうになっている。

静かだった。盗賊が暴れまわっているなどということが嘘のようだ。その盗賊が自国の兵士で、兵糧不足で盗賊のまねごとをやったのだといわれても、まったく実感がわいてこない。

ウラルの腕の中、いや、立たせた膝と胸の間で抱いていた赤ん坊がむずがった。赤ん坊の母親の死に顔を思い出し、ウラルは身震いした。流れ矢に当たったのか斬られたのかは定かではなかったが、ウラルが逃げようと外へ出たときには倒れていて、血泡をふいていた。何がなんだかわからないまま泣きわめく赤ん坊を胸に抱き、ウラルは走りだしていた。逃げ場所を探して走りまわり、村はずれにある陶芸窯に入りこんでうずくまったのだった。

ウラルは胸をはだけ、乳房を赤ん坊の口にあてがった。とにかく赤ん坊を泣きやませなくては。泣き声を聞きつけられたら赤ん坊ともども殺されてしまう。だがウラルには赤ん坊を育てた経験がなかった。乳が出るはずもなく、赤ん坊が泣きやむ気配はない。せめて離乳食を食べられるくらいの年頃になっていてくれればと臍をかんだが、たとえ乳離れしていたとしても何も食べるものもない。そこらの雑草をとってくるのさえはばかられた。

ウラルは震える手で赤ん坊を抱きしめた。お願いだから、泣きやんで。願いに反して赤ん坊はいつそう高く泣き声をあげる。このまま赤ん坊が泣きやまなかつたら略奪兵に見つかってしまうかもしれない。赤ん坊を抱く腕に力を込めた。泣き声はウラルの腕の中でくぐもり、小さくなった。しばらくそのまましていると、やっと赤ん坊は泣きやんだ。また泣き出すのが怖くて腕の力はゆるめなかった。

眠ったらしい赤ん坊を抱いてウルルはぼんやりとしていた。

窯の空気穴から見える空は、まだ赤い。

窯の外で何か音がした。怖いと思っていたら風の音でも恐ろしく聞こえるのだ、とウルルは自分に言い聞かせた。それでもやっぱり気になって、耳をぴったりと壁につけ、外の様子をうかがった。

足音だ。間違いない。人が来る。

長靴の音。二人、いや三人だろうか。ガチャガチャと金属がこすれる音がする。武器を持っているのだろうか。

「焼け残っているな」

声が出た。低い、落ちついた男の声だ。

ノックの音が出た。声の主が陶芸じいさんの家のドアをたたいているらしい。

「誰かいませんか！」

はじめに聞こえた声とは別の若い男の声がする。呼びかけに返事は返らなかった。

「いないみたいだな。誰も」

略奪兵ならノックなどするわけがない。生き残りがいるかどうかは確認するだろうが、それなら扉を押しやぶって中を物色すればいいはずだ。兵士でないなら何者なのだろうか。赤ん坊を抱いたままウルルは立ちあがり、薪を入れる穴から外をうかがった。陶芸じいさんの家の壁が見えるだけだ。誰も見えない。

「誰かいるかもしれない」

三人目の声が出た。声からして壮年だろう、低く太い声だ。びくりとウルルは肩を震わせた。

「おい、アラーハ！ やめろよ」

ドアの開く音がする。押しやぶったわけではない、鍵がかかっていなかったようだ。

「誰もいない。無事に逃げられたかな。って、おい、アラーハ！」
聞き慣れない足音。アラーハという男は木靴でもはいているのだろうか、馬の蹄のような足音だ。まっすぐこちらへ向かってくる。

「行こう、フギン。アラー八の勘は信じたほうがいい」

ウラルはぎゅっと赤ん坊を抱きしめ、立ちあがった。外へ通じる穴は三つ。入り口、煙だしの穴、薪を入れる穴。入り口以外の穴からウラルが出るのは難しそうだ。今、入り口から外へ出れば見つかつてしまうかもしれない。三人分の足音はどんどん近づいてくる。

「陶芸好きのじいさんでも住んでいたのかな。立派な窯だ」

若い男、フギンがつぶやいた。もう窯が丸見えということだろう。壁に耳をつけなくともはつきりその声が聞こえる。武器になるものは。窯の中に残された素焼きの皿や壺しかない。割れば鋭利な刃物になるだろうか。いや、割れる音がすれば相手に気づかれる。

窯の入り口に影が落ちた。どうする。どうする！

とっさに手に触れた花瓶を投げつけた。さっと槍をかまえた男に突進する。女と見てとってか若い男、フギンが慌てた様子で槍を放りだした。

男らの隙間をすり抜けようとしたウラルの手をフギンがひつつかむ。ウラルは悲鳴をあげて身をよじった。蹴りつけた。噛みついた。しかしウラルの手をつかんだ男の力は尋常ではなく、どれだけ暴れてもゆるまない。

「おい、俺たちは味方だ！ 助けにきたんだ！」

手をつかんだ男が叫んだ。手にこもった力がどうしようもなく怖い。怖い怖い怖い怖い。男の足を力いっぱい蹴りつけた瞬間、軸足が払われ、ウラルは赤ん坊を抱いたまま地面に叩きつけられた。それでも男の腕が離れない。

「落ち着けよ！ お前を殺そうとしてるわけじゃない！」

「フギン、お前が落ちつけ。離してやれよ」

落ち着き払った声にフギンの腕がゆるみ、ウラルの体からもすとんと力が抜けた。立ち上がるうとしたが、腰が抜けてしまったのか足に力が入らない。ウラルは震えながらその場の三人を見上げた。さっきのフギン、それから壮年の大男。それからフギンほど若くはなくアラー八よりは若い、黒マントの男。この三人のリーダー的な

雰囲気があつた。名前はわからない。

「お前」

リーダー格の男がウラルの前にかがみこんだ。

「酷なことをすまない。……その赤ん坊は、あきらめろ」

何を言われたかわからず、ウラルは男の目を見つめた。男の目に沈痛なものがある。

まさか。やっと男の言葉の意味を理解してウラルは赤ん坊を見た。赤ん坊の体には力がなく、手はだらりとたれさがっている。ウラルは赤ん坊をゆすりあげた。首はすわっているはずだったが、その首がぐらりぐらりと頼りなく揺れる。

「うそ」

息がない。ウラルが窯に逃げこんだときは、たしかに、たしかに生きて、泣いていたのに。息がない。殺してしまった。いつ、どうして。

男はウラルのがちがちにこわばった手をとると、ゆっくりと赤ん坊をもぎとった。男の腕に抱かれた赤ん坊の顔をウラルは座りこんだままのぞきこみ、震える指でそつと頬をなでた。この頬もすぐにかさついてひび割れてしまう。乳白色の肌が黒ずみ始めている。

ウラルは今にも泣き出しそうな、けれど泣きたくても泣けない、ぐしゃぐしゃに歪んだ顔をしていたのだと思う。目の前の男が悲しげに笑い、自分のマントをウラルの肩にかけた。

「お前が生きていてくれて、よかった」

ウラルは男のぬくもりの移った真つ黒なマントをにぎりしめた。

第一章 1 「夕暮れの丘で」 上

ウラルは赤ん坊の亡骸を永遠の眠りにつく母親の胸にそっとおいた。手で土をかぶせていく。横で見守っていた男がシャベルで土を運んでくれた。

村の裏手にある大きな丘だった。子どもたちの遊び場、動物たちの放牧場、そしてウラルにとってもお気に入りの場所だった丘。そこに今、村人たちを葬っている。

「お前、名前は？」

「ウラル」

「ウラルか。俺はジン・ヒュグルだ。義勇軍の頭目をやっている」
ジン、とウラルは小さく呟く。やっとこの人の名前が聞けた。

「この子のこと、本当に気の毒だったな」

「私の子じゃないの。友達の」

「ああ、それで」

ジンが赤ん坊とその母親の墓を見やる。妙だとは思っていたらうに、彼は何も聞かずに穴を掘り、二人の埋葬を手伝ってくれた。

丘の土は掘り返されたばかりでやわらかく、種をまく直前の畑のようだった。土のかけられた遺体の上には石が乗っている。磨かれてもない、名前も彫りこまれていない自然の石だ。これが村人たちの墓石だった。

ウラルは無骨な墓標の前の上にナタ草の花を置いた。別名を時草という、一日で赤、橙、黄、黄緑、緑、青、藍、紫の八色に色をかえる花だ。今は青、夕暮れの色に染まっている。

「みんなに風神のご加護を」

小さくうなずいたウラルの顔を、ジンが煤まみれの顔でのぞきこむ。それからシャツの裾で手をよくぬぐうと、ぼんと大きな手のひらをウラルの頭の上に置いた。

「明日になったら隣村へ行こう。どこに誰を埋めたか覚えていてくれ。そして、隣村へ逃げ延びた人に教えてほしい」

よくも知らない人にしては親密すぎる仕草だったが、不思議と嫌悪感はなかった。黙ってされるがままになっていくウラルに、ジンもまたじつと動かない。髪をなでるでもなく、黙ってぬくもりを伝えてくれるだけ。

「頭目うー！ なにオンナノコの弱みにつけこんで言い寄ってるんスカー？」

おちやらけた声に振り返ってみれば、昼間のフギンがシャベルをかついで立っていた。まくりあげられた袖から赤い牡牛の刺青がのぞいている。

「不純なことしてるみたいに言うなよ」

「不純なことだろ、会って間もないオンナノコとそんな接近しちゃつてさ。こんなオッサンなんて彼女も嫌だろ」

「誰がオッサンだ」

「四十間近だろ？ 釣り合わないって」

「俺はまだ三十二だ！」

そこでやっと、二人はぽかんと見つめているウラルに気づいたらしい。顔を見合わせ、照れくさそうに頭をかいた。

「こんな場で不謹慎すぎるよな、すまなかった。ウラルは何歳だ？」

「二十二」

「お、じゃあ俺とちようどいいんじゃないか？ 二十四歳だよ、俺」
「お前しばらく黙ってる」

「名前」

やっと自分から口を開いたウラルを二人が驚いた様子で見つめた。

「名前、フギンっていうの？」

「あ、うん。俺はフギン・ヘリアン、乗馬の腕は超一流でも心はまだまだ少年さ。好きな食べ物は肉全般」

「なに食べ物の好みなんか語ってるんだ、お前は心も体もガキだろうが。ちようどいい、スヴェル 全員を呼んできてくれ。ウラル

に紹介しよう」

「名前はウラルっていうんだな？ わかった！」

あつという間にフギンの姿が遠ざかっていく。おそろしく足の速い男だった。そして声のばかでかい男だった。「スヴェル 全員集合ー！ 頭目がウラルちゃんに紹介するってさー！」と走りながら叫んでいる。

「まったくあいつは」

ジンが呆れ顔でフギンの背中を見送っている。

フギンの呼びかけにこたえて、ジンと同じような呆れ顔の男らが集まってきた。最後にぶらりとやってきた大男は陶芸窯からジン、フギンと一緒にウラルを救い出してくれたアラーハだ。

こうしてみると本当に大きい。女性としては平均身長があるウラルだが、それでも視線の高さはアラーハのみぞおちくらい。規格外に大きな男だった。けれど首が長く均整の取れた体つきをしていて、ウスノロの印象はなかった。その上、他の者のような野良着ではなく毛皮を身にまとっている。

まるで獣だ。思わず目をそらしたウラルの視線が、隣に立っていたジンの視線とかちあった。

「紹介する。アラーハはわかるな？」

ジンの紹介に、アラーハがふつと目元を和ませた。和ませているはずなのだが、視線を向けられただけで思わずたじろいでしまう。

「心配するな、こう見えてびっくりするほど優しい男なんだ。フギンの隣にいるのがリゼ」

若い男が「リゼ・スーク。伝令です」とウラルにほほえんだ。小柄な男で、背丈はウラルとさほど変わらない。体にぴったりした服を着ているからそう見えるのかもしれないが、下手をするとウラルより細いのではないだろうか。

「その隣がマライ」

大柄な若い男が「よろしく」と人懐っこい笑みを見せた。短い髪、ごつごつした拳、野良着の袖や裾からのぞくたくましい腕や足。ど

う見ても立派な男だが……。

「その顔、気づいたみたいだね。そう、私は女だ。やっぱり男と女じゃ見てるところが違っただね。ちえ、こんなに早く見抜かれるのは久しぶりだよ」

胸もごつい革の胸当てで覆われているし、声を聞かなければウラルもわからなかったろう。マライは愉快そうに笑ってみせた。

「次がサイフォス」

立派なあごひげの男が「サイフォスだ」と軽く手を挙げた。薄汚れた野良着に身を包んだ、堂々たる体格の中年男。ジンが主将ならサイフォスが副将なのだろうか。優しそっだが貫禄がある。

「それから参謀のイズンと軍医のネザだ」

見るからに家柄のよさそうな痩身の男と、見るからに偏屈そうな猫背の男が進み出た。年のころはともに三十代後半から四十代くらい。

「村のこと、本当にお気の毒でした。僕らにできることがあれば何でも言ってください」

「後から俺のところに来るといい、念のため診察してやろう」

二人のセリフにウラルは黙って頭を下げた。

「ほかのやつらはゴウランラという組織の者で、明日の朝になったら帰ってしまう。俺たちだけでは力不足だから加勢に来てくれたんだ。明日はこの八人でウラルを隣村まで送っていくからな」

ジンの声ここに集まらず黙々と墓掘りをしてきている三十人ばかりを見回し、ウラルはうなずいた。

「よし、じゃあウラルは残りの花を頼むな。あとの者は墓掘りを頼む。ああ、イズンとネザはテント建てに回ってくれ」

はいよ、と七人がきびすを返した。

「あ、待って！」

ウラルの声に七人が振り返る。

「私はウラル。ウラル・レーラスです。助けに来てくれて本当にありがとうございました！ その、私だけ自己紹介してないから……」

七人、いや、ジンを含めた八人がきよとんとし、顔を見合わせ笑った。

ジンが軽くウラルの背を押す。ウラルは再び体格のいい男らに囲まれていた。紅一点マライのたくましい腕に抱きしめられ、フギンにわしわし髪をなでられて。

「ほんつと辛い目にあつたね。もう大丈夫だから安心するんだよ」

「おいマライ、そんなきつく抱きしめたら窒息するだろ」

「肋骨が折れたらいくら俺でも治療に苦労する」

「ばか、ちゃんと加減してるよ！ あ、でもウラル、痛いかい？」

「正直フギンの手の方が……。舞った灰がすぐく目に入るの」

「うわ、ごめん！ そんなつもりは！」

「人を不純よばわりしておいて自分はそれか？」

「茶化さないでくれよオカシラ！」

明るい笑い声。ウラルもつられて笑おうとして、頬の筋肉ががちがちにこわばっていることに気がついた。

「ウラル、どうした？」

なんでもないと首を振る、とたん、なぜか目の前がぼやけた。

「わからない。気が抜けたのかな……？」

ぼろりと頬を涙が伝う。膝からも力が抜け、よろめいたところをマライががっしり支えてくれた。

「今は泣け。必要なことだ」

そつとジンがウラルの頭の上に手のひらを置く。それでこらえきれなくなった。

ウラルは泣いた。

第一章 1 「夕暮れの丘で」 下

*

カツ、コツ、カツ、コツ。規則正しい蹄の音が森に響いている。ウラルは泣きはらした顔で馬に乗っていた。乗馬は初めてだったが、馬は先を行く馬にくつついて勝手に歩いていく。前の馬が道を曲がれば曲がったし、止まれば止まる。手綱などほとんど必要なかった。

「どうだ？ 初乗馬は」

フギンが馬をよせてきた。栗毛の馬がくるつとウラルに耳をむける。フギンが栗毛の耳をつついた。馬は嫌そうに耳をふるわせ、それでもやめずにフギンが耳をつつくと、頭ごと上下に大きくふつた。

「かわいい」

「だろ？」

「この子、名前は？」

「おいおい、自分の乗ってる馬より先に俺の馬の名前を聞くのかよ。こっちはステラ、お前が乗ってるその馬はシニル」

ウラルはシニルの耳をつつこうとしたが、手が耳に届く前にバランスがくずれて、ウラルは慌てて馬の首にしがみついた。おどけた声で「大丈夫かあ？」とフギンが笑う。

「ジン！」

鋭い声にウラルはびくりと肩を縮めた。振り返ってみれば十人中でひとりだけ徒歩のアラーハが後ろから走ってくるどころだ。

シニルがアラーハの馬なのかと思ったのだが、どうやら違っらしかった。アラーハはそもそも馬に乗れないらしい。ずっと歩きで大丈夫なのだろうかとウラルは心配になったが、べつに問題はなさそうだ。馬はずっと人が歩くのとかわからない速さでゆっくり歩いてい

るだけだった。

「何か様子がおかしい。気をつける」

「どうしたんだ？」

アラーハの眉間にシワがよった。

「血のにおいがする。煙のにおいもだ」

ウラルは首をかしげた。そんなにおいはしないが……。隣のフギンを見てみると、少し険しい顔で「アラーハは耳と鼻が獣なみにきくんだ」と教えてくれた。

「ウラルはマライとここで待機、何かあればイズンがフルートで知らせる。他の者は戦闘の危険性がある。警戒して進むぞ」

よく揃った返事があがった。

「待つて！ 戦闘の危険性つて、まさか」

「まだ断定できないが、この村まで襲われたかもしれない。思い違いだといいいんだが」

「そんな」

「ひとまずここで待つていてくれ、様子を見てくる。行くぞ」

ジンが馬を進めた、とたん、馬が棹立ちになって暴れ始めた。馬の動きに合わせてカラン、カラン、と鐘の音がする。馬の足に濃い緑色の紐がひっかかっていた。

「武装した兵士がきた！ 隣村に来たやつらだ！」

遠くから怒鳴り声が出た。ジンの額を汗が伝う。

「見つかったか。戦闘準備、ウラルの護衛はマライからアラーハに変更だ！ 他の者は盗賊兵士を霍乱するぞ。少しでも村人が逃げる時間を稼ぐ。ゴウランラ の助けはない、無茶はするなよ！」

やぐらか何かから見ているらしい盗賊兵士に聞こえぬよう低い、けれど覇気をともなった声。命令すると同時にジンは駆け始めている。つられて駆けようとしたウラルの馬の前にアラーハが立ちふさがった。驚いた馬が跳ねる。ほとんど鞍から落ちたウラルの腕をアラーハがつかみ、乱暴に馬からおろした。アラーハに尻を叩かれた馬は宙を蹴り鞍の荷物を投げだしながら、すさまじい勢いで仲

間を追いかけ始めている。

「来い！」

アラール八に怒鳴られたが、足が震えて動けない。アラール八は業を煮やした様子でウルルを抱き上げると茂みの中に分け入った。こんな獣じみた大男にそんなことをされるのだ、ウルルは思わず悲鳴をあげようとしたが、もれたのは息のかたまりとかすかなうめき声だけだった。どうしてジンはマライでなくこんな大男にウルルの護衛を任せただろう……。

「怖いか？」

ウルルの震えに気づいたのかアラール八が声をかけてきた。やつとの思いでうなずくと、アラール八はかすかな微笑を浮かべた。

「お前にとっては女のマライが護衛についたほうがよかつたんだろうな。だが、マライは気が短い。人を守るのに向いた性格じゃない」

アラール八はウルルを灌木の下にそつとおろすと、枝や落ち葉をかきあつめてウルルの体の上に乗せ始めた。

「俺は気が長い。人を守るのにも慣れていない。心配するな」

ウルルをすっかり隠してしまうと、「そこで動くなよ」と聞こえるか聞こえないかぎりぎりの低い声で指示をした。それからウルルの横で地面に伏せると地面に耳をあて、遠くの音を聞いている。

どれくらい経つたろうか、アラール八の目に緊張が走った。何事かと林道を見ようとするウルルに、アラール八は伏せていると手で合図をする。

荒々しい足音が聞こえた。兵士が数人、馬で林道を走ってきたようだ。横目でアラール八を見る。息の音すらなくなってしまった。どこかへ行ってしまったのかと思ったが、アラール八はウルルの隣で林道をにらんでいる。暑さのためか緊張のためか、額には玉の汗が浮かんでいた。

馬蹄音が響く、盗賊兵士の怒鳴り声が響く。どうやら敵同士がちあつたらしい、高い金属音と悲鳴がすぐそばで響き渡った。

「アラール八！ どこにいる！」

フギンの声が鋼の音に混じる。ウラルのすぐそばで葉ずれの音がした、瞬間、ウラルが隠れている場所とはまったく別の場所からアラール八が飛び出した。どうやら葉ずれの音がした一瞬でアラール八は移動していたようだ。音もなく、人間離れた速さで。まるで本物の獣だ。

「ウラルは」

「そこにいる」

フギンの死角をアラール八が援護する。フギンの武器は槍、アラール八は巨大な剣の形をした棍棒だ。フギンが槍を振るうたび誰かの喉に血がしぶき、アラール八が豪腕を振るうたび誰かの骨がぱつきり折れ、あるいは砕かれる。

「ある程度けちらしてきたが、これだけの人数じゃもたない。逃げるぞ」

アラール八がウラルの方に一步踏みだした。剣のうなる音と骨の碎ける音。アラール八がウラルの前に立った、と思った瞬間、小脇にかえられてしまった。慌てる間もなくフギンの馬に押し上げられる。「その子を連れて先に行っている」

「お前は どうする」

「すぐに追いつく」

フギンが槍で剣を防ぐ。そのまま槍はぐんと回転し、盗賊兵士の喉を突きやぶった。

「わかった、この名騎手フギンに任せとけ。すぐに来いよ！」

アラール八が道の中央に立ちふさがり、馬の尻を叩いた。驚いた馬がアラール八を蹴ろうとしたが、フギンがドンツと脚をいれるといきなり駆けだした。

馬の揺れは、想像以上どころのものではない。後ろに乗ったフギンが支えているおかげでウラルはかろうじて乗っいられるが、今にも振り落とされそうだ。フギンの肩ごしに後ろを見ると、いつアラール八の守りを抜けたのか三騎が追いつがっている。

「後ろを向くな、馬が走りづらくなる！」

今にも舌打ちが聞こえそうなフギンの怒鳴り声。

「しつかり前を向いて、体の力を抜くんだ！」

フギンの槍がうなった。フギンの支えを失ったウラルが落馬しかける。フギンが慌ててウラルの肩を支えた。

「くそっ！」

フギンが片手で槍を投げつける。

「頼むぞ、ステラ！」

槍のかわりに握られた鞭の音が鳴る。フギンの愛馬ステラは彼の要望にこたえて歩度をのばし、速度をあげた。

ウラルの耳元を矢がかすめた。背後で絶叫があがる。木陰に弓を構えた誰かが見えた。

「そのまま走り抜ける！」

軍医ネザだ。すごい猫背だったはずなのに今はびしりと背筋が伸びている。

フギンが力強くうなずき、ネザの前を走り抜けた。ネザが弓を地面に投げだし、垂れ下がっていたロープを思いきり引く。

人馬が共に悲鳴をあげた。ステラが止まりウラルとフギンがふり返ると、走り抜けたばかりの道に何十本もの槍の穂先がずらりとならび、フギンを追ってきた敵は突っこんできた勢いをそのまま串刺しになっている。ネザが引いたロープは地面に埋められた槍を持ち上げるカラクリを作動させるものだったようだ。

もうもうと立ちのぼる土煙の間をぬって、ネザの矢が次々と生き残った者を射落としていった。

「この先で大將が待っている。アラーハは」

「すぐに来る」

ステラが大きな息を吐いた。ぼたぼた口から泡がたれている。

「大丈夫か？」

ネザの気づかうような声で、ウラルは自分が震えていることに気がついた。

「無理もない。できるだけ早く安全な場所で休んだほうがいいだろ

う

ネザが示した方向にフギンは馬首を向けた。よくがんばったな、とフギンの手がやさしくステラの首を愛撫した。

林道の横に空き地が見えてきた。ジンが空き地の入り口で待っている。

「無事でよかった」

ジンはほっとしたような笑みを見せ、ウラルが馬からおりるのを手伝った。ああ、とため息かためき声かウラル自身にもわからない声漏れる。心配そうにジンはウラルの顔をのぞきこみ、木陰に自分のマントを敷くと、そこまでウラルに肩を貸した。ジンの背が高すぎてウラルは肩に手が回せず、ジンは半分腰をかがめながら歩いていた。

「すまなかった」

木陰で座りこんだウラルにジンが頭をさげた。体中に泥がこびりつき、ところどころに生々しい切り傷がある。胸から腹にかけて牛の皮を何重かにかさねた皮よろいは身につけていたが、それ以外には何も防具らしいものをつけていない。

「アラーハ！ どこをどうやったらこんなに早く馬なしで走ってこられるんだ？」

フギンの声が妙に遠くから聞こえた。無事にアラーハもここまで来ることができたようだ。わずかに矢傷をいくつかつくっただけのどこかひょうひょうとした面持ちのアラーハがネザと一緒に歩いてきていた。

うつむき、暗い顔をしているジンのそばに全員が集まってきた。

「全員、そろいました」

苦みがむきだしになったイズンの声が報告した。ジンが黙禱を捧げるかのように天を仰ぎ目を閉じている。

風向きが変わったのか、それともジンらの体に染みついたのか。血と生き物の燃えた鼻をつくにおいが濃くたちのぼっていた。村の惨状は聞くまでもなさそうだ。ウラルは膝を抱き、ただただ肩を震

わせた。

第一章 2 「森の隠れ家」 上

ゆっくり、のんびりと馬は進んでいた。ほとんど道らしい道はなく、シカかなにかが毎日水飲みに通うような獣道だ。馬が一步を踏みだすたびその腹や尻を草がこすっている。

うっそうとおいしげっていた木々がだんだんまばらになり、やがてぽっかりと開けた場所に出た。丸太のしっかりした造りをした家が二件と、厩舎らしい建物がある。

「さ、ついた。ここが俺たちの隠れ家だ」

すぐ後ろで声が出た。フギンだ。

隣村まで襲われて行き場を失ったウラルをジンは「行き先が見つかるまで自分たちと一緒にいるといい」とこの隠れ家まで連れてきてくれたのだ。

「ただいま、マーム。食事はできてるか？」

サイフォスが家のひとつに向かって声をかけた。

「できてるわけじゃないじゃないの！ 今日帰ってくるなんて聞いてないからなっ！」

女が二階の窓からひよいと顔をのぞかせ、よく響く声で男どもを怒鳴りつけた。若いのかと思ったが、案外そうでもなさそうだ。ゆわれた髪に白いものが混じっている。からから笑い声をあげる男たちを見回し、サイフォスはわざとらしく肩をすくめてみせた。

「サイフォスには嫁さんがいるんだ。おっかない奥さんだけど、料理はうまいぞ」

「フギン、聞こえてるよ！ そんなに私が優しいと思ってるなら今日は食事抜きにしようか。そのへんの草でも食うんだね！」

フギンがぎくりと肩をすくませる。マームと呼ばれた女の視線がウラルに移った。

「あら、お客さん？ 珍しいわね。遠慮なんかしないであがって。お腹すいたでしょ？」

急に語気が穏やかになった。言葉を失ったウラルにマームはウインクすると、軽い音をたてて窓を閉めた。

「さ、あがって休んでろよ。ウラルのおかげで今日は食事でありつけそうだ」

苦笑いしながらフギンは馬の手綱をとり、ウラルの馬の手綱も持って、奥の建物へ行ってしまった。ほかの男たちも笑いながら同じように馬を降り、鞍の腹帯をゆるめ、荷物を玄関に置いて厩舎へと馬を引いていく。

ウラルはひとり取り残されていた。家のドアは開け放たれており、白いタイルがしきつめられたポーチとフローリングの廊下、奥のほうに階段が見えている。

「入って、いいのかな」

マームが顔をのぞかせた窓を見あげてみる。鼻歌がかすかに聞こえてくるだけだ。

靴のかかとを石に打ちつけて泥を落とし、ウラルはドアをくぐった。上から野菜を切る音が聞こえてくる。その音を目指してウラルは二階へあがった。

「あ、そこで靴と帽子はぬいで」

半開きになっているドアの向こうから女の声が聞こえる。ウラルはブーツを脱いでドアを開けた。

女がひとり、入って左手にあるキッチンに立っている。小花柄のワンピースにベージュのエプロン。立派な炭コンロの上でシチューがコトコト音をたてていた。どうやらマームは照れ隠しに「料理はできていない」といっただけで、実際は作って待っていたようだ。

「いらっしやい、大変だったわね」

マームはエプロンで手をぬぐい、フギンに怒鳴ったときは別人のような優しい声と視線をウラルに向けた。

「初めまして。ひどい顔色ね、熱があるんじゃないの？」

ひんやりとした手がウラルの額に触れる。かすかにタマネギが香った。

「やっぱり熱がある。寒気はしない？ 疲れたのね。今、ベッドを整えるからその部屋で休んでなさい。いい？」

「大丈夫です」

「このう時は』はい、ありがとうございます』って、素直に休むべきよ」

ウラルの返事も聞かずにマームは奥の部屋へ入っていった。開け放たれたドアの向こうでマームはてきぱきと布団を出し、隣の部屋へ入って空っぽのベッドに布団を敷いた。

「着替えはこれでいいかな、おばさんくさくてごめんなさいね。ゆつくり休んで。あ、まずい、ふきこぼれてる！」

ウラルがきよとんとしていると言っているとマームは笑い、遠慮なんかしないで、とやさしく言った。

しばらく使われていない部屋のようだった。きれいに掃除され、ほこりつぽさはないが、なぜか冷たい感じのする部屋だった。「死んだ娘か息子の部屋かもしれない」というウラルの第一印象がそう思わせたのかもしれないけれど。

ウラルはマームのものらしい服に着替えて横になった。予想以上に疲れていたらしい。熱つぽさがじわりとウラルを包んだ。ウラルは布団の中で小さくなり、震えていた。

「ただいま。腹へったあ」

子どものようなフギンの声が聞こえてきた。マームが笑う。

「お帰り。シチュー、できてるよ」

「早く食いてえ」

「ジンが帰ってきてからね。あ、フギン、あんたは食事抜きだっけ」

「えー」

「冗談、冗談。おつかれさま。早く食べたいなら準備、手伝ってね」
「見てるだけで食えないとか一番つらいんだけど」

フギンとマームの話し声が聞こえてくる。どうやら壁が薄いよう

だ。

ただいま、と元気のいい声が帰ってくる。ウラルは布団の中でひとり、ふたりとその声を数えていた。

「ただいま」

七人目でジンの声が聞こえた。アラーハだけがまだ帰ってきていない。

「お帰りなさい。みんなお待ちかねよ、フギンなんか今にも飢え死にしそう」

「そりゃ悪かった」

笑いまじりのジンの声が「いただきます」の合図だった。

「ウラルはどうした？」

「あの女の子？ 熱だしてたわよ、あの子。休ませたわ。その部屋で」

「そうか」

「おかわり！」

フギンの声に笑い声があがった。よく食うなあ、お前は。やっぱりまだ子どもだな。笑いながらからかうジンに、不服そうな声がいかにえしていた。

食事がひと段落したらしく、リビングが静かになった。

「ウラル、起きてる？」

ノックの音がウラルにあてがわれた部屋に響く。フギンの声が聞こえてきた。

「起きてます。どうぞ」

フギンが部屋に入ってきた。顔に「満足」と書いてある。すっかり空腹の虫はおさまったらしい。

「具合はどう？ ネザに薬湯、作ってもらってきた。あ、ネザって軍医な。あのへびみたいなやつ」

ウラルが笑うと、フギンも嬉しそうに笑みを返してきた。フギンは小さなカップに薬湯をつぐと、ウラルに渡した。

「苦いかもしれないけど、ちゃんと飲めよ。熱いから気をつけて」

「ありがとう」

草色の薬をふうふうとふいて冷まし、口に含んだ。フギンはにっとなつっこい笑みを浮かべて「口なおし」と甘い焼き菓子をくれた。それからすぐ、俺はこれだと部屋をでていった。

フギンが出て行くと同時に不自然なまでの眠気が襲ってきた。さっきの薬湯に眠り薬でも入っていたのかもしれない。ウルルは布団にもぐりこむと気を失うように眠りに落ちた。

第一章 2 「森の隠れ家」 下

*

ノックの音でウラルは目を覚ました。寝ぼけた目をこすりながら体を起こしてみれば、ドアの内側に立って心配そうにこちらを見ているジンが見えた。

「具合はどうだ？ お前、まる一日も寝てたんだぞ。薬が効きすぎたんだ。疲れてもいたんだろうな。水、飲むか？」

ウラルの額にジンの手がふれた。剣をにぎっているせいだろうか。分厚い皮をした固い手のひらだった。

「熱もさがったな。そろそろ起きろよ。寝すぎだぞ」

「うん」

「何か食べるか？」

「食欲、ないの」

「果物なら食べられるだろう？」

ジンは部屋のドアを開けた。ウラルもリビングに出ると、三人がテーブルにつき、食事をとっている最中だった。フギンとネザ、もうひとりはりぜだったはずだ。机の上にはパン、ベーコン、チーズにバター、それから果物が並び、それぞれ芳香を放っている。

「ウラル！ 大丈夫か？」

ウラルの顔を見るなり、フギンが心配してくれた。

「大丈夫。薬、ありがとう」

ふん、と猫背のネザが鼻を鳴らす。へびが威嚇するときに出す音にそっくりな息づかいだった。

「かなり薄めたつもりなんだがな。お前は薬が効きやすい体質らしい。覚えておこう」

「座れよ、ウラル。好きなもの食ってくれ」

ジンが椅子をひいてくれたので、ウラルはありがたくテーブルに

ついた。あまり食欲はなかったが、ここまでしてもらって何も食べないというのも気がひける。夏にとれる種類のベリーを手に取り、口に入れた。甘ずっぱい汁が口いっぱいに広がったが、あまりたくさん食べる気にはなれなかった。

フギンが居心地悪そうな視線をジンに向ける。ジンはその視線を受け止め、ウラルに向けた。

「ウラル、ムールに乗ったことはあるか？」

「ムールがここにいるの？」

ムールは巨大な鳥である。役人が騎乗して村の上や森のほうで巡回しているのをウラルは何度か見たことがあった。しかし、間近で見たことはない。

「三羽いる。乗ったことはないんだな。フギンとリゼとネザ、三人で散歩にでも行ってこいよ」

「いい考えだね」

ベーコンをパンにはさみながらリゼがうれしそうに相槌をうつ。

「行こうよ、ウラル」

「空は、気持ちがいいよ。ずうつと遠くの地平線まで見えるんだ」
フギンとリゼ、二人に後押しされ、ウラルは行ってみたいというなずいた。

「よし、決まり。お頭は行きませんか？」

「いろいろと忙しくてな」

フギンが面白がるような笑みをもらした。

「次は南海岸の絵画でも見に行くのかい？」

ジンもにやりと笑みを返す。

「いや、コアトル神殿の大理石像を見に行くんだ」

「あの神殿の像は見事らしいですよ。俺も行きたいな」

笑いながら言ったりリゼの声に、ジンは鼻白んだ。

「冗談の通じないやつだな。俺が本当に行く気だと思つか？」

「わかってますよ。だから笑ってるんでしょう」

さもおかしげな笑い声に、言われた側は顔を渋くする。

「俺もパスだ。新しい薬の研究があつてな」

なぜかフギンがぎくつと体を震わせた。ネザが不気味としかいいようのない笑みを浮かべる。

「あ、うん、俺はもちろんオーケー。女の子と一緒に空の散歩。いいよなあ」

フギンがウラルにむきなおり、早口でまくしたてる。その後ろでネザの両眼が怪しく光った。

「残念だな、フギン。新作の味を確かめてもらいたかったんだがなあ」

「いや、遠慮しとく。デートの邪魔するほど、あんた人が悪くないだろ？ ネザ」

「いやいや、遠慮するなよ。今回はひとさじで馬を殺せる薬だぞ。コップ一杯原液で飲ませてやるから」

「ウラル、もう食べないのかい？」

ひきつった笑みを漏らすフギンを横目に、涼しい顔のリゼが尋ねてきた。

「うん、もういい。大丈夫なの？ あのふたり」

「いつものことだから。じゃあ、腹ごなしの空中散歩といくか」

リゼが席を立ったので、ウラルも椅子から立ちあがった。あたふたとフギンもネザの魔手からのがれて席を立つ。ジンがひとりで、腹をかかえて笑っていた。

ムール厩舎はかくれ家の裏に馬の厩舎と並んで建てられていた。

青々とした葉をしげらせた巨木を支柱に、網状の巨大な布をテント状にかぶせたものだ。

テントの中に茶色や白の巨鳥が見えた。くちばしは太くて短い、顔はすらりと精悍だ。胸板はずいぶん厚いが、顔にたいしていささか大きすぎる瞳はくりくりとしていて愛嬌がある。トンビとフクロウをあわせて巨大化させたような外見だ。

近づいてみると、ムールの巨大さがわかった。頭の高さはウラルの背よりもずっと高い。一羽が羽を広げた。村でウラルが住んでい

た家なら翼の後ろにすっぽり隠れてしまっただろう。

大きいのね、とウルルが言うと、「そりゃあ、人を乗せて飛ぶわけだから」とリゼから返事が返ってきた。ムールの大きな目がウルルを興味深げにながめている。

ヒユイ、とリゼが指笛をふいた。三羽のムールがそれを合図にして集まってくる。三羽ともウルルのほうへふらふらしながら歩いてきて、くちばしを近づけてきたり、クウクウとおたがい話でもするかのように鳴いた。

「気に入られたみたいだな。なでてあげなよ」

巨体のわりに小さなくちばしにおそろおそろウルルは手をのばした。色艶も年輪のような模様も黒檀にそっくりだ。ムールは目を細めて、気持ちよさそうな顔をする。

「あの茶色と白はコフム、黒と白のがハーロークで、全身薄茶がカルロス」

一羽ずつ指さして、リゼが名前を覚えてくれた。

ウルルがムールと遊んでいる間にリゼは三羽を杭につないだ。

「フギン、入り口を開けてくれないか？」

「了解！」

するり、とカーテンのように、ついさっきウルルたちが入ってきた場所が大きく開いた。ムールが興奮したように鳴く。

「もう一枚、服を着ておいたほうがいい。寒いぞ」

すっかり夏の盛りをむかえていて、かなり暑かった。空の上は寒いのだといわれても実感が無い。ウルルは首をひねりながらリゼに貸してもらった服を着た。すぐにじっとりと汗ばんでくる。冬じゃなくてよかったな、とリゼが片目をつぶってみせた。

「さ、乗ってみるよ。ここが鎧だ。馬とはぜんぜん違うだろう？」

リゼが指したのは馬の鎧とは似ても似つかぬ代物だった。ひざ上のみでありそうなブーツである。二本のベルトが足首とひざの位置についていた。

リゼの肩を借りて鞍にまたがり、そのブーツに足を入れた。やっ

ぱり長いかとリゼは苦笑し、鞍についた袋から別のベルトを出して
ウラルのひざ下に巻いた。

「ずいぶん嚴重なのね」

「空から落ちたら死ぬからな。馬みたいにはいかないさ」

さらに、腰に二本のベルトが巻かれた。

リゼはムールの頭につけられた冠のようなものを指した。二本の
ツノが長く伸びている。

「これが馬でいう手綱のかわりだ。右へ行きたかったら右のツノを
引く。左だったら左を引く。飛びたつときと着地するときが怖い
かもしれないけど、ほかは大丈夫だから。馬みたいな揺れかたはし
ない。行こうか」

ウラルが乗ったのは白と黒のハーローク。フギンがコフムで、リ
ゼがカルロスだ。

リゼが鋭く舌を鳴らした。ムールが飛び立つ。力強い翼の動きが
ウラルの体にも伝わってきた。風が強い。何十、何百の鳥が鳴いて
いるような風の音がする。いや、これがムールの羽音なのかもしれ
ない。ムールの翼の下は一面が森の緑。はじめて見る景色だった。
木を上から見おろすなんて、幼木ならともかくめつたにないことだ。

ウラルに向かってリゼが何か叫んでいた。

「何？ 聞こえない」

「気分はどうだ？」

「ちよつと怖いけど、大丈夫」

リゼは笑ってスピードをあげた。ウラルが乗ったムールもつられ
てスピードをあげる。上着を貸してもらってよかった、とウラルは
心の中で感謝した。冷たい風が顔にあたって耳が痛い。ウラルの後
ろからフギンがついてきている。

「見てみるよ！」

フギンの声にふりむいてみると、一面の青が広がっていた。

「あれは、何？」

「海だ。もつと近くまで行ってみよう！」

近づくにつれて、真一文字を描く水平線がどんどん遠ざかっていき、かわりに海の青がずっと広がっていく。

「きれい」

ウラルの眩きを何かの合図だと思ったのだろうか。ムールがちらりと横目でウラルを見た。光があたって、瞳がすきとおった茶色に輝いていた。

リゼが旋回している。これからどうする、とウラルに尋ねているようだった。

ウラルは南を指した。すい、とリゼは南へ進路を向ける。

海の上から地面の上へともどると、少し遠くの麦畑の中に黒いものが点々と見えた。どうやら、村のようだ。

村が近くなってきたところで、リゼがまた旋回していた。煙のにおいがする。下を向くと、村と思えたそれは、黒くこげた跡が生々しい焼け跡だった。リゼが戻ろうと手で合図をしている。フギンも旋回していた。

ウラルはムールのツノを前に押し、鎧をさげた。ムールがつかの間、混乱したようにリゼの方を見、すぐ高度を下げた。女ばかりが何人か地面にシャベルを突きたてて話しこんでいる。ムールの影に気づいたのか、数人が顔をあげた。

女が何かを叫んだ。「でていけ」「なんで火をつけたの」「絶対に復讐してやる」。ウラルのことを、村を襲った兵士の一人だと思っっているのだろう。

旋回していたムールの横を、もう一羽のムールが追い抜いた。リゼだった。ウラルはぎゅっと下唇をかみしめた。ウラルが乗ったムールは、リゼのムールについて飛んでいく。森の中の隠れ家へむかって。

ムールがばたばたとはげしく羽ばたき、地面に降りる。くう、と小さくのを鳴らしたムールのうなじをなでてやり、ウラルは自分で腰のベルトをはずそうとした。皮のベルトは思ったよりかたく、

指が痛くなった。

「手伝おうか？」

「うん、ありがとう」

やっとひとつ、腰のベルトがはずれた。フギンが鎧のベルトをはずしてくれている。

「悪かった」

苦虫でもかみつぶしたかのような声が聞こえた。

「どうして謝るの？」

「息抜きのつもりに出てきたのに、また、こんなことになっちゃまって」

ウラルは首を振った。リゼがムールの鞍をはずしているのが目の端にうつった。

「フギンのせいじゃないよ。それに、もう気にしてない。天災みたいなものだよ。くよくよしても、何にもならないじゃない」

フギンが顔を上げた。怒気のこもった目だった。

「ウラル、それは違うぞ」

「ありがとう。本当に」

「天災なんかじゃない。人災なんだ。泣き寝入りしてどうするんだよ」

「嵐や津波といっしょだよ。戦乱も、村が襲われるのも。避けられないなら、同じ」

「いっしょなんかじゃない！」

フギンがほえた。びくりとムールが体を震わせる。やっと全てのベルトがはずれ、ウラルはムールから降りることができた。地面が揺れているような、変な感じがした。まだ空を飛んでいる気がする。

「フギン、落ちつけよ」

「お前、自分の村が襲われて、追いだされて、陶芸窯の中で震えてたんだぞ。赤ん坊をしめ殺してしまうくらい、怖い思いをしたんだぞ。次に行った村も襲われて、また怖い思いをして。同じことを

まだ繰り返すのか？」

「フギン！」

どなり続けるフギンを、鞍を地面に置いたリゼが一喝した。

「リゼ、お前は黙ってる。俺はウルルと話をしてるんだ。同じことを繰り返かえして、それでいいのか？ また新しい村に移って暮らしてみる、次こそ死ぬぞ」

「いい加減にしろ！ ウルルと話をしている？ 笑わせるなよ。あんなに震えて」

気おされたようにフギンは黙った。

リゼがフギンとウルルの間にわって入った。ウルルのほうを向いて、ゆっくり穏やかな声で話しかける。

「ウルル、フギンは言いすぎたと思うよ。でも、戦乱がハリケーンや洪水と同じものだと俺にも思えない。立ち直るのと、やけになるのは違う」

ウルルは目を伏せ、うなずいた。

「あの村の上で、高度を下げたよね」

もう一度、ウルルはうなずく。

「あの村の住人を笑ってやるために低く飛んだんじゃないだろ？」

「よく、見ておきたくて」

「そっか」

リゼはやさしく笑いかけ、フギンを振り返った。

「青菜があつたはずだ。持ってきてくれないか？」

ムール厩舎の外へ走っていくフギンを見送り、リゼはもう一度ウルルに笑いかけた。

「あいつら、このごろがんばってるからな。ごほうびをやらなきゃ」

ごほうびの餌をもらえると知った三羽のムールがクウクウ鳴きながらフギンによっていった。フギンが両手でかかえてきた木箱一杯ぶんの青菜をまきちらす。ムールは大きな翼を広げながら青菜に飛びつき、食べはじめた。

ウラルは貸してもらっていた上着をぬぎ、リゼに返した。

「ありがとう」

リゼはうなずいて、あごでフギンを指した。

「ごめんな。感情的なやつだから。でも、あいつなりに聞き捨てならなかったんだろ。許してやってくれよ」

一拍おいて、リゼは明るい口調で話題を変えた。

「ムールって何を食ってると思う?」

「菜っ葉、食べてるじゃない」

「うん、植物も食う」

「植物も、つてことは肉食なの?」

ウラルはムールがネズミや馬を頭から食べている図を想像した。

こんなに大きな鳥なのだ。人間も食べるのではないかと思うと、おちおちムールに近くことなどできそうにない。

「似たようなもんだけどな、ちよっと違う。ムールは海鳥なんだ」

「魚を食べているの? 鳥が?」

「そう。普段は水面に集まってる魚をとって食う。昼間に食いものが見つからなくて、でも腹が減って朝まで待てないときは夜も飛ぶ。ムールは夜目がきくんだ。海の中で光ってる夜光虫につつこんで、光に集まった魚やイカを食う。海から離れたときなんかは、今みたいに菜っ葉や麦なんかを食べるんだけどな」

そうなんだ、と感心するウラルにリゼはもう一度ほほえみかけた。

「また行こうな。次は北へ行ってみよう」

ウラルはうなずいて、ありがとう、と小さくお礼を言った。

第一章 3 「出勤」 上

テーブルに夕食が並んでいた。たくさんパスタが入ったスープに、パンに、サラダ、ハッシュドポテト。ハムやチーズもこれだけの人数で食べられるかわからないほど並べられている。

「食べないの？」

「何から手をつけていいか、わからなくて」

「何でも好きに食べていいんだよ。早く食べなきゃ、なくなるぞ」
言いながらも、フギンはフォークを持つ手を休めていない。

アラーハ以外の全員が集まって思い思いに食事を取っている。肉ばかりをとっていくフォーク、優雅にスープをすくうスプーン、ものすごい勢いでパンを口に運ぶ手。貴族を思わせるような食べ方の者もいないではなかったが、フギンをはじめとして大半が酒場で肉を食らうような、はたから見ていれば「ならず者」に見える食べ方だった。

男らの食欲にウラルも何か食べたくなって、大きな皿に盛られたサラダを手元の皿にとる。口に入れてみると、すつと鼻に通るような香りと辛味が口の中で広がった。

「みんな、食べながら聞いてほしい」

ジンがナイフを置いた。机の下でひっきりなしに膝が揺れている。癖らしい。

「明日、アラスへ行くこうと思っている」

「アラス地区が襲われたのですか？」

参謀イズンの問いにジンがうなずく。ムールに乗って南へ行ったとき、見えた村は焦土だった。あるときアラス地区まで行っていたのだろうか。とにかくウラルの村の時のような戦になるようだ。

「今から行って間にあいますか？」

「わからん。だがウラルの村の件もある。近隣の村がいくつか襲われるかもしれない」

ジンは鋭い光をたたえた目をリゼに向けた。リゼは両手をひざに置き、黙ってジンの視線を受けている。

「アスコウラ はリゼの部隊だったな」

アスコウラ とは何だろう、とウラルは首をかしげる。何かの名前だろうか。リゼは真剣な表情でうなずいた。

「全員が動ける準備をすればいいですか？」

「そうだ。ムールも頼む」

「わかりました。明日の夜明けにでも鳥に手紙を届けさせましょう」

ジンはうなずき、全員を見回した。身動きする者はいない。全員がフォークとナイフを置き、ジンのほうを向いている。机の下で揺れていたジンの膝が、不意にぴたりと動きを止めた。

「みんなも準備をしてもらいたい。ウラルもだ」

ぎよつとしたような全員の視線がウラルとジンに集まった。ジンはそれが当然であるかのようにうなずく。

「私も？」

面食らって、裏返った声をウラルはあげた。

「ああ。長い行進になる。よく寝ておいてくれ」

「ちよつと待つてよ。ウラルはここに残るんじゃないの？」

茶をいれてきたマームが声をあげる。

「連れていくつもりだ」

「何考えてるのよ。ウラルを殺す気？」

「ウラルに決めてもらいたい。ここに残るのか、新しく暮らす村を探すのか」

ウラルは肩を震わせた。ジンらがウラルを追い出すことはないだろうが、さすがにずっとお世話になるわけにはいかない。はやく身のふりを決めなければならぬのだ。

立ったままマームは怒気をふくんだ声をあげた。

「決まってるじゃない、新しい村を探すのよ。ここにいたって仕方ないじゃないの」

「俺はウラルに決めてもらいたいんだ」

「それにしたって、今決めればいいことじゃない。つれていく意味は何？」

ジンの射抜くような視線が、ウラルをとらえた。

「ウラル、お前に見てもらいたい。リゼから今日のことは聞いた。戦乱が食いとめられるものなのか、本当に天災のようなものなのか、お前の目で見てほしい。村を新しく探すにせよ、その前に知ってもらいたい。そんな考えのままできてほしくないんだ」

またマームが何かを言いかけたが、「邪魔をするんじゃないよ」とサイフォスがたしなめた。ジンはウラルを見据えたまま「ありがとう」とサイフォスに言い、続ける。

「お前や、農民みんながそんな考え方をしているなら、俺たちはここで解散するしかない」

重々しい雰囲気の中、一拍をおいてジンはマームのほうを向いた。

「マーム、ウラルの分も弁当をたのむ。荷物の面倒をみてやってくれ」

「それが理由なわけ？ それで彼女の命を危険にさらそうっていの？」

「マーム、頭目のご命令だ」

マームは口を開きかけたが、何も言わなかった。言葉を飲み込むようにマームは息を吸い、口を開く。

「わかったわよ。何があっても私は知らないからね。準備すればいいんですよ」

怒りのためか頬を朱に染めてマームはきびすをかえした。マームの足音がいやに響く。

マームの手がドアノブに触れる前に、部屋の外側からドアが開けられた。アラーハだった。

「アラーハ、食事は？」

アラーハが「どうしたんだ？」という目をした。マームの声には

あからさまなトゲがある。

「必要ない」

「たまにはうちで食べたらどうなのよ？　いつも食事が終わるのを見はからったみたいに入ってきて」

口を閉ざしたアラーハをマームはにらみつけた。

「アラーハに『お帰り』の一言もないのか？　失礼だぞ」

夫の声にマームは答えず、乱暴にドアを閉めて階段をおりていった。

「えらく不機嫌だな」

「悪いな、アラーハ」

恐縮するサイフォスにアラーハは「気にするな」とそっけなく答え、ウラルの隣に座った。森の中にもいたのか、強い草の香りがある。

ジンの膝が、ほっとしたかのようにまた揺れはじめた。

「アラーハ、明日アラスへ行くことになった」

ジンとアラーハの雰囲気や話し方が似ていることに、いまさらながらウラルは気づいた。

「襲われたのか？」

「ああ。一緒に来てくれるか？　遠出になるが」

アラーハの黒い瞳がウラルを見た。まるで獣のように、その目が光る。

「その子も行くのか」

「つれていくつもりだ」

「どれくらいで戻る？」

「十日は見ておいたほうがいい。だが、秋が終わるまでには充分戻れる」

「わかった。行こう」

「助かる」

ジンは再び、全員を見回した。

「明日、ナタ草が黄色になるころには出発したい。準備しておいて

くれ。解散」

ナタ草はタンポポに似た花で、日のあたる場所ならたいいどこにでもはえている。一日に八度、赤、橙、黄、黄緑、緑、青、藍、紫と花の色を変える植物だ。真夜中に赤、真つ暗なうちに橙へ色を変え、陽が差すころ黄色になる。明日の早朝とはずいぶん急だ。

解散、と言われて席を立ったのはジンと律儀なイズンだけだった。残りは席にとどまって、止めていたフォークとナイフを動かしている。

ドアが開いてマームが入ってきた。鎖の束かなにかを腕にひっかけている。

「ウルル、これ、探しておいたわ。鎖帷子。着かたがわからないと思うから、食事が終わったら呼んで。向かいの部屋にいるから」

「あ、食事、終わってます。すぐに行きます」

ウルルは立ち上がって食器を片付け、部屋に入った。

「ミーティングは済んだ？」

「はい」

マームは床に並べられた物を指した。

「とりあえず、準備はしておいたわ。これが鎖帷子。服をたくさん着こんで、その上に着るのよ。じゃないと、痛いからね。それと短剣。これ以上の武装はしないほうがいいわ。兵士とまちがえられるから。あと着替えも。ほかに必要なものがあるなら自分で足してね。これ、着てみて」

ウルルはじゃらじゃら鳴る鎖帷子を言われたとおりにつけた。ウルルの首もとから膝上までをワンピースのように覆うものだ。袖はない。ずっしりと体が重くなった。鉄くさいにおいが鼻をついたが、これで矢があたっても致命傷を避けられるのなら、がまんしたほうがいい。

「本当に行くの？ 行きたくなければ言えばいいのよ。ジンがああ言っている以上誰かを護衛につけてくれるんでしょうけど、死なない保障はないんだから」

ウラルは小首をかしげ、ほほえんだ。

「私、行ってみよう。ジンたちの考え、理解してみたいの」

マームは疲れたような笑みを浮かべた。

「わかったわ。くれぐれも死なないでよ。死んじゃったら、何を見
てきても意味がないんだからね。火神と水神のご加護がありますよ
うに」

火神は戦の神だ。「火神のご加護」と言った場合は、「勝利を祈
る」という意味になる。水神は火神とは対照的に平和を愛する神で、
いつもどこかを放浪しているといわれていることから、旅の守護神
とされている。「水神のご加護」は「旅の安全を祈る」という意味
だ。

ウラルがうなずくと、マームも疲れたような笑みを返してドアを
閉めた。

*

うす青い空の下で、ウラルは騎乗した。馬はフォルフェス。フギンに一番おとなしい馬を選んでもらった。がっしりとした体型のせいか見た感じは大柄なのだが、前に乗ったシニルやフギンの愛馬ステラとならべてみると意外に小さい。もとは荷物運びの馬らしかった。

ウラルの周りには騎乗したジンやフギンがいる。それぞれ胸から腹にかけて覆う防具を身につけ、剣を佩き、槍を持ち、弓矢を鞍のすぐ手の届く場所にゆわえつけている。最低限には戦える装備だ。リゼはムールに乗っていたが、剣も弓も持っていないかわりに太い投げ槍が十数本も入った袋をムールの鞍に固定している。

ウラルもワンピースでは動くのに不便なので、行商人が着るような股下まで裾がある袖のびったりした服と、足にびったりするズボン、頭から肩にかけて覆う頭巾を、スヴェルの中で一番小柄なリゼに貸してもらった。本当は唯一の女性であるマライに借りようとしたのだが、マライは背が高すぎて、サイズがあわなかったのだ。遠目から見れば少年に見えることだろう。

「アラーハ、馬は？」

アラーハだけが馬にも鳥にも乗っていなかった。

「馬は嫌いだ」

「あら」

「アラーハは半分獣だからな」

フギンの笑いながらの声にアラーハは苦笑に似た笑みを漏らし、ウラルのほうをちらりと見て、りりしいな、とほめてくれた。

「全員集まったな。よし。出発しよう」

張りのあるジンの声で、いっせいに十人を乗せた馬と荷運びの馬

数頭が動き出した。ムールも空へ舞いあがる。ムールに反応したのか、ざわめく鳥たちのさえずりにゆっくりとした馬蹄の響きがまぎった。

「ウラル、進むときは馬の腹を軽く蹴ってやるんだ。止まるときは手綱を引く。今は俺たちの馬にくつついて勝手についてきてるけど、それじゃあ君の言うことを聞かなくなる。意識してやってみるんだ」

「わかった。おとなしいのね」

フォルフェスのしなやかな首をなでてやる。

「ところで、気になってただけだ。アスコウラ って？」

「そっか、知らないんだな。アスコウラ っていうのは、一言で説明すると兵团だよ。お前の村のとき、覚えてる？ 墓掘りしてたやつが、俺ら以外にも五十人くらいいただろ。あれは、ゴウランラ っていうところのやつら。アスコウラ も似たような感じ」

たしかに、十人でリーグの軍を相手にするのは苦しいだろう。実際、キヤ村のときは逃げざるをえなかった。仲間がいるのは、考えてみれば当然のことだ。

「どれくらいで村にはつくの？」

「さあ」

「さあ、って」

「昨日、何も言われなかっただろ？ だからわからない。言ってくるるときもあるんだけどな。明日にはつくだろ、たぶん」

そんなものなのか、とウラルは馬上で姿勢を正した。気にはなるが、それでフギンが納得しているなら、ウラルがとやかく言えることではない。

森を抜け、海へ出た。また森に入り、ウラルの知っている森にはない木々の森を進んだ。

日暮れ前には天幕を張って夜を過ごした。みんな気を使ってくれているらしく、寒くないかとか、そこでアケビをとってきたから食うかとか言ってくる。ウラルは疲れきり、もうしわけないと感じつ

つそんな好意にも生返事を返しながら、火のそばでとろとろと眠った。

翌朝、ウラルが起こされ、フギンに言われて空を見上げると、リゼのムールのそばでもう一羽のムールが旋回しているのが見えた。背に騎手の姿がある。

「出迎えご苦労、ユーラン！」

ジンがはりあげた大声に、騎手が大きく手を振りかえした。馬のような面長の顔をした青年だ。軽装の防具に投げ槍の袋と、リゼと同じような装備をしている。ユーランというのが名前らしい。

「ジンさん、お久しぶりです。アスコウラ はひと足先にアラス村へ向かっています！」

「わかった！ 俺たちもこのままアラスへ向かう！」

ユーランの乗ったムールは高度をあげ、南西へ飛んでいった。

ムールとユーランに出会ってから、さらに一日たった日の午後、アラス村が見えた。何筋かの煙がまだあがっているが、兵の姿は見えない。先に到着しているはずの アスコウラ も少し離れた場所に天幕を張っているのか、見あたらなかった。

「馬を降りて、村へ行こう」

ジンの指示で全員が馬を降りた。

女が集まっていた。素手の者が大半だが、中には農具を武器としてかまえている者もいる。着ている服はみんなほこりで焼け焦げや薄汚れて、顔もススで真っ黒なままの者が多い。さすがに灰で髪を真っ白にしている者はいないが、襲撃直後はそうだったのだろうとウラルには想像がついた。村が襲撃され、陶芸窯の中に隠れていたときのウラルとみんながみんな同じ格好をしているのだ。

「何しにもどってきた！ 笑いに来たのか。笑えばいいさ。こんなにあんたたちがボロボロにしたこの村をね」

啖呵をきった女は、手に持っていた石を思いきり投げつけてきた。この女の額から右の頬にかけて、包帯が巻かれている。どうやら火傷をおったらしい。女が投げた石は、ジンの足元に音をたてて落ち

た。

ジンが足を止める。ほかの者も足を止めた。

「私の父さんと弟を返して。あんたたちみたいにはしたくないの。あんたたちみたいなの、ひどいことをする軍人になんて！」

別の女も叫び、石を投げる。

ジンは黙って飛んでくる石や割れた陶器のかけらを受けていた。ほかの者も、動かない。フギンに割れた皿が当たる。額が切れて、血がにじんだ。

「あんたもあいつらの仲間かい？　なんで一緒にいるんだ」

顔に包帯を巻いた女がウラルをにらみつけた。片目が包帯に隠れているせいなのか、ひどく恐ろしい形相だった。

「情婦ってわけか。いいご身分だね。はやく出て行ってちょうだい。汚らわしい」

「違います。誤解です」

「何が誤解さね。言ってごらんよ、ほら」

「この人たちは、村を襲った人たちじゃないんです。村を襲った人たちは別の村へ行ってしまったでしょう。何かできないかと集まってきた人たちなんです」

ウラルはウラルが知っていることを叫ぶことしかできない。怒鳴ることも、女たちに共感することもできそうになかった。女が鼻で笑う。

「そうかい、そうかい。ご立派なこつたね。何も取るものは残っていない。さっさと帰りな！」

イズンが女たちにむかって歩きだした。女らがざわめき、怯えた目をして、近づいてくるイズンに石をあげせる。イズンは腕で石を防ぎながらゆっくりと歩き、包帯の女の前、お互いが手を伸ばして届くか届かないかくらいの距離で止まった。

「私たちは、軍の間人ではありません。何かできることがないかとスカール地区からやってきたのです。何もできないなら、お墓の穴を掘るくらいやらせてください」

「墓荒らしまでやるうっていうの？ こりない人たち。さつさと帰れ！」

イズンが深々と頭をさげる。全員がそれにならった。

ジンたちは村はずれへ向かって歩きだす。女らはざわめきながら、道をあけた。

村のはずれ、新しすぎる墓地の脇で煙があがっていた。老女がひとり、その番をしている。ウラルたちに気づいたらしい老女は、意外なほどに落ち着いたそぶりで立ちあがった。

「何か、お手伝いできませんか？」

穏やかに話しかけるジンに老女は煙の中を指した。青い炎がちらつく中に、黒い影と白い小さなかけらが転がっているのが見えた。子どもの骨だ、とリゼがつぶやく。ひっ、と小さく悲鳴をあげたウラルを老女が珍しそうにながめた。

「お嬢さん、郷はどこかね？」

「シャスウェル地区の、リタ村です」

「そりゃあ、遠いところから。シャスウェルの人だったら火葬は珍しいだろう。わしらは、小さな子どもはこうやって葬るのさ。火神に清めてもらって、またすぐ生まれてこられるようにね」

老女は炎の前にひざまずき、祈りをささげるしぐさをした。

「ロウダさん！」

追いかけてきた包帯の女が警戒の声をあげた。

「大丈夫だよ、心配ない」

老女はよっこいしょ、と立ちあがった。

「お若いの、火を消してくれんか」

指名されたフギンが老女の横に置いてあった桶の水を火にかけた。じゅっじゅつと音をたてて火が消える。黒い煙が一度はげしくあがり、白くなって、おちついた。

「この方のお墓は、どこに」

老女が雑草のおいしげるゆるやかな斜面を指した。ジンは軽く会釈し、老女の指した場所へ行くと、木切れで地面を掘りはじめた。

フギン、イズン、ほかの男らも、それぞれ木切れや自分の手をつかって地面を掘る。

老女が悲しげな笑みを浮かべた。

「何をやっているんだい。彼らに道具をさしあげなさい」
「でも」

あとから追いついてきた女がジンに鍬を渡した。包帯の女はとまどったようなそぶりを見せたが、鍬を渡した女を止めはしなかった。ジンは礼を言つて鍬を受け取り、慣れた手つきで穴を掘つていった。

「あの人たちは何をやる人なの？ 本当に兵士じゃないの？」

女の一人がウラルに話しかけてきた。顔つきや歳がどこかマームに似ていた。

「兵士じゃないです。この村が襲われたと聞いて来たんです」

「あなたは？」

「シヤスウエル地区が襲われたことは知っていますか？」

「噂では聞いていました。本当に最近のことよね」

「はい。私はリタ村の生き残りなんです。彼らに助けてもらつて村からまた女がきた。手にパンやチーズの入つたかごを持ってくる。」

「まつて。あたしに行かせて」

顔に包帯を巻いた女が半ばひつたくるようになつてかごを受け取り、まっすぐジンにむかつて歩いていった。

「あんたが大将？」

「はい、そうです」

渡された手拭きでジンは顔をぬぐつた。

「盗賊兵士がどこへ行つたか、知りませんか？」

「知らないね。ひつとらえて殺してくれるの？」

「この村のような村を増やしたくないんです。場合によればどこの軍かを調べて叩きます」

勢いよくジンがパンをちぎつた。おさええきれない怒りをぶつけ

るような、乱暴なちぎり方だった。

「明日の朝、ここを発ちます。五人、部下を残していきましょう。力仕事でもなんでも申しつけてください」

松明に火がともされる。いつの間にか日が落ちていた。ジンが再び、鍬をにぎる。

「明日発つなら、休んでちょうだい。ここまでやってくれたらもう充分だから。家を貸すことはできないけど、天幕ならどこに張ってくれてもいい」

「心づかいは嬉しいのですが、ここへ来るとき、途中で天幕を張ってきてしまいました。馬もいますし、村の外で夜を越します」

天幕など来る途中で張ってきた覚えはなかった。ジンが一礼して鍬を女に返し、村の外へむかって歩いていく。ウラルたちも後に従った。

ジンらは何も言わずに歩いていった。怯えた目が崩れた家の中からジンらを見つめていたが、安心したような目もちらほらと見えた。村の外へ出たとき、ざわめきが聞こえた。馬をつないだ丘が明るい。松明がいくつも灯され、天幕の影や、忙しく動きまわる人影が見える。

「アスコウラ だ」

*

影がウラルの顔に落ちた。十羽のムールが上空を舞っている。

「はじまった」

丘で陣を敷いていた百五十の騎兵が遠く地鳴りを響かせた。大きな村を背後に、同じく陣形を敷いていた兵につっこんでいく。きらり、といくつもの甲冑が太陽の光を反射して魚のうるこを思わせた。

甲冑を着こんでいるのは、ほとんど軍だけだ。ジンらも出陣の前

には鉄の胸当てと背当てをつけ、兜をかぶっていたが、アスコウラのほとんどは皮のよろいと鉄の兜、木製の盾を防具にしていた。機動力と、敵にはいないムール部隊が武器だ。

三羽のムールが急降下し、その背に騎乗していた兵士が敵に投げ槍をはなつ。三羽のうちの一羽にリゼが騎乗しているのだろうとウラルは思った。おそらく、先陣をきつた一羽だろう。続いて三羽が急降下し、三羽がまた舞いあがると次は四羽が急降下する。そしてまた、リゼ率いる三羽がまた急降下して攻撃をした。それをえんえんと繰り返している。

ウラルの隣にいたアラールハが顔をしかめた。フォルフェスが上唇をめくりあげ、高くもちあげる。何か刺激物のおいをかいたときに馬がとる行動だ。血のおいが届いたのだろう。どんな弓の名手が矢を射ても届かない距離をおいているのに、アラールハとフォルフェスにはたしかにそのにおいが届いている。

「どう思う？」

ウラルの護衛として戦いに参加しなかったアラールハが尋ねた。

「わからない。ジンやフギンがあそこにいるの？」

「そうだ。戦っている」

「現実感がないな。壁画を見ているみたいな感じ」

「よく見ておくんた」

ムール部隊はえんえんと上昇しては舞いもどり、攻撃を繰り返している。

「私、ジンたちと一緒にいて、いいと思う？」

「なぜ、そう思う？」

「戦争が天災と同じじゃない、ってことはわかった。人の手で止められるから。だけど、戦争がどういうものか私にはまだわからないの」

ウラルはジンやフギンはどのあたりにいるのだろう、と銀色の群れに目をこらした。居場所の見当すらつかない。

「だから一緒に行って見てみたい。だめかな？」

アラーハは口に出しては何も言わず、ウラルを見た。
また、ムールの影がウラルに落ちた。

第一章 4 「火神祭」 上

町をぐるりと取り囲む城壁が見えてきた。ウラルたちが歩いている街道を中央にして、右手は一面の小麦畑。左手には大きな森が広がっている。

「ヒュガルト町だよ。左の森は、ヒュグル森。俺たちの隠れ家がある森だ」

フギンが教えてくれる。もうここまで帰ってきたのか、と、ウラルはほっと息をついた。こんなに長い旅をしたのは初めてだ。アラス地区での戦いを終え、アスコウラと別れてから、丸三日は経っているはずだった。

先頭をいくジンは馬の足を止め、全員を振り返った。

「ここから先はいつも通り自由行動だ。明日の夜まではみんな、たつぷり羽のばしてきてくれ。イズン、たのむ」

イズンがふところから小さな袋をいくつか出し、全員に配っている。どうやら、今回の戦場の報酬のようだ。

「これはウラルさんの分です」

ウラルの手に置かれた袋はずしりと重かった。ほかの男らの報酬と入っている額は変わりがないように見える。

「こんなに。私、何もしていないのに」

「報酬は均等に配るのが、スヴェルの掟です。どうぞ」

イズンは紳士的にほほえみ、袋をウラルの手に置いた。でも、と袋を返そうとするウラルの手を隣で馬に乗っていたフギンが押し戻す。

「いいからもらってけって。服でも何でも買ってゆっくりするといさ。女の子なんだから、もっと着飾ったところも見せてくれよ」
頬を朱に染めながらウラルはおずおずと袋をふところにしまった。フギンが人懐っこい笑みを浮かべた。

その目が「あれ？」というものに変わる。

「どうしたの？」

フギンは目を細めて城壁を見つめた。

「旗だ」

顔をほころばせて、まだまだ遠い城壁の上を指す。ウラルの目にはぼんやりとぼやけて見えるが、言われてみれば赤い旗が城壁の上に何本かはためいているのがわかった。

「赤い雄牛の旗だ。よっしゃ、祭りだ！」

赤い雄牛の旗は火神の象徴、夏祭りのしるしだ。ジンとイズンが、アキナスとコウがそれぞれ顔を見あわせて、城壁の赤い旗に目をこらす。

ジンが、ふつとどこか寂しげな笑顔を見せた。そのかげりはすぐに消え、かわりに祭りの日の子どもと変わりのない楽しげな光が、その目に浮かんだ。

「いい時に帰ってきたな。よし、解散。明日の夜までには隠れ家に戻れよ。たっぷり遊んでこい！」

ジンの宣言と同時に、歓声をあげたフギンとその愛馬ステラが、土煙をもうもうとまきあげながら、ものすごい勢いで駆だした。それを合図としたようで、上空でムールに乗っていたりゼも旋回するのをやめ、町へむかつて猛スピードで飛んでゆく。

「元気なやつらだな」

「俺らも行くか。貸し馬屋まで競走だ。勝ったやつにはビール一瓶」

「よし、乗った！」

ネザ、サイフォス、マライが馬を駆けさせていく。アラーハはさつさと背を向けて、森へ歩いていってしまった。アラーハだけはどつやら祭りが好きではないようだ。

「ウラルは行かないのか？」

後に残ったのはジンとイズン、ウラルの三人だけだった。

「ぼつつとしちゃって。みんな、すごい勢いだね」

「筋金入りの祭り好きだからな」

ジンが苦笑する。

「ジンとイズンは？ 祭り好きじゃないの？」

「好きさ。ただ、あいつらほどじゃない。そういうウラルはどうなんだ？」

「お祭りは好きなんだけど。こんな大きな町、初めて」

小さな村ですつと暮らしてきたウラルだ。祭りのときは近くの町まで村総出で出かけていったものだが、その町よりも、ヒュガルト町はずつと大きい。

「私、迷っちゃうかもしれない」

ましてや、初めて来る町なのだ。祭りの人ごみもあることだし、迷うのはむしろ当然だった。

「じゃあ、一緒に来ますか？」

イズンがまた、にこりとほほえみかけてきた。その堅苦しい口調も、いくらか弾んでいる。

「いいの？」

「大歓迎だ」

馬腹を軽く蹴る。馬がゆっくりと進み始めた。

町へ近づいていく。背の高い立派な城壁には警護の兵が何人も配置されていて、近づくとかなり圧迫感があった。その石壁にあいた大きな門からは、祭りであるせいか、ひっきりなしに人や馬車が入りしている。中には四頭立ての幌つき馬車であり、その中には生きた牛が何頭が入っているようだった。

火祭りは、戦争の神である火神の祭りだ。立派な角をもつ雄牛は火神の乗り物といわれている。火祭りの旗が赤い雄牛であるのは、そのためだ。

「おやさん、今日は火祭りの何日目だね？」

城門前にある貸し馬屋のおやじは馬を若い者に任せると、「早く祭りに参加したい」とばかりにソワソワしながら城門をのぞいた。

「八日目、最終日です。今年のパレードはなかなかいい踊り子がそろつとりますよ。闘牛も、最高の暴れ牛と闘牛士がわざわざコーリ

タラ地区からやってくるんですね。さあさあ、もう始まります。早くおきなさい」

「最終日か。本当にいい時に来た」

ジンは顔いっぱい笑みを浮かべて、行こうか、とウラルとイズンをうながした。

城壁をくぐる。レンガの石壁の厚さは、ゆうに二十歩分をこえていた。城壁を警備するたくさんの兵士の、熱っぽい目。

火神は戦の神。夏祭りは、兵士や騎士など、戦うことを生業にしている者が主役の祭りだ。催し物も、全部、戦を模している。もう、兵士たちの頭の中は、今日の祭りでいっぱいなのだろう。

町の広場では、トランペットやホルン、トロンボーンが高らかにファンファーレを奏でている。鼓笛隊のみがきあげられた甲冑が太陽を反射してまばゆいばかりだ。鼓笛隊の演奏にあわせ、踊り子たちが赤い旗をぐるり、ぐるりと回し、空に投げあげて、かつさいを受けている。

「ウラルさん、見てください」

笑うイズンの指す方を見ると、赤いハチマキを頭に巻いたフギンが槍を持って舞台にあがるところだった。腕まくりをすると、左肩に刻まれた雄牛の刺青があらわれる。それを観衆にずいっと見せつけた。二の腕の筋肉がぐいっともりあがる。

舞台の反対側からは、同じく槍を持った大男があがってくる。フギンが小柄なだけに、ひげをたっぶりたくわえた男はかなり背が高く、屈強に見えた。

どうやら、これから模擬戦闘をやるようだ。どこの町でもやる、火祭りの人気イベント。先に安全具をつけた槍で、ふたりの男がやりあうのだ。

「元氣な奴だ」

つぶやいたジンは、不敵な笑みを浮かべている。その右手はしっかりと剣の柄をにぎっていた。

「頭目も行きたいんじゃないですか？」

「いや。俺が出たらほかの奴に勝ち目がなくなるからな」
うそぶいて、剣から離れた右手をひらひらと振った。

「始めっ！」

審判の鋭い声が響きわたる。

「さ、行くか」

さつさとジンが歩き出してしまった。

「フギンの試合、見ないの？」

「見なくとも結果はわかるからな。見たいか？」

「フギン、一本！」

ジンの言葉尻を追うように、審判のよくとおる声が響いた。

ジンのほうに注意をむけていたウラルは、不意をつかれた気分で舞台のほうを眺めた。ひげ男が体をふたつに折って苦しんでいる。あまりの早業に驚くウラルの目の端で、ジンの口元がちらりと笑っていた。喜んでいるというよりはむしろ、面白がっている笑い方だった。

フギンが左手であごの下をつまむしぐさをする。それから、右手の二本の指で、勢いよくそれを切ってみせた。「お前が負けたら、自慢のひげを切ってやる」という挑発だ。

ひげ男がうなりながら槍を構える。すっとフギンが腰を落とした。

「開始！」

ひげ男の突き。フギンは身軽に跳ねあがると、あっという間に間合いをつめ、相手の後ろにまわりこんだ。ひげ男がぐうんと槍を大きく振る。頭を殴られる！とウラルは悲鳴をあげかけたが、フギンは危なげなく、さっとひげ男の足元にかがんでいた。ひげ男のがら空きになった胴を槍の石突が突きあげる。

「フギン、一本！ 勝負あり！」

観客の歓声があがる。

「ああ見えても、腕は確かだ。小柄で肉がついていないように見えるが、あれは馬の負担を減らすためだな。使う筋肉は、ちゃんとつ

いている」

解説してくれるジンに、イズンが穏やかな笑みを向けている。ジンはその視線に気づくと、照れたように笑った。

「行こう。おっ、面白そうだな」

ジンの視線の先には、少年たちの一団。この子たちも甲冑をつけ、武装していた。よく見ると少女もまじっている。

ジンはウルルにむかって、片目をつぶってみせた。

「ちょっと行ってくる」

と、いきなり腰にはいていた剣を抜いた。そのまま劇の練習をしている少年たちに突っこんでいく。ジンは劇の練習の舞台とされている中央ですつくと立ち、剣を空高くかけた。女の子たちが悲鳴をあげる。少年たちもあぜんとして、ジンをながめていた。

「我こそ火神、戦神なるぞ！」

芝居がかつたしぐさで、朗々と宣言する。少年少女たちの反応など気にする様子もない。

「この雄牛の角に、今日こそ山羊くさい蛮族どもの血を吸わせてやるっ！」

口々に「何なの、あの人！」やらなんやら叫ぶ少女たちの間をぬって、驚きの表情を浮かべた少年が舞台袖から出てきた。

「ジンさん！」

火神の衣装、ほかの少年少女よりもずっと豪華な武装を身につけている。

「僕の役とらないですよ！」

声変わりしたての少年は武装をガチャガチャ鳴らしながらジンに駆け寄った。ジンは剣をおさめ、少年の頭をくしゃっとなでる。知りあいらしい。

「そう言うからには、俺よりうまく火神の役ができるってことだな？」

「ジンさんは身振りがおおげさすぎるんだよ！」

ジンは声をあげて笑った。いかめしい顔をしていればともかく、

普段のジンはとうてい火神役に向かない。なにせ目じりの笑いジウがとほうもなくマヌケに見えてしまうのだ。

「楽しみにしてるぞ、舞台。いつだ？」

「ナタ草が青くなったら。夕方だよ」

「わかった、必ず行く。しっかり練習しておくんだぞ」

少年はうなずいて、さつきジンが芝居がかつたしぐさで言ったのと同じ台詞を宣言した。ジンはほほえみ、少年の肩を叩いてウラルたちのほうへ帰ってくる。

「好かれてるのね」

「意外と子ども好きなんですよ」

茶々を入れるイズンにジンは「余計なお世話だ」と一言、大通りの方へさっさと歩いていってしまった。イズンも肩をすくめ、あとに続く。

大通りではパレードをやっていた。これも戦争行進を模している。甲冑を着こんだ隊列。騎兵に軽装の歩兵。歩兵が持っていた袋を高くと投げあげた。子どもも大人も押しあいへしあいその袋を受け止める。中につまっているのは砂糖菓子だ。大人げなくジンも群集の中に走りこんでしまった。

「いるか？」

しばらくして戻ってきたジンの手には、袋がいくつもぶらぶらしている。

「こんなに食べきれん？」

あきれうるにジンは笑って、適当な子どもに全部あげてしまった。

兵団の次はアクロバット・ダンサーときらびやかな衣装をまとった踊り子たちだ。馬から人へ、人からランポリンへと空中を飛び回るダンサーたち。空へ舞いあがるたび、別のダンサーと模造の剣を突きあわせる。踊り子たちは観客をかたっぱしからダンスに誘い、ちやくちやくとパレードの派手さを増していく。

ど迫力の演技に夢中で拍手をしていたら、肩を叩かれた。ジンが

にやにやしなながらダンスを踊っている一団を指す。

「マームさん！」

いつ来たのか、マームがいた。夫サイフォスと一緒に仲むつまじく踊っている。

「俺らも行くぞ」

ぐつと腕を引っばられた。はずかしいからとウルルは抵抗したが、ジンの腕力にかなうはずがない。強引に引っぱりこまれてしまった。

「イズンは？」

ぎこちなくステップを踏みながら視線をめぐらせると、飲み物屋台の前で笑みを浮かべたイズンが手を振っている。あつという間に人波にのまれ、見えなくなってしまった。

空から無数の布きれが落ちてくる。どうやら出し物のチラシらしい。踊りながら上を見あげると、見覚えのあるムールが旋回していた。

「あれ、リゼじゃない？」

「ああ。祭りのたびに、ああやってアルバイトしてるんだ」

前のほうで歓声があがった。どうやら、アクロバット・ダンスが佳境に入ったらしい。

「そろそろナタ草が青になるな」

ジンの声に適当な店先に飾ってあるナタ草を見ると、青みの強い緑色の花が咲いていた。

パレードの列からそつと抜け出し、イズンを探す。イズンはさっきの飲み物屋台の前で待っていた。

「どうでした？」

「びっくり。あんなにすごいんだね」

イズンがおかしそうに笑う。

「僕にとつては、ここも田舎の祭りですけどね。王都の祭りは、すごいですよ」

「さ、行こうか。フルクの劇に遅れる」

フルクはジンの知り合いの少年だった。火神劇で主役を演じる少年だ。甲冑姿の少年少女が隊列を組み、肩を組んで、火神をたたえる歌を歌う。列が割れ、赤い雄牛の皮をかぶった少年が出てきて、その後ろから火神の衣装を身につけたフルクが現れた。

「我こそ火神、戦神なるぞ」

ジンほど堂々とはしていないが、厳かな声で朗々と宣言する。

「声が小さい！ もっと胸を張れ、胸を！」

突然、ウラルの真横で大声がした。肩をすくめて横を見ると、ジンが盛大に野次を飛ばしている。観客からどつと笑いがあがった。フルクはむっとした顔を一瞬見せたが、野次を飛ばしたのがジンだとわかると顔いっぱいに笑みを浮かべた。姿勢を正し、胸を思いきり張って、次のせりふを堂々と言う。

「さっきまでの厳かな態度はどこへ行った！ 元気よく言えばいいつてもんじゃないぞ！」

ジンの野次に、いちいち観客が笑う。ウラルは恥ずかしさに顔を赤く染めながら、助けを求めてイズンを見た。イズンはイズンで、観客と一緒に笑っている。

劇が終わると、ウラルは心の底からほっとした。

「なぜ、そんな顔をしているんだ」

ジンがからかうようにウラルの顔をのぞきこんでくる。

「だって、あんな大声で」

「なに、劇なんざ、ああやって野次を飛ばすのが醍醐味さ」

ジンは大口を開けて笑う。なぜか、ウラルの目にはその笑顔が、どこか悲しげに見えた。

「喉が渴いたな。酒場へ行こうか」

イズンも笑って、そうしましょうか、と相槌を打つ。

「あの、ごめん。私、お酒、飲めないの」

ジンがなぜか、笑みをおさめた。

「酒が飲めなくても、ジンジャーエールくらい置いてあるさ。酔っ払いがからんできて、俺らがいれば大丈夫だろう。行こう」

大股で歩きだしたジンの後を、小走りにウルルは追いかけた。

*

ついた先は「大鹿亭」という名前の酒場だった。こぎれいな店だ。かなり広いが、席の半分は埋まっている。まだ酒を飲むには少し早い時間だから、もうしばらくすれば酒場から人があふれんばかりの大にぎわいになるのだろうと想像できた。

「あ、頭目」

カウンター席で先客が手を振っていた。マライと、その横にいるのはネザだ。

「テーブルに移動しないか？」

ジンが奥まった席にある六人がけのテーブルを指す。ふたりはそれぞれ自分の酒と肴を持ってテーブルに移動した。

ぴしりとエプロンをつけた若い店員が寄ってくる。

「ご注文は？」

「ピルスナービア（黒ビール）」

「僕はエグリ・ビカヴェール（白ワイン）で。それから、パンとチーズ、サラミを五人前いただきましようか」

「かしこまりました。お嬢さんは？」

ウラルは酒が飲めないどころか、酒場に入るのも初めてだった。おどおどと視線をさまよわせるウラルの肩に、そつとイズンが手を置いた。

「彼女にはジンジャーエールを。種類は何がありますか？」

「エルクとディーア、ムースをご用意できます」

「ウラルさん、どれがいいですか？」

イズンの助け舟に感謝しつつ、ウラルは困ってうつむいた。

「どう違うのかな」

酒場に不慣れな客だ、と店員はわかってくれたらしい。にこりと

愛想のいい笑みを浮かべ、ウラルの顔をのぞきこんだ。

「初めてですか？ それなら、デューアをおすすめしますよ。他のものに比べて癖がなく、さっぱりした後味です」

「じゃあ、デューアで」

「かしこまりました。すぐにお持ちします」

きびきびとした仕草で店員が下がる。マライとネザが好奇の視線をウラルに向けていた。

「ウラルの酒場記念日に、乾杯」

マライがおどけてグラスをかたむけた。ネザも笑いながらマライにグラスをあわせる。

「あいかわらずの酒豪だな、ふたりとも」

ジンの声にマライがほほえみ、ぐいつと一息でグラスを開けた。ネザも負けじといい飲みっぷりを見せる。

マライは女性だが、背も高く大柄で筋骨隆々としている。胸もほとんどが筋肉になってしまい、女らしいふくらみがない。髪は短く、頬に目立つ傷があり、そのうえ男装しているので、マライのことをまったく知らない人はまず間違いなく男だと思ってしまう。ただ声だけは女らしい、落ちついた低さだった。

痩せたへビ顔の軍医、ネザは四十代後半くらいの歳の男だ。一見小柄に見えるが、そうではない。馬に乗ったり、弓を構えたりすると自然にびんと伸びるのだが、普段は極端な猫背なのだ。いつもギリギリした目をしていて近づきがたい印象なのだが、酒がまわっているせいだろうか。表情がやわらかく顔の血色もよいので、普段のようなとっつきにくさが消えている。

ウラルもこの二人とはあまり話したことがない。ウラルの方も興味しんしんで、酒を酌みかわす二人をながめていた。

「飲んでみるか？」

ネザがのんびりとした口調でウラルに酒をすすめてきた。ネザの酒からは、いかにも「強い酒です」とばかりのにおいがする。ウラルは思いきり首を振って、拒否の意を示した。

「指をグラスにつけて、それをなめればいい。たいしたことはないよ」

マライも面白がってウラルに酒をすすめる。それくらいなら大丈夫かもしれない、とウラルは興味本位でネザのグラスに指をつけ、なめてみた。

なめた瞬間、口の中と喉がただれたように熱くなった。思いきりむせる。まるで炎のかたまりを吐き出すような、おそろしく熱い咳だった。

「水を！」

イズンがさっきの店員を呼びつけ、水を持ってこさせる。店員のほうも慌てたらしく、大急ぎで水をくみ、走ってテーブルまで来てくれた。

ウラルは水を一気に飲みほし、大きく息をついた。涙目になっている。

「よく、こんなの平気で飲めるね」

ネザとマライは顔をみあわせ、困ったように苦笑をかわした。

店員はほっとしたような笑みを浮かべながら一度カウンターへ戻って、酒と肴を運んできた。

「お待たせしました、ピルスナービア、エグリ・ビカヴェール、デリアと軽食です」

「ウォッカ、一瓶追加」

「俺にもラムを一瓶、もらえるか」

「かしこまりました」

店員はすぐにウォッカとラムの瓶を運んできた。どうやら、ふたりが酒豪なのを見てとって、取りやすい場所に瓶を移動させていたらしい。

「とりあえず、乾杯といくか」

ジンがグラスを持ちあげた。イズン、マライ、ネザ、ウラルも、それぞれ飲み物を手に取る。

「火神のご加護を願って。今回の戦が無事に終わったことに、乾杯」

ジンの音頭に、五人はグラスをあわせた。

ウラル用に用意されたジンジャーエール、デューアは、店員の説明通りすっきりとした後味で、飲みやすかった。慣れない炭酸が喉を焼いたが、もう一度飲んでもいいな、と素直に思える味だ。

酒豪マライとネザは、さっさとグラスを空けて次の酒をついでいる。ジンとイズンはグラスを半分ほど空にして、パンやサラミに手を伸ばした。ウラルもふたりにならってパンを取る。

「ワインをいかがですか？ さっきのラムよりはういぶん飲みやすいですよ」

イズンがすすめてきた。とんでもない、とウラルは首を振る。あんなものを飲むなんてまっぴらだ。四人が顔を見あわせて笑った。ウラルも照れ隠しにエールをあおる。

「ふたりとも、今日はどこへ行ってたんだ？」

「最初はパレードを見ていたんですが、マームさんに会って。そこまではサイフォスも一緒だったんですが、夫婦仲良くやれ、と送り出してやっただけです。それから、ネザとふたりですと闘牛を見ました。最強の暴れ牛 黒い稲妻、対するは白装束の女闘牛士 銀翼。すさまじい演技でしたよ。今年の闘牛はよかったです」

熱をこめて話すマライ。ネザは黙って、酒をあおりながら横でうなずいている。

「ビールをかけたレースはどうだったんだ？」

「ああ、勝ったのはサイフォスですよ。ふたりでおごる前にマームさんに会ったので、賞品は渡してませんがね。そういう頭目たちはどこへ行っていったんですか？」

「フギンの模擬戦闘と、パレードと、青少年火神劇へ」

「青少年火神劇か。フルク君が主役じゃなかったですか？」

「ああ。がんばっていた」

ジンが深い笑みを浮かべた。

「最後に主役が張れて、本当によかった」

「最後？」

思わずウルルは聞き返した。主役をおろされるようなひどい演技ではなかったし、また機会があるのではないだろうか。

「フルクは、十六歳なんだ。ああ見えてもな」

ジンの声が低くなり、憂いを帯びた。

この国、リーグ国の男子は、十七歳になると徴兵をつける。十年前までは二十歳からだったが、五年前に十八歳、最近十七歳に引き下げられた。ウルルの兄も、いいなづけもこの徴兵に応じて以来、帰ってきていない。

居心地の悪い沈黙がおりかけたが、隣のテーブルでの大爆笑がその雰囲気をやぶった。

「でよあ、うちの姪っ子のかわいいのなんのって！ 踊り子一年目にしては上出来よあ！」

上機嫌の酔客が、ほかの連中に酒をつぎながらまくしたてている。姪っ子自慢か、と思いつつ、あまりにも嬉しそうな口調にウルルも頬がゆるんだ。

マライヤネザはパレードの話で盛りあがっている。ウルルは頬杖をついて、隣テーブルの話に聞き耳をたてた。

男ばかり四人連れの客だ。外見からして、昏間城壁を守っていた警備兵なのだろう。ひとりはどうかやら足が悪いようで、商人風の格好をしている。夜がふけるにしたがって客も増えてきたが、警備兵や戦士風の服装をした者が多い。ジンがこの店を選んだのは、それが理由のようだった。こぢんまりした老人ばかりの店では、どうしたって目立ってしまうだろう。

「でもなあ、クセイの姪っ子、どこにいるか、俺、正直わからなかつたなあ」

クセイと呼ばれた中年男の肩を隣の客が叩く。

「なにい？ あの一丁目立ってたうちの姪っ子がよあ？」

「一丁目立ってたって、後ろのほうで旗、回してた青服の姉ちゃんだろ？」

と、別の酔客。ウラルも「クセイの姪っ子」がどんな踊り子だったか、よく思い出せない。

「でもよあ、なんつうか、華やかさに欠けてなかったか？ 今年のパレード」

「なんだとお！」

四人目の声に、クセイが真つ赤になつて立ちあがる。

「いや、お前の姪っ子が目立たなかったのも、それが一因だぞ。なんつうか、衣装が薄汚れてた。普通、一年目の踊り子って新品ぴかぴかの衣装つけてるもんだらうが。ありゃ、どう見ても中古品だった」

商人風の男の声に、たしかに、とその場のほとんどがうなずいた。

「助成金が出なかつたんだらうか。祭りのときくらい、パーッとやらにゃ、パーッと」

「このごろ、物騒な話が多いからな。北の村がいくつも襲われて、ゴーストタウンになつちまつたとか何とか」

声をひそめる酔客。ウラルの村や隣村のことを言っているのだ、と背筋が冷たくなった。

「なんでも、その村を襲つたのはリーグの国軍だつて噂だ。この国はどうなつちまうのやら」

「おい、祭りの席でこんなシケたことを言うのはやめようや」

「だけんども、このごろコーリラヤギの織物が入つてこなくなつてよう。そりゃあ、五年前からぶつたり普通の輸入は途切れてたけど、密輸のやつまで入つてこなくなった。やっぱり、北で何かあったんじゃないかねのか」

ウラルはジンの顔をちらつと横目で見た。ジンも視線に気づいたらしく、見返してくる。どうやらジンも話を聞いていたらしい。

「次は北へ行くの？」

ジンは「いや」と首を振った。

「確かな情報が入ってから動こう。どうやら、リーグ国内だけの話

ではなさそうだ。だが、かなり有力な情報だろうな」

ウラルはうなずき、小瓶をとった。ジンジャーエールを自分の杯につぐ。ジンも黒ビールをあおった。

玄関のドアが開いた。生ぬるい風が吹く。

「来たな」

ジンが呟いて、ビールを置いた。

ランタンを持った汗だくの男が入ってくる。伝令のいでたちだ。

店主らしい中年男が汗だくの男の手をとり、店の中央まで進み出た。

「お客様がた、ただいま、夏祭りの聖火が到着いたしました。お手元の火消し棒で、テーブルの灯をお消してください」

ジンが火消し棒を取る。テーブルに灯されていたろうソクの火を消した。次々とほかのテーブルでもされていたろうソクの火も消えていく。

真っ暗になっていく。ただ一点、聖火の使者が持っているランタンの中にだけ、明かりが灯っている。

店主がろうソクを出し、使者から火を受け取った。拍手があがる。

店主の手からウェイターのろうソクに火が移された。ウェイターは客のテーブルをひとつひとつ回り、火と、赤ワインの小瓶と、小さな壺を置いていく。

「いつもお世話になっております」

ウラルらのテーブルにも店員が来た。火と、赤ワインと、小さな壺。壺には白い粉が入っている。聖火の灰だ。

ジンがグラスにワインをついだ。その中に灰をひとつまみ落とす。ワインの小瓶はイズン、マライ、ネザをめぐって、ウラルに渡された。

「飲めなくても、飲むふりだけはしてくれ」

ジンの声にうなずき、ウラルもほんの少しグラスに赤ワインをついだ。灰を落とす。灰は一度ぱつと広がり、すぐに沈んでいった。

赤ワインは戦で流された血の象徴。これは、弔いの儀式なのだ。
「皆様、ワインをお持ちでしょうか。このワインは当店からのサー
ビスとなっております。遠慮なくお飲みください」

酒場は、静まりかえっている。

「不肖ながら、わたくし大鹿亭店主が乾杯の音頭をとらせていただき
ます。戦で仲間や友人、家族を失った方、この場のほとんどがそ
うでしょう。今年の戦で亡くなられたかたがたの冥福を、この場を
借りてお祈り申しあげます」

店主は一度言葉を切り、大きく息を吸いこんだ。

「死者に風神の祝福を。皆様に火神のご加護を。乾杯！」

「乾杯！」

声を張りあげた店主に、客の全員が唱和する。グラスが勢いよく
打ち鳴らされ、一気に喧騒が戻ってきた。

ウラルも四人とグラスをあわせ、飲むまねだけはした。

「お客様」

呼ばれて振り返ると、何度もこのテーブルに来てくれているウエ
イターが立っていた。小瓶を持っている。

「お酒がだめでしたら、こちらをどうぞ。ぶどうのジュースです。
もちろん、お代金は結構ですよ」

すっかり覚えられてしまった、とウラルは苦笑いしながらジュ
ースを受け取った。店員も笑っている。

「もう一度、乾杯といくか」

ジンが笑い混じりに言う。ウラルもほほえんで、グラスを持ちあ
げた。イズン、コウ、マライも笑っている。

「乾杯！」

グラスを打ち鳴らす。それから、一気に飲みほした。妙に甘った
るいうえ、灰のじやりじやりした感じが口に残る。おいしいとはと
ても言えなかったが、飲めてよかった、と心からウラルは思った。
やっと四人の仲間入りができた気がする。

「ねえちゃん」

隣のテーブルから手が伸びてきて、ウラルの肩をつかんだ。あわてて振り返ると、さつき踊り子の話をしてきた四人組のひとりだった。商人風の男だ。

「酒も入ったところで、何か余興でもやってくれよ」

すっかりできあがっているらしい。目は充血し、とろんとしてい。ろれつも回っていないので、何を言っているか聞き取るのが難しかった。ほかの三人も、あの話のあと強い酒でも立て続けに飲んだようだ。この男と一緒にになってウラルに何かやらせようとしている。

固まっているウラルの横で、ジンが小さくうなずいた。それを合図に、テーブルを挟んでウラルの正面に座っていたマライが立ちあがる。男の正面に立った。

「おっと、男連れか。こりゃあ、悪いことをしたねえ」

「悪かったね。私も女だよ」

冷たく、鋭い目をしたマライの右手がうなづいた。男の顔面中央をぶん殴る。男は文字通り吹っ飛び、後ろの客の椅子に頭をぶつけた。さいわい座っていた男は騒ぎに気づいて移動していたが、椅子は派手な音をたてて折れ、崩れ、分解してしまう。

そこまでしなくてもいいのに、とウラルはマライの右手を見る。

マライは革の手袋をつけていた。ごていねいにも鉞までついている。

ネザとイズンが立ちあがって、男を引き起こした。鼻血まみれだ。イズンがどこからかロープをだして男を後ろ手に縛り、ネザが男のふところをさぐって財布を出した。

「そろそろ帰るか」

「そうですね」

立ちあがったジンの声に、イズンが相槌を打つ。イズンとネザが男を引き起こし、カウンターまで連れていった。

立ちあがった四人をならべて見ると、四人が四人とも体格のいい男だった。いや、そのうちひとりには女なのだが。全員上背があり、

腕も驚くほど太い。イズンだけはひよろりとして見えるが、うかつに手を出したら手痛いしつぺ返しにあうことは、一分の隙もない動きから容易に想像できる。よく自分に手を出そうと思ったものだとウラルはあきれて男を見やった。

「思う存分こき使ってやってくれ。これは修理代だ。いい椅子でも買うといい」

ネザの言葉に近くの客らが笑った。口笛を吹いたり手を叩く者まである。酒場や市場で問題を起こした客は、その店で何日か無給同然でこき使われるのがこの国のならわしなのだ。修理代はもちろん客の財布だった。どころか、五人で飲んだ酒代までこの中から払われる。

「よろしくおねがいしますわぁ、だんな」

ろれつのまわらない酔客がのびた口調で言う。また客から笑いが起こった。

第一章 4 「火神祭」 下

五人で酒場を出た。まだ遅い時間でもないし、ハシゴでもするものかと思いきや、ジンはさっさと昼間馬を預けた貸し馬屋へ向かって歩いていく。イズン、ネザ、マライの三人も門限は明日のはずだが、どこかに泊まる気はなさそうだ。楽しそうに雑談しながら、ジンについていく。

「ねえ。私のこといつまで男と思ってた？」

ふいにマライが話しかけてきた。ほんのりと顔が赤い。どうやら心地いい程度に酔っているらしかった。

「すぐに気づいたよ。びつくりしたけど」

「本当に？」

「声でわかった」

「ああ、なるほど」

すんなり納得したのがおかしくて、声を立ててウラルは笑った。

マライもゆつたりと笑みを返してくれる。

「男どもはたいてい気づかないんだけどね。やっぱり女と男は、違うな」

マライがくるりと自分の短髪をなであげた。気づかなくて悪かったな、とジンがマライの肩を小突く。

「そうそう、大将は半年近くも私を男と信じて疑わなかったんだよ」

本当か嘘かにわかには判断がつかなかったが、えらく期間が具体的なことといい、ジンが苦笑してすぐに引っこんだことといい、どうやら本当らしかった。

「マライはどうしてそんな格好してるの？ 前から気になってたんだけど」

ちらりとマライが苦笑をもらした。

「えらくあつさり聞くんだな」

「聞いちゃいけないことだった？」

「いいや、ぜんぜん。はじめは女と思われて、なめられないために男装してた。女は黙って見てろ、って言われるのが嫌だったんだよ。そのうち男装のほうで板についちまった。この通り、いかつい体だからね。むしろ女物のサイズを探すほうが難しいくらいだったのさ。動きやすいし、これでいいと思ってる」

「さつきはありがとう。すごく男前だったよ」

「そりゃどうも」

「さ、淑女のおふたりさん。そろそろ前を見たらどうですか？」

紳士口調のイズンにうながされて前を見る。大鹿亭のある裏道を抜け、メインストリートに入る。道自体が、ぼうつと赤く輝いていた。

火神祭の締めイベント、ファイヤー・ロード。

何十、何百という数のランタンに火がともされて、道に置かれ、壁にかけられ、建物と建物の間にかけてられたロープにつるされる。それ以外はなんでもない道なのだが、なぜかしみじみとくるものがあった。

祭りのフィナーレだというのに、誰もこの道では騒がない。小さく笑いながら、小声で会話を楽しみながら、ゆったりと通り過ぎていく。そんな、道だった。

ウラルは空を見あげた。リゼのムールがゆったりと旋回している。空から見物とは優雅なものだ。

ふつとアラス地区での戦場が目に見えかけた。あのムールも戦場で隊列を組み、投げ槍を持ったりリゼを乗せて、飛んでいた。

「ねえ。どうしてこんな戦争が起こってるの？」

夏祭りの聖火でぼうつと赤く飾られた道。きれいに飾られ、みんなが笑いながら過ぎていく光の道。

なぜか、今はそれが、たまらなく切なかった。

「おえらい方々の言い分はわからないから、俺が思っていることを話そう」

ウラルの呟きにちょうど隣にいたネザが応じてくれる。

「ここ何年か、どうもコーリラ国の様子がおかしい。もしかするとひどい内乱か何かがあつて、国が滅びかけているのかもしれない。だがコーリラ国は、リーグ国もそうなのだが、相手国との仲が悪いうえ誇りをとても重んじる国だから、たとえ国が滅びかけていたとしても、最後まで相手に助けを求めないことにしているらしい」

ゆったりしたネザの口調が、ウラルに考えるゆとりをくれた。

「国境のリーグ兵は、何も知らされていなかったとしても、その緊張感に浮き足立つ。その憂さ晴らしとして村を襲っているんだ。村が襲われはじめたのも、うちの大将が スヴェル を立ちあげたのも、ここ数年のことなんだよ。コーリラ国がおかしくなりはじめてからだ」

ネザはウラルにわかりやすいよう、内容を噛み砕いて話してくれているらしい。おかげで半年前まで村の中のことしか知らなかったウラルにも、なんとか形が見えてきた。

「大きなものつていうのは変なもんで、一箇所が墮落してしまうと全部が墮落していつてしまう。北でこんなことがあつた、じゃあ俺たちもつらいし北のまねをしてみよう、つてやつが出始めるわけだ。南の地区の村まで襲われているのは、おそらくそのせいだよ。今となつてはリーグ軍全部がそんな始末なんだ。それに僕ら一般人が反乱を起こしているわけだよ。黙っちゃいられないからな」

ウラルはそつとうなずいた。ファイヤー・ロードのランタンの炎が静かに揺れている。これは、吊いの聖火なのだ。さつき酒場に運ばれた聖火と同じ。

「どうして、みんな戦うの？」

ウラルの問いかけに、次は、マライが答えた。

「女は戦いに参加するな、とはよく言われてきたけれど、女だからつていうだけで戦えない理由にはならないだろう。私たちも平和を

願っているし、そのために何かをやりたい。私は母よりも妹よりも、まわりにいる女たちの誰よりも背が高くてごつくて頑丈だった。だから、私は女の代表として送り出されたんだ」

「つらく、ないの？」

「つらいよ、と静かな声が返ってくる。

「私はきつと、子どもを抱けない。こんな血ぬれの手で抱こうとしても、おびえるだけでしょ。だから、ウラルみたいな女が安心して子どもを抱けるように、私は戦ってるんだよ。ネザも、ジンも、イズンも、それぞれ理由があって戦ってる」

ウラルはまた、そつとうなずいた。ジンとイズンの優しい、しかし厳しい目が、前からちりちりちりちりとウラルを振り返る。

「不思議。とても心が落ちつく」

この光がウラルの村を焼きつくした火と同じものとはとても思えない。

「火がゆらめくのつて、そうだよな。私も、こんなことをはつきりと人に話したのは初めてだよ。普段なら、絶対に言わない」

ファイヤー・ロードのランタンは街はずれの門まで続いていた。

メインストリートではかなり豪華だった飾りつけは、まず空のランタンが消え、壁のランタンが消え、やがては道の両端にぽつぽつとあるだけになって、門を境に、ぷつりと途切れた。

第二章 1 「散る同士」 上

フギンには乗馬を、リゼにはムールの乗り方を教えてもらい、マームとは一緒に料理を作ったり家事の手伝いをしたりして過ごした。

ときどきジンらのもとに使者がきて男らが戦に出ていくことがあった。ジンはもう無理にウラルを連れていこうとはしなかったが、ウラルは毎回アラール八に守られながら、戦を見ていた。北にも南にも、頼まれればどこへでもジンらは向かった。

外から馬蹄の音が聞こえて、ウラルは皿をふく手を止めた。マームが怪訝そうな顔をして二階の窓から外をのぞく。はじめてウラルがこの隠れ家に来て、こうやって外をのぞいていたマームと顔をあわせてから、半年がすぎようとしている。ウラルは皿を食器棚にしまい、テーブルをふいた。来客らしい。

馬蹄が家の前で止まる。しばらく間をおいてノックの音が聞こえた。

「どうぞ、入って」

マームが呼びかけると、お邪魔します、と若い男の声が返ってきた。

「お久しぶりです、マームさん」

リビングのドアを開けた男が疲れのみえるほほえみを浮かべる。男は汚れたコートと帽子を壁にひっかけ、皮袋をせおいなおした。マームが生ゴミを放りこんでいる暖炉の上到手袋をしたままの手をかざす。軽装ではあったが、少なくとも数日間馬を走らせてきたようだった。

「ユル！ どうしたの？ 元気だった？」

「おかげさまで。マームさんもお変わりなさそうですね」

ユルと呼ばれた若者はマームに会釈し、ウラルに「あれ？」とばかりの視線を向けた。まじまじと若者を見ていたウラルはあわてて

目をそらせる。

「彼女は？」

「リタ村の生き残りよ。ジンがつれてきたの」

「ウルルです」

ユルはウルルにも軽く会釈をする。

「ユルです。お気の毒でした」

歌語りの人みたいだな、と思いながらウルルも軽く頭をさげた。

「今回はどうしたの？」

「ああ、そうだ。大変なことになりました。総大将はどこにおられますか？」

「部屋にいるはずよ。隣の家の、一階の、一番奥」

またユルは会釈して、リビングを出ていった。本当に、歌語りの人のように。

手際よくキッチンを片付けるマームの横顔には困惑の色がうかんでいた。

「さっきの人は？」

「北の国境を見張っている人たちの連絡係」

「そんな人がいるんだ」

ウルルは布で拭いた皿を食器棚にもどし、手を暖炉にかざした。

昼間は暖炉をつけなくてもいいほどだが、夜の水は手をひたせば全身に震えが走るほどつめたい。

「ありがとう、ウルル。もう休んでちょうだい」

ありがとう、と返してウルルは部屋のドアを開けた。マームは力

ゴからパンを出し、軽食の準備をしている。

「お茶、あの人にだよな？ 持っていこうか？」

「いい？ お願い」

ウルルは芋が入ったカゴにたてかけてあった盆をとり、その上にいい香りのする茶と軽食を乗せて、リビングを出た。

三つの小さなランプがてらす階段を降り、片手だけで盆を持って、あやうく茶をこぼしそうになりながらドアを開ける。玄関のそばに

打たれた杭に馬が繋がれていた。足元の草を食べつくしてしまった馬がものほしそうにパンを見つめる。

「これは、あなたのご主人の。あとでワラをあげるからね」

ウルルが言っても馬は首をのばしてくる。ウルルは背を向けるようにして馬の横をとり、隣家のドアを苦労して開けた。ついさっきまでマームといた家と基本的なつくりは同じだが、こちらの家は一階建だ。あちらの家では階段がある場所から光がもれていた。ジンの部屋だろう。

「そうか。相手はどれくらいだ？」

半開きになったドアのむこうからジンの声が聞こえてきた。

「わかりません。今のところ、リーグ兵千五百が常に待機の状態です。それほど相手が多いのかと思いましたが、相手は主に夜襲を使っている様子で。日中でも全力を出しているとは思えません。相手がどれくらいの力を持っているのか、まったく把握ができない」

「お前は どう思う？」

そうですね、とユルは口ごもる。ドアの前についたウルルは、片手で盆を持ってドアをノックした。

「ああ、ウルル。どうしたんだ？」

「お茶、持ってきました」

「ありがとう」

ユルが盆をウルルから受け取り、笑いかけた。ウルルも笑みを返す。ジンは部屋の奥の椅子に座って、深刻そうな顔で何かを考えこんでいた。ウルルはふたりに軽く会釈してドアを閉めた。

こうやってジンはウルルの村のことや、アラス村のことを知ったのだ。またどこかの村が襲われたのだろう。

ウルルの後ろでドアが開いた。

「ウルル、リビングに全員を集めてくれ。みんな、それぞれの部屋にいるはずだ」

「わかった」

カタン、と音を立ててドアが閉まった。で、どうなんだ、と言っ

たらしいジンの声が聞こえたが、ドアがぴたりと閉まったせいかよく聞こえなかった。

ジンに言われたとおりウルルは全員の部屋をノックし、リビングに来てほしいと伝えてまわった。

「どうしたんだ？」

リビングの隣、ウルルの部屋の向かいのドアをノックすると、ランプの明かりで本を読んでいたらしいサイフォスが聞いてきた。

「ジンが全員をリビングに集めてほしい、って」

「珍しいな。大将、たいてい自然にみんなが集まっているときに言うのに。それ以上のことは言っただけなのか？」

「ごめんなさい、それ以上は何も知らないの」

階段からリビングに通じるドアが開き、リゼとマライが入ってきた。つぎつぎと男たちが集まってくる。フギンとアラールを除く全員が集まってきたからほとんど間をおかず、ジンとユルが入ってきた。

「全員そろってるか？ ん、フギンがいないな」

「フギンは部屋にいなかったの。アラールはどこに部屋があるのかもわからなくて。呼んでない」

「アラールはいいんだ。フギンは馬の様子を見にいってるんだろう。みんな、突然集まってもらって悪かった」

「お久しぶりです、皆さん。ネザさん、お元気そうで何よりです」

「久しぶりだな、ユル。元気だったか？」

ユルは笑い、おかげさまで、と答えた。

「さ、ユル。座れよ」

ジンとユルがそれぞれ席についた。

「北の国境で大きな戦があった。リーグ兵が千五百も出兵している。しかも、王都から二千の追加出兵がなされたらしい」

「三千五百の兵？」

「整えられたあごひげをなでながらアキナスが聞きかえす。」

「ああ。何百年もコーリラとリーグは小ぜりあい絶えていないが、五百や六百の追加はあっても、千単位の追加出兵は珍しい。どうや

らコーリラ国でなにかあったらしいな。三千五百の追加出兵を裏付けるような、とんでもないことが」

ジンが一度話を切る。マームが茶を入れたカップをジンの前に置いた。

「ありがとう、マーム」

「どういたしまして」

マームも予備の椅子を出してテーブルにつく。カタン、と音を立ててドアが開いた。フギンがドアを開けた姿勢のまま立ちつくしている。

「へ？ どうしたの？」

間の抜けた声をあげるフギンに、やっと来たな、と低いジンの声
が答えた。

「すまないが、マームとウラルは席をはずしてくれ」

「え、どうして？」

反論しようとするマームにサイフォスが渋面を向けた。「何かあったのか？」と小声でイズンに尋ねながらフギンも席につく。

「マーム。何か理由があるんだ。頭目のことだから悪い意味ではないさ」

もう、と頬をふくらませてマームが立ちあがる。ウラルもこの場に残りたかったが、何も言わずに立ちあがった。

部屋に帰っても壁が薄いので、リビングでの会話は丸聞こえになってしまう。ウラルは階段をおりて玄関にいる馬のもとへむかった。

馬はウラルの顔を見るとまた物ほしそうな顔をして、前足で地面をかいた。ウラルは適当にそのあたりの草をむしり、馬にやった。

「待ってて。もっとたくさん持ってきてあげるからね」

馬はもっしゃ、もっしゃ、と音をたてて草を食んでいる。

二階の窓を見あげると、何かの説明をしているらしいジンの後ろ姿がわずかに見えた。大声をだせば家の外まで聞こえるが、静かに話す程度なら何も聞こえない。少し残念に思いながら、ウラルはワ

ラを取りに餌置き場へむかった。

第二章 1 「散る同士」 下

「ちょっとそれ、どういうことよ！」

故郷の村が襲われて以来、ウラルは寝つきが悪くなっていった。どこからともなく聞こえてくる赤ん坊の泣き声に半ば耳をふさぎながらやっと眠りについたのだが、突然の大声に叩き起こされてしまった。ウラルは寝返りをうち、頭から毛布をかぶった。

「決まったことなんだ、マーム」

どうやら、サイフォス夫妻の夫婦喧嘩のようだ。

「ここを出ていけて。私たちの家じゃない」

「本来、この土地はこの森とこの森の守護者のものだよ。人が持つてはならないものだ」

「そんなことを言ってるんじゃないの！」

「わかっているさ。でも、決まったことだ」

様子がおかしい。出て行け、とはどういうことなのだろう。

「そんな。どうして。わけがわからない」

「お前の故郷、アラス地区だったよな。そこへ行け。逃げるんだ」

「何から逃げるっていうのよ」

サイフォスのため息が聞こえた。苦悩に満ちた、長い息。衣ずれの音が聞こえて、サイフォスがマームを抱きしめたのがわかった。

「俺は、たぶん死ぬ。今回の戦で」

ウラルは耳を疑った。半ば飛び起きるようにして体をおこす。聞き耳などたてなくても一字一句聞き取ることができる。マームが嗚咽を漏らしているのも、ときどき涙をすすりあげているのもわかるのだ。

サイフォスの声は低く沈んでいる。冗談のたくいではなさそうだ。

「なんでよ。なんでそんなことがわかるのよ！」

「二百人、リーグ兵が死んだそうだ」

「えっ？」

二人の姿が見えないとわかっていながら、ウラルは声のする方を見た。半月に照らされた壁がある。

「見たこともない武器で、国境を警備していた兵士が死んでいったそうさ。コーリラ国は、おそらくその武器でもう滅びている。それが、ゴウランラ の推測だ。海をこえた大陸にある国、ベンベルの、『炎の薬』で。小さな火をつけるだけで、簡単に大爆発を起こせる兵器だそうさ」

サイフォスの声がわずかに震えた。

コーリラ国はこの国、リーグ国が唯一国境を接する国だ。海の果てにまた国があるなど、ウラルは聞いたことがない。しかし、どうやら海の果てにはベンベルという国があつて、その国がコーリラ国を滅ぼし、このリーグ国までのみこもつとしているらしい。それも、「炎の薬」という恐ろしい武器を使って。

ウラルはきつく毛布を体に巻きつけた。何が起きているのかわからない。体がひどく頼りなくなつたような気がした。

「そこへ今回、俺たちは、」

「なんでよ！　なんでそんな場所へあなたが行くの？　リーグの軍が出てるんでしょう？　あなたが行く必要なんてないじゃない！」

サイフォスが言いおわつてないにもかかわらず、マームが叫んだ。壁の薄い向かいの部屋でウラルが寝ていることなど、すっかり忘れてしまっているのだろう。

サイフォスはしばらく、黙っていた。何度かマームが涙をすすりあげる音がする。

「この組織が何をしているか、覚えてるか？」

「覚えてるわよ。私だって、組織の一員なんだから」

「言ってみてくれ」

「国家の横暴を決して許さず、農民や奴隷の理由ない死をくいじめ

ること」

「戦が始まれば、一番苦しむのは誰だ？」

マームが黙る。サイフォスはなだめるような口調で続けた。

「農民だけじゃない。全ての人間が苦しむ。平和あつての幸福だ。指をくわえて見ているわけにはいかない」

「じゃあ、戦わなければいいじゃない。最初から。鎖国でもすれば、いいじゃないの」

「リーグの軍が出てる。もう始まつてるんだ。止めるなら、戦うしかない」

マームの嗚咽がはげしくなった。

「どうしても行くの？ 私が泣いて頼んでも？」

サイフォスの苦しげなため息が聞こえた。

「行く。君はもっと南へ行くんだ。もし侵攻がはじまるなら、北からだから」

「知らせずに行ってくれたらよかったのに。ジンは私とウラルに席をはずすよう言ったんだから」

「大将は俺から君に一对一で言えるように、気を使ってくれたんだよ」

サイフォスが低い声でごめんな、と謝るのが聞こえる。マームが泣きくずれるのがわかった。サイフォスが謝りながらその背中をなでてやるのが、ウラルにはわかった。

サイフォス夫妻の話し声が聞こえなくなってもウラルは眠れず、自分の体を抱き、膝に顔をうずめて、朝を待った。

毎日のように暖炉のそばで干されていた洗濯物が少しずつ姿を消していった。マームが口をすっぱくして各自の部屋へ持っていくように言っていたほぼ全員のコートも、今となつては最後の一着がソファアーにひっかかっているだけだ。

旅支度をしたフギン、イズン、サイフォス、マームの四人がジンの前に整列していた。四人が行ってしまったら、この家にはウラルとジンの二人だけしか残らない。ほかはそれぞれ、どこかへ旅立ってしまった。

「頼んだぞ、三人とも」

サイフォス、イズン、フギンが異口同音に「わかりました」と答える。ジンはうなずき、マームに向きなあった。

「マーム。本当にすまない。気をつけて」

「火神の加護を祈るわ。みんなに。生きて帰ってきてね。それで私を迎えにきて。私だって組織の一員なんだからね」

「約束する」

悲しげな笑みをつくるマームの右手をジンの手が包みこみ、強くにぎった。

「ウラル、あなたも元気で」

マームが片手を伸ばしてきた。ウラルはその手を取らず、マームの小柄な体を抱きしめる。ウラルのほうが泣きそうだった。マームはここ数晩で涙を使い果たしてしまったのか、ただウラルの腰に回された腕の力を強めただけだった。

四人が出ていってしまうと急にリビングが広くなったように見えた。ウラルは窓から玄関の方をのぞきこみ、四人の後ろ姿を見送った。男三人はこれが別れではなさそうだが、マームはもう、会うことができないのだろう。

ジンは黒いコートがかかったソファアにどっかりと座り、痛みをこらえるような顔で目を閉じていた。

「みんな、どこへ行ったの？」

マームがきつちりと片付けていったキッチンにウラルは立ち、ポットに茶葉を入れた。暖炉のヤカンから沸騰している湯をそそぎ、マグカップをふたつ、机の上に出す。

「今まで何の説明もなしに、すまなかった」

ウラルはジンにカップを渡し、その隣に座る。

「コーリラが滅ぼされた。リーグ国の東の海をこえたところにある大陸のベンベルっていう国に。確かな情報だ。今日の明け方、使いの鳥がきた」

ウラルは、そう、とうなずいた。それ以外に言いようがなかった。

「思っていたより、驚かないな」

「マームさんとサイフォスさんの話、聞いちゃったの。ユルさんが来た日。マームさん、泣いてた」

ジンは小さな声でそうか、と答えた。

「どこまでサイフォスはマームに話した？」

「今度こそたぶん死ぬ、って言ってた」

「そこまで言っていたか」

「どうすればいいか、わからなかった」

もう一度、ジンが「そうか」と呟いた。前の呟きよりは聞き取りやすい声だったが、その分苦しいものがにじんんでいるのがはっきりとわかった。

「なあ、ウラル」

おもむろに、ジンは話しはじめた。

「十六、七のやつらが軍隊に加わって厳しい訓練を受けるなんて、間違ってると思わないか？ そりゃあ軍隊にあこがれているやつもいるだろうが、中には親を軍隊に殺されたやつもいる。ウラル、お前みたいないやつが、この国には山ほどいるんだ。当然、軍なんざに入りたくはない。軍の召集をこぼんだやつらが追われて、同じように追われたやつらと連絡をとりあい、組織を作る」

ジンの声に熱がこもった。なぜか、覚悟を決めたような目つきをしている。

「団員が増え、組織の中で力関係が定まってくるにつれ、組織は軍隊のようになっていく。そうしてできていった組織の『次期頭目』がサイフォス、マライ、リゼ、ネザ、それからフギンだ。同じ敵と戦うなら二百人より千人の方がいいにきまっている。それで、この

スヴェル という組織を介して五つの組織がつながっている。いわば、俺らが反国組織の司令塔なんだ。ここに来たユルは北の国境を見張ってる。ゴウランラ って組織の伝令をやっている」

アラス村のときの アスコウラ のような軍隊が、ほかにいくつも集まるのだ。ジンの説明はあまりよくわからなかったが、大きな戦になるのだろうということはウラルにも理解できた。

「イズンは？」

「興奮しすぎたな」といった様子でジンは軽く頭をふり、落ちついた声で答えた。

「イズンは、実は貴族の出だ。この組織の資金はだいたいイズンが流してくれている。王都の親父さんに会いに行って、ついでに宮廷の様子も見てきてくれるそうだ」

「大きな戦なのね」

確かめるように聞くと、低い声でああ、と返事が返ってきた。

「どうしてあの時、席をはずしてほしいと言ったの？」

「この話をしてから、聞きたいことがあった」

「何？」

ジンはまだほとんど中身の残っているカップをひじかけに置き、ウラルとあらためて向かいあった。

「お前は、村に戻りたいか？ 麦を作って、結婚して、そんな穏やかな暮らしに戻りたいと思ってるか？」

「いまさら、そんなこと言われたって」

本当に「いまさら」だった。半年前、アラス村の一件があつてからは、ウラルはこの組織と行動を共にすると決めていたのだ。

「今なら、まだ戻れる。マームと一緒に行けばいい。普通の村娘に戻りたいなら行ってくれ」

「ジン」

息が苦しくなる感じがした。

「ジンは、どう思っているの？ 私にこれ以上、ついてきてほしくないと思ってる？」

「白状すると、足手まといだと思っただことが、何度かある」

「ウルルは立ちあがった。組織の頭目であるジンが言うのなら、しかたがない。」

「正直に言ってくれてありがとう。準備、してくるね」

「俺の意見で決めないでくれ」

「声に背中を殴られたような気がして、ウルルはびくりと足を止めた。」

「ジンの口調自体は激しくない。むしろ静かだ。だが、このまま逃げることを許さない、鋭い響きをはらんでいる。」

「だけど、ここまで言ったんだ。続きも言わせてもらおう。今は、そう思っていない。できれば一緒に来てほしいと思っている」

「ジンの目が、ウルルの目をもういちど見すえた。」

「それから、もうひとつ。俺らは今回、リーグ軍に加勢して戦う。」

「お前の村を焼きつくした連中と手を組んで戦うんだ。わかるな？」

「赤ん坊の死に顔が脳裏をよぎった。徴兵され、今も帰ってこない父や兄や、いいなづけの姿が目にかんた。ウルルは軍をゆるしていない。今でも恨んでいるのだ。それを知っていて、ジンは、この戦についてきてほしいと言っている。」

「ジンは続けた。」

「お前に、やってほしいことがあるんだ」

「やってほしいこと？ ウルルが尋ねると、ジンはうなずいた。」

「たとえ俺たちが全員死んでも、生き残ってこのことを伝えるやつが必要なんだ。伝える人がいなければ、また同じことが繰り返される。俺は、それが怖い」

「ウルルは耳を疑った。ジンの口から、まさか「怖い」などという言葉が出てくるとは思わなかったのだ。自分をあざわらうような笑みをつつすらと唇の端に浮かべて、ジンはうつむいてしまった。」

「明日、ナタ草が黄色になるころ、俺はこの家を出る」

「ジンは茶を飲みほして立ちあがる。」

「準備しておいてくれ」

逃げるようにリビングを出て行ってしまった。

翌朝、ウラルが準備をすませて外へ出ると、黒鹿毛の手綱を持ったジンが待っていた。フォルフェスは玄関横の杭につながれている。馬装は済んでいた。

ウラルも、ウラルなりに覚悟を決めた。ジンらがやっていくことを見たかった。足手まとい以外にウラルの役割があるのならば、ついていかせてほしかったのだ。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

ジンは笑い、寒いな、と続けた。息が白い。霜がうつすらと地面をおおっていた。

「行くのか、ジン」

木靴の足音とともにアラーハが森の木陰から姿を現した。冬であるにもかかわらず強い草のにおいをまとわせている。

明らかにジンが驚いた様子をみせた。

「アラーハ。なぜ、来た」

「俺は行くのか、と聞いた」

アラーハは怒っているようだった。無表情で声も平静のままだが、夜遊びに行く息子を叱りつける父親のような、頑とした様子だ。

「ああ、行く。ウラルも一緒に。アラーハはここに残らなければならぬだろう?」

「俺も一緒に行こう」

アラーハの目が朝日に光った。よく見てみると、アラーハの目は瞳孔が横長だ。馬や羊の目に似ている。人の目ではない。見てはならないものを見た気がしてウラルはアラーハから目をそらした。「森は、どうする気だ」

ジンが齒の間からしぼりだすような奇妙な声をだす。ウラルに聞

き取らせまいとするような感じた。どういう意味かウラルは図りかねたが、こんな様子では尋ねるに尋ねることができない。

「甥に任せてきた」

「それで大丈夫なのか？」

「今までもそうしてきた。まだ死ぬことはできないが、一緒に行くことはできる」

アラーハは身をひるがえし、歩きはじめた。

「どういうこと？」

ウラルは尋ねたが、ジンは首を振り、悪いが言えない、と答えた。

アラーハは葉を落とし、いろどりの乏しくなった森に入ろうとしている。

「行く」

第二章 2「風神画」 上

林道を駆ける。馬術の達人であるフギンにしごかれたおかげで、ウラルもある程度は走ることができるようになった。アラールは歩きのまま、速歩なら走ってついてくる。駆歩になるといつのまにかいなくなっていて、止まって待っているとすぐに追いついてくる。たいていは汗ひとつかかず、すこし顔が赤くなっている程度だ。人間離れた体力だった。

「そろそろ休もう。よさそうな場所がある」

ジンが駆けながら振りかえり、呼びかけてきた。ぽっかりと開けた場所がある。人工の野営地のようだ。木が伐採され、火がたけるよう円形に石が積まれている。

ウラルはフォルフェスの首を軽くたたき、下馬した。フギンから教えられたとおりに腹帯をゆるめ、手綱をおろして打ちこまれた杭のところまで連れていく。

アラールが森の中へ分け入っていくのが目の端に入った。どこへ行くのだろうと呼び止めようとしたところで、横にいたフォルフェスが盛大に鼻を鳴らした。

「ちよつと、フォル。鼻水かけないでよ」

アラールが消えたあたりを見たが、もう茂みが揺れるのさえ見えなかった。少し離れた場所でジンがこちらを見ている。

「すぐに火をおこすから、座って休んでくれ」

ジンは鞍のサイドバックから手斧を出し、森の中にわけいった。何をするつもりだろうとウラルが様子を見てみると、すぐに枝が払われた倒木をかかえて森から出てきた。ウラルがじつと見ていることにジンは「なんだ」と笑いながら、石積みの中にそれを持ちこんで火をおこし、二人分の携帯食をバッグから出してあぶりはじめる。馬が鼻を鳴らした。

「アラールは？」

「あいつの分は、いいんだ」

「どうして？」

ぶるる、ぶるる、と何度も馬が鼻を鳴らす音がした。二頭ともがつながれたままウロウロと落ち着きなく動きまわっている。耳はひつきりなしにどこかを探るように動き、背中や尻や足の皮膚が、虫でもとまっているかのように細かくブルブルと震える。

「何かに怯えているらしい。オオカミか、クマかもしれない」

ジンが緊迫した口調で低くつぶやく。火のそばに置いてあった鞍袋の中から弓矢を出し、弦を張った。

「ウラル。松明に火をつけろ」

ウラルは荷物の中から松明を抜きとり、たき火に差し入れた。音をたてて松明が燃えはじめ。手が震えている。持った松明の火も、細かく震えていた。

「こいつの手綱を持っててくれ。いざとなったら離してくれてかまわない」

渡されたグレンの手綱と松明をウラルはにぎりしめる。いざとなったら離せということは、襲われたらグレンを生贄にして逃げる、ということなのだろう。グレンが頭絡をにぎるウラルの手にかみつく。松明の燃える音。馬が鼻を鳴らす音。そのどれでもない、ぼそぼそという低い音。

いつでも矢を射はなせるかまえをみせながら、ジンが眉をひそめた。

「何か聞こえる」

森の中から話し声がしていた。二人の男の声だ。一方の声には覚えがないが、もう一人はアラハだ。ウラルとジンは顔を見あわせた。

「ウラル、大丈夫そうだ。グレンをつないでくれ」

何を基準に大丈夫だと言っているのかわからなかったが、ウラルはうなずいてグレンを杭につないだ。

ジンが松明を消す。木立の中、月明かりに二頭の獣が浮かびあが

った。小柄な獣と、とてつもなく大きな獣だ。

「行こう」

ジンの声に引かれ、ウラルもおどおどと足を踏みだした。

近づいてみると、二頭ともがとてつもなく美しい獣であることがわかった。一方はいぶし銀色の毛並みをしたオオカミだ。獰猛な牙が閉じられた口から見え隠れしている。このオオカミに馬たちは怯えていたのだ。

そして、もう一方は馬と似て非なる高貴な獣だった。先が十六にも枝わかれた立派な枝角が月光の中で誇らしげに輝いている。それだけの巨大な角を支えるためだろうか。全体的に見ても馬よりよほど大きく、筋骨たくましい。背中はジンの背丈よりも高いところにあるのだ。イツペルス、シカの頭と四肢に馬の体をもつ珍しい獣だった。

「あきれたな。守護者たる者が森から離れて人間と旅をしているとは。鳥ならともかく、お前のようなイツペルスがすることではないだろう。この森のイツペルスどもきたら、やたらと傲慢で我らオオカミすらよせつけぬ。お前の一族とは、そんなものだと思うっていた」

オオカミが人の言葉を話していた。

「守護者って、なに？」

「お前もおとぎ話やなんやで聞いたことがあるだろう。森の長である獣のことだ。ひとつの森に一頭ずついる。地神に仕えて、聖域と呼ばれる場所を守っているらしい。人を聖域に近づけないために人語を話すし、人に化けることもできる」

「うそ。本当にいたの？」

オオカミの鋭い牙を見せつけられてもイツペルスは落ちついたものだ。巨大な枝角をずっと見せつけるように動かす。イツペルスがこの巨大な角をひとつりすれば、狼の三、四匹くらいは軽く吹っ飛ばされてしまうだろう。イツペルスの口元が苦笑でもするようにゆがむ。

「すべてのイツペルスがそんなものではないさ」

ウラルは口元をおさえた。震えが全身を駆けあがっていく。声も、話し方も、アラーハそのものなのだ。話しているのは間違いなく、この獣なのに。

「そうだろうよ。俺のようにネズミを食わないオオカミもいる。森の守護者が自分の森の獣を食ってしまったら、それこそ本末転倒だからな」

オオカミは牙をむき出しにしながら器用に人間の声で笑ってみせた。

イツペルスがジンとウラルのほうを見た。つられたようにオオカミも二人を見る。

「物好きなお前と旅をしている人間は、このふたりか？」

だらりと舌をたらしオオカミがイツペルスに尋ねる。イツペルスの顔が苦笑を浮かべたように見えた。

イツペルスの姿がゆらいだ。陽炎のようにぼやけ、別のシルエツトになり、ぼやけていた部分が実像に戻る。イツペルスは、もう獣ではなかった。苦笑をうかべたアラーハがイツペルスのいた場所に立っている。いつもと同じ狩人の姿。毛皮に、木靴。いや、木靴ではない。イツペルスの蹄だ。

「あなたがこの森の守護者か」

驚きもせず、むしろまったく当たり前であるような風情でジンは狼に問いかける。

次はオオカミの姿がぼやけた。アラーハのときと同じく陽炎のように薄くなり、人のシルエツトになった。オオカミがいた場所には初老の男が立っている。狼毛のコートをはおった紳士のいでたちだが目はぎらぎらと攻撃的なままで、腰に佩かれた抜き身のサーベルが血に濡れているかのように恐ろしげな光を放っている。

「いかにも」

紳士が面白そうにジンを眺めている。ジンは堂々とその視線を受け止め、口を開いた。

「ここで今夜は野営させてもらいたい。できれば、オオカミたちにも出てきてほしくない」

「ここに泊まる分には問題がない。この無愛想な守護者を見にきただけだからな、許可などいらん。だが、俺が一族の者に口をきくには、ちよつとした代価がいるぞ」

「何が望みだ？」

「まず、この森の獣を狩らないことだな。鳥も魚もだめだ。自分は食いたいのに、オオカミには食われたくない、というのは不公平だろう？ それから、」

「わかった」

ジンは紳士の言葉をさえぎって短く答え、火のそばに戻って干し肉のかたまりを持ってきた。

「生肉はないのか。馬一頭でもいいぞ」

「すぐに出ていく。これで勘弁してくれ」

「生肉でないなら、いらん。アラール・ヒュグルの顔に免じて今回は許してやろう」

紳士は不服そうに鼻を鳴らし、アラールに向きなおった。

「ヒュグル森のアラール。最後に、ひとつ言わせてくれ。人間との旅にうつつを抜かすのはいいが、森のことを忘れたとは言わせぬ。

お前は、馬ではない。イッペルスはイッペルスらしく誇りを保ち、雄々しく生きる。森で生まれ、森で生き、森に骸を返せ」

アラールはゆっくりと目を閉じた。

「ヤヌ森のケナイ。わざわざ言われなくてもわかつている。だが、俺は、森で生まれ、人と共に生きている。これからもそうするつもりだ。骸は、森に返さなければならぬが」

おもしろいやつだ、紳士は遠吠えのような声をあげた。いつせいに本物の遠吠えが、すぐ近くで十数頭ものオオカミの遠吠えがこたえるかのようにあがる。ウラルは仰天して一歩さがり、ジンは剣の柄に手をやった。

紳士の姿がぼやけ、オオカミの姿にもどった。いぶし銀色の獣が

身をひるがえして木陰へ消えていく。ヤヌ森のオオカミ守護者の後を木陰から姿をあらわしたオオカミの群れが追った。

「どうということなの？」

オオカミが完全に消えてしまつてからウラルは尋ねたが、アラールは無愛想にそっぽを向くだけだ。

「はぐらかすことも、できそうにないな」

アラール八のかわりにジンが苦笑まじりの声で答えた。

「とりあえず火のそばに戻ろう。肉も、いいころあいだ」

三人でたき火のそばに戻った。フォルフェスとグレンは小さな物音にビクビクしているものの、だいぶ落ち着いて草を食んでいる。

ジンがたき火にかざしていた肉をとりあげた。裏返さなかつたせいで片面は黒こげだが、もう片面はいいぐあいに焼けている。

アラール八も円形をつくっている石積みのひとつに腰をかけたが、肉を食べる気はなさそうだ。強い草のおいがする。森の中で草を食んでいたのだろう。

「アラール八は説明する気がなさそうだから、俺が話そうな」

アラール八がうなずいて、ウラルを見た。ウラルもジンにうなずくふたりともにならず返して、まずは俺の身の上話からはじめようか、とジンが口を開いた。

「俺が十のとき、住んでいた家が襲われた。敵の多かつた父を恨んでいたやつだったのか、ただの盗賊だったのかはわからんが、家は焼かれて、俺はさらわれた。身代金でもふんだくろうつて魂胆だつたんだろう。途中で逃げだして、逃げこんだ森でアラール八に会つたんだ。かくまつてもらつて、俺は何とか逃げることができた」

「かくまつたというよりは、守護者の任を果たしたただけだ」

「ああ、そうだったな。でも、かくまつてもらつたことには変わりがない。家からずいぶんと離れてしまつて帰ることもできなくなつた俺を、アラール八は森に住まわせて、実の息子のように育ててくれた」

ほめすぎだ、とアラール八が呟いた。

「アラーハ。口を出すなら、説明してくれ」
「任せる」

半ばあきれたようなジンの口調にアラーハはそっぽを向き、立ちあがって森の中へ入って行ってしまった。

人でないアラーハがいつたい何歳なのかはわからないが、雰囲気や話し方が似ていることといい、いわれてみればジンとアラーハは実の親子にもみえる。顔はまったく似ていないのだが。

あの性格は二十年前から変わってないんだ、とジンは笑った。

「アラーハは獣として見ても、人間として見ても変なやつだった。普通、守護者は自らすすんで人間と関わろうとはしないそうだ。さっきのオオカミが言っていたらう。アラーハを見に来ただけだ、ここに泊まる分には許可がいらなくて。アラーハは森の中に人間が来ると、聖域が近くにあるわけでもないのに様子を見に行っていた。無事に森の外に出るまで、じっと見てるんだ。人の姿でいることも多かった。獣にしては人間に近すぎ、人間にしては獣に近すぎるやつだった」

やつだった、って、アラーハが死んだみたいだな、とジンはほほえんだ。

それから六年後、森に迷いこんできたイズンと共に旅に出たことへとジンの話は発展し、やがて義勇兵統率組織 スヴェル を設立した、という話になった。アラーハにジンは森の一部を借りて隠れ家を建て、森の守護者であるアラーハは素性を隠し、スヴェルの一員として森を離れてまで戦についてくるようになった、と苦笑まじりの口調で言った。

「戦の何が悪いか。それは関係のない人間を何万人も巻き込むことだ。戦うこと自体が悪いわけじゃない。げんにシカでもイッペルスでも角をつきあわせて戦うが、戦っている獣同士以外に害はおよばない。戦をするなら、国王なり軍事総長なり、一対一で決闘でもすればいいんだ」

ウラルは相槌をうつたり、うなずいたりしながら、ジンの身の上

話や国家への批判がまじった義勇軍の歴史を聞いていた。

アラーハは帰ってこない。帰ってきたのは、翌朝になってからだ
った。

第二章 2 「風神画」 下

*

ジュルコトラ は堅牢な要塞だった。ジンが開門、と叫ぶ。城門の見張り台に立っていた兵が何かをどなり、それを合図に門の隙間が開いた。

「お久しぶりです、ジンさん。お連れの方も。どうぞ、こちらへ」
事務的に言った中年の男のあとについて三人は要塞の中に入り、客間らしい殺風景な部屋に通された。すでに、サイフォスとマライ、イズンが待っている。

サイフォスとマライは別れたときと変わらなかったが、イズンの変貌ぶりにウルルは驚きを隠せなかった。裾を引きずるほど丈が長く、ゆつたりとした淡いブルーの上着を着ている。裾には花びらの形にきりとられた優雅な模様がつらなり、腰に巻かれた皮ベルトには繊細な細工のほどこされた銀ボタンがいくつつかっている。ひと目で司法官あたりの知的階級貴族だとわかった。普段から裕福そうな格好はしていたが、さすが貴族だ。

「早かったな」

ジンの声にイズンは帽子をとり、帽子と衣服を指して笑った。

「こころよく両親が協力してくれましたから。明日にでも、これを古着屋にでも売ってきましょう」

「助かるな。お父上とお母上に、よろしく言っておいてくれ」

「ありがとうございます。これが頼まれていた文書です」

イズンはふところから巻紙を出し、広げた。読みあげる。

「拝啓、北方国境警護の任務に封じられし軍事総督殿。我らはリーグ全土から集まった義勇軍 スヴェル。貴殿に加勢したい。敵意、悪意のないことはヤワラン地区中央役所書記官カル・エルムトが保障するものとする。全軍に火神のご加護を。草々」

「ずいぶんと難しい文章だな」

「小難しい文章のほうが、相手は喜ぶのですよ。自分が上級階級であることを再確認できますからね。とりあえず、リーグ軍に加勢したい、との旨さえ伝われば問題ありません」

しれっとした顔で言うイズンの顔をジンは見やり、「それが王都役所の書記官の息子の言い草か」と苦笑して文書を受け取った。サイフォスとマライに向きなおる。

「ふたりも、ご苦労だった。現状を報告してくれ」

サイフォスが羊皮紙を広げた。

「ナヴァイオラ、歩兵二百三十、騎兵七十、馬が百七十。ほかにスカール港には戦船三十が待機しています」

マライも同じように羊皮紙を広げる。

「ジュルコンラ、歩兵百三十、騎兵八十、馬が二百です。戦慣れた者がおもだつて徴兵を進めています」

「兵糧、武器は」

「半年分は用意してあります。それ以上は難しいかと」

「城を落とすわけじゃない。半年もあれば十分だ。王都の様子は」
貴族の装いをしたイズンが口を開いた。

「追加出兵された二千が五日前、王都を出発したようです。外門の警備が厳しくなり、夜でも灯火が絶えなくなりました」

やはり、ジンは軍事司令官なのだ、とウラルは思った。ジンの部下はウラルやマームを含めて十人だけではないことを、今のウラルは知っている。サイフォスの二百三十、マライの二百。あわせて四百三十がジンの部下にここで加わった。まだ、何百人も仲間がいるのだろう。ジンはそれを束ねる要なのだ。ウラルはわずかに肩を震わせた。

アラーハがちらりとウラルを見た。ウラルもアラーハを見返したが、アラーハは興味なさそうに窓の外を見るだけだった。真剣な様子でジン、サイフォス、マライ、イズンの四人は話しこんでいる。

「俺と、ウラル、アラーハは王都経由で北上する。ふたりは自分の

指揮する部隊をそれぞれ八つに分けて、それぞれ違う道を通って北上してくれ。心配はいらんと思うが、できる限りめだたないよう、慎重に。四日後、カクオス村で会おう」

四人が立ちあがった。ウラルも驚いて立ちあがる。この短時間ですべての会話が済んでしまったらしい。もともと決まっていたことなので話す必要もないということだろうか。サイフォスとマライが重々しくドアを開け、部屋を出ていく。

「待たせた。今日はここに泊めてもらおう。明日、王都へ発つ」
わかった、と窓の外を見ながらアラール八が答えた。

食べ物、装飾品、衣服、その他雑多な品々を売る店が露天を連ねていた。馬が五頭か六頭はならんで通ることができるとあるう広い通りには人が満ち満ちて、川のような流れを作っている。

ほかの人より頭ふたつも背の高いアラール八はどこにいてもすぐに見つけられるが、平均以下のウラルは一度迷えばジンも探しづらはずだ。必死でジンのあとについて歩いていく。おかげで、物珍しい市場の品物もほとんど見ることができない。

リーグで一番大きいといわれる王都の市場に三人は来ているのだ。つた。

「ふたりとも、こんなに人が多い場所は初めてか。それでも普段に比べれば人が少ないくらいだけだな。少し、どこかで休むか」

すっかり目を回してしまったウラルに、ジンが半ばあきれたような口調で言ってきた。周りの喧騒にのみこまれ、ずいぶんと声が聞き取りにくい。ウラルはともかく、アラール八はかなり具合が悪そうだ。今にも吐きそうな顔をしている。

ジンは王都の市場をよく知っているらしい。すいすいと人波をかきわけ、進んでいく。

白い石でつくられた立派な建物に入った。しん、と周りの雑音が

消える。ろくに確認せず入ったが、この建物はどうやら神殿であるらしい。正方形の広いホール。四方に神の像があった。

東の狩猟と農耕の神、地神。

南に戦の神、火神。

西には風神。唯一の女神で、死を司る神。

最後に北、旅の守護神といわれる水神。

「ここなら静かだろう。お参りしていこう」

小声でジンは言い、火神像の方へ歩いていった。アラールは地神像へむかって歩いていく。職業や階級によっても違うが、自分ももつとも崇拜する神から右回りに、全ての像に跪礼するのが一般的だ。

ウラルは風神像へ向かった。喪服を着て、豎琴を胸に抱いて目を閉じた若い女性。風神は死をつかさどる神であると同時に、女性の守護神だといわれている。ウラルは祈っているほかの女にまじり、礼をほどこした。水神、地神と順にまわっていく。

火神像の前で肩を軽く叩かれてふりかえると、ジンとアラールが立っていた。

「二階へ行こう」

ジンの指す方を見ると、階段があった。聖職者が一人階段の前に立っていて、二階へ行こうとする信者を呼びとめている。二階がある神殿は初めてだった。

「このアサミイを奉納したい」

ジンが言つと、聖職者はあっさりと通してくれた。

二階は一階とほとんど同じづくりだ。像のあった場所に大きな二枚組みの絵が飾られ、ホールの中央に台座が置かれている。奉納品がきれいに並べられていた。ジンはアサミイを台座の上に置き、その場で南を向いて祈った。初めて見る作法だった。祈りの対象が火神、奉納品がアサミイということは戦士や騎士の礼なのだろうか。

「ウラル、絵のある神殿は初めてだろう？」

ウラルがうなずくと、見せてやりたかった、とジンはほほえんだ。

一枚は森の中で地神が角笛を口に当てている絵だった。たくさんの動物が集まり、地神によりそっている。角笛の音に集まった森の守護者が指示をあおいでいるようだ。アラーハに似たイッペルスもいる。

もう一枚は、神の怒りの絵だった。地面が裂け、崩れ落ちている。地神の象徴である獅子が咆哮し、数人を踏みつぶしている図。その後ろで地神は、怒りの形相をあらわにしていた。見慣れた神像とはあまりにも違うその表情に、ウラルは息をのんだ。

「見ての通り、二枚組みになってる。『豊穰』と『逆鱗』の絵だ」
ウラルはうなずいた。ここまで感情をあらわにした絵を見るのは初めてだった。

火神は英雄の誕生を祝う『希望』と凄惨たる戦場で雄牛にまたがった火神が剣を高々と掲げている『狂気』が組になっている。水神は旱魃の村に雨をよぶ『慈悲』と氷に閉ざされた中で水神が天秤を手にしている『絶望』。天秤には一輪の花と剣が乗せられ、剣のほうの下にさがっていた。どの絵もただ無表情に目を閉じている像はない迫力がある。

ウラルがもつとも目を引いたのは風神の『祝福』と『憎悪』だった。『祝福』の絵では夫婦の結婚を心から喜ぶ参列者に、ひとりだけ場にそぐわない喪服の女性がまじっている。それが風神だった。母性にあふれた満面の笑みを浮かべている。『憎悪』は戦乱かなにかで村人の全てが倒れた村を背景に、頭蓋骨を手に取って見つめている風神の絵。『祝福』とは違い、あまりにも喪服が場にあっていた。

「なぜこの風神が『憎悪』の象徴なのか、わかるか？」

「答えは知ってる？」

「一応な」

『憎悪』の風神の表情は、憎しみというよりむしろ深い悲しみのようだ。その顔になにかつけたすとしたら、怒りにみちてらんらん

と輝く目よりも、涙だろつ。

「わからない」

「説明書きを読んでみよう」

ジンは絵の下に張られた貼り紙を指した。字の読めないウラルにかわって読みあげてくれる。

「『祝福の風神』と対になる『憎悪の風神』。やはり病で死に絶えた村に、喪服の風神が訪れている。象徴が『憎悪』であるにもかかわらず、風神の表情は、それでない。一説では、風と死の象徴である風神自身がおこした病による死に、風神がなげき悲しむ姿だといわれている。つまりこの『憎悪』という感情は外界にむけられたものではなく、自らに向けられたものだと思われる。だそうだ」

あくまで一説みたいだけだな、とジンは最後につけたした。

「絵を見るのが趣味なの？」

「まさか。ただ信心深いだけだ」

あまりにもおごそかに言うので、思わずウラルは吹きだした。ジンもにやりとする。階段の前に立った聖職者が眉をひそめているのが見えた。

無表情にもどつた聖職者の横を通り、三人は外へ出た。また喧騒につつまれてげんなりとするアラール八に同情しながら、ウラルはどこかへ歩いていくジンの後を追った。

ジンは装飾品を売る露天で足を止めている。何を買ったろう、とウラルが様子を見てみると、ジンは一本のアサミイを手を取った。どうやら、さつき奉納したアサミイのかわりを買ったらしい。

「これをくれ」

ジンが店主に示したアサミイは小さな真鍮製のものだった。チュールという花の彫刻が彫られている。八枚花卉の金百合ともいわれている、伝説上の花だ。小さな短剣はジンの大きな手の中でよけいに小さく見えた。

「ペンダントもいかがですか？ このアサミイと同じ銘柄のものです。奥様にお似合いですよ」

奥様、という言葉にウラルは赤くなつた。ジンは優しいような意地の悪いような笑みをうかべ、それもくれ、と店主に頼んだ。

「ちよつと、ジン」

「旦那様からの心のこもつた贈り物、受け取るのは騎士の妻になつた女性の礼儀のようなものですよ、奥様」

うぶな新妻をさとすような口調で店主は言い、気前よく二割引の価格をジンに示した。

「本当はバラでもつけたいところだけだな」

「残念ながらバラは売っていませんね。むかひの花屋へどうぞ。わたくしの妹が開いている店でして」

ジンは豪快に笑つてそれ以上は値切らずに金を払い、その場でウラルにペンダントを渡した。小さな真鍮の円の中に、ジンのアサミイに刻まれたチュユルと同じ彫刻が刻まれていた。店主がにやにやしながらウラルを見ている。ウラルが困つてアラール八を見ると、アラール八は顔色の悪いままうっすらとほほえんでみせた。もらつておけ、とその口もとが言っている。

「いいの？　こんなに高いもの」

「俺がつけるわけにもいかないだろ？」

ウラルはペンダントを受け取り、首にかけた。

「ありがとう」

すっかり夫婦仲向上の仲立ちをしたと思ひこんでいるらしい店主に見送られ、三人は店を後にした。

「城へ行こう。めつたに來れないんだから、今のうちに観光しておくんだぞ」

ジンはわざわざ夫を装つた口調で言い、笑う。それからふつと真顔になつて城の方向を見た。城の城壁でリーグ国の紋章である天秤と二本の剣をくみあわせた図柄の旗がはためている。それぞれ水神と火神の象徴だ。天秤は公平、剣は正義をあらわす。

今、一番、リーグ国に欠けているものなのかもしれない。なかった。

第二章 3 「父ふたり」 上

王都からすこし北にいった場所にあるカクオス村で、サイフォス率いる ナヴァイオラ、マライ率いる ジュルコンラ と新たに合流してきたリゼの アスコウラ に合流した。

国境の要塞 ゴウランラ をめざす七百五十の人間と四百頭近い馬、十五羽のムールの大行進である。こんな軍隊をリーグ軍が見のがしておくはずはない。一度止められ、検問を受けた。ジンとイズンが「自分たちは義勇兵で、北方の国境へ加勢に行く」と説得し、イズンの文書を見せ、二日かけて振りきったところだ。この国では騎士階級か貴族階級以上の者でないと読み書きができないのが普通だから、責任者を相手が出してくるまで身動きがとれなかったのだ。

それを改めて考えてみると、書記官の息子であるイズンはともかくとして、ジンが字を読めることが不思議な気がしてくる。イズンから習ったのだろうか。ジンは戦士階級あたりなのだろうとウラルは勝手に思っていたのだが、もしかすると、かなり上階級の人なのかもしれない。

ヒュウイー、ヒュウイー、とトンビに似た鳴き声が聞こえた。上を見あげると、十羽のムールのうち三羽がほかのムールより低い高度で旋回している。

「止まれ」

ジンの指示が伝えられ、全体が止まった。

高度を上げたムールの背で、リゼが手を大きく振って何かの形を示している。

「前方、丘の向こうにて交戦あり。リーグ軍とコーリラ軍の模様。リーグ優勢」

ジンが呟く。どうやらリゼの動作は手旗信号のようだ。

「ウラル。道の端によける。つられてフォルフェスを走らせるなよ。」

ここにどまつて、サイフォスの指示に従うんだ」

ジンは小声で指示し、後ろに続く全軍に叫んだ。

「この丘の向こうでリーグ軍とコーリラ軍の戦があったらしい。リーグ側に加勢する。騎兵二百五十、俺に続け。歩兵、戦車の指揮はサイフォスにゆだねる。行くぞ！」

地面が鳴った。地響きがフォルフェスの足、体を伝って、ウラルの体を揺らす。

ウラルはあわてて手綱をしぼった。それでも続こうとするフォルフェスの頭絡をアラール八が押さえる。道の端によけたウラルの右横を、地面を鳴らしながら茶色い風が吹きぬけた。砂ぼこりで咳がとまらなくなる。やっと土煙がおさまってウラルが顔をあげると、すでに騎兵隊は丘を半分ほど登っていた。

「続くぞ。歩兵隊、前へ」

歩兵がマライの指揮で槍の穂先を前に並べ、行進していく。

「前は危ない。ここで待っていよう」

アラール八の低い声に、ウラルはうなずいた。

騎兵とは比べるまでもないが、かなり迅速に歩兵が移動する。ウラルとアラール八は荷物や兵糧を持つ役割の部隊とゆっくり丘をあがっていった。

歩兵は丘の上で陣を組み、いつでも動くことができる構えを見せられている。兵糧隊の指揮をつとめているサイフォスが、腕で「止まれ」と指示をした。どうん、と初めて聞く音が響く。何の音だろう、とウラルは眉をひそめた。もう一度、音がする。

「嫌なおいだ」

アラール八が呟いた。ウラルの鼻にも、心地いいとは言いがたいにおいが届いていた。

「ここで待機。様子を見てくる」

サイフォスは短く告げ、丘の頂上近くまで馬を駆けさせていった。

サイフォスが歩兵隊の陣に到着する前に、丘の向こう側から騎影

が現れた。増えてゆく。サイフォスが兵糧隊に「来い」と指示をした。

ジンら騎馬隊には一人の負傷者も出ず、武装もほとんど汚れていなかった。もともとリーグ軍がかなり押しっていて、スヴェル軍をリーグ軍の後続隊と思いこんだコーリラ軍は一挙に敗走に移ったらしい。

「気づいたか、マライ」

マライは眉をひそめながら、けわしい目つきで敵の陣形を眺めている。

「コーリラ軍ではない」

「ああ。だが、正規のベンベル軍でもなさそうだ。どちらかといえば、コーリラの山賊に近い。妙だ」

ウラルは丘の向こう側に広がる平野を見おろした。ウラルもリーグ国の国旗くらいはわかる。敵の二倍近い数のリーグ軍が敗走する敵を追っていた。

「なんなんだ、あの動物」

兵士のひとりが、戦場から少し離れた岩場のほうを見つめながら呟いた。岩場のほうにひとかたまりのベンベル兵と追撃のリーグ兵が、豆粒のような大きさではあるが見えている。

ベンベルの一隊が岩場に追いつめられた、と思われたが、なんとその一隊はほとんど垂直に近い岩を馬の速さをたもったまま、ひよいひよいと這いのぼっていくのだ。見まちがいかとウラルは目をこすったが、どうやら本当に人間がすさまじい速さで岩をのぼっているらしい。兵士のひとりごとからして、どうやら得体のしれない動物が兵士を乗せて岩をよじのぼっているのだろう。リーグの騎兵は追撃を断念せざるをえない。

「あれが『火薬』ってやつか。煙ばかりじゃないか」

別の兵士が、隣に立っている戦友と話している。彼らが見ているほうをウラルも見ると、戦場の数箇所から煙があがっているのが見えた。

「火の薬つていうんだから、もつと派手なもんだとばかり思ってたぞ」

たしかに、煙があがるばかりで炎は見えない。兵たちのおしゃべりをマライが目で黙らせた。

リーグ国の国旗をかかげた三騎が丘を登ってくる。

「責任者はどなたか！」

三騎のうち最も高位であるらしい騎士が声をはりあげた。野牛のような角のついた兜をかぶり、甲冑には全身に豪華なエナメル加工の模様がほどこされている。そればかりか太陽の光の反射を防ぐために甲冑の上に着こんでいる袖なしのサーコートにまで自分の家の紋章であろう、けばけばしい刺繍がほどこされていた。どうやら、かなりの派手好きのようだ。

「義勇軍 スヴェル、総大将ジン・ヒュグルだ！」

様子を見ていたジンが騎士に答えた。騎士はまっすぐジンに向かっていく。

「リーグ国軍事大総督たるフェイス・ソウエイル様の揮下、左将軍に奉じられているダイオ・エタオクと申す」

ダイオと名乗った騎士はジンの前で馬を止め、兜をぬいだ。頬ひげをたくわえた口の大きな男。ジンより少し年上、おそらく三十台の後半から四十代前半だろう。いかにも現役といった感じの将軍だ。

ジンの顔が青ざめたように、ウラルには見えた。

「何の御用か」

「うむ。先ほどの動き、まことにあっぱれ。フェイス将軍がぜひお会いしたいと申している。勝利の宴にお招きするゆえ、来られたし」

なぜこの男はこんな話し方をするのだろう、とウラルは内心でため息をついた。意味はわからないでもないが、聞いているこちらの肩がこる。

「お招き、感謝する。行かせていただく。我らはリーグ国全土か

ら集まった義勇軍 スヴェル。北方で戦があつたと聞きおよび、加勢に来させていただいた。これは王都の役所書記官からの紹介状です」

一拍おいて、ジンが返答した。イズンの文書をダイオに渡す。ダイオはその場で広げ、一読した。大きくうなずく。

「この二名を案内として置いていく。兵は何人か」

「兵糧持ちも含め、人が七百五十、馬が四百」

「全員分の肉と酒を用意して、待っていますぞ」

二人の騎士を残し、ダイオは自軍に戻っていった。

ダイオの姿がほかの騎士にまぎれてから、ジンは深くため息をついていた。

*

「リーグ国軍事大総督フェイス將軍」の天幕で スヴェル 軍の全員は勝利を祝い、肉をむさぼっていた。ほとんどが農民出だ。家畜が死んだときくらいしか食べられない肉を腹いっぱい食べて、幸せそうだった。

ジン、サイフォス、マライ、リゼ、アラーハ、そしてウラルの六人はほかの兵たちとは布でしきられた一間で兵たちとは一ランク上の食事をあてがわれていた。ウラルがここにいいていいのか気になったが、「顔も知らん野郎どもと一緒にされるのは嫌だろ？」というわけで、同席することになった。

ウラルは久々に女物の服を着て、顔をぬぐい、髪も整えて、唇には紅を塗っていた。男ばかりの戦場の中で機動性を重視するため、ウラルも今までずっと男物の服ばかり着ていたのだ。リゼなどウラルを見て口笛を吹き、手を叩いてほめてくれた。右將軍マライも女性だが、こちらはまったく女気なしだ。普段と変わらない武装を身につけている。

ジンとアラーハ以外はみんなが浮かれていた。アラーハはいつも

と変わらないのだが、ジンはダイオと出会ってからずっと考え事をしていて、表情も硬い。顔色が悪く見えるのもウラルの気のせいではないだろう。

「ジン、具合でも悪いの？」

「いや。そういうわけじゃないんだ。気にしないでくれ」
「それなら、いいんだけど」

ジンはやはり、なにか深刻な考えごとをしているらしい。

ウラルの隣で勢いよくリンゴをかじる音がした。ジンやウラルの前でも食事するのを避けていたアラーハだが、さすがにここまで来ては食べざるをえないようだ。

「俺、アラーハが何か食ってるって、初めて見た」

「俺もだ」

リゼとサイフォスが好奇心をむき出しにしてアラーハをながめている。

「アラーハ、肉は食わないのか？」

アラーハがため息をつく。唇の端だけでわずかに苦笑いを浮かべていた。

「肉食主義者だ」

アラーハ自身が獣なのだから肉など食べられるはずがない。ウラルの前に置かれたシカの骨つき肉をアラーハが横目で見る。イッペルスにとってシカは親戚だ。アラーハを隣にしてシカ肉を食べるのも気が引けて、ウラルは手をつけないでいた。

「俺に気をつかうな」

ウラルの思いを読んだようにアラーハがささやく。

「人間は、そんな生き物だ。わかっている」

ウラルはうなずいて、心の中で謝りながらシカ肉にナイフを入れた。

布でしきられた天幕の一部、出入り口になっている布が持ちあがった。話し声が消え、全員がナイフを置く。昼間会ったダイオが入ってきた。その後から老将軍、そしてその後ろからもう一人が続く。

どうやら、最後に入ってきた人物が「リーグ国軍事大総督フェイス將軍」のようだ。

ダイオは長い袖のあるローブの上に、昼間の戦場で甲冑の上から着ていたけばけばしいサーコートを着ている。雄牛の柄が描かれた金の飾りボタンがついた剣帯をつけ、さすがにこれは控えめだが、エナメルの装飾がついたロング・ソードをはいている。フェイスと老將軍もダイオとほとんど服装はかわらないのだが、さすがに歳のせいなのか、ふたりとも品よく落ちついた色調だ。

立ちあがるうとする一同をフェイスは手で制した。

「この国を守るため、リーグ各地からはるばる来てくださったとはありがたい。わが軍の窮地を救っていただき、感謝している。私はリーグ国大將軍、悍馬（暴れ馬）將軍とあだ名する者もいるが、本名はフェイス・ソウエイルと申す。あなた方の名をお聞かせ願いたい」

ジンが伏せていた顔をあげる。フェイスの顔がこわばったように見えた。

「スカール地区から、はるばる兵を率いてやってきました。ジン・ヒュグルと申します。兵たちにまで酒と料理をいただき、ありがとうございます」

「いかなされました？ フェイス將軍。カフス將軍も、顔色が悪いですよ」

フェイスの顔色が変わったのを見て、ダイオが声をかけた。カフスと呼ばれた老將軍もたしかに顔色が悪い。

カフスは顔を伏せた。すっかり頭が白い。

「いえ、ジン殿のお顔が二十年前のフェイス様にあまりに似ていましたので、驚いただけです。ご案じなさいますな」

老人特有の穏やかな声だ。カフスが顔をあげる。柔らかな表情に戻っていた。

「それなら、構わないのですが」

ダイオが安心したような声を出した。

ウラルは隣のアラーハを見た。座りなおしたアラーハの膝が細かく揺れている。

「ご自愛ください。フェイス將軍が病に倒れられては、軍全体の士気が落ちましよう」

フェイス、カフス、ダイオの三將軍はそれぞれ同じ「笑い」という表情なのかと思うほど、まったく違う笑い方をした。フェイスは品のよい自嘲に近く、カフスは頬の筋肉をゆるめるだけの微笑、ダイオは熊のような野太い声をあげて、それぞれ笑う。好意的にとられたのか皮肉としてとられたのか、判断が難しかった。

「ジン殿、よろしければ、客將としてこの陣営にとどまっていただけないだろうか？ 陣形も何も、わが軍に勝るとも劣らない動きの良さ。共に戦っていただければありがたい」

「どうやらフェイスには好意的にとられたようだ。」

「ありがたいお言葉ですが、国境にまだ仲間がいます。彼らを迎えなければなりません。彼らを迎えた上で、フェイス將軍に加勢いたしましょう」

「なんの。場所さえ教えていただければ、わが軍よりムールを飛ばして出迎えさせよう」

ジンは迷っているようだった。カフスが駄目押しのようにうなずいてみせる。それで、ジンは肝を据えたようだ。

「では、ご好意に甘えさせていただきます」

フェイスが大きくうなずいた。

アラーハはフェイスから目を離さない。細かく膝が揺れている。ジンも貧乏ゆすりが癖だったが、どうやらアラーハもそうらしい。

「彼女がジン殿の妻ですか？」

自分のことを言われているのだと気づいて、ウラルは体を固くした。

「いえ、妻はいません。彼女は友人です」

「ウラルと申します」

「美しい方だ」

フェイスは懐かしむような声で言った。

今のウラルはおせじにも美しいとは言いがたい。戦場にまともな服を持ってきていかなかったせいでもあるが、顔は日に焼けて黒いし、疲れもぬぐうことはできなかった。リゼはほめてくれたが、半分はものめずらしさ、もう半分はおせじだろう。女らしくないのは承知していた。ウラルは黙って頭をさげる。

「死んだ妻を思い出す」

ウラルはびくりと顔をあげた。

「奥様は亡くなられているのですか」

確認するように問いかけたジンに、フェイスは淡々とした声で答える。

「五年前に、病でこの世を去った。一人息子も十の歳を迎えたころに行方知れずになってしまった。跡継ぎもない」

そうですか、とジンが静かすぎる声で追悼の意を示した。

アラーハの膝の揺れがとまった。

「アラーハ？」

ウラルはささやいたが、反応はない。アラーハはこぶしを爪が食いこむほど強くにぎりしめて、じっとフェイスをにらんでいる。

ジンの実の父親が、こんなところで現れたのだ。

第二章 3 「父ふたり」 下

丘の天幕から国境のすぐ近くにあるルダオ要塞へ、フェイス軍とスヴェル 軍は翌日中に移動した。夕方にはフェイスの使者にともなわれた ゴウランラ と エルディタラ も要塞に到着し、フェイスやダイオ、その部下数人やジンをはじめとした主要のメンバーでミーティングが開かれた。ゴウランラ は敵兵の天幕や陣形を調べあげており、奇襲をかけるなら早いほうがいいと、その夜のうちに襲撃をかけることが決まった。

ウラルが城壁から見守る中、遠くに、小さな火の手が上がった。はじめはひとつだったものが二つになり、三つになり、大きくふくれあがっていく。

ウラルの耳に、隣に立っているアラール八には聞こえない赤ん坊の泣き声が響いていた。半年前の、あの日に似た光景だった。

スヴェル 軍を見慣れていたし、ジンとフェイスのことが気になっっていたせいかな今まで忘れていたが、ウラルの村は自国の兵士、おそらくはこの軍の兵士に襲われ、焼きつくされたのだ。今になつて怖い。

「寒いかな？」

ウラルの震えに気づいたららしいアラール八が声をかけてきた。寒い、と答えると、アラール八は自分の上着をぬいでウラルの肩にかけた。アラール八が着ると股下までのコートの裾がウラルのくるぶしまでを覆う。

「アラール八は寒くない？」

ウラルが戦場へついでくるときは必ずアラール八が護衛についてくれていた。城壁のような護衛のいない場所でも変わらない。ウラルの安全はもちろん、心細いのを知ってジンが気をまわしてくれた

のだ。　　ウラルといるときは心なしかアラールも口数が多くなった。

「俺は獣だからな。多少の寒さは大丈夫だ。暑さのほうか、よほどつらい」

アラールはコートの下にも毛皮を着ていた。アラール自身の毛皮だ。いつの間にか夏毛のベストからふかふかした冬毛のジャケットにかわっている。

「ありがとう」

「人間が作ったものは好かん。気にせず、着てろ」

闇の中に煙があがっている。炎の煙に、土煙がまじった。スヴェル　軍、六百五十頭の馬蹄。暗い中で人馬のシルエツトがぼんやりと浮かびあがる。

フェイスが駐留する国境のシャスウエル要塞からの松明で、先頭の顔が見えるようになった。血まみれになった姿。血臭がウラルの鼻をつく。ウラルは体の芯が震えるような感覚を覚えた。

ジンは、襲撃者の、顔をしていた。

「ジン殿、お見事でした。あの軍師殿、よく考えつきましたな。敵陣を人よりも先に蜂に襲わせるとは。私などでは到底思いつかない戦略です」

皮肉がこめられたダイオの口調に、ジンは「恐れ入ります」と丁寧に会釈を返した。

本格的に敵の陣営を襲う前、ジンは毒蜂の巣をいくつも投げこんでいたらしい。軍医であり同時に奇策士であるネザの案だった。敵が動転したところを一気に攻めたという。そう、宴の中での会話でウラルは知った。

勝利を祝う宴のはずなのに、場が盛り上がり欠けていた。

「しかしジン殿。この戦、どう見ますか」

どんな時でも穏やかな口調をくずさない老将がジンに問いかけた。

「あっけなさすぎました。誘っているようにも感じましたが」

「やはり、そう思われるか。私もあの程度の敵に二千五百の兵をぶつけようとは思わない。何かあるな」

歴戦の武将として先輩風を吹かせるかのように、ダイオが声を大きくした。

「ダイオ卿はどう考えていらっしゃいますか？」

「畏があるなら、あまり動かないほうがよかるう。わざわざ誘っているのだから、こちらが動かない限り相手は手出しができないということだ。かといって、このまま放置しておくわけにもいかぬ」

ジンが下手にでたので、ダイオは気をよくしたようだ。まるで王都の物売りのように一気にまくしたて、酒をあおる。ずいぶんと酒が入っているようだ。

「フェイス將軍もそうお考えのようだ。あれほど激しく攻撃されては、しばらく相手も手出しができないでしょう。籠城ということになりそうですな」

カフスが両者をたてるように締めくくった。籠城ですか、とジンが呟く。

サイフォスやマライ、イズンは場に残って話を聞いているが、リゼや新しく合流してきたフギンはさっさと退散してしまっている。ウラルも彼らにならうことにした。

フギンは エルデイタラ の仲間と、楽しそうに団欒していた。

「ああ、ウラル。お頭たちの方はどうだ？」

「飽きちゃって。ろくに話も聞いてない」

フギンは笑い、腰を浮かせた。

「どこか行くの？」

「ああ、馬の様子を見に行くんだ。ステラが流れ矢にやられて。かすり傷だから、命に別状はないよ。一緒に行く？」

「うん、行きたい」

まわりの者が笑い声をあげた。このところウラルは「元気のいいお嬢さん」で通っている。男の服を着て馬を乗りまわし、戦場にまでついてくる男勝りの女。ほほえましく見守ってくれているらしい。

「ウラルが行くなら、俺も行きたいな」

「バカ野郎、汗くさすぎてウラルが嫌がるでしょ。ね、ウラル」

数は少ないが、エルディタラには女もいる。ウラルなどとは比べ物にならない男勝りな姉さまがただが、身近に女がいるのは嬉しいことだった。アスコウラ や ゴウランラ にはただの一人も女性がいない。たしかに「汗くさすぎて」肩がこるのだ。

「汗くさくつてもいいよ。みんなで行こう」

ウラルが思わず笑うと、フギンの仲間はそれぞれ顔を見あわせた。

「やっぱり女の子はこうでなくっちゃなあ。お前らみたいなやつは女のうちに入らん。やつぱり」

「失礼な野郎だね。この胸が目に入らないの？」

「胸だけだろ、お前は。他はどっからどう考えても男だ」

「先行ってるぞ。来るなら来いよ」

強引にフギンは話を打ち切り、すたすたと歩きはじめ。笑いながら様子を見ていたウラルはあわててフギンの後を追った。

「ごめんな、ウラル。あんなやつらで」

「どうして謝るの？ いいじゃない、楽しい人たちで」

「そうかあ？」

フギンはまんざらでもなさそうな顔をした。

「うん、下品だけど、いいやつらではあるよな」

確認するようにうなずき、フギン特有の人なつつこい少年のような笑みを浮かべた。

「そうそう。俺らっていいやつらだよなあ」

ひょいと後ろから男が顔をのぞかせた。

「この単細胞。盗賊にしては、って意味だ」

「盗賊じゃねえし。もと盗賊の エルディタラ だ！ イーイー！」

「フギンさんわかってるねえ！」

フギンは「バカ野郎！」と叫びながら、男の頭をはいた。きやらきやらと大声で笑うフギンらを見て、ほかの組織の者まで指をさして笑う。元をたどればほぼ全員が「ならず者」なのだ。堅苦しさや辛気臭さはみんなが苦手のようだった。

フギンの仲間 エルディタラ はフギンも含めた全員が「元」盗賊なのだった。今は性根を入れ替え、国のために戦っている。

大笑いしながら厩舎へ行くと、驚いたように数頭の馬が顔をあげた。急ごしらえであるという見た目はどうしようもないが、ちゃんと一頭につきひとつの馬房があてがわれている。四百頭の馬すべてにだから、贅沢の言いようがなかった。

手わけしてすべての馬に少しずつワラをくばり、ちゃんとボロ（糞）をしているか、水は十分にあるかを見てまわる。背や尻に包帯の巻かれた馬が何頭かいた。フギンの愛馬ステラも腰に包帯が巻かれている。

「大丈夫そうだな。ワラもよく食ってるし」

フギンは愛おしそうにステラの首をなでた。

「なあ、ウラル。お前、軍が憎くないのか？」

さりげないフギンの口調だったが、言葉の芯に緊張したものがあつた。

「わからない」

ウラルの村は軍に襲われ、焼きつくされたのだ。その軍と今、行動を共にしている。

「わからない、って。お前」

ウラルはうつむいた。わからない、としか答えようがないのだ。絶対に復讐してやる、とかそんな気持ちはないのだが、許す気には到底なれない。

「フギンはどうなの？ 軍のこと」

「うん。俺さ、スヴェル に入るまでは盗賊だったから。エル
デイタラはそのときの仲間なだけどさ。だからあんまり軍にい
い印象がないんだ。仲間もいっぱい殺されてるし。だからウラルは
どう思ってるのかなと思って」

そっか、とウラルは相槌を打って、顔をあげた。
「あれ？」

馬房はそれぞれ区切つてあるとはいえ骨組みだけで、壁はない。
ステラの背越しに点々と火が見えた。どうやらたき火のようだ。ジ
ンに追いちらされた敵がもどってきたらしい。

「あの連中、しょうこりもなく戻ってきたな」
がちやり、とフギンの腰で剣の金具が鳴った。また戦いになる。

「みんなに知らせなくていい？」

「知らせとこう。俺は見張りのところに行くから、ウラルは大将に
伝えて。大至急な」

「わかった」

ステラの隣でワラを食んでいたフォルフェスの首を軽く叩き、ウ
ラルは走りだした。息があがったが、止まらずにジンのいる客間ま
で走り抜けた。

「ジン、敵軍が城壁の外に」

戸を開けると同時にウラルは叫んだ。中にいたのはジンとカフス
の二人だけになっていた。

「ああ。さつき、見張りから伝令がきた。ダイオ卿が守備にあたっ
てくださったから、大丈夫だ」

落ちつきはらった様子でジンが答える。カフスは一瞬驚いたよ
うな顔をしたが、すぐ柔和な表情に戻り、笑った。

「元気のいいお嬢さんだ」

もと盗賊に言われるならともかく、カフスにまでそう言われるの
はさすがに恥ずかしい。ウラルは息をはずませながら真っ赤になっ
て頭をさげた。

「申しわけございません」

「謝る必要はないですよ。敵のことを教えてくださったのですから、むしろこちらが礼を言わなければならぬ立場。さ、お座りなさい。酒はいかがかな」

「お酒は飲めませんので、すみませんが」

ウラルはすすめられた椅子に座り、できる限りおしとやかに見えるよう姿勢を正した。カフスばかりかジンも笑う。

「では、お茶をお出ししましょう。それとも、お水のほうがいいですか？」

「お茶で」

ウラルは顔がほてるのを感じた。カフスはほほえみ、小姓にお茶を持ってくるよう言いつける。

「ジン殿、もう一杯、いかがかな？」

「ありがとうございます」

ジンはカフスが差し出した酒瓶をゴブレットで受け、一息に飲み干した。なぜか、そこにウラルが五つの年に徴兵され、戻ってこない父の姿が重なった。

「カフス將軍、おそれながら、ひとつお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「私に答えられることなら、なんなりと」

ウラルは個人的なことをここで言っているのか迷いながら、カフスとジンのふたりの目を見る。ジンが声を出さずにすっとうなずいて、言うんだ、とうながした。

「シヤスウェル地区リタ村出身の、モラン・レーラス、ナウト・レーラス、デインド・グンニルの三人をご存知ですか？」

モランはウラルの父、ナウトは兄。デインドはウラルの婚約者だ。三人とも、何年前前に徴兵されてから、一度も帰ってきていない。

「ええ。三人とも、廊下ですれ違った程度ですが、知っています。カフスの表情が曇った。嫌な予感がする。

「この要塞の警護にあたっていたようです。つい半年前までは、三人ともお元気でした。しかし、コーリラ国、いえ、ベンベル国との

戦が始まり、その初期の襲撃で、この要塞も攻撃を受けたそうです。そのときに亡くなった二百人の中に、三人も含まれていたと記憶しています。ご家族ですか？」

ウラルは顔を伏せ、はい、と小さく答えた。ご冥福を祈ります、とカフスが応じてくれる。

三人とも、戦死していた。ぐつとつむった目の裏に家族の姿が浮かんだ。

小姓がお茶を持ってきた。ウラルはカップを手で包み、口に近づける。わずかに煙のにおいが鼻の奥に香った。思わずカップを置き窓を探す。窓はすべてふさがれていた。矢や敵の侵入を防ぐためのだろう。

ジンとカフスは悠々と酒をくみかわしている。まるでここがカフスの個人的な家で、ジンがお招きにあずかっているかのようだ。

ウラルは口元を押さえた。血の臭気が鼻の奥に広がっていた。

「どうされましたか？ ご気分でも？」

カフスがウラルの様子に気づいたようだ。

「いえ、大丈夫です」

反射的に言ってしまったから、ありがとございます、とウラルはつけたした。黙ったままのジンの目がウラルを見ているのを感じる。

「カフス將軍、もうひとつ、おうかがいしてもよろしいでしょうか？」

ウラルの声に思わず力がこもった。ここで言わなければ、後悔する。

ジンの目が鋭い。ウラルが何を言おうとしているか、知っている目だ。

「私の村は軍に襲われて、焼きつくされました。私は村を追われ、村はずれの陶芸窯の中に逃げこんで一命をとりとめました。ここにいるジンとはそのときに出会い、助けてもらったんです。翌朝、ジンは隣村まで私を送ってくれようとしたのですが、その隣村も襲わ

れていて。隣村の人はもちろん、私の村から隣村に逃げた人も、みんな死んでしまいました」

ジンは黙っている。ウルルをいさめもせず、酒も飲まず、ただ口を閉ざして見守っている。

「私はジんに助けられたからよかったものの、もし誰もいなければ野垂れ死ぬしかなかったと思います。父も兄も婚約者も亡くなつたと今、お聞きしたばかりですし」

ウルルは軍を恨んでもいい立場にいる。

ウルルは姿勢を正し、カフスの目をしっかりと覗きこんだ。

「カフス將軍やフェイス將軍が、そんな軍の統率者とは、とても思えません。こんなに穏やかに笑ってらっしゃる方の部下様たちが、なぜ私の村を焼いたのですか？　なぜ私の大切な人たちを殺してまわつたのですか？」

顔の見えない相手なら恨みもしただろうが、ウルルは軍を知り、軍の中にいる人々と知り合った。軍の人間がみんな極悪非道の悪人だったら、ウルルも容赦なく軍を憎んだだろう。が、知りあってみれば、国を守るために全力をつくす人々だった。

「ウルルさん。私は兵を育て、まとめるのが役目です。そんな脱走兵を見逃しておいたのは、たしかに私の落ち度だ」

カフスの目から、柔らかな笑みが消えている。ただでさえ年端に勝てず深かった顔のシワがさらに深く刻まれ、はじめてカフスの表情が「いかめしい」とウルルには感じられた。

「僭越ながら」

やっとジンの口をはさんだ。

「ウルルが求めているのは謝罪の言葉ではありません、カフス卿」
ジンは声を荒げていない。静かな口調だ。しかしこの一言はウルルの心にもずっしりと響いた。フギン、マーム、イズン、みんなが旅立ち、ふたりだけになってしまったスカール地区の隠れ家で、マームと一緒に行くかジンと戦場へ向かうか聞かれたとき、「俺の意見で決めるな」と言つたあの口調とまったく同じだった。逃げるこ

とを決して許さない口調だ。

「ジン殿。ウルルさんも。あなたがたはふたりとも僭越などという言葉を使う必要はない、とても高貴な方々だ。誇りを持ち、自身と戦っておられる」

カフスの目が、柔和な老人のものではなくなっている。何百という兵の命をにぎる、將軍の目だ。

「士気が落ちているなどという一言では、とても片づけられないことです。私は兵たちに寝る場所と最低限の食事を与え、体と心を鍛えるすべてを教えてきた。しかし、人としての本能と煩惱に負け、二本足の獣になりさがった下郎、脱走兵が多くいるのです。コーリラ国の不穏な空気を感じ取って、国中の兵がみんな浮き足だっています」

カフスの口調が吐き捨てるようなものになった。声に怒りがこもる。

「そして、コーリラ国は本当に滅びてしまった。今は戦時中です。むやみに兵の数を減らすまいと私たちも黙認してきましたが、やはりそれが間違이었다。いえ、軍さえよければ農民など二の次にする、それこそが私たちの落ち度であり、煩惱だったのでしょう」

カフスは一息に言い切って、ぐっと口を結んだ。

さつきはフギンに「軍が憎くないか」と聞かれ、「わからない」と答えたが、今なら、はっきりと答えが出せる。

ウルルの村を焼きつくし、略奪の限りをつくしたのは、もちろん許されないことだ。だが、軍に所属するすべての兵士がそんな略奪兵なわけではない。実際、ウルルの父も兄も婚約者も、今はこの世にないとはいえ、去年までは軍の一部を形作るひとりだったのだ。略奪など絶対にしないことはウルルがよく知っている。規律を守り、国を守るために命をかけている兵まで憎んでしまうのは、筋違いだ。

カフスは両眼にこめられた覇気を保ったまま、言葉が消えた虚空をにらんでいる。その覇気がふいに、ふっと消えた。

「申し訳ありません、ウラルさん。これは、言い訳にしかすぎない。本来は私たち将軍が腹を切って謝罪しなくてはならないものですが」

カフスが深々と頭を下げる。ウラルは何を言っているのかわからず黙ったまま座っていた。居心地の悪い沈黙が訪れる。

「私の酒ではありませんが、もう一杯、いかがですか」

ジンが酒瓶を持ちあげた。カフスは何も言わずに杯をとり、ジンがついだ酒を一息に飲みほした。

第二章 4 「別れの言葉」 上

ゲート前で スヴェル 軍は整列していた。カフスが「フェイス将軍が籠城の決定をくだされました」とつげ、続いてジンが「義勇軍 スヴェル の一時解散、半数は ゴウランラ の要塞で待機」とよくとおる声で発表した。

フェイスとジンが向かいあう。ジンは片手を胸にあて、ていねいに礼をした。

「何かあったときは、以前私の仲間を呼びに行ってくださいました要塞へ使いの者をよこしてください。すぐに馳せ参じます」

「来てくださって、助かった。ジン殿と スヴェル 義勇軍の武勇、よく覚えておこう」

フェイスはわずかに笑みを浮かべ、自戒するかのようになぞそれを消しさった。カフスに何かの合図をする。カフスはうなずき、進みでた。

「ジン殿、お受け取りください。わずかばかりですが」

「ありがとうございます」

さしだされた袋をジンは受け取り、そのままイズンに渡した。イズンが袋を開くと、ぎっしりと金貨がつまっている。その場でイズンは金貨の枚数を数え、それぞれの組織の責任者に、均等に配った。

「フェイス将軍、火神のご加護を」

「ジン殿にも」

ふたりは固く握手をかわした。

「それでは、失礼します」

ジンはスヴェル全軍に向かって「騎乗」と短く指示をした。騎兵が馬にまたがる。城門が開いた。

「アスコウラ エルディタラ はそれぞれの頭目が率いてくれ。

ゴウランラ ナヴァイオラ ジュルコンラ は スヴェル

が率いる」

ジンの前に集まっていたそれぞれの頭目が軽く一礼した。アスコウラ と エルディタラ の責任者が進みでて、短く別れの言葉を口にする。この二つの組織とはここで別れることになっていた。

「元気でねえー！」

エルディタラ の女たちがウラルに手を振っていた。

「みんなも、元気で！」

ウラルも手を振りかえす。エルディタラ 先頭の一騎が駆けはじめた。全頭がひとつの獣になったかのように駆けてゆく。エルディタラ は女も含めた全員が騎兵だった。

ジンの号令で、ほかの三組織も動きだす。空には三羽のムールが舞っていた。だが、騎手はひとりだ。リゼが三羽のムールを長い口ープでつなぎ、引き連れているだけである。

「ウラル」

ジンがふり返っていた。ウラルはフォルフェスの腹を軽く圧迫し、ジンに追いついた。

「フェイス・ソウエル將軍が俺の、実の父親だ。気づいていたかもしれないが」

「騎士様だったんだ」

小声で言うジンに、やはりウラルは小声で返す。

「昔のことだ。今は、俺は死んだことになってる。父上も気づいていなかったよ。もしかしたら、気づかなかったふりをしていたのかもしれない」

ジンが遠くを見る目つきをした。元コーリラ国との国境、ヴァーノン山脈を後ろにしているため、目の前に広がるのはほとんど地面の起伏がない平野だ。それがとぎれると、豊かで広大な森に入る。

ゴウランラ の要塞は国境よりやや南、森の中にあるのだとカクオス村へ向かっているとき、ジンは言っていた。

「あの老将、カフス卿は気づいていたと思うけどな」

ジンを初めて顔をあわせたとき、反応があつたのはフェイスだけ

ではなかった。カフスも顔が青ざめていた。

「俺が小さかったころ、よく世話になった人なんだ。將軍だったとは知らなかった」

アラーハがフェイスを睨んでいたことをジンは知っているのだから、とウラルは思った。

「ジンは、ジン・ヒュグルって名前なんだよね？ どうしてお父上と名字が違うの？」

「俺はアラーハの養子だ。アラーハには姓がない。獣だからな。姓名をつけて名乗るときは、ヒュグル森の守護者だからアラーハ・ヒュグルと名乗る。俺はその姓をもらったというわけさ」

馬の歩く邪魔にならないよう、ひとりだけずいぶんと前を歩いていたアラーハの片耳が器用に動いた。くるりとジンの方を向く。聞こえているのだ。

ジンがふうつと空を見上げ、息をついた。

「このまま何事もなくおさまってくれればいいんだが」

*

馬たちが白い息を吐いている。人のほうはいくつかの組になり、たき火を燃やして暖をとっていた。冬至が近いのだ。

ケーン！ とどこかで警戒のさえずりがした。馬も顔をあげ、いらないたり蹴りあったりと急に落ちつかなくなった。

「何だ。見てみる！」

近くにいた兵士のひとりが空を指した。ムールのシルエットが近づいてくる。

「急報、急報！」

ムールの騎手が声を張りあげた。すさまじい突風が吹きつける。たき火の炎がぐおおと大きくゆらめき、ふうつといくつかが消えた。

風をまとったムールと騎手が、消えたたき火の上に着地する。

騎手は若い男だ。鉄の胸当てに皮の全身よろいをつけていた。胸に、かつと目を見開いて後ろ足で立ち上がり、前足で前にいる何かを蹴りつける雄々しい馬、異名を悍馬將軍というフェイスの紋章がその胸に描かれている。顔はススにまみれ、疲労の色が濃い。

ムールは茶色と白のまだら模様をススで黒く染め、肩で息をしていた。「火の薬」の攻撃を受けたのか翼のところどころがこげ、褐色の瞳はどんよりと曇っている。自分の体をかばうように身を縮め、もう飛ぶのは嫌だといわんばかりにくちばしを羽の間につっこんだ。

「ジン殿はおられますか！」

戦意を喪失したムールと違い、騎手の目はららんと光り輝いていた。冷えたからであろう蒼白だった顔が、怒りのためか興奮のためか、みるみるうちに紅潮してくる。

ジンと同じ年くらいの男だ。いや、疲労の色が濃く、汚れた身なりをしているせいで老けて見えるのかもしれない。馬のような面長の顔をした騎士だ。

「俺がジンだ。何があった」

ジンがムールの前に駆けていき、声を張りあげた。

「フェイス將軍よりお伝えします」

「聞こう」

ジンが応答するが、騎手はすぐに答えを返さない。何かをこらえるように空をあおむいた。

「どうした。早く言え」

ウラルは胸騒ぎをおぼえた。ジンも同じような心地を味わっているのだろう。ジンが人をせかすところを見るなど、初めてだ。普段ならどれだけ沈黙が続いても、静かに答えを待っているのに。

真っ暗な空からジンに目を戻した伝令の目は、真っ赤に充血していた。

「報告します。フェイス軍、三千五百」

さっきまでの朗々とした口調が、低くかすれたような聞き取りに

くい声に変わる。

「全滅、しました」

ジンの顔色が変わった。

「ジン殿が去られて、すぐです。ゴーランが六千騎も。城壁をよじ登られて、戦う余裕も逃げる暇もなく」

すすり泣きながら、それをこらえるようにジンをまっすぐに見つめて、騎手が報告する。

「ゴーラン。ベンベル国の動物か。巨大なトカゲで、カモシカでも歩けない道を、人を乗せて走ることができるという」

フェイス軍にはじめて出会い、加勢した日のことをウルルは思い出した。敗走するベンベル騎兵とそれを追うリーグ騎兵。ベンベル軍の一隊は岩をよじのぼってリーグ軍の追撃をかわした。ベンベル騎兵らはこの「ゴーラン」に乗っていたのだ。

ジンは息を吸い、一字一句ゆっくりとわかりやすい発音で、確認するように、使者に問いかける。

「フェイス將軍は」

使者はぼろぼろになった顔で、なんとか悲しみの表情をつくる。

「討たれたようです。カフス將軍とダイオ將軍も行方がわかりません」

ジンは全身が震えるほど強く、こぶしを握りしめた。

ウルルの目にフェイスの姿が浮かんだ。今朝、ジンと握手をかわしていたではないか。かすかな微笑を浮かべ、それをすぐに消し去った厳格な將軍。

ジンの実の父親が、もうこの世にいない。

「ご苦労だった。少し休め。こいつが傷の治療をする。ネザ、任せた」

必死で冷静さを保とうとしているジンが、あわれだった。ジンの様子にとまどったような顔をしながらネザがうなずく。

「いいえ。わたくしはこのまま王都へ向かいます」

「その体では無理だ。第一、ムールも休みたがっている」

「では、ムールを一羽、お貸してください！」

ネザが静止するが、涙をまき散らしながら騎手も怒鳴りかえす。

「治療の後だ」

「ネザ、いい」

なおも食い下がる軍医をジンがさえぎった。

「リゼ。ムールを一羽、貸してやれ」

野次馬の中のリゼが大きく目を見開きながらうなずいた。だが、ぼかんとした様子で動く気配がない。

ジンが視線を使者に戻した。

「お前の名を聞こう」

「名乗り遅れました。シガルと申します。この報せを届けたら、ジン殿の命令に従うようにとフェイス將軍に命令されました。王都へ向かうよう、わたくしに命じてください」

「わかった」

ずっとジンの表情が引き締まった。

「お前の主人の息子として、お前に命じる。リーグ国王にとりつき、援軍を連れて戻ってくるように。父上の仇は、俺が取る」

「火神の御名にかけて、必ず」

シガルはもう一度うやうやしく頭をさげ、若旦那さま、と続ける。その頬を涙がつつたっていた。

野次馬がざわざわと視線をかわしあう。困惑の視線だ。

「何をしている、リゼ！」

ジンの声に鞭打たれ、あわててリゼが走り出す。三羽いるムールのうちの一羽にすぐさまその場で鞍をつけ、引き綱をほどいて連れてきた。連れてこられたのは白黒ブチの、前に一度ウラルが乗ったことのあるムール。ムールは興味津々でシガルのムールをつついたが、シガルのムールは疲れきっているようで、相手にしない。

「この借りは必ず、お返しします」

シガルがムールに騎乗する。

舌鼓。ムールが大きく羽ばたいた。まっすぐ南の空にむかって飛

んでゆく。ムールはほかの鳥とちがって夜目がきくのだ。

「リゼ。アスコウラ と エルディタラ に帰還命令を伝えてくれ。大至急だ」

リゼが「了解」と短く返事をした。

ジンはリゼの右手をとる。こぶしを作らせ、それをぐっと自分の手で包みこむように握った。

「頼んだ」

低く言って、ジンはどこかへ立ち去ろうとする。

「頭目！」

リゼの呼びかけに、ジンは足を止めた。

「頭目、あなた、何者だったんです？ さっき、伝令が『若旦那』って……」

「言葉のままの意味だ」

リゼの問いかけは、その場の全員がジンに尋ねたいことだっただろう。だが、ジンはそれ以上、答えようとしなかった。森に分け入り、どこかへ姿をくらましてしまう。

野次馬もざわめきながら、それぞれ散っていった。今のジンを追いかける勇気のある者は、誰もいない。

フギンとサイフォスが白い息のかたまりをふたり同時に吐き出し、ムールの治療をはじめた。ムールをつなぎ、翼を広げさせて全身の傷を見る。

「ウラル、水、持ってきてくれないか？ リゼのムールの前にバケツがあるだろ。あれでいい」

ウラルはうなずいて、リゼのムールがつながれている場所へ向かった。リゼは早くもムールに鞍をつけ終わっている。さっと飛び乗った。

「リゼ、このバケツ、借りるね。あのムールに」

リゼは座りを整えながら、ウラルを見た。

「ウラル、さっきの大将の言葉の意味、わかる？」

「言葉のままの意味よ」

フェイスは最後に自分の息子を息子と呼ばなかったことを後悔しながら、最期のときに、シガルを伝令として飛ばしたのかもしれない。シガルに、「ジンは自分の息子だから、フェイス軍全滅の報を伝えたら、ジンの命令に従うように」と言っ

「ウラルは答えを知ってるんだな？」

ジンがフェイスの息子だったことは、アラールとジン以外の誰も知らない。それなのに、なぜウラルには知らされたのだろう。

「頭目が、フェイス大將軍の息子、か。そういう意味でいいんだね？」

ウラルはうなずいたが、うつむいて手を動かしていたリゼがそれを確認したかはわからない。リゼは手早く鎧のベルトをとめ、腰を命綱で固定した。

「行ってくる。エルディタラとアスコウラに召集をかけて、すぐに戻ってくるよ」

「気をつけてね」

「わかってる」

リゼは白い歯を見せ、口元だけで笑う。

「元気でな」

不安げに喉を鳴らすムールのくちばしをウラルは軽くなでて、置いてあった大きなバケツを持ちあげた。水は半分ほどに減っていたが、とてつもなく重い。

後ろで羽音が聞こえた。すさまじい突風がウラルに吹きつける。

リゼが暗い空に舞いあがっていた。

第二章 4 「別れの言葉」 下

遅い夕食をとると、見張りの者を残してほかの者はさつさと寝てしまふ。フェイス軍を全滅させた敵がいつ南下してくるかかわかったものではないのだ。

ウラルはぼんやりと火をながめていた。すっかり寝ておいたほうがいいに決まっているのだが、これだけたくさんのことが一度に起こった日なのだ。眠れたものではない。

ウラルは足元のナタ草をつんだ。冬でもこの花だけは咲いている。時間帯によって一日八度、花の色を変える植物である。今は赤みの強い紫色の花だ。日付が変わりかけていた。

「眠れないのか？」

なんの前ぶれもなく、後ろから話しかけられた。驚いてウラルが振りかえると、森の奥へ消えたきり夕食の席にも顔を出していないかったジンが立っている。

「使者のムールはどうだ」

「だいぶ疲れてるみたいだけど、大丈夫そう。コフムと話して落ちついたみたい」

「鳥の言葉がわかるような言いかただな」

コフムはリゼが連れていた三羽のムール、伝令シガルが乗っていたムールとリゼが乗っていたムールのどちらでもない、最後の一羽の名前だった。

わかるような気がするの、とウラルはたき火の炎をながめながらぼんやり言った。燃えつきた薪が崩れて、軽い音をたてる。

ジンは置いてあった薪の山から二本を火に放りこみ、一本を椅子がわりにして座った。ふところから二本、小瓶をとりだす。

「飲むか？」

「お酒？」

「こんな日は、飲みたくなる」

栓が開けられた瓶をウラルは手に取った。夏祭りでマライとネザに飲まされた酒が、一瞬頭をよぎった。

ウラルは酒瓶の栓を開けず、そのまま地面に置いた。ジンはひとりで、ゆっくりと酒をあおっている。

「お父様に、風神のご加護を」

「ああ。ありがとう」

ジンはまったく顔を赤くしていない。酔っていないようだ。

「戦うの？」

「弔い合戦になるな」

ジンがふうつと息を吐いた。ジンの膝がかくかくと絶え間なく揺れている。ジンの癖の、貧乏ゆすり。

「六千の、軍勢か」

「スヴェルは何人なの？」

「全員そろって千二百だ。そのうち三百三十がない。アスコウ

ラとエルディタラだ。間にあうかどうか」

敵は六千、見方は七百。十倍近い敵である。

「勝ち目がないってこと？」

「地の利はこちらにある。ネザの罾がゴウランラを中心に、そこからじゅうに仕掛けられているからな。リーグ国軍本隊が到着するまで時間を稼げれば、勝機はある」

地の利があるとはいえ、本当に十倍近い敵に勝てる見込みはあるのだろうか。ジンは強がりを行っていると思えなかったが、ウラルはゆっくりとうなずいた。

「いくら勝機があるといっても、かなりの人数が死ぬだろう。お前を守りきれない」

ジンの目は、鋭く光っている。次に言われることが、言われなくてもウラルにわかった。

ウラルは顔をあげて、次の言葉を待った。

「逃げる、ウラル。これ以上、お前を連れて行くことはできない。アラーハの指示に従って、できるだけ安全な場所へ逃げる」

「呼ばれて来てみたら、そういうことか」

ジンの声よりもさらに低い声加わった。

「俺は、逃げる気はないぞ。ジン」

真つ暗な木陰に大柄な影がある。その目がたき火の光を反射して光っていた。アラーハの目は闇夜に光るのだ。獣の眼をしているから。

「私も行く」

「はつきり言つて、足手まといだ」

ウラルも声をあげたが、ジンの答えは冷たかった。

ジンが顔をあげる。その目は、力強い。死地におもむく総大将の目。七百人の命を背負った目。

「ウラルは馬に乗れる。方向さえ教えてやれば、ひとりでも逃げられるはずだ。俺の護衛は必要ない」

「いや、一緒に行つてくれ」

ジンが声を低める。

「森の守護者である以上、ここでは死ねないだろう、アラーハ」

アラーハが人ではない、人に化ける力を持った獣であるということとは、ここにいる三人以外は知らないことなのだ。

「どうということ？」

「森の守護者が、守護者の任を降りる前に森以外の場所で死ぬと、森が滅びる」

ウラルの問いかけに、アラーハがぼそりと答えた。

「俺の何代も前の守護者から、ずっと言い伝えられていることだ」

「俺の戦いに、親父の森の命運をかけられない」

フェイスは「父上」で、アラーハは「親父」か。ふたりきりの時はどうだったか知らないが、ジンがそう呼ぶところは初めて聞いた。

「俺は、人間よりも脚が速い。力もある。そうそう簡単には殺され

ないぞ。実際、何度も戦場をくぐり抜けてきた」

アラーハの語尾が荒くなった。いつも静かで感情のほとんどこもらない表情と声をしているアラーハが、今は目を鋭くして声を荒げている。

「いくらイツペルスの脚力と腕力があるといえど、今回はかなり分が悪い」

「分の悪い戦場なら、今までに何度もあつたはずだ」

「だが、騒ぎに乗じて退却くらいはできる戦況だった。今回は違う」

「違いがわからん！」

ジンの声は、やはり静かだ。アラーハが珍しく激昂しているというのに。

「勝算がないわけじゃない。だが、人をかばって戦うだけの余裕がないんだ」

アラーハが黙った。しばらくの沈黙の後、ゆっくりと長い息を吐いて、腰をおろす。

「逃げてくれ。あとで合流できる。そこに何人残っているかはわからんが。俺はすくなくとも総大将だから最後まで死ぬことはできない。一番狙われるのも、俺だから」

ジンの声は淡々とすらしていた。

「アラーハ、スヴェルの全員を起こしてくれないか。みんなで見送りたい」

座ったばかりのアラーハが、またゆっくりと立ちあがった。

「かならず戻ってくるよ、約束できるか」

「約束したい」

断言ではなく、希望だった。

アラーハがイズンらの眠っているテントのほうへ歩いていった。肩をおとし、顔をうなだれた様子は、アラーハにはにあわない。

ウラルはジンに向き直った。

「ジン、わがままかもしれないけど、私、一緒に行きたい」

いくら死ねない体だとはいえ、アラールはとてつもない力を秘めた戦闘員だ。だが、ウラルはウサギを解体するときの小刀くらいしか使ったことのない村娘。残ったところで、足手まとい以外の何者でもない。

ジンがうつすらと笑った。

「わがままなのは俺のほうだ。だが、連れて行くわけにはいかない。今回は勝つのが目的ではなく、できる限り引き伸ばして、援軍が来るのを待つ戦だ。泥沼になる」

「どうして、そこまでして戦うの？ お父上の仇打ちのために？」

「いいや。それもあるが、それだけで スヴェル 軍全部を巻きこむのはさすがに自分勝手すぎるな」

ジンはたき火にまきを放りこみ、位置を整えた。大きくなった炎がちらちらとジンの目に映っている。

「じゃあ、どうして？」

「ベンベル軍は国境から南下してくる。戦が起これば兵糧が必要だ。だが、六千もの兵士が毎日充分に食っていけるほどの食料を持っていくのはかなり難しい」

ジンはそこで言葉を切って、北の空をながめた。空は雲におおわれて星が見えない。

「つまり、食料は現地調達するというわけだ。何が起きるかはわかるだろう？ 俺は、なんとしてでもそれを防ぎたい」

村が襲われる。それも大々的に。ウラルの村が襲われたように。

「自分の命を、捨ててでも？」

「ああ。ここで尻尾を巻いて逃げたら、これまでの戦いの中で死んだ仲間に申し訳が立たない」

ジンが立ちあがる。闇の中に、六つの影が浮かびあがっていた。フギン。イズン。サイフォス。マライ。ネザ。そしてアラール。

伝令として飛び立ったりゼはここにいない。

「全員、そろいました」

「事情は話した」

参謀イズンの声に、アラール八の声が続く。

この中の誰が死んで、誰が生き残るのだろう。

一番小柄な影が手を伸ばしてきた。そのまま抱きすくめられる。

「すぐ迎えに行くからな。心配せずに、ちゃんと隠れてて」

フギンの声だった。その胸につけられた皮のよろいが肌に痛い。

皮よろいをつけているということは、いつでも戦闘が可能なように武装しているということだ。すぐに出発する予定なのだろう。

「ありがと、フギン。ちゃんと生きて帰ってきてよ」

「死んだら帰ってこれるかよ。当たり前」

フギンの笑顔が固い。ウラルはそっとフギンを抱きしめる力を強めた。フギンもぐっと抱擁を返してくる。

「今までありがとだな、ウラル」

眩いことから、そっとフギンがウラルの体を押し戻した。

後ろからくしゃっと髪をなでられる。振り向くとマライだった。額に軽くキスをしてくれる。

「いい人みつけて、たくさん子どもを育てるんだよ。元気で」

「もう、マライ。またすぐに会えるんだから」

「そうだったね」

頬に傷のある顔で笑う。覚悟を決めた目つきだ。

「さよならだな、ウラル」

すっとサイフォスが差し出してくる。握手を求める手つきだった。ウラルはその手を両手で包みこむ。

（俺は、たぶん死ぬ。今回の戦で）

いつか、マームとサイフォスの話を心ならずも盗み聞きしてしまったとき、サイフォスが言った台詞が耳によみがえった。

両手で包みこんだサイフォスの手は、とても冷たい。

「生きて帰ってきてね、サイフォス。マームさん、待ってるよ」

サイフォスはわずかにほえんだだけで答えなかった。ただ、「マーム」という名前を聞いたとき、ほんの少し、目が困ったように

ゆれていた。

イズンが紳士的な態度で、ネザが病人を診察するような手つきでそれぞれ握手を求めてきた。ウラルはふたりの手を取り、そつと頬にキスをした。イズンからは上等の絹のにおいが、ネザからは煎じ薬のにおいがした。

アラーハもウラルと同様、みんなから握手や抱擁を求められている。アラーハはとまどったようにみんなを見下ろし、されるがままになっていた。そろいもそろって体格のいいメンバーに囲まれても、アラーハの顔ははつきり見える。長身のジンですらアラーハの肩までしか背がないのだ。フギンなど、ほとんど子どものように見える。

「もう、行くのかい？」

マライの問いかけにジンがうなずいた。ウラルとアラーハの気が変わらないうちにも思ったのだろつ。おそらくはジン自身の決心もにぶらないうちに。

ウラルは愛馬フォルフェスに鞍をつけ、荷物をくりつけた。アラーハのほうは、荷造りなど必要ない。身ひとつどこへでも行ける。

「ウラル」

ジンがウラルの右手をにぎらせ、それをぐつと自分の両手で包みこんだ。手の皮のぶあつい、大きな手。

「この戦いが終わったら、お前の故郷の丘で会おう」

ウラルはうなずいた。そして、フォルフェスの腹に脚を入れた。

徒歩のアラーハが走り出す。すさまじい勢いだ。ウラルもフォルフェスに強く脚をいれる。

後ろは振り返らなかつた。だが、スヴェルのみんなの、とりわけジンとフギンの視線が強く背中につかっているのを感じた。その視線に強く押し出され、ウラルはフォルフェスを駆る。前を行くアラーハの足は、すさまじく速かつた。

ウラルは故郷の丘まで一息に走って、そこでみんなを待てばいい。

第二章 5 「戦場へ」 上

ひとしきり走ってからウラルとフォルフェス、アラーハはとぼとぼと歩くようになった。舗装路を行っては敵軍と鉢合わせする可能性もあるので、森を抜けていくことにする。アラーハがいるかぎり、森はとても安全な場所だ。

アラーハは彼本来の姿に戻っていた。ふかふかの冬毛につつまれた巨大な獣。フォルフェスに乗ったウラルの目線より、なおアラーハの顔のほうが高い位置にある。立派な枝角を木の枝にひっつかからないようにしながら、木の葉を落としたり、だが雪化粧をまといない殺風景な木々のあいだををゆっくりと歩いていった。

「ねえ、アラーハ」

アラーハがくるつとウラルに耳を向ける。

「聖域 って、何なの？」

ウラルの質問に、アラーハは耳をウラルに向けながらもそっぽを向いた。

「教えて。アラーハが守ってる場所っていうのはわかるけど」

その 聖域 とやらを守る必要がなければ、アラーハは意地でも残ったはずなのだ。アラーハは一度これと決めれば頑固だから、ジーンもしぶしぶ従っただろう。

だが、アラーハは退いた。息子が死ぬかもしれない場所から。

「創世記 を知っているか」

獣の姿のまま人間の声を出されるのには違和感があったが、ウラルはうなずいた。ウラルも風神に祈りをささげる身として、ひととおり話は聞いている。

「混沌とした闇があった、ではじまる世界創造の詩よね。闇は力に満ちていた。あるとき、なにかの拍子に光がはじけた。そのとたん、闇の中に満ちていた力が四つにわかれ、四大神となった」

「最初に火神がこの世を照らす太陽をおつくりになった。水神が海

をつくられ、天と地を隔てた。地神が大地をおつくりになつたが、いかにも殺風景なので、風神が命の種をその息吹にのせて飛ばされた」

獣たるアラーハが、人が書き記したはずの 創世記 を暗記しているのはなんとも奇妙な光景だったが、地神に仕える獣なのだから、別に不思議なことではないのだろう。

「地神が植物をおつくりになられ、火神がすべての動物に心臓をあたえて、自由に動けるようにした。水神は火神がつくられた動物のいくつかを海で生きられるようにした。四大神はすべての生き物を祝福したが、『幸福ばかりの日々は同時に不幸ばかりの日々なり』と、風神はすべての生き物に苦しみ、すなわち老いと病と死をあたえた」

ウラルが続ける。

「そうして世界は創られた」

アラーハが 創世記 最後の一文を吟じ、ここからだ、と語気を強くした。

「四大神はそれぞれ自分の属性にあつた決まりを作り、生き物たちに守らせた。地神の規則のひとつが 聖域 と 守護者 だ。 聖域 は地神の御力があつまる場所。印として、その花が咲きみだれる」

アラーハがウラルを振り返り、鼻先でウラルのペンダントを指した。

王都の神殿でジンにもらつた真鍮のペンダント。ペンダントトツプのコインに描かれているのはチュユルの花だ。八枚花弁の金百合

ウラルはそつとペンダントを手で包みこんだ。伝説上の花だとは知っていたが、そんな意味があつたとは。

「 聖域 がどんな場所か、その神秘が冒涇されたとき何が起ころか、語ることは禁じられている。最初に守護者という獣があらわれたそのときから 」

アラール八がふいに黙りこみ、立ち止まって空をあおいだ。

「どうしたの？」

「何か、音がする」

ウラルも空を見上げた。ウラルの耳には落ち葉の音しか聞こえないが、アラール八の鋭敏な耳には、確かなになにかが聞こえているらしい。

アラール八は周りをさぐるようにびくびくと耳を動かしていたが、しばらくして、ある方向に耳をぴんと向けた。

「羽音だ」

ハトやスズメ程度の羽音なら、アラール八は気にも留めないはずだった。

「ムール？」

「ああ。間違いない」

しばらくそのまましていると、ウラルの耳にもたしかにムールの羽音が聞こえてきた。

「誰かわかる？」

「いいや、さすがに羽音だけではわからない。俺は目が悪いから、ムールが飛んできたなら誰が乗っているか見てくれ」

木々の隙間から一羽のムールが猛スピードで飛んでくるのが見えた。全身が薄茶色のムールだ。

「カルロスだわ」

「リゼか！」

薄茶色のムール、カルロスに騎乗したりゼは北のをめざして猛スピードで飛んでいく。ウラルとアラール八には気づく様子もない。

「何かあったな」

アラール八が目を細めながらリゼの後を目で追った。

帰還命令を伝えたあとにしては速い。アスコウラ はともかくとして、エルディタラ は全員が騎兵だからかなり遠くまで行っているはずだった。途中で何かを見つけて帰ってきたのだ。

「何を見つけたと思う、ウラル」

「あんなに急いでるんだから、きつと敵軍よね」

アラーハが身をひるがえした。

「俺は、あいつを追う。お前は南へ馬を駆けさせる」

「だめ。ジンは丘で待ってるって言っただじゃない。戻ってくるなんて、口に出しては言っただけで、そういう雰囲気だった」

「事情が変わった。リゼがその証拠だ」

たしかに、事情は変わっている。リゼは急報を知らせに、文字通り飛んで帰ってきたのだ。

ジンが死ぬかもしれない。ジンが生きて帰ってくると言っただけから、アラーハは素直にウラルの護衛として南へ駆けてきたのだ。

「アラーハが行くなら、私も行く」

「お前はだめだ」

「アラーハだつて、だめじゃない！」

ウラルは両手でアラーハの角をつかんだ。一振りされれば間違いなく振りとはされるが、アラーハは黒目がちな瞳をいっばいに見開いただけだった。

「私も行く。連れて行って」

アラーハがそつとウラルの手を押し戻し、根負けしたように目をそらした。

「わかった。とばすぞ。ついてこれるか」

「がんばってみる」

アラーハがにやりと笑った。イツペルスの顔は人間に比べ、表情が乏しいが、間違いなくアラーハは笑っていた。

「遅れたら、置いていくぞ」

「絶対、遅れない」

アラーハが走り出す。ウラルもフォルフェスの馬腹を蹴った。

イツペルスは馬の心肺と鹿の脚力をあわせもつ獣だ。どんな獣よりも速く長く森を駆けられるように進化をとげた獣。冬枯れの木々の間をすりぬけ、倒木をとびこえて、北へ疾走する。

もう夜はとつくに明けている。すくなくともジンは夜明け前まで

に出発しているはずだ。国境の要塞　ゴウランラ　へ向かって。となれば、場所を知らないウラルはアラーハから引き離されてしまえば引き返すしかない。闇雲に危険な国境へ向かうのは、さすがに無謀だった。

全力疾走。

振り落とされそうになりながら、ウラルはなんとか体の均衡を保っていた。フォルフェスが倒木を飛びこえる。ぐらりと体がかたむいた。ものすごい悪路だ。手綱をとる余裕がないが、フォルフェスは勝手にアラーハの後について駆けていく。だが、アラーハを見失ったら走れない。

アラーハはアラーハで、空を行くりゼを見失わないようかなりの努力しているらしい。いちいち方角を確かめ、記憶を確かめながら走るよりはリゼを目印に突き進んでいったほうが効率がいい。

ウラルがバランスを崩したせいだろう。ぐつとスピードが落ちた。ウラルは途中でちぎりとった木の枝を鞭がわりに、速く走れ、がんばれ、とフォルフェスに指示をだす。

「アラーハ！」

声を張りあげる。ウラルは息もたえだえだった。実際に自分が走っているわけでもないのに、なぜこんなにも疲れるのだろう。フォルフェスの揺れに舌を噛んでしまいそうだ。

「その姿でいいの？　リゼに見つかる！」

「まさか俺とも思わんだろう。大丈夫だ！」

たしかに、疾駆する二頭の獣を空から見かけたところで、まさかアラーハとウラルだとは思わないはずだ。ごたごた考えている余裕はない。ウラルはものすごい勢いで顔にぶつかってきた針葉樹の枝をかるうじてはらいのけた。鋭い葉が腕に食いこむが、不思議と痛みは感じない。

「リゼが旋回している。近いぞ！」

ムールが旋回するときは、風の向きをたしかめ、自分が行きたい方向を探すためだ。だが、別の理由があるときもある。近くに

標的を探しているか、地面に降りられる場所を探しているか。どちらにせよ、ジンのいる場所は近い。

すうつとムールは地上へ降りていった。あの場所にジンがいる。ゴウランラらしい要塞はないから、どうやら到着する前に追いついたようだった。

ムールの降りた場所に、アラーハとウラルは突っこんだ。

木がまばらになり、どうやら休みをとっているらしい。スヴェルの一団が見えてくる。

「何だ！」

全員が剣を構えている。ウラルとアラーハはためらうことなく軍団の中に躍り出た。

「待て、攻撃するな！」

聞き覚えのありすぎる総大将の声。スヴェルの攻撃をさえぎった。

どうやら首尾よく。スヴェル。中枢の七人の中にふたりは飛びこんだらしい。青ざめた顔をして投げ槍をかまえるリゼと、彼の報告を受けていたらしいジン。長い槍を構えたフギン、剣を構えたマライ。弓を引き絞ったネザとサイフォスが仰天したように動きを止めた。

もう一度会えてよかった、と安堵した瞬間、ウラルの心臓がはねあがった。

アラーハがイッペルスの姿のままだったのだ。あまりに必死に走っていたので、アラーハも自分の姿が獣か人かなど気にしていなかったらしい。スヴェルはジンの命令のおかげで攻撃こそしなかったものの、アラーハに油断なく武器を向け、鋭い目つきで取り囲んでいる。

アラーハは静かで堂々とした、威厳さえ感じさせる目つきで全員を眺めていた。自嘲を思わせるかたちに唇の端が持ちあがる。

「放してやれ。大丈夫だ」

ジンがアラーハを取り囲むメンバーに指示を出した。スヴェル

が武器を構えたままじりじりと後退する。アラーハはゆっくりと足を踏み出し、そのまま森へ戻っていった。

ジンが馬上のウラルを見あげてくる。にらみつけるといったほうが正しいほどの激しい目つきだ。

「アラーハはどうした」

「すぐに、追いついてくるはず」

ウラルは普段よりゆっくりとしたしぐさでフォルフェスの背から降りた。まだ息があがっている。ひどいめまいがした。いや、もしかすると揺れに酔ったのかもしれない。体も傷だらけだ。針葉樹の葉や途中で振りはらってきた枝にひっかかれたものだろう。

「なぜ、戻ってきたんだ」

「飛んでくる、リゼを、見かけたから」

喉がからからに渴いて、声を出すのもつらいほどだ。

スヴェルのメンバーがウラルとジンを遠巻きに眺めていた。

ウラルに尋ねたいことはもちろんあるはずだ。さっきのイツペルスのこと、そして、今、質問されているがウラルとアラーハが戻ってきた理由。だが、尋ねるに尋ねられないらしい。

「状況が変わったのかと思って。敵が攻めてきたんでしよう？」

「次はお前の故郷の丘で会おうと言ったはずだ。戻ってくれ」

「でも！」

ウラルはジンの腕をつかんだ。

「心配だったの。わかるでしょう？」

アラーハが森の奥から息を切らしながら走ってきて スヴェルの輪に加わった。アラーハが息をきらすところなど、はじめて見た。

スヴェルのメンバーは困惑したようにそれぞれ視線をかわすだけだ。

「俺の意見も言っただはずだ」

「そうだよ。全部聞いた」

ジンの腕をつかんだ指に力をこめる。ジンが顔をしかめた。

「でも、このまま私とアラール八だけ逃げるなんて、できない。ジンは私とアラール八がいたら心配で戦えなくなるんでしょう？ でも、私とアラール八だって、みんなを残して逃げるなんて、不安でできないの」

ジンの表情が変わった。にらみつけるような苛烈なものがやわらぎ、迷いをおびたような目つきになる。

「ウルルはジンの腕を離した。両手で顔をおおう。」

ウルルの頭はまともにものを考えられる状態ではなかった。ひたすら頭に浮かぶのはみんなにもう一度会えた喜びと、また、ジンに突き放されて、とぼとぼと南への道を帰ることになるかもしれないことへの恐怖だった。

「ごめんなさい……」

声になっていたかすらわからない。おさえようとしたが、止まらなかった。鼻にきゅんとした痛みが走り、目頭が熱くなる。喉から嗚咽が漏れはじめた。

「ためらいがちに手がウルルの肩に置かれる。」

「わかった。わかったから、もう、泣くな」

ジンの声は優しくかった。さっきまでの鋭い目つきが嘘のようにやわらぎ、妙に穏やかで静かな光をたたえた目、覚悟を決めたような目をしていった。

「フォルフェスをねぎらってやれよ。リゼを追いかけて、ここまで突っ走ってきたんだろ？」

ウルルは泣きながらうなずいて、ふうふういつているフォルフェスの首をさすってやった。誰かがバケツを持ってくる。よほど喉が渴いていたらしく、フォルフェスは目の色を変えてバケツに顔をうつこんだ。

「ウルルの肩に手を置きながら、ジンがリゼを振り返る。」

「リゼ、報告の続きをしてくれ」

「ムールのくちばしをなでながらリゼがうなずいた。」

「報告します。その前に、地図を」

参謀イズンがさつとふところから地図を取り出し、地面に置いた。適当にひろってきた石を四隅に置いて重石にする。

「ありがと、イズン。ここが現在地。こっちがルダオ要塞で、ここがゴウランラです」

言いながらリゼは地図の上に三つの小石を置いた。

「俺はアスコウラを指してこっちの方向に飛ばうとしたんですが」

ルダオ要塞とゴウランラの間から南方向へ指を動かす。

「その途中、ベンベル軍の斥候らしい一団を見つけました」

ジンがぐつと眉にしわをよせた。

「本隊はまだ北にとどまっているでしょうが、斥候は俺たちより南に行っています。俺たちに気づかず、そのまま南下する気です。俺はアスコウラにだけ帰還命令を伝え、エルディタラにはアスコウラの伝令から伝えるように言って戻ってきました」

気づかずに通り過ぎられてしまえば、ジンのおもわくは水の泡だ。このまま見逃せばベンベル軍は食料を得るため、容赦なく村を襲いはじめるだろう。リーグの国軍が出てくる前に。

伝令シガルは今ごろどのあたりを飛んでいるのだろうか。早く戻ってきて、スヴェルを助けてほしい。

「リゼ、至急ベンベル軍本隊の正確な位置を確認してきてくれ。それからアスコウラには、ベンベル軍の斥候を捕らえるように伝えるんだ。生死は問わない」

「わかりました」

すぐさま、リゼは飛び去った。

第二章 5 「戦場へ」 下

*

スヴェル 軍はその日のうちに ゴウランラ に到着した。

ゴウランラ はそれ自体が天然の要塞たる小高い岩山の中腹にあった。東と南を岩壁に囲まれ、北と西も絶壁に面している。要塞に行くには、馬が二頭ならんでやっと通れる道が東と南に一箇所ずつあるだけだ。しかも、周囲の森にはネザの罨が山ほど張られている。少人数で大群を相手に籠城するには最適の要塞といえた。ただし、まったくの素人であるウラルの目にそう見えた、というだけではあるのだが。

「夜が勝負だ」

ジンは全員を集め、宣言した。

「盛大にかがり火をたけ。ベンベル軍が避けたくても避けて通れないように。ここ数晩が勝負だ」

城壁にはウラルが両手を広げたくらいの間隔をおき、ずらりと松明がならべられた。昼間のように明るい。遠くからでもくつきりと要塞が見えることだろう。

ウラルは城壁に立って北をながめていた。遠くの森の中に火がともっている場所がある。かなり広範囲だ。ベンベル軍の宿营地。

ウラルは身震いした。ここでウラル自身も死ぬかもしれない。

「ウラル、こっちに来いよ。寒いだろ？」

フギンがウラルの肩に手を置いた。

たしかに、ウラルの体は冷えきっていた。コートをすっかりと体に巻きつけてはいるが、それでもやはり寒い。

「ベンベル軍は、今夜は攻めてこないさ。こっちは見えているだろうけど、たぶん、斥候を待ってるんだらうな」

フギンの言葉からもさすがに軽口が消えている。

「今日は酒盛りだぞ。みんなコップ一杯ずつしか飲めないけどな。ウラルもおいでよ」

ウラルはうなずいて、フギンのあとについていった。

「俺さ、ウラルが帰ってきてくれて、ちょっとうれしかった」

ウラルが驚いてフギンの顔を見ると、フギンはいつもの、人なつっこい笑みを見せた。

「ウラルは逃げたほうがよかった。でもな、正直、ひとりだけそうやって突き放すのもどうかと思ってたんだ。やっぱり、最後まで一緒にいたいからさ」

ウラルはほほえんだ。泣き笑いの表情に近かったと思う。フギンも複雑な笑みを浮かべていた。

ふたりとも、明日には死ぬかもしれないのだ。

フギンがまた、ちらりと歯を見せて笑い、明るい口調で続けた。

「そついやさ、ウラルが帰ってきたとき、イツペルス連れてたよな。あいつ、どうしたんだ？」

「さあ？」

さすがに本当のことを言うわけにはいかない。

ウラルの言い方をまねして、フギンは「さあ？」と繰り返した。

「変なやつだな。イツペルスって、絶対に人に慣れない生き物なんだぞ。まるでウラルにくつついてきたみたいじゃないか」

アラール八の仏頂面を思い出して、ウラルはあやうく笑い出しそうになった。ここで笑い出したらよけい変に思われてしまう。

「あのイツペルス、やけにアラール八に似てたよな。あの目といい、態度といい。あいつがアラール八だったとしても、俺、驚かないよ」

フギンは大声をあげて笑いはじめた。

そうはいつても、実際そうなのだの説明しても、フギンは冗談と違って笑い飛ばしてしまうだろう。ウラルはあいまいに笑い返した。ここまでやっても、アラール八の正体はばれていないのだ。

大広間の扉は開けはなたれていた。コップ一杯の酒だけしかふるまわれていないはずだから誰もさほどには酔っていないはずなのだ。

が、全員が顔を赤くして笑い転げていた。最後の晚餐である。少ない酒を飲み、歌って、踊って、めいいつぱい明るく楽しくやっているのだ。

「ウラル、こっちこっち！」

マライが手を振っている。スヴェルのメンバーが酒を飲みかわしていた。伝令として飛びまわっていたリゼも帰ってきて、ここにこしながらテーブルについている。ジンも笑いながら酒を飲んでいった。

「ウラルの分も、酒、とつといたよ」

「私、お酒はちよつと」

「そんなつれないこと言つて。最後の晚餐なんだからパーツと飲みなよ。ウラル用の薄い酒にしといたからさ」

ウラルもテーブルにつく。フギンが貴重な自分の酒を一息に飲み干した。

「少ない酒しかないなら一気飲みするのが一番さ」

フギンがウインクして、ウラルのほうにウラル分の酒をおしやつた。薄緑色の液体が静かにゆたっている。

ウラルはもう一度コップを見つめた。夏祭りするとき、マライとネザに飲まされた酒が頭をよぎる。ものすごく強い酒だった。この酒は大丈夫なのだろうか。

「ネザ、変な薬、入れてないよね？」

「お望みなら」

猫背の軍医が笑いながら怪しい色の液体が入った小瓶を出す。

どつとテーブル全体がわいた。ウラルも声をあげて笑い、一気にグラスを口に持っていった。どこかで一度感じたことのある妙な苦味があったが、喉ごしが心地いい。グラスを全部あけると、周りから拍手がわいた。

「いい飲みっぷりだな、ウラル！一杯しか飲めないのが惜しい！」

ウラルは笑った。体が一気に熱くなっている。

と、いきなり視界が妙な感じに揺れた。

「ウラル？」

「大丈夫、大丈夫」

一気飲みしたので、酔いがまわってきたのだろう。

が、もう一度、次はさつきよりも激しく視界が揺れた。急にまぶたが重くなってくる。

「どうしたんだろう。なんか、変……」

最後まで言えなかった。視界がまた、大きく揺れる。ひどい熱を出したかのように視界がぐわんぐわんと揺れだし、座っていることすらできなくなった。

大きくふらついたウラルの体を隣に座っていたフギンが支える。フギンの腕の中に倒れこんだまま、ウラルは身動きがとれなくなってしまった。

「ウラル！ 大丈夫か？ どうしたんだ！」

眠い。おそろしく眠い。これが本当に酔いというものなのだろうか？ そう思った瞬間、ふいにはっとした。

酒の苦味。どこかで一度感じたことのある苦味。はじめて森の中の隠れ家に連れてこられたとき、飲んだ眠り薬入りの風邪薬と同じ味だ。

「心配ない。そのまま寝させてやってくれ」

ジンの声がした。妙に声が遠く、体の中でわーんと反響している感じがする。

そつと右手をにぎられる感触がした。ウラルは閉じていた目を開ける。ジンの顔が目の前にあった。

「ウラル。こんなことをして悪かった。もう戻ってくるんじゃないぞ」

右手のこぶしを、ぐつとにぎられる感触がした。これが、右手のこぶしをしっかりとにぎるこの仕草が、ジン流の「がんばれよ」という感情の伝えかたなのだ。

「ジン、どうということだ！」

アラーハの怒鳴り声がするが、ジンは言い返さない。

「頭目！ そりゃ、あんまりだぞ！」

フギンの声もしたが、ジンはこれにも無反応だった。

ジンは自分が着ていた黒いマントをぬぎ、ウラルの体にかけて。

ポケットに何か重いものが入っている。ジンはフギンからウラルを受け取り抱き上げた。

「ジン」

ジンの厚い胸板が頬に当たる。息苦しいほど強く抱きしめられて。

「ジン……」

何か言いたいのに、言葉が続かない。

見覚えのある丘が広がっていた。だが、その丘はウラルの記憶にあるより大きい。陶芸じいさんの窯が見えるから、故郷の村であることは間違いないのだが。

ジンらが掘った墓地が広がっていた。ごつごつとした自然石の墓標ではなく、色とりどりの貴石の棺がならんでいる。

ウラルの目の前に黄水晶の棺があった。半透明の棺の中に、小さな遺体がぼんやりとすけて見える。ウラルは棺をのぞきこんだ。文字が彫られている。「サウ」と読めた。

ざつ、と背中に怖気が走った。なぜ、この名前がわかったのか。ウラルは字が読めないはずなのだ。「サウ」はウラルが殺してしまった赤ん坊の名だった。

豎琴の音がした。音のするほうを見れば喪服の女が立っている。どこかで見た覚えのある女だ。ウラルを誘うように豎琴をかき鳴らしていた。

ウラルは女に近づいていった。

女の右隣に中身のない水晶の棺があった。ウラルは棺に書かれた名前を読む。「ジン」。その隣にフギン、リゼ、マライと続いている。

た。ひとりひとり種類の違う石の棺。いずれも骸はおさめられていない。

女は左隣を見た。黒曜石の棺がある。不透明の石なので中は見えない。

「数日前に亡くなられたばかりの方ですよ。名前を知らんなさい」
名前は、「フェイス」。

「ジンの、お父様」
「ええ」

墓守は即答する。ウラルは胸からせりあがってきた冷たいものをこらえながら、墓守の右隣にある水晶の棺を見た。

「なぜ、まだ生きている人の棺もあるのですか？」

「その人も、じきにやってきます」

「どういうことですか？」

「あなたも見たでしょう。サウの墓を。ここはあなたの心の墓地です。あなたがあつた人は誰であってもここに棺を持つことになる。まだ生きている人も」

墓守はそつと水晶の棺をなでた。それまで気にならなかった女の喪服が、急に忌まわしいものに見えた。

「そして死ぬと、ここへ来るのです」

ウラルは肩を震わせ、確認するように墓守に問いかけた。

「ジンが、もうすぐ死ぬということですか」

墓守は答えない。ただ静かに竖琴をかき鳴らしている。戦死者に捧げられる葬送歌。

不吉な夢だ。

目を開けたが真っ暗だった。狭い部屋、ウラルが横たわるだけでいっぱいになってしまつほど狭い場所に寝かされている。天井もひどく低く、立ち上がることはおろか座るだけでいっぱいになり

なりそうだ。棺のようだ、とウラルは思った。四角ではなく卵形をした棺。

ゆるやかに湾曲したその卵形のわきから円形に光が漏れている。穴があつて、それを石か何かでふさいでいるようだ。そこから出られるかもしれない、とウラルは手を伸ばした。否、伸ばそうとした手がひどく重い。自分の体を見てウラルは目をしばたいた。毛皮と毛布に厚く厚くくるまれ、まるで芋虫のようになってしまっている。

どうにか苦勞して片手を出し、ウラルはそつと明かりをふさぐ石に手をやった。触れると同時にあわてて手を引く。穴をふさいでいるものはひどくフワフワして、しかも温かく、ついでにウラルが触れたのに驚いて身をよじつたのだ。

「気がついたのか？」

『石』がもそもそ身動きすると、自分からそろりと穴を離れていく。とたん、極寒の空気が穴の中に流れこみ、ウラルはあわてて手を毛皮と毛布の中に引きこんだ。

「ああ、悪かった」

ウラルの動きに気づいたのだろう、再び『石』が穴をふさいだ。

「アラーハ？」

「ああ。気がついてよかった。心配していたんだ」

獣の姿のアラーハが外から自分の体で穴をふさいでいたのだ。その体から発される熱が少しずつ穴の空気を暖めていく。ウラルはぶるぶる震えながら毛布と毛皮をかき抱いた。

「ここはどこ？」

「木のうろだ。おそらくクマの冬眠用の穴だろう。お前は丸四日、ここで眠っていた」

「四日？ じゃあジンたちは」

「発った」

短すぎる答えが押し殺したような声で。

「その皮袋に食べ物置いていってこれている。食うといい」

ウラルは手を伸ばして、皮袋を引き寄せた。ずしりと重い。袋の口を開いてみると、小さな袋がいくつも入っていた。そのうちのひとつを開けてみると、たくさんのお金貨がたまっていた。(俺たちには、もう、必要のないものだ。持っていつてくれ)

ほかにいくつが入っている袋も、口を開いてはみなかったが、持った感じからしてどうやら金貨がたまっているらしい。おそらく、スヴェル 全員の財布だ。

皮袋の奥のほうに干し肉の束があった。ウラルはそのひとつを手に取り、ゆっくりと噛んで、飲み込んだ。少し食べると、体の芯のほうから温まってくるのがわかった。

「ジンはお前の命をたてに、俺に逃げると迫った」

ウラルは干し肉をかじりながら顔をあげ、穴の方を見つめた。うるの中にいるウラルからはアラーハの顔が見えない。

「誰かがそばについて世話してやらないと、お前は凍死すると言われた。そうでなくとも意識のないお前をひとりにしては腹をすかした獣に食われかねん。ベンベル軍に見つかって殺されるかもしれない俺は、お前を連れて逃げるしかなかった」

ウラルはぐつと歯の奥を噛みしめた。体を起こし、低すぎる天井に頭をぶつけないよう気をつけながら座りこむ。体の下にシーツ代わりの黒い布が置いてあった。引っ張り出してみれば黒いマントだ。ジンの、黒マント。

「歩けそうか？ もう全てが終わった。……行かんとならん」

気づかうような口調でアラーハがささやき、穴の前から体をどかした。ウラルはそろそろと穴から顔を出してみる。薄く雪をかぶった木々、それに頭と四肢がシカ、体と尾は馬の巨大な草食獣の姿。その獣の姿がすうつと薄れ、見慣れた狩人姿の大男に変わった。

アラーハに支えてもらって立ちあがり、ジンの黒いマントを着る。内ポケットの中にずしりと重いものがあったが、それが何なのか、ウラルは確かめなかった。ここで取り出してはならないものだと、そう思った。

アラール八が堅い表情で森の奥へ足を向ける。ウラルも続いた。

はじめは何のにおいもしなかった風に生臭いものが混じり始めた。進めば進むほど強くなっていく。嗅覚の鋭いアラール八は鼻と眉間にぐっとシワを寄せながら歩いている。ウラルも口元を手で押さえた。

進むにつれ、ネザがしかけたらしい罨のあとがいくつも見られるようになった。一度、ウラルの目の前で使われた槍ぶすまもある。落とし穴、蜂の巣、殺された毒蛇の群れ。

そこで死んでいる兵士の目。リーグ人にはありえない髪や瞳の色をしている。金髪。茶髪。赤毛。緑の目。青い目。灰色の目。

罨にかかっているのは、全員がベンベル人のようだった。あまりの腐臭に、ウラルもアラール八も近づけない。ウラルは服についていたフードを切り取り、それをしっかりと口元に結びつけた。アラール八には皮袋に固定していた毛皮を渡す。アラール八も毛皮を顔に巻きつけ、口もとから胸にかけてをおおった。

それから、先へ、進んでいく。

罨。罨。罨。アラール八が鋭い嗅覚と聴覚で発動していない罨を見つけ、壊していくから、ウラルに危険はなかった。

罨にかかっているのは、ほとんどがベンベル人だ。ときどき罨にかかったベンベル兵にとどめを刺そうとして、返り討ちにあつたらしいリーグ人の死体もあったが、圧倒的にベンベル人の死体が多かった。

頭が痛くなってきた。吐き気とめまいもする。ウラルは口元を押さえた。

スヴェル は勝ったのか。それとも、負けたのか。これだけベンベル人の死体ばかりなのだから、スヴェル が勝っていてもおかしくない。だが、ここは、罨だらけなのだ。ベンベル人を殺すための罨なのだから、ベンベル人がかかっているのは当然で、でも最後は圧倒的兵力でリーグ人を負かしているのかもしれない。

だが、どちらが勝ったのだとしても。

手首をおとされ、苦悶の表情を浮かべながら息絶えている少年がいる。獣に食い散らされ、はらわたをむき出しにしている壮年の者の遺体がある。首が落とされ、年齢すらわからなくなっている者もいる。

生きている人間は、ウラルとアラールしか、ここにいない。

ウラルは歌いはじめた。夢の中で墓守が歌っていたのと同じ、戦死者に贈られる弔歌。

アラールがすこし離れた木陰でウラルを待っている。ウラルは兵士の冥福を祈り、立ちあがってアラールのあとを追った。アラールがいなければ座りこんだまま動けずに発狂していたかもかもしれない。なかった。

リーグ人の死体がある。ウラルは横たわっている軀に近づき、知った顔ではないかを確認した。

死体は腐り、腹や胸が妙な感じに膨れあがっていた。一人ひとり、顔を見ていく。ハエが飛び交い、ウジがわいている。気持ちのいいことではなかったが、そうしなければならぬ。ジンは、生き残ってウラルにこのことを伝えてほしい、と頼んだのだから。

じわじわと進んでいく。転がっている死体の数はどんどん増え、全ての死体をあらためるのが、難しくなっていた。

前方、薄暗い木の影に、人がいる。ウラルは首をかしげた。アラールは周りに気を配りながら用心深く少し前を歩いている。

人影に近づいていく。倒れた死体ではない。どうやらこちらに背を向けて、じっと立ちつくしているらしい。マントのすそがはためいている。

誰だろう。ベンベル兵だしたらやつかいだが、アラールは足を止めない。躊躇なく前へと進んでいく。

背の高い男だった。肩幅もずいぶんと広い。黒いマントを着ている。

まさか。

ウラルは息を呑んで、男が振り返るのを待った。やっと顔が見え

るくらいの距離だ。人影はウルルたちに気づく風もなく、背を向けて、立ちつくしている。

見覚えのある、後姿。

ジン？

ウルルが声をかけようとしたその瞬間、ごうつと風がうなった。

人影が大きく、ぶらり、と揺れる。ぐるっとこちらを向いた。

首に縄をかけられ、枝からつるされていた死体。アラーハは最初から死んでいるとわかっていたから、声もかけず、ウルルに警戒しようとも言わなかったのだ。

アラーハがそつと死体に近づいていく。ウルルは口元を押さえた。顔が血まみれでわからなかったのだが、ウルルの知っている人物だった。

サイフォス。ウルルが見間違えたのも無理はなかった。ジンのような覇気がないので今まで気づかなかったが、背が高く、肩幅も広く、ジンによく似た背格好だったのだ。

「おろしてやるう」

アラーハの声は低かった。聞き取るのが難しいほどに低かった。

アラーハが木に登り、サイフォスを吊るしていたロープを切る。

そのままドサツとサイフォスの体が落ちてきた。

ウルルはそつとサイフォスを寝かせ、体の位置を整えた。顔についた血のりをぬぐい、竖琴を抱くような姿勢、風神の加護を願う姿勢に腕を動かす。

「サイフォス、風神のご加護を。マームさんには、私から伝えておくね」

サイフォスの死んだ場所を。この死に様を。ウルルはぐつと奥歯を噛みしめた。

死体を埋めないままに、ウルルとアラーハは先を急ぐ。

やがて、平野に出た。要塞がある。ネザ率いるゴウランラの要塞だ。平野一面が、そのまま墓場になっていた。カラスやオオカミやイタチやタヌキや、たくさんの動物が群れになって集まり、死

骸をむさぼっている。ウラルやアラール八を見ると威嚇のうなり声をあげたが、ふたりがかなり近づいても逃げようとせず、ひたすら死肉に食らいついていた。

スヴェル は負けた。平野一面に転がる死体は、褐色の髪だ。リーグ人の軀ばかり。

ウラルは顔に巻いた布をきつく巻きなおした。腐臭がひどい。森の中とは比べ物にならないひどさだ。

ムールの死骸があった。数人の手足がムールの下からつきだしている。ベンベル軍にムールはいないはずだ。ウラルは駆けよって騎手の顔をあらためた。

リゼだった。ムールが喉にクロスボウの太い矢を受けている。空から落ち、敵の槍に刺されて死んだのだろう。ウラルはリゼの顔にべっとりついた血糊をぬぐい、抱きしめた。

ジンの遺体はない。ウラルの胸にかすかな希望がうまれた。ジンは生きていたのではないだろうか。逃げて、どこかで傷をいやしているのではないだろうか。だが、ジンの性格とあの覚悟からして、それはありえないということもウラルは知っていた。

サイフォスとリゼ以外にウラルの知った顔の遺体はなかった。フギンやイズンもこの戦場跡のどこかにいるのだろうが、とても探せそうにない。だが、ジンだけはどうしても探しておかなければならない気がした。

ウラルとアラール八は歩き続けた。戦場の端から端へ。ゴウランラ の要塞へむかって。

終章 「墓標」

最前線でジンはあおむけに倒れていた。傷が胸を貫通している。それが致命傷になったようだ。右手に握られたままの剣は刃こぼれがひどい。血や油脂のついたまま雨ざらしにされていたせいかな真っ赤に錆びていて、もう、二度と使えそうになかった。

これが、ジンなのかと思った。顔は完全に生者の色を失っている。蠟でも薄くはりつけけたかのように見える、妙にのっぺりした、その顔。

ウラルは泣かなかった。ただ、胸のあたりが、にぶく痛んでいた。

「形見に欲しいものがあつたら、持っていけ」

アラーハが自分の剣を抜き、それで地面を掘りはじめている。

ウラルは自分の胸元を見た。ちかり、と金色に光るペンダントがある。

ウラルはマントの内ポケットをさぐった。ウラルの体温でほんのりと温まった金属の感触が手にふれる。ポケットの中にあつたのは、チュユルの紋章が刻まれた奉納用の短剣だった。ウラルはそれをほんの少し鞘から抜き、刃に光をあてる。

「巻きこんでしまつて申しわけない」という気持ちとしてジンはウラルにペンダントを渡し、ウラルに宛てたジン自身の形見としてこのアサミイを買ったのだ。ジンの体格には小さすぎる八枚花弁の金百合のレリーフが彫られた短剣を。レリーフをはじめとした装飾はひかえめで、全体的なデザインも直線的だが、見なおしてみればあきらかに女物なのだ。

「もう、いいか」

低い声にウラルはうなずき、最後にジンの硬直した右手をぎゅつと握って、アラーハに場をゆずった。

アラーハはジンの横に立ちつくして、長い間、身動きしなかった。

じつとジンの死に顔を見ている。しばらくすると、思い出したようにアラールはまた穴を掘りはじめた。夢の中で墓守、いや風神が歌っていたのと同じ弔歌を歌いながらウラルも墓掘りを手伝った。

掘られた深い穴に、ジンはおろされた。土に、ジンの遺骸がうもれていく。穴を掘るときに掘りだされた石が慰霊碑として墓の上へのせられた。ウラルは花を探した。冬である上、ここは戦場だ。地面は踏みじられ、ぬかるんで、ナタ草の一本さえ見つからない。

「このままでいい」

養子とはいえ、息子を失ったとは思えない淡々とした声だ。ウラルは墓の前にかがみこんで、もう一度ジンの墓を見つめた。

「私も行かなきゃ」

ジンの遺言をウラルは忘れていない。

「どこへだ？」

「最後まで、見届けなきゃならない」

心の中でジンに別れを告げて、ウラルは立ちあがった。

終章 「墓標」(後書き)

第一部完結 第一部 第二部間章へつづく

間章 1 「抱きしめられた胸の奥」 上

純白のムールよ

彼らを風神のもとへ導いておくれ

やさしい風の女神のもとへ

心の中へ還る人よ

あなたの世界が安らかでありますように

ウラルは弔いの歌を口ずさみながら歩いた。あまりに凄惨な、あまりに巨大な墓地の中を、歌いながら、すべての死者を弔いながら自分の足で通り抜ける。

人はみんなその心に自分の「世界」を持っていると信じられていた。実際にある場所の場合もあるし、おとぎ話のような世界の場合もある。えんえん続く花畑、果てしない闇、毎日通った酒場。そのひとりひとり違う心の世界に、死後、風の女神に導かれ還ってゆく。ジンの世界はどんなところだろう。サイフォスはマームさんとの思い出の場所だろうな。リゼはきつと、ムールに乗って空の上

に。
アラーハに守られて長いこと歩き、そしてやっと、ウラルが四日間も眠り続けた木のうろに帰り着いた。

体のだるさを感じて腰を下ろしたとたん、ウラルは猛烈な吐き気に見舞われた。うずくまって嘔吐する。アラーハがあわてて背をさすってくれたが吐き気はとどまることを知らず、にこった胃液を吐き続けた。

吐きに吐いてやっとおさまると、アラーハが黙ったまま木のうろの中に毛皮と毛布を敷いてくれた。

「眠れ、ないよ、私……」

「それでも横になったほうがいい」

ウラルはふらふらとうろの中に入り、横たわった。アラーハが広

い背中であくをふさぐ。

「火をたいてやりたいんだが、今日はやめたほうがいいだろう。光や煙が見つかるはず。寒い、がまんしてくれ」

「アラーハは、入らないの？」

うるの狭い空間がアラーハの背中からの体温とウラルの息とで少しずつ暖まってゆく。はじめ白かった息は間もなく透明になった。けれど、外にいるアラーハはまともに冷たい風の中にいる。

「俺はいい。狭いだろう」

狭いといっても、うるはクマが何か冬眠に使っていたものらしく、それなりの広さがあった。ウラルが膝を曲げずに横たわれる広さだ。アラーハがいくら大男といっても、さすがにクマほどの大きさはない。座りこめば二人くらい十分入れる。

背中越しにアラーハが笑う気配がした。ウラルの胸のうちを見透かしたようだった。

「こう見えて狭い場所が苦手なんだ。獣の姿に戻れないくらい狭い場所にいるとな、息が詰まる」

意外な弱点にウラルは目をしばたかせた。

「完全無欠と思わんでくれよ、俺を。さいわい自前の毛皮があるから寒さには強い。気にせんでくれ」

笑い混じりの声。ウラルはそろそろと手を伸ばしてその背中に触れた。

「どうした、また気分が悪いか？」

「ううん、ちがうの。そのままです」

ウラルはそつとアラーハの背中に身を寄せた。獣脂と、その毛皮にしみついた死のにおい。はじめは冷たい風の中に身をさらしているアラーハを少しでも暖めたいと思ったただけだ。背中にもたれかかるだけのつもりだった。けれど。

気がつくともアラーハの背を力いっぱい抱きしめていた。毛皮の死臭。ジンの死臭。サイフォスの、リゼの……。泣くこともできず、ただただその背にすがっていた。

「熱がでてきたみたいだな」

アラーハの手がそろそろ伸びてきて闇をかく。その手をとると、握り返してくれた。ひんやりした指の感触。

「俺の体が冷たく感じるだろう。横になるんだ」

離れると遠まわしに言われ、ウラルは悲しくなつて引きさがつた。やっぱり嫌だつたらうか……。

と、冷たい一陣の風がウラルの頬を打つ。月の光がうるの中になしたが、一瞬のことで、すぐにまた真つ暗になった。

「アラーハ」

闇に慣れた目にアラーハの微笑が映つた。

「閉所恐怖症、なんでしよう？」

「苦しくなつたら出る。でも、ああ、俺が入つたらお前が横になれんな。どうするか」

ウラルはほえんでアラーハに身を寄せる。

「肩、かして」

といつても、アラーハは大柄すぎた。肩に頭が届かず二の腕のあたりにもたれかかる格好になる。こんな狭いところに大男とふたりきり、それでも不安には感じなかった。アラーハが人ではなく、獣だと知っているからだろうか。それとも、アラーハが大きく力強く、小さな娘が見上げる「父」のようだからだろうか。

また死臭が鼻をついてきた。不安と悲しみの波に襲われ、アラーハにしがみつくと、今度はぐつと大きな腕で抱き返してくれる。その胸にすがり、ウラルは長いこと震えていた。涙も流さずひたすら震えて。

閉所恐怖症のアラーハは狭いうろのなかで苦しかったらう。それでも結局朝まで外へ出ず、一睡もせずウラルを抱きしめてくれた。いた。

*

「一刻も早くここを離れよう。ゆっくり休めるところへ行かんと。火も使えんしな」

ウラルは依然微熱を出していたし、寝不足でふらふらだったが、うなずいた。これほど戦場に近い場所で不用意に火を使えばベンベル軍の敗残兵狩りに巻きこまれるおそれがある。襲われる前にアラール八が気づいて逃がしてくれるだろうが、やはり最初から危ない場所を離れておくに越したことはなかった。

「どこへ行くの？」

「あてはないが、ひとまず森をつきつて南下する。さ、荷物を載せてくれ。鞍がないからちよいと面倒だろうが、まあ走るわけでもなし、ずり落ちんかったらなんでもいいさ」

アラール八は獣の姿になっている。ウラルは言われるまま荷物、毛布や鍋やらをロープでアラール八の背に固定し、ウラル自身もその背に乗せてもらった。

とはいえ、体高のありすぎるアラール八に乗るのは難行事だった。なにせウラルがめいっぱい手を伸ばした高さがアラール八の背だ。あぶみも鞍もないし、飛び乗ることもできない。はじめは地面に伏せてもらって乗ったのだが、アラール八が立ち上がったとたん、たちまち荷崩れを起こしてしまう。結局、そこから再び荷物を積みなおし、木に登って、そこからそろりそろりと乗せてもらった。

「イツペルスに乗せてもらうなんて。しかもこんな荷馬みたいに使っていいの？ イツペルスって絶対に家畜にならない生き物なんですよっ？」

「俺も誇り高きイツペルスの端くれだ、さすがにずっとは嫌だな。でも俺はイツペルスであると同時に人間のアラール八だよ。熱を出している女の子にこんな荷物をかつがせて歩かせられるか。たてがみをしっかり、にぎっているんだぞ」

触れているところからアラール八のぬくもりがじかに伝わってきた。手で触れた首よりもじんわり温かく。アラール八が一步を踏み出すとしなる背骨の動きが感じられた。

冬の森は静かだった。ただアラー八の足音と、時折ツノにからむツル草を打ち払う音がするだけだ。それでもアラー八には何かの音が聞こえているらしく、時々ぴくりと耳をそばだてる。どうしたのか尋ねてみると、リスが木を駆けのぼる音や遠くのせせらぎの音、鳥の声、さまざまな答えがそのつど返ってきた。

「肉を食う獣たちは戦場へ行ったみたいだ。敗残兵もこちらへは来ていないらしい。ここは今、平和で静かだ。でも、来年はひどいことになるだろうな」

「どうして？」

「肉をたっぷり食った獣は、翌年たくさんの子どもに恵まれる。その増えすぎた獣が肉を求めて別の獣を襲う。森の獣は激減し、増えた肉食獣も飢えて死んでいく……。森の掟や守護者の普段の役割はそんなことを防ぎ、森の秩序を守るためにあるんだがな。アシ、この森の守護者は今ごろ駆けずり回ってるだろうよ」

「知り合い？」

「何度か会ったことがある。雌の銀ギツネだ。狩人に協力を頼んで、普段は禁止している幼獣狩りをしてもらうか何かで対処するしかないだろうが、アシも狐だからな。同族殺し、親戚殺しはつらからう。それに、この戦時にそれだけの狩人が集まるかどうか」

アラー八の目は切なげだ。この森とアラー八のヒュグル森を重ねているのだろう。この森も、放り出してきた自分の森も心配でたまらないに違いない。

「なにはともあれ、このあたりなら敗残兵や獣に襲われる心配はなさそうだな。空も薄曇りだ。明るいうちなら火をたいても目立たんだろう。ちよつとばかり時間は早いが、今日野営できる場所を探すとするか」

アラー八はふうつと大きく息をつき、注意深くあたりを見渡しなから歩き出した。

しばらく探していると、岩がごろごろしている場所に出た。表面の平らな岩が森を横切るように太く長く伸びている。ところどころ

に砂地や泥地があつて、そこからひよろりひよろりと若い木が顔を
出していた。

「昔は川だつたんだな、ここは。大雨か何かで流れが変わつたんだ
ろう。適当な洞窟があるかもしれん。ウラル、降りてもらえるか？
ちよつと見てこよう」

ウラルが降りるとアラーハは地を蹴り、ぱつと大岩の上へ跳ね上
がる。とたんにまだアラーハの背中に乗っていた手斧やら毛皮やら
が荷崩れを起こし、落つこちた鍋が岩に当たつてけたたましい音を
立てた。

「すまん。すぐに戻ってくる」

うるさそうに耳を動かしながらアラーハは詫び、ぱつと駆けてい
った。さすが四肢はシカ、巨軀に似合わないほど身が軽い。跳躍し
てウラルの身長の数倍もありそうな岩壁に一瞬で駆け上がり、長い首
をめぐらせ枝角をかがげてあたりを見回す。何かを見つけたのか、
さつと駆け下つていった。姿は見えなくなったが、蹄の音が高く聞
こえる。遠ざかった蹄音は、消えきらぬうちに足踏みの音に変わり、
すぐさまこちらへ向かつて駆けてくる音に変わった。

「見つかった？」

「ああ、前の滝つぼの跡があつた。いい具合に滝裏の洞窟が残つて
いたよ。雨が降つたらここも水が流れるかもしれんが、滝裏なら濡
れる心配もないだろう」

アラーハは人の姿に戻り、散らばっていた荷物を集めて背負つた。
着替えの入った皮袋くらいは自分で持とうとしたが、アラーハはい
いからと一言、すべての荷物を一人で持つてしまった。

「足を滑らせるなよ。荷物のごとは気にするな」

アラーハの先導でゆっくりと洞窟まで降りていく。じとじとして
いるかと思つたが案外そうでもなく、岩はからりと乾いていた。

「お、ウラル。面白いものを見つけたぞ」

声にアラーハを振り返ると、岩と岩の間に手をつこんでいる。
蛇でも出てくるのかな、とびくびくしていたウラルを尻目にアラー

八は何かをつかみ出すと、ぽんと自分の口へ入れた。

「お前も食うといい。干しアンズだ」

手のひらに乗せられたそれは、形こそ不恰好だが確かに干しアンズ。きよとんとしているウラルにアラーハは笑い、次は干しブドウをウラルの手に置いた。続いてグミの実にクコの実、殻つきのクルミまで。

「どうしてこんなところに。人がいるんじゃないの？」

「いや、こんなところまで果物を干しに来る酔狂な人間はいないさ。のぞいてごらん。岩ネズミの食料庫だ」

ウラルは言われるままその隙間をのぞき、あつと息をのんだ。どこかの、今のぞいている隙間とは別のところから光が差しているらしく、隙間の中は明るい。そこに干し草らしいものが敷きつめられ、その草のところどころに黄色や紫や臙脂色の干し果物が転がっていた。

「岩ネズミはこうして冬の食料を集めて干しておく習性があるんだ。風通しのいい場所を選んでな。助かった、どうもここは雨が降っても水没の心配がないらしい」

アラーハは小さな食料庫から人間の食べられるものを選んで拾いあげ、ウラルの手の上にばんばん置いていく。

「こんなに取っちゃってネズミが怒らない？」

「なに、ほかにいくつも食料庫を持つてるよ、連中は。こういうのを何十箇所も作るんだ」

ウラルの両手に一杯分の干し果物を失敬し、岩を下って洞窟に入る。洞窟はアラーハが息苦しくならない十分な広さがあり、よく乾いている。アラーハは手早く火をおこし、ウラルに火の番を頼むとどこかへ走り去っていった。帰ってきたときには両手に薪だのキノコだの熱さましの薬草だのを山ほど抱えており、それを使って温かいスープを作ってくれた。

「意外。アラーハ、料理上手なのね」

熱さましの薬草入りキノコスープ。味つけこそ大雑把でいかにも

男料理な風情だが、それでもまさかアラール八に料理が作れるとは思わなかった。アラール八は獣、食事は草で十分なはずだ。その上、人の姿をしているときも食事ときにはほぼ必ず姿をくらましていた。

「獵師に習ったんだ」

「習う必要もなさそうなのに」

アラール八は苦笑する。その目になぜか、ちらりと痛みをこらえるようなものがまじっていた。

「そうなんだがな。ちよいと草を食んでくる。何かあったら呼んでくれ」

アラール八は獣の姿になると斜面を駆けのぼり、枯れ草を飲み始めた。あの巨体を維持しているのだ、さすがにスープ程度では足りなかったらしい。

薬草スープの効果がさつそく現れたらしく、体のけだるさはましになっっている。片付けをしようというウルルは腰を上げ、灰をかけて火を消した。暗くなると火は遠くからでも目立つようになるから念のため消しておこうとアラール八に言われたのだ。火の中に入れて暖めておいた石を洞窟の中に運んで空気を暖める。

「ウルル！」

怒鳴られて岩の上を見ると、アラール八は枝角をふりあげ空を仰いでいた。

「火は消したな。洞窟へ入れ、ムールかロクが来る」

「ムールだったら味方じゃないの？」

「ベンベル軍の中に御せる者が出てきてもおかしくない。警戒した方がいいだろう。火を消しても煙のおいで感づかれるかもしれない。風上を通ってくれることを祈るか」

洞窟に入り空を警戒することしばし、十数羽のムールが隊列を組み騎手を乗せて空を横切っていた。心配に反してリーグ国旗をかがけている。リーグ軍の斥候だ。

「……遅い」

アラール八が空をにらみ、低くうめいた。

間章 1「抱きしめられた胸の奥」 下

さすがに昨晩の寝不足のおかげで眠れたが、それでも眠りは浅く、夜明け前に目が覚めてしまった。洞窟の外へ出ると、アラーハが獣の姿で立ちつくしているのが目に入った。足音を聞きつけたのだろう。下げていた頭を上げてウルルを見つめ、アラーハはすうっと人の姿に変わった。

「まだ夜明けまでだいぶ間があるぞ。もう少し眠っておけ。寒いだろう」

不寝番をしてくれていたのだろうか。昨日も寝ていないことだし、これではアラーハの体が持たない。

「アラーハこそ眠って。私、どうせもう眠れないから。ずっと寝てないんでしょ？」

「心配しなくていい」
「でも」

アラーハはほほえんで歩み寄ってくると、ウルルの頭にぽんと大きな手を置いた。

「大丈夫だ。立ったままだったからわからなかったか。今も居眠りしていたんだ。起きているなら毛布をかぶっているんだぞ」

そんな中途半端な眠り方で本当に大丈夫なのだろうか。釈然としないままウルルはすこすこ洞窟に戻り、毛布を一枚自分の肩にかけ、もう一枚をアラーハに持っていった。

「その顔は納得していないな」

「わかる？」

「わかるとも。だが、俺は本当に大丈夫なんだ。もともとそういう体でな」

アラーハは苦笑し、岩のひとつに腰をおろした。ぽんとその脇を

たたいてウルルに座るよう示す。ウルルは毛布を体に巻きつけてそこに座った。

「ひとつ、おとぎ話をしようか」

「おとぎ話？」

アラール八はにやつとした。

「俺が先代の守護者に聞いた話だよ。

むかしむかし、あるところにとても遊び好きなイッペルスの子どもがいた。友達のイッペルスや母親のみならず、動くものならなんでも遊び相手にしてしまうような子どもだ。こいつはちょこまか走り回っては、友達の耳をひっぱり、小さなツノで大人の雄をついてちよっかいをかけ、あわれなウサギを追いかけて回し、あげくの果てには葉っぱに飛びつき危うく崖から落っこちかけるような子どもだった。

おかげさまで母イッペルスは毎日ほらはらだ。疲れきって眠るのを待つんだが、こいつは本当にやんちゃでな。どういうわけやら遊びたいあまり眠るのを忘れていろいろしい。一日二日起きっぱなしでも平気だった」

ウルルは思わず笑みを漏らした。アラール八も笑っている。

「お母さんはたまったものじゃない？」

「そうなんだ。母親どころかみんながこいつに寝ている間もちよっかいをかけられてな、おかげで森中のイッペルスが寝不足になった。みんなすっかり不機嫌だ。会うイッペルスごとに文句を言われるもんだから、こいつはへそを曲げて家出をしちまった」

「あらら」

「そうして家出をしたところに、運悪く悪名高いオオカミの群れが通りかかったんだ」

声が急に小さく低くなつたものだからウルルは思わずびくつとした。怖いことにさっきまで笑っていたアラール八は無表情になっている。

「襲われちゃったの？」

「襲われるどころか。こいつはそのオオカミにもちよつかいを出しにいったんだよ。ぴよんぴよん跳ね回って遊ぼう遊ぼうと駆け寄っていった。だが、まさかオオカミの方も自分から駆け寄ってくるイッペルスがいるとは思ってもしなかったんだろ。しばらくぼかんとしていたんだ。そここうするうち母親が追ってきて悲鳴をあげた」

「え、じゃあ母子ともども？」

アラールは苦笑したまま首を振る。それから、ウラルの反応に満足したようににやっとした。

「いいや、母親ってもんはとことん強い。母イッペルスは子どもを救おうと猛然とオオカミの群れへ駆け込み、蹄と歯で子どもを守って戦ったんだ。うるさい子どもがいなくなって、これさいわいと眠っていたイッペルスたちも母親の悲鳴に目を覚まして助けに駆けつけた。巨大なツノをかかげた雄の一团を見たオオカミどもはさすがに怖気づいたんだろ、すぐすぐ帰っていったよ」

ウラルはほっと胸をなでおろす。アラールはまた笑顔に戻っていた。見かけによらずの役者だった。

「よかった。子ども、怒られたでしょう」

「それがな、逆に子どもは英雄さ。子どもが騒ぎを起こさなかったら、ぐっすり眠っていたイッペルスたちはオオカミの群れにそのまま襲われていたはずだ。その寝不足が子どものせいだったことを抜きにしても、ぎりぎりまで気づかかったらうよ。」

みんなは子どもをたたえ、けれど母親だけはこてんぱんに子どもを叱った。子どもは懲りて、けれど同時に誇らしくなって森を守ることを誓い、立派な成獣になってからは少しの睡眠時間でいいことを生かして群れを守るようになったんだ。

こいつの子孫はみんな同じように眠る時間がすごく短くてな、そのおかげでほかの獣に襲われることがぐっと減った。そして、やがて全てのイッペルスがそうして少しの睡眠時間でいいようになっていったんだとさ」

ウラルは拍手しようとしたが、アラールが手で制した。

「夜の音は遠くまで響く。気持ちだけで十分だ。なにはともあれ、イッペルスの端くれの俺も眠る時間は少しでいい。途切れ途切れの居眠りで十分なんだよ。もっとも、草食の動物はだいたい眠る時間が短い。馬や羊にもこんなやんちゃぼうずがいたのかは知らんが、肉食獣から身を守るためには必要なことなのさ」

「うまいのね。ほかにもいろんな話があるの？」

「ああ、たくさんある。気に入ったのならまた少しずつ話そうな」
「ウルルはうなずき、アラー八を見上げた。が、アラー八は目をそらしてしまう。さっきまで笑っていたのに、その目に少しだけ悲しげな色が揺れていた。ウルルが料理を褒めたとき、その目にちらついていたものと同じような。……何かある。」

「お、フクロウだ」

アラー八が急に声をあげた。

「呼んでみようか」

「フクロウの言葉がわかるの？」

「わかるのはせいぜい馬や牛までだな。耳を動かして意思を伝えるだろう。言葉が似てるんだ。さすがに鳥の言葉はわからん。これは獵師に教わったんだ」

アラー八は両手を丸めて口にあてがうと、ほう、おう、とフクロウの鳴き声そっくりの音を出した。フクロウ笛だ。

森の奥からフクロウの鳴き声が帰ってくる。アラー八が返す。フクロウが答える。

「近づいてきた」

はじめかすかだった鳴き声がはつきり聞こえてくる。

アラー八が無言で空を示した。まったく羽音を立てず、フクロウの影がすーっと横切ってゆく。アラー八がフクロウ笛で呼びかけたが、フクロウはもう見向きもしなかった。本物のフクロウではないとわかってしまったのだろう。かすかな笑みを浮かべたアラー八、けれどその目はやはり悲しげで。

「アラー八、どうかした？」

「何がだ？」

「何も無いならいいんだけど」

アラーハの顔に残っていた笑みがゆっくりと消えていった。ぼんとウラルの頭の上に大きな手が乗せられる。

ウラルはその目をもう一度のぞきこみ、それからそろそろとアラーハの手をとった。大きな手を両手で胸に抱え込み、抱きしめる。わかつてしまった。

フクロウ笛はいつたい誰に向かって奏でられたのか。おとぎ話は今までに一度や二度語られた程度のもではなかった。何度も何度も語り、声色や顔つきを考えられたもの。語った相手は一体誰だったのか。料理の必要がないアラーハがスープを作った理由は。食べさせてやった相手は。幼いころのジン以外に、誰がいるというのだろうか。

「これから二人で旅をするなら、しばらく父と娘ということにしないか。いちいち関係を説明するのも面倒だろう」

かすれた声が悲しかった。思えば息子を失ったというのに、アラーハは今までずっと悲しげな様子を見せていなかった。不自然なほどに。

「実の娘と思つて。今に限らず、ずっと」

悲しみを目にたたえ口元に笑みをたたえて、アラーハはそつとウラルを引き寄せ胸に抱いた。

「私とジン、兄妹になるのね」

「俺は……俺は、夫婦になつてほしかった」

目頭がぐつと熱くなった。泣いてはいいけない、ここで泣いたらアラーハはウラルの心配が先に立って悲しめなくなると思うのに、止まらなかった。押さえられなかった。アラーハの胸に顔をうずめる。アラーハも背を丸め、ウラルの肩に頭をもたれかけさせた。

「お前がいてくれて、よかった」

ぎり、とウラルを抱く腕の力が強まった。

間章 2「帰郷」

ここで待っている、と言ったのに。

ウルルは胸元のペンダントをにぎりしめた。真鍮の小さな円の中に、八枚花弁の金百合が描かれている。それが、ちかり、と夕日の色に輝いていた。

ウルルは陶芸じいさんの窯を見やった。もう、故郷の村まで国境が南下しているのだ。ウルルの立っているこの地点はぎりぎりリーグ国だったが、丘をくだり、小さな森を抜ければ、ベンベル国領コーリラだった。ジンの死から半年が経ち、もうここまで国境が南下している。

その国境で、今、戦闘が行われていた。

リーグ軍が優勢に見える。ちょうど雨あがりで、ベンベル軍は頼りの火薬が使えない。夕日に照らされ、真鍮色に輝く甲冑。剣。馬の毛皮。ゴーランのうろこ。

だが、この戦に勝っても最終的にどちらが勝つかはわかりきっている。武器の違いもあるが、兵力が段違いだった。限界に近づくりーグ軍に対し、ベンベル軍は無尽蔵。どれだけ敵をたおしても、海の向こうから兵を満載した軍艦が何千何万と押しよせてくるのだ。リーグ国とコーリラ国がいかにかっぽけな島国であったか、思い知らされる。

ほんのりと、握りしめたペンダントが、ウルルの体温で暖まっていた。

ジンは何のために死んだのか。国を守るため、というだけだったなら、ジンは犬死したことになる。

（たとえ俺たちが全員死んでも、生き残ってこのことを伝えるやつが必要なんだ。伝える人がいなければ、また同じことが繰り返される。俺は、それが怖い）

ジンは何を願い、何を目指して スヴェル を組織したのか。

何のために、勝ち目がないとわかっている戦をして、死んでいったのか。

ウラルは胸元のペンダントをぎゅっと握ったまま、じっと陶芸じいさんの窯を見つめていた。アラーハは少し離れた場所で、何も言わずに立ちつくしている。どこを見ているかも定かではない。あえて言うならば、夕日、なのだろうか。

アラーハはあの戦でウラルの命と自分の命をとって逃げるか、ウラルを見捨てジンと戦うかの選択を迫られた。ジンと共に戦う道もあったのだ。今は、もしかすると、そのことで後悔しているのかもしれない。

アラーハ、とウラルは呼びかけた。アラーハは黙ったまま、ウラルに耳だけを向ける。「私、村に行ってみたい。今は危ない？」

故郷の村には、おそらく誰もいないはずだ。ウラルがジンと出会った夜、そして翌日の隣村襲撃の両方で生きのびた村人がいたとしても、ここまで敵軍が迫っているのだ。南へ逃げているに違いない。

アラーハは村の方向に顔を向けた。

「大丈夫だろう」

おいと音をしばらく調べたあと、ぽつりと許可を出してくれた。

ウラルはふりかえった。墓石の群れがある。

ここも、もうすぐベンベル領になってしまふのだろう。そうなれば、もう、ここには来られないかもしれない。死者の眠りがさまたげられないよう、ウラルは風神に祈った。

「じゃあ、行ってくるね」

アラーハはうなずき、ゆっくりと村へ続く道を歩いていく。じつと立っているだけだったので、つきりアラーハは行かないものだと思っていた。ウラルもアラーハの後を追う。

アラーハは身長が高い分、歩幅も大きい。ゆっくりのんびり歩いてくれるくらいで、ウラルにはちょうどよかった。

「ウラル、この村を出たら、森へ帰らないか」

歩きながらアラール八がぼつりと呟いた。あやうく独り言と聞き逃しそうになるほどの、小さな呟きだった。

ウラルがアラール八の目を見つめながらも答えずにいると、アラール八はぼつが悪そうに横を向いた。

「俺も、ジンの遺言通り、この戦を見届けたい。が、そろそろ森へ帰らないと、面倒なことになる」

「面倒なこと？」

アラール八は重々しくうなずいた。

「秋には、俺の森で、守護者の座をめぐる戦いがある。俺は、若い雄から挑戦を受けなければならぬ」

アラール八は人の姿をしているが、本性は獣。「森の守護者」という役割についているから人の姿に化けることができるイツペルスなのだ。

草はまだ青いし、暑いが、空を見あげれば秋の雲が出はじめている。

「でも、去年の秋は？」

ジンが死んだあの戦は、秋から春のはじめにかけてだった。

「俺が行くと言ったときの、あいつの顔を覚えてるか」

あいつとは、ジンのことと考えて間違いないだろう。たしかに、ジンは驚いていた気がする。そればかりか、「森はどうする」とアラール八に聞いていた。

「秋から冬にかけては、俺は必ず森にいなければならない。あいつも知っていたことだ」

その掟にあえてそむき、アラール八は戦に同行していた。

「一度なら、森の連中は許してくれるだろう。二度目は、わからない。怒っているはずだ」

アラール八の足がだんだん速くなる。ウラルも小走りになりながら、わかった、とうなずいた。

村は、当たり前と言つべきか、ずいぶんと様変わりしていた。家

のほとんどが焼け跡のままだ。再建された家もいくつかあったが、どこもぴったりと戸が閉じられている。中に人の気配はなさそうだったが、どうやら村人の数人は生き残っていてくれたらしい、と胸がじんときた。

ウラルは住んでいた家にアラハを案内した。ウラルの家は焼け跡のままだった。

「このあたりに入り口があって、むこうがリビングだったの」

燃えかすをつまみながら説明する。アラハは黙って、じっと話を聞いてくれた。

「私、四人家族だったんだ。お父さんと、お母さんと、お兄ちゃん。妹もいたんだけど、うまれた年の冬に死んじゃった」

こげて本来の半分ほどの長さになった柱をどけ、焼け残ったものがないかを探す。砂や煤ばかりで何も見つからない。レンガや瓦もほとんどないので、生き残った誰かが持っていたのかもしれないなかつた。

黙って話を聞いてくれていたアラハが、ふいに、ぱつと後ろを振り返った。何事か、とウラルは反射的にふところの短剣に触れる。

誰もいないと思っていた家の戸が、ぎいときしんだ。

「ウラルちゃん？ ウラルちゃんじゃない！」

聞き覚えのある声がする。

「ユタおばさん！」

ウラルのよく知る果樹園のユタだった。ウラルの叔母にあたる人だ。身構えたアラハが「危険はないか」というメッセージをこめ、ウラルに視線を向けてくる。ウラルは「大丈夫、知りあい」と小さく答えた。

ユタは目を見開き、信じられない、という顔をして、よたよたと歩み寄ってくる。

「本当にウラルちゃん？ 悪魔か何かじゃないだろうね？」

「ユタおばさんこそ、どうして村に残ってるの？ もう、すぐそこ

まで敵軍が来てるんだよ」

「そういうウラルちゃんこそ、逃げるべきなんじゃあないの？ 今までどこで何をしていて、なんで、今になって帰ってきたんだい？ とにかく、生きていてよかった！」

ユタはウラルを痛いほどに抱きしめ、頬とまぶたに何度もキスをした。ウラルもユタを抱きしめ、顔中にキスをする。

「おばさんも生きててよかった」

ユタが目頭をおさえた。ウラルもこみあげてきた涙をぬぐう。

「ところで、こちらは？」

ユタの視線がアラール八に向けられる。

「怪しい人じゃないから、安心して。アラール八、っていうの。この村が襲われた日、私を助けてくれた人」

アラール八が黙礼する。無表情、むしろ仏頂面だが、不機嫌なわけではない。警戒をといた目は、とても穏やかだった。

ユタはアラール八に向き直った。小柄なユタはアラール八の胸までしか背がないので、見あげるかっこうになる。

「私の姪を助けてくれて、ありがとうございます。あの、どちらの軍の方でしょうか？」

「軍、という言葉に、アラール八の目が揺れた。ジンや スヴェル

のことが頭をよぎったのだろう。」

「スヴェル 義勇軍だ」

ジンが死んでも、アラール八は「どこの兵士だ」と聞かれるたび、こっぴどく答えていた。もう、崩壊してしまった軍隊であるにもかかわらず。

ユタは スヴェル のことをまったく知らないらしく、はあ、とあいまいに答える。

「心配しないで、国軍の人でも敵国の人でもないから。ユタおばさんは、あの日からどうしていたの？」

「二年前の、一回目の襲撃で、この村の半分が死んだ。あの丘に、誰が作ってくれたのか、みんなのお墓があったよ。悲しいけど、嬉

しいことだったね。私は隣のキヤ村じゃなくて、大婆さまと一緒に親戚のいるコナ村へ逃げた。その村も襲われたばかりでね、人っ子ひとり、ねずみの一匹残っちゃいない。で、みんなが逃げたっていうキヤ村へ行ってみたら、そこも血の海だったの。このあたりの村は、ほとんど全滅だった」

「大婆さまも生きているの？」

大婆さまはリタ村の長老だった。占い師、まじない師を兼ねる、村一番の長老だ。

「生きてるよ。それで、この村に帰ってきて、みんなを待とう、ってことになって。出稼ぎに出てた子や、遠くまで狩りに出てたじいさんなんか帰ってきた。ほとんど、また出ていっちゃったけどね。そのあたりからシヨックでか、大婆さまが変になってきて。悪魔が来る、つてずつと呟いているの。みんな、気味悪がつてね」

丘の向こうで、パーン、と乾いた音がする。ユタは目を見開き、ぎよるぎよるとあたりを見回した。長いこと戦場を見てきたウラルは、これがベンベル軍の使う「火薬」の音だと知っている。どうやら、雨で湿った火薬が乾いて使えるようになったらしい。立て続けに火薬の爆発音が響いた。

「そろそろ、危ない。逃げるぞ」

アラーハの低い声。爆発音が、少しずつではあるが近づいてきている。

「ユタおばさん、村の人をみんな集めて」

ユタはきつぱりと首を振った。

「私は、行かないよ」

「どうして!」

「ほかの人も、みんな行かないと思う。どこへ行っても、同じだよ」

ユタは、怯えとあきらめのいりまじった、なぜか開き直ったような目をしていた。

「どうして」

ユタは答えない。

ウラルは唇をかみしめた。村人の全てに向け、あらんかぎりの声をはりあげる。

「私は、レーラズ家のウラルです！ 今、この村は、リーグ軍とベネル軍の争いに巻きこまれようとしています！ 早く、私と一緒に逃げましょう！ 南へ！」

答えが、返ってこない。

ユタは悲しげに首を振り、きびすを返した。

「早く逃げて、ウラルちゃん」

爆発音はさらに近くなっている。おそらくは、もう、丘のすぐそばだ。かすかだが、騎兵の蹄の音も聞こえてくる。どうやら、リーグ軍は総崩れになったようだ。

アラーハがぐつとウラルの腕をつかんだ。今すぐこの村を出なければ、危ない。

ぎい、とドアのきしむ音がした。誰か、一緒に来る人がいるのか。ウラルは耳だけでなく全身全霊を音のした方に向けた。

「この悪魔め！ とうとう来よったか！」

声と同時に、小石のようなものが投げつけられた。アラーハがウラルの前に立ちはだかり、小石を受けとめる。

アラーハの手の中から転げおちたのは、水晶でできた小さな竖琴だった。風神への敬意をあらわす呪具だ。

「今すぐ、この村から出て行け！ ウラルの皮をかぶった悪魔め！ ウラルはかわいそうに、とつくの昔に死んでるんだよ！」

大婆さまは老体にあわない大声をはりあげながら、つきつきと呪具を投げつけてくる。ユタも、止めない。家に入って錠をおろしてしまった。

「行くぞ、ウラル」

アラーハが手を引く。敗走してきたリーグ騎兵が丘をこえてくる。

ウラルは唇をかみしめながら、アラーハについて走りはじめた。

なおも叫び続ける大婆さまの姿がくずれかけた建物の死角になる。アラーハがウルルを小脇にかかえあげた。

ウルルをかかえたまま、アラーハの姿が陽炎のようにぼやける。大きくふくれあがり、曲がりくねって、一頭のイツペルスに変わった。ウルルはいつの間にもやら、その背にまたがっている。黒いたてがみを、ぎゅっつつかんだ。

アラーハは疾駆する。イツペルスは体が巨大で足が長いだけでなく、足のばねが鹿だから馬よりも速く駆けられる。ごおおおお、と耳元で風が鳴った。

ウルルの涙が、風にさらわれて、散っていく。

*

ウルルの村に生き残りがひとりもいなくなつてから半年、ジンが死んでから一年後。

リーグ国は、滅びた。

間章 2「帰郷」(後書き)

第一部 第二部間章完結 第二部へつづく

序章 「傷だらけの来訪者」

「ウラル！」

外からアラーハの低い声がする。アラーハには珍しく急くような口調、不穏な響きをともなつた声だ。

ソファーに座り、ひなたぼっこをしながら繕い物をしていたウラルは立ちあがって、窓の棧に手をかけた。

森の守護者、この森の長として若い雄の挑戦を毎日のように受けていたアラーハだが、秋の終わりと同時に守護者争奪戦も終わったらしい。アラーハは無事、守護者の座を守り抜いた。今は人間たちが狩猟の時期なので、狩人が道に迷ったり、この森のどこかにある聖域 に入りこまないよう、見回っている。三日に一度はウラルにも顔を見せに来た。

「どうしたの？」

ウラルは窓から下をのぞきこんだ。

赤茶の、ふかふかとした冬毛のコートをまとったアラーハが上を見あげていた。アラーハは人の姿で、普段背負っているはずの角の剣を手に持ち、かわりに何かを肩にかつぎあげている。

人間だ。子どものように見えたが、違うらしい。アラーハが大きすぎるせいで小柄に見えるだけだ。ぼさぼさの髪に隠れて顔が見えない。伸び放題のひげ。黄ばんでポロポロになったシャツ。垢のこびりついた肌の色。左の二の腕に刺青がある。火神の象徴である赤い雄牛だ。二本の前足を高くかかけ、棹立ちになったポーズの見覚えのある刺青。どこで見たんだっただかな、とウラルはつかの間、首をかしげた。

思い出すのにほとんど時間はかからなかった。

ウラルは口元を押さえる。悲鳴のかわりに、ぐう、と自分の喉が鳴った。

「フギン。どうして」

何度もがんばって、それから、小さな声が漏れた。

「ドアを開けて、薬を用意してくれ」

アラーハが背負っていたのは、一年来の友人、フギンだった。

フギンの名前を叫びながらウラルは階段をかけおり、玄関のドアを大きく開け放つ。フギンは傷だらけだ。意識もない。ぐったりとして、顔色もおそろしく悪かった。浅く速い呼吸を繰り返している。

「大丈夫だ。生きている」

アラーハの声も心なしか震えていた。

「すぐそこで倒れていた。この家にむかって、歩いてきたんだろう」

「しっかりと。ねえ、フギン！」

ウラルはフギンの肩をゆすった。妙な感触にぎよっとして手を離す。あわててフギンの肩を見ると、右肩から先がなかった。右腕が肩口からないのだ。

「無理をさせるな」

「腕が」

「この傷は、ふさがってる。あの戦いで落とされたんだろう。生きていたんだな」

ぼそり、とアラーハが呟いた。さっきまでの淡々とした声ではなく、やっと友人の無事を確認した、というような安心した響きを感じられた。

「早く、手当てをしてやってくれ」

ゆっくりとした低い声に、ウラルも少し落ちつきをとりもどした。玄関から一番近いドアを開ける。もとはリゼの部屋だった場所だ。アラーハがゆっくりと入ってきて、ベッドにフギンの体を横たえた。

フギンの顔は腫れあがり、何箇所もの傷がある。髪やひげも伸び、やつれて、人相が変わっていた。黄ばんで何箇所も裂けたシャツを着て、そのボロの隙間からも数え切れぬほどの生々しい傷跡や縫い

あとが見えている。

「今までどこで、何をしてたんだろう。生きてるならもっと早く、連絡してくればよかったのに」

ウラルは二階へ行き、薬箱を持って部屋に戻った。ぼろぼろになったシャツを脱がせてフギンの傷の手当てをする。

フギンの胸や腹にミミズ腫れがあった。ひとつやふたつどころではない。両手両足の指を使っても数えきれないほどの、血のにじんだ傷跡があった。

「ひどい。どうしたんだろう」

「こいつが目を覚ましてから聞くしかなさそうだ。もっと、薬になる草をとってくる。足りないだろう？」

ウラルがうなずくと、アラールは大きな体を縮めてドアをくぐり、部屋を出ていった。アラールは薬草に詳しい。本性が草食の動物なのだから当然といえば当然だ。

出て行ってからあまり時間をおかず、アラールは帰ってきた。大急ぎで薬草をとりに行ってくれたのだろう。アラールの足は速い。

ウラルは薬草をもみほぐしてフギンの体に貼り、包帯を巻いた。

背中には鞭のあとだけでなく、火傷や打撲の傷も、たくさんあった。

フギンのわき腹にほとんど白くなってはいるが大きな傷跡がはしっている。これも、あの戦いで傷跡なのだろう。

そつとウラルは傷跡に触れた。とても大きな傷だ。槍かなにかでグサリとやられたような傷。そうとう深かっただろう。おそらくは内臓も傷つけていたはずだ。痛かっただろうに。

ウラルはフギンの腕のない右肩に触れ、それから、残された左手をにぎった。

ウラルはすべての傷に手当てをし、とろとろと半ば眠りながらフギンの意識が戻るのを待った。

フギンが目を覚ましたのは夕方、日が落ちてからだだった。

「ここは、どこだ？」

「フギン、私。わかる？ 生きてたんだ、よかった」

ぼんやりとした様子で、フギンはピントのあわない目をウラルに向けた。

「ウラル？ なつかしいな」

フギンが左手を伸ばす。体中の傷が痛むのか、顔をゆがめた。歯を食いしばり、その奥からうめき声を漏らす。腫れた顔、切れた唇で物を言うのは、かなりつらそうな様子だった。

「無理しないで。どうしたの？ こんなに傷だらけで」

ウラルが話しかけると、やっとフギンの目に光が戻った。

「そうだ、大変なんだ。マライが」

「マライも生きているのね？」

「明日にでも殺されるかもしれない。監獄から逃げてきたんだ」

フギンがうめく。必死の表情を浮かべていた。

「俺は、なんとか逃げ出してこれただけけど、マライは動けなくて、一緒に来れなかった。助けてやらなきゃ」

「監獄？ どうして」

ウラルは部屋の隅に立ちつくすアラーハを見やった。アラーハは何も言わず、じっと見守っている。フギンはアラーハに気づかない様子で、言葉を続けた。

「俺らは、捕虜になったんだ。あの戦いで。それからずっと、檻の中さ。大將や、イズンや、ネザは死んだんだな。ウラルの顔を見てたら、わかる」

「ジンと、リゼと、サイフォスの死体は確認したけど、イズンとネザは、わからないの。でも、生きてはないと思う」

フギンは「そっか」と力なく笑った。

「腕、あの戦いで？」

「いいや。リーグ軍の情勢を教えろ、って拷問にかけられて。俺はそんなこと知らないし、言うもんかって意地張って、自殺しようとしたんだ。俺だけ残ってるのも、後味悪かったから。そうしたら、腕落とすぞって脅されて、本当に切り落とされちゃった」

フギンは笑おうとしたようだったが、顔がひどく歪んだだけだった。痛みのせいだったのか、それとも笑い飛ばせるような内容ではなかったせいなのか。

フギンがもう一度、「早く助けてやろう」とうめいた。フギンの左手が、シーツを裂けるのではないかと思うほど強く握りしめる。

ウルルはその左手の上に、自分の手を重ねた。

「わかった。フギンも早く動けるようにならないと。もう少し、寝ておいたほうがいいよ。私、ここにいるから」

フギンは手の力をゆるめ、自分をあざわらっているかのように唇の端をもちあげた。それから全身の力をゆるめて、ゆっくりと目を閉じる。

寝息が聞こえてきた。

第一章 1「隻腕」 上

戦争の夢を、みていた。

ウラルが自ら剣をとって戦ったことはない。だが、ウラルはそこらの村娘よりは、よほど戦というものを見ている。

矢が耳をかすめて飛んでいった。赤ん坊の泣き声がどこから聞こえる。

布団がこすれる音で目が覚めた。椅子に座ったまま寝ていたのだ、背中や腰が痛い。クツションをもってこればよかった、といまさらながらウラルは思った。

フギンがぐうっとうめいた。大声をあげ、右肩を押さえてのたちまわる。眠気が吹っ飛び、ウラルはあわててフギンの肩をゆすつた。

「フギン、起きて。フギン！」

フギンの動きが止まった。せいぜいと苦しげにあえいでいる。ゆっくり、怯えたように目を開けた。

「気がついた？ おはよう」

ウラルのほうも冷や汗をかきながら、とりあえず挨拶をした。フギンを安心させようとしたのだが、はたして伝わっただろうか。

「私、わかる？ ウラル」

「ウラル？」

フギンはゆっくりと動かしにくそうに唇を開き、何度も目をしばたいた。ひげや髪はのびぼうだいで頬もこけ、ひどく顔は老けこんでいるのに、そのしぐさは最後に会ったときと変わらない。むしろ子どもっぽかった。

「本当にウラル？ よかった、夢じゃなかったんだな。久しぶり、ウラル」

「おかえり、フギン。大丈夫？ すごく、うなされてた」

フギンは横たわったまま肩をすくめ、痛かったのか顔を思いきり

しかめた。

「右肩、切り落とされた夢を見たんだ。一年も前のことなのにな。まだ、よくこの夢を見るんだ。この腕の話、したよな？ ぼんやりとしか覚えてないんだけど」

フギンはげんなりとしたような表情を作ってみせる。

「困ったな、すごく発音しにくい」

ウラルの知っているフギンは、どちらかといえば早口な方だった。ゆっくりと話されるのは新鮮というか不自然というのか。ひどく違和感があった。

話さないで、とウラルは言いたかったが、どうやらフギンは話さずにはいられない様子だ。無理もない。まる一年も檻の中に閉じこめられていたら。

「お水、飲む？ しみると思うけど」

「ああ、うん。飲みたいな」

体を起こそうとするフギンを、ウラルは手伝った。背中に手をさしいれただけでも痛むようで、フギンがうめき声をあげる。襟ぐりを噛み、声をあげるのを無理やりこらえる様子を見せながら、やっとのことでフギンは半身を起こした。

「大丈夫？」

「だいぶ、痛いな」

へらへらと苦しげに笑っている。この体で、どうやって隠れ家まで帰ってきたのやら。

ウラルはとりあえずベッド脇に置いておいた水差しをとって、フギンに水を飲ませてやった。

「ありがとう」

空元気もつきたのか、苦しげな笑みをフギンは見せた。

「大丈夫？」

「うん、少し休めば、大丈夫だよ。ここにはウラルだけ？ マームさんは？」

「私と、アラーハのふたり。マームさんは帰ってきてない」

「アラーハも無事に生き残ってたか。よかった。会いたいな」
ウラルは思わず笑ってしまった。

「昨日、あなたが起きたとき、隣にいたのに。覚えていない？」
フギンは首をかしげている。そうするだけでも、片目をつぶるだけでも痛いだろうに、フギンは笑いながら首をかしげている。

「ほら、腕のこと、説明してくれたときだよ」

「覚えてないなあ。俺、この腕のこと、何か言ってたっけ？」

「もう。起きたときは覚えてたのに。薬、とってくるね。包帯かえなきゃ。楽にしてて」

二階への階段を上がり、キッチンに置いてあった包帯と薬草を油漬けにした瓶を手にとった。

玄関の方でノックの音がした。ウラルが返事をする前にドアが開く音がする。どうやらアラーハが心配して来たらしい。フギンの歓声が聞こえた。

ウラルは薬の瓶をテーブルに置いた。ガーゼを敷き、薬液を綿にしみこませる。あれだけの傷だ、漬けてある化膿止めや消毒の薬草もすぐに底をついてしまっただろう。

アラーハの太い笑い声が聞こえた。めずらしく笑っている。いっになく機嫌がよさそうだ。薬の瓶と包帯をかかえてフギンの部屋へ戻る。

「包帯をかえるのか？」

アラーハはがっしりとした手でフギンを起こしてやる。フギンはまた袖口を噛んで声をこらえた。

「声を殺さなくていい。こんな森の中で叫んでも、近所迷惑にはならないからな」

アラーハが彼らしくもなく、妙に人間くさいことを言った。フギンは苦しげに笑ってみせる。

「ウラル、驚かせたくなかったから」

思わぬ一言に、ウラルは一瞬手を止めた。

「あ、格好つけすぎたかな」

ウラルは肩をすくめ、フギンの肩にテープではりつけられていたガーゼの一枚を、容赦なくべりっとはがしてやった。痛みにはフギンがうめく。

「もうちよつと、そつとやってくれよ」

ウラルは笑った。次からはゆっくりと優しくはがしてやる。

フギンの上半身があらわになった。傷跡と、ミミズ腫れと、火傷のあと。赤く充血している部分。紫になっている部分。青や緑になった部分。膿んでいる部分。左手は、傷だらけではあるが無事なのに対し、右手は肩から先がない。あらためて見てみると、気持ちのよくないものだった。

フギンはわき腹の傷を指した。

「こいつのせいで捕まっちゃった。槍で突かれたんだ。死んだと思っただ。すごい量の血が出たからな。実際、意識も失っただけだ。目が覚めたら、牢屋だった」

ウラルは、うなずいた。どう反応すればいいのかわからなかった。

ぬるま湯にタオルをひたし、傷にさわらないよう気をつけながら、体をふいてやる。軽くふいただけで、タオルは茶色く染まってしまう。どうやら監獄では体をぬぐうことすらできなかつたらしい。

「これ、ぜんぶ鞭のあと？」

「いや、こっちは焼きゴテで、この背中のは棍棒。でも、やっぱり鞭のやつが多いかな」

「ひどいことをするのね」

「マライはもつと悲惨だぞ。目、えぐられてた。手に杭を打ち込まれたやつもいた」

息を呑み、ウラルは震えた。タオルをしぼる手が、つかのま止まる。

「マライはどこにいるの？」

「監獄」

「どこの？」

「ヒュグル森を抜けて南西、アラス地区に向かっていると、ヒュガルトって街がある。いつだったか、みんなで夏祭りに行つた。あの街だよ。そのヒュガルト街の北にでつかい監獄ができた。戦で捕らえられたリーグ人捕虜を収容する場所として」

ヒュガルト街にはウラルもよく行く。市場で生活に必要なものを買い、森でアラーハに教えてもらった薬草をとって売っていた。ヒュガルト街の北の監獄のことも知っていたが、そこにフギンとマライがいるなど、考えもしなかった。

「そこにマライもいる？」

フギンはうなずいた。

「早く、助け出してやろう。今もどんな拷問を受けてるか、わかつたもんじゃない。もう、一人で起きあがるのもつらいらしいんだ。目も見えてない。なのに、毎日鞭で打たれて。明日にも殺されるかもしれない。畜生」

くやしそうに歯の奥をかみしめ、フギンは左手のこぶしで足を殴つた。

「アラーハ、頼みがある」

「何だ」

フギンは無事なほうの手で、腕のない肩をさすつた。

「義手、作ってほしいんだ。棒切れか何かでいいからとりあえず服を着たら片腕がないこと、はたからはわからないようにしたい」

罪悪感と責任感と、こらえようのない怒りがいりまじつた口調。

底光りのする目が怖かった。

やはりフギンはマライを救うため戦う気である。利き腕を失い、筋力も落ちた体。戦える状態ではないことはわかっているはずなのに。

アラーハが暗い目つきでうなずいた。ウラルは目をそらす。フギンの目も、腕も、直視する勇気がない。

*

ウラルは市場にいた。夏祭りにこのヒュガルト街へ来たときの活気は見る影もない。

あの祭りの時期を境に北部地方の特産物は姿を消し、南部地方の穀物も国境で戦う兵士らにほとんど送られていた。南北交易の主要都市として栄えていたヒュガルト街だが、品物がなくなつては寂れるばかりだ。

フギンは、追われている。それなのにフギンは、もう一度、監獄へ乗りこもつとしていた。むろん、ウラルとアラーハも協力する。イズンを見捨てるわけにはいかない。

道の確認をしておいても損にはならないだろう、と町の北へ向かつてウラルは歩いていった。

市場が住宅街になり、なにかの工場がたちならぶ道になり、それでも広い道をたどつて歩いた。道は工場から、また住宅街になつた。どうやら貧困層のようだ。道に座り込んだ人々の目が、ウラルが背負っている袋にそそがれているのがわかる。道はカーブになり、その先に高い石壁に囲われた監獄が見えた。貧困層の家々とはほとんど離れていない。近づくだけなら簡単そうだ。

それだけを確認してウラルはもときた道を戻ろうとした。

子どもが、立ちほだかつていた。両手をさしだし、ウラルがつつ立っているのを見て、じれたようにウラルが背負っている袋を指す。子どもの後ろには老人が、老人の隣には病氣らしい女が、子どもと同じ目でウラルを見ている。

「お嬢さん、あなたに風神の祝福を」

老人が帽子をさしだした。

子どもと、もう一度目があつた。村が襲撃されたときウラルが抱いて逃げ、隠れた陶芸窯で恐怖のあまり絞め殺してしまった赤ん坊が目奥に浮かぶ。死ぬことがわかつているのに、かたくなに村に残った叔母のぎよろぎよろした目も、一緒に浮かんできた。

ウラルは子どもを押しつけ、足早にその場を離れた。子どもの視

線が、ウラルの背中にぶつかっている。ウラルは走りだした。

なぜ自分が走っているのかわからないままウラルは足を速め、走り続けた。

第一章 1「隻腕」 下

「具合、どう？」

フギンの部屋に入り、ドアを閉める。病人特有の重たいにおいと、フギンの体にはられた薬草のにおいが鼻をついた。

フギンがこの隠れ家に転がりこんできて、四日になる。まだ一日の大半をベッドの上で過ごしているが、家の中を歩きまわるくらいなら大丈夫らしい。帰ってきて一日目、二日目は自分で体を起こすことすらできなかつたのだから、すごい進歩だ。

フギンは外を見ながらぼんやりとしている。服の右そでが妙な感じにぶらぶらしていた。ほかの部分はちゃんと着られた服らしい形をしているのだが、右側のそでだけが、ハンガーにかけられた服のような、中身のない、不自然なかつこうをしている。

「だいぶ、よくなったよ」

具合はどうか尋ねてから、だいぶ時間がたって、返事が返ってきた。

「何か欲しいものはある？」

「ちよつと喉がかわいたな。お茶、いれてもらっていい？」

ウラルはうなずいて、外へ出た。ちよつとマームが残っていたハーブ園から新芽がとれる時期だ。ほとんど雑草化しているハーブで辛みが強いのだが、とても香りがいい。

別にドライハーブでもいいのだ。実際、ウラルが茶を入れるときは、乾かしてあるものを使う。でもフギンには、新鮮なものをたっぷり使ったお茶を飲ませてあげたかった。マライを助けにいけないイライラをほんの少しでもやわらげてやりたい。

「おまたせ」

「ありがと。上から見てたよ」

フギンの視線の先、窓の外を見ると、のび放題のハーブ園が小さく見えていた。

熱いお茶をふたりで一口、二口すすった。甘みが少ないので、少しハチミツを加える。

ウラルは棚に置いてあった薬箱を持ってきて、フギンのベッド脇に置いた。

「薬、かえよつか」

フギンが自分で包帯をほどきはじめた。ウラルもフギンを助けて包帯をほどき、ガーゼをはがしていく。

今までに何度も怪我をしてきたからなのだろうか。傷の治りがおそろしく早い。四日前まで血をだらだら流していた傷跡もすっかり乾き、かさぶたになっていた。

「まだ痛む？」

「痛いというよりは、かゆいな」

フギンはぼりぼりと頭をかいた。髪をととのえ、のび放題だったひげを整えたおかげで、かなりフギンらしさを取り戻している。

「ねえ、フギン」

ウラルは薬液の入ったボトルにガーゼを漬けこみながら声をかける。フギンが手持ちぶさたそうに窓の外を見ながら「なに？」と答えた。

「あの戦いのこと、聞いていい？ 気になってたの
フギンの表情が曇った。

「スヴェル 軍が全滅した、あの夜のこと？」

「私が眠り薬を飲まされたからのこと」

フギンがそつとわき腹をさすった。わずかに赤みを帯びた、長い、そつと深かったであろう傷。ウラルはそれにガーゼをあて、ていねいに包帯を巻いていく。

「そつか、知ってたんだな。何もわからないまま、寝ちゃったんだ
と思ってた」

「お酒に薬を入れたのはジンよね？ フギンが『それはひどいんじ

やないか』って怒鳴る声が聞こえた。アラール八の声も。『どういうことだ』って」

「うん、薬をいれたのは頭目だったらいい。俺、そんな問答無用でウラルを追い出すようなこと、してほしくなかったんだ」

フギンが遠くを見る目つきをした。

「でも、あとから考えたら、それでよかったんだろうな。ウラルが無事に生き残っててくれて、俺、本当にうれしかった」

にかつと人懐っこい笑みを浮かべる。やつれたせいか、少年のような底抜けの明るさはない。一年前にゴウランラ の要塞で見せた、死を前にして見栄を張るような笑いかただ。

「ウラルとアラール八が行った次の朝、ベンベル軍が襲ってきた。あのゴウランってトカゲ、本当に嫌なやつだったな。本当にスルスル城壁を登ってきやがるんだ。ゴウランラ、岩山の上にあつた。普通の敵が相手ならだいぶ有利なんだけど、あれはさすがに、きつかった。俺たちも熱湯をぶっかけたりして応戦したんだけどな」

フギンが包帯の上からわき腹の傷跡をおさえた。

「昼になって、いったん敵は退いた。たぶん、ゴウランが疲れやすかったんだろうな。ゴウランがいなかったら、そうそう簡単には攻められない要塞だから」

すつとフギンの目つきが暗くなる。

「でもな、このまま籠城しようにも、敵にゴウランがいる限りゴウランラにこもりつづけることはできない。ちょうどアスコウラが近くまで来ていたから、俺たちは敵が退いた隙をねらって騎兵を出して、一気に挟み撃ちにかかったんだ。ムールもいるしな。数は少ないとはいええ、ネザの畏もあったし、地の利はあると判断したんだ。頭目が」

その先は言わなくても、ウラルにはわかった。

フギンがマグをとり、お茶を飲んだ。ウラルも自分のマグを取り、唇を湿す程度に茶を飲む。

フギンは続きを言わない。

「それで、負けたのね」

居心地の悪い沈黙に耐えかねてウラルが確認すると、フギンはゆつくりとうなずいた。

「頭目、負けること、わかってたと思うんだ。やけになったのか、違うのか……。やべ」

フギンが目頭を押さえた。後ろを向いてしまう。

フギンの体に包帯を巻き終えていたウラルは、ただじっと、後ろを向いて嗚咽をこらえようとやつきになっているフギンの二の腕に刻まれた雄牛の刺青をながめていた。雄牛は軍神である火神の紋章、勝利を約束するしるしだ。その雄牛もフギンがしゃくりあげるのにあわせて、苦しげに体をゆがめている。

「俺さ、最近、夢を見るんだ。死んだ仲間が次々出てきて、俺を責めるんだ。なんで、お前だけ生き残ったんだってな」

「そんな！」

思わず声をあげたが、フギンは顔を伏せたままだ。つつ、と頬をつたった涙をフギンは一瞬、なくなってしまった右手でぬぐおうとしてから、あわてて左腕でぬぐう。

「でも、夢って妙に現実感あるだろ。目を覚ましてからよく考えてみたら、そんなことをみんなが言うはずがない、ってわかるんだ。死んで本望だって、言うに決まってる。ずっと死ぬのを覚悟で戦ってたんだ」

「そうだよ。フギンが生きていることを、責めるなんて。むしろ、喜ぶはず」

「わかってる。なんだけどな、俺も、こうやってのうのうと生きていて、よかったのかなって思うんだ。そうしたら耳元で、そうだ、お前だけ生きているのはおかしい、って、悪魔の声がするんだ」

フギンがやっと顔をあげた。もう涙は流していなかったが、目が赤く充血していた。

「俺たち兵士や軍人は、戦場には悪魔がいる、って考えてる。人の

心を読んで、願望とかそういうものを幻覚として見せるんだって。死んだ人とかにはけて現れることもあるらしい」

それから、ぽつりと小さな声で続けた。

「俺、こいつに取り憑かれたみたいなんだ」

フギンがウラルの顔をまっすぐに見る。助けを求める目つきだ。

そんなこと言わないで、とウラルが言いかけた瞬間、それを止めるようにフギンが笑った。また、フギン特有の明るさのない、死を前にして見栄を張るような笑いかただ。

「急にこんなこと言い出してごめんな。泣いたりして」

はずかしそうに目をそむける。

「忘れてくれないか？ ごめんな」

第一章 2「物乞いの少年」 上

ジンの黒いマントが寒風にあおられている。

フギンが着ている服の右袖は、ぱつと見では、ほとんど普通と変わらない。棒切れに布を厚くまいたアラーハの義手をつけているからだ。だが、関節が曲がらないうえ微妙に左右の太さが違うので、やはり不自然だった。今は、大急ぎでフギンの大きさに仕立てなおしたジンのマントを着て、腕を隠している。

きりりとしまった固い表情。目は鋭く、憎しみの炎をちらつかせている。ぐつと引きしめられた口元には、マライを助け出すという絶対的な決心と、助け出せなかったら自分も死んでしまおう、という悲しい思いが同居していた。

これが、あのお調子者のフギンなのか。ジンをからかい、冗談を言って、みんなを笑わせていた、あのフギンなのか。

「お前、行かないほうがいいんじゃないか」

じつと黙ったまま街の城壁から監獄の外壁を見つめていたフギンに、アラールハが声をかけた。太い、低い声。

「俺に、行くなっか。俺がそんな腰抜けだと思っのかよ」
フギンは喧嘩腰だ。

「行かなければお前の気が済まないのは、わかる。だが現実を見る。お前は追われている上、顔が割れている。片腕がなくて目立つ。戦うことも満足にできないだろう。俺がひとりで行ってくる。必ずマライを連れて帰ってこよう」

「この野郎！」

フギンがアラールハの胸ぐらをつかむ。アラールハのぼうがずいぶん背が高いので、ぐつと引き寄せ格好になった。

そこまでされてもアラールハの目に、怒りはない。淡々とした静かな色だけがある。

「ちよつと、フギン！」

「ウルルは黙ってる！ これは、俺の復讐戦なんだ」

ふっと、無造作にアラール八がフギンの手をふりはらった。本当に軽く力をいれただけのように見えたのに、フギンは体勢をくずしよるめいてしまう。

「わかった。そこまで言うのなら、俺は、止めない」

アラール八の目が光った。アラール八が着ているつやつやとした毛皮のコートも、一本一本の毛が朝日に光っている。

「ただ、ひとつだけはつきりさせておけ。お前はマライを助けるために監獄へ行くのか、自分が死ぬために行くのか」

フギンがうつむいた。痛いところをつかれたようだ。ぎりりと奥歯をかみしめているのが傍目にもわかる。

「決まってるだろ」

「それならマライを助けることを第一に考える。もし助け出せなかったときはすぐに逃げてくれ。死ぬまで戦おうと思うな」

アラール八の目が揺れた。それを隠すかのようにくるりと後ろを向いてしまう。

ふたりともジンや スヴェル のことを考えているのだ。

「俺が城壁の近くでひと暴れしよう。今のお前に戦うことは無理だ。敵をひきつけるのは俺の役目、マライを助け出すのは監獄の内部に詳しいお前だ、フギン」

自分も戦えるかとわかってほっとしたのだろうか。フギンの表情がゆるんだ。わかった、とすねたように答える。

「私は？」

ウルルははなから非戦闘員だ。一緒に行っても足手まといになるだけだろう。援護だろうがなんだろうが、手助けになることがしたい。

「ウルルは俺と一緒に来て。俺はこの通り、片腕だ。片方の腕だけじゃかんぬきをはずすのに手間どるから」

思わぬ言葉にえっ、とウルルはつまつた。たしかに片腕ではかんぬきをはずせない。だが、それだけのためにウルルが行くのはあま

りにも危険だ。

「ああ。そうしてくれ」

アラー八まであっさりとうなずいてしまった。

「そんな。私」

とまどうウラルの肩にぽんと暖かな手が置かれた。ウラルの肩をすっぱり包みこんでしまうほどの大きな手だ。

「しっかりフギンを補佐してくれよ。お前なら、大丈夫だ」

有無を言わさぬアラー八の口調にウラルはおずおずとなずいた。

「じゃあ、市場へ行こうぜ」

フギンが城壁を降りる階段をくだっていく。続こうとしたウラルの肩をもう一度、アラー八がつかんだ。早口で小さく呟く。

「ウラル。お前は、フギンのブレーキ役を頼む」

「ブレーキ？」

ああ、とうなずいたアラー八の表情はいつにもましていかめしい。

「絶対に、あいつを死なせるな。お前がいればやつもそうそう無茶はできん。頼んだぞ。死ぬか捕まるなら捕まる方を選べ。必ず助け出す。親しいやつを失うのは、もうたくさんだ」

城壁の下から「アラー八、ウラル、何やってんだよ！」とフギンが叫んでいる。今行く、と答え、ウラルは階段をくだりはじめた。

市場でウラルは服を買った。ウラルが着るには少しサイズの大きい上着と、足にぴったりするズボン、それから頭から肩にかけてをすっぱり覆う頭巾だ。ジンが死んだ年以來の男装だった。

それから武器屋へ向かう。つけひげと大きな帽子で人相を変えたフギンは短い槍を買うか、片手で扱える剣を買うかで迷っていた。

「使い慣れてるのは槍だけだなあ。でも目立つし。だからといって、左手でサーベルを扱う自信はないしなあ」

ぶつぶつ言っているフギンを横目にアラー八はあいかわらずの無表情で店先に立ちつくしている。アラー八の武器はいつでも巨大な剣の形をした棍棒、イッペルスの角だ。鉄の武器はどうやら嫌いら

しい。

「なあ、アラーハ。どうしようか？」

「左手だけでも使える武器を使ったほうが、よくないか？ できれば、ネザがよく使っていたような武器も買っておいたほうがいいと思うぞ」

ネザは スヴェル の軍医であり、カラクリで動く槍ぶすまや、蜂の巣を敵の陣営に投げこんだりする戦法がお得意の奇策士だった。

結局フギンは片刃のサーベル一振りと、投擲用ナイフを何本かと、まきびしを一袋買った。アラーハも不本意そうな顔をしながら、防護用の革よろいを買う。ウラルも威嚇のため短剣を一振り買わせてもらった。

「これは、ウラルの護身用」

ぼん、とフギンから渡されたのは、袋に入ったマキビシだ。鉄製の小さな杭が三、四本べつべつの方角に突き出たもので、地面にまき、追ってくる敵の足を傷つけるためのものだった。

「いざとなったら相手の顔めがけて投げつけてやれ。できれば目を狙うんだ」

ウラルはうなずき、一緒に渡された革手袋と一緒にそれをしまいかんだ。

人気のない場所を探して着替え、腰には短剣をつるす。ジンの形見、儀式用のアサミイも一緒につるした。すべてがうまくいくよう、風神に祈りをささげる。

「いつ、行くか」

「夜のほうがいい。少しは警備がゆるむ」

人気のない路地にもぐりこみ、アラーハとフギンが作戦会議を始めた。

「昼間のほうが囚人の一斉蜂起を狙えるんじゃないか？」

「それなら夜でも同じさ。騒げば全員、目を覚ます。ただ暗くて目が見えにくくなるから不便になる。監獄の構造はかなりやつかいな

んだ。リーグ建築とはちょっと違うから。俺はまあ、頭に地図は入れてきたし、大丈夫だけど」

「俺も大丈夫だ。暗闇でも昼間と同じように見える」

アラール八の目、闇に光る獣の瞳はこういうとき強い。誇張でもなんでもなく、アラール八の目には一寸先も見えないような暗闇でも昼間とほとんど同じくらいに見えるのだ。その上、おそろしく鋭敏な聴覚と嗅覚も持ち合わせている。

「じゃあ明け方に突入しよう。ナタ草がオレンジになって、少ししたら」

「俺はどのあたりで事を起こしたらいいんだ？」

フギンが地面に簡単な地図を描きはじめた。利き腕でない指で描いているせいか、妙な感じに線が曲がる。だが、何度も練習したのだろう。十分にわかりやすい地図だった。

監獄に入るには、まず二枚の高い壁を越えなければならない。ゲートは南、西、東の三箇所。南が正門だ。

一枚目の壁には、夜は警備員がいない。ゲートの格子に足をかければウラルでも楽に登れる。問題は二枚目の壁だ。こえたところに警備員の詰め所がある。夜通し二、三人の警備員がいるそうだ。

「アラール八はここでひと暴れしてほしいんだ。警備員が三人いたら二人は殺してしまつていい。一人は生かしておいて、ほかの警備員を呼ばせる。おそらく十人くらいは出てくるはずだ。それをナタ草が黄色になるくらいまで引きつけてほしい」

アラール八が低く「わかつた」と呟いた。

「俺とウラルはその隙に警備員の制服と鍵を盗む。監獄の鍵を開けて、二枚くらい分厚いドアを開けなきゃならない。その先にずらつと独房が並んでる。そのひとつがマライの部屋だ」

不意にフギンがぱつと立ちあがった。

「誰だ」

「ごつ、と何か地面に落ちる音がする。」

フギンがぐつと膝を落とした。剣を抜こうとしたのだろうか。だ

が、どうやらなくなってしまった右腕で剣を抜こうとしたようだ。とまどったように一瞬フギンの動きが止まる。その間がどうやら幸いしたらしい。おそらく右手があれば、剣を抜くが早いかな、斬りつけていただろうから。

子どもだった。狭い路地で驚きのあまり尻餅をついている。その顔に、ウラルは見覚えがあった。前に監獄の前で会った物乞いの子どもだ。

「どこから聞いていた」

アラール八の声も険しかった。

子どもは答えない。恐怖のあまりか、もしかすると口がきけないのか、唇をふるふると震わせるばかりだ。

前に会ったときはじっくり観察する間もなく逃げてしまったが、その時よりずっと、あどけなく見えた。年のころは十を少しこえたくらいだろう。やせて、目ばかりがぎよるぎよるしている少年だった。

一瞬、ウラルが殺してしまった赤ん坊の泣き声が耳によみがえった。ぐつと歯の奥をかみしめる。

「答えないと、斬るぞ」

フギンは左腕でサーベルを抜いている。

ウラルと少年の目があった。その瞬間、耳の奥に響き渡っていた赤ん坊の泣き声が、ぱたりと聞こえなくなる。

「待って」

ウラルは右腕を伸ばし、フギンを制した。少年の前にしゃがみこみ、しっかりと目をあわせる。

「あなた、私を見かけて、ついてきたんじゃない？」

子どもがすぐるようにウラルの目をのぞきこんできた。死にたくない、という気持ちがとても伝わってくる、涙にうるんだ、澄んだ目だった。

「知りあいのかな？」

「前に一度、少し話したことがあるの。ね？」

少年に同意を求めると、こくりと小さくうなずいた。

フギンが剣をおさめる。困ったようにアラーハと顔を見あわせた。

「名前は？」

できるだけ穏やかな声で尋ねてみる。少年はおどおどと視線をさまよわせた。

「ナウト」

ナウト。徴兵され、ベンベル軍と戦って戦死した、ウラルの兄と同じ名前だ。なつかしさに全身が震えた。その震えをナウトは怒りのためと勘違いしたらしい。殺さないで、と後しざりしながら小さく叫んだ。ウラルは首をふり、ほほえんでみせた。

「大丈夫。殺さない」

きっぱりと言い切る。ナウトが安心したように肩の力を抜いた。

「だけど、このまま帰らせるわけにはいかないよな」

フギンの一言に、またナウトは肩をこわばらせてしまった。

「お前、物乞いだろ。仕事はできるか？」

仕事？ とナウトが小さく聞き返す。フギンがポケットを叩くと、ちやり、と銅貨の鳴る音がした。

「俺ら三人をかくまってくれ。今夜一晩、家に泊めてほしい」

ナウトがかすかに首を振った。緊張しているのか、表情も動作も固くこわばっている。

「食事、だせない」

「俺が払う。お前の分も、今日の夜と明日の朝の食事、作ってやるよ」

「三人も寝る場所、ない」

「土間でも、家の裏でもいい。一晩、泊まればいいんだ」

「兄ちゃんが、困る。兄ちゃん、疲れてる」

どうやら、ナウトは兄とふたり暮らしらしい。兄も物乞いなのだろうか。

「お前の兄ちゃんの邪魔なんか、しないさ。兄ちゃん分も、食事、

用意してやる」

きらっとナウトの目が輝いた。

「いくら出してくれる?」

「銅貨十五枚」

銅貨一枚で芋一個が買える。十五枚あれば、農民ひとりが十日は暮らせる。

「二十枚なら、いいよ」

「十五枚と、食事代を持とう」

「十八枚」

「しつこいな、よっぽど困ってるのか」

「困ってる」

「わかった。十八枚だそう。そのかわり、別の仕事もやってくれ」

フギンは苦笑しながら、銅貨の入った袋をだした。中身が全部銅貨だとしたら、どう見ても二十枚以上は入っている。袋の中身を数えもせず、フギンは袋ごと子どもに渡した。

「別の仕事って、なに?」

「明日の朝はやく、俺らは、あの監獄の中にいる友達を助けに行くで、このアラール八ってあんちゃんが、門で役人を引きつける役をする事になった」

アラール八は「あんちゃん」と言われるほど若くはないが、どうやらナウトにはちゃんと伝わったようだ。

「すごく危ない役目なんだ。少し離れた路地裏とか、見つかりにくい場所から、お前はアラール八を見てる。それで、アラール八がやばそうになったら、西の門へ走って、大声で叫んでくれ。よく覚えておくんぞ。『囚人が逃げたぞ、三人だ』」

「囚人が逃げたぞ、三人だ」

ナウトが復唱する。次ははっきりとした声だ。フギンが満足そうにならず。

「そうだ。しつかり覚えとくんぞ」

ナウトが満面の笑みでうなづく。

次の瞬間、フギンがナウトの横っ面をぶん殴った。

「何するの、フギン！」

「こいつ、俺の財布、すろうとした」

ナウトが顔をゆがめて立ちあがる。どうやらフギンはちゃんと加減して殴つたらしく、そこまでひどい怪我にはなっていなかった。

「次やつたら覚えとけ。俺は元、盗賊だ。すりや盗みの手口はしっかり頭にすりこまれてんだよ」

フギンの声には、旅人を襲うオオカミのように粗暴な迫力がある。今にもサーベルを抜いてナウトにつかみかかりそうな、凶暴な目だ。しばらくその目でナウトをにらみつけたあと、ちらりとアラー八の方を見やった。

「こいつ、信頼できると思うか？　今ここで殺したほうがいいかもな」

そんな、と言いかけたウラルを、アラー八が目で制してきた。

「こいつの誠意を見て、決めよう。どうせ今夜はこいつの家に泊まるんだろう」

アラー八とフギンがふたりでナウトをにらみつけた。ナウトは小さくなって震えている。

「市場へ行くぞ」

フギンがナウトの腕をつかみ、強引に立たせた。小突きながら歩かせる。

「なにも、そんなに言わなくてもいいじゃない！」

ウラルの言葉にフギンは一度振り向き、すぐナウトの進む方向に目を向けた。フギンが着ているジンの黒マントが、ぱっとひるがえる。

「少しは脅して、こっちの力を見せつけないとな。ウラルは優しすぎるんだよ。俺もうかうかしてたら一文なしになるところだった」

ナウトの後姿がびくっと縮んだ。こんなに小さいのに、物乞いや盗みで生計を立てなければならぬ子なのだ。一緒になってこれ以上怯えさせるなど、ウラルにできるわけがない。

職人町を抜け、市場へ戻る。ナウトの目つきが鋭くなり、きよろきよろと周りを見回すようになった。もしまったくナウトのことを知らなかったら、田舎から出てきた世間知らずの子どもなのだろうと、気にもとめなかっただろう。だが、今のウラルはナウトがスリやかっぱらいで生活した子どもだと知っている。獲物を探しているのだ。

「ナウト、夕ごはん、何が食べたい？」

つとめて明るい口調で話しかけてみる。ナウトがびくりとウラルのほうを振りかえった。

「好きなもの作ってあげる。私、料理には自信あるよ」

フギンとアラール八が顔を見あわせた。ナウトはおどおどと視線をさまよわせている。ずいぶん迷った後に、おいしいもの食べたい、と小さく呟いた。

「おいしいものかあ。じゃあ、おいしそうなもの、探そうか」

ナウトは困ったような顔をしながら、はずかしそうにはにかみ笑いを浮かべた。

第一章 2 「物乞いの少年」 下

*

ナウトの家は貧民街の一角にあった。ほかの家よりは少し立派、とはいっても、やはりあばら家だ。隙間風のびゅうびゅう入ってくる小さな部屋に入ると、ほこりとかびと、肉か何かが腐ったようなにおいがした。

フギンとアラールは荷物をおろし、適当にくつろぎはじめた。フギンが右手の義手はずし、ごろり、と転がす。

「あの人、腕」

ナウトがぎゅっとウラルの腕をつかんできた。

「不幸なことがあつてね、フギンは右手をなくしたの」

ナウトの頭をなでてやりながら、ウラルは食料をどっさり入れたきた袋を開けた。中身を順に出していく。チーズ。ハム。サラミ。パンをどっさり。それから初ものの野菜。

「僕、こんなに食べきれるかな」

「チーズとサラミは保存がきくし、野菜は今日中に使ってしまうから大丈夫」

ウラルの説明にナウトはこくりとうなずいた。だが、まだ困ったような目つきでウラルを眺めている。何かほかに尋ねたいことがあるらしい。

「どうしたの？」

ナウトははずかしそうに目をそらした。

「なんで、お姉ちゃんは優しくしてくれるの？ あの二人は、怖いのに」

ウラルは思わず吹きだした。あの二人は怖い、か。

ナウトがびくっと体を震わせる。急に笑いだしたので驚いたようだ。ひとしきり笑ってから、ウラルは真顔になってナウトに向き直

った。

「私には、ナウトっていうお兄ちゃんがいたの。あなたと同じ名前、ベンベルとの戦争で、戦死したらしいんだけどね。親近感、っていうのかな。なんか、放っておけなくて」

ナウトは黙りこみ、ばつの悪そうにうつむいてしまった。

「いいんだよ、悪く思わなくて。親がつけてくれた名前をそんな風に思うなんて変じゃない。たまたま同じ名前だっただけなんだから、ただ、懐かしかっただけ」

ウラルは言いながら部屋を見まわした。テーブルがひとつ、椅子が二脚に、ベッドが二脚、置かれている。そうだ、ナウトにも兄がいるのだ、とウラルは思い出した。

「ナウトのお兄ちゃんって、何をしてる人？」

「金髪の人のおうち、作ってる。三日に一度だけ帰ってくるんだ。

今日は帰ってくる日」

「どんな人？ 歳は？」

ナウトが七歳くらいだ、兄ちゃんといってもせいぜい十歳くらいだろう。なのに仕事が土木とは。けれど、ナウトの答えは違った。

「あの怖いお兄ちゃんより、ちょっと、年上くらい」

「怖いお兄ちゃん」とはフギンのことだろう。だとすると二十代後半か。これはもはや「兄ちゃん」どころではなく「お父さん」に近そうだ。十人兄弟の長男と末っ子といったところだろうか。

「ずいぶんナウトと歳が離れてるんだね」

「本当のお兄ちゃんじゃないから」

はにかみ笑いを見せるナウト。どうということ？ とウラルは首をかしげて尋ねた。

「住む場所なくて、困ってたら、一緒に住むか？ って、言ってくれた。そのとき、初めて会ったんだけどね。りっぱな服着て、でもすごく疲れた感じの兄ちゃんに」

ナウトは座りこんで、床に絵を描きはじめた。床は、土間だ。ほんのり湿った砂の上に似顔絵らしいものを描いていく。

「兄ちゃん、それまで何やってる人だったのか、どこで暮らしてる人だったのか、教えてくれなかったけど、この家を見つけてくれて一緒に住ませてくれたんだ。着てる服とか全部売って、ベッドも買ってくれた。食事は、兄ちゃんが帰ってきた日は、食わしてくれる。でも、帰ってこない日は、だめなんだ。だから、盗んだりして、暮らしてる」

ナウトの似顔絵は、かなりつたない、稚拙なものだった。馬のような面長の顔で、頬骨が突き出ているのが誇張して描かれている。おだやかに笑う目元と口元。

ナウトがぱつと立ちあがった。

「そうだ、いいものを見せてあげる」

「いいもの？」

「兄ちゃんの、だからもの」

ナウトは走って行って、ベッドの下に手をつっこんだ。

取り出されたのは、この家には不釣り合いなほど立派な、細長い箱だった。側面と蓋はビロードのような布で覆われている。縁取りは真鍮だ。ナウトがカポツと蓋をあける。

一枚の大きな羽が入っていた。白と茶色の細かいまだら模様だ。トンビの尾羽だろうか。それにしても入っている箱が立派すぎる。

「ちよつと、見せてみるよ」

様子を見ていたフギンが近寄ってきた。ナウトが「いや」と箱を閉める。

「ウラル姉ちゃんだから見せるんだよ。いやだ」

フギンは苦笑して、おとなしく引き下がった。

「何の羽？」

小声でナウトに聞いてみる。が、ナウトは、「珍しい鳥だっつてこ」としか、知らない」と答えただけだった。

「兄ちゃんがすごく大事にしてるんだ」

箱を元通りベッドの下にしまいこむ。

「そうだ。私、ナウトの似顔絵、描いてあげる」

ナウトの顔がぱつとほころんだ。

土間にすわりこみ、ウラルはじつとナウトの顔を見る。ナウトは「待って」と一言、またベッドの下をごそごそやりはじめた。出てきたのは木炭だ。これで壁に描いてよ、とにっこり笑う。

「なんか、緊張するなあ」

笑いながら、ウラルも木炭を受け取った。

壁に似顔絵を描いてやる。壁はもろく、ちよつと指先に力をこめるだけでぼろぼろ崩れた。

「ウラル姉ちゃん、下手っぴ」

言われるまでもなく、下手くそな絵だった。ウラルははずかしくなり、表情の下手さを隠すために目と口を思いきり大きく笑わせてやる。

「僕、笑ってる！」

ナウトが満面の笑みで声をあげた。

「笑ってる！」

ウラルもナウトの顔を指差し、一緒になって笑いはじめた。

かまどの方からぷんと煙のにおいがしてくる。フギンが火をおこしはじめたのだ。振り返ればフギンはなんとか薪を積み、火をおこすところまではうまくいったようだが、風おこし機がうまく使えないらしい。アコーデオンのようなものを両側から勢いよく押し、風をおこすもののだが、片腕ではかなりやりづらいうようだ。

「ごはん作ろう。私は野菜を切ったりするから、ナウトはフギンを手伝って」

「いや！ あのお兄ちゃん、怖いから」

あっけにとられたように苦笑するフギン。くくっ、と部屋の隅で笑ったのはアラーハだ。

「怖い。仕方ない、俺がやろう」

「本当？ たのむよ」

フギンがかまどの前からどいた。アラーハが火の前に座りこむ。不器用な手つきで風おこし機をあつかいはじめた。見かねたフギン

がそこから木片をひろってきて、一緒に火をあおぎはじめた。

ナウトに手伝ってもらい、スープとサラダを作った。パンやチーズ、サラミなどを小さなテーブルに並べていく。

「兄ちゃん、帰ってこないな」

料理ができて、ナウトの「兄ちゃん」は帰ってこない。

「多分、残業。残念だなあ。こんなにおいしそうなのに」

「スープなら明後日くらいまで飲めるよ」

ナウトをなぐさめ、ウラルは食事を食べはじめた。肉ばかりをとっていくフギンに野菜ばかりをとっていくアラール。変な人たちだなあ、とあつけにとられたように目を丸くして、ナウトはふたりを眺めていた。

「明日、ナタ草がオレンジになるころ（夜中の三時ごろ）起きるぞ。作戦決行だ」

食事が終わってほとんど間を置かず、フギンが明かりを消した。

フギンとアラールは床に雑魚寝、ウラルとナウトはベッドに横になる。ウラルが使うベッドは、ナウトの「兄ちゃん」のものだ。どんな人なのか会ってみたかった、と思いながら、ウラルはとるとると眠りについた。

明日は、マライ救出作戦の、決行日だ。

第一章 3 「急げ！」 上

「Hi e yoo?! (何者だ!)」

「Ru age zi bore! U a border! (警鐘を鳴らせ! 侵入者だ!)」

ウルルにベンベル語はほとんど聞き取れない。が、何を言っているかは雰囲気で行く。

頑丈な鉄柵の門の隙間から、戦うアラハの姿がちらり、ちらりと見えている。四人いた警備員のうち、ひとり仲間を呼びに走り去った。残るは、三人だ。三人とも剣を抜いて次々とアラハに切りかかっているが、傷ひとつつけられない。アラハの方はどうやら手加減しているようだ。一気に首や頭を狙わず、腹を狙い、時間をかけてダメージを与えていく。

ウルルは厚いレンガの外壁にフギンとふたりもたれかかって、アラハの合図を待っていた。もう一枚むこうの門からナウトも心配そうにこちらをながめている。

物見の塔かどこかで警鐘が鳴った。アラハの目つきが変わる。ここからは、本気だ。角の剣がざらりと輝く。鋼の剣とは光沢が違うが、不穏な光であることには変わらない。

アラハの豪腕がうなった。切りかかったひとりが、腰を深く落としたアラハにあごを強打され、昏倒する。一瞬だ。

アラハの脚力、そしてパワーは、人のものではない。イッペルズという巨大な獣のものだ。ウルルの隣でフギンも息をのんでいる。アラハがひとりだけで戦っているところをじっくり見る機会など、何年も一緒に戦ってきたフギンでもほとんどなかったはずだ。

残るふたりも一撃で後頭部や耳の下の急所を強打され、あっけなくのびてしまった。アラハがひとりずつ瞳孔の収縮を確かめ、手際よく完全に気絶しているか調べていく。すぐ、ウルルやフギンのいる方向を向いて、うなずいた。合図だ。

「時間がない。急ぐぞ」

ぱつと鉄柵の門を乗りこえる。さすが元盗賊というべきか、フギンは片腕なのに、すいすいと高い門を乗りこえていく。男装したウラルもフギンに手をとられ門をこえた。

フギンは詰め所に入り、ロッカーをひっかきまわした。間もなく、鍵束とふたり分の制服をウラルに突きつける。

「これを着て」

ウラルはフードを脱ぎ捨て、服の上からぱつと制服を着た。制服は深い紺の軍服。そろいの帽子をかぶり、髪をひつつめる。片腕で剣帯をつけるのに四苦八苦しているフギンを手伝っていたところで、遠くのほうからどやどやとあわたましい足音が聞こえてきた。

「ウラル、ここからはリーグ語禁止な。話したら怪しまれるぞ」

ウラルはうなずいたが、ベンベル語などほとんど話せない。フギンは話せるのだろうか。

「行こう。すぐに警備の連中が来る」

ウラルは渡された鍵束をにぎりしめた。アラーハも「早く行け」と言いたげな目でこちらを眺めている。

ここを開けて、と言われたドアに鍵をつっこんだ。鍵があわない。あわてて次の鍵を差しこむと、あっけなく開いた。どの鍵を使ったか覚えておかなければ。戻るとき命取りになる。

やけに分厚いドアを開けると階段があった。上にいくものと下にむかうもの、両方ある。螺旋階段だ。フギンがすぐにドアを閉め、鍵をかけなおすようウラルに言った。さつとドアの横にかけてあったランタンを取り、火をつける。

リーグ建築には基本的に地下というものが無い。真っ暗で何一つ明かりのない階段が不気味だった。フギンが足を踏み出す。かつり、と高い音から下まで大きく響いた。

フギンが無言のままウラルの手を引く。フギンの手の暖かさだけが今は頼りだ。ウラルはうなずき、壁に体重をあずけながら、そろそろと降りていった。ウラルが慣れるのを待って、フギンは足を速

め、すばやく階段を降りていく。

しばらく行くと、扉があった。フギンが身振りで「ここを開ける」と指示する。ウラルはうなずき、鍵束を取り出した。鍵穴に鍵を入れる。開かない。別の鍵を入れる。これもだめ。次の鍵。鍵穴に入らない。内心あせりながら別の鍵を入れる。やっと開いた。

長い廊下の両側に、ずらりと鉄格子が並んでいる。いくつかに隔てられた檻の中、ひとつの檻に十人ほどが粗末な布団に包まり、横になっているのが見えた。全員が小さく縮まり、震えながら眠っている。いかにも寒そうだ。いびきの音や、寝息の音が響いている。フギンはブーツの音を響かせ、廊下を歩きはじめた。いびきの音が止まる。寝息の音も眠りが浅くなったのか一瞬止まり、そのまま前を通りすぎてしばらくすると、また聞こえてきた。てっきり監視が見回りに来たのだと思っっているのだろう。

長い廊下の先に、もうひとつの扉があった。また鍵束を取り出す。すんなりドアは開いた。

また長い廊下。ここには鉄格子のはまった小窓のついた、木のドアがついた部屋が並んでいる。どうやらひとり部屋の独房らしい。そのドアの中のひとつの前で、フギンが止まった。ドアに鍵はついていない。鍵の必要ない、かんぬきがかかっている。

マライの独房は、なぜかかんぬきが開いていた。フギンがドアを開ける。

「マライ」

独房は、もぬけの殻だ。

「マライ」

もう一度、呆然とフギンが呟いた。場所を間違ったか、とウラルは思ったが、フギンの様子からしてここで間違いないようだ。

「どこ行っただ、マライ！」

ダン、と独房のドアをフギンが蹴る。その時だった。

ダーンッ！

爆発音が響いた。上の階、いや、ここは地下だから、地上だ。地

面が揺れる。開かれたマライの独房のドアが大きな音をたてて閉まった。

アラーハが心配だ。火薬を持ち出されてはさすがのアラーハも身がもたない。いくら人間ではないとはいえ、生き物には違いないのだ。

火薬の爆発音は三度だけ響き、その後はぱったりとなくなった。威嚇のためだけに鳴らしたのか、これ以上鳴らす意味がなくなってしまうのか……。

近くの独房、その先の廊下の方からも、どやどやと囚人たちが起きだす気配がした。「何があつた!」とリーグ語とベンベル語で繰り返し叫ぶ声が聞こえる。このままでは、警備員が様子を見に駆けこんでくるのも時間の問題だ。火薬を使うくらいなのだ。とつくに外部にも応援を要請しているはずだった。

ウラルの不安を読んだかのように、今しがたウラルとフギンが降りてきた階段のほうから、どやどやとあわただしい靴音が聞こえてくる。

「フギン」

フギンは黙ったまま、動かない。

廊下の先でドアの開く音がした。三人ほどの警備兵が来たらしい。リーグ語とベンベル語とで怒鳴りあう音が長い廊下にぐわんぐわんと反響する。

看守が騒ぐ囚人に気を取られている今のうちに、なんとかして逃げるか隠れるかしなければ。だが、フギンはマライの独房の入り口に立ちつくしたまま、動く気配がない。

「畜生!」

なにを思ったかフギンが大声で、しかもリーグ語で叫んだ。

廊下の先の騒ぎが一瞬、静かになる。

「Maonna duse sepucca?」

ウラルにはわからないベンベル語。だが、おそらくは警備員のひとり仲間に向かって「誰の声だ」と言っている。牢の中でのリー

グ語のざわめきが大きくなった。

廊下はまっすぐの一本道。途中にあるドアは開け放たれている。こちらからもむこうからも、相手が丸見えだ。さいわい制服を着ているからか、ふたりは怪しまれてはいるが侵入者だとは思われていないらしい。

何か気のきいたセリフを言っでごまかすかと思いきや、フギンは腰のサーベルを抜いた。目は激しい憎しみにららんと輝いている。

「Eoe e uze Marai? (マライはどこにいる?)」

口に出すのも嫌だ、という感じのベンベル語。

「Yoi noume? (誰だ?)」

次は、フギンにむけて警備員が問いかける。

「Iu ime Fugin. (俺はフギンだ)」

さーっと全身から血の気がひくのをウルルは感じた。歯の根があらなくなる。ベンベル語はわからないが、フギンがとほும்もない失敗をしたのはわかった。

「Fugin? (フギン?)」

何を言っているかわからないという様子、しかしかなりの緊張をはらんだ声で警備員が聞き返した。

「Iu ime Fugin. Eoe e uze Marai?

(俺はフギンだ。マライはどこにいる?)」

ベンベル語で言い返すフギンの全身が、ぶるぶると震えている。憎しみに我を忘れているのだ。ウルルの全身も震えている。これでは逃げられない。自殺も同然だ。

三人の警備員が剣を抜いた。剣をランタンの明かりにぎらつかせながら長い廊下を走ってくる。「何があった、ここを開ける!」と近くの独房のドアを激しく叩く音がした。

ウルルは独房のドアを背にしたまま何もできない。ウルルを守るように立ちふさがったフギンが剣の応酬を受けている。震えながらウルルも腰の護身のナイフをつかんだ。その瞬間、ウルルにも剣

が振り下ろされる。思わず目をつぶった。

ウラルの脳天に振り下ろされたはずの剣。傷みも衝撃も、何もない。

「お前ら、女にまで手を出すのかよ。紳士道のかけらもない畜生め！」

おそろおそろ目を開けると、フギンがウラルの前に立ちふさがっていた。左手のサーベルでほかの警備員を刺しつらぬきつつ、右手の義手でウラルにふりかかった剣を受け止めている。

「ベンベル人のくそつたれが！ マライをどこへやった！」

やけになっているのか、フギンの怒号はリーグ語だ。

独房のドアを激しく叩く音が、ふいにやんだ。

「まさか、スヴェル 軍の残党か？ ここを開ける！」

聞き覚えのある声だ。まさか、もうひとり スヴェル の生き

残りがいるのだろうか？

ウラルはぱつと横に跳んだ。振り返りざま、護身用として持っていたマキビシを思いきり投げつける。ウラルの動きに気づいたフギンが身をていして後ろを守ってくれた。

この独房には鍵がかかっている。鍵のいらぬ、かんぬきがかかっているだけだ。ウラルは重いかんぬきを力いっぱい引きあげた。

第一章 3 「急げ！」 下

力任せにドアが蹴破られる。中から現れたのは口の大きいのが印象的な、熊のような男だった。見覚えのある顔だ。

「ボウズ、剣を貸せ！」

男、ダイオが野太い声をはりあげた。フギンがサーベルを放る。幸いにも五体満足のダイオがそれを受け止め、にやりとした。

「ひとつ借りたな！ この借りはここで返すぞ！」

ジンの実父フェイスに仕えていた派手好きの將軍ダイオが、偶然にもマライの独房の隣に囚われていたのだ。力まかせのすさまじい斬戟。一年も独房に囚われていたとは思えない威力だ。警備員がたじたじとするのがわかる。

「ウラル、片っぱしからドア開けていけ！」

警備員から奪った槍を片手で振り回しながら、フギンが怒鳴った。ウラルはうなずき、かんぬきをはずしていく。

自由の身になった囚人、大半がリーグ軍の人間でフギンのように片腕を失ったり指の骨を割り砕かれていたが、歓喜の声をあげ、次々と武器を奪って戦いに参加していく。見る見る間に味方が増え、敵の数の何倍にもなった。あつという間に制圧してしまう。

「このままリーグ人を全員助け出せ！」

「ベンベルの豚が！ コーリラの山羊よりたちが悪い！」

いきりたった囚人たちは片っ端からかんぬきをはずし、ドアを壊してつぎつぎと同胞を助け出していく。

「ボウズ、助かった。礼を言う」

気づけば、ウラルとフギンの周りにいるのはダイオひとりになっていた。

「お前、スヴェルのひとりだろう。覚えているぞ」

「マライがどこに行ったか、知らないか」

ダイオの顔が曇った。ばつの悪そうに目が泳ぐ。

「一步、遅かったな。昨日の夜遅く、処刑の間に連れていかれた」
フギンの顔から血の気が引いた。

「刑は？」

「絞首刑だ。もう、遅いと思うぞ」

ここまで来て間にあわなかったのか。あと一日早く来ていれば。いや、今日の朝か昼に来ていれば。フギンは首をうなだれ立ちつくしている。ウラルも膝をついて泣きじゃくりたくなった。

「ベンベルの、畜生」

顔をあげたフギンの表情が一変していた。旅人を襲うオオカミのように粗暴な目。いや、それよりひどい。

「ボウズ、おい」

「全員、ぶっ殺してやる」

止めようとしたダイオの腕を振りはらい、獣のようなうなり声をあげながらフギンが走りだした。

「やめる、ボウズ！ お前ひとりがあったところで、どうこうなるものじゃない！」

フギンの足は速かった。あわてて追いかけたウラルとダイオも追いつけない。追いつけるとすればイッペルスの駿足を發揮したアラハくらしいものだ。そのアラハは居場所どころか安否すらわからない。

「処刑つて、どこでやるの？ こんな真夜中に？」

「ベンベル人の宗教上、太陽の出ている間に処刑をしてはならないらしい。今日は何十人も殺された。マライが呼ばれたのは最後のほうだったから、もしかすると、まだ生きているかもしれない。この監獄の門は二層になっているのだが、一枚目と二枚目の門の間が処刑場になっている。絞首刑は西門だ」

ウラルは生唾を飲みこんだ。

「処刑場の警備は？」

「一人がぶつかつたところで、どうにもなる量じゃない。一度ぶつかつたら逃げることもできなくなる。西門に着く前に止めないと、

ボウズは死ぬぞ！」

処刑のためにそちらへ人数が取られたことも、今日の要塞に警備員が少なかった一因だったのだ。ウラルは歯を食いしばり、走るスピードをあげた。わき腹が痛い。足の筋肉が悲鳴をあげている。

（ウラル。お前は、フギンのブレーキ役を頼む）

（絶対に、あいつを死なせるな。親しいやつを失うのは、もう、たくさんだ）

アラーハの言葉は、こういう意味だったのだ。このままでは本当に、フギンまで死んでしまう。

階段に続くドアは鍵が壊され、開放たれていた。階段を二段とばして駆けあがる。途中には点々と血がたれていた。フギンは怪我をしている。階段をのぼることに血だまりが大きくなっていくのがわかった。走っているので、傷口がどんどん広がっているのだ。

フギンはもう、背中も影もウラルとダイオの位置からは見えない。足音がかなり上のほうから聞こえるだけだ。ウラルとダイオも全速力で階段を駆けのぼる。

地上へのドアを開けた。そこがすぐ、西門の前だった。

真夜中の処刑台。血のおいが鼻をつく。絞首台が一枚目と二枚目の門の間に設置され、その周りをぐるりと百人ばかりの警備兵が取り囲んでいた。

壇上にいるのは、マライだ。ちょうど今、首に縄がかけられようとしている。一年前まであれほど大柄でいかつい体だったのに、筋肉が落ち、覇気もなく、今はずいぶんと小柄に見えた。抵抗できないよう手かせと足かせが、がっちりつけられている。

「マライ！」

フギンが叫びながら槍を振りあげ、走りこもうとしている。

「やめて、フギン！」

息を荒げながら、ウラルは歯を食いしばった。

フギンとウラルの声に、マライは目を開こうとしたようだ。だが、できない。マライの目は、フギンの右腕と同じくらい、いや、それ

以上に不自然だった。眼球があるはずの場所が落ちくぼみ、頭の骨に直接皮膚をはりつけたような感じた。目をえぐられている。上下のまぶたが縫いつけられ、もう二度と目を開くことができないようになっていた。

首に縄をかけられたマライの足元の台が、警備兵のひとりに蹴り落とされた。マライの体が宙に浮く。首が絞まる。マライがまったく何も見えない目でフギンを見、悲しげに顔をゆがめた気がした。フギンの、絶叫。

「ここでじっとしている。警備兵に見つかるな」

青ざめたダイオもフギンの借りを返しに、走っていく。ウラルは膝をつき、顔を覆った。

ウラルに力があれば。ジンが、ここにいれば。

(もしここに、俺がいたら)

ウラルの心の中で声がした。

(今すぐ、みんなを助けにいくぞ)

落ち着いた、低い、男の声。

目頭が熱くなるほどなつかしいジンの声。

ウラルは立ちあがった。そうだ、ジンならこんなところに座りこんで、めそめそしているわけがない。

ウラルは腰の短剣を抜いた。腹の底から声をあげる。息絶えたマライの体が、ぶらり、ぶらりと揺れていた。

何十人もの警備兵がフギンとダイオを押し包むように取り囲んでいる。ウラルはその中に、がむしゃらにつっこんだ。

短剣をひとりの警備兵の背後から思い切り突き刺す。いやな感覚に、全身が震えた。ぐらりと兵士がよろめく。ぎよつとした顔で振り向きざま、わけのわからないベンベル語のうなり声をあげながらウラルの右手をつかんできた。

緑の目が、異様に印象的な兵士だ。きゅつとひとつに結ばれた栗色の髪がなびいている。そのままその兵士に短剣を叩き落とされ、腕をひねりあげられて、ウラルは身動きがとれなくなった。

フギンとダイオは、大丈夫だろうか。腕をぐいぐいひねりあげられるのも構わず、ウラルは顔をあげてフギンらのいる方向を見た。

ダイオがぐったりとしたフギンを背負い、戦っている。フギンがあまりにも錯乱するので、どうやら気絶させたいらしい。さすが一国の騎士だった男、剣の腕は確かだ。だが敵が多すぎる。

ダイオのすぐ右側で警備兵の列が崩れた。現れたのは角の剣を振り回すアラーハだ。さすがに全身傷だらけ、ススまみれだったが、無事だった。やはり、あの爆発音はアラーハを攻撃する火薬の音だったようだ。アラーハが普通の人間だったら命はなかっただろう。

アラーハはすぐさまダイオの援護にまわる。ちょうど「地下で囚人の集団脱走」の報が伝わったらしい。ざあっと列が乱れ、大混乱が起きる。敵は多いがなんとか三人は突破できそうな雰囲気だ。

ウラルの腕をとっている兵士が、苦痛に顔をゆがめながら何かを言ってきた。だが、ウラルにベンベル語はわからない。もう一度、次はリーグ語で兵士が何かを尋ねてきたが、ウラルにはもう、聞き取れることも答えることもできなかった。

後ろから誰かに頭を殴られる。ウラルは緑眼の兵士に腕をとられたまま、がっくりと気を失った。

第二章 1「尋問」 上

ウラルは夕暮れの陽の中に立ちつくしている。周りはずべてが赤だ。夕日と、そして血で、ぞっとするほど赤く染めあげられた世界。

転がる死体。その体におりた霜。たかるウジ。カラスの鳴き声。ざーっと音がするほどのハエの群れ。さまざまな獣が死肉をむさぼる音。

ウラルはひとりだ。前に同じ光景を見たとき、一緒にいたはずのアラーハはいない。

ここは、戦場だ。ジンヤリゼが死んでいった、あの戦場だ。夢であるとはわかっていたが、ウラルは震えていた。本物よりもこの夢の中の戦場は凄惨だ。ウラルが見た戦場から、何日か経っているらしい。死体は完全に腐り、黒ずみ、膨張し、たえがたい腐臭を放っている。骨がむきだしになっている軀も多い。ウラルは前にしたときと同じように、服についていたフードを切り取って顔に巻いた。

ウラルの目の前に石が積みあげてある。ウラルとアラーハがジンを埋葬し、積みあげた石。戦場で死んだ、すべての人の墓。

(おまえは、なぜ、ここにいるんだ)

もうこの世にない人々の声がウラルの耳に届く。ほとんど抑揚をつけない、押し殺したような低い声。男ではあるようだが、若いのか歳をとっているのか、それすらわからない。何人かが一緒に同じことを喋っているような感じた。

(なぜ、お前は、ジンの望んだことを、やってやらない?)

「ジンの、望んだこと」

ぼつり、と繰り返す。

(そうだ。ジンは、お前に、やってほしいと、言いのこしたのに) ウラルが黙りこむと、声は続けた。

(ジンは、リーグ国の、幸せを、願っていた。ベンベル国に、乗っ取られては、ならないと、思っていた。ちがうか?)

ウラルはうつむいた。 どう答えればいいか、わからない。

中途半端なところなのに、死者の声はこれ以上ウラルに言葉をかけてこようとしない。結局、何が言いたいのか。

夕暮れの光が弱まっていく。死体の転がる戦場跡に、長い夜が訪れようとしている。

*

気がつくと、ウラルは冷たい石でできた床に転がされていた。手には手かせがはめられていて、自由に動かない。足には何もされていないが、部屋には鍵のかかった頑丈な鉄格子があつて、どこへも逃げられないようになっていた。 どうやら独房らしい。おそらくはマライのいた独房と同じ階だ。

「マライ……」

死なせてしまった。マライはウラルの目の前で死んでいった。 あんなにやつれ、目をえぐられ、抵抗する力も声をあげる気力もなく、目と鼻の先まで駆けつけていながら。あと一日、いや、一クル(二時間)早く駆けつけていたら。

「ごめん、ごめんマライ……」

ウラルは体を起こし、腰に手をやった。鍵束も短剣もない。いや、それだけではなく、ジンのアサミイまで取りあげられている。胸を見ると、さいわいペンダントは普段通りそこにあつた。ウラルはうめきながらペンダントをにぎりしめる。ぎゅっと目を閉じた。

どれくらいそうしていただろうか。遠くから足音がしてきた。冷たい石を踏み、蹴りあげる、ブーツの固い音。

カチャン。ウラルがいる牢の鍵の開く音がした。ウラルが顔を上げると同時に、手をつかまれる。そのまま強引に立たされた。三人組みの警備員、いや、看守だ。

看守のひとりがベンベル語で何かを言った。わからないのでウラルが黙っていると、看守は腰のベルトにつるしてあったムチを抜いた。

ビシュツ！ 非道な音が地面を打つ。

「ベンベル、言葉、話す、できない？」

片言のリーグ語。できないのか？ と、どうやら尋ねられているようだ。ウラルは黙ったまま、うなずいた。

鞭がしなり、焼けつく痛みが足に走った。ウラルはのけぞり悲鳴をあげる。

「U o s e s u !」

ウラルはムチで打たれた足を押さえ、その場にずるずると座りこむ。なんと言っているかわからない。黙っているな、と言っているようだ。また、強引に立たされた。

「この監獄、囚人、逃げた。昨日、たくさん、逃げた。お前の、仲間？」

ムチで打たれた足が痛む。ウラルは小さくリーグ語で「はい」と答えた。

「U o s e s u !」

また、ビシュツ！ 次は腹だ。また崩れ落ちそうになるウラルを、じつと立ちつくしていた二人目の看守が押さえつけた。 どうやら「U o s e s u」と答えろ、と言われているらしい。ベンベル語で「はい、そうです」あたりの意味なのだろう。

まったくベンベル語がわからないウラルを、ちゃんとした解説もなしに「ベンベル語で答えなければムチで打つぞ」と脅している。こんなことを毎日繰り返し返していたから、フギンも一年間でほぼ完璧にベンベル語が話せるようになったのだ。

「お前、名前、言え」

「ウラル」

おとなしく答えるより、他にない。

それまで何もせずになっていた三人目の看守が紙とペンを取り出し、何

かを書きつけた。どうやら書記官らしい。

「仲間、名前、言え」

ウラルは答えに窮した。フギンとアラールに迷惑をかけたくない。

ビシュツ、とムチが地面を打った。あまりにも非情な音に、ウラルはビクツと肩をすくめる。

「フギン」

書記官のペンが紙の上を滑っていく。

「フギン？ 逃げた、囚人。一つき前」

「Uose Su」

そうです、という意味でウラルも答える。尋問官の目が一瞬、いやらしく歪んだ。悦にひたる権力者の笑みだ。胃がむかむかした。何かをひどく侮辱されている気がする。

「Uose Su」。この言葉が何を意味しているかわからないが、この言葉だけは二度と使わない、とウラルは唇を引き結んだ。

ムチの音がウラルを脅す。だが、音だけだ。「Uose Su」と答えれば、ムチは襲ってこない。

「仲間、場所、教える」

ウラルはぐつと唇を噛んだまま、答えない。鋭く地面を叩くムチの音。全身がガタガタ震える。体が冷たくなっていく。立ってられないほど震えが激しくなる。

ウラルは、答えない。声を出さないよう血がにじむほど唇を噛みしめ、黙ったままにいる。

「言え」

ウラルは目を伏せた。歯を食いしばったまま、リーグ語で答える。

「嫌です」

尋問官の目が鋭くなった。ムチの音が地面を打つ。

尋問官がウラルの肩を押さえている看守に何かの合図をした。看

守は乱暴に手かせをはめられたウラルの手をひっぱり、壁に向かつてウラルを立たせる。壁には、短いが太い鎖が取りつけられている。ウラルの目線の高さだ。看守はウラルの手かせにその鎖をつなぐ。身動きが取れない。腕が高い位置にあるので座りこむこともできない。後ろでムチの音がする。

バシユッ！

体がのけぞる。唇が切れる。唇を閉じたままだが、悲鳴とうめき声が漏れる。膝が崩れるが壁につながれた手かせのせいで倒れない。ムチで打たれた背中が、痛みを通りこしてじんと熱い。

バシユッ！

ウラルの意思に反して口が開き、ひとりでに大きな悲鳴をあげる。息が荒くなる。目の前が白くかすんでくる。立ってられない。血が背中をつたってている。

バシユッ！

ここでフギンの居場所、おそらくは森の隠れ家かナウトの家だと答えれば、ムチは襲ってこない。だが言えば、みんなは、ただでは済まない。

バシユッ！

視界がかすむのを通りこして、暗くなってきた。体重をささえているのは足ではなく、手かせのはめられた手と、膝だ。意識が遠のく。痛みもほとんど感じない。ただ、衝撃だけが鈍くつたわつてくる。

バシユッ！

もう限界だ。言ってしまうか。このままでは、死んでしまう。

フギン、助けて。アラーハ……。

バシユッ！

フギンの居場所は、と口を開きかけたその瞬間、またもムチが襲ってきた。

ウラルの精神より先に体がまいてしまった。壁につながれたまま、ウラルは気を失った。赤い戦場。ジンの死体を埋めた後の石積

み。ぼんやりと一瞬、夢を見たようだったが、すぐ顔に水をかけられて起こされる。

また、同じことの繰り返し。何度かムチで打たれるだけでウラルは気を失ってしまふ。答える余裕がなくなり、言葉らしい言葉を発することもできなくなった。答えたくとも声にならない。悲鳴すらかすれ、うめくばかりになる。看守らももうウラルには何も答えられないとわかつているはずだ。だが、やめない。

やがて血みどろになり水浸しになり、水をかけられても頬を引っぱたかれても気絶から覚めなくなったウラルを残し、看守たちは去っていった。

翌日もウラルへの尋問、いや、拷問は続いた。

水浸しで放っておかれたせい、そして背中の中の傷のせいでウラルは高熱を出していたが、看守らはまったく容赦がない。手かせをつけたまま引つ張り出され、牢獄の中にあるらしい池へ連れていかれた。池のそばには小さな、人がひとりだけ入れる大きさの檻が置かれている。それが池の横の高い柱に太い鎖でつながれていた。

抵抗など許してもらえはるもなく、ウラルは三人がかりでその檻の中に押しこまれた。看守がカラカラ鎖を引くと、ウラルの入った檻は池の真上へ吊り下げられる。そして、じわりじわりと高度を下げられ、檻の床が着水し、ウラルの足を汚い水が浸し……。

首までつかるまでの時間が長かったら、ウラルは耐えかねてフギンらの居場所を話したに違いなかった。だが、幸か不幸か尋問官は答えを聞きたいというよりウラルの苦しむ顔を見たかったらしい。答える暇もなくウラルは池に沈められた。檻の中でせいっぱい背伸びをし、仰向いてやっと鼻と口が水面に出る状態で放っておかれる。最初は爪先立って耐えていたものの、やがて力つき、ウラルは溺れた。

尋問官がウルルを引き上げたのは本当に死ぬ寸前、池の水をたらふく飲んで気を失ってからだだった。その場で水を吐かせ蘇生させてくれたまではよかったが、朦朧として満足に立つことすらできないウルルを小突き回しながら、牢までの長い距離をふらつく足で歩かせる。少しでももたつけば鞭が襲ってきた。

戻ってきた牢は前日までとは違う場所だ。鍵が閉まると同時にウルルは石造りのベッドに倒れこんだが、倒れこんだ次の瞬間にうめいた。体を起こしてみればベッドの中央、ちょうど鞭で傷つけられた背中に当たる位置にウサギが横たわっている。ベッドと一体化した、にたりと笑うウサギの石像だ。これではまともに横になることさえできない。看守らはどうやら、ウルルをとことんまで痛めつけたいらしかった。

「フギン……アラーハ……」

二人は助けに来てくれるだろうか。二人のことだから今ごろ、何か策を練ってくれているに違いない。だが、フギンがウルルを助けに来るだろうことは、監獄側でも充分予想しているはずだ。しかも囚人のほとんどが脱走してしまったこの監獄では、ウルルひとりに警備が集中している。もう一度潜入するのはあまりに危険だ。

それでも、それでも今は切実に助けてほしかった。ジンが助けてくれた命、ゴウランラ の戦場から脱出させてくれた命、こんなところで失いたくはない。

ウルルはジンのペンダントをにぎりしめ、石のウサギに当たたらぬよう体を丸めた。

「マライ。ごめん、ごめんなさい……」

生きたいと、助けてほしいと。マライもそう思っていたはずなのに。目をえぐられまぶたを縫いつけられて、ウルルよりもひどい拷問を受けながら、フギンの助けを待っていたに違いないのに。

第二章 1「尋問」 下

さらに翌日、看守はまたやってきた。四人だ。今までずっと三人だったのに一人増えている。看守は鞭のかわりに椅子を一脚、持っていた。

鞭を持っていないとはいえひどいことをされるのは目に見えていたから、ウラルは牢の隅で縮こまっていた。怖かっただけでなく、動けない。ぜいぜい喉が鳴っている。体調は昨日よりもさらに悪化していた。

「ウラルさん、でしたね。少しお話したいんですが、構いませんか？」

新顔の一人が流暢なりーグ語で話しかけてきた。看守が持っていた椅子を牢の外に置き、男は礼を言ってその椅子に腰かける。男がベンベル語で何かを言うと、看守らは背を向けて遠ざかっていった。すぐに足音が止まったので、少し離れただけらしい。それでもウラルの視界から看守の姿は消えた。

「僕はシャルトル・ミョゾティといいます。お顔を見せていただけませんか。一度会ったことがあるんですが、覚えてらっしゃいますか？」

ベンベル人に知り合いはいない。それでも少し興味を引かれて顔をあげ、ウラルは息をのんだ。栗色の髪と緑の瞳に覚えがある。あのマライが殺されウラルが捕らえられた日、ウラルが短剣で背中を刺したあの男だ。

「大丈夫ですか、ひどい顔色ですよ。この二日で何をされたんですか？」

「あなたこそ。あなたこそ大丈夫なんですか。私、ナイフであなたを」

声を出すと喉がひどく痛む。それに加えて喉からせいでいぜい嫌な音が混じった。声も悲鳴をあげ続けたせいで嘔れている。

シャルトルは不思議そうに首をかしげた。

「心配されるとは思わなかったな。痛くないといえば嘘になります。もう動けません。さいわい急所もできていましたし、傷自体も浅かったのです。僕を殺そうと思っただけで向かってきたんじゃないんですか？」

「フギンを、あのとき処刑されていた人を助けるために飛びこんでいった友人を助けたくて、夢中で飛びこんだんです……。ごめんなさい。大怪我じゃなくて、よかったです」

シャルトルは何か言いたげに口を開き、けれど何も言わずにウルルを見つめた。驚いたの、あきれたのか。緑の瞳が困ったように泳ぐ。

しばらくシャルトルはうつむいて足元の床を見つめていた。それからウルルのほうを向き、もう一度床を見つめ、ウルルに視線を戻して、再び口を開いた。

「ウルルさん、無理だったなら構わないんですが、もう少しこちらへ来ていただけませんか？ 顔をよく見たい。声も聞き取りにくいですし、お話しするだけですから」

ウルルはシャルトルの顔を見つめた。シャルトルは看守と違い、紳士的だ。鉄格子を間に挟んでいることだし、ひどいことはされそうにない。

そろそろとウルルは立ちあがりかけ、背中への痛みがうめいた。うめくと同時に恐怖が襲ってくる。この傷は誰がつけたのか。遠くからあの看守の話の音が聞こえる。再びうずくまり、ウルルは体を固くした。

「Ceoiwonna perude」.

シャルトルが横を向いて何事かを言うと、看守らの話し声がぴたりとやんだ。静かにしてほしい、あたりのことを言ったらいい。それからウルルに向かって微笑してみせた。

「ではこのままで。本当に具合が悪そうだ、手短かに話します。ウラルさん、ここから出たくはないですか」

何を言っているのかわからず、ウラルは二、三度目をしばたかせた。ゆるゆると驚きが胸に満ちてくる。ここから出られる？

「僕の主人がメイドをほしがっているんです。リーグに来たはいいものの、男ばかりで家事がまわらない。あなたに刺されたことを主人に話すと、どういったわけか興味を持たれたらしくて。さすがにベンベル人とみるや手当たりしだい刺すような娘なら無理だが、そうでなければ連れてこいというお達しを受けてきたんです。この話を受けてくださるなら、あなたをここから連れ出すことができますよ」

ウラルは再び驚きに息をのみ、シャルトルの緑の瞳を見つめた。

ここから出たい。切実に。けれどこのベンベル人についていいものか。いくら紳士的でも、ここを離れたとたん殴られたり、ひどいことをされないだろうか。看守のように豹変しないだろうか。それに、シャルトルの主人は当然ベンベル人だろう。シャルトルが紳士的でも、その主人とやらが高圧的な人だったら。なにせ相手はリーグ国の侵略者だ。奴隷のように扱われても不思議ではない。

見透かしたようにシャルトルが口を開いた。

「住みこみのメイドとして雇うだけです。代わりの人がなかなか見つからないので、辞めることはしばらく許せませんが。お給金も少しばかり出せると思います。ひどい扱いはしないと約束しましょう。主人のお名前はエヴァンス・カクテユス様。ベンベル国騎士です」

「騎士」の一言にジンの姿が目浮かび、ウラルは悲しくなった。ペンダントをぎゅっと握りしめる。死んでしまったジン、リゼ、サイフォス……。ベンベル人騎士なら、リーグ人と戦っていたはずだ。もしかするとその主人が、スヴェルの誰かを殺しているかもしれない。そんな人のところで働きたくはなかった。

それでも、今は切実にここから出たい。ここから出られることを

考えると少しだけ希望がわいた。

そうだ、メイドなら買物も任せられるはずだ。町へ買物に出られたら、一人で外に出られれば。辞めることは許せないと言われても、おかまいなしに逃げてしまえばいい。

「わかりました。行かせてください」

シャルトルは笑みを浮かべた。横を向いて看守になにやら指示をする。カツン、カツンと三人分の靴音が近づいてきた。音にウラルは震えあがる。この音が近づいてくるたび、ひどい仕打ちを受けてきたのだ。

看守が牢の鍵を開けた。身を固くして震えはじめたウラルにおかまいなく、ずかずか入ってくる。それをシャルトルが止めた。

「Daya'na ipewartē. See use herhetade itte yoo. Iutuce utte .
(やめなさい、怯えておられる。僕がやります)」

「Bidda . (しかし)」
「Micenatouce kuu. See uzeana
i pertarnee . (鍵を貸しなさい。この子はもう囚人ではない)」

シャルトルは看守に外に出るよう示した。しびしびという様子で看守はシャルトルの手に小さな鍵を置き、退出していく。シャルトルがそろそろと近づいてきて、体をこわばらせているウラルの隣にゆっくりとかがみこんだ。

「もう心配ない、彼らは手出しできません。さ、手を出してください。手かせをはずします」

シャルトルはウラルの手を優しく取り、手かせをはずしてくれた。しびれ、痛む手をさする。ほっと息をつく、シャルトルは優しくに笑ってくれた。背中を刺し、傷つけたのに、こうしてシャルトルは笑ってくれる。優しい人なのだ、とやっと素直に思えた。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。行きましょう。馬車を待たせています」

うなずいて立ちあがりかけたが、何か大切なことを忘れている気がする。すぐに思い当たり、ウラルはシャルトルを振り返った。

「あ、あの。ひとつだけお願いがあるんですが、いいですか？」

「なんなりと」

「私が捕らえられたとき、腰にアサミイがあつたはずなんです。このペンダントと同じ絵柄の。ほかのナイフや武器はいいんですが、返してもらつことはできないでしょうか」

シャルトルの顔が曇った。

「短剣ですか？ 人を傷つけるようなものは持たないでいただきましたがいんですが」

「儀式用で、刃は研がれていません。大切な人の形見なんです」

「刃が研がれていないなら。ちよつと待っていてください」

シャルトルは看守に話しかけた。ベンベル語で少しばかり口論になつた後、看守のひとりがウラルのほうをにらみつけた。たつぷり上から下まで見つめる。鋭く叱責の口調で何事かをシャルトルが言ううと、看守らはしぶしぶどこかへ立ち去つていった。

「大丈夫です、馬車まで持つてきてくれるそうですよ」

ウラルの不審げな視線を受け、シャルトルは苦笑する。

「売つてしまつたというから、叱つただけです。そんなわけはない、規約で保存しておくよう定められているはずだといつてね。あなたがここを出て行つた後に売り払つて小金を稼ぎたかつたようです。

なにはともあれ話はつきました。心配はいりません。立てますか？」

シャルトルに手を取られ、ウラルはそろそろと立ちあがつた。ひどいめまいがする。座りこみたかつたが、それよりも早く牢から出たい。シャルトルにうなずいてみせ、ウラルはふらつく足で床を踏みしめた。

馬車までゆつくり、ゆつくり歩いて向かつた。馬車の前では看守が待ち構えている。やはり怖かつたが、シャルトルが心配ないとばかり看守の前に立ちはだかつてくれた。

「ウラルさん、これで間違いないですか？」

シャルトルが看守からアサミイを受け取り、一度鞘から抜く。刃が本当に切れないかを確かめてからウラルに差し出した。ウラルはうなずき、受け取って胸にかき抱く。シャルトルが指示をみると、看守らはウラルに恨みがましい目を向けながら去っていった。

「さ、どうぞ。着いたら医者を呼びましょう。僕は御者台にいますから、なにかあつたら前方の壁をノックしてください」

御者がドアを開けてくれる。シャルトルに促され、ウラルはうなずいて馬車の中に座った。間もなくみしり、と軽く馬車がきしみ、御者とシャルトルが御者台に座ったのがわかった。

馬車が動き出す。ウラルはずると椅子の上で横になった。悪寒がひどい。気分も悪い。アサミイを胸にいだき、馬車の揺れをじかに頬で感じながらウラルは目を閉じた。道を覚えなければ、とぼんやり思ったが、とてもそんな気力はない。

馬車が石でも踏んだのが大きく揺れ、ウラルは椅子の上から床へ転がり落ちる。起き上がる力も残っておらず、ウラルは床に倒れこんだまま再び目を閉じた。

しばらくそのまま眠っていたらしい。

「ウラルさん！ 大丈夫ですか！」

もろに背中に触れられウラルはうめいた。シャルトルがびくりと手を引っこめる。ウラルの背がじっとり血と膿とで濡れているのに驚いたらしい。馬車の床から体を起こし、けれどふらついて椅子に頭をぶつけかけたウラルをあわててシャルトルが支えてくれた。その後ろから御者が心配そうにのぞきこんでいる。

「背中に怪我をしておられるんですか？ 着きました。歩けますか？」

ウラルは答える力もない。喉からせいぜい嫌な音が漏れている。背中に触れないようシャルトルが気をつけながら支えてくれるも、立っているだけでやっとだった。馬車の揺れで悪化したのか、それとも監獄から出たことで気が緩んだのか。

「Bruncha, micena yoo touce id

actee・Tealuse! (ブランシャ、医者を呼んできてくれ。ティアルース!)」

シャルトルの怒鳴り声に御者ブランシャが御者台に飛び乗る。走り去る馬車と入れ替わりに門番らしき男が駆け寄ってきた。

「Maonna'tu, Mc.Chartre? (何事ですか、シャルトルさん)」

「Seebohewleure・Yooewrebokyreuagekasee・Toucelocena・(具合が悪いんだ。背負ってさしあげてくれ。休ませないと)」
「Kaeeuttebidda・(そりや一大事で)」

門番がウラルに背を向けてかがみこむ。おぶされ、と言っているらしい。肩越しに振り向いた瞳は灰色、肩にかかる髪は赤みの強い茶色だ。シャルトルには慣れたが、やはりベンベル人は怖い。ウラルは立ちすくんだ。

「大丈夫ですよ。門番のティアルース、図体は大きいですが、優しい男です」

シャルトルが紹介している間もティアルースはかがんだまま、せかす言葉のひとつもなくウラルを待っていてくれる。その静けさに少しだけ好感が持てた。

「お邪魔、します」

ウラルは勇気をふりしぼってティアルースの肩に手をかけ、身を預けた。ティアルースがベンベル語で何事かを言う。

「ひどい熱だ、大丈夫か、と言っています」

シャルトルが通訳してくれる。ウラルは力なくうなずいた。

シャルトルの先導でウラルを背負ったティアルースはどこかの建物に向かっていく。石造りの建物だ。が、一階の窓の高さが妙に低い。誰かに屋根の上からぐいと押され、地面にめりこんだように見える。あながち間違いでないことが中に入ってわかった。一階は半地下、要は半分地面に埋まっていたのだ。

玄関に入って少し階段をくだり、ウラルはその半地下の一室に通

された。外から見たときは天井が異様に低く見えたが、中に入ってみると地下に掘り下げられている分、天井は十分に高い。その天井の近くには窓があつて、光がさんさんと差しこんでいた。背中に怪我をしていることをシャルトルから聞かされたのだから。ティアル―スはそつと注意深くウルルをうつぶせに寝かせてくれた。

「すぐに御者が医者を呼んでできます。寒くないですか？」

寒いと答えると、シャルトルはどこからか毛布を数枚持つてきてウルルの上にかぶせてくれる。ぱたぱた外へ出て行って手桶をかかえて戻つてくると、ウルルの顔をかたむけさせ、湿した布をひたいに置いてくれた。

間もなく医者が到着した。診察を受け、背中への傷の手当てをしてもらう。シャルトルの通訳によれば、どうもウルルは風邪を通りこして肺炎にかかつていたらしい。薬を飲まされ、ついで背中全体を覆った膿を薬液で落とす。軟膏が塗られ包帯が巻かれた。

医者の薬は効果てきめんで、すぐに体は楽になり、傷の痛みも引いていった。

第二章 2「青い瞳」 上

薬はよく効いたが、ウラルのダメージは深い。最初の丸一昼夜はこんこんと眠り、それから時々目を覚ましながら、それでもほんどの時間眠っていた。シャルトルがティアルースが来てくれたりするのだろう。目を覚ますたび体にかかった毛布が一枚増えていたり、ひたいの布がひんやり冷たいものに換えられたり、枕元に薬と水が置かれていたりしていた。その薬と水の横には真鍮のアサミイが置かれている。馬車の中で眠ったとき、また落としてしまったらしい。ウラルはアサミイを布団の中に引っ張りこみ、顔のすぐ近く、枕の横に置いた。

眠り、目覚めることを繰り返したその何度目か、そばに人の気配を感じてウラルは目を開けた。顔を傾けるとシャルトルが水差しの水を足してくれているところだった。

「シャルトルさん」

振り返った緑の瞳にほつとした。

「ああ、起こしてしまいましたか。具合はいかがですか？」

「おかげさまで随分よくなりました。なんとお礼を言ったらいいか」
ウラルは半身を起こして頭を下げた。シャルトルは微笑する。

「顔色もよくなりましたね、よかった。ティアルースも何度か様子を見に来ていましたよ。僕の母やあなたのご主人、エヴァンス様も起きられるようになったら挨拶へ行きましょうね」

「お母さま？」

ウラルはベンベル人の女性を見たことがなかった。リーグ国やコーリラ国に来るベンベル人はほとんど兵士。最近になってようやく商人らがベンベル産の食べ物を扱う店を開き始めたようだが、それでもやはり女や子どもは見かけない。

「母は地図職人のミュシエといいます。リーグはまだ落ち着いていない、まだ危ないから国に残るよう言ったんですが、僕と一緒にい

たいと、そして緑の山野や巨鳥ムールを見てみたいとごねられましてね」

シャルトルはくすくす笑った。

「港で止められるだろうと『じゃあ来たら』と言ったが運のつき、なまじ腕がいいだけに受け入れられてしまいました。地図の需要は大きいですから」

ウラルは二の句が告げられない。女、子どもを見かけなかったおかげで、ベンベル人は残忍な男しかない、人でない別の生き物のように思っていた節があった。けれど、ひと皮むけば　この緑の目のベンベル人に、こんな人間味あふれるお母さんがいる。その母のことをこんな愛情たっぷりに話すシャルトルがいる。

「どうかしましたか？」

「い、いえ。女の方がちょっと珍しかったです。お会いしてみたいな」

と、ノックの音がした。

「Chartre? Mou i u u a t e e z i r e e m e? (シャルトル? 入っていいかしら)」

「噂をすれば。って、リーグでも同じように言いますか? 噂をすればその人が来る、と」

「言います」

ウラルは思わず笑った。シャルトルが一瞬なぜか呆然としたように立ちすくみ、それから満面の笑みになる。きつとシャルトルもリーグ人の笑顔を見るのが初めてだったのだ。

シャルトルがベンベル語でドアの外に声をかけると、栗色の髪と緑の目をした婦人が入ってきた。シャルトルは母に似たのだろう、はつとするほどそっくりだ。その後ろには門番のティアルースが湯気の立つもの乗ったお盆を持って従っている。どうやらお粥を持ってきてくれたようだ。ウラルの顔をみとめ、嬉しそうにほほえんでくれた。

「こんにちは、初めまして。ウラルと申します。いろいろお世話を

かけて申し訳ありません。ティアルースさん、以前はありがとうございました」

シャルトルが通訳してくれる。二人はどうやらリーグ語がわからないらしい。通訳が終わるとミュシエはにっこりほほえみ、ティアルースはくすぐったげに首の後ろに手をやった。

「Hie iea yoo?」

「もう大丈夫なのか、と言っています」

またシャルトルに通訳をお願いするのが少し申し訳なくて、ウラルはにっこり笑ってみせた。ティアルースの頬が一瞬赤くなり、ベンベル語を口の中でもごもご言いながらうつむいてしまう。

「若い娘さんを間近で見るのが久しぶりだから、彼も緊張しているんですよ」

シャルトルがティアルースを小突いた。ベンベル語でなにかを言うと、ティアルースもベンベル語でなにやらむきになって言葉を返す。にやにやしているシャルトル。どうやらからかっているらしいかった。思わずもう一度ほほえむと二人がぴたりとウラルを見つめ、顔を見合わせて笑った。

「よかった、本当にお元氣になられたようだ」

「はい。私はメイドの仕事をすればいいんですよね。つくろい物なんかなら今からでもできますよ。さすがに家事はまだちょっとつらそうなんです、明日からなら」

「いえ、念のため明日いっぱいまではお休みしてください。またそこから体調を崩されては。ウラルさんのお仕事はこの屋敷の者、ご主人エヴァンス様や僕、ティアルースらの使用人の炊事と洗濯、それから屋敷の掃除ですね。慣れるまでは僕と母も手伝いましょう」

黙って聞いていたミュシエがウラルの視線を受けてにっこりほほえんだ。

「買い出しは？」

「ティアルースが行ってくれます。やはり祖国の素材を使った食事がいいのでね、ベンベル人の市場で買うことにしているんですよ」

「ウルルはうなだれた。これでは屋敷の外に出られない。」

「外に出たいですか？ それもそうですよ、あんな監獄に閉じ込められて、こんな異国人ばかりのところへ連れてこられて。寂しければご友人をお招きしても構いませんよ。場所を教えてくださいただければ誰か使いをやりませんが」

「本当ですか？」

「フギンに自分の居場所を教えられる。居場所さえわかれば、きっとまた夜の目立たない時間を選んでウルルを迎えに来れるはずだ。」

「ウルルは飛びつきかけ、待てよ、とこらえる。フギンは今、お尋ね者だ。監獄から脱走し、しかも監獄に囚われていたリーグ人をみんなまとめて逃がしてしまった。あの拷問は何のためだったのか、フギンらの居場所を聞き出すものだったはずだ。そしてシャルトルはあのと時処刑場にいた。シャルトルは優しい。本当の好意かもしれない。けれど。」

「すごく嬉しい……嬉しいんですが、でも、みんなベンベル人の姿を見たら警戒して逃げてしまふと思っんです。怖がらせるのは本意じゃないので、今は、まだ」

「シャルトルは申し訳なさそうにうなずいた。」

「たしかにそうかもしれませんが。あなたがたのお気持ちも考えず、申し訳ない」

「K a e , M c . C h a r t r e . (ああ、シャルトルさん)」

「今まで黙っていたティアルースがシャルトルにベンベル語で何かを話しかけた。」

「ウルルさん、そろそろお祈りの時間だそうです。ウルルさんはウセリメ教の信者ですか？」

「ウセリメ教？」

「ああ、やはり違いましたか。四大神教の信者ですか？」

「四大神教？」

「まったく聞いたことのない単語に面食らいながら尋ねると、シャルトルはくるりと首をかしげた。」

「こう言うと、リーグ人はわからないんですね。地、火、風、水の四大神に仕えている方ですか？」

「仕える、という感じではないんですが」

ウラルは故郷の村にあった小さな像を思い出した。白い大理石でできた、四人の神の像。その像はふつと形を変え、ジンと見た、王都の神殿にある二枚組みの絵画になった。

憎悪の風神。片手に髑髏を持った悲しい風神の絵。

「ウセリメ教信者ではないんですね。これからお祈りの時間なんです。一緒においでなさい、改宗しましょう」

「改宗、ですか？」

「そうです。私たちの神は厳しいですが、優しい方です。一日に五度のお祈り、ほかにもたくさん決まりごとがありますが、それぞれ守れば、戦の勝利、豊作、そして来世の安楽を約束してくれます。四大神は、そんなことはしないでしよう？」

「来世の安楽？ 来世って、何ですか？」

「人は死ぬと、私たちの神によって裁かれます。主の教えを守って生きていけば楽園へ導かれ、教えを守らなければ煉獄へと落とされるのです」

「楽園と煉獄って、どんな場所なんですか？」

「楽園は、神のおられる場所です。神によって永遠の安息を約束され、そこでは飢えることも、渴きに悩むことも決してありません。しかし煉獄に落とされた人間は、永遠の業火に焼かれ続けるといわれています。人は二度死にませんから、業火に焼かれる苦しみを永遠に与え続けられるのです」

ウラルは身震いした。目の奥に炎の色が広がる。死んだ赤ん坊を抱き、陶芸窯の空気穴から見た、あの炎。

「私の神は、そんなことはしません。人が死ねば、死をつかさどる風神がその人の心の中へ魂を戻して、安らかな眠りにつかせるのです。そんな、楽園なんて信じられませんか、行きたいとも思いません。ましてや人をそんな恐ろしいところへ行かせる神に仕えるなん

て、私にはできません」

シャルトルが激しくかぶりを振る。

「いいえ。たとえ異国人であっても、私たちの神に裁かれるのですよ。あなたはお祈りをしていない上、私たちの神を否定していますから、煉獄へと落とされてしまいます。今なら、慈悲深い私たちの神は許してくださいと思えますが」

シャルトルの口調は、嘘や冗談を言っているものではない。シャルトルは心からその恐ろしい神を信じているのだ。

「このままでは、あなたは、煉獄の炎に焼かれ続けることになってしまいますよ」

ウラルはそつとチュユルの紋章が描かれたペンダントをにぎった。この紋章は角笛とあわせて、地神をあらわすものなのだ。

ウラルは風神に仕えている。死を司る風の女神に。そんなおそろしい神を信じるなんて、絶対にできない。

シャルトルはまた何かを言いかけ、けれど何も言わず悲しげに口を閉ざした。

「今から、お祈りがあります。二階の祭壇の間で行いますので、あなたはあがってこないでくださいね。異教徒が祈りの間に入るとは禁じられていますから。じゃあ、お加減もよさそうだし明日は屋敷を案内しましょうか。夜にはいいよいよエヴァンス様とのご対面ということで」

「はい。お願いします」

ベンベル語でシャルトルが何事かを言うと、ティアルースとミニシエがうなずいてドアの方へ行ってしまった。そろそろ行こう、あたりのことを言っていたのだろう。

部屋を出ていく三人を見送り、しばらくぼんやりしていると上の階から歌が聞こえてきた。これが彼らの「お祈り」なのだろう。とてもきれいで、おごそかな歌声だ。ウラルは目を閉じ、耳を澄ませた。シャルトルが言うようなおそろしい神への祈りが、こんなに美しい歌声だなんて。けれどこうして慰撫しなければ荒れるような神

様なのだとしたら。それは、とても悲しいことに思えた。

第二章 2「青い瞳」 下

*

「門番はティアルースのほか三人。全部で四人いるんです」

庭園を抜け、門の脇を通りながらシャルトルが説明してくれた。

昨日の約束通り屋敷の案内をしてくれているのだ。この家の主エヴァンスの部屋、シャルトルの部屋、キッチン、リビング、井戸と物置き、厩舎をまわって門の前。門の前にはティアルースともうひとり、見慣れないベンベル人男が詰めていた。

「じゃあ、私は四人の門番の方とシャルトルさん、ご主人、ミュシエさん、それから私の八人分の食事を作ればいいんですか？」

「いや、門番はティアルースだけが住みこみ、ほかの三人は通いなんです。昼間に詰めてもらうのはこのうち二人、あとの二人は交代で休みです。それからエヴァンス様は尾昼間は出かけておられますから、お昼ご飯は門番二人、僕、母、あなたの五人分ですね。朝夕はエヴァンス様、僕、母、ティアルース、ウラルさんの、やはり五人。さてと、これでひと通りですかね。なにかほかにご質問は？」

「あ、そうだ。どうして一階が地面に埋まっているんですか？」
シャルトルはきょとんとし、それから笑って屋敷をかえりみた。

「そうだ、リーグの建物には地下がないんですね。ベンベル国は一日の気温差がとても激しい国です。地面の中のほうが寒いときは暖かく、暑いときは涼しいのですよ」

「暗くないですか？」

「ええ、上のほうは地上に出ていますから、そこから光が漏れてきます。ほかには？」

「いえ。また気になることがあったらお聞きしてもいいですか？」

「もちろん。さてと、じゃあいよいよエヴァンス様とのご対面といきましようか」

主人エヴァンスは朝に仕事へ出かけ、夕方ごろ帰ってくるようだ。ついでさつき、厩舎の案内をしてもらっているときエヴァンスのものらしい馬が連れてこられたので、そのとき帰ってきていたらしい。どんな方だろう、このシャルトルのご主人なのだから悪い人ではあるまいとは思うのだが、それでも緊張は抑えられそうにない。

屋敷に戻り、シャルトルはリビングのドアをノックする。主人のものらしい落ちついたテノールで返事があった。ベンベル語で「入れ」とも言ったのだろう。シャルトルがドアを開けた。

暖炉の暖かさにじんわり包み込まれた部屋の中、革張りのソファーがワンセット部屋の中央に置かれ、そこにひとりの男が座り書類に目を通している。ウラルは息をのんだ。男はまったく違う風貌をしているのに、一瞬、「ジンが座っている」と思ったのだ。

ベンベル人騎士、エヴァンス・カクテウス。さすが騎士というべきか。厚い胸板、太い腕。たくましく引き締まった長躯の男だった。ゆるやかに湾曲した長い剣を腰につるしている。燦然と輝く金髪に青い瞳。くすんだ青のジャケットがその瞳の色とあいまって、よく似あっていた。

シャルトルがベンベル語で何事かを報告している。最後にウラルの肩を軽く叩いて、前へ行くよううながした。

「お前が監獄に囚われていたリーグ人を脱走させたという女か」
挨拶もなしに、確かなリーグ語で尋ねられる。

「はい」

ウラルもリーグ語で答えた。

騎士、という一点で共通しているからだろうか。どこかジンと似通った雰囲気がある。体の中に一本、硬い芯が通っているかのよう。強いものを感じた。けれど、背格好や雰囲気はジンに似ているのだが、目がまったく違う。エヴァンスの目はその色のせいだか固く凍てついた湖を連想させた。何かを鋭くつらぬきとおすような、冷酷とさえいえる、かたい目だ。ジンの温かな目とは対照的だった。

「名は」

「ウルルと申します」

エヴァンスの目が鋭く光る。細い氷の剣が襲ってくるかのような、冷たい視線。

「最初に言っておく。私はリーグが嫌いではない。リーグ語も自由なく話せる。だが、リーグ語を話して生活したいとは思わない。ましてや、ここはベンベル国の一部だ」

ウルルは一步、後ずさりそうになるのを必死でこらえた。鋭い口調とあいまった覇気。シャルトルは「悪い人でないことは保障する」と言っていたが、こんなところでメイドをやっているのだろうか。おそろしく厳格な主人ではないのだろうか。

「ベンベル語を覚えなさい。私はこれから、お前に何かを言いつけるときはベンベル語で先に内容を言ってから、リーグ語で同じことを繰り返す。お前は、わからない時はリーグ語を使って構わないが、片言でいいから、できるだけベンベル語を使いなさい。いいか」

ウルルはきよとんとなった。鋭い口調とは裏腹に、言っていることはかなり優しいのではないだろうか。

「返事は」

エヴァンスの口調が鋭さを増す。ウルルはあわてて、はい、と返事をした。

エヴァンスがベンベル語で何かを言った。一通り言い終わってから、リーグ語で同じことを繰り返してくれる。

「返事が『はい』の場合は『Uose Su.』、『いいえ』の場合は『Nee Su』と答えなさい。このうち『Su』は敬称で、『主人』という意味だ。私を呼ぶときも『Su Evans』、『スー・エヴァンス』と呼びなさい」

「Uose Su.」。じくじくとまた、背中の傷が痛みだす。なるほど、拷問のとき「はい、ご主人様」と答える、と迫られているのだ。

「Uose Su.」

たしかにエヴァンスは、今のウルルにとって主人には違いない。

あのときの尋問官よりはよほど主人に値する人だ、とは思ったが、歯の奥になにかがつまっているような、歯切れの悪い言い方になってしまった。

エヴァンスは短く「それでいい」とリーグ語とベンベル語の両方で言ったが、表情をほころばせるわけでも、頬をゆるめるわけでもない。無表情。

「お前にやってほしいことは、炊事、洗濯などの家事一般だ。庭の手入れや私への使い走りには別の者がいる。食材や、必要のあるものは門番に言っ去买いに行ってもらいなさい」

「Uose Su. (はい)」

「では、明日の夜明けに起きて朝食を準備するように。ミュシエ婦人が手伝ってくれるはずだ」

エヴァンスがシャルトルに視線を向ける。早口のベンベル語で何事かを話した。さすがにこれは訳してくれないだろうな、と思っっていたら、エヴァンスは視線をシャルトルに向けたまま、リーグ語に直してくれた。

「シャルトル、ウラルへの屋敷の案内は終わったか」

「Uose Su. Evans. はい、スー・エヴァンス」

シャルトルもエヴァンスの真似をして、最初にベンベル語で言うてからリーグ語で同じことを繰り返した。

「ならばもう下がってよろしい。ウラル、明日から頼むぞ」

ベンベル語、リーグ語の両方でまた言われ、ウラルはまた「Uose Su.」と返した。エヴァンスはうなずき、すいと手を伸ばし書類を手に取ると、静かにコーヒーを飲みながら暖炉の前のソファに座って書類に目を通しはじめる。やはり、ジンとエヴァンスは違う。とてもじゃないがジンにこんなおしゃれなことはいできない。

「シャルトルさん、『おやすみなさい』って、どう言っんですか？」

「『Gedda neuha』です。『Su Evans』とそえ

るのを忘れないように」

そつと尋ねてみると、やはり小声で、やさしく教えてくれた。

「G e d d a n e u h a , S u E v a n s .」

すつとエヴァンスが顔をあげた。

「G e d d a n e u h a , U r a l . (おやすみ、ウラル)」

凍てついた湖のような冷たい瞳、けれどほんのわずか口元に笑みを浮かべているようにも見えた。シャルトルとふたりで一礼し、部屋の奥にあるドアをくぐる。

「どうです？ 悪い人ではないでしょう」

シャルトルは白い歯を見せて笑っていた。

第二章 3 「とらわれて」 上

ウラルは耳を澄ませていた。歌が聞こえる。何回か聞くうちに、それが歌ではなく、特殊な旋律をもった読経だということに気がついた。

ベンベル人は、夜明けと、昼間と、日没前、日没後、そして、夜寝る前の一日五回、祈りの儀式を行うらしい。ウラルはベンベル人にとって異教徒だから祈りの場には入れてもらえないのだが、この歌のような経文は素直にきれいだと思う。何を言っているやらまったくわからないウラルにとっても、だ。

読経が終わる。ウラルは放牧場の中にいる馬のひたいをなで、寝藁を干す作業にもどった。目と鼻がすうすうする。寝藁にしみこんだ糞尿が蒸発して、目にしみているのだ。

リーグの馬とベンベルの馬は体格や性格が少しずつ違う。ベンベルの馬はすらりとした体型で、比較的気が荒かった。だが、鼻を鳴らしたり蹄で地面を叩いたりする「言葉」は、リーグの馬となんら変わりが無い。この糞尿のにおいも同じだ。

「ウラルさん」

祈りの儀式を終えたシャルトルが様子を見に来たようだ。

「あれ、ペルーダは房にはいったままですか？ 午前うちに日光浴をさせておかないと」

ペルーダはここに飼われている一頭のゴーランの名、房とは寒暖差に弱いゴーランを入れておく小屋のことだ。

シャルトルが困ったように肩をすくめる。

「まあ、娘さんには人気のない動物ですからね、ゴーランは。本来門番の仕事ですから無理にとは言いませんが、そんなに嫌がったらペルーダが悲しみますよ？」

そうなのだ。ウラルはゴーランが苦手だった。ゴーランの姿がちよっとでも目に入るだけで、足がガクガク震えだしてしまう。

馬やゴーランの世話は門番の仕事だった。馬のそばにいれば馬好きの友人を思い出して少し気分が明るくなるので、少し仕事を手伝わせてくださいと言い出したのはウラルの方。けれどまさか、この乗用トカゲが馬に混じって一匹いるとは思ひもなかった。はじめて間近にこの姿を見たときには、思わず悲鳴をあげてシャルトルにしがみつくと騒ぎになってしまったほどののだ。

ウラルも小さくため息をついた。たしかに、ゴーランは恐ろしい姿の動物だ。巨大なトカゲの姿に、鋭い牙。そしてぎよるりぎよるりと動く縦長の瞳孔をもった金の瞳。だが、ゴーランがもし、ごくごく普通のリーグの動物だったら、ウラルはこれほど恐ろしいとは思わなかっただろう。

ゴーランを見るたび、戦場を思い出すのだ。はじめて スヴェルがリーグ軍に加勢したあの戦場。兵士を乗せ、けわしい岩場をすいすいと登っていくゴーランの一団。そして、ゴーランに苦しめられたという、ゴウランラ の要塞を。馬を見て馬好きの友人、つまりはフギンを思い出すよりよほど強い恐怖が胸を支配して、気分が明るくなるどころの話ではなくなってしまった。

シャルトルがゴーランの房へ向かっていく。ほどなくして、滑車のついた檻をガラガラと押して外へ出てきた。檻の中にはむろん、ゴーランのペルダがいる。体の奥に走る震えを必死にこらえながら、ウラルは馬の寝糞を干す作業に戻った。そんなウラルを尻目に、鼻歌を歌いながらシャルトルはペルダの手入れを始めていた。

馬とゴーランの手入れが終わったら、次は掃除だ。広い屋敷を端から端まで掃き清め、モップをかけていく。午前中に洗濯を終わらせておいたからいいものの、本当にウラルが来るまでどうしていたのやら。まさかミュシエが一人で家事を回していたのだろうか。

シャルトルはエヴァンスの部下というだけではなく、どうやら秘書役でもあるらしい。ウラルが掃除をしている間は部屋にこもってエヴァンス宛の書類を読んでいる。だが、常に部屋のドアは半開きにされて、常に廊下の物音を聞けるようになっていた。まるで監視

されているかのような。

それにこの家に来て以来、家の敷地の外へは一度も出たことがない。そういえば前にウラルが外へ出たいと言ったとき、シャルトルは話題を巧みにすりかえていなかったか。ウラルを外へ出すのではなく、友人を招いてもいい、と。居心地の悪さを覚えながらごしごしと廊下をモップでふいていく。

と、ウラルの腕が今朝いけたばかりの花瓶に当たった。

「まずい！」

反射的に落ちかけた花瓶を受け止める。なんとか受け止められたが、転んでしまい、思いきり頭を床にぶつけた。花瓶に入っていた水が顔にかかる。

「どうしました？」

シャルトルが飛んできてくれる。水浸しで花びらまみれになっているウラルを見て、あぜんとした顔をした。

「お怪我はありませんか？」

「あ、大丈夫みたいです。こっちの花瓶も」

ウラルの頭ほどもある大きな花瓶をシャルトルに見せる。こんな大きな花瓶を胸に抱いたまま後ろへ倒れてしまったので、押しつぶされた胸が痛く、息をうまく吸えないが、とりあえず怪我らしい怪我はなさそうだった。

「そりゃあ、よかった」

シャルトルがほつとしたように笑い出す。ウラルも笑った。なんだ、監視といってもこういう意味だつてあるのだ。シャルトルとエヴァンス以外とはまともに言葉も通じない、ベンベル式に不慣れなウラルを見守ってくれているだけ。

「着替えてきてください。ここは、私が」

「でも、私のミスです」

「そんな水浸しの格好では風邪をひいてしまう。そうして一日二日、休まれるほうが僕にとっては困るんですよ」

シャルトルが優しく笑う。ウラルはにっこりほほえんで礼を言い、

廊下を走り出した。

着替えて廊下の花をいけなおし、昼食を作ってから空いた時間はミュシエ婦人の部屋に入りびたる。雑用をしたり、絵のモデルになったり、ときにはそこからキッチンへ移動して料理を教えてもらったりしていた。

「S n n a d i e a i a d a t o u c a i h e r y o .

(椅子に腰かけて、花を持って)「

ウラルは言われたようにした。絵筆をにぎりキャンパスに向かうミュシエの後ろには地図が壁を埋めつくさんばかりに張られている。そしてウラルの右手の壁にはこれまた壁を埋めつくさんばかりの絵がかけていた。このヒュガルト町の市場の絵が多い。

「(この町の地図を描くためや、絵を売るために町を歩き回ってね、そのたび素敵な風景を見つけて描くのが楽しみなのよ)「

はじめてこの部屋に来たとき、シャルトルの通訳でミュシエはそう言っていた。そもそも絵の趣味が高じてこの婦人は腕利きの地図職人になったのだ。

「(昨日ね、絵を売りに行ってきたの。言っていたでしょう? 七日に一度、売りに行くのよ)「

ウラルは持っていた花から目をはなし、ミュシエを見た。ミュシエの言葉はベンベル語だが、ゆっくりとわかりやすく発音してくるので、わかる単語をひろっていけば言っていることはなんとなくわかるようになっていた。

「(あなたの絵、すごく好評だね。みんな売り切れたわ)「

ウラルはほえんだ。後半部分はよくわからなかったが、悪いことではなさそうだ。

「(でね、最後のほうに絵を買っていった人がいたの。リーグ人の男の子。絵を見て、とても驚いていたわ。あなたの知り合いだつて)「

ベンベル語がよく聞き取れず、ウラルは首をかしげた。ミュシエは「(あなたの知りあい)「とゆっくり繰り返す。

「（あなたに会いたい、って言っていたわよ。似顔絵をスケッチしてきたの。見覚えある子？）」

ミュシエはインクでぎっくりと描いた絵を見せてくれた。十歳くらいのやせっぽちの少年。くるりとした大きな目、はにかみ笑いを浮かべた口元。

「ナウト！」

おそらくフギンに言われてこの街を探し回ってくれていたのだろう。思わず笑顔になったウラルにミュシエが笑い返した。

「（シャルトルがちょうどいないときを見はからって、こっそりねもつとしっかり描きこみたかったんだけど、シャルトルが帰ってきたとたん逃げるみたいはどこかへ行っちゃって。ナウトって子なの？）」

あまりよく聞き取れなかったが、最後の質問はわかったのでうんうんうなずくと、ミュシエは満足げにっこりした。

「（じゃあ、今度またあの子が来たらウラルが喜んでたって伝えなきゃね。さてと、そろそろ夕飯を作りに行きましょうか。先に行っていてちょうだい。私は片付けてから行くからね）」

「Uose！（はい！）」

持っていた花を花瓶にいけなおし、階段をくだってウラルはいそいそキッチンへ向かった。ナウトがそこまで来てくれているのだ、フギンがこの屋敷まで来るのも時間の問題だろう。フギンやナウトに会える。思ったよりずっと早く。

捨て忘れていた生ゴミのバケツを手に取り外へ向かう。生ゴミは馬糞と一緒にしておくことになっていた。そうしてしばらくねかせ、肥料として売り払うのだ。あたりはもう薄暗い。ウラルは小走りに馬のところへ行こうとして、はたと足を止めた。

庭園の隅で何かが動いた気がしたのだ。手入れの行き届いた形のいい木々のあたりで。門番の誰かだろうか、いや、あんなところに用事があるはずがない。泥棒だろうか。シャルトルを呼びに走ったほうがいいだろうか。

まじまじと見つめるうち、もう一度人影が木立の間に姿を現した。黒装束の何者か。真っ黒なマントを着ていて、体格がわからない。人目を忍んでいるのは明らかだ。

「誰？」

人影は頭巾を取り、そつと顔に手をやった。人差し指を口に当てているらしい。「静かに」。頭巾を取ったその髪は褐色、リーグ人だ。顔立ちはまだ遠くてわからない。

人影がこちらへ向かってきた。木立の間から足音を立てぬよう用心しながら走る姿が見え隠れする。やがてウラルから一番近い木まで来ると、そこから手招きした。褐色の髪と瞳、そのやさしい瞳には安堵の色。

「ウラル、やっと見つけた」

「フギン！」

「しーっ。静かに」

言いつつ、フギンは駆け寄ったウラルを隻腕で抱きすくめた。

「ひどいことされてない？ 思ったより早く会えたね」

「どうやってここまで来たの？ ミュシエさん、西広場でナウトらしい男の子に会った、としか言っていなかったけど」

「そう。そのままご婦人のあとをつけたんだ。ナウトのお手柄」

人なつっこい少年のようなフギン特有の笑い方をする。

「アラールは？ ダイオ卿はまだ一緒にいるの？」

「一緒にいるよ。あの二人は目立ちすぎるから来れなかったんだ。すぐに会えるよ。荷物をとって、またすぐここに帰ってこられる？」

ウラルはうなずき、エヴァンスの家へ足を向けようとした。

「待って。誰か来た」

フギンに肩をつかまれ、引き戻される。

「私だったら、怪しまれないから。大丈夫」

「まあ、そうだけどさ」

フギンがウラルの肩を離した。むこうからランタンの明かりが近

づいてくる。

エヴァンスとシャルトルだ。何かを話しながら門をくぐり、広い庭園を抜けていく。

「私、この屋敷のメイドをしてるんだけどね。あの背の高い人がご主人。もうひとりはその秘書の方で、私の面倒を見てくれるの」「フギンの反応を求めてウラルは振り返った。

フギンは何も言わない。表情が一気に固くなり、にらみつけるような視線になった。

「どうしたの？」

「あいつ」

しぼりだすような、うなり声のような口調。

「あの金髪の男、ベンベル人騎士だよな」

「そうだけど。知ってるの？」

フギンがぶるぶると肩を震わせた。サーベルの柄に手をかける。

「あいつ、一年前の戦いに、参加してた」

「え？」

たしかに高位騎士で、リーグにいるのだから、エヴァンスがあの戦いに参加していても不思議ではない。

「俺、目の前で、見てたんだ」

フギンの顔は、蒼白だ。サーベルの金具がガチガチ鳴っている。

「あいつが、頭目を殺した。ものすごい斬り合いだったけど、最後に、頭目の胸を、あいつが剣で刺した」

ウラルは目を見開いた。無意識のうちに漏れかけた悲鳴、フギンがあわててウラルの口を手でふさぐ。

「ウラル？ 何をしているの？」

真っ暗になっていた二人のまわりをランタンの明かりが照らし出した。ウラルが遅いのに心配したのだろう、ミュシエが来てしまったのだ。

「その人は誰？」

言ってから、ミュシエはフギンの半分鞄から抜かれたサーベルに

気づいて悲鳴をあげた。

「母さん？ どうしたんですか！」

庭園を歩いていたエヴァンスとシャルトルが騒ぎに気づいて走ってくる。

「来て！」

フギンが怒鳴り、表通りへ走り出た。ウラルも続くが、エヴァンスに腕をつかまれる。

「監獄のリーグ人を逃がした男だ。追え！」

シャルトルがふたりの門番に怒鳴る。ティアルースが徒歩で、もうひとりが馬でフギンを追った。

フギンはウラルを待たなかった。ぱつと裏道に入り、姿をくらましてしまう。ウラルの居所がわかったから助け出すチャンスはいくらでもあると思ったのだろう。

「フギン・ヘリアンか」

ウラルはぐつと唇を噛み、エヴァンスの顔をにらみつけた。鋭い瞳がいぶかしむようににらみ返してくる。

こいつが、ジンの、仇。

*

ウラルにあてがわれた部屋はそのまま独房と化した。ドアに鍵を
かけられてしまえばどこからも出られなくなる。部屋は半地下にあ
って、ベッドの上で立ちあがっても手の届かない高さにしかな
ない。窓を割って逃げようにも、頑丈なよろい戸がガラスの外でぴ
ちりと閉じられており、しかも外からかんぬきをかけられていた。
「出してください。スー・エヴァンスにお話したいことがあるん
です」

「スー・エヴァンスからのご指示がない限り、だめです」

何度も言ってみたが、ドアの外で見張りをしているシャルトルか
らは冷たい返事が返ってくるだけだ。ウラルは唇を噛みしめ、内
側からドアをノックした。こぶしを握りしめてドアをたたくが、何
の反応もない。

「はじめから、そういうつもりだったんですか？」

声が震える。

「私をおとりにして、フギンをおびき寄せるつもりだったんですか
？ 最初から？」

答えは返ってこない。

ウラルはドアをこぶしでぶん殴った。

「そうです」

やっと、シャルトルからリーグ語で返答があった。

「全部、全部演技だったんですね……」

こぶしをおろす。ドアから離れて、ベッドの上でうずくまった。

あの笑顔は。あの優しさは全部ウラルを信用させるためだけの。

「違う」

ドアの向こうからシャルトルのくぐもった声が聞こえてくる。

「違います。全部演技なんて、そんなことを言わないでください」
低い、低い悲しみに満ちた声。けれどあの笑顔が演技だったのなら、そこまでの役者なら、これくらいの声を出すのはたやすいはずだ。

「ウルルさん、正直に話します。たしかに、監獄にあなたを迎えに行ったときは演技でした。あなたに背中を刺されたことに対する怒りや復讐の気持ちもありましたし。看守らにひどいふるまいをさせて、そこに僕が救いに現れて、優しくしてやって。それで信用させようと思っていました。あなたからフギンさんらの居場所を聞きだすため、あなたを餌に彼らをおびきよせるために。けれど」

ウルルは枕元に手をやった。ジンの形見のアサミイをにぎりしめる。鞘から抜くと、真鍮の刀身がちかりと光った。

思い返してみれば、監獄でこのアサミイを返してもらったとき、「儀式用で刃は研がれていない」ということをシャルトルはしつこく確認していた。これはウルルをおとりに使うことを前提に、ウルルがエヴァンスとシャルトルを恨むことを見こしていたからではないだろうか。ウルルが武器を持っていないことを。どれだけ憎んでもエヴァンスやシャルトルを傷つけられないことを。

「けれどあなたはそんな僕をのしるところか、ごめんなさいと。あろうことが謝ってくださったんです。拷問は全部スー・エヴァンスと僕の指示でした。それなのに」

そうだったのか、とウルルは目を伏せた。あの拷問はエヴァンスの指示。すべてが演技。

「あなたが初めて僕に笑顔を向けてくれたときの驚きが想像できますか？ 普通はそこで罪悪感をおぼえるでしょう。けれど僕は、僕はただただ嬉しかった。本当に嬉しかった。

あなたの笑顔がずっと見たくて、あなたに本当に幸せになってほしくて。それからのふるまいは、演技じゃない。信じてもらえないかもしれないが」

ウルルはもう聞いていなかった。壁にもたれかかり目を伏せる。

「あなたには力がある。あなたの幸せを誰もが願わずにいられないでも僕はスー・エヴァンスの部下です。ベンベル国に仕えています。だから、だから……申し訳ない」

あの、エヴァンスが。憎悪に体が震える。エヴァンスは、ジンとウラルに関わりがあったことを知っているのだろうか。いや、戦場の混乱の中のことだから、ジンのことを覚えているかすら、怪しいかもしれない。

交互にエヴァンスとジンの姿を思い浮かべた。ともに堂々たる偉丈夫。そして、背筋に一本固い芯のおったような騎士の風格と覇気。ジンはよく声をあげて笑っていたが、エヴァンスは表情らしい表情を見たことがいまだ一度もない。褐色の強い光に満ちた瞳と、鋭い光を帯びた青い瞳。

「Maonna doce uage? (何をしている)」

ドアの向こうに憎い人の声がした。

「Su Evans… (スー・エヴァンス……)」

「Karpea zireeme. Iu muunanae

Uraai. (開けなさい。ウラルに会いに来た)」

「ウラルさん、スー・エヴァンスが来てくださいました。開けますよ」

シャルトルの声に続き、ウラルの返事も待たずにドアが開いた。

ウラルはぐつとエヴァンスの青い瞳をにらみつける。最初は怖いと思ったこの瞳が、今は憎くて仕方がない。

「何をあの男に言われた」

相変わらず、挨拶もなしに尋ねられた。

「私の目でわかりませんか？」

ウラルも負けじと言い返す。

「私が憎いか」

「ええ」

「お前をおとりとして使ったからか？」

ウラルは答えなかった。ぎりりとエヴァンスをにらみつける。

エヴァンスが部屋に置かれた椅子に座った。ウルルもベッドの上で座りなおす。頬をつたった涙の跡を見られるのが、恥ずかしい。「お前が話をしたいと言っているとシャルトルから聞いた。聞こう」

ここでやっと、エヴァンスがリーグ語で話していることに気がついた。普段はベンベル語で先に内容を言ってから、リーグ語でそれを訳している。

「なぜ、リーグ語を使うのですか」

「いちいちベンベル語で話しては、時間の無駄だ。おまえがベンベル語を片言しか話せないから、私がリーグ語で話している」

感情のまったくももらない声で言ってから、エヴァンスは「早く本題に入れ」とばかりにあごをしゃくった。

ウルルから尋ねたいことはひとつだ。

「一年前、どこにいましたか」

「なぜ、そんなことを聞く？」

ウルルは黙ったままエヴァンスの目を見つめる。エヴァンスは不服そうに鼻を鳴らし、まあいいだろう、と足を組みかえた。

「私は三万の兵を率い、ヴァーノン山脈のふもとにあるルダ才要塞攻略の指揮をとっていた」

ウルルはこぶしを握りしめた。

「やっぱり、そうですか」

「やはり？」

ウルルの眩きも、この至近距離では聞き逃してもらえそうにない。できることは、言ったあとで黙ることだけだ。

「どういうことだ」

「いずれ、わかります」

エヴァンスがジンとフェイスの仇だと知った以上、フギンとダイオ、そしてアラール八が黙っているとは思えない。ウルルもこのまま黙っている気には到底なれないのだ。

彼らは必ず、エヴァンスに報復する。

「一年前のルダオ要塞攻略が、私を憎む理由なのか？」

「ええ」

「私に尋ねたいことは、それだけか」

「Uose, Su Evans. (はい、ご主人様)」

思いきり皮肉っぽく言つてやる。エヴァンスが無造作に足を組みかえた。その腰にある剣、ベンベル式に大きくしなつた刃をもつ長剣、シャムシールの金具が不穏な音を立てる。

「それほど私が憎いなら、ここで殺してみるがいい」

声に感情がこもらないどころか、絶対零度の冷たさだ。淡々としているのに、おそろしくとげとげしい。

「花瓶は割れば立派な刃物だ。私が座っているこの椅子も、鈍器として扱えば充分人を殺せる。試してみるがいい」

反射的に枕の下のアサミイをにぎろうとしたウラルは、ぐっと歯を食いしばりながらその手をひっこめた。

ジンの形見であるアサミイは儀式用で、刃が研がれていない。研がれていたとしても、エヴァンスの腰には長剣があるのだ。いや、たとえ丸腰だったとしても、相手は騎士。到底かなう相手ではない。もしフギンがここにいたなら、勝ち目がないとわかっていても向かつていったらうが。

短気をおこせれば、エヴァンスに一度、ぶん殴られたら頭も冷えるだろうに。黙りこむことしかできないから、怒りがどんどん積み重なるっていく。

エヴァンスが立ちあがった。捨て台詞も言わず、ウラルに冷たい一瞥をよこしながらさっさと部屋を出て行く。悲しげな目をしたシヤルトルがドアを閉め、外から鍵をかけた。

フギンに会いたかった。こんなところにひとりでいるのは、我慢できない。

もう一度、ノックの音。

「ウラル、もうひとり、あなたに会いたいという人が来ています。通してかまいませんか？」

シャルトルの声が遠慮がちになっている。どうぞ、と答えると、ゆっくりドアが開いた。

エヴァンスの姿は影も形もない。ドアノブをにぎるシャルトルの陰にいたのは小柄な婦人だった。

「ありがとう、シャルトル。席をはずしてちょうだい」

「でも母さん。スー・エヴァンスにここから離れると言われてい
るんです」

「外から鍵をかけてくれてかまわないわ。出たいときは中からノックをして合図するから。女同士の聞かれたくない話なの」

ミュシエを部屋の中に残し、ドアが閉まった。シャルトルが鍵を閉める音がする。

ミュシエは足を引きずりながらゆっくりとベッドの上のウラルに近づいてきて、さっきまでエヴァンスが座っていた椅子に腰を下ろした。

「ウラル」

ミュシエがそつとウラルの手をとる。

「かわいそうに。泣いていたの？」

ゆっくりとした、たどたどしいリーグ語。目頭が熱くなるのをウラルはぐつとこらえる。

「（昨日の人に、会いたいのよね）」

次はベンベル語だったが、ゆっくりと発音してくれるので言っていることはわかる。やさしい声にゆっくりとウラルはうなずいた。

「（エヴァンスが憎い？）」

「憎い」という単語がわからず、ウラルは首をかしげた。「大嫌い」「激しい怒り」などの単語をミュシエが挙げてくれる。意味がわかった。

うなずく。

「（シャルトルも？）」

もう一度、うなずいた。

ミュシエが確認するようにうなずき返す。それから、覚悟を決め

たよつな、厳しい目つきをした。

「（どうして？ エヴァンスには話さないから、理由を教えてください）
うだい）」

気が動転しているせいか、長い単語は聞き取りにくい。

ミュシエが持つてきたハンドバッグを開いた。小さなスケッチブックと筆、絵の具が少し入っている。スケッチブックを広げ、ウラルの似顔絵をサラサラッと書いた。続けてエヴァンスとシャルトル、ミュシエの似顔絵を手馴れた手つきで描いていく。

ウラルからシャルトルとエヴァンスに向けて矢印を描き、ミュシエは似顔絵のウラルの口をねじまげ、目を鋭くさせて、怒りの表情にした。

ミュシエはウラルの横に困ったよつな表情をした自分の似顔絵を書き、クエスチョンマークを描く。

ウラルは首を横に振った。ミュシエが言いたいことの意味はわかったが、答える気にはなれない。

ミュシエがぐつとウラルの顔を覗きこんでくる。ウラルが目をもむけると、ミュシエは真剣な目つきになり、声を強くした。

「（憎く思っている理由を私に話してくれるなら、あなたが昨日の人にこつそり会えるよつ、力を尽くすわ。もちろん、エヴァンスには話さない）」

ミュシエがスケッチブックに黒づくめの片腕男を描く。フギンからミュシエに矢印が伸ばされ、ウラルにつながった。

ウラルははつとして顔をあげた。ミュシエの緑の瞳は、強く輝いている。

「（ごめんなさいね、私が声さえあげなければ、昨日あなたは逃げられたのに。こんな言葉もまともに通じないよつな場所に連れてこられて、誰だつて嫌よ）」

キャンパスに描かれたミュシエの絵からシャルトルとエヴァンスにむけて矢印が伸ばされるが、ミュシエはそれにバツ印をつけた。

ミュシエがウラルに向き直る。ウラルももう、うつむいてはいら

れなかった。

「（ただ、それだけでエヴァンスをあれほど憎むわけではないわ。さつき、ドアの前であなたとエヴァンスの話を聞いていたの。私にわかるように話してくれるなら、リーグ語でいい。理由が知りたいの。シャルトルにも話さないわ）」

「（ごめんなさい、話す、できません）」

「（話してくれるなら、あの黒づくめの男の人に会えるよう私にできる限りのことをやらせてもらうわ。悪い話じゃないわよ）」

ミュシエの思いがわからない。なぜ、こんなことを知りたがるのか。やはり、エヴァンスに言われているのだろうか。ミュシエにとっての利点がない。

「どうやって、フギンに？」

「（正直、あてはないの。でも彼はきつともう一度私の家の庭に来る。あなたを助けにね。だから、庭にこっそり彼に宛てた手紙を置いておくつもりよ。絵を売りにいくときはナウト君を探してみるわ）」

フギンはベンベル語が話せるが、監獄でいやおうなく覚えたものだから、文字はきつと、読めないだろう。ナウトも絵を見に広場へ行くとは考えにくい。ウラルの居場所はわかっているのだし、フギンが追われていることを教えられて、警戒しているかもしれない。た。

ウラルが警戒していることを感じたのだろう。ミュシエが悲しげな目つきをする。わかったわ、と観念したように呟いた。

「（信用できないなら何日か待って。私が本気だということがわかったら、きつと話してね）」

ミュシエがドアをノックした。少し遠くからシャルトルの足音が聞こえ始める。やがて、鍵の開く音がした。ミュシエはウラルに小さくウインクし、ゆっくりとドアをくぐっていく。ドアが閉まる音と、鍵が閉められる音。

ウラルは小さく息をつき、ミュシエが残っていた画材カバンを

開いた。スケッチブックを開き、目をとじる。
フギン、アラーハ、ダイオ。そして、ジンとエヴァンスの顔を思
い浮かべた。

* *

夜半、カツカツという音で目が覚めた。

目を開けると、高いところにある窓の外に小柄な影が見える。窓
の外にあったはずのよろい戸が開けられ、月の光が部屋に差しこん
でいた。音は、ミュシエが窓をノックしている音だったのだ。眠気
が吹っ飛び、ウラルはあわてて体を起こした。

ミュシエが後ろにいる誰かを振り返る。影を見るだけで誰かわか
るほどの、とびぬけて大柄な男だ。

「ウラル、無事か！」

「アラーハ！」

ミュシエは本気だったのだ。フギンやアラーハを探す当てはない
と言っていたのに、どうやって半日でアラーハを見つけ出し、ここ
まで連れてきたのだろうか。

アラーハの目に深い安堵の色がある。ウラルはアラーハにむかっ
て手を差しのべた。アラーハが大柄な体を窓におしこめ、すたと
部屋の中に降りてくる。

「見張りはいないみたいだな。ありがとう、おばあさん」

アラーハの礼はリーグ語だったが、ミュシエには通じたようだ。

にこにこしながらうなずき、ウラルの方を向いて、ベンベル語で呼
びかける。

「(びつくりしたわ。さすがに今日は来ないだろうと思っていたの
に、あの黒装束の人が来た時間、同じ場所に、彼が立っていたんだ
もの)」

ミュシエがいたずらっぽくウインクする。

「(巨人族の彼に、出て行くときかんぬきをかけるように言ってお

いて。私は約束を守ったから、あなたも明日には昼間言っていたことを教えてね」

「（ありがとう、ミュシエさん！）」

ばたん、と音をたてて窓が閉まった。

「アラーハ、会えてよかった！」

「俺もだ」

短く答え、アラーハは満面の笑みを浮かべた。いつも表情がとぼしい彼にしては本当に珍しいことだ。

「どうしてこんな無茶をしたの？」

エヴァンスやシャルトルがこれほど警戒しているのに、ミュシエの家にもぐりこんでくるとは。大胆にもほどがある。

「別に捕まってもよかった。それでお前の独房の横にでも入れるなら御の字だ。さつさと牢をぶち壊して逃げてしまえばいい。お前の居場所がわかったのに、何もしないのは我慢できなかった」

おそろしいことを言いながらアラーハは照れたように目を伏せる。

「お前は俺の娘だ。娘がこんなところに囚われているのを、黙って見ている父親はいないだろう？」

ウラルは目をしばたき、それからゆっくりほえんだ。

「行こう。フギンとダイオに内緒で抜け出してきてしまった」

思わず笑ってしまった。本当に大胆にもほどがある。

ウラルは枕の下に置いていたジンのアサミイをとって、ふところにしまった。スケッチブックが画材カバンの中にちゃんと入っていることを確認し、よろい戸が開けられた窓を見あげる。

アラーハがベッドを窓の下へひきずっていく。ウラルよりも頭ふたつも背の高いアラーハは、ウラルがどれだけががんばっても手の届かない窓枠にやすやすと手をかけることができた。

「いいか」

ミュシエとの約束を守れないことへの罪悪感があったが、このチャンスはのがせなかった。アラーハに肩車してもらって、ウラルは

窓をくぐり、外へ出る。アラーハがイツペルスのはねをきかせ、その後続いた。

第三章 1 「市場で」 上

二人はかなり長いこと歩いた。アラーハは何度も疲れないか、とウルルを心配したが、ウルルは夜気にあたりながらゆっくり散歩できることが幸せだった。なにしろ、地下に軟禁された後なのだ。

ベンベル人街をぬけ、大通りをゆっくりと歩いていく。そのうち、見覚えのある道になった。

二年前の火神祭でここへ来た。ジン、イズン、マライ、ネザと歩いたファイヤーロードのあった大通り。思い出にひたりながら、ウルルはゆっくりとあたりを見回す。

アラーハはそのうち、細道に入っていった。

「この宿屋に泊まっている」

「なつかしい」

「ここに来たことがあるのか？」

アラーハが指す宿屋、いや、酒場に宿屋がくっついただけの建物の看板には、立派な角をふりあげた大鹿が描かれていた。

「大鹿亭」だ。ウルルが初めて入った酒場。ネザに初めて酒を飲まされ、パレードの話で盛りあがった。酔客にからまれ、みんなによつてたかつて守ってもらった。

アラーハが店内に入っていく。祭りの時期でない、しかも深夜である今は、酔いつぶれて机につつぶしたり、椅子で横になっている客がぼつりぼつりと座っているくらいだ。

ウルルは店内を見回した。あのと壊れた椅子は、新しく買いかえられたのだろうか。

二階への階段をアラーハがあがっていく。ウルルもあとに続いた。せまい通路の先にはドアが四つ。そのうちのひとつをアラーハが開けた。

簡単な寝台がふたつ。ベッドはふたつともふさがっているから、アラーハは床で寝ることになっているらしい。寝ていた二人がぼつ

と敏捷に起きあがり、枕もとの剣をとった。

ウラルはアラールハの毛皮をつかむ。二人が剣を抜く前から白刃を喉元につきつけられた気がしたのだ。

「俺だ」

「なんだ、アラールハか。どこ行ってたんだよ」

また眠ろうとするフギン。ダイオがそのわき腹を小突く。

「おいおい、客人だぞ。寝ていいのか、ボウズ」

冗談めかしたダイオの口調に、緊張が一気にほぐれた。

「本当。眠いのはわかるけどね。ナタ草、まだオレンジ色だし」

横になりかけていたフギンが飛びあがる。

「ウラル！　なんで！」

「ちよつと想像すればわかるだろうが」

フギンの慌てぶりと、それを見下すようなダイオの態度に、思わずウラルは笑ってしまった。

「なんで黙って行ったんだよ、アラールハ！」

「意外と短気だな、おぬし」

ダイオが低く笑いながら立ちあがり、壁にかけてあったサーコートを着る。さすが元騎士とあって、人前ではびしりとした格好をしていたらしい。だが、このサーコートがまた、けばけばしい真紅なのだ。派手趣味は一年前から変わっていないらしかった。よくよく見ればダイオの枕元にある剣も豪華なエナメル模様がほどこされている。

「ダイオ卿、あの監獄のときは、本当にありがとございました」

「いや、なに。助け出してもらった借りを返したまで。マライ殿のこと、本当に残念だったのう。惜しい御仁、いや、ご婦人だった」

ダイオが低い声で応じ、ランプをつけた。部屋の隅に座りこむアラールハとぼさぼさ髪のパフ、寝起きであるという様子は微塵もうかがえなくなつたダイオが、その明かりに浮かびあがる。

「それから、娘さん。『卿』はいらない。私はもう、ただのダイオだ。フェイス將軍にお仕えして二十数年騎士をやってきたが、その

フェイス將軍もお亡くなりになってしまわれた」

ウラルは目を伏せた。

「フギン、フェイス將軍もエヴァンスに殺されたの？」

ダイオを見習い、ぼさぼさの髪を手ぐしで整えていたフギンが、ウラルと同じように目を伏せる。

「そうらしいんだ」

「そんな人のところで働いていたなんて」

「まったく。主人ばかりかそのご子息まで殺されてしまうとは、臣下として黙っておけん」

え、とウラル、フギン、アラーハの視線がダイオに集まる。

「主人とご子息？」

「知っていたの？」

「どういうことだよ、みんな」

ダイオがぴしやりとひたいを叩いた。

「これは失礼、てつきり周知の事実かと」

ダイオの口調がいちいち古めかしい。フギンが身を乗り出した。

「うちの頭目が最高位騎士の息子だったって、そういうこと？」

「十の歳をむかえたあたり、行方不明になったフェイス將軍のご子息であらせられるそうだ」

フギンが天井をあおぎ、ひえー、と間の抜けた声をあげた。

「知らなかったの、俺だけかよ。そりゃあ、フェイス將軍が死んだって報せを受けてから、頭目、そんなことをちょこちょこ言ってたけどさあ。まさかなあ、って思ってたんだ」

「すまんが」

ウラルはぎよっとなった。アラーハの声に、珍しく怒りがこもっていたからだ。

「俺の前で、そのふたりの話をしないでくれ」

アラーハもジンの父なのだ。ジンの名前を出されるだけで暗い顔つきをしていたくらいだから、フェイスとジンが父子でんでの話をされるのは我慢がならなかったのだろう。

「どうしたんだよ、いきなり」

「頼む」

アラールが会釈程度にはあるが、ふたりに頭をさげる。普段とは違うアラールの様子に、さすがのフギンとダイオもぎょっとしたようだ。

「酒でも注文する？ そのほうが明るく楽しくならないか？」

アラールが湿っばいたため息をつき、部屋の隅に座りこんで、目を閉じた。

「俺、ちよつと下、行ってくるよ」

フギンが本当に酒を注文しに行ってしまう。ダイオが困ったように息をつき、ベッドに腰かけた。ウラルもフギンが寝ていたベッドに腰かける。

「いつから知ってたの？」

「何をだ？」

「ジンとフェイス将軍のこと」

ダイオがちらりとアラールのほうを見やる。

「話さないほうが、いいのではないか？」

ウラルはしゅんとなり、うなずいた。アラールは目を閉じているが、眠っていない。話は全部聞こえているはずだ。

ダイオが「そういえば」と一言、ウラルの肩を軽く叩いた。

「ウラルさん、だったか。男なら悲鳴をあげる場所でもじつと女は耐える、そこが女の強いところだというが、まさしくその通りだ。」

おまえさん、年頃の娘のくせに、度胸がある」

ウラルは思わず赤くなった。ウラルは二十四の娘っ子なのだ。普通なら婚約者と正式に籍をいれ、ふたりで果樹園の世話をしたり、麦を作ったりしている年頃。もしかすると、子どもが二、三人いて育児に追われていたかもしれない。

ふとウラルは思った。もし、エヴァンスの家に売り飛ばされたのがフギンだったらどうなっていたんだろう。背筋が凍った。

ウラルの胸のうちも知らず、ダイオがやさしくほほえんだ。

「夜中に起こされて大変だったろう。休みなさい。アラーハも寝てしまったから」

あごで部屋の隅のアラーハを指す。アラーハは一瞬、薄目を開けたが、すぐにまた目を閉じてしまった。

たしかにウルルは疲れていた。だが、ウルルがベッドを使ってしまったら、ダイオとフギンはどうするのだろうか。

ウルルの思いを読み取ったかのようにダイオが続ける。

「心配ない。我輩とフギンはこれから一杯やるから。すっかり目が覚めてしまった」

「ありがとう」

ウルルは布団を一度、きちんと整えて、アラーハに近いほうのベツドに横になった。布団はエヴァンスの家のものとは雲泥の差だ。だが、ウルルにとってはこちらの布団ほうがなじみ深く、ほっとするものだった。

ノックの音がする。どうやら足でドアを蹴っているらしく、くぐもった音だ。ダイオの足音が聞こえる。ドアの開く音がした。

「すまん、忘れていた。なぜ呼ばなかった？」

「あやうくボトル一本割るところだったよ。あれ、ウルルとアラーハは寝たの？」

ウルルも忘れていた。フギンは片腕なのだ。片腕でグラスとボトルを四人分持つてこようとがんばってくれていたのだろうか。

「そりゃあ、そうだろう。アラーハなんぞ一睡もしていなかったんだ。ウルルさんも精神的にまいっているだろうよ。さて、一杯やるか」

「アラーハ、ベッド使えばいいのに。まあいつか。明日にはもう一部屋とろう」

二人がグラスにワインだか黒ビールだかをつぎ、乾杯をする音が聞こえてきた。

アラーハが静かに寝息をたてはじめる。ジンが死んでからアラーハは人間らしくなった。以前なら人前で食事をしたり、眠ったりす

ることはなかったのに。

ウルルは布団の中でほほえみ、ゆっくりと目を閉じた。

第三章 1 「市場で」 下

*

目が覚めると、もう昼すぎだった。部屋にはアラーハひとりだけ。窓枠に腰をかけ、外を見つめている。

アラーハはウルルが目を覚ましたのに気づくと、やさしく笑いかけてくれた。

「よく寝ていたな。おはよう」

「フギンたちは？」

「下で昼飯をとっている」

「アラーハは行かなかったの？」

「お前を一人にするわけにはいかんさ。どちらにせよ酒場では肉料理がほとんどだ。そのへんの市場で生野菜を買って、毎日それを食っていた」

アラーハにとっておきのサラダを作ってあげたいな、と思いながら、そっか、ウルルはうなずいた。

顔を洗い、髪を整える。荷物はないので、服はエヴァンス邸でメイドをしていたとき、着ていた服の一着しかない。とりあえずエプロンをはずせば普通のワンピースだが、エヴァンスの家のものを着ているというだけで腹が立った。

「アラーハ、買い物に行かない？」

アラーハは驚いたようにウルルを見、ウルルの服を見た。

「そっだな。俺も、腹が減った」

ウルルはほほえんだ。アラーハとふたりで買い物なんて、初めてだ。

「フギンの上着、借りていいと思う？」

「下にいるから、出て行くとき言っておけばいいだろう」

フギンの茶色いチョッキを着、ボタンをしっかり閉めた。エヴァ

ンすらが探しているかもしれないのだ。いくら市場の雑踏の中とはいえ、こんな純白の服ではどうしたって目立つ。

下への階段をおりる。狭い階段では、大柄すぎるアラールハの両肩がつかえていた。アラールハは強引に体をななめにし、角の剣でこりこり壁をこすりながら、なんとか降りていく。

「買い物、行ってくる。フギン、チョッキ借りていい？」

食事をかっこむのに忙しいフギンは、肉で口をいっぱいにしなから、行つてらっしゃい、ともどもご返事をした。

「気をつけるんだ。いつ、どこに追つ手がいるかわかったものではない。これを持っていけ」

ダイオはさすが騎士とあって食べ方が優雅だ。だが、さすが派手好き。高そうな料理ばかりが机にならんでいく。

持っていけ、と言ってウラルに渡したのはフギンの財布だ。高い料理を注文するくせに、監獄から出てきたばかりのダイオは一文無しなのだった。フギンのほうは、ゴウランラの戦闘直前にウラルが預かっていた金貨を返したから、それなりの金を持っている。

苦笑しながら財布を受け取り、アラールハとふたりで「大鹿亭」の外に出た。細道をぬけ、表通りに出れば、そこがもう市場だ。このヒュガルト町は南北交易の主要都市だから、市場の品物はびっくりするほどいろいろなものがある。いくら戦争で疲弊したといっても、被害の大きかった北部へ南部から運ばれる食料や、東の港から持ち込まれる魚介が集まりそれなりのにぎわいを見せていた。

「ああ、おじさん！ 今日娘さんもいるのかい？ いいニンジン、仕入れといたよ！」

野菜売りのおやじの声に、アラールハが口元をほころばせた。おやじの店に行き、ニンジン数本とハーブを数種類買う。

「顔なじみ？」

「ああ。このごろはあの店で買うことが多い。店ごとと同じニンジンでも味が違って、おもしろいんだ」

アラールハがニンジンを生のままかじった。皮も、葉っぱも生のま

ま、ぼりぼりと残さず食べてしまう。

「葉っぱ、苦くない？」

「いや。この店のニンジンも、葉っぱがうまい」

ハーブも歩きながらバリバリ食べてしまった。アラールハの背が高すぎて目立つこともあり、通行人の好奇の視線が集まっている。

「俺、変か？」

ぼそつとした呟きに、ウラルは思わず吹き出した。

「うん、ちょっと」

「そうか」

無然とした声に、また笑みが漏れた。

服屋でワンピース二着と、男物の服をひとそろい買う。エヴァンスの白いワンピースを売り払い、着慣れたあまり良質でない綿の服を着ると、驚くほどほつとした。

「似あう？」

「ああ。よく似あう。それ、持ってやるうか」

服をいれた皮袋をアラールハが背負ってくれる。別に重いものではないが、アラールハの心遣いがうれしかった。

「あれ？ 何だろう」

市場の端にある神殿、もちろんベンベル人のものではなく四大神の神殿の前に、黒山の人だかりができています。

「アラールハ、見える？」

「いや、遠すぎてわからない。行ってみるか」

近づいてく。野次馬たちは騒ぎもせず、じつと立ちつくしているだけだ。おごそかな雰囲気とさえいえる。それが逆に、気味が悪かった。

「ベンベル人が警備している。少し、離れて見よう」

ウラルには人だかりのせいで何が起きているのか見えないが、飛びぬけて背の高いアラールハには見えるらしい。

「警備の中でリーグ人の男女が四組、ひらひらした服を着て、手をつないでいるな。見えるか？」

アラール八がウラルを肩にかつぎあげた。

視点が高くなり、人だかりの先が見える。ウラルは背筋に粟が立つ感覚をおぼえた。

たしかに、ひらひらした豪華な服を着た男女あわせて八人のリーグ人が、ベンベル人の警備の中に立っている。男は頭の頂点の髪を独特の形に剃り、女はゆったりと結っている。この髪型は神官独特のものだ。手はつないでいるわけではなく、手かせで強引につなぎあわされている。

「ひどい。どうして」

不自然なところはまだまだあった。リーグ人には、風神祭のときにまとめて結婚式をあげる風習がある。風神祭はもう少し先、ブドウのなる時期だ。それ以外の時期にあげると、風神の定めを破ったことになり、重い病をわずらってしまうと言われている。

ベンベル人に小突かれ、神官たちが誓いのキスをした。

結婚してはならないと定められている神官が、強引に結婚式をあげさせられているのだ。

「おろして、アラール八。見たくない」

吐き気をこらえながらアラール八とふたり、すぐにその場から離れる。ウラルの顔が青いのに気づいたアラール八が、おずおずと背をさすってくれた。

「なあ、ウラル。聞こうと思っていたんだが」
アラール八の口調が重々しい。

「ジンを殺したやつを、殺そうと思っているか？」

とまどったような口調に、ウラルは驚いた。

「このままじゃ、みんな、気がおさまらないよ」

ベンベル人は極悪非道の人種だ。さっきの強制結婚式といい、とてもじゃないが、許しておけない。当然、アラール八も息子を殺されて、エヴァンスをひどく憎んでいると思っていた。だが、アラール八の口調には、迷いがある。

「アラール八は、どうなの？」

「俺は、誰かを殺したり、殺されたりするのは、もうたくさんなんだ」

アラーハがゆっくりとかぶりを振った。

「監獄のときは、マライを助けられなかった。そればかりか、お前が捕まってしまった。さいわい、お前は帰ってきたし、誰も死ななかつたが、次こそ、誰かが取り返しもつかないことになるかもしれない」

わずかに、その声が震える。

「ジンを殺したやつは、もちろん憎い。だが、ここで、こんな形で出会わなければ、おそらく俺が一生を終えるまで、復讐しようとは思わなかつたはずだ。目の前にいれば憎くなるが、殺さなければ殺されるとか、そんなものではない」

アラーハが立ち止まる。

「フギンやダイオにも、今晚、同じことを言おうと思っている。だが、もし、二人が行くと言っているのであれば」

獣の目が、光った。

「俺は、森へ帰ろう」

アラーハがウラルに向き直る。静かで堂々とした、その姿。

ウラルはうつむく。アラーハの手が細かく震えているのが見えた。静かなのは見かけだけだ。だが、手が震えるほどの憎しみより、仲間を失うことをアラーハは恐れている。

「ウラル姉ちゃん！ アラーハ！」

前の方に、二人に向かって大きく手を振っている子どもがいる。

「ナウト！」

飛びぬけて背が高く、目立つアラーハは格好の目印だ。ナウトがこっちへ駆けてくる。

「ウラル姉ちゃん、よかつた！」

「来るな、ナウト！」

アラーハが怒鳴るなり、すつとウラルの腰を抱くようにした。ウラルはびくつとなつて、アラーハの顔を見返す。

「あの男」

押し殺すような声に、ウラルはアラーハの険しい視線の先を見た。栗毛の男が、雑踏の中に立っている。その緑の目がかろうじて見える距離だ。

シャルトル。

アラーハがウラルを背負って逃げる構えをする。アラーハが本気で走れば、ついてこられる人間はいない。だが、ウラルとナウト、ふたりとなつては、背負う間に間合いをつめられる。

シャルトルが平手を前に突き出し、首を左右に振って、「ストツプ」の仕草をした。

アラーハはウラルを胸に抱いたまま、きつい目つきでシャルトルをにらんでいる。シャルトルは静かにほほえみ、そのまま後ろを向いた。

去っていく。

「何なんだ、あいつ」

アラーハが緊張をとき、ウラルから離れる。

「あの人、誰なの？」

ウラルは震えながらナウトを抱きしめた。

シャルトルには、もしかするとテレパシー能力か何かがあるのかもしれない。シャルトルは一言も話さなかったが、ウラルには、シャルトルの思いがはつきりわかった。

（よかった。あなたは、そちらにいるほうが、幸せそうだ）

「ナウトが私の居場所、見つけてくれたんだって？　ありがとう」
強引に話を変えると、ナウトはおずおずとうなずいた。

「フギン兄ちゃんにも、ほめられたよ。もうあの人、怖くないや。いっぱいお金くれたもん」

「私の絵も買ってくれたんだって？」

「帰ってきた兄ちゃんに、変な顔されちゃった」

物乞いの、十歳の子どもが女性の絵を壁にかけているのだ。それ

は、変な顔もされるだろう。

「ひとまず帰るぞ。ナウト、お前、今日は兄ちゃんが帰ってくる日か？」

「うん。帰ってくる日」

「じゃあ、とりあえず、今は俺たちと一緒に来い。あとで送ってやる。あの男に後でもつけられたら、大変だ」

ナウトの表情が一気にこわばった。

「大丈夫だ。あの男の様子ではそんな気もないだろう。念のためだ」

なだめるように言い、アラールは周りを警戒しながら歩きだす。

大股で歩いていくアラールを、小走りになりながらウラルとナウトも追った。

第三章 2 「決裂」 上

フギンとダイオはまだ「大鹿亭」の酒場において、たあいもない噂話に花を咲かせていた。

「お帰り。もう一部屋、とっといたよ。アラールも今日からベッドで寝れるぞ」

片手をあげて出迎えたフギンとダイオが、アラールの険しい顔つきをみて、凍りついた。

「何かあったのか？」

「ベンベル人男に会った」

「何だと！ ナウトも一緒に襲われたのか？」

「いや、そういうわけでもない。上で話す」

アラールが角の剣で壁をぎりぎりこすりながら狭い階段をあがっていく。ウラル、フギン、ダイオ、ナウトも続いた。

部屋に入り、めいめいベッドや床、窓枠に腰をおろす。部屋の隅に陣取ったアラールが低い声で、昼に「大鹿亭」を出てから、市場で買い物をし、夕方シャルトルに会うまでの流れをかいつまんで話した。

「あの栗毛男は、ウラルを探していた。が、ウラルを捕らえようとはしていなかった。むしろ俺やナウトと一緒にいるのを見て、ほっとしたように去っていったんだ」

ナウトは飽きたのか、窓枠に腰かけてみたりベッドに倒れこんだりしてみていたが、結局、ウラルの膝の上に落ち着いた。

「つまり、どういうことだよ」

「わからん。栗毛男が主君の命令でそうしたのか、主君の命令に背いて見逃したのかもわからなかった」

「相手側は我輩たちを血眼になつて探しているわけではない、というのか。逃げてもいい、むしろ逃げろと」

「そんな感じだったわ」

ウルルがうなずくと、ダイオは「ふむ」とうなった。

「わけがわからん」

たしかに、かなり妙なことになっている。ベンベル側から見ればフギンらは脱獄犯、しかも監獄のリーグ人をみんな逃がしてしまった重罪人だ。だからこそ、エヴァンスはウルルをおとりに使ったまです、フギンらを捕らえようとしていた。

それなのに、なぜ、今はウルルを逃がそうとしているのだろうか。

たしかなことは何もわからないが、ウルルは、シャルトルはエヴァンスの命令にそむいているのだろう、と思った。

（よかった。あなたは、そちらにいるほうが、幸せそうだ）

耳を貸さなかったつもりだった。けれど覚えている。シャルトルはウルルの幸せを願ってくれていた。本心かどうかはいまだわからないが、ずっと笑っていてほしいと言っていた。

「ウルルをおとりにして我輩たちをおびき寄せた件もある。これで安心と思うにはちょっとばかり早そうだ」

「今すぐにでも乗りこんで、あのエヴァンスってやつ首根っこをつかんでやりたい」

フギンが自身の膝を殴る。アラーハの目が、すっと細められた。

「そのことなんだが」

口調が、鋭さと緊張感を増している。かくかくと癖の貧乏ゆすりが始まった。

「俺は、エヴァンスを殺したくない」

フギンとダイオのぎょっとしたような視線がアラーハに集まった。

「どつという意味だよ？」

「俺は、復讐なんぞ、まっぴらだ」

目は静かで、声も平静だ。一見、すべてをあきらめ、放棄してしまつたようにすら見える。だが、体の隅々を細かく見てみれば、アラーハは激しい憎しみに体中の血管を浮き立たせ、こぶしをぶるぶ

ると震わせているのだった。

「どうしたんだよ、急に」

「急じゃない。むしろ俺にとっては、この復讐劇のほうに急な話だった」

たしかにエヴァンスの話は、森の隠れ家を出てきたときには、まったく予定になかった。

「何言ってるんだよ。確かに、急な話だったけど。でも、放っておけないじゃないか」

「黙れ、ボウズ。話を聞こう」

ダイオが座りなおす。フギンもあらためてアラールに向き直った。ナウトはウラルの膝の上で無邪気に眠っている。

「ジンを殺したやつは、もちろん憎い。だが、ここで、こんな形で会わなければ、おそらく俺が一生を終えるまで、復讐しようとは思わなかったはずだ。目の前にいれば憎くなるが、殺さなければ殺されるとか、そんなものではない」

「本気で言ってるのか？」

「監獄では、マライの命が危なかった。マライが処刑されてしまった後は、ウラルを連れ戻す必要があったから俺はこの町にとどまっていたが、そのウラルも、戻ってきた。今は、何も人質にとられていない。復讐することで、俺たちの中で欠けるものはあるにしても、得るものは、なにもないと思わないか」

欠けるもの。つまり、この中の誰かが死ぬか、取り返しもつかないことになるか、ということを目指しているのだろう。

「本気で言ってるのか？ 本当に？」

フギンの声が、震えている。

「俺は、本気だ」

「見そこなっただぞ、アラール！」

フギンが座っているベッドを跳ね飛ばさんばかりの勢いで立ちあがった。ウラルの膝でうとうととしていたナウトがびくっと目を覚ます。

「臆病者！ 根性なし！ 男の風上にもおけないやつだ！」

押さえていた怒りが爆発したのか、アラールもすさまじい勢いで立ちあがる。

「臆病風に吹かれて言っているわけではない！ 無益なことをするなど言っているんだ！」

「ふたりとも、落ちつけ」

ダイオの静止をもともせず、二人はいきりたつてにらみ合う。

「頭目の仇が目の前にいるのに尻尾を巻いて逃げるだと？ そんなことができるかよ！」

「ジンの願いを忘れたのか？ ジンは平和を願っていたはずだ。憎しみが憎しみを呼ぶ。俺たちがその一端になってどうする！」

二人の剣幕にぼかんとっていたナウトが、ついに泣き出した。ふたりがやつと視線をそらし、黙りこむ。

「悪かった、ナウト。もう暗いな。送っていこう」

アラールがぐるりとナウトをおぶい、部屋を出ていった。角の剣がガリガリと階段の壁をこする音がいつにもまして荒々しい。

「何なんだ、あいつ」

どすつと音をたてて、フギンがベッドに腰をおろした。

ウラルは窓から外を見る。ナウトをおぶい、暗い町に出て行くアラールの姿が見えた。

なんとも、子どもを背負う姿がさまになっている。こうやって十歳のジンをおぶい、森を歩いていたことがあったのだろうか。泣きじゃくりながらアラールの背に身をあずけていたような時期が、ジンにもあったのだろうか。

「憎しみが憎しみを呼ぶ、その一端に俺たちになってどうする、か」

ダイオがぼつりと呟いた。フギンがぎろりとその目をにらむ。

「まさか、お前まで臆病風に吹かれてるんじゃないだろうな」

「アラールは、臆病なんかじゃない」

ほとんど反射的に、ダイオが何かを答える前にウラルは口を動か

していた。

「アラーハだって、エヴァンスが憎いのよ。あなたたちと同じくらい。ううん、それ以上よ。それを必死に押さえこんでる」

「何を根拠に言ってるんだよ」

フギンの鋭い視線がウラルに移る。背筋に粟が立つのを感じたが、アラーハの矜持にかけてここは引くわけにはいかなかった。

「にぶいのね。アラーハの腕を見なかったの？ 顔もまともに見えていなかったの？」

フギンが再び立ちあがり、ウラルの胸ぐらをつかまんばかりに詰め寄った。さすがに危険を感じたのか、ダイオが二人の間に立つ。

フギンの目が、血走っていた。ウラルは真つ向からその目をにらみ返す。

言いたかった。アラーハはジンの父親なのだ。誰よりもアラーハはエヴァンスを恨んでいるはずなのだ。

「怒りを全部おさえこんでまで、私たちを止めようとしてる。わかる？ アラーハは、それほど私たちのことを大切に思ってくれているの！」

「笑わせんなよ！ 黙って聞いてりや言いたいほうだい！」

ぐるつと視界が揺れ、天井が見える。え、となった瞬間、壁に叩きつけられた。思いきり頭をぶつける。ぐう、と情けない声が漏れた。

フギンがウラルを突き飛ばしたのだ。第二撃を覚悟して、ウラルは目を閉じたまま頭をかばった。

（憎い。憎い。ベンベル人が憎い）

突然、耳の奥から聞こえてきた声に、ウラルはびくつと体を震わせた。何重にもかさなった男の声。前に一度、監獄の中で聞いた、亡霊の声だ。

（俺たちのために復讐してくれ。あいつを殺してくれ！）

少し離れた場所から、「ゴスツ」という鈍い音が聞こえた。

「それでも男の端くれか！ 娘に暴力をふるうとは！」

仲介に入ったダイオがフギンをぶん殴ったのだった。

「ウルルさん、大丈夫か？」

ウルルはそろそろと目を開けた。ダイオは額に冷や汗を浮かべている。だが、どうやら今の声は聞こえていないようだ。

ウルルは自分の体を抱いた。ひどい寒気がする。

「ありがとう、ダイオ」

「いやいや。これくらい礼を言われるほどのものでもない。ちょっと失礼するぞ」

ダイオは慣れた手つきでウルルのまぶたを押し開け、瞳孔の収縮を見た。頭をさすり、たいした怪我ではないかを確認める。

まさかフギンに殴られるとは。頭に血ののぼった人間は何をするかわからない。フギンは殴らないという妙な根拠があったから強く出たわけではあるが、言っている内容は、たしかにぶん殴られてもおかしくないものだったかもしれない。

「ごめん、かっとなつて、つい……」

フギンが真っ青になっていた。

「私こそごめんね。言い過ぎちゃった」

できるかぎり軽い口調で謝ると、フギンはほっとしたようにウルルの近くへ来て、床に座りこんだ。

「怪我してないか？ 本当にごめん」

「たんこぶにはなってるけど、大丈夫。びっくりしたけど」

ウルルは無理やり笑ってみせた。本当はびっくりどころではない。体が震えてどうしようもなくなっているのだ。

「まったく。おまえはその短気で、いずれ命を落とすぞ」

ダイオの声に、フギンはさっきまでの勢いはどこへやら、しゅんとうなだれてしまった。

たしかに相手がウルルだったからよかったものの、さっきのアラハだつたら、これどころでは済まなかったはずだ。殴る蹴るになつたすえ、ダイオも止められないまま、とんでもないことになっていたかもしれない。アラハの腕力は人間のものではないのだ。

「アラーハとおまえの話し合いは、適度に酒でも入れながらやったほうがいいな」

「アラーハが笑いじょうごだったらいいんだけど」

「同感だな。できれば、フギンは泣きじょうごがいい」

「ごめん、俺、怒りじょうごなんだ」

フギンのぼそつとした一言に、ウラルとダイオは顔を見あわせた。口に出さなくともお互いの思っていることはわかる。

怒りじょうごがひとりでもいるなら、やめておいたほうがいい。

第三章 2「決裂」 下

*

フギンがもう一部屋、予約をいれておいてくれたので、ウラルは気兼ねなくベッドを使うことができるようになった。フギンとダイオ、ウラルとアラール八がそれぞれ同室だ。

アラール八は帰ってきていなかった。ナウトを送りに行っただけにしては、あまりに遅い。

窓から見える月を見ながらぼうつとしていると、やがて、がりがりと角の剣が階段の壁をこする音が聞こえてきた。

「お帰り。遅かったね」

「寝ていたか？」

「ううん。待ってた」

アラール八が月明かりの中でほほえむのがわかった。

「散歩、行かないか」

「散歩？ こんな時間に？」

アラール八はうなずいて、また、階段を降りていった。ウラルもあとを追う。

「フギン、あれから何か、言っていたか？」

フギンに突き飛ばされたことは伏せておくほうがよさそうだ。

「ちよつと怒ってたけど、何も」

アラール八はそうか、とうなずき、それなりににぎわう「大鹿亭」を出て、夜の町をゆつたりと歩いていく。

「いい風が吹くな、今日は。月もきれいだ」

夏の終わりの夜風が吹く。月は満月に近い。

「ジンに出会った日も、こんな晩だった」

アラール八が目を細めた。遠くを見ているように見えるが、実際に見ているのは昔の思い出なのだろう。

「ナウトを見て思い出したの？」

「ああ。子どもをおぶうのは久しぶりだった。ウラルの父親はどんな人だったんだ？」

「五歳くらいまでは一緒に暮らしていたんだけど、それからは、兵役に行ってしまう。よく覚えてないの」

アラーハは質問したことを後悔でもしたのか、返事をしない。

「ね、もつと月がよく見えるところに行こうよ」

「いいな」

月がよく見えて、座ってゆっくり話せる場所といえば、広場だ。

ふたりでメインストリートをまっすぐ歩いてく。城門前の東広場がすぐそこだ。

広場のベンチに座り、月を眺めた。

「誰もいないから、いいよな」

アラーハの姿が、すーっとかげろうのようにぼやけた。

「この姿も、ひさしぶりだ」

月光に枝角を光らせた、一頭の巨大な獣が立っている。すつとウラルの足元に寝そべった。それくらいで、ベンチに座ったウラルと目線の高さが同じになるのだ。

「誰か来たらどうするの？」

「幻覚を見たことにもしてもらおう。あるいは、ごくごく普通のイッペルスが迷いこんできたか」

「うまく口裏をあわせなくちゃね」

「口裏をあわせるにも、俺は話せないことにしておかきやな」

ウラルの口元に笑みが広がった。アラーハも人に比べれば表情のとぼしいイッペルスの顔で、うつすらとほほえんでいる。

「ひとつ打ち明けてかまわないか？」

「何？」

アラーハがウラルのペンダントに触れた。チュユルの花が描かれた真鍮の小さなコインも、月明かりに照らされている。

「ウラル、俺は、このまま帰らないでいようと思っている」

ウラルの顔から笑みが消えた。

「フギンは止められそうにない。それに森が呼んでいる。守護者争奪戦にむけて、俺は、帰らなければ」

夏の終わりの、夜風が吹く。

アラーハが後ろの城壁を見やった。城壁の向こう側は麦畑が広がっている。さらにその向こうには、ヒュグル森が広がっているのだ。

「一緒に、このまま、行かないか」

アラーハが立ちあがった。ゆっくりとウラルを見おろす。あまりにも巨大な、イッペルス。

ウラルは立ちあがらなかった。答えも返せなかった。アラーハの表情はやわらかかったが、底光りのする目をしている。このまま本当に、フギンにもダイオにも別れを告げず、行く気なのだ。

「ごめん、あの何日か、考えさせて」

「今、決めてくれ」

フギンと共に復讐に向かうか、アラーハと共に平穏へ帰るか。

ウラルは胸元のペンダントをにぎりしめた。ジンならどうするだろう。ジンはどう思っているのだろう。

(ジンの願いを忘れたのか？ ジンは平和を願っていたはずだ！)

(俺たちのために復讐してくれ。あいつを殺してくれ！)

どちらが、ジンの気持ちなのだろう。

ウラルは目を閉じた。アラーハの視線が痛い。

「ごめん、アラーハ」

目を開ける。アラーハの目はどこまでも静かだった。

「エヴァンスの家の中を詳しく知っているのは、私だけでしょ。私
が抜けたら、フギンとダイオが死ぬ率が、高くなっちゃう」

アラーハの姿が、また、すうつとぼやけた。見慣れた狩人の姿になる。獣の皮のベストを着、蹄の靴をはいた、見あげるように背の高い男。普通の狩人なら弓を背負っているはずの場所に、角の剣をつるした壮年の男。

「わかった。送っていこう」

アラーハがウルルに手を差し伸べる。ウルルはその手を取り、立ちあがった。

二人でまた、メインロードを歩き、「大鹿亭」に戻る。

「すべてが終わったら、フギンとダイオも連れて、戻ってこい。俺は、森で待っている」

ウルルはアラーハをだきしめ、その額にキスをした。

「ありがとう、アラーハ」

アラーハがきびすを返した。闇の中に、その巨体が消えていく。

また会えるとはわかつているのに、なぜかその後姿が寂しくて、ウルルはぎゅっと胸元のペンダントをにぎりしめた。

まるで、もう、二度と会えないような気がしていた。

第三章 3 「復讐戦」 上

アラール八が森へ帰った翌日を境に、フギンとダイオは本格的に復讐戦の準備をはじめた。ウラルにエヴァンス邸の詳しい間取りなどを聞きいたが、ウラルがエヴァンスの動きをほとんど知らないとするや、ナウトに家の前を見張らせてエヴァンスや使用人たちの詳しい動きを調べた。

「明日、行こう」

夕食を注文し、ウェイターが料理を持ってくるまでの時間に、ダイオが宣言する。

「明日ならあの栗毛男はいない。ご婦人のおつきで西広場へ行くそうだ」

「絵を売りに？」

七日に一度、シャルトルはミュシエに連れられて、西広場へ地図を売りに行く。

「ああ。残るは金髪男と門番ふたり。秘書の栗毛男は夜まで帰ってこない」

「ナウトに見張らせたほうがいいか？」

「いいや。万が一、金髪男の報が伝わったとき危ない。ナウトもそろそろ顔が割れてきているからな」

戦闘員は実質上、ダイオひとりだ。フギンは片腕で半人前、ウラルは道案内役。いくらダイオが元高位騎士で剣術にたけているとはいえ、敵はひとりでも少ないにこしたことはない。

「門番は殺すか？」

うなずきかけたダイオをウラルが制した。

「お願い、殺したりしないで。お世話になった人がいるの」

おいおいとウラルを見つめたフギンだったが、ダイオはうなずいてくれた。

「そうだな。日没の祈りの時間、やつらは地面に身を投げ出して祈

る。しかも西を向いて、西日に向かつてだから後ろから忍び寄れば直前まで気づくまい。さほど抵抗もされんだろ。気絶させれば十分だ。ただし、抵抗されれば手加減はしない」

ウェイターが料理を運んできた。ダイオが骨付き肉をほおぼり、ひげについた脂を指でぬぐう。ふところからエヴァンス邸の見取り図を出し、机に広げた。二階の一室に、赤いしるしがつけられている。祈りの間だ。

「日没前の祈りの時間が、やつの最後だ」

フギンが待ちきれないとばかりに自分の膝を殴った。

*

眠れぬ夜を過ごした翌朝、フギンとダイオの部屋のドアをウラルはノックした。

「どうぞ」

答えたのはダイオの張りのあるバリトンだ。

ドアを開けると、フギンはまだベッドでぐっすり眠っており、ダイオはお気に入りの真つ赤なサーコートに身を包んで、エナメル加工の剣を研いでいた。

「よく寝れるね、フギン。ちょっと、うらやましいくらい」

「いや、明け方近くまでうなされていた。今、やっと眠ったところなんだ」

ダイオは剣を砥石から少しあげ、指の腹で刃をはじいて、研ぎぐあいをたしかめる。刀身がぎりりと不穏な光を放った。すつとダイオの目つきが引き締まる。ダイオにとっても、エヴァンスは主君の憎き仇だ。

「ダイオ、お願いがあるんだけど」

「何かな？」

ウラルはふところからジンのアサミイを出した。

「これも研いでほしいの」

ダイオがアサミイを受け取り、刃を見た。ふむ、とうなる。

「これは真鍮だな。儀式用か。研げないことはないが、これはもともと切るために作られたものではない。何度か使えば研いでも切れなくなる。錆びやすくもなるぞ」

「いいの。今回、一度だけだから」

「思い出の品か？ そのペンダントと同じ、チュユルの花の紋章入りだな」

「ジンの形見」

ダイオがひよいと片眉をあげた。

「ここにはいないけど、ジンも一緒に戦ってもらおう」

そつと、怪我をした鳥でもあつかうような優しいそぶりだ。ダイオがアサミイを受け取った。

「わかった。研いでおこう」

ダイオの手の中では、真鍮のアサミイはあまりにも小さく見える。ジンの手の中にあつたときもそう思っていた。女物だということを感じてしまう。

ダイオがチュユルのレリーフ彫りがどこさされた鞘から飾りの刃を抜いた。砥石にあて、根気よく研いでいく。

「ジン様とウルルさんは、恋仲か何かだったのか？」

思わず笑ってしまった。

「尊敬できる人だったけど、恋仲まではいかなかったよ。でも、ジンが死んでからも、よく思い出して辛くなるから、恋、してたのかもしれないな」

「恋の相手でなくても、死んだ親しい友人をおもうことは辛い。よく、わかる」

ダイオの横顔、とりわけ眉間や口元にシワが目立つ。ダイオの人生、騎士として戦場を駆けめぐってきた歴史を物語るシワだ。ダイオも、何人もの仲間を失っている。そのうちのひとりが、ジンの実父、フェイスだ。

シャッコ、シャッコ。砥石と真鍮が触れあう音。

アラール八も、ジンと共に戦場を駆け、何人もの仲間を失ってきたはずだ。それなのに、なぜ、ふたりの意見は違ったのだろう。復讐をすべきか、するまいか。

「ダイオはアラール八のこと、どう思ってた？」

アラール八が姿をくramsしたことを、二人はあまり口にしなかった。ほぼ無反応だったといってもいい。

「不思議な、男だ」

ダイオは物思いにふけるように目を細めた。アサミイを持ちあげ、指の腹で研ぎぐあいを確かめる。目の細かい砥石に変え、また研ぎはじめた。

「だいたい真夏に毛皮を着ていることからして不思議だ。菜食主義者とか称して決して我輩たちと一緒に食事をとらんし、いつ寝ていつ起きているのかもわからない。表情もほとんど顔に出さないから沈着冷静な男かと思いきや、あなたの居場所がわかるなり真っ先に飛んでいった」

口調は冗談めかしているが、目は鋭い。

「ジン様のことを誰かが口にするたび、ひどく暗い顔をしていたから、エヴァンスとかいう男のこともよほど恨んでいるのだろうと思っていた。わからん男だ」

「復讐戦に参加しなかったことは、恥だろうと思ってる？」

「主君の仇も討てずに何が將軍だ、と俺は思っている。だが、あの男は、そこからすっぽり抜け出しているような気がするな。人の常識からはずれている、というか」

また、指の腹で剣の研ぎぐあいを確かめる。キーン、と鋭い小さな音が鳴った。

「すべてひつくるめて、不思議な男だ。そのボウズよりよほど頼りになる御仁なのに惜しかった。すべてが終わってから一度、酒でも酌み交わしてみたいものだ」

研ぎ終わった剣を布でぬぐい、薄く油を塗って鞘にしまう。

「これでいいはずだ」

ウラルにアサミイを返してくれる。受け取ったその手を見て、ダイオが何かを思いついたように眉を持ちあげた。

「ウラルさん、一度、こぶしを握ってみてくれないかな？」

言われたように右手をぐっと握る。

「親指を、こぶしの中にいれて握るのか？」

「うん。だめ？」

「いや。娘さんはそのほうがいい」

ダイオが少しだけ、悲しそうに目を細めた。

「そのまま人を思いきり殴ったら、親指の骨が折れるからな」

ウラルは、はっとしてダイオの顔を見つめた。「女、子どもが

武器を持たなくていい世界がいい」と、ダイオは遠まわしにそう言ったのだ。

「部屋で待っていないさい。行くときに呼んであげよう」

ダイオが再び自分の剣を研ぎはじめた。ウラルは黙ってダイオの背中を眺めた。

第三章 3 「復讐戦」 下

「ごおん、ごおおん。日没前の祈りの時間を告げる鐘が鳴り始める。西に向かい、地面に体を投げ出したティアルースともう一人の門番。その前に、夕日を背にしてウラルは立つ。

腹ばいに地面に寝そべり、祈りの最中だった二人がウラルを見つめ、驚いた様子で目を見開いた。

「ティアルースさん」

「ウラルさん、なぜここに。戻ってきてはいけない。早く。スー・エヴァンスに気づかれないうちに」

早口のベンベル語だったのでちゃんと聞き取れたかはわからない。ウラルは目を伏せた。

「ごめんなさい。よくしていただいたのに」

彼らの背後に忍び寄っていたダイオとフギンが襲いかかる。ダイオは二十年も戦場を駆けめぐってきた騎士。フギンは元盗賊で、片腕ではあるが実践経験豊富。門番たちはふたりに気づく間もなく槍と剣の柄で頭を殴られ、あっけなく昏倒した。気を失った二人にフギンとダイオが手際よくさるぐつわを噛ませ、後ろ手にしばって門の内側へ転がしておく。

夜明け前と夜眠る前の祈りは、使用人もエヴァンスも一緒に二階の祈りの間で儀式をする。だが、正午と、日没前、日没後は、門番たちは仕事を離れられないので、門の前で祈る。祈りの間にいるのは、普段はエヴァンスとシャルトルの二人。シャルトルは今日いないので、エヴァンスはひとりで祈りの間で儀式を行っているはずだ。

広い庭を突っ走る。エヴァンスの読経が聞こえてきた。深みあるテノールで、歌うように祈っている。

フギンがぱつと壁のレンガのくぼみに手をかけ、体を持ちあげた。エヴァンスのいる祈りの間まで、ずるずると窓の外をよじ登っていく。

ウラルとダイオは音をたてないようにドアを開け、屋敷の中に入った。ウラルがダイオを先導し、足音を忍ばせながら階段を駆けあがる。

祈りの間の前に来た。

ダイオがドアに耳をあて、中の様子をうかがう。ウラルに「ここで待っている」と身振りで指示をした。

祈りの声が途絶える。

「何者だ」

ダイオが勢いよくドアを蹴り破った。同時に、窓の外で待ち構えていたフギンが窓ガラスを叩き割る。

「頭目の仇だ、このゲス野郎！」

「主君の仇！」

大きくフギンが槍を振りかぶる。エヴァンスが腰にはいていた長剣でそれを防いだ。大きくしなったシャムシール。

エヴァンスの空いた左脇をダイオの剣が襲う。エヴァンスがぱつと後ろに跳び、それを避けた。

「お前は！」

エヴァンスがダイオの顔を見て、短いベンベル語の叫びをあげる。

「我輩の顔に覚えがあるか」

フギンはともかくとして、ダイオは一国の高位騎士。エヴァンスが顔を覚えていてもおかしくはない。

「まさか、こんなところまでつながっていたとは。ウラルの尋ねたこととはこういう意味か」

リーグ語。さっきの一言にはまじっていた狼狽が、もう口調から消えている。ドアの陰にいたウラルとエヴァンスの目があった。青い目が煌々と燃えている。

「平和のうちに去るがいい。さもなければ我らが神のいかずちが、きさまらの脳天に落ちようぞ」

「賽は投げられた。後にひくわけにはいかぬ」

ダイオが剣を構えた。

「お命、頂戴申す」

「みんなの仇だ。お前のせいで、何人の仲間が死んだと思ってるんだ！」

フギンの鋭い突き。エヴァンスが体を開いてそれをかわしざま、フギンの喉笛めがけて剣を振る。フギンは素早く槍の柄をまわし、石突で剣をはじいた。だが、片腕だからだろうか。力が足りない。フギンの羽帽子が吹き飛ばされる。

ダイオがエヴァンスの背後から襲いかかった。フギンの隙に切りこみかけていたエヴァンスが舌打ちをしながら、ダイオの剣を受け取る。そのエヴァンスに、またフギンが襲いかかった。

「監獄に忍びこみ、リーグ人を脱走させたのち、逃げたのはウラルを含めずに三人だったという。あとの一人はどうした」

ダイオとフギンは答えず、黙ったまま、エヴァンスに襲いかかる。

ジンの黒マントを着たフギン。真紅のサーコートのダイオ。そして、群青のジャケットに身を固めたエヴァンス。息の乱れる音。武器の触れあう音。剣と剣、剣と槍の刃から火花が散る。

フギンが大きく槍を振りかぶり、切りかかった。エヴァンスの腹を薄くそぐ。エヴァンスの眼光が鋭さを増した。

エヴァンスが槍の穂先近くを足で踏みつける。そのままもう片方の足で槍の柄を蹴り折った。

武器を失ったフギンがとっさに左腕の義手でエヴァンスの頭を殴りつける。エヴァンスはその義手をつかみ、ひねりあげ、そのままフギンの体を窓の方へ容赦なく突き飛ばした。

「ボウズ！」

窓を突き破り、呪詛の声をあげながら、フギンは窓の外へ落ちて

いく。

「フギン！」

ウラルも黙って見ていられなくなり、部屋の中へ踏みこんだ。来るな、とダイオが怒鳴る。エヴァンスが再び、ダイオに切りかかった。リーグ騎士とベンベル騎士の一騎打ち。赤と青の激突。ウラルが見る限り、ふたりは互角だ。

ウラルはジンのアサミィをにぎりしめた。フギンは大丈夫なのだろうか。まさか、死んでしまったのでは……。

目にもとまらない速さで打ちあわされるサーベルとシャムシール。二人ともが、腕に、顔に、肩に、わき腹に、どンドン傷をおっている。

先に、大きな傷を相手におわせたほうが、勝ちだ。

「火神よ、あなたの加護を与えてください！」

アサミィをにぎりしめ、ウラルは叫ぶ。

貧血を起こしたときのように頭がすーっとぼやけるようになり、周りの全ての音、光や、色が遠ざかった。

（行け、ウラル！ エヴァンスに一瞬でも隙を作らせれば、ダイオは勝てるぞ！）

（俺たちのために復讐してくれ。あいつを殺してくれ！）

耳の奥で、ジンの声が叫んだ。亡霊の音が、同時に頭の中で爆発する。

ウラルはアサミィの鞘を抜いた。構える。

「ジンの、仇！」

エヴァンスに切りかかる。

突然の攻撃に、エヴァンスはぎょっとしたような表情をうかべた。ウラルがはじめて見た、エヴァンスの表情らしい表情だ。

が、ひるんだのはエヴァンスばかりではなかった。ダイオも一瞬、動きを止める。我に返るのは、エヴァンスの方が一瞬、はやかった。

エヴァンスの剣がダイオの腹をつらぬく。

ダイオが口から血を吐いた。真紅のサーコートの腹が、もつと深い、ほとんど黒の赤に染められていく。

血の海に、ダイオが沈んだ。

気合と共にウラルのアサミイがエヴァンスの背後を襲う。入った、と思った瞬間、エヴァンスは体を開いてそれをよけ、かわしざまウラルの後頭部に手刀を叩きこんだ。

気が遠くなる。全身から力が抜け、ウラルはダイオの隣に倒れこんだ。

ダイオが取り落とした剣をとろうと、ゆっくりと手を伸ばすのがわかった。ダイオも気を失いかけているのだろう。ゆっくりと手を伸ばすのだが、遠近感がなくなっているのか、剣に届かない。

頭を殴られたせいか視界が暗かった。まるで夜になったかのような。

その暗い中、ダイオの枕元にジンが立っていた。

「フギンが死んでしまった。ダイオも、もうすぐ死んでしまう」

ぞっとするような低い声。ジンとは思えない、暗い表情をしている。

ジンはウラルの手元に転がっていた真鍮のアサミイを拾いあげた。

「すまん、ウラル」

鋭く研がれた切っ先が、ウラルの喉元につきつけられる。

「復讐を果たせなかったのは、おまえのせいだ。俺もこんなことはしたくないが、悪く思わないでくれ」

ぼんやりとした意識の中、ウラルはアサミイの柄をジンの手の上からにぎった。ジンの手は温かみがなく、まるで空気をにぎっているような形のない感触だった。

ゆっくりと、自分で、アサミイを喉元に持つていく。ジンが薄ら笑いをつかべた。

「やめろ！」

ぱっと、急に視界が明るくなった。光の中で「ジン」が顔をゆが

める。どす黒い、ジンとは似ても似つかない死者の顔。

「だまされるな、ウラル！」

さっきまでとは打って変わって、力強い、本物のジンの声。喉もとのアサミイを蹴り飛ばされる感触がした。

はっと我に返ると、エヴァンスが青ざめた顔でウラルを見下ろしている。アサミイを蹴り飛ばしたのは、エヴァンスだった。

窓の碎ける音がする。石がいくつもエヴァンスにむかって投げられた。窓の外で待ち構えていたフギンが戻ってきたのだ。祈りの間は二階にあるといえど、一階は半地下だ。二階は決して高い場所ではない。大怪我はしなかったのだ。

エヴァンスが剣を抜いてフギンを迎え撃とうとする。が、かろうじて意識を保っていたダイオがウラルのアサミイを取り、エヴァンスの足に切りつけた。エヴァンスが横転する。

「大丈夫か、ウラル！」

フギンがウラルを肩にかつきあげた。

「すまん、ダイオ！」

瀕死のダイオを置いて、フギンは窓から外へ跳んだ。

第三章 4「夢うつつ」 上

馬場に放牧されていた馬にまたがり、まだ気を失っている門番を蹴散らしてフギンは突っ走った。パニックになり暴れる馬の背にしがみつきながらフギンは馬に脚をいれ続ける。半ば気を失ったウラルを隻腕で支えながらだ。しかもその馬は鞍もハミもつけていない。ほとんど神業だった。

「ウラル！ ウラル！」

興奮しきった馬は跳ねに跳ねながら表へ飛び出すと通りを突っ走り始めた。壁にぶつかりかけ急旋回し、通行人に驚いて土煙を蹴立て棹立ちになる馬に振り回されながら、それでもフギンはウラルを支え馬にしがみついたまま。けれどさすがにそんな離れ業は長く続けられなかつたらしく、メインストリートの一歩手前で走る馬の背から飛び降りた。解放された馬は夕暮れ時で混み合う市場へ一直線に突っ走っていく。

ウラルは路地裏で横にならされ、フギンに軽く頬をたたかれた。うめきながら目を開ける。目を開けるだけでも後頭部に鋭い痛みが走った。

「どこ、やられた」

そろそろと手を動かし、後頭部を押さえる。

「あの野郎！」

悪態をつきながらも、フギンはいたわりに満ちたしぐさでウラルの瞳孔の収縮を見、後頭部の傷を見た。

「俺の名前、言えるか？」

一瞬、思い出せず、ウラルはとまどった。口を半開きにしたままぼうつとなっているウラルの手を、心配そうにフギンがにぎる。

「フギン」

答えられたが、フギンはよけい心配になったようだ。

「大丈夫だ。すぐ、安全な場所に連れてってやる。少し、寝てるよ。」

な？」

「ウルルはかすかにうなずいて、目を閉じた。

フギンがおぶってくれる。右肩から先がないので、うまく体が安定しない。何度かためしたが、どうしてもずると滑ってしまう。フギンが左肩にウルルをかつぎあげた。

安全な場所といつても、どこへ連れていく気なのか。ウルルはまた、ふうつと気が遠くなるのを感じた。

気を失っては、また目を覚ます。何度目かに目を覚ましたとき、ノックの音が聞こえた。フギンがどこかのドアを叩いている。

うつすらを開けると、フギンと同年代の若い男がドアを内側からあけるところだった。見覚えのあるような、ないような顔だ。

フギンがなだれこむようにしてドアの内側に入る。男は止めようとしたが、すぐに、何も言っておなくなった。

薄っぺらい布団の上に横にならされる。頬を軽く叩かれる感触がした。

「もう、大丈夫だ。安心して、眠って」

ウルルはぼんやりとうなずき、また、目を閉じた。

*

故郷の丘に立っていた。けれどそこは実際の丘よりずっと広く、あるはずの自然石の墓標もない。村も見えない。ジンが死んだ日に見た夢、風神の夢にあらわれた丘、貴石の棺がならぶあの丘だった。

「ウルル」

聞きなれた男の声に、はっとウルルは振り返った。

「ジン？」

水晶の棺にジンが座っている。棺の中は空っぽだった。中にいるはずの人がここにいるのだから当たり前といえは当たり前ではあるけれど。初めてジンに出会ったとき、故郷の陶芸じいさんの家で会ったときの格好をしていた。

「ジン。どうしてここに？ 会いたかった」

ほんとジンが水晶の棺、自身の座る横を叩く。

「座らないか？」

ウラルは示された場所、ジンの隣に腰をおろした。棺の群れが、ずっと遠くまで広がっているのが見える。ウラルとジンの近くにある棺には、ほとんど中に骸が入っただけだ。

ウラルの心の丘。棺の主は、すべて、ウラルとどこかで出会った人だ。棺の前には一本一本、青いナタ草がそなえられている。ウラルが故郷の丘で、村のみんなの墓の前にそなえたように。

「俺は、ジンだと思うか？」

夕日を見つめながら、ジンが尋ねた。

「俺は、残念ながら本物のジンじゃない。本物のジンは風神に導かれて心の世界に還ったよ。俺はお前の心の中のジン、お前の記憶にあるジンが形をとったものだ。だが、ずっとお前の耳元でささやいていた 戦場の悪魔 よりは、ずっと本物に近い」

「戦場の、悪魔？」

「幻覚を見せて、宿主を殺す悪魔だな。だいたい、戦場で生き残ったやつがとりつかれる。さっき、お前をエヴァンスに差しむけた声や、マライを助けにいった監獄での声は、全部 戦場の悪魔 の声だ。フギンが最近、よく無茶をするのもこいつのせいだ。フギンも、

戦場の悪魔 にとりつかれている」

マライを監獄に助けに行く前、たしかにフギンはそんなことを言っていた。悪魔の声が聞こえると。

「あの、死者の声も？」

「ああ。あれが 戦場の悪魔 本来の声だ」

ウラルは故郷の村をおもった。ベンベル国の飲みこまれかけていた、滅びに瀕していたあの村で、大婆さまはウラルの後ろに 戦場の悪魔 を見ていたに違いない。

「 戦場の悪魔 は俺が生きていた時に言っていたことをうまく使ってお前をまどわしたろう。だが、本当に俺が思っていたこととは

少しずれていたはずだ。もうお前は騙されない。悪魔は一度とらえそこねた相手は襲わない」

たしかに、そうだった。監獄のときは、ジンがその場にいれば、すぐさまフギンを助けるため包囲に飛びこんでいっただろう。だが間違ってもウルルに行かせようとはしなかったはずだ。ましてや、ウルルをあおるようなことはするはずがない。エヴァンスのときも同じだ。

「問題はフギンだな」

フギンの、ファイアオパールの棺が夕日に輝いた。

「あいつを助けてやってほしい。戦場の悪魔に引きずられないように、お前が杭になってやってくれ」

「杭？」

「お前が近くにいれば、あいつは無茶ができない。アラーハの言うとおりだ。お前があの時、監獄に行かなかつたらフギンは死んでいた。お前があの時、エヴァンスの屋敷に行かなかつたらフギンはダイオの復讐に燃え、無謀に立ち向かって殺されていた。お前がいたからフギンは生き残ったんだ。俺はずっとここにいたからわかる。ここでフギンの棺を見ていたから」

ジンはすぐそばにあったフギンの棺を見た。フギンの棺はむろん空っぽだ。生者は棺はあっても中身はなく、ふたが棺にたてかけられて空っぽの中身が見えている。骸があるのは死者だけで、不透明の石でも棺のふたがしまっているものでそれとわかった。

「棺を見ていれば、なにかわかるの？」

「見てみる」

ジンの指した先にはガーネットの棺がある。その中にぼんやりと人影があった。が、ほかの死者の骸の影よりはずっと薄く、ぼやけている。棺のふたも開いたままだ。

「ダイオ！」

ウルルは思わず声をあげ棺に駆け寄った。まさか、まさか死んでしまった？ 駆けつけ棺にひざまずくと同時に、棺の中のダイオの

姿はすうつと薄れ、消えていった。

「生き延びたようだな」

同じく駆けつけていたジンが棺のふたに刻まれた「ダイオ」の文字を指でなぞる。

「それは、どういう」

「持ち主が死にかけると、今のようにぼんやり人影があらわれる。フギンのときもそれでわかったんだ。死ねば棺のふたが閉まり、生き残れば人影は消える」

「ダイオは、生きている……」

「生死の間をさまよったみたいだけどな。そうだ、生き残ったよ」
よかった、とつぶやいたウラルの肩にジンが手を置いた。生前と変わらない温かい手、温かいほほえみ。

「じゃあここで棺を見ていれば、誰が死んでいて、誰が生きているかわかるの？」

ジンは近くにあった二つの棺を指さした。深緑のトルマリンの棺と、銀細工のほどこされた美しい棺。トルマリンのネザの棺は閉まり、銀細工のイズンの棺は。

イズンの棺は、空っぽだった。

第三章 4 「夢うつつ」 下

ウラルは跳ね起きた。跳ね起きると同時に後頭部に鋭い痛みが走り、目の前が暗くなる。再び横たわって荒い息をついたウラルの視界の隅で誰かが動いた。

「ウラル、気がついたのか？ どうした、頭を打ってるんだぞ。ゆっくり寝てるよ」

フギンがウラルの顔を心配げにのぞきこむ。ウラルは息せきってフギンの手をひつつかんだ。

「フギン、大変。イズンが生きてる」

「は？」

「ネザは、ネザは死んじゃったけれど、イズンが生きてるの。ダイオも生きてる。探しに行かなきゃ。どこにいるんだらう。フギン、見当がつく？」

フギンはぼかんとしている。その顔つきを見つめるうち心がだんだんこちらに戻ってきて、ウラルは恥ずかしくなつてフギンの手を放した。

「ごめん、寝ぼけてたみたい」

「たかだか夢を見ただけなのにどうしてこんなに動転したのだらう。フギンはすっかりあきれ顔だった。」

「どんな夢を見たんだ？ 丸一昼夜も寝てりゃ、そりゃ寝ぼけたつておかしくないけどな。死ぬほど心配したんだぜ、それなのにお前は……」

ぶつぶつ文句を言っているフギンの後ろから笑い声が聞こえたので、ウラルはびっくりしてそちらを見た。ほかに誰かいるとは思わなかった。

「なにはともあれ気がつかれてよかった。ジン様と一緒にいられた

方ですよ。一度、お会いしたんですが、覚えていますか？」

なんとなく見覚えのある男だった。歳のころはフギンと同じくらい。馬のように面長の顔と張り出した頬骨、彼のもたれかかった壁の横にはウラルの描いたへたくそなナウトの似顔絵がある。ナウトの家だ。ということは、この男はナウトの「兄ちゃん」ということになる。

ウラルはしげしげと男の顔をながめた。ジンを知っている、しかも「様」をつけて呼ぶということは、スヴェル の関係者なのだろうか。

「フェイス将軍の揮下の者です。ムール伝令をやっていました。名前は、シガルです」

腑に落ちるものを感じ、ウラルは顔を伏せた。

「フェイス軍全滅、と伝えに来られた方ですよ」

シガルの目に、痛みをこらえるようなものがまじった。

「そうです」

ふっと、ナウトが見せてくれた「兄ちゃんの、たからもの」を思い出した。立派な箱に入れられた白と黒の大きな羽。あれはムールの羽だったのだ。しかも、おそらくはあの時、ジンが貸した スヴェルのムール、ハーロークの羽。

「ナウトは？」

「食いもんを買いに行ってくれてる。すぐ戻ってくるぜ」

と、ぱたぱた外から元気のいい足音が聞こえてきた。

「ほらな、噂をすれば」

「ウラル姉ちゃんは？」

ドアを開けるなりの第一声がこれだ。思わず笑みが漏れた。

「姉ちゃん！ よかった！」

買った物袋を投げだし、ナウトはウラルに飛びついてくる。

「こら、ウラルさんは怪我をなさってるんだぞ。傷にさわる」

たしかに、飛びつかれたとたん、衝撃で後頭部がまた痛みだした。ナウトがすすこと引きさがる。

「ダイオは？」

とたんに、フギンの表情が曇った。

「死んだかもしれない。わからないんだ」

ぎらり、と鋭くフギンの目が光る。

「くそつ、エヴァンスの野郎！ 次こそぶつ殺してやる。殺すだけじゃ飽きたらねえ。腹かつさばいて、目玉えぐりだして、馬のケツにつないでそこらじゅう引きずりまわしてやる！」

「フギン」

そつと、フギンの腕をとった。

「アラーハの、予言どおりになっちゃったね」

（復讐することで、俺たちの中で欠けるものはあるにしても、得るものは、なにもないと思わないか）

「私ね、ジンから、ことづてをされたの。フギンが 戦場の悪魔に引っぱられないための、杭になってくれつて。 戦場の悪魔に引っぱられるつて、憎しみに流されて、復讐するとか殺してやるとか、ずつと考えてるつてことじゃないの？ それが悪魔の形をとるんじゃないの？」

フギンが、ぎよつとしたような目つきをした。ナウトとシガルは話していることの意味がわからないらしく、顔を見あわせている。

「頭目からことづてつて、どうやって？」

「夢の中で。でも、本当にジンが生きていて、私と同じものを見ていたら、同じことを言っていたと思うの。だから、私は、杭としてあなたを止めたい」

フギンの腕を握る力を、ウラルは強めた。

「やめて。復讐なんて。私、アラーハに会いたい。今は私、あのときのアラーハと一緒にのことを思ってるから。復讐なんて、本当にまっぴら」

「でも、ダイオに申し訳がたたない」

「何度も痛い目を見ているのに、まだわからないの？ お願い、やめて」

胸元のペンダントをにぎりしめた。

守って、ジン。

ちよんちゃん、と服のすそを引っばられた。

「なあに、ナウト？」

「僕も、言われたんだ。』ことづて』。ウラル姉ちゃん宛て」

「誰に？」

「緑の目の、おばあちゃんとお兄さん。昨日、西広場に行ったら言われたの」

「おい、そいつって」

フギンの顔色が変わった。ミュシエとシャルトルだ。

「おばあちゃん、言葉がわかんないみたいだったから、お兄ちゃんが通訳してくれたの。ウラル姉ちゃんに伝えてほしい、って」

「何もされなかったか？」

「なんにも。言うね。』後悔だけはしないでください。それはとても卑怯なことです』」

言って、一仕事終えたとはかりにナウトがにっこりした。

「ナウト、お前、こうやっていつも仕事をしているんだな」

「うん。このごろはフギン兄ちゃんがたくさんお金くれるから、何にも困ってないんだよ」

シガルも弟分の仕事を見れて嬉しそうににっこりするが、ウラルとフギンは複雑な心境だった。ずばっと今の状況を言い当てられてしまったのだ。

「あと、スケッチブックは見せてもらいましたって」

ウラルはうなずいた。あの絵でわかっただろうか。ミュシエはどう解釈したのだろうか。

フギンが、ゆっくりと長い息を吐いた。

「俺、このまま行かなかったら、絶対後悔する」

「私は、行ったら後悔するよ」

フギンがウラルを軽くにらんだ。

「じゃあ、どうしろって言うんだよ。少なくとも、ダイオが生きて

るか死んでるかは確かめなきゃ」

それも、そうだ。だが、ダイオの安否を確かめるだけのつもりでも、ちょっとしたでもエヴァンスが視界に入ったら、フギンは黙っておけないに違いない。

「では、私とナウトが行ってきましょう」

申し出たのは、シガルだ。

「私はフェイス將軍の揮下でしたが、ダイオ將軍にもお世話になりました。私にも、何かできることがあれば。ウラルさんにも静養が必要ですよ」

「俺が行かなくちゃ、意味がないんだ」

ひとつ案を思いついて、ウラルは手を打った。

「じゃあ、こうしましょ。シガルとナウトが行ってダイオが無事に見つかったら、しばらく様子を見ましょ。ダイオは大怪我をしてるんだから簡単には動かせないでしょう？ 機会を待って、助け出す」

「ダイオが死んでいたら？」

「死んでない」

断言してからウラルは顔を伏せた。夢は夢だ、いくら説得力があったとしても。死んでいるかもしれない、けれど生きていてほしい。何かを言いかけたフギンを制し、シガルが二人の間に割って入った。

「話をお聞きした限り、すべては様子を見てから。私が言えることといえばこの一言に尽きます。それから話しあえばよろしい。場所はナウトが知っていますね？」

シガルが立ちあがった。身の軽い人だ、今から行く気らしい。ナウトもびよこんと立ちあがる。

「俺も行く」

「だめです。あなたは休まれたほうがよろしい。もちろん、ウラルさんも」

びしゃりと言われ、フギンも返す言葉を失ったようだ。

「では、行つてきますね。必要があればこの部屋のものを適当に使つてください」

にこりとほほえみ、シガルはきびすを返す。ナウトがちよこちよことシガルの足元にまとわりつきながら外へ出て行つた。ぱたん、と軽すぎる音をたててドアが閉まる。

ダイオ。本当に生きていてほしい。マライに続いてダイオまで失いたくはない。失血死してもなんらおかしくない深手だったはずだ。ダイオの血に染まった手が目に浮かび、ウラルは身震いした。金に輝くアサミイを握り締めた真つ赤な手……。

「アサミイ」

ウラルは慌てて腰をさぐつた。横になっていたベッドも見た。ペンドントはある、けれどアサミイはあの時ダイオがにぎつたまま。

「どうしたんだ？」

ジンの形見は、失われてしまった。

終章 「行方不明」

シガルとナウトが帰ってきたのは夕暮れ時になってからだだった。
「なんといったらいいか」

ついでに買ってきてくれたサンドイッチの包装をときながら、シガルがぐつと眉をひそめた。

「ダイオ将軍が生きておられるか、否か以前の問題でした」

「もったいぶらずに早く言えよ」

フギンがせつつくと、シガルは「では」と口を開いた。

「単刀直入に言わせていただきます。エヴァンス邸は、もぬけの殻でした」

ウラルは目をしばたいた。もぬけの殻？

「門扉は固く閉ざされ、門番もいません。馬やゴーランがいる気配もなく、全ての窓にはぴつたりとカーテンがしめられていました。半日張りこみましたが、人が出入りする気配はまったくありません。栗毛の奥方だけはおられるようですが」

普段のエヴァンス邸には、秘書のシャルトルがひっきりなしに自分の家とエヴァンスの家を行き来している。エヴァンスが留守にする門番はいるはずだし、人が出入りする気配がまったくなくというのはさすがにおかしい。

「栗毛のシャルトルってやつは？」

「いないようです。とりあえず敷地まわりを一周してみました。ダイオ将軍の墓らしいものも見あたりませんでした」

「夜逃げか？」

「まさしく、そんな感じですよ」

さすがにフギンもあつけにとられたようだ。自分の分のサンドイッチも口に含んだまではいいが、噛むのを忘れている。

「ウラル、俺が様子を見に行っても文句ないよな？」

「エヴァンスがいらないなら、復讐もなにもそれ以前の問題よね」

「よし、今から行く」

「僕も行くっ！」

急いでサンドイッチの残りを食べ、フギンとナウトはエヴァンス邸に向かったが、結果は変わらなかったようだ。

「庭まで忍びこんでみたけど、明かりもなにもついてなかった。厩舎行ってみたけど、馬もいない」

エヴァンスが夜逃げとは。ウルル側が逃げるのならわかるが、なぜエヴァンスが。

「どうする？ フギン」

フギンが苦々しげにウルルを見やった。

「やつがいないんじゃ、どうしようもないさ。さすがにご婦人を拷問するなんて言ったら、お前が怒るだろうし」

「当たり前でしょ。私、森に帰りたい。アラーハが待ってる」

「ダイオ、どうすんだよ」

「行方がわからないのに、どうするの？」

「それもそうだけどさ」

フギンが不服そうに鼻を鳴らす。

「せめてウルルさんの傷がいえるまでは、じっとしていたほうがいいと思いますかね」

シガルが口をはさんだ。ナウトはぴったりシガルのそばにくっついて、行儀よくちょこんと座ったままだ。

「ダイオ將軍は私とナウトで探しましょう。お世話になった方ですし、私としても黙っておくわけにいきません。何か手がかりをつかんだら、お知らせしますので」

「ウルル姉ちゃん見つけたの、誰だと思ってるの？」

シガルとナウト、ふたりの声に後押しされ、やっとフギンがうなずいた。

「よかった！」

フギンを抱きしめる。とたん、衝撃で後頭部がズキリと痛んだ。うめき声をあげてしまう。

「おいおい、大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫」

ウラルはほほえんだ。フギンもつられたように、ほほえみを返してくれる。

「じゃあ、帰りましょ。森へ」

フギンの目が名残惜しそうに揺れた。

終章 「行方不明」 (後書き)

第一部完結 第二部 第三部間章へつづく

間章 1「信じない」 上

「こんなところに隠れ住んでおられたとは」

獣道をたどりながら大げさにあきれてみせるシガルに前を行くフギンが笑いかけた。ナウトはといえば、もう半分ピクニックだ。虫を見つけたといつては立ち止まり、キノコを見つけてはウラルに食べられるかどうか尋ねてくる。ウラルはそんなナウトに生返事を返しながら黙々と歩いていった。

世話になつたシガルとナウトをあのあばら家に置いておくのはどうかというわけで、ウラルの傷が癒え、森の隠れ家に戻ってくるとき一緒に連れてきたのだ。ここならヒュガルト町に近いからダイオを探すにも都合がいいし、エヴァンスの搜索の手も簡単には伸びてこないだろう。いくらエヴァンスの家がもぬけの殻とはいえ、用心しておくにこしたことはない。

「こんなところに家を建てて森の守護者が怒りませんでした?」

「ん、森の守護者? ああ、ガキンときよく聞かされたっけか。んなマジメな顔して言うなよ、伝説に決まってるんだろ? 俺、もう何年もここにいたけど守護者なんて見たことないぞ」

「守護者ってなーに?」

「森を守ってる、こわーいこわーい動物だよ。ナウトも気がつけろよ。この森では迷ったが最後、そのこわーい動物が出てきてな、ばくばくつと食われちまうんだぜ。一人で遠くへ行くんじゃないぞ」
アラーハが聞いたら何と言うやら。ナウトはすっかり本気にしてしまったらしく、怯えた顔でシガルのすそをにぎりしめる。その様子にフギンはひとしきり笑い、それからウラルを振り返った。

「ウラル、どうかしたのか?」

ウラルは首をかしげてフギンを見つめた。

「いや、ここで『もうフギンったら』とかなんとか言われると思つたのにさ。お前、最近元気ないぞ。ダイオやあの金髪男のことが気

になるのはわかるけど」

「うん……」

ウラルはうつむいた。

エヴァンスへの仇討ちに失敗した日、いや正確にはあの丘の夢から覚めたときからひどい胸騒ぎがするのだ。そのおかげで冗談を言ったり笑ったりするゆとりがない。どこかに行かなければならないという焦燥感に絶え間なく襲われて、生きているかもしれないイズンのことがどうしようもなく気になって仕方がなかった。見るべきものはエヴァンスとダイオであるはずなのに、それが見えなくなるほどに。

「ま、相談とかしたくなったら聞くからさ、言ってくれよ。さてつと、そろそろ見えてくるはずだな」

「見えてくる」とフギンが言った瞬間に、なぜか胸がドクンと大きく脈打った。かつと頬に血がのぼる。はやく、一刻もはやく隠れ家に帰りつかなければならない。けれど断じて前を見たくない。なぜこんな思いが急にわきあがってきたのか、わけがわからないままウラルはうるたえ、胸を押さえた。

「アラールさんはこの家に？」

「いや、やつは半分獣だからな、この森のどつかを放浪してるみたいなんだ。ま、たぶん適当に俺たちのにおいをかぎつけてくるさ」

フギンらは最後尾を歩くウラルの異変に気づいていないようだ。立ち止まりたい、けれど同時に走り出したい。ふたつの思いがあいまって、結局ウラルは今まで通りの速さでただゆっくり歩いているしかない。

うつそうと茂る木々が途切れ、光の差し込む場所が前に現れた。ばかりと広がる草地、そこに二軒の隠れ家と、厩舎と、ムール禽舎。馬もムールもないから空っぽではあるけれど。

「見えてきたな。さてつと、そこだそこだ。……あれ、ちよつと待て。何かいる」

ぴたりとフギンが歩みを止め、前方に目を凝らした。シガルとナ

ウトも立ち止まり、ぴたつと前を見つめる。シガルが「おお」と感嘆の声をあげ、さつきまでちょこまか動き回っていたナウトも驚きにぴたつと動きを止めた。ウラルも目を凝らして息を呑む。

「うお、珍しいな。イツペルスだ。すごい立派なツノしてるぜ。おい、誰か弓矢持ってないか？」

隠れ家の玄関前に一頭の立派なイツペルスが座りこみ、こちらをまっすぐに見つめていた。人間を見つけたとみえ、ゆっくりと立ち上がる。赤茶の毛皮、黒いたてがみと尾、立派すぎる枝角。アラール八だ。アラール八がなぜか人の姿にならず獣のままにいる。

幸いに、というべきか誰も弓矢は持っていなかった。威風堂々たる姿に圧倒され、動かない四人をアラール八はじつと獣の姿で見つめている。それから一步を踏み出した。

「お、おい、こっち来るぞ。普通逃げるだろ。なんでだよ」

狼狽するフギンを押しつけ、ウラルはたまらず駆け出した。そうか、今の胸騒ぎ。胸騒ぎは。

「ウラル！ 危ないぞ、おい、さがってるよ！」

フギンは叫び終わると同時にあんぐり口を開けたらう。ウラルが巨大なイツペルスの胸に自分から飛びこんだのだから。その長い首を抱きしめる。アラール八は悲しげに鼻先をウラルにこすりつけた。無言だ。そのしぐさで全てがわかった。

「どうして。まさかよね、まさかそんなことが」

アラール八は守護者争奪戦に帰ると言っていた。ほかの雄たちの挑戦を受けなければならぬと。

「負けてしまったの、アラール八……」

人の姿で出てこられないはずだ。人に化ける力を失い、人の言葉も話せなくなってしまったのだから。何十年間も保持してきた守護者の椅子をほかのイツペルスに明け渡し、守護者の神通力を失ったアラール八は。

「あ、あのさ、ウラル、そいつ知ってるんなら紹介してくれないか？」

我に返って振り返ると、フギン、シガル、ナウトの三人が遠巻きに見守っていた。

「今、アラーハって呼んだよな。それがこいつの名前？ たしかにアラーハになんか似てるよな。にしてもイツペルス飼慣らすって何したんだ？ 絶対慣らせない生き物だって前にも言ったろ？」

フギンがおっかなびっくり近づいてきて、アラーハの肩をぼんぼん叩いた。アラーハは無反応でウラルの肩に鼻先をもたれかけさせたままだ。ウラルは答えようとしたが、声にならない。

「ああ、そーいや、ゴウランラ の近くでもお前、たしか一頭連れてたよな。二頭も慣らしちまったのか。あっちの名前はなんて言うんだ？ こいつがアラーハだから、まさかフギンって名づけてないよな？」

「あの時と同じイツペルスなの」

「そーか、同じやつなのか。あのとき仲良くなって一緒に連れてきた感じ？」

「あの時からじゃない。ずっと、ずっと一緒にいた……」

ウラルは両手で顔を覆った。

アラーハがそろそろと首を伸ばしてナウトのにおいをかぐ。ナウトはびっくり仰天、あわてて後ずさったが、アラーハが静かに見守っているとへっぴり腰で近づき鼻先にちよんと触れて手を引いた。それでもアラーハが動かないから少し安心したらしい。またゆっくり近づいてアラーハに触れ、今度はひたいをなでた。アラーハはされるがままになっている。が、シガルが触れようとすると首を跳ねあげて触らせなかった。

「ずっと一緒にいた？ どういうことだ？」

「フギン、きつと信じてくれない」

「話してから決めるもんだろ、そーいうのって。まさかこいつがあのアラーハって言い出すわけじゃないだろ？」

そのまさかだ。

ウラルは口に出さなかったが、顔色ではっきりそう言っていたら

しい。フギンはアラー八を見つめ、ウラルを見つめ、それから引きつり笑いを漏らしてウラルの肩をぼんぼん叩く。シガルとナウトは顔を見合わせていた。

「あの、ウラル？ こんなこと言いたかないんだけどな、金髪野郎に頭殴られてどうかしちまったのか？ 早く家の中入って休んだ方がいいぜ。な？」

「だから信じてくれないって言ったのに」

「いくらアラー八が獣じみてたってな、あいつはれっきとした人間だろ？ それがある日突然イッペルスになっちゃいましたー、つてな。ウラル、そんな真顔で冗談言うもんじゃないぜ。冗談つてのは笑うためにあるもんだ」

ウラルはアラー八の首に手をやった。馬にするようにそつとなでる。

「アラー八、どうしてこんなことになる前にみんなに言っておかなかったの？」

フギンの目つきが険しくなった。

「おい、ウラル、しっかりしろよ。な？」

「フギン、今まで変だと思わなかった？ 走る馬について走ってこれる人間がどこにいるの。アラー八、あんなに大柄だったのに肉食べれないなんてどう考えてもおかしいじゃない。夏になっても毛皮を着たまま、秋になると姿を消す。ほかにも変なところ、たくさんあったでしょう？」

「ウラル、もう休めよ。横になるんだ」

「私、イッペルスを慣らす方法なんて知らない。アラー八はこの森の守護者だった。守護者は人間に化けられる……。聞いたこと、あるでしょ？ アラー八は人に化けてずっとみんなと一緒にいたの。自分の正体を明かさずに」

とたん、フギンがウラルの肩をひつつかんだ。

「いい加減にしるよ！ それはおとぎ話だろ？ んなばかなことがあつてたまるか！ おい、シガル、ナウト、行くぞ。ウラル、本当

に横になれ。そのうちアラールも帰ってくるさ。それで一件落着だ」
フギンは犬にやるようにしっしっしと手を振る。ウラルがかばうつもりで間に割り込むと、アラールはそつとウラルの背を鼻先でつついた。ひどく悲しげな目、顔の側面にだらんと垂れた耳。フギンと一緒に駆け、と言つようにぐいっつとウラルの背を前に押しときびすを返し、ぱつと森の中へ姿をくらましてしまふ。さよならだ、ウラル、と揺れたその目が語った気がした。

「アラール……」

見送る間もなくフギンにむんずと手をとられ、ウラルは引きずられるように森の隠れ家へ連れていかれてしまった。

*

それから数日の間、フギンとの仲は険悪だった。ウラルが外へ出ようとする、「具合が悪いんだから寝てる」の一点張り。トイレだのハーブ園の手入れだの適当な理由をつけて外へ出てみるも、ウラルの姿をフギンの視線が窓から必ず追ってくる。アラーハの姿を求めて外へ出ているのがわかるらしい。

フギンは怖いのだ。ウラルの気が違ってしまうのではないかと心底恐れているらしい。せつかく死地を脱したウラルが、また死とは別の形で遠くへ行ってしまうのを止めようと必死になっている、そんな風に見えた。

当のウラルもまた、そんなフギンの様子をばかだとは思えなくなりつつある。むしろアラーハの正体についてはこれっぽっちも疑っていない。けれど、例の胸騒ぎがおさまらないのだ。アラーハが森の守護者の地位から退いたことを知ったあの日は一時的に収まったのだが、それからまた日増しに強くなっている。

どこかへ、いや、北へ行かなければならない。

ただの胸騒ぎだったはずなのに、それがどんどん具体的な形になってくる。こんなことを話したらフギンはそれこそ目をつりあげ、ウラルを部屋に押しこめてしまっだろう。ウラル自身も怖いのだ。これがないかの前兆、人が狂う前兆かもしれないと思うと。

ウラルは玄関先の掃除をしていた手を止めた。家の中を振り返る。無人の廊下に並ぶドア、その一番奥の部屋。

「ウラルさん？」

振り返るとシガルとナウトが立っていた。二人はこの一番手前の部屋、もともとリゼの部屋だった場所を使っている。ダイオの消息を追うため、ついでに食料を買いにヒュガルト町へ行ってくれている

ただが、帰ってきたらしい。ウラルとフギンは顔が割れているから念のためしばらくはヒュガルト町に行かず、留守番することにしていた。

「ああ、お帰りなさい。……収穫は？」

シガルは「残念ながら」と首を振った。ナウトはウラルの顔を心配そうに見上げたまま何も言わない。ナウトも急にふさぎこんだウラルとどう接していいかわからないのだろう。

「この奥の部屋は？」

「手前から順、イズンさんとナウトが泊まられている部屋がリゼの部屋、その隣がネザ、イズン、一番奥がジンの部屋だったところですよ」

隠れ家は二軒に分かれている。残るマライ、フギン、サイフォス、マーム、ウラルはもう一軒の方に住んでいた。なつかしさと同時に胸がつまり、ウラルは胸のペンダントをにぎりしめる。

「ひとりひとりのお顔がちょっと思い出せないんですが。僕が急報を伝えるに来たあの場にみなさんおられました？」

「リゼは、あときムールの引き綱をといて連れていった人です。ネザはシガルさんの治療を申し出た猫背の軍医。参謀のイズンはジンの後ろにひかえていたはずですよ」

ウラルはほうきを置き、ペンダントをにぎったまま廊下を歩んだ。そとジンの部屋のドアを押し開ける。

奥の壁には大きく地図が張り出され、その脇に置かれた箱の中にも丸められた地図がたくさん入っていた。壁に貼られたものには書き込みがないのだが、丸められ箱におさめられた地図にはたくさんの書き込みがなされている。戦闘のあった日付、場所、規模などが記録されているのだ。ウラルに字は読めないが、イズンとこの部屋で地図を広げ話しこむジんにウラルは何度か夜食を持っていった。その時にそんな話を少しばかり聞いている。

この大量の地図のおかげで雑然として見えるが、それをのぞけばジンの部屋には物らしいものがほとんど置かれていなかった。旅の

連続だったからあまり多く物を持たないようにしていたのだろう。数着の服や筆記用具、旅に持ちきれない武器防具が少し程度しか残されていない。

「ここで、暮らしておられたんですね」

シガルの声にウルルは振り返った。振り返った拍子にイズンとネザの部屋のドアが目飛びこんでくる。生きているかもしれないイズン、死んだかもしれないネザ。そして、確実にもうこの世にいないジンとリゼ。

「どうかされましたか？」

ウルルはうつむいた。

「シガルさんは、私の気が変になったと思いますか？」

「なぜそんな」

「あの頭を殴られて気を失ったとき、夢を見たんです。そのとき、夢の中にジンが現れて。ダイオとイズンが生きていると言ったんです。たかだか夢なのに気になってしょうがなくて」

「え、アラールさんのことじゃないんですか？」

言うてからシガルはしまったとばかり顔をしかめた。おろおろウルルの顔をのぞきこむ。

「いや、アラールさんのことにせよ何にせよ、別にあなたの気が違っているとは思っていませんよ。ただ、フギンさんが気にしておられたので。でも、ご自身でも気にされているとは。本物の気違いはそんなこと、自覚していないものです。少し、安心しました」

ウルルは泣き出しそうな顔をしていたのだろう。ナウトが心配そうな顔で見上げていた。シガルも不安げに視線をさまよわせ、それからぼんとウルルの肩に手を乗せる。

「ダイオ將軍もイズンさんも、きつと生きておられますとも。アラールさんもそのうち帰ってこられますよ」

「そう、そうですよね」

ウルルは無理に笑ってみせた。

「一刻も早く見つけ出して、ここでみんな暮らせるといいな。ね、

ナウト」

急に話題を振られたナウトはびくつと肩をすくめ、それからおずおずとうなずいた。

「今日は市場で何を買ってきてくれたの？ 晩ごはん、何がいいかな」

ナウトが笑顔を返してくれないのは、きっとウラルの本当の笑顔ではないからだ。作った顔だとこの聡い子は知っている。

「シチューがいい。ウラル姉ちゃんのシチュー」

「シチューね。わかった。さてつと、じゃあ先に掃除を終わらせてしまわないと。それからごはん、作るから」

ウラルは置いてあつたほうきを手に取った。やはり、シガルやナウトには言えない。こんなに胸が騒ぐのに。

道具置き場にほうきを戻す。脳裏にイズンとネザのドアがちらちらしている。ウラルは隠れ家を出、とぼとぼ歩いた。菜園に向かうはずだった足はいつしか目的地を通り過ぎ、どこか別のところへ向かっている。

「ウラル、どこ行くんだよ！」

振り返ると窓から険しい顔のフギンが顔をのぞかせていた。

「ちよつと、散歩」

「散歩つて。森の中へか？」

はつと前を見ればそこから森が始まりかけている。菜園はもうはるか後ろだ。

「もう日が暮れるぞ。散歩なら菜園の周りだけにしとけよ」

「こわーい獣が出てくるんだよ！」

リビングに戻っていたらしいナウトが大真面目な顔でフギンの後ろから顔をのぞかせた。

こわーい獣。森の守護者。ウラルは森を見つめた。振り返ってフギンを見つめる。それをもう一度繰り返し、息を深く吸いこんだ。

「ごめん。今日のごはん、みんなで作って」

「え、なんだつて？」

ウラルは夕暮れの森の中へ駆けこんだ。

「おい、ウラル！ おいつてば！」

フギンの声が背中に届くが振り返らない。このまま東へ、森の奥へ走っていけばきつとどこかでアラーハが飛び出してくるはずだ。あの獣の姿でウラルらの前に現れたのが最後の別れのつもりだったとしても。もう二度と会うまいと思っていたのだとしても。アラーハが、たとえ人の姿になれなかったとしてもアラーハがウラルを森で迷って餓死するまで放っておくはずがない。

下草に足をひつかかれながら駆けに駆ける。この森は不思議だ。奥へ行けば行くほど明るくなっていく。それはこの森に住むイツペルス、大食らいの草食獣が幼木や灌木をみんな食べてしまいなかなか育つ木がないからだ、数少ない育つた木は巨木になり、まるで大神殿の柱のように太くまっすぐ間隔をおいて育つからだ。アラーハに聞いて知っていた。イツペルスは人を嫌うから、人の出入りする森のふちはひよろりとした木がたくさん育ち、うっそうと暗くなる。

ふいに、ぱつとウラルの行方を巨大な枝角がさえぎった。木陰から現れた赤茶の大きな体に木漏れ日がおどっている。どうしたんだと言いたげにその口が開いたが、けれどやはり声は漏れてこない。

「アラーハ、やっと来てくれた……」

アラーハは困ったように鼻を鳴らす。その目が「無茶をするな」と言っていた。

ぐいぐいと鼻先でウラルの肩を押しして隠れ家へ帰るよううながすのかわし、ウラルは大木の根元に腰をおろして両手で顔を覆った。息がひどくあがっている。

「アラーハ、私、気が違っちゃったのかな」

アラーハはしゃがみこんだウラルの目の高さまで首を下げ、耳をくると動かし。何を言っているのかわからないと言っているのか、そんなことはないと言いたいのか。

「アラーハの正体を疑ってるわけじゃないの。フギンが何と言おう

と私はアラー八が変身するところを何度も見てるから。でも、別のことで。私」

そつとうなずいてアラー八は先をうながした。

「夢を見たの。すごく不思議で、嫌なような嬉しいような変な夢」

そこから言おうとして、ウラルはアラー八が最後に別れてから後のことを何も知らないのだと思い出した。

ウラルはエヴァンスの家に復讐戦に入ってから経緯をかいつまんで話した。ダイオが瀕死の重傷をおい、その後行方不明になっていることを話すとアラー八は沈みこんだ顔つきになる。アラー八はそもそもそれを恐れてフギンらを止め、けんかになり、森へ帰ってしまったのだ。ウラルが殴られて気を失った話になればウラルの頭にそつと鼻面をよせ心配げにする。言葉を話せない分、身振りがおおげさになっているのだろう。むしろ言葉が話せたときより雄弁な気がして、それが少しおかしかった。

そして、貴石の棺とジンの夢。

「生きている人の棺はふたが開いていて、死んだ人のは閉まっているの。それでジンがダイオと、イズンと、ネザの棺を指して。ダイオは死にかけてたけれど生きのびた、イズンは生きている、ネザは死んだと、そう言うの。そこで目が覚めて。変よね、以来ずっと気になるの。すごく、何も考えられなくなるくらい」

さつきまで相槌を打つように耳を動かしていたアラー八が急にぴたりと動かなくなった。何か考えこむように目を細めている。

「しかもそれ以来、ひどく胸が騒ぐの。ここに帰ってくる前は、森に帰らなくちゃと思った。アラー八に会って少しおさまったんだけど、それからまたどんどん強くなるの。どこかへ、ううん、北へ行かなきゃならない気がする。そんな気がして。今はダイオを探すことが先決のはずなのに、心配ない、ダイオは生きてるんだから私は行かなきゃならないと」

北へ、という形にアラー八の口が動いた。

「そう、北へ。イズンを探しに、じゃない。……何かを、伝えに」

また急な直感が働き、ウラルはうるたえた。アラーハが大丈夫だ、と言うように首を寄せ、続けて、と言うようにうなずく。ちゃんと聞いているとばかり両方の耳をぴたりとウラルに向けて。

「北に、何かを伝えるため」

ぱつとジンの部屋のドアが脳裏に浮かんだ。部屋の奥に張り出された地図。

「ジンの、遺言」

（たとえ俺たちが全員死んでも、生き残ってこのことを伝えるやつが必要なんだ。伝える人がいなければ、また同じことが繰り返される。俺は、それが怖い）

ウラルは何もしていない。伝えることなど、何も。あの戦場を見たのに。伝えると誓ったのに。ジンはきつと、忘れるなとウラルに伝えるため。ウラルはぎゅつとペンダントをにぎりしめた。

「ゴウランラへ、あの戦場跡へ行かなきゃ……」

アラーハがまじまじとウラルを見つめ、それからゆっくりうなずいた。あの大男のアラーハだとは思えぬほど長い睫毛を伏せ、何か物思いにふけるように息をつく。

アラーハは少なくともフギンのように、ウラルの気が違いかけているとは思っていないらしい。ウラルの言っていること、この不可思議な話を全面的に信じてくれているようだ。それどころか。

「アラーハ、何か知ってるの？」

アラーハが大きくうなずいた。何かを言おうと口を開くが漏れるのはかすかなうなり声ばかり、もどかしそうに前足で地面をかく。結局ウラルの服を軽く噛み、くいくいと北方向へ引っぱった。

「行った方がいいって？」

もう一度アラーハはうなずいた。

「今から？」

今度はツノがウラルに当たらぬよう気をつけながら大きく左右に首を振る。それから地面に身を伏せた。背中に乗れ、と言っているようだ。

ウラルがまたがるとアラーハは森の隠れ家の方へ歩き出した。とりあえず今は帰れ、送ってやるからということらしい。

「言葉が通じないって、不便ね」

まったくだと言わんばかりにツノを大きく揺らし、アラーハはぱつと駆け出した。

いつの間にか嘘のように胸騒ぎが収まっている。声に出して話したせいか、アラーハに信じてもらえたせいか、北へ行くと決めたせいかはわからないけれど。これでよかったのだ、という気持ちに安堵し、ウラルはほほえんだ。

アラーハが何を知っているのかわからないが、少なくとも何かを知っている。アラーハの知っていることなら、頭を殴られどきがおかしくなっってこんな衝動に駆られているわけではないのだ、きっと。

もうあたりは真つ暗だ。フギンらは血相を変えてウラルを探しているに違いない。

「そつだ、フギン」

アラーハがくるりとウラルのほうに耳を向ける。

「フギンが信じてくれるかしら。行かせてくれるかな」

急に不安になり、ウラルはアラーハのたてがみをにぎりしめた。

ジンは夢の中でフギンを守ってほしいと言った。それはすなわち、フギンから離れるなということではないだろうか。けれど素直に事情を話してフギンと一緒に来てくれるとはとても思えない。そもそも信じてくれないだろう。

行くならひとりで行くしかなさそうだ。けれどフギンから離れていいものか。

アラーハの耳がびくつと前を向く。木々の間に揺らめく光。松明のものだ。

「ウラルー！ どこだー！」

フギンの声がかすかに聞こえる。アラーハがびたりと足を止めて振り返り、降りろと言いたげにウラルを見つめた。送ってやれるの

はここまでだ、と。フギンの前に出たくないのだろう。

「フギン！」

アラーハの背を降り声をはりあげる。松明の明かりが大きく揺れた。

「ウラル、ウラルか！ どこだ？」

「こつち！ わかる？」

もう一度声を張り上げると、急速に明かりがこちらへ近づいてくる。フギンのほうへ押しやるようにアラーハが鼻先でウラルの背中をつついた。

「アラーハ、アラーハは一緒に来てくれる？」

大きな枝角が揺れ、アラーハがうなずいたのがわかった。ぱつきびすを返し、また森の中へ消えてゆく。見送るウラルの背を松明の赤い光が照らした。

「あいつのところへ行つてたのか」

松明の光に照らされ顔に長い影を落としたフギンが立っている。その顔に陰しさはない。むしろ悲しげに見えた。相当心配してくれていたのだろう。

「送ってくれたの。心配かけて、ごめん」

「ばかウラル。それならそうと、ひとこと言ってから明るい時間に行ってくれ」

「フギンひとり？ ナウトとシガルは？」

「こんな真つ暗な森に入ったら慣れないやつは迷うだろ。シチュー、作ってくれてるぜ。帰ろう」

「うん。ありがとう」

フギンはあごで前を示した。先に行けというのだろう。ウラルはおとなしく歩き出した。

「ばかウラル。俺のわからない世界へ行かないでくれ。ちゃんとこちにいってくれよ。そうでないと、みんな、悲しむぞ」

松明の光が後ろからぼんやり照らす道、ウラルの行く手はウラル自身の影になって見えづらい。こういう場合は松明を持っているフ

ギンが先に行くべきなのだ。

「フギン。貸して、松明」

場所が変わって、と言おうとしたが寸前で言葉を変えた。フギンはまた怖がっている。せつかく見つけたウラルに後ろを歩かせて、前を見て自分が歩いているうち、いつの間にか消えてしまうのではないか、と。だからウラルがちゃんと前を歩いているところが見たのだ。

素直に明かりを渡してくれたフギンの前に立ち、隠れ家へ向かって歩いていく。今回これだけ心配されたのだ、もしウラルが突然いなくなってしまうたら。しかもウラルの部屋から旅装が消えていたら、フギンはどうなってしまうのだろう。ちゃんと話していくべきだと思っても、「俺のわからない世界へ行かないでくれ」と言われた後では。しかも理由がわけのわからない直感だ。いくらアラーハが行けと背中を押してくれたとはいえ。

「ウラル、あいつが本気でアラーハだって信じてるのか？」

「信じるものにも」

アラーハが目の前で変身するところを何度も見ているから、と続けようとしてウラルは思いとどまった。そう答えれば「じゃあなんで今は変身できないんだ」ということになってしまふ。守護者のことを説明しても、今変身できないのだからフギンはきくと信じてくれない。

「私の気が変になったと思ってる？」

「ちよつとな。悪いけど」

ウラルはうつむいた。どうすれば信じてもらえるだろうか。そうだ、フギンにアラーハと会ってもらうのはどうだろう。アラーハは人の姿になれず、言葉も話せないが、ウラルの言葉はちゃんとわかっている。相槌も打つし、身振りでなんとか意思を伝えようとしてくれる。そんな野生のイッペルスがどこにいるのだ。

「フギン、私の話だけじゃ信じてもらえなくても無理ないと思う。だから今度、アラーハが来たときに会ってみてくれない？」

「やだよ」

フギンの答えはあっさりしていた。

「そんなわけのわからん獣と会えるかよ。第一、向こうも俺を避けてるみたいじゃないか」

ウラルは二の句が告げられない。たしかにアラールハもフギンを避けている。

フギンはため息をつき、黙りこんでしまった。

間章 2「心が追いつくまで」 上

ウラルはそれから二、三日家の中でおとなしくしていた。できるだけ家から出ずにリビングでつくろい物や掃除に精を出し、ハーブ園や菜園の手入れのときはフギンやナウトを誘っている手伝わしてもらった。さすがに森の一件でウラルも反省していたのだ。

ウラルは今まで縫っていたシャツをひろげ、できればを確かめた。「はい、おまちどうさま」

ウラルの隣に座っていたナウトがはにかみながらシャツを受け取る。もと物乞いのナウトが持っていた服は仕立て直しても雑巾にしかならないようなボロボロばかり、しかも背が伸び盛りですぐサイズがあわなくなる。そんなわけでフギンやシガルからお下がりサイズのシャツをもらい、その生地でウラルが新しくシャツを作ってやっていたのだ。

「着てみて。きつくない？」

ナウトはシャツをかぶり、ウラルに向かってこくこくうなずく。そんなナウトの頭の上にぽんと今回のシャツの持ち主、シガルが手を置いた。

「よかつたな、ナウト」

ナウトはシガルにもこくこくうなずいてみせる。

「すみませんね、ウラルさん。助かります」

「お財布の中身も助かるし、私もいい気晴らしになるから」

ウラルはうーんと大きく伸びをした。朝から座りっぱなしだったお陰で少しばかり背中が痛い。

「そういえばシガル、フギンは？ 今日朝から見ないけど」

「ああ、厩舎にいますよ」

「馬は一頭もいないの？」

「体を鍛えておられるみたいです。ダイオ将軍を助け出すために必要なことだから、と」

利き腕を失った体をがむしゃらに鍛えるフギンの姿が目には浮かび、ウラルはうつむいた。ダイオの行方はまだわからない。けれど生きているならエヴァンスにあのまま囚われているだろうし、囚われているなら助け出さなければ。あのベンベル人騎士エヴァンスの手をかいくぐり、おそらくは傷で動きのとれないダイオをかばいながら逃げてこなければならぬ。それがフギンとシガルの二人でできるだろうか。

「シガルも騎士だったのよね。ダイオが生きていたら、フギンと二人で助け出せる？」

「たしかに騎士でしたが、伝令です。空からの投げ槍の腕は自慢できますが、地上で戦うのには慣れていません。しかも相手が相手でしょう、まともに戦うとなればまず勝ち目がない。十分に策を練らなければなりませんね」

それなのにフギンは体を鍛えている。無茶をする気だ。下手をすればエヴァンスとの一騎打ちを覚悟しているのかもしれない。

ウラルが今、ここを離れたら。ここを離れている間にダイオの行方がわかったら、フギンは止めるウラルがいないのをこれ幸いとして助けに行くだろう。そしてエヴァンスがちらとでも視界に入ったら、シガルが止めたとしてもひとりで突っ込んでいくに違いない。迷うことなく真っ向から。

人の姿のアラーハがここにいたら、と切実に思った。フギンを逃がすことを第一に考えられ、しかも冷静沈着で腕の立つ大男。そのアラーハは、今ひとりで、いや一頭きりで森の中にいる。フギンに拒絶され、また自分からも拒絶して……。

そうだ、とウラルはシガルを見つめた。フギンがアラーハに会ってくれないなら、シガルとナウトはどうだろう。そういえばシガルは森の守護者を気にするようなことを言っていた。シガルなら、実際にアラーハに会いウラルの説明を聞けばわかってくれるのではなからうか。少なくともフギンよりは見込みがある。

「ね、森に行かない？ この時期にしか採れない薬草があるから採

りに行きたいの。私一人だったらフギンになんて言われるかわからないから。三人ならいいでしょう?」

「でも」

シガルはちらりと窓から厩舎の方を見やる。ウラルは苦笑した。そういえばシガルは今日、朝からナウトと一緒にこのリビングにいる。もしかやフギンに監視役を頼まれたのだろうか。

「前みたいにいきなり走り出したりはしないから。この家の近くだけ。今ならアケビも採れるわ。シャツ縫ってばかりだと背中が痛くなっちゃって」

ウラルは立ち上がって薬草取り用のカゴを手を取った。中に袋やハサミ、手袋も入っている。

「フギンにもちゃんと言っていくから。ね?」

シガルはまいったなとばかり肩をすくめた。

「わかりました、行きましようか。ナウト、アケビだってさ」

「あけび?」

「そう、アケビ。紫の実で、熟れるとぱっくり裂ける。白い実が中から覗いてね、歯をむき出して笑ってるみたいに見える。甘くておいしいのよ」

町育ちのナウトはどうやらアケビを見たことがないらしい。大きな目をくるくる回して、どんな姿の果物なのか想像をめぐらせているようだ。シガルがほえんでその頭をなでた。その仕草は「兄ちゃん」というより「お父さん」だ。

隠れ家を出て厩舎へ歩いていくと、荒い息をつきながら支柱を相手に木刀を構えるフギンがいた。上半身裸だ。もうかなり慣れたとはいえ、こう見せつけられてはそこにあるべき右腕が肩口からないのにぎよっとする。

「どこか行くのか?」

フギンが木刀を下ろし、ウラルを見やった。

「三人で森に行ってくる。あの私がよく咳止めや熱さましの薬草を取りに行く草地、わかるでしょう? そろそろ行かなきゃだめにな

「つちやうから」

「わかった」

意外とすんなり許可が出た。木刀を受け取り、かわりにすぐ近くにあったタオルを渡してやる。フギンはそれで汗をぬぐい、右肩を隠すようにタオルをひっかけた。

「シガル、夕方から槍の相手してくれ。支柱が相手じゃ練習にならねえ」

ずっとシガルを見つめたフギンの目。夕方には戻れ、ウラルを頼むぞ。シガルは無言でうなずいた。

「じゃあ、行ってくるね」

「遠くへ行くんじゃないぞ」

「わかつてる」

シガルとナウトをうながしウラルはフギンに背を向ける。フギンはタオルを肩に引っかけたまま、じっとウラルを見つめていた。

再び支柱の木と木刀がぶつかりあう音が聞こえ始めたのは、ウラルらが森に入りフギンの位置から姿がまったく見えなくなってからだった。それまでずっと、立ちつくしたままウラルらを見送ってくれているようだ。

ウラルは森の中で上を見あげた。

「ナウト、あれがアケビよ」

高いところに巻きついたアケビのツルを指差す。ナウトが興味津津で上を見上げ、ぎよっと身をすくめた。たしかに初めてだと鈴なりのアケビは気味悪く見えるかもしれない。にたりと笑う紫色の何かに集団で見つめられているように見えるから。

「こりやすごいな。こんなにたくさん」

シガルが身軽に木へ登っていく。投げますよと一言、アケビが二つ落ちてきた。

「ほら、食べてみて。種が多いからこうして出すのよ」

受け取った実を口に含み、苦味のある黒い種を口の中でこしとって手のひらに出す。ナウトは気味悪そうにウラルの手の上にある皮

を見つめていたが、樹上でシガルもおいしそうに食べているところを見、えいやつとかぶりついた。とろりと甘いのにびっくりしたのだろう。目がまん丸になる。

「おいしいか？」

樹上から降ってきた声にナウトはこくこくうなずいた。

「ナウト、ここまで登っておいで」

ナウトはうなずき、ひよいと木に足をかけた。さすがは男の子、物怖じもせずするするシガルのところへたどりつくと、小動物を思わせるしぐさで手を伸ばし、自分でアケビをもいで食べ始める。よほど気に入ったのだろう。ぼろぼろ降ってくるアケビの種に苦笑しつつウラルは少し木から離れた。

「シガル、あの草地にいるね。その木から見えないところには行かないから」

「あ、待つてください。すぐに行きます」

シガルがナイフを取り出し、アケビが六つも鈴なりになったツルを切り取る。ナイフをしまい、ナウトを連れてすぐさま降りてきた。「ゆっくりしていいのに」

「はぐれるわけにいきませんからね」

真面目顔のシガルにウラルはため息をついた。

草地へ歩いていき、薬草摘みの道具を広げる。ウラルはじめ村で育った娘はある程度、薬草の知識を持っているのが普通だ。母親や姉、叔母らとリンゴや家畜の世話をしながらその根元足元にはえる草を摘み、役に立つ草の扱い方を学んでいく。

けれどウラルはその域を超え、薬草土に匹敵する知識を持っていた。去年一年でアラーハから教わったのだ。ジンらから預かった金を使ったがらない、けれど収入のないウラルに、これこれの草をこうして売ればいいと旅の間に教えてくれていたのだ。

シガルとナウトに見分け方を教え、薬草摘みを手伝ってもらおう。けれどナウトはすぐに飽きてしまったらしい。木立の中にアケビを見つけ、すつとんでいってしまった。

「ナウトを追いかけていいの？」

「寂しがりですからね。僕らが見えないところまでは行きませんよ、あの子は」

言いつつその手は止まり、目は心配げにナウトの姿を追っている。ウラルも手を休め、集めた草に別種のものがまざっていないか検分した。

「シガル、前から聞こうと思ってたんだけどね。森の守護者のこと、いるって信じる？」

「ええ。ウラルさんも信じてらっしゃるようですね」

「会ったことがあるの」

「え、ウラルさんも？」

予想外の答えにウラルは目を丸くした。シガルはしまったと言いたげに顔を歪める。

「も？」

「ちょっと言い間違っただけですよ。気にしないでください」

いや、そうは聞こえなかった。

「よかつたら話して。私は疑ったりしないから」

押してみると、シガルはそっぽを向いてしまう。黙ってしばらく待ってみると、そうですね、ウラルさんならとしぶしぶ再び口を開いてくれた。

「僕は海の守護者に会ったことがあるんです」

「海の？」

アラールは森の守護者、地神に仕える獣だ。ほかにウラルはおとぎ話としてしか知らないが、崖の守護者、山の守護者、砂丘の守護者といろいろいるらしい。同じように海や川などの水辺にも魚や海鳥の守護者がいるといわれ、こちらは水神に仕えている。

「こつぴどい嵐の日、飛ばなきゃならないことがあって。軍船から伝書鳩が命からがら到着しましてね。ひどい伝染性の病気がはやりだした、けれど一刻も早く薬が必要なこの時に遭難してしまった。

このままでは全員が死んでしまうと」

「伝令つてそんなことまでするの？」

ああ、とシガルはほえんだ。

「言い忘れましたね。僕は海軍出身なんです。けれど、ルダ才要塞が三年前に襲われた際、ムール伝令が至急国境に必要なということになりました。フェイス將軍のもとへ異属になつたんですよ」

三年前ということは。あのジンの死んだ戦が二年半前、その直前老將軍カフスにウラルの家族の消息を聞いた際、「半年前の襲撃で亡くなった」と言われた。まさしくその襲撃ではなかるうか。父や兄、婚約者の顔が目に浮かび、ジンやイズン、リゼ、ネザらの顔も続いて浮かんで、ウラルは知らず知らずのうちに唇を噛み締めていた。

ぼんと肩に手が置かれ、ウラルは我に返った。

「大丈夫ですか、ご気分が？」

よほど暗い顔つきをしていたのだろう。シガルが心配そうに顔をのぞきこんでいた。

「心配しないで、あの戦のことを思い出しただけ。続けて」

では、と申し訳なさそうにシガルはうなずく。

「話を戻しますね。誰もがムールを飛ばすのに反対しました。どんな海鳥だつてあんなひどい乱流と豪雨と雷の中、飛ばやしないと。けれど誰かが助けに行かなきゃならない状況で……。結局、僕が行きました。けれど案の定、乱流に翼をとられ高波に足をとられ、ついにムールの顔の真横に雷が落ちて目がくらみ、墜落しましてね。気がついたらムールともども海の中、けれどなぜかすぐに浮くんです。というより何かに持ち上げられている感じで」

そんなひどい天気だったのか、と背筋が寒くなった。よくそれで無理にでも行こうという気になつたものだ。

「はじめはムールがなんとか泳ごうとしているんだと思いました。けれど違った。ムールは雷のせいで気を失っていたんです。ぐつたり目を閉じてね、そのムールの頭が海中に沈まないよう、何かからしつかり支えていたんですよ。よくよく見れば頭だけじゃない、

ムールの全身をがっしり何かを支えている」

シガルは右手を広げ、それを下から左手でぐっと支えてみせた。「ぼかんとしているよね、声が聞こえたんです。『こんな大嵐の日になぜこんな無茶をした』と。『あなたは誰ですか。もしかや水神さまでしょうか?』と尋ねれば、『わたしは水神に仕えてこのあたりの海をおさめるウミガメ守護者で、今このムールの下にいる』と答えが返ってきたんですよ」

シガルは声をひそめ、顔を伏せる。水神に感謝し祈る表情にも、ウラルが否定するのをおそれる表情にも見えた。

「僕は必死で仲間の船が遭難したことを話しました。話を聞くとウミガメは、そのまま僕とムールを乗せ泳ぎだし、遭難した軍船のところまで連れていってくれたんです。とんでもない高波の中をですよ。そして軍船が沈まないよう嵐がおさまるまでそばにいてくれ、高波に翻弄され誰かが海に落ちると拾いあげて助けてくれました。そして、嵐がおさまると舵が生きていることを確かめ、ゆっくり去っていったんです。僕らは大声で感謝の言葉を叫び、水神の賛歌を口にしながら港へ戻ったんですよ。もつとも、その場にいなかった誰にこのことを話しても幻覚を見たことにされてしまいましたかね」

たしかにウラルもアラール八のことを話すたびフギンに嫌な顔をされ、気違い扱いされて。たまったものではない。けれどシガルもそんな経験があるならウラルをかばってくれてもよかつたらうに。そしてアラール八のことを信じてくれても。

「だから森の守護者がいてもおかしくないと思っています。けれど人に姿を変え、というくだりはちよつとさすがに。ウミガメ守護者は最後まで人の姿になりませんでしたし。僕がアラール八さんに会った限り、彼はたしかに変わっていました。れっきとした人間でしたよ。そんな、獣が化けたようには見えなかった。別に尻尾が出ているわけでもありませんでしたし」

ウラルは思わず苦笑した。たしかに尻尾がひょっこり出ているわけではなかったけれど。

「毛皮と蹄、それにツノは隠せなかったみたいだけど。目、横に長い瞳孔も」

「え」

「気づかなかったのね。アラーハも隠してたし仕方ないけど」

「じよ、冗談でしょう?」

シガルの声がつわずつている。

「あの毛皮、自前だったのよ。だからあんな暑い盛りでも脱げなかったの。汗だくになってたでしょう」

「ええ、たしかに汗だくでしたが。え、ウラルさん、冗談はよしてくださいよ」

やっぱり簡単には信じてくれないか、とウラルはため息をついた。その海の守護者がシガルの前で人の姿になっていてくれたらよかったのに。

「う、ウラル姉ちゃんっ!」

ナウトの悲鳴じみた声にあわてて振り返る。転げるようにウラルとシガルのほうへ駆けてくるナウト、その後ろに一頭の獣が立っていた。

間章 2「心が追いつくまで」 下

「アラーハ。ちょうどよかった、今あなたのこと話してたの」

ため息か、それとも苦笑まじりに肩をすくめてみたつもりだったのか、大きな息をひとつつく。それから首を伸ばしてツルを噛みちぎり、アケビをくわえてウラルらのところへ歩いてきた。

「ナウト。怖くない、怖くない。高いところのアケビを取ってくれ
るんだって」

アラーハは首をさげ、アケビをくわえた鼻先でナウトの右手をつつく。しばらくぼかんとしていたナウトが手に押し付けられるアケビをにぎると、アラーハは満足そうに口元をゆるめた。

「ね、子ども好きなところも変わってないでしょう？ アラーハは森の守護者だった。つい何ヶ月か前まで。でも、若い別のイツペルスに決闘を申しこまれて、負けてしまって。守護者の座を明け渡し
てしまったみたいなの。人の姿になれなくなってしまった」

アラーハがくりりとウラルとシガルの方を向いた。シガルは肩をこわばらせ、しみじみとアラーハの毛皮や蹄を見つめている。あの大男の姿のアラーハと重ね合わせているらしい。

「アラーハさん、ですか？」

アラーハがゆっくりと枝角を振った。「そうだ」。

「前にナウトをうちまで送ってきてくれた、あの大男の？」

枝角が縦に揺れる。シガルはおずおずとその鼻先に手を伸ばしかけ、けれど触れずに手を引いた。ウラルを振り返る。

「えー、ウラルさん、一応確認しますが人の声に反応してうなずくように調教してるわけじゃないですよね？」

ウラルは思わず苦笑した。

「じゃあちゃんと人の言葉がわかっているか、確かめるようなことを言ってみたら？ そうね、うーん。アラーハ、ナウトを背中に乗せてあのアケビを採ってこれる？ あの高いところの。こんなサー

カスの芸みたいに言ってごめん」

アラールはわかったと言いたげに耳を動かし、その場に伏せた。ナウトの肩を鼻先で軽くつつき、首をぐいと曲げて自分の背中を指す。

「ナウト、おいで。乗せてくれるって」

首をぶんぶん振ってシガルの後ろに隠れてしまったナウトを見、アラールは目を細め口元を緩めた。ほほえんでいるようだ。

「めったにないわよ、イッペルスに乗せてもらえるなんて」

ナウトはシガルの後ろに隠れてぶんぶん首を振る。アラールが困ったように鼻を鳴らし、どうするとはかりにウラルとシガルを見た。「シガル、どうする？ よかったらアラールしか知らないようなことを聞いて。ああ、でも知り合ってからまだ日が浅いのよね。そんな秘密になるようなこと、まだない？」

「いや、もう十分です」

シガルは額に手を当て、顔をしかめてアラールを見つめている。

「でも信じられない」

「シガル」

「とりあえず彼が人の言葉を理解しているのはわかりました。ウラルさんがこんな自信を持って言うんだ、きっとアラールさんしか知らないようなことを僕が言っても彼は答えてくれるんでしょう。疑う理由はないのかもしれない」

「じゃあどうすれば信じてもらえる？」と言いかけたウラルを、シガルは軽く手をあげて制した。

「でも、心が追いついてこないんです。わかってくれますか？」

ウラルは二の句が告げられなくなった。

アラールがシガルの隣で大きく息をつき、わかるよ、と言いたげに大きくうなずいてみせる。それからまっすぐにシガルの顔を見つめた。やさしい大きな瞳で、ありがとう、と言いたげに。

シガルは申し訳なさそうにほほえんだ。

「少し、時間をください。心が追いついてくるまで」

たしかにこんな非現実的な話を急に信じると押しつけるのは酷かもしれない。

「十分だ、ありがとう、ってアラーハが話せたら言うと思う。私からもありがとう、シガル。フギンもそう言ってくれればいいんだけど」

フギンもいつか「心が追いついたら」、アラーハのことを信じられるようになるだろうか。

ナウトがそろりそろりとアラーハに近づき、ちよんと鼻先に触れて手を引いた。ウラルやシガルが相手してくれないものだから飽きたのか、アラーハが静かに伏せているだけなので慣れてきたのか。アラーハは動かさずナウトを横目で見ている。動いたらナウトが怯えるとわかっているのだ。

ウラルもアラーハに近づき、そのたてがみを指ですいた。シガルも近づいてくる。

「ツノ、触ってもいいですか？」

アラーハがうなずいた。シガルがツノをなでても動かずにいる。

けれどシガルの手がツノを離れ、ひたいをなでると嫌そうに鼻を鳴らした。

「あ、嫌でしたか？ 申し訳ない」

大男のアラーハがシガルに頭をなでられている図を想像し、ウラルはくすりと笑った。シガルとナウトがウラルを見つめる。それで、今のがずいぶん久しぶりの笑みだったことに気がついた。

きよとんとウラルを見つめているナウトのわきを抱え、よいしょと力をこめてアラーハの背へ乗せた。

「たてがみをしっかりとつかんで」

アラーハがひよいと立ち上がると、ナウトは「あわわわ」と声をあげアラーハの首にしがみついた。しがみつかれた方はまんざらでもないようだ。目元をなごませ、ゆっくりウラルとシガルの周りを歩き回ってみせる。

ウラルはほほえみ、それからシガルに向き直った。

「シガル、もうひとつ話さなきゃならない」

「なんですかとばかり見返すシガル。」

「旅に出ようと思うの。今この時期、どうしてって思うかもしれないけど」

「それはまた。どこへ行かれるんですか？」

「北へ。ジンやフェイス將軍の死んだ、あの戦場へ行きたいの。前にちらつと言ったでしょう、不思議な夢を見たって。たかだか夢なのに気になってしょうがないんだって。あの場所を見たら気が済むと思う、でも行かなきゃ気が済みそうにない。エヴァンスもダイオも見つからない今、ここを私が離れるのはまずいと思う。でも」

シガルは黙ってウラルを見つめている。ウラルはうつむき、早口に続けた。

「フギンには何も言わずに行こうと思うの。私自身でさえ何がなんだかわからない。それなのにフギンを説得するなんて、私には無理だから。私が行ってから、フギンに伝えて。こんな役を押しつけてごめん」

シガルはしばらくの間、黙ったままアラーハとナウトを見つめていた。少し慣れたのだろう、ナウトはもうたてがみにしがみついているはなかったが、体をがちがちにこわばらせつつむいている。

「それでいいんですね？」

「やがて返ってきた言葉にウラルはうなずいた。」

「いつ行かれるんですか？ おひとりですか？」

「明日一日で準備して、明後日。明後日の夜明け前、みんなが寝ているうちに出るつもり。私は旅慣れたるし、アラーハも来てくれるから大丈夫。アラーハ、家の近くで待っていてくれる？」

のんびり歩きながらも聞き耳を立てていたらしい。アラーハが大きく縦に枝角を振った。

「ゴウランラ とルダ才要塞を見て、すぐに帰ってくる。帰ってこれると思う……。でも途中で寄り道するかもしれないから、遅くなくても心配しないで」

「わかりました。水神のご加護を」

水神のご加護を、つまり旅の安全を祈る。すんなり許可をもらえ、ウラルはむしろ拍子抜けした気持ちでシガルの顔を見つめた。

「いいの？ そんなにすんなり」

「それでああなたの胸のつかえが取れるなら」

シガルはほほえんでいる。本当に望みどおりにしていいのだ、とウラルも今度こそほっとして笑顔を返した。

「やっと笑顔になった。あの男がああなたを探しているなら、あなたはここを離れて遠くへ行っていたほうが安全かもしれませぬ。行っておいでなさい、僕は止めませぬ」

「ありがとう。フギンを、お願い」

シガルは穏やかにほほえんだまま、うなずいてくれた。

*

ウラルは薄霧の中、外へ出た。草を食んでいたアラーハが顔をあげて歩み寄ってくる。その蹄が踏みしだくナタ草は山吹色、オレンジから黄色に変わる途中の色だ。この色は夜明けと同時に鮮やかな黄色に変わる。

「行きましよう。ジンのところへ」

ああ、とアラーハがため息に似た声を出した。持ってやるうか、と言いたげにウラルの荷物を鼻先でつつく。ウラルは首を横に振った。アラーハをそんな駄馬のように使いたくはない。

「ウラル、行くのか」

はっとウラルは顔を上げた。アラーハも顔を跳ねあげる。何も知らずに眠っているはずのフギンが、旅装を整えジンの黒マントをまとい、ウラルが今しがた出てきたばかりの隠れ家のドア前に立っていた。

「フギン、どうして」

「シガルから聞いた。やつもさすがに黙っちゃいられなかつたんだ

ろう。昨日の夜中に話してくれた。どうしてもってなら、俺も行く強い声だ。決して引かないぞとばかりの。

ウラルは奥歯を噛み締めた。この台詞は、この口調は、どこかで聞いたことがある。ここで、この隠れ家の前の今まさにウラルが立っているところで、二年前に。

（行くのか、ジン）

（アラーハ。なぜ、来た）

（俺も一緒に行こう）

ジンがこの家を最後に見つめたそのときに。

「この家は、どうするの」

ウラルはそつと言葉を押し出す。森は、どうする気だ あのと

きのジンの言葉を繰り返すように。

「シガルとナウトに任せてきた」

「それで大丈夫なの？」

「べつに無理なわけじゃないだろ。女の子ひとりで行かせられるか」その口調が帯びていた苛烈なものがやわらぎ、少しだけばつが悪そうになって。俺の手の届かないところへウラルが行くのなら、ついていこうと、言外にそう言ってくれた気がした。

ウラルはほほえんだ。泣き笑いに近い顔になったと思うけれど。

「ありがとう。ごめんね」

「いまさら謝るなよ。……行こう」

間章 2「心が追いつくまで」 下（後書き）

第一部 第二部間章完 第三部へつづく

序章 「あの場所へ」

ウラルは墓の前にいた。

ウラルとアラール八の築いたジンの墓、穴を掘ったとき地中から出てきた石を乗せただけの簡単な墓が、大きく立派なものに変わっている。馬上のフギンが手を上にあげたほどの高さにまで石を積み上げ築かれた塔。石の隙間には剣や蹄鉄らしきものもうずめられている。鎮魂のケルン。

「エルディタラ だ」

フギンが馬上からいとおしげに蹄鉄をなでた。

「エルディタラ は全員が騎兵だからな。速すぎたもんだから命令が追いつけなくて、連絡が遅れてさ。結局最後まで援護に来れなかったんだ。全部が終わってから来て、これを造ってくれたんだな」
ウラルは飛び出た剣の柄や蹄鉄にぶつかからないよう気をつけながら全身でケルンを抱きしめた。粘土か何かで固められているらしく、ケルンはウラルが体重を預けてもびくともしない。

「ジン」

呼ばわつたとたん、涙がこぼれた。

「サイフォス、リゼ……」

ここで死んでいった人をまとめて抱きしめるつもりで、力いっぱいケルンを抱く。そんなウラルを黙ってみていたアラール八が、そつと足元のナタ草をかじりとり、ケルンの前へ置いた。あの戦で踏み荒らされ、泥地になったこの場所。ナタ草の一本さえはえていなかったこの場所は、今は草原になっている。ナタ草もタンポポと背比べをするかのように茎を高く伸ばし、咲きそろっていた。

ウラルは涙をこぼしながらナタ草とタンポポ、それに咲きそろっていた小さな花をつみ、花束にして、アラール八が置いたナタ草の上へ置く。あのときそなえられなかった花を。

血の染みひとつ残らない大地に、ウラルの涙の染みがひとつ、ふ

たつと落ちてゆく。思えば、こうしてぼろぼろ涙を流して泣くのはジンの死後初めてかもしれない。なかつた。

フギンとアラーハは無言だ。といつてもアラーハは話せないから、鼻ひとつ鳴らさない、という表現になるだろうか。フギンも貸し馬屋で借りた馬から下りもせず、じつとケルンを見つめている。ただウラルの嗚咽と風のうなる音だけが響いていた。ウラルが落ち着き、泣きやむまで、随分長いことそのまま立ちつくしていた。

それぞれに深い物思いの中に沈んでいた三人を引き戻したのは、アラーハがぶるりと鼻を鳴らす音だった。

「どうかした、アラーハ？」

アラーハが顔を上げ、一点を見すえる。断崖絶壁の岩壁の上にあるゴウランラ の要塞に向けて。シユウツと鋭く振るわれる尾、びつたりと後ろに伏せられた耳、むき出された歯、三角につりあがる目。喉からは草食獣とはとても思えぬうなり声が漏れている。

その強烈な怒気を向ける先は。

「な、なぜここに……」

ウラルは思わずうめいた。ひるがえる金の髪、紺碧の衣の裾。ゴウランラにまたがった大柄な男の姿が崖の上にある。ゴウランラの砦跡へと向かう崖の道だ。その背後には馬にまたがった栗色の髪の毛の男。

「金髪野郎！」

フギンが左手でサーベルを抜き放った。

ウラルの脳裏で警鐘が鳴り始める。今、あの貴石の墓地、ファイヤオパール の棺の中にフギンの姿がぼんやり浮かんでいないだろうか。まずい。ここで戦わせてはいけない。

エヴァンスがゴウランの首に鞭をくれた。そのまま垂直に近い崖を駆け下ってくる。おそろしい速度だ。馬にまたがったシャルトルのほうは若干遠回りの崖の道、馬用に整備された道を駆け抜ける。と、そのシャルトルの手元が鋭くきらめいた。

矢。

金属と非金属の触れ合う高い音を響かせ、アラール八が枝角で矢をからめとる。ゴーランで駆け下ってくるエヴァンスも弓を構えていた。絶対零度の碧眼に殺意がゆらめく。

フギンを狙って放たれた矢をアラール八がツノではじき、逃げるぞとばかり地に伏せた。今すぐ逃げなければ。けれどウラルは応じようとして、思いとどまった。

「フギン！ あなたの鞍に乗せて」

このままフギンをひとりで行かせては、いつ馬首を転換してエヴァンスに向かつていくかわかったものではない。アラール八もウラルの意を察してくれたのだろう。再び立ち上がって頭を下げ、枝角を前面に振りたてて身構えた。ウラルらを守って立ちふさがり、岩壁の上から放たれる矢をはじきとばす。

「何言つてんだ、馬がバテるだろ。あのイッペルスに乗せてもらえ」「私、鞍がないと全力疾走できない」

杭にならなくては。ウラルを守らせることでフギンを押さえ込む。「ここは俺が止める。とりあえずお前が逃げ切れればいい」

「相手は二人いるのよ。ひとりは私を追ってくる。私とも殺される気なの？ ここはアラール八が押さえってくれるから、乗せて！」
舌打ちとともに馬上から差し伸べられた手を取り、ウラルはフギンの鞍に飛び乗った。

エヴァンスはもう岩壁をくだりきり、弓を剣に持ち替えている。鋭く湾曲したシャムシール。アラール八は枝角をまっすぐエヴァンスに向け、ウラルとフギンの前に立ちふさがって身構えている。アラール八にとってもエヴァンスはジンの仇だ。アラール八までフギンのような暴拳に出るとは思わないが、我を失い度を越してもおかしくない。

「アラール八、無茶しないで！ すぐに追ってきて！」

アラール八がわかつているとばかり低く鼻を鳴らし、とうとうここまで駆けてきたエヴァンスの刃をツノでがっきと受け止める。その光景を目の端にとらえながらフギンは馬を全力疾走にうつらせ、戦

場跡をつつきり森へ駆けこんだ。

第一章 1「西へ行く」 上

「なんで、なんでやつがここに……」

森へ分け入ったはいいが、方向を失わないためあまり深部へ入り込めない。そのうえ二人乗りで駆けては馬の踏みにじった跡を地面にしつかりとつけてしまう。これでは追ってこいと言っているようなものだ。

だからフギンはしきりに木々の形を目で確認し、太陽の位置で方向を確かめ、馬をゆっくり歩かせて獣道へ誘導した。獣道に出てからは手綱を伸ばし、自由に草を食べさせる。あの戦場で主人を失い今はこの森で生きている馬がいたように見せかけ、蹄鉄つきの足跡をごまかすのだ。本格的にこのあたりを探されたときに備え、人間の足跡はつけないほうがいい。だからウラルとフギンはまだ鞍にまたがったままだった。

フギンの胸にもたれながら、ウラルは自分の村が、そして続いて隣村が襲われた時のことを思い出していた。あときもアラーハに足止め役を頼み、フギンにこうして鞍に乗せてもらって逃げた。アラーハは大丈夫だろうか。あときは平然と追いついてきたが……。「ウラル、なんであの金髪野郎がここ知ってたと思う」

フギンの声が低い。ただ声が遠くまで響くのをおそれているのだろうが、すごみを帯びて聞こえた。

「わからない。見当がつかない」

「でも明らかに俺たちを探してたろ。どこではれたんだ」

ウラルは首をひねった。本当にまったく見当がつかない。

「仮説一。ここまでの道中どこかで見つかって、つけられていた」

ウラルはフギンを振り返る。フギンは底光りのする目をしていた。

「道中ってどこ？ ヒュガルト町から？」

「ヒュガルト町からって線が一番濃いだろうけどな。でもそれじゃあ話を通らないか。ここまでヒュガルト町から二日もかかる。二日

とも野宿だったわけだし、あれだけ真つ向から襲ってきたんだ、ヒュガルト町からつけてたならもつと早く、昨日か一昨日かの寝こみを襲ってるに違いないよな」

うなずき、仮説二、とウラルは続けた。

「ダイオが何かをエヴァンスに言った。この手がかりになるようなことを」

「それはないだろ、ここへ来たのは単なるお前の気まぐれだ。ダイオが俺たちへの搜索を攪乱するためにデマを言ったのに、たまたまお前の気まぐれで俺たちがここへ来て出くわしちまった、つてのは常識的に考えてありえないだろ？ お前が何か、やつに漏らしてたならともかく」

じろりとうなじのあたりを見つめられる。ウラルは首を振って否定した。

「私がここへ来たいと思ったのは、エヴァンスに頭を殴られて気を失って、変な夢を見たからよ。あの襲撃以来エヴァンスには会っていないし、ここのことを漏らす暇なんてなかった」

「あの屋敷で働いてたときはどうなんだよ」

「地下室に軟禁されたとき、ちらつとルダオ要塞の話をしたかな。それにダイオの顔を見てエヴァンスもあのときの戦いを思い出したみたい。でも、それだけ。それだけでエヴァンスがわざわざ片道三日かけてここへ来る理由になる？ しかもルダオ要塞じゃなく、ゴウランラ に？」

「だよな。仮説三は？ 何か思いつくか？」

思いつかない、とウラルは首を振った。

「確認のためにもう一度、聞いとく。ウラル、お前がここに来たくなつたのは、純粹に気まぐれだな？」

「疑ってるの？ 私のことを？」

「疑いたかないよ、俺も」

フギンはばつが悪そうにそっぽを向く。フギンが疑うのは当然、けれど本当にウラルは何もエヴァンスに言っていないのだ。

「違うんなら、やっぱり仮説二だな。ダイオがデマを言った、でもたまたま俺たちがここに来ちゃった」

「ものすごい確率になるけどね」

「ああ」

ウラルはフギンから顔をそむけ、考えこんだ。その「ものすごい確率」を下げるためには何が考えられるだろう。

そもそもこの場所に来たくなつたのが純粹な気まぐれかといわれると、ウラルは否定せざるを得ない。逃げることはできないほど強烈な、すさまじく強烈な直感だった。あの直感がエヴァンスのせいだとしたら。なにか暗示でもかけられていたとしたらどうだろう。ベンベル人はどんな技術や薬品を持っているか、わかったものではないのだ。

いや、でもありえない、とウラルは首を振った。もしエヴァンスが暗示をかけてウラルをおびきよせるのなら、エヴァンスの屋敷か、あるいはヒュガルト町のどこか人目につかないところを選ぶはずだ。なにもこんな遠くへ呼び出すことはない。

ウラルは再び顔をあげ、同じく考えにふけていたフギンに笑いかけた。

「とにかく、フギンがいてくれてよかった。私一人だったらどうなつてたか。はやく戻ってシガルに伝えなきゃ。エヴァンスはここで見つかったって」

「いや、今は帰らない」

予想外の答えにウラルは驚きフギンの目をまじまじ見つめた。

「チャンスだ。あの金髪野郎は俺たちを追ってる、屋敷にはいない。もし俺たちがあのクソ野郎をひきつけながらシガルに連絡を送れたらどうだ？ 　　からあきの屋敷を襲ってダイオを助け出せる。仮説二で合ってるなら、ダイオは当然生きてるはずだよな」

「でも、シガルに連絡ってどうやって？ それにまだきつと門番たちがいる。シガルひとりじゃ」

「あいつは騎士だ、当然字も読めるだろ。手紙を送ればいい。手紙

ついでに援軍も送るさ」

フギンにはやりと笑った。声も弾んでいる。

「エルディタラ へ行こう。あのケルンを作ってくれたからには、みんな生きてるはずだ。字の書けるやつもいる。森の隠れ家へ即刻走れるやつも十人ばかりすぐ集まるさ」

やっとフギンの意図を悟り、ウラルはぼんと手を打った。

「名案ね！」

「だろ？」

ウラルはうなずきかけ、ふと馬が顔を上げたのに気づいた。さっきまで草を食むのに夢中になっていたのに、今は口を止めてどこかをじっと見つめている。

フギンが剣を構えて手綱をしぼり、すばやくあたりを見回して退路を確認する。馬が見つめる先は森の奥。もしエヴァンスなら、ここから森の外側へ向かってウラルらを追うはずだ。そして森の外へ出た瞬間、待ち構えていたシャルトルの矢がウラルかフギンの命を絶つ。

ぶるる、と馬の視線の先のしげみから鼻を鳴らす音が聞こえた。

フギンが警戒を解くと同時に枝角があらわれ、つづいて赤茶の巨体が現れた。

「アラーハ。よかった」

アラーハは目をなごませ歩み寄ってきた。どうやらエヴァンスの追跡をうまくかわしてきたようだ。もしまだ追われているのなら、ウラルとフギンらをせつつき森の奥へ導くだろうから。

「ウラル、こいつのことアラーハって呼ぶの、いい加減やめろよ」

フギンは不快感をあらわにしている。言動がまさしくアラーハでも、以前アラーハがやったようにしんがりの役をつとめてくれても、フギンは頑としてアラーハのことを信じてくれない。ウラルの方もフギンと争うのもう疲れていた。

「それが名前だから」

それだけを答え、アラーハに手を差し伸べた。ざんばらになった

たてがみ。剣で首を狙われたのだろう、けれど厚いたてがみがクッションになって助かったようだ。いくつかの矢傷。ツノに乾いた血が少しこびりついている。

「殺したの？」

アラーハはゆっくり首を振って否定した。頭を下げてフギンとウラルが乗っている馬の足を鼻先でつつき、その足をツノで殴りつけるふりをする。馬の足を攻撃して足止めした、ということだろう。

「わかった。手当てをさせて。どこか休めそうな場所、見つけられる？」

アラーハはうなずき、ついてこいとばかり先に立って歩き始めた。「ついていって大丈夫かよ」

「アラーハが人の言葉をわかってることくらい、認めて」

ウラルはフギンに代わって馬腹を蹴り、先導するアラーハの後を歩かせた。

アラーハが野宿の場所として選んだのは、大木の根元にあるうろだった。

「アラーハ、ここって」

アラーハがうなずいて肯定する。ジンが死んだとき、ウラルが眠っていたあのうろだ。

中を確認してみると、前の冬にクマか何かが使ったとみえ骨片がすこし、転がっていた。けれどその他は何の変わりもない。卵形のウラルが十分に横たわれる広さのうろ。つめるか、体を丸めて眠ればフギンと二人でもなんとかゆっくり眠れそうだ。

「狭いな」

フギンが軽く舌打ちした。

「つめれば二人でも入れるよ」

「いや、俺は外で寝るよ。どのみち馬の番もいる。杭やロープの跡を残すわけにもいかないから、手綱握ったまま寝ないとな」

とはいえ季節はもう晩秋、日が暮れば一気に冷えこむのはわかりきっている。下手をすれば霜がおりるかもしれない。しかも今夜

は用心のため、火がたけないのだ。

フギンは鼻の下をこすった。

「でも、そうだな、ウラルがいいって言うんなら」

二人は小さなうろの端と端に座りこみ、干し肉とパン、チーズの冷たい食事をとった。フギンは馬につけた長いロープを持ったままだ。アラーハが前と同じようにぴったり入り口をふさいでくれ、うろの中は二人の息とアラーハの体温でほかほか温かい。

「そっぴやウラル、胸騒ぎはおさまったか？」

「おさまった、と思う。かわりにいろいろ思い出しちゃったけど」

「そっか。おさまったんなら、よかった」

何を思い出したのか聞かれるかと思っただが、フギンはそう答えたり黙りこんでしまった。あの場でウラルの嗚咽を聞いていたフギンにはもう聞くまでもないのかもしれない。あるいはあの戦場を今はもう、思い出さたくないのかもしれない。あんなに思わなかった。

ウラルも黙りこんで後ろの壁に身をあずける。やがて眠くなってきて、ウラルはそのままずると横になり、リスか何かのように体を小さく丸めて目を閉じた。ウラルが寝息をたてはじめると、フギンはそつとうろを出ていったようだ。気を使ったらしい。

旅の疲れのために夢も見ないほどの眠りにひきこまれ、しばらくぐっすりと眠っていたのだが、やがて冷たい手で頬を軽く叩かれ目が覚めた。

「ウラル、ごめん、ちょっと起きてくれ。なんかさつきからあのイツペルスが変なんだ」

寝ぼける目をしばたかせて起きあがると、変な姿勢で眠ったせいか首のあたりが痛くなっていた。

フギンは寒さのせいか、がたがた震えている。

「外で寝たの？ 冷たい手」

「見張りしてたんだよ。お前と一緒にいると、つられてぐっすり寝ちまいそうだったから。追われてるのにいくらなんでも無用心だ」

ウラルはさつきまでかぶっていた毛布をフギンに手渡した。ウラ

ルのぬくもりで温かいはずだ。

「ありがとう。言ってくれたら途中で交代したのに。それで、変って？」

うろの入り口からアラーハがのぞきこみ、ウラルの服のすそをくわえて外へ出るよううながした。うながされるまま外へ出れば、アラーハはじつと一方向を見つめて耳をぴくぴく動かしている。なにかに警戒態勢をとっているようだ。そこから適当に草を食んでいる貸し馬屋の馬もときおり顔をぴくっと上げ、アラーハの見つめている方向に耳をやっている。

「エヴァンス？」

アラーハは鼻を鳴らして答えた。そうだとはつきり言いたいときはうなずくはずだから、わからない、と言いたいのだろう。

「わからないけど用心するにこしたことはない？」

今度はうなずきが返ってきた。フギンは不審げな視線をアラーハに向け、顔をしかめている。

「言葉のわかるイツペルス、なあ。まったく、気にいらねえけど獣の勘は信じた方がいいか。馬もさつきから何か警戒してるしな」

アラーハが不快げに耳を伏せた。フギンの表情も一気に険しくなる。

「アラーハはそんなすぐ怒るようなやつじゃねえ。どうやって言葉を覚えたか知らねえが、ウラルを惑わすなよ、イツペルス」

「ちよっと、フギン！」

フギンはぷいとそっぽを向き、馬に鞍をつけ始めた。アラーハも不快げに鼻を鳴らしてフギンに尻を向け、怪しい音かにおいにするらしい方をにらみ立ちつくす。

「ウラル、すぐに発つぞ。追われてるんならこんな森の中より人ごみにまぎれた方がいい。一刻もはやく町に出よう」

フギンの声にのろのろとうなずき、アラーハを振り返る。アラーハはウラルの視線に気づいているはずだが、耳を後ろに伏せたまま森の奥を見つめ、身じろぎひとつしなかつた。怒っている。

何か言いたかったが何をどう言っていていいかわからず、ウルルは自分の荷物をひきよせ唇を噛んだ。二人の間の剣呑な雰囲気はただただ悲しかった。

第一章 1「西へ行く」 下

*

アラ―ハは前にここへ来たことがあるのか、あるいは獣の五感で人の気配を感じているのか、迷いなくウラルを森の中、導いてゆくけれどフギンは信用ならんとばかりに星の位置をしきりに確認し、地図をたしかめ、方角が合っていることを確認すると気に入らなさそうに顔をしかめ……なにはともあれ昼過ぎには街道にたどりついた。目を細めてみれば道の向こうに町らしいものが見える。

「セテーダン町かな」

フギンが馬上でぐるぐる地図を巻き、ベルトにはさみこんだ。ヒュガルト町よりは小さいが、ちゃんと城壁があり、宿屋も数件ありそんな規模の町だ。

「さてつと、人ごみにまぎれた方がいいと町に出たはいいけど、あの金髪男をどうにか引きつけながら エルディタラ まで逃げなきゃならないんだよな。まずつたな、森の中でうまく引きつけながら移動すりゃよかった」

フギンの口調は楽しげだ、さながらゲームに興じているかのよう。けれどその目は鋭く冷たく、シカの足跡を追う猟師に似た目をしていた。いや、これが盗賊の目というものなのだろうか。あるいは、標的を追い詰める復讐者の。

「やつらは地理に疎いはずだ。俺たちが町に向かうことは予想しているだろうが、森を抜けるには時間がかかる。少しあの町にとどまって足跡を残しておこうぜ」

フギンは意気揚々と馬を歩かせ始めた。が、ウラルを乗せたアラ―ハはついていこうとしない。困ったように鼻を鳴らし、首を曲げて何か言いたげにウラルを見つめている。

前を見てみれば森が途切れ、町までは小麦畑の間を突っ切る一本

道だ。イッペルスは家畜ではない。しかもこの巨大さだ。どうしたって目立つし、アラールも雑踏の中を好奇の視線を集めながら歩きたくはないだろう。

「どうした、ウラル？」

「アラールが『自分は町に入らない方がよさそうだ』って。どうしよう」

「置いていっちなまえ」

あんまりな言い草にウラルはフギンをにらんだが、フギンは「じゃあどうするんだよ」とばかりににらみ返してきただけだ。アラールはまた耳を伏せて不快感をあらわにしている。

ウラルはため息をつき、すくとアラールの背から降りた。

「じゃあ、アラール。町を出るときにどうにかして呼ぶから、森の中にいて。笛かなにか合図になるようなもの買ってくる」

アラールはうなずき、くるりときびすを返して森の中へ分け入っていった。ウラルはうつむき、荷物をゆすりあげて黙ったまま小畑の間の道を自分の足で歩いていく。フギンの馬の蹄音がゆっくり後ろから追いかけてきた。

「荷物、持ってやろうか」

ウラルは答えなかった。

「ウラル、気を悪くしたんなら謝る。でもな、あいつにそんな、なんとというか、歩み寄りすぎるなよ。考えてもみるよ、あんなでっかい人に慣れないはずの獣にさ、人みたいに接して。客観的に考えるんだぞ、ちよつと不気味じゃないか？」

「傍から見れば、そう見えるかもね」

かなり棘のある口調になったはずだ。でもフギンはひるまなかつた。

「俺はその『傍』にいるんだぞ。お前以外のみんなが、その『傍』にいるんだ」

たしかにそうかもしれない。けれど。

「じゃあどうすればいいっていうの。あのイッペルスはアラールな

のよ。それだけは、絶対に変えられない。気違いと言われたって、なんだって」

「ウラル」

「もうこの際、信じれないっていうんだったら、信じなくていいよ。ただ、すごくアラール八が悲しんでること、あんな風に言われて怒ってることは、わかって」

「本気で信じてるのか？ あいつがアラール八だって」

「信じなくていいって言ったでしょう！」

フギンの乗っていた馬がぎよつと耳を立ててウラルを見つめた。

「んな怒鳴らなくなつていいだろ」

「私が怒ってることくらい、わかるでしょう。そつとしておいて。

もうこのことで言い争いたくないの」

やっとフギンは黙りこんだ。

うつむいた顔をあげると、もうセーダーダン町の城壁が目の前だ。

門前に金や栗色の髪がちろちろ踊っているのに思わずぎよつとする。先回りされていたのかと思ったが、なんということはない、二人とは違うベンベル人が数人城壁の警護に当たっているだけだった。

「お前が怒鳴ってくれたおかげで、多少はやつらの印象に残ったかな。あの金髪野郎がここ通るとき、絶対やつらに俺たちのことを聞くだろ。いい足跡になった」

ウラルはぷいと顔をそむけた。

怒りっぽいフギンにあれだけ言ったのだ、怒鳴り返されてもよさそうなものだが、結局フギンの声は静かなままだった。フギンの横顔を盗み見る。

フギンは怒るところかひどく悲しげな顔をして、さっきまでのウラルと同じように顔を伏せていた。フギンがアラール八とウラルを悲しませているのと同じように、ウラルもフギンを悲しませているのだ。急に申し訳なさがこみあげてきた。

ウラルが変わってしまったから。いや、けれどフギンは気づいていないのだろうか。今のフギンと、あの「好きな料理は肉全般、嫌い

なものは特になし」とおどけて言っていた初対面のフギンと全然違つてしまつてゐることに。ウルルが氣違ひになつてしまつたのと同じくらい、フギンも復讐者として変わつてしまつたことに。最近は怒り顔ばかりで、あんなおどけた笑顔はジンの死後一度も見ていない。それを思うと悲しかった。

フギンがウルルの顔を見、すくと馬から降りた。何か言いたげな顔をして、けれど何も言わずにぼんぼんウルルの背をたたく。

「宿、はやく探そう。ずつと野宿でつらかつたろ」

「犬笛か何か、買わなくつちや」

「じゃあ獵師が行きそうな道具屋、探さなきゃな」

ウルルはうなずき、心の中だけで「ごめんね」と続けた。謝りたことは山ほどある。さつき怒鳴つてしまつたこと、心配をかけ続けていること、悲しませ続けていること。けれど、さつきの怒りがまだくすぶつてゐる。素直に声に出す気にはまだなれなかつた。

適当な宿を見つけて馬を預け、食料や水を買ひ足す。道具屋に寄るとちょうどイッペルスのツノでできた犬笛があつたので買わせてもらった。人の耳には空氣の漏れる音程度にしか聞こえないが、犬やイッペルスの耳にはかなり遠くまで響いて聞こえるはずだ。

買い物をしてゐる間にも、メインストリートのそこかしこにベンベル人特有の色素の薄い髪が見えている。一定距離を置いて武装したベンベル人が数人ずつ張り番をしているのだ。眼光鋭い男らが切つ先の鋭く湾曲した剣を腰に帯び、互いに話をするでもなく無表情に市場をにらみつけるさまは異様としか言いようがなかつた。

「なにかあつたんですか？ ベンベル人がたくさん」

買い物ついでに尋ねてみる。店番のおじいさんは顔をしかめた。

「お嬢さんにも知らないんですかい？ どちらから来なかつた」

「出身はシャスウェル地区ですが、つい最近まではヒュガルト町の近くに住んでいました。ヒュガルトはこんなじゃなかつたのに」

「ああ、なるほど。西の方は治安が悪いと噂で聞かれたことはないですかね。特にエルディ山脈に近づけば近づくほど治安が悪くなる

つてあんばいで、とにかくあつちのやつは血の気が多い。流血沙汰が絶えんもんで、ベンベル人どもの警備もどんどん嚴重になつたんですわ。で、息が詰まるってんで血の気の多い連中が東へ流れてくるでしょう。それを追っかける形で警備嚴重地域が広がっていつてね。この町もとばつちりを受けとるんです」

思わず心配になつてフギンを見つめると、フギンは固い顔でうなずき、教えてくれた老人に礼を言った。

「エルディタラ みんな、大丈夫かな」

「あいつらはそうそう簡単にへこたれないよ。大丈夫さ」

「これからの旅も」

「金髪男を引きつけながらベンベル人の警備の真っ只中に行くのか。ちよつとつらいかもしれないな。ひとまず、もうちよつと食料を買い足しておこう」

フギンはもう一度市場へ戻ると、日持ちのするものを選んで食料を買った。

「よし、今日は早く休もう。何日かとどまるつもりでいたけど、あれだけたくさんのベンベル人に姿を見られたんだ、十分だろう。次の町へ行こう」

口ではああ言っているけどフギンは エルディタラ が心配なのだ。二人は適当な屋台で夕食をとり、日暮れと同時に宿へ戻った。メイストリートに面した、さつき入ってきた門が窓からよく見える部屋だ。日が暮れてからしばらくすると門は閉じられたが、まだあかあかと松明がともされ、不寝番のベンベル人たちが動き回る影が見える。

落ち着かない気持ちを抱えながら旅装を整え、荷造りをして眠り、夜明けに目覚めた。

夜明けと同時に門は開き、市場に並ぶ野菜を満載した荷車が入ってくる。その商人たちの波の中に色素の薄い髪をした二人組みがまじっているのを見つけ、ウラルははつと息を呑んだ。

「フギン、ちよつと」

服を調べていたフギンが顔を上げ、ウラルの後ろから門の方をのぞきこんだ。間違いない。金の髪と栗色の髪をした、ほかの制服を着て門に詰めているベンベル人たちとは違って旅装を身につけた二人の男が、門番を呼びとめ何かを尋ねている。

「……早い」

さすがに予想外とみえ、フギンもそれきり呆然と黙りこんだ。視線を感じたのかシャルトルがついと顔をあげ、メインストリートを見やる。フギンは慌ててウラルを窓から見えない部屋の奥へ引つ張っていった。

「朝食は後だ。違う門から今すぐ出るぞ。じゃなきゃこの町から出られなくなる」

預けてあった貸し馬屋の馬を受け取り、二人の荷物をゆわえつけてウラルが鞍にまたがる。さいわいまだ人気の少ない道をウラルは馬で、フギンは徒歩で走り抜け、さつと門を抜けて町の外へ出た。かなり勢いこんでいたので門番たちは不審に思っただろう。いくらもたたずに「不審な男女の二人組み」のことはエヴァンスに伝わるはずだ。

「ウラル、こつちだ」

町を取り巻く小麦畑を抜ければそこから街道、その両脇は森だ。森に分け入るフギンを追う。ある程度分け入ったところでフギンは馬をつないだ。

「よし、この木でいいか」

「何をやる気？」

「やつの反応の早さを見たいんだよ。どれくらいであの門から出てくるか。そのために門を出てくるとき、目立つといたんだ。ウラルは下にいてくれ。朝飯、ここで食つとこつ」

どうやらフギンはすべて計算ずくだったようだ。近くにあった黒い汁気たつぷりの木の実をつぶすと顔にぬりたくり、遠くから白く光って目立たないようにすると、するする片腕で木に登っていく。買っておいたサンドイッチの包みを投げてやると、器用に受け止め

樹上でかじりはじめた。

「あのイッペルス、呼ぶなら今呼んどけよ」

ウラルはうなずき、犬笛を吹いた。こんな町に近い、人のよく通るところで狩りをする獵師はいない。アラー八にはすぐウラルとわかるはずだった。

サンドイツチをかじりながら待つ。息苦しい時間だった。命を狙われ、追われているのに、その追ってくる相手をじっとここで待たたとえやりすごすためにせよフギンはよくそんなことをやるうという気になれるものだ。

食べ終わるころ、聞き慣れた足音とがさがさ茂みをかきわける音が近づいてきた。

「アラー八。よかった、通じた」

草のおいをまとわせたアラー八がウラルに歩み寄ってくる。

「ウラル、静かに」

樹上から険しい声が落ちてきた。アラー八が驚いた様子で首をはねあげる。

「どうやらこつちもお出ましたぞ。くそ、早いな」

ウラルはぎよつと樹上のフギンを見つめた。門を出てから今まで、サンドイツチを食べ終えるくらいの時間しか経っていないのだ。たったそれだけでもうここまで。

「心配するな、静かにしていればまず気づかれない。気づかれても全力疾走で逃げ切れる距離だ。ただ、じっと黙って、いつでも逃げられる準備をしておくんだぞ」

ウラルがうなずくとフギンも樹上でうなずき、じっと街道の方をにらみすえた。アラー八が「何事だ」とばかりの目でウラルを見つめたが、ウラルが小声で説明しようとするそつと首をふって制した。目立つ巨体を木の間に隠して座りこみ、気配を消す。ウラルもアラー八にならって息を殺した。

「逃げるように門を出た」ときつと門番は報告しているはずだ。さすがのエヴァンスもそのウラルらがこんな森の中で堂々と待ち構

えているとは思つまい。何本もの木とそれなりの距離と。フギンも街道が見えるぎりぎりの距離で、黒いマントで身を隠し見つからないよう細心の注意を払いながらエヴァンスを見つめている。見つからない。見つからないはずだ。けれど、聞こえるはずもないのにその足音が聞こえる気がする。ウラルとフギンのことを話すベンベル語が聞こえてくる気がする。

「よし、通り過ぎた」

樹上から落ちてきた声につめていた息をほっと吐き出した。フギンが木から降りてくる。

「こりゃあ、わざわざ引きつけなくてもいいな。本気で逃げても追ってくる。このまましばらく森を歩いてからやつが行った反対方向の街道へ出るぞ。で、大きな町には寄らずに村で泊めてもらうか、あるいは野宿かしながら西を目指す」

ウラルはエヴァンスの行った方角を見つめた。「足跡」がないと見るや、エヴァンスはすぐに引き返してすぐにウラルらの向かった方向を割り出し、追ってくるはずだ。

「大丈夫だ。もう、やつは行ったから。さ、とつととずらからうぜ。目指すは エルディタラ だ」

フギンにばんばん肩をたたかれ、やっとウラルはがちがち歯が鳴っているのに気づいた。アラーハが励ますように耳をぴくぴく動かし、ウラルが乗りやすいよう地面に伏せてくれる。ウラルは震える足を少しさすってからアラーハの背にまたがった。

「エルディタラ についたら、待つてるよ、ベンベルのくそつたれが」

小声ながらも激しいフギンの独り言がウラルの鼓膜にぶつかり、はじけた。

第一章 2 「エルディタラへ」 上

フギンの宣言通り二人は大きな町を避け、食料が少なくなってくれば村に立ち寄って野菜やパンを買わせてもらいながら西への旅を続けた。

フギンは一見エヴァンスから無頓着に逃げているようで、その実かなり気にしているようだ。何度か前に立ち寄った村まで後戻りし、ベンベル人の二人組みが来なかったか聞いて回る。これが恐ろしいことになり確率で「来た」という返事が返ってくるのだ。

「バケモノか、あいつは。それとも犬かなにかの生まれ変わりか？俺たちの臭跡だけで追っかけてきてるとしか思えないな」

口調は冗談めかしているが、そんなことがあるたびフギンの目は鋭く険しくなっていく。

「本当に臭跡を追っかけてきてるなら、ゴウランラに現れたことも合点がいくな。あのときは疑って悪かったよ、ウラル。これだけ追跡に長けてるなら、お前が漏らさなくなつて追いかけてこれるよな」

西へ行けば行くほどベンベル人は増えていった。セテーダン町のあたりはまだ交易要所になる大きな町にしかベンベル人の警備がなかったのに、エルディ山脈を仰ぎ見るくらい近づいたこのあたりでは町ばかりか村にまでベンベル人の駐在所がある。

野宿続きになった。尽きかかった食料はアラール八が森の中で補ってくれる。フギンは相変わらずの渋面だが、文句を言っていられる場合ではないと思っただろう。ただ黙って木の実やキノコをかじっていた。

エルディタラの要塞はエルディ山脈の中腹にあるそうだ。もう目前のはずだった。

「ウラル、用心しといた方がいいかもしれない」

「用心？」

フギンは眉にしわを寄せてうなずいた。

「ここに来るまで、いわゆるならず者つてやつに一人も出会わなかった。エルデイ地区は治安が悪い。こんな野宿続きの旅なんかしよものなら、盗賊に身ぐるみはがされるのがむしろ普通さ。宿に泊まっても生半可な宿じゃ、一晩明けてみりゃ荷物が無いなんてザラだよ」

そんな危険を承知でどうして、と言いかけたウラルをフギンは制す。

「俺、エルデイタラ がまだ盗賊団だったときは若頭だったからさ、そんな連中は兄弟みたいなものなんだ。むしろどっかで出会ってエルデイタラ まで連れて行ってくれるのを期待してたんだよ。だから、これだけ誰にも会わないと、怖いよな、と思って」

ウラルはフギンの言葉の真意をさとり、ぎよっとなった。エルデイタラ もベンベル人に言わせれば当然ならず者の集団だ。盗賊連中が根こそぎベンベル人に追い立てられたのなら、エルデイタラ もただで済んでいるはずがない。

「用心しよう」

ウラルは黙ってうなずくしかなかった。

道は森というより山になり、どんどん険しくなっていく。雪がよく降るおかげで足元がひどくぬかるんでいる。アラハは馬の身体にシカの足を持つ生き物だけあって難なく登っていくのだが、馬はさすがに急斜面で足を滑らすようになったので、ウラルとフギンは荷物だけを馬にくくりつけ歩いて斜面をあがった。

「ウラル、上、見てみる」

山の中で休みながら上を見あげると、一羽の巨大な鳥が東から西へ、一直線に飛んでいくところだ。

「ムール。誰か、乗ってるね」

「いや、ムール鳥じゃない。あれはロク鳥だよ。でっかいだろ」

「大きいのがロクで、小さいのがムール？」

「そ。で、山に住んでて肉を食うのがロク、基本的にコーリラ国に

多い。ムールはリーグ国に多くて、魚や菜っ葉を食う。コーリラ人が来てるのかな。ひとまず エルディタラ は無事らしい。ベンベル人は鳥に乗れないから」

フギンはほっとしたように笑顔を見せたが、ウラルはまだ不安だった。リーグが侵略されてからもう二年が経つ。隣国コーリラが侵略されたのはそのさらに二年前。練習次第で鳥に乗る技術は誰にでも身につけられるのだ。四年もあればベンベル人がロクに乗れるようになっていてもおかしくない。

そしてもし、あのロクに乗っているのがベンベル人なら。ウラルは頭を振って不安を振り払った。でも不安はからみついて離れない。アラール八のときの胸騒ぎと同じ。

「さ、ウラル。この先の岩棚から エルディタラ が見えるはずだ。みんな無事ならこんな遠回りさせる必要なかったな。ま、ひとまず行こう」

「遠回りだったの？」

「うん、ずいぶん。だって俺たち全員が騎兵なんだぜ、馬群である道を行けるかよ。下のほうに道がきつてあるんだ。それでも階段とかあるし、ちゃんと訓練した馬じゃないと歩けないだけだな」

森が途切れ、崖が現れた。フギンは崖から張り出した岩の一つに乗って目を凝らし。

「嘘、だろ……」

いくらか予想していたウラルもさすがに目の当たりにすれば声が出なかった。

山の中腹に立てられた要塞。その大扉は開かれ、ひっきりなしに金や栗色や赤茶の髪の毛の男らが行き来している。リーグ馬に比べて骨格の細いベンベル馬、そして二足歩行するトカゲのゴーラン。要塞の城壁に詰めているのも全てがベンベル人、尖塔には太陽をかたどった旗、ベンベル国旗がひるがえり雪に打たれている。

フギンの膝が崩れた。泣き伏し、岩にこぶしを打ちつけるフギンの背をウラルは黙ってなでるしかなかった。

「くそつたれ！ ベンベルのクソ野郎がっ！ おぼえとけよてめえらあつ！」

相手が十人程度ならフギンは要塞に突っこんでいったらう。けれど相手は数え切れない、到底かなわない人数だ。さいわい元 エルデイタラ の要塞からは距離があり、降る雪にかきけされて声は届かない。

「と思っていたのだが。」

薄曇りながらもぼんやりと巨大な影が落ちてきて、ウラルはあわてて空を仰いだ。さっきのロク鳥が真上にいる。見つかった。見つかってしまった。

「フギン！」

フギンがうなりながらサーベルを抜き放つ。アラハもツノをかかげて戦う構えを見せた。だが相手は巨鳥、そして騎手はおそらく投げ槍を使ってくる。ツノとサーベルがどこまで効くか。

「待て、リーグ人だな？ 仲間だ、剣をおさめてくれ！」

確かなリーグ語が上空から降ってきた。続けて「降りる場所を開けてくれ」と指示がかかり、二人はあわてて岩棚からどいた。

ロク鳥が岩棚に舞い降りる。騎手の髪は褐色、リーグ人だ。顔が見えた瞬間、フギンの顔がぱつと紅潮した。

「お前、まさかマルクか？」

「フギン！ おい本当か？ お前死んだんじゃないのか！」

あわてて命綱と鎧のベルトをはずそうとするマルクにフギンは崖から転がり落ちんばかりの勢いで突進すると、マルクにしがみつきわんわん泣き始めた。

「てめえ、いつからロクなんかに乗れるようになったんだよ。団長はどうなっちまったんだ、要塞はどうなっちまったんだよう！」

「フギンてめえ、生きてるなら連絡の一度くらいよこしやがれ！」

ムニンの親父はてめえが死んだものとはかり、もう墓まで造っちまっただぞ、ええ？ 腕どうしたんだ。あの戦でか？」

「じゃあムニン団長は」

マルクは笑顔でフギンの頭を軽くはたいた。

「死人が墓なんか造れっか、生きてるに決まってんだろっが！」

エルディタラ はみんなで尾根の向こうに引越しよう。ベンベルの金髪連中、雨ってやつが苦手らしくてな。頼みの火薬は使えなくなるし、ゴーランはウロコの間にかビがはえる病気になっちまう。だから尾根ひとつ超えて、雨の多い地方に移ったわけだ。といっても尻尾巻いて逃げたわけじゃねえぜ？ 戦いを有利に進めながら、エルディ地区の腕っ節に覚えのある連中を結集させて力を蓄えてるんだ。連中に目にも言わせてやらあ」

フギンは涙をぬぐいぬぐい「団長らしいぜ」と目を輝かせた。「腕っ節に覚えのある連中」は要するにならず者連中のことだろう。なるほど、道理で道中出くわさなかったわけだ。

「えーっと、フギン？ 紹介してもらえる？」

ウラルがおずおず出て行くと、マルクは「お、べっぴんさん！」とはやしたてた。が、ウラルの後ろからアラーハが出てくると、表情がそのまま固まってしまった。

「ああ、ウラル、こいつはマルク。まだ エルディタラ がエルダ盗賊団だったときからいる古株だよ。俺の兄弟みたいなもんだ」

「そうそう、フギンのおねしょの回数まで覚えてるぜ」

「お、おい！」

思わず吹き出したウラル、けれどマルクはおどけながらもアラーハに視線を向けたまま体をこわばらせている。

「私はウラル、彼はアラーハ。アラーハは私の、なんといつたらいのかな」

「ウラルになついちまって一緒にいつてきてるイツペルスだよ。図体はでかいが、いたって無害、食料に困れば森の中から適当に食べるものまで探してきてくれる便利な野郎さ」

どんな紹介よ、と思わずウラルは言いかけたが、どうも人間のアラーハにもそのまま使えそうな紹介文だ。アラーハも別に怒りもせず鼻を鳴らしたただけだった。アラーハが悪く思っていないならウラ

ルも異存ない。苦笑するにとどめた。

「そいつや馬がいなかったらロクで運んでやるんだけどなあ。あ、ロクはこの通りでつかくて力強いからな、ムールと違って二人乗りにできるんだぜ。俺がウラルちゃんと二人乗りして、フギン、お前はロクの爪にひっかけられて空中散歩ってなことができたんだがなあ」

「ロクの爪って再会そうそう殺す気かよ！ で、その新要塞ってのはどこにあるんだ？」

「あの一番高い山があるだろ、ちょうどあの向こう側。っていつてもわかりにくいな。迎えをよこすよ。こんなベンベル人だらけのところだとまずいから、このままあの山へ向かって森を進んでくれ。で、明日の午後あたりになると思う。俺が近くまで飛んできたら、鍋でも叩くか焚き火するか、とにかく適当に目だってくれや。俺を目印に他の連中が来るから」

「おう、了解。宴会の準備して待っていてくれよな」

「そりやどうか。なんせ死んだやつが帰ってきたんだからなあ。

団長、驚きのあまりぽっくり逝っちまって、葬式の準備してるかも」

「団長に限ってそりやねえや」

「じゃ、お前が連絡よこさなかったあまりカンカンになって、血管ブツン」

「あ、そっちはありうる」

二人でひとしきり大笑いする。それからふつと真顔になり、二人同時にこぶしをつくと、それをガツンとつきあわせた。

「じゃ、また明日な」

「おう、待ってる。あ、そうだ、マルク。俺たちベンベル人の二人組に追われてるんだ。空から見て、あのベンベル人だらけのところじゃなく森の中にそんな感じのやつがいたら教えてくれないか？」

「お安いごようだ。といつても、空から見るところだけだからあんまり信用するんじゃないやねえぞ。この辺は冬でも葉っぱが落ちない木ばっかりだからな」

「わかってらあ」

マルクを乗せたロク鳥が舞いあがった。しばらくウルルらの上を旋回し、エヴァンスらを探してくれたようだが、どうやらそれらしい人間は見つからなかったようだ。「い・な・い」と手旗信号で伝え、西へ飛び去ってしまった。

「よかったね、フギン」

肩をぽんぽん叩くと、フギンは真つ赤な目でにっと笑った。

*

約束通り翌日の昼過ぎ、マルクは馬に乗った数人と共に迎えに来てくれた。その数人の中には、ゴウランラ の要塞で会った気の強い姉さまがたもいて、もう涙、涙の再会だ。

「ウラル、ずうつと心配してたんだからねえ！ あんなものすごい戦に女の子のあなたが巻きこまれて、生きてるわけがない、生きててもあのベンベル野郎どもに乱暴されてやしないかって……。大変だったでしょう。本当に無事に生きててよかったですよあ」

本当にぼろぼろ泣かれるものだからウラルは喜びより困惑の方が勝って、彼女らの背をぼんぼん叩いているしかなかった。フギンとは見てみれば、肩やら背中やらにびっしり刺青を入れた人相の悪い男らに取り囲まれ、みんなそろって男泣きしている。妙な迫力に思わず啞然としてしまった。

「あなたたち、いつまで泣いてんのよ！ ウラルがドン引きしてるじゃないの」

「でもよう、フギンだぜ？ 生きてやがったんだぜこいつ！」

「わあってるわよそれくらい。日暮れまでにとつと要塞まで帰らなきゃならないんだから、ぐずぐずしてる暇なんかねえんだよ。さ、とつと案内するよ！」

こんなときは男よりも女の方が立ち直りが早いようだ。名残惜しそうにぐずぐずいていた男らを姉さまがたはきびきび引っ立て、さつと馬にまたがった。相変わらずだ。ここでやっと驚きを喜びが勝り、ウラルは破顔した。

それまで茂みの中に隠れていたアラーハに目をやる。アラーハが出てくると、当然のように一騒ぎが起こった。フギンがマルクにしたのと同じ説明をする。

「イツペルスに乗っちゃうなんて、ウラル、地神さまみたい。ううん、ウラルは女の子だから風神さまかな。すごい。ね、なでてみていい?」

興味しんしんで姉さまがたが手を伸ばす。が、アラールはその手を押しつけ、嫌そうに顔をしかめた。

「どうしたの、アラール? あれ、普段は触らせてくれるのにな」「香水でもついてたかなあ。ま、誇り高いイツペルスなんだから、触らせてくれなくて当然よね」

ウラルは困惑してアラールを見たが、アラールは突っ立っているだけだ。みんなが馬に乗ってしまう段になって、そつと「乗せて」と頼んでみると、やっと膝を折って座りこんでくれた。きつと、人が急に増えたのが嫌なのだ。アラールはもともと人の多いところが苦手だったし、ウラルと二人きりのときはともかくとして、他のときはたいてい仏頂面で人ごみから一步離れた場所にいた。

「あんたたちが泣いてたおかげで時間を食った。急ぐよ! あ、ウラル、きつかったらすぐ言うんだよ? ペースゆるめるからね」

ウラルとフギンを中央にすえ、守るように陣を組んでくれる。そして急な山道を飛ぶように駆け始めた。みんなウラルを気づかってくれ、彼らなりにはゆっくりのペースで進んでくれていたらしいのだが、なにしろウラルは鞍がない。鎧もない。倒木を飛び越えるときですらその調子だから、何度もアラールの背から転がり落ちかけ、そのつどペースを落としてもらったり、休憩を入れてもらったりした。

「乗せてもらうなら鞍をあつらえなきゃねえ」

「でも、嫌なの。アラールをそんな馬みたいに扱うのは」

「でもこうして馬みたいに乗ってるじゃない。脚とかも入れてるでしょ?」

「ううん。私を乗せてくれるのはあくまでアラールの好意だから。お願いして乗せてもらってるの」

「え、じゃあどうしてウラルの指示を聞いてくれるの?」

「アラ―八は人の言葉がわかるから。アラ―八が自分で、みんなについていかなきゃと思ってくれてるだけよ。あとは声で『曲がつて』とか『止まって』とか言うかな」

ウラルは答えつつ、最近は本当にアラ―八と馬のように接しているな、と申し訳なくなつた。アラ―八の背中の毛はウラルが乗り続けたせいで擦り切れ、短くなつてゐる。

「ごめんね、と小さくこぼすとアラ―八はくるりと背中の上のウラルを振り返り、意味を問いかける目を向けてきた。軽く首を振り、たてがみを指ですいて、ありがとう、と小声で続ける。アラ―八は軽く目をしばたかせ、ため息に似た息をついた。ああ、と答えてくれたらしい。

そして、日がとっぷり暮れたころ、エルディタラの新要塞にたどり着いた。

「さあ、待たせたね！ 主賓の到着だよ！」

城壁前で姉さまの一人が声を張り上げる。とたん、割れんばかりの歓声で出迎えられた。

「お帰り、フギン！」

フギンは呆然と立ちすくみ、わっと泣き出した。あれだけ泣いたのに、そして要塞もなにも様変わりしているというのにこらえきれなかつたらしい。

「よく帰つた、フギン」

体格のいい壮年の男が進み出てきて、馬上のフギンを抱きしめた。

「団長、ムニン団長。連絡が遅れてすみませんでしたあつ！」

「そんなことはいい。本当によく生きて帰つた」

わんわん泣くフギンはまるで少年のよう、そして団長ムニンは父親のようだった。驚きすぎてぼっくり逝くような人でもなく、怒りすぎて頭の血管が切れてしまうような人でもなく。見るからに武人ではあり、多少は血も熱いのだろうが、父性のかたまりのような優しげな人に見えた。

「知ってるかもしれないけどフギンはな、孤児だつたんだ。生まれ

て間もないのに山に捨てられてて、それを団長が育てたんだよ。こうしてみると本当に養父と息子だよなあ」

空から舞い降りてきたマルクが教えてくれた。フギンとムニンにジンとアラーハの姿が重なり、ウラルは思わず目を伏せる。ジンもアラーハとこうして感動の再会ができればよかったのに。

フギンとムニンはしばらく二人で再会を喜び合っていたが、やがて落ち着いたようだ。ムニンが紳士的にウラルへ手を差し伸べた。

「はじめてお目にかかる、エルディタラ 団長のムニンだ。ウラルさんだったな。あのゴウランラ の戦いの直前で君に会った部下たちや、イズン君から話は聞いている。よく来てくれた。エルディタラ みなで歓迎しよう」

「え、イズンからですか？」

思わず聞き返してから、先に自己紹介をするべきだったと後悔した。ムニンは握手をしながらウラルの無礼を気にする様子もなく鷹揚にうなずいてくれる。

「ああ、イズン君はつい最近までここにいたんだ。スヴェルの隠れ家へ帰ってみると言っていたが、そうか、行き違ってしまったか」

「本当ですか、団長！ すげえじゃんウラル、お前の予言通りだ。イズン、イズンが生きてた！」

フギンはすっかり気分が高揚しているとみえ、ウラルの手をとってぶんぶん振り回した。

「まあ、詳しい話はみなから聞いてもらえばいいだろう。さあ、今夜は宴だ野郎ども！ 俺の息子が死地からはいあがってきた。フギンに乾杯！ 飲み明かすぜ！」

紳士的な口調から、急にいかにも「盗賊の親玉」的なドラ声に変わってしまった。驚いて思わず身を引くと、フギンが「団長はいつもこうなんだ」と大笑いしながらウラルの背をばんばん叩いた。

「わたしの性格だと思って受け入れてもらえるだろうか」

また紳士的な口調と表情に戻って笑うムニン。思わずウラルは笑

いだしてしまった。まるで二重人格だ。

「ええ、もちろん。ちよつとびつくりしただけです」

「団長は女の子には紳士なんですよねー。あたしたちも女の子なんですけどー」

「淑女に紳士というだけだ、だいたいそんな毎日顔見てるてめえらにいちいち紳士装つてられるか！」

茶々を入れる姉さまがた、またドラ声に戻って怒鳴り返すムニン。「うん、一度でいいから紳士団長に話しかけてもらいたいつてのが、あたしたちのひそかな夢なのよねー」

「どこがひそかだよ！」

ツツコミは エルディタラ の団員たちの中に埋もれていたフギンからだ。

「ウラル、こんなだけどさ、気はいいやつらだからどっかで適当に飲み食いしてて。またこつちから見つけるから」

「私のことは気にしなくていいよ、適当にしている。めいっばい再会を祝ってきて」

「淑女つてのは彼女のためにあるような言葉だなあ。てめえら、俺に紳士やってほしいならちつとは見習え」

「精進しまーす」

口をそろえる姉さまがたに笑いを噛み殺しつつ、四方八方から祝い酒をぶっかけられるフギンを見守った。

「なあ、ウラル！ このご大層な馬はどうすりゃいい？」

マルクの声に振り返ってみれば、城門前の暗がり巨体をすぼめて立っているアラール八がいた。数人が馬の手綱を持って困ったようにアラール八を見ている。どうやら今から厩舎へ連れていくらしい。

「イッペルスじゃないか。これは見事な」

アラール八は鼻にしわを寄せ、不快そうに耳を後ろに傾けている。怒って伏せている感じとはまた違うが、喧騒を嫌がっているのは間違いないさそうだ。

「ごめんアラール八、ほったらかして」

アラールは申し訳なさそうに鼻を鳴らした。

「私も一緒に行つていい？」

「なんだつたら俺たちで連れていくけど。あ、でもこいつが従つてくれないかな」

「一緒に行くわ。アラールがどのあたりにいるか知っておきたいし興味深そうにアラールを見ていたムニンがウラルに向き直った。

「面白いな、このイッペルスは君に従っているのか。早く帰ってきてなさい。さもないとあの連中だ、料理がみんななくなってしまう」

本当にもの見事に口調が違う。表情も違う。おかげさまで笑いをこらえるのが大変だった。これは慣れるまで時間がかかりそうだ。

「あ、団長、俺らの分もメシとつといてくださいよ！」

「ウラルの分だけじゃなくってね！」

おうおう早く行け、と盗賊親玉口調でせかされウラルらは笑いながら歩き出した。

「団長つて、なんだかお父さんみたいね」

「お父さん？ ウラル、うまいこと言うなあ。そうだよ、団長は俺たちみんなの父さんなんだ」

「お父さんだから身内以外には敬語？」

「あ、なるほど、そうかもなあ」

ウラルはまた笑つてちらりと後ろ、フギンとムニンの方を振り返った。こんなに笑うのは久しぶりだ。頬が少し筋肉痛気味な気がする。それでもそれが心地いい。

「よかった、フギン」

かすかな独り言だったが、隣のアラールには聞こえたらしい。穏やかな瞳が返ってきた。

第一章 3 「死語り」 上

荒くれ男たちの高揚は並大抵ではなかった。姉さまがたは「夜更かしはお肌が悪いのよー」などとうそぶきつつ、実際は酔っぱらった男らからウラルを守る気づかいをしてくれたのだらう。そそくさ途中で退散したのだが、一体それからどれだけ飲んだのか。翌朝には二日酔いで頭を抱える者が続出し、宴会に使った大広間は大量の酒瓶と嘔吐の跡で埋まり。それはそれは悲惨なありさまだ。

当然主役のフギンは浴びるように、というより文字通り浴びせられそれに匹敵する量の強い酒を飲まされて、運びこまれた部屋で泥のように眠っている。目を覚ますかどうかも怪しい様子にウラルはおろおろしていたのだが「そんな生きて帰ってきたことを祝う宴でぼっくり死ぬようなへマはしないさ。どんな笑いものよ」と姉さまがたにさとされ、なんとか落ち着いていた。

「それより団長が呼んでたよ。一度部屋において、そんな酒臭いところに淑女がいるもんじゃないって。気に入られたみたいね、ウラル」

そのままムニンの部屋まで案内してもらおう。ノックをしてみれば「おう、入れや」とドラ声、ドアを開けてみれば紳士的な微笑が待っていた。

「ああ、ウラルか。よく来てくれた。まったく、ドアを開けただけで部屋が酒くさくなるな」

さすがに団長は二日酔いというわけではなさそうだ。途中で引き上げたのか、あるいは深酒でも後を引かない体質なのか。ウラルを案内してきてくれた姉さまにお茶の準備を頼むと、ムニンは柔和に笑った。

「昨日はありがとうございました。私も楽しかったです」

「宴の後も楽しければ言うことないんだが。まあ、かけなさい」

ムニンの部屋はきれいに片付いている。酒瓶やら肉のかけらのつ

いた骨やらが転がるむさくるしい部屋を想像していたウラルは興味しんしんで部屋を見回した。広げられたエルディ地区の地図、よく磨かれてつやつや光るインク壘。机の上には小ぶりながらも本棚があり、ぎっしりと、しかしきちんと整頓された本や羊皮紙の束が並んでいる。

こざつぱりした明るい部屋は明らかに教養人のものだった。スヴェル の森の隠れ家であればフギンの部屋というよりジンやイズンの部屋に似ている。いや、これはむしろ、サイフォスの。

サイフォスとその妻マームの部屋にはたくさん本があった。暗くなつてからもランプの明かりで本を読んでいたサイフォスの姿をよく覚えていた。脳裏に浮かんだ穏やかな姿と同時にサイフォスの死に顔、森の中で首に縄をかけられ殺されていたあの姿がよみがえり、ウラルは目を伏せた。後姿だけを見てジンだと思つたあの姿。ぎゅつと胸元のペンダントをにぎりしめる。

「盗賊の親玉らしくない部屋だろう」

見透かしたようにムニンが笑つた。

「わたしは昔、リーグ国の將軍だつたんだよ。將軍といつても、ただかだか五百人を率いる隊長のようなものだが。そのころの習慣がまだ抜けないらしい。この口調、荒くれ団長ではないこちらの口調も將軍時代、身につけたものだ」

ウラルは目をしばたき、小首をかしげた。

「なぜ国の將軍が盗賊の親玉なんかにか？ もつともな疑問だな」
本当に表情だけでムニンはわかつてしまつらしい。ウラルは真つ赤になつて「はい」とうつむいた。ムニンは微笑したまま太い指でコツコツ机を叩く。どうやら言外にぶつけてしまったぶしつけない質問を悪くは思っていないようだ。少しほつとした。

「ウラル、君は知っているだろう。ベンベルに侵略される前もリーグは決して良い国だつたわけではない。私が將軍をやつていたころ、二十余年も前から国家は傾いていた。本当に表に出てきたのはここ十年のことだな。一兵卒から將軍職にあがつた私は国家の横暴を

知り、絶望して、部下を何人が引きつれ軍を離れたのだ。はじめは義賊だったのだが、いつの間にかそれも忘れ果てただの盗賊になっ
てしまった」

将軍がどうして、という理由はこれでいいだろう。まあついでだ、
続きも話そうか、とムニンは続けた。

「十何年も盗賊の親玉をやった後、ジン君に出会った。まぶしかつ
たよ、真っ向から義勇軍をやる彼は。青臭かったが、いいものを持
っていた。途中紆余曲折はあったが、彼の頼みに応じてエルダ盗賊
団は義勇軍 エルディタラ と名を変え、彼と手を携えたのだ。こ
れがわたし率いるエルダ盗賊団、そして エルディタラ の歴史と
いうわけだ」

ムニンはひとりで語り、ふっと自嘲気味の笑みを浮かべた。

「さてと、ずいぶん一人で話してしまっただな。こちらの口調だとつ
い解説じみてしまう。ウラル、君はサイフォスを知っているかね？」
ウラルは驚いて顔を上げた。なぜここでサイフォスの名前が。ま
さかムニンは人の心の内を見抜く力でも持っているのだろうか。さ
つきから見透かされてばかりだ。かといって、さつきウラルがサイ
フォスを思い出していたことまで見透かされるとはさすがに思えな
いのだが。

「はい。しばらく スヴェル の隠れ家で一緒に暮らしていました。
ジンやフギンと一緒に。でも、サイフォスは……」

「サイフォスの行方を知っているのか！」

突然ムニンが立ちあがり、ウラルはまた驚いてムニンを見つめた。
「ああ、驚かせたな。やつが行方を知っているなら教えてくれない
か。だが、その顔では」

ムニンは口ごもり、悲しげに目を伏せた。

「死んだんだな」

ウラルは唇を噛み締め、うなずいた。ムニンががっくりと椅子に
腰をおろし、大きな手で顔を覆う。

「いい知らせがでなくて申し訳ありません」

「君が謝ることではない。どうか気にしないでくれ」

言ったときムニンは黙りこんでしまう。顔を覆い、ウラルのことを忘れてしまったかのようになくなってしまったムニンをウラルは落ち着かない気持ちでしばらく見つめた。

「息子の一人は帰ってきた。だが、かつての戦友は風神に招かれ心へ還った……」

低い声が大きな手のひらの間から漏れ、ウラルは小さく「戦友」と繰り返した。

ムニンがゆっくりと顔をあげる。頬にはこの部屋に入ったときと同じ柔和な笑みが浮かんでいたが、その目はさっきまでとは比較にならないほど暗かった。

「サイフォスから聞いたことはないか。サイフォスもまた、かつては軍人だったのだ。わたしの部下だった」

ウラルは目を見張った。初耳だ。

「わたしが軍を出るとき必死に止めてくれた奴は、わたしの後釜で將軍となり、私と同じように傾いた国の姿を見る羽目になった。わたしと同じように軍を出た奴は、部下ではなくひとりの村娘だけを連れ、ナヴァイオラへ、東の反国組織へ向かった」

その村娘は、まさか。

「その娘さん、マームという名前ではありませんでしたか？」

「そう、マームだ。サイフォスを喪ってさぞかし悲しんでいるだろうな。それともまだ知らないか」

ウラルは驚きに高鳴る胸に手を当てながら顔を伏せた。変わり果てたサイフォスの前での誓いは、まだ果たせていない。

「知らないと思います。いずれ伝えに行くつもりですが、伝えない方がいいのかもしれない……」

もう一度ムニンを見つめる。あの盗賊親玉口調のムニンはフギンが、紳士口調のムニンにはサイフォスが、二重写しになって見える気がした。ムニンもウラルを見返してくる。静かな暗い瞳で。

「サイフォスの最期を、聞かせてもらえないだろうか」

この部屋へ入ったときサイフォスを思い出したのは、やはり共通するものがあつたからなのだ。サイフォスがムニンの部下だったなら、多少はムニンの影響を受けていても不思議ではない。ウラルは申し訳ない気持ちで一杯になりながらうなずき、ゆっくりと語り始めた。

思えばアラハもフギンもあの戦いの全てを承知している相手だったから、こうして一から十まで声に出して説明し、誰かに聞いてもらうのは初めてだ。冷静に語っているつもりだったが、やがて胸がつまり、目がうるみ、嗚咽まじりになっていく。

森の中のサイフォスの最期はジンやりゼの最期の話へと発展し、やがて思い出話へと変わっていった。遅ればせながらお茶を持ってきてくれた姉さまが「なにウラル泣かしてるんですか、団長！」と怒鳴りつける羽目にもなってしまったのだが。それでもムニンはウラルに話を続けさせ、黙って耳を傾けてくれた。

語ることがやっと尽き、ウラルが口を閉ざすころにはすっかり日が傾いていた。

「ありがとう、よく語ってくれた。サイフォスは残念だったが、これで胸のつかえがひとつ、とれたよ」

「本当に長くなってしまつて。最後までありがとうございます」
深く頭を下げると、ムニンは穏やかにほほえんで応じてくれる。

と、ムニンの顔に当たっていた夕暮れの光が急にさえぎられた。

「ウラル、あー、ここだったか。つててて」

窓を見てみればフギンが頭を押さえながら部屋をのぞきこんでいた。

「フギン！ やっと起きた？ もう夕方よ」

「目を覚ましたのは昼過ぎだよ、そっからは頭痛くて起きられなかつたんだ。つて、どうした、目が赤いぞ？」

ウラルは首を振った。

「なんでもないの。フギンこそ目、真っ赤じゃない。気分はまだ悪い？」

「最悪。でも後悔はしてない」

にっとな笑うフギンに笑い返し、ウラルはひとつ思い出してムニンに向き直った。

「そうだ、団長。昔は將軍でいらしたんですね。ダイオ將軍をご存じないですか？」

「わたしなどは格の違う大將軍だ、直接の面識はないが。なぜ君がダイオ將軍を？」

「あ、そうだそうだ。団長、大変なんですぜ」

長く語りすぎて喉が痛くなってきたウラルに代わり、フギンが頭を押さえながらエヴァンスとシャルトルに追われていること、彼らの屋敷にダイオが囚われていること、スヴェルの隠れ家でシガルが機をうかがいながらウラルらの帰りを待っていることを話す。

ダイオの消息は結局わからなかったのだが、フギンは生きている前提で話していた。

「そついやあ、ゴウランラ の戦いで生き残った骨のあるリーグ軍人、まあ今は エルディタラ の仲間連中にダイオ將軍の旗下つて奴が何人かいたな。連中なら喜んで、というより話を聞くなり飛び出していくだろうよ。ダイオ將軍がいればこちらも百人力だ、生きておられるなら喜んでお招きしたい。ふうむ」

フギンが相手だと見事に盗賊の親玉へと戻ってしまう。さっきの紳士顔はどこへやら、ムニンは舌なめずりでもしそうな顔でにやりと笑った。

「召集をかける。明日にはロクー一羽を スヴェル の隠れ家へ伝令として向かわせ、騎兵十五をただちに向かわせよう。大船に乗った気で待ってるや」

「それから団長、その屋敷の持ち主のエヴァンスって野郎なんです
が」

ジン、そしてその父であり高名な將軍だったフェイスを殺した張本人だとフギンが声を荒げると、ムニンの眉がつりあがった。

「そいつは今、どこにいやがるんだ」

「俺たちを追ってきやした。なんか知らねえんですが、命を狙われるみたいで。途中までは居所を把握しながら逃げてたんですが、ここに近づくとつれベンベル人もが邪魔しやして。見失ったんですが、でも様子見にこの近くまで来ているのは間違いないと思いやす」

「相手はたったの二人なのか」

「へい。叩きのめしてやってください！」

ムニンはしばらく窓から東、おそらくはエヴァンスがいるであろう方向を見つめ目を細めていたが、今のところは打つ手なしと判断したのでろう。激しい舌打ちをした。

「山をやみくもに探すわけにもいかん、あの元 エルディタラ 要塞に陣取ったベンベル人を刺激したくないしな。ひとまずロクを飛ばして空からざっと探すくらいはできるが、今のところは他に何もできそうにない。悔しいが動きがあるまで待つしかならう」

フギンが悔しそうに顔を歪め、けれど団長の判断なら従うと言いたげに「へい」と返事をした。

ウラルはまた深く頭を下げて礼を言い、そろそろ、と腰をあげた。ムニンはうなずき、ウラルの出際に「好きなだけここに滞在していきなさい。また話を聞かせてくれ」と声をかけてくれた。

外にいるフギンのところへ行きたかったが、さすがに窓をまたいでいくわけにもいかない。大回りして適当なドアを探した。

「ああ、そういえば」

あれだけムニンと二人で話しこんだのに、生きているらしいイズンのことを聞きそびれてしまった。まあ、それでも無事に生きることがわかったのだ。また誰からでもゆっくり話を聞ける。いまさらながら嬉しさがこみあげてきて、ウラルはひとり微笑んだ。

けれど、微笑みながらも気分は沈んでいる。サイフォス、そしてジンとリゼの死に顔をまざまざと思い出してしまったからだ。場所は違うがマライの死に顔も……。けれどジンの伝えてほしいという遺言をひとつ実行できて、ほっとする気持ちもあった。

建物を出たそこはすぐに厩舎と放牧場だ。何十頭もの馬たちが草

を探しながらうろろしている。視線を感じて馬から目をそらすと、放牧場の柵の外で大きな馬が一頭、四肢を折りウラルを見つめていた。

アラーハだ。数人ばかりの子どもがその背に飛び乗ったり耳をひっぱったり、はしゃぎながら遊びまわっている。アラーハは目を細め耳をぱたぱたさせながら、困ったもんだとばかり鼻を鳴らしてみせた。

「あれ、アラーハ。ツノが」

そうなのだ。あの立派すぎる枝角がない。ツノさえあれば間違っても馬のように見えたりはしないのに。子どもらの一団の間に根元からぼつきり折れたツノの一对が見え隠れしているのに気づき、ウラルはぎよつと息をのんだ。

「ああ、はえかわりの時期なんだな」

声に振り返れば、フギンが二日酔いに痛む頭を押さえながら歩いてくるところだった。

「あれだけ立派なら高く売れるぜ。細工師にでも引き取ってもらおう」

シカのツノは年に一度はえかわる。イッペルスも同じだったはずだ。あれだけ巨大な枝角がまた一からはえるのかと思うと大変な気はするのだが。やっとそれに思い至りほつとしたが、ウラルは違和感をぬぐえなかった。

去年、アラーハはツノがはえかわらなかった。人獣ひんぱんに姿を入れ替えていたのだが、あのツノのない馬のような姿は今までも見たことがない。アラーハははえかわりが二年に一度なのだろうか。あるいは森の守護者だったからだろうか。メスをめぐり秋にイッペルスたちは戦う、その時期以外に枝角は必要ない。けれど森の守護者は年中季節にかかわらず森を守る必要があるのだ。ひよつとすると守護者を降りたために起きた何十年かぶりのはえかわりなのかもしれない。

「子ども、好きなんだな。あいつ。日がな一日、嫌がりもせずああ

してみたいだぜ。子どものほうもよくなついたらもんだよ」

「どうして子どもがこんなところに？」

「男と女が長いこと一緒に暮らしてりゃ、そのうち子どももできるってわけさ。あと、孤児だろうな。ほら、団長、そついつの見過ぎせない性格だからさ」

「フギンも孤児だったんだって？」

「ん、マルクあたりから聞いたのか？」

「昨日の感動の再会の人にね」

フギンはちらりと笑った。

「ウラルに泣き顔見られちまったな」

「無理ないよ、あんな状況だもの」

照れ隠しのつもりかフギンはそっぽを向いてしまった。東の方を見つめ、大きく伸びをする。

「シガルのやつ、どうしてつか。突然マルクがロクで降りてきたらびっくりするだろうなあ」

ウラルも東を見つめた。

「イズンが森の隠れ家へ向かったなら今頃会ってるかもね」

「あ、そうだそうだイズン。ウラル、お前すげえな。予言が当たったじゃないか。まさか生きてて、ちよつと前までここにいたなんてな」

ウラルはぼんやりうなずいた。今の今まで忘れていたが、あの予言がもしの中していたのならイズンとダイオは生きており、軍医のネザが死んでいることになる。予言よ、はずれる、とウラルは願った。イズンが生きていてくれたのは嬉しい。本当に嬉しい。だからこそネザにも無事に生き延びていてほしかった。

「あの金髪男がいない屋敷はから空き同然だ。すぐにダイオ、帰ってくるぜ。あのおときお前を優先してダイオを見捨てちまったからな。帰ってきたら平謝りしないと」

ふいに、フギンの笑顔にかげりがさした。エルディタラ に来てからフギンに戻っていた本物の笑みが曇り、あの獰猛な復讐者の

顔がちらつく。エヴァンスのことを思い出したのだ。

ぎろぎろと東の山の中を見つめるフギンをウラルは悲しく見つめた。そんなウラルの表情に気づくとフギンは取り繕うように笑い、アラーハの周りで遊びまわっている子どもたちへと視線を向けた。

第一章 3 「死語り」 下

*

ムニンは翌日、言葉通りロク鳥に乗ったマルク、そしてもともとダイオの部下だったという五人を含む十五人を馬で森の隠れ家へ向かわせてくれた。

じりじりしながら待った八日後の夕方、マルクの連れていった伝書鳩が「ダイオ將軍、救出成功」の知らせを持ってきた。あつけないほどの迅速さだ。興奮気味に特大で書かれた「救出成功！」の文字の脇には、細かい文字がびっしりと書きつけられていた。ムニンに読みあげてもらったところ、どうもシガルからウラルとフギン宛の手紙らしい。

まずは騎士らしい固い文でムニンへの感謝が述べられていた。それからマルクが突然隠れ家を訪れたことへの驚き、ダイオを救出するまでの簡単な経緯と、ダイオの様子との報告。救出には成功したもののダイオは傷で長旅はしばらく無理そうだということ、ダイオの部下たちが森の隠れ家に残って世話をしたがっていること、彼らと入れ替わりにシガルがナウトを伴って エルディタラ へ向かうことになったこと。もっとたくさん書きたいが詳しいことはまた再会のとときに、と消え入りそうな小さな字で書かれ、終わっている。最後のサインなど羊皮紙の端の端に追いやられ、判読できないほどだった。

深々と頭を下げムニンに礼を述べつつ、ウラルはエヴァンスの屋敷の門番ティアルースとシャルトルの母ミュシエの無事が気になった。シガルの手紙いわく「ほぼ抵抗なく潜入、救い出すことができた」らしいのだが。不意打ちから皆殺し、などという事態になっ
ていないことを心から祈った。

そして、そのさらに翌日。 エルディタラ 上空に巨鳥の影が戻

ってきた。

「マルク！」

放牧場でアラーハと一緒にいたウルルは嬉しくなって手を振った。巨鳥はほとんど高度を下げてくるところ。その背に乗っているのがマルクひとりでないことに気づき、ウルルは驚きに目を見開いた。

なんたることか、一羽のロクに騎手が三人だ。一人は手綱をとっているマルク、もう一人はウルルに向け手をぶんぶん振る少年、最後のひとりは少年をささえウルルを静かに見つめている。逆光で表情はわからないが、おそらくはほほえみながら。

「シガル、ナウト！」

ウルルはロクの降りていった方、禽舎へ走り出した。アラーハが速歩で追ってくる。足の遅いウルルを励ますように前になり後ろになり併走してくれた。

「ウルル姉ちゃんー！」

ウルルを見つけたナウトがロクの鞍から降りるなり駆け寄ってくる。ウルルは息を切らしながら飛びついてきたナウトを抱きしめた。「元気だった？」と尋ねようとするのだが、なにぶん息が切れて声にならない。心配げに顔を覗きこんでくるナウトの頭を笑いながらなでた。ウルルの笑顔を見るとナウトもぱつと顔を輝かせ、ぎゅつと抱きついてくる。

「シガル、いらっしやい！ てつきり馬で来ると思ってたわ。びつくりした」

「びつくりしたのはこちらですよ。まさかこんな強力な仲間があられるとは。ダイオ將軍は無事に助け出しましたよ。本当に彼らのおかげです」

最後にロクの背から降りたマルクが照れくさそうに鼻の下をこすった。

「いやいや、こっちこそ勉強になった。やっぱ、本物のムール騎兵って違うんだなあ。また乗り方、教えてくれよ」

どうも三人乗りしながらマルクはシガルに鳥の乗り方を教わって

いたらしい。シガルはいつでもどうぞと笑顔で応じた。

「ダイオの様子は？」

「お元気とはいえませんが、もう塞がっています。ご自分の足でも歩けない傷を受けていますが、もう塞がっています。ご自分の足でも歩けませんし、今はゆっくりリハビリといったところですね。萎えた体を動かしているところで。ウラルさんとフギンさんの無事をしきりに案じておられましたよ。無事だとわたしたちが言えば、会いたいな、と」

「私も会いたい。無事でよかった」

ウラルが笑うとシガルは一瞬、きよんとした顔になり、それからゆっくりほほえんだ。よかった、お元気になられましたねと言いたげに。

「フギンさんは？」

噂をすればなんとやら。フギンが「おーい！」と片方しかない腕を振り回しながら駆け寄ってくるところだ。後ろにはムニンやエルディタラの主だった面々がそろっていた。アラーハがナウトの頭を軽く鼻先でつつき、放牧場の方へ去っていく。本当に人の多いところは苦手らしい。

シガルはぴしりと背筋を伸ばすとムニンに向かって丁寧に礼をした。

「ムニン団長、このたびはご助力くださりありがとうございます。ダイオ將軍からも大変感謝している旨、伝えよと仰せつかっております。わたくしはリーグ軍事総督フェイス將軍揮下、ムール伝令のシガル・スカルダと」

「シガル殿、ようこそおいでくださいました。まずはダイオ將軍のご無事をお喜び申し上げます。あのような大將軍の救出にこの手をお貸しできたと思うと身のすくむ思いでござるよ。遠路はるばるお疲れでしょう。部屋を用意してあります。案内いたそう」

堅苦しい言葉の連続に周りのウラルらは面食らった。

「団長って、ウラルみたいな女の子でなくても紳士になるんだな」

「いまさらだなあ、おまえ。イズンさんのときもそうだったじゃないか」

どこからかぼそつと漏れた声に団長の目が光った。

「なにをぼさつとしとるか！ 早く客人をご案内しろや！」

突然のドラ声にシガルとナウトがぎよつと一歩あとずさった。そこでムニンが紳士的に笑って一言。

「これがわたしの地なのです。半ば二重人格ですが、どうぞ驚きになりませんよう」

どうもムニンはこうして客人を驚かせるのが本当に好きらしい。ぼかんとした様子のシガルとナウトがおかしくて思わず笑い声を漏らすと、シガルは困ったようにウラルを見つめ、何がなんだかわからないと言いたげに目をしばたいた。

「シガル、団長はいつつもこうなんだ。ま、はやく慣れてくれよ。部屋はこつちだ」

マルクがシガルの背をぼんぼん叩いた。

「あ、わかってると思うけど俺らは団長と違って行儀作法も何も知らないからな。かんべんしてくれよ」

「わかりました、『全軍進撃』でなく、『行くぜ野郎ども』の世界なんですな、ここは」

苦笑しながら肩をすくめるシガルに「本当にそうだぜ」とマルクが笑いかけた。この二人はすっかりロクの鞍上で打ち解けているらしい。

「にしても、シガルもここで何年か暮らしたら団長みたいな二重人格になるのかなあ」

マルクの言にフギンとウラルは吹き出した。当のシガルは「なりませんよ」とあっさり流し、怖いお兄さんお姉さんにびくびくしているナウトの頭をやさしくなでる。ウラル、フギン、マルクは顔を見合わせ、二重人格シガルを想像してにやにや笑いあった。

「シガル、私も部屋、一緒に行つていい？ 話、聞かせて」

「あ、ウラルが行くなら俺も」

フギンが唱和し、シガルはどうぞどうぞとうなずいてくれた。

やがて到着した部屋の前で「じゃ、俺はこれで」と帰ろうとするマルクをフギンが引き止めた。

「お前からダイオの話、聞かせてくれよ。いいだろ？」

マルクはこころよく応じてくれ、広くもない部屋で五人は適当に座りこんだ。ウラルとナウトはベッドに腰かけ、シガルは椅子に、フギンとマルクは壁ぞいの地べたに。ナウトは疲れていたのだろう。落ち着くなりこてんとウラルにもたれかかり、うつらうつらしはじめた。

「じゃ、ダイオ救出劇のはじまりはじまり、といくか」

よっ、まってました！とフギンがはやしたてた。

マルクはあの旅立った日から二日かけてシガルのもとへたどり着き、フギンとウラルの頼みでダイオ救出に手を貸しに来たことを伝えた。シガルとナウトが仰天したのは言うまでもない。シガルはしばらく警戒心をむきだしにしていた。ナウトはもともと人見知りな上、頼りにしている兄ちゃんがこんな調子では心を解くどころではない。マルクは仕方なくリゼのムール禽舎があったところにテントを張って野宿した。

翌日、遅ればせながら元ダイオの部下五人を含む騎馬部隊が到着した。その中にはシガルの見知った顔もあり、抱き合って再会を喜んだ。シガルはフェイス將軍の伝令、むろんダイオもフェイスの部下だったのだから、ダイオの部下にシガルの知り合いがいてもおかしくはない。やっと警戒を解いたシガルは知っている情報を エルディタラ の面々に語った。

エルディタラ 増援部隊が来るまでもダイオの行方をさぐっていたシガルは、ダイオが生きてエヴァンスの屋敷の中にいることを掴んでいた。ウラルとフギンが旅立った数日後からまた門番たちがエヴァンスの屋敷に姿を見せるようになり、その門番同士の会話の中で「あのリーグ人」という単語を何度か盗み聞いていたのだ。買出しに行く門番にナウトを物乞いとしてまわりつかせ、尾行さ

せたところ、ダイオのためらしい薬草や痛み止めを買っていたこともわかった。このベンベル人たちがダイオの世話をしているのは間違いない、しかし肝心のダイオは姿も影も見出せない。ウラルとフギンに聞いていた状況から、地下に監禁され、しかも傷で動きが取れないのだろうとシガルは検討をつけていた。

エルディタラ はさすが元盗賊、フギンから教えられていた屋敷の間取りを確認すると張りこみを始め、門番の人数や身を隠す場所を確認するや否や、強行突破の計画をすぐさま立ててしまった。ダイオの正確な居場所がわからない、つまり秘密裏にダイオを連れ出すことはできない。それなら見張りの少ない時間帯を狙って数を頼みに襲撃したほうがいいと判断したのだ。そして半日で準備を整えると、さっと夜の屋敷に忍びこんだ。

四人いた門番のうち、エヴァンスの屋敷に住みこんでいたのはテイアルースひとりのはずだった。けれどエヴァンスとシャルトルが屋敷を出てからは四人ともが住みこみ、屋敷を守っていたらしい。

エルディタラ が屋敷に忍びこんだとき、四人の門番はリビングでカードゲームに興じていた。エルディタラ の中でも生粋の盗賊である数人が壁を這い登って窓に忍び寄ると、そこからナイフをひとりの利き腕に投げつけて動きを封じ、人質に取った。仰天して武器を取ろうとする門番たちだったが、鍵を針金で開けたドアから音も立てずに侵入していたほかの エルディタラ の面々によつてすぐに取り押さえられてしまった。

「ところが、ここからが妙でなあ」

「妙って？」

マルクとシガルが困惑の視線をかわしあった。

「『ダイオはどこだ』と俺らはリーグ語ですごんだ。こっちはベンベル語わかるやつがひとりもいなかったからさ、まあわかるだろうってことで」

「すると、下手なリーグ語で『ダイオとウラルの仲間か』と返事が返ってきたんですよ」

自分の名が突然出てきたことにウラルは面食らった。

「私？」

「そう。それでわたしたちが、『そうだ、ウラルとフギンの頼みでダイオ將軍を救出に来た』と返すと彼らは顔を見合わせ、ベンベル語二言三言、話し合いました。それから『ダイオさえ連れ出せれば他に何もしない』らしきことを言うと、おとなしくわたしたちの縄に縛られ、ダイオ將軍のところまで案内までしてくれたんです」

ウラルは目をしばたいた。相手は多勢に無勢、分がないと判断しての行動だろうが、なぜわざわざウラルの名前を合図にしたように抵抗をやめたのか。べつにウラルに義理があるわけでもなかるうし、「で、ダイオのところへ行くと、ひとりのご婦人がダイオの部屋の前に立ちふさがっててだ。でも門番たちの説得ですぐにドアを開けてくれた」

シャルトルの母、地図職人のミュシエとみて間違いない。

「そして、やっとダイオ將軍にまみえることができました」

ベッドの上で半身を起こし待ち構えていたダイオは、うるんだ目に笑みをたたえて エルディタラ の面々を迎えた。シガルとダイオの元部下たちは喜びのあまり夢中でダイオの前に膝を折った。隙だらけになった彼らを慌てて元盗賊メンバーがかばったが、ベンベル人たちは攻撃するでもなくただ静かに再会を見守っていたという。「そこで、ドアの前に立っていた婦人がダイオに話しかけたんだ。

ベンベル語で俺たちにはわからなかつたんだが、ダイオは普通に聞いてたな。それで一言、通訳してくれた。ウラルと片腕の男は元気か、今はどこにいるのか、って」

語り手の二人はフギンとウラルを見つめた。ウラルとフギンも視線を交わす。

「居所は言えないが二人とも元気だ、と答えると、せきをきつたように門番たちが話しかけてきました。自分たちの主人は今ウラルを追っているが、主人の姿を見かけたかと。もしウラルと主人が出てくれば主人はウラルを殺してしまう、本当にウラルは元気なのかと

……。そう言った門番は、すぐさま他の門番にいらまわっていましたかね」

「その質問をした人、ティアルースという名前じゃなかった？」

「さあ、名前は知りませんが。赤毛に灰色の目の男でしたよ」

間違いない、ティアルースだ。

「ちよつと口論になっていましたね、そこから門番同士で。わたしたちは聞き流していたんですが、ダイオ将軍が後で言っていたところによると、その赤毛の門番はウラルさんのことが心配でたまらないらしい。でもほかの門番は、そう言う彼を攻撃してしまいましたね。そんなことを思っちゃいけない、主人のことを思わないのかと」

シガルの言にフギンが難しい顔でウラルを見つめている。「主人のことを、思わないのか？」とオウム返しに呟いた。

「あの赤毛、ぜったいウラルに気があるんだぜ。まあ、意味のわからないベンベル語の言い争いをずっと聞くのも嫌だったからな、適当なところで切り上げて、ダイオを連れてとっととおさらばしてきただけさ。やつら、帰るときも玄関までわざわざ案内してくれたぜ」

ひとまず皆殺しではなくてよかった、とウラルは胸をなでおろした。

「あれから、あの男には会ったんですか？」

シガルの問いかけに、次はウラルとフギンが答える番だった。

エルディタラ につくまでの経緯、ゴウランラ の戦場跡でエヴァンスに狙われたこと、そこからまっすぐに エルディタラ を目指し、その間ずっと追われ続けたこと。

「どうしてエヴァンス、屋敷の主人が私とフギンを狙うかは言っていなかった？」

「さあ。わたしたちがダイオ将軍に翻訳してもらった分では聞いていません。もしかすると翻訳されなかった部分で何か言っていたかもしれません」

ウラルはうつむき、ナウトがウラルによりかかったまま寝息をたてているのに気がついた。ベッドに腰かけたまま布団をまくり、そ

つとナウトの肩にかけてやる。その間、みんな口を閉ざしたままだった。

「フギンさん、ウラルさん。これからどうなされるおつもりですか？」

「ダイオに会いたいな、ひとまず」

フギンが即答する。ウラルもうなずいた。ダイオの無事をこの目で確かめたい。

だが、エヴァンスはまだきつとこの エルディタラ の近くにいるはずだ。直前の村までは確かに追ってきていた。ここまで来ているのは間違いないだろう。ただ、エルディタラ にはさすがに入りこめずにいるだけだ。

一步ここを出れば間違いなく後をつけられるだろうし、どこかで襲われる。全てをかわして森の隠れ家へたどりつけば、みすみす動きの取れないダイオのところまでエヴァンスを案内してしまうことにならないか。

ウラルが自分の考えを話すと、たしかにそうだとフギンは苦々しげな顔をした。

「空路はどうです？ さすがにこちらがロクやムールでは後のつけようがないでしょう」

それだとフギンが手を打ったが、結局言いだしっぺのシガルが否定することになった。ムールは一人乗りしかできないし、ロクでも二人以上は無理だ。さっきのシガル、マルク、ナウトの三人乗りはナウトの体重が軽く、しかも季節風が西に向かって吹いておりロクが楽に飛べたからこそ。その季節風に逆らい、ウラル、フギン、それに巨鳥の扱いに慣れたシガルがマルクどちらかの大人三人を乗せてはさすがに無理だった。しかもその上、アラール八がいるのだ。

四人であれやこれやと案を出し合ったが、結局決まらず、べつに無理に今日決める必要はなかるうということになった。そろそろ夕飯の時間だと皆をうながすマルクに従い、すっかり熟睡していたナウトを起こして食堂へ向かう。

「あ、そういえばシガル、イズンが隠れ家に行かなかった？」

「ああ、あの人ですね。来られましたよ。な、ナウト」

眠い目をこすりこすりうなずくナウト、ウラルはフギンと顔を見合わせてほほえんだ。

「マルクのと看みたいに警戒しなかった？ 手紙にちらつと書いてあつたけど」

「あなたからちらつと話を聞いていたんでね。マルクさんのことも先に言つていてくれれば」

「顔がかたつぽのおじちゃんでしょ、イズンって」

目をぱちぱちさせながらナウトの言に、ウラルはぎよつとして笑みをひっこめた。

「顔が、片方？」

シガルとマルクも笑みを消す。

「いや、実際に顔が片方だけになつたわけじゃねえよ。そんなんで生きてたらバケモンだ」

「あの戦で上半身の右側に大ヤケドを負われたんですって。それで布で顔の半分を隠しておられるんです」

ウラルはフギンの右腕を見つめた。肩口から先が義手になつてしまった、その右腕。生きてるのは嬉しいが、まさかそんなことになつてゐるとは。

「で、イズンは今どこにゐるんだよ。森の隠れ家か？」

「いえ、ウラルさんがゴウランラ の戦場跡に行かれたことを話すと、後を追う、自分も行きたいからと。すぐに旅立つていかれたんです」

「また行き違いか！」

フギンは舌打ちした。でも情報がひとつ増えたからだろうか、笑顔だ。

「でもよかつたなあ、イズンが生きてて。もしかすると今頃、ここに向かつてるかもしれないな」

目をきらきらさせるフギンにウラルはほほえみ返した。

そつだ、イズンは生きている。きつとどこかで、必ず出会えるはずだ。

第二章 1「邂逅」 上

シガルとナウトはあの再会から数日後、ムニンから贈られたロク鳥で森の隠れ家へ帰っていった。それから幾度となくロクで飛んできては、ダイオとムニンの意思疎通の手助けをしてくれる。むろんウラルらにもダイオの状況を伝えてくれ、何か言いたいことがあれば手紙の代筆もしてくれた。

メンバーがメンバーだけになりにぎやかではあるが、穏やかな日々が続いた。ウラルは炊事の手伝いや、山ほど持つてこられる穴あき衣類の繕い物に精を出し、フギンは片腕ながら槍や剣の稽古に励んだ。アラールはもっぱら子どもらの遊び相手が仕事だったが、そのうち森が恋しくなってきたのだらう。軽々と城壁を飛び越えエルディタラを取り巻く山に入っていく、何日かに一度、顔を見せに帰ってくるようになっていた。

エルディタラに着いたのが冬半ば、それから春が過ぎ、夏も終わりかけている。もともとのエルディタラ要塞に陣取ったベネル人たちはこちらにらみをきかせながらも動かず、エヴァンすらも姿を見せない。イズンも行方がわからないままだ。

そんなある日のことだった。

「ウラルさん、ダイオ将軍がそろそろこちらに向けて出発したいとおっしゃっています」

シガルがそう伝えてくれたのだ。傷を受けてからもう一年。もう十分に体力を取り戻し、馬にも乗れる。ウラル、フギンにも会いたいし、ムニンに礼を述べたいと。

やっとダイオに会える、とウラルの胸はふくらんだ。一年も待ち望んだ再会だ、当然フギンも喜ぶと思っていたのだが。

「いや、シガル、ダイオにはちよいと待つように伝えてくれないか？」

ばつ悪そうに目を泳がせるフギンに、シガルは心外だとばかり目

をしばたいた。

「なぜです？」

「いやさ、一年前にダイオを見捨てて逃げちまったから。ウラルを守るためには仕方なかったんだけどな。俺さ、ちゃんとダイオに謝りたいんだ。だから謝られる立場のダイオを自分のところへ呼び寄せるなんてまねはしたくないんだよ。俺の方からダイオのところへ行きたい」

「ダイオ將軍は気にされていませんよ」

フギンは首を振った。

「はじめ、ちゃんとつけさせてくれ。なに、馬だったら四日もあれば着けるからさ。それから一緒に エルディタラ へ戻ってこようって。そう伝えてもらえるか？」

四日で エルディタラ から森の隠れ家、リーグ国の西の端から東の端というのは、いくらリーグ国が南北に長い国土だとはいえかなりのハイペースだ。シガルは「四日は無理でしょう」と言いかけ、エルディタラ がもとは騎馬盗賊団だったことを思い出したらしい。口をつぐんでうなずいた。

「でも、エヴァンスがまだ私たちのこと狙ってないかな。フギンひとりで行くのは危ないんじゃないか」

「ウラル、まだ気にしてるのか？ 最後にやつを見てからどれだけ経つ。いい加減あきらめてどっか行ったんじゃないか？ エルディタラ 着いてすぐに山狩りできてればなあ、こてんぱんにやつつけてやれたのに」

急に怒気まじりになったフギンの口調にウラルは身をすくめた。たしかにもう半年、エヴァンスは気配のかけらすら見せていない。「そうよね。狙われる危険もないわけだし、私も一緒に行つていい？ フギンがダイオに謝らなきゃならないなら、私も同じよ。いいでしょ？」

「ウラルはあのおとき気を失っててどうしようもなかったわけだし、べつに謝ることはないと思うぞ。でもまあ、一緒に来るって言うん

なら。ウラルと一緒になら四日じゃ無理だな。シガル、六日ってことでダイオに伝えといてくれよ」

「わかりました、ダイオ將軍の方も断りはしないでしよう。まあ一応、ダイオ將軍の答えを待ってから出発してくださいね」

シガルはすぐに飛び立ち、ダイオの「了解」の答えを携えて戻ってきた。それでムニンに十二、三日ほどで帰る旨を伝え、準備を整えた。

フギンが貸し馬屋から借りていた馬はとうに人を介して帰してある。かわりにゴウランラ の戦いで死んでしまったというフギンの愛馬ステラの姉妹馬ディアンをムニンから贈られ、フギンは大喜びしていた。ウラルの方は犬笛でアラール八に合図し、森から帰ってきたイツペルスに旅立つ旨を伝える。ダイオに会いに行くのだ、喜ぶかと思つたが案外そうでもなく、ただ穏やかにうなずいただけだった。

そうして迎えた旅立ちの日。行ってすぐ帰ってくるにもかかわらず、みんな、特に姉さまがたがこれでもばかりウラルを心配してくれ、たくさん物を持たせてくれた。食料に薬、力の弱いウラルでも使いやすい護身の武器。エヴァンスがいはいえ、ベンベル人の警備嚴重地帯を突っ切らなければならぬ。みんなが心配するのは当然といえば当然だった。

アラール八の背に乗せてもらい、栗毛のディアンに乗ったフギンと並んで エルディタラ を後にする。

「半年ぶりだな、こうやって外に出るの」

フギンが馬上でうーんと伸びをする。とたん、重心がぶれたのだろう。フギンの乗っていた馬がずりりと足をすべらせた。昨夜の雨でぬかるんでいたのだ。さすがは雨の多い場所をわざわざ選んだだけはある。

「ウラル、これから急斜面だ。鞍なしで大丈夫か？」

「大丈夫かって、どうしようもないでしょ」

「なんだったら代わるぞ。俺、一度そのイツペルス、乗ってみたか

「つたんだ」

フギンが馬を止める。が、アラーハは止まらない。ウラルを乗せたまましらんぷりでそのまま歩いていく。

「アラーハ、止まって」

声に出して言ってみると、アラーハは一応足を止めてそのままウラルを振り返った。耳を伏せ鼻にシワをよせ、不快感をあらわにして。

「フギンを乗せるのは嫌なの？」

アラーハはそっぽを向いた。

「なんだ、女の子しか乗せないってか」

「そうでもないと思う。アラーハ、嫌だったらうなずくはずだし」
困惑しつつもウラルはアラーハの背から飛び降り、フギンの馬のハミを押さえてやった。フギンも馬から降りる。

「でも明らかに嫌がつてないか？」

アラーハはこちらを鋭い目でびたりとにらみすえている。

「ま、ひとまず頼むだけはしてみるか。なあ、しゃがんでくれないか？」

フギンがぼんとアラーハの肩を軽く叩く。馬の首を愛撫するように。

とたん、アラーハが飛びのき、ぱつとツノを下げた。はえかわりの途中でまだ血の通っている、それでも十分に立派な枝角をこちらに向け、怒りもあらわに威嚇する。

「アラーハ、やめて！ フギンじゃない。どうしたの？」

アラーハは我に返ったようにツノをあげ、申し訳なさそうに耳をぱたぱたさせた。

「あー、やっぱり嫌だったか。ウラルじゃなきゃだめなんだなあ。ウラル、お前本当にどうやって手なづけたんだよ」

おそろおそろアラーハに近づき、そつと目をのぞきこむ。申し訳なさそうなおどおどとした、人だったころのアラーハには到底にあわない目つき。

「アラールハ？」

おかしい。人に戻れなくなった直後のアラールハは、フギンに肩を叩かれたくらいで怒りはしなかった。シガルが頭をなでて。ウラル以外が乗るのが嫌だったわけでもないはずだ。ナウトは喜んで背に乗せていた。なにかが、おかしい。

「ま、ウラル以外は乗せないっていうんならいいや。先急ぐぞ、お前が鞍なしのイッペルスに乗るんなら時間がかかるんだからな」

再び栗毛のディアンにまたがったフギンにせかさされ、ウラルは釈然としないままアラールハの背に乗せてもらった。

*

二晩、野宿でしのいでベンベル人の警戒地域を突っ切った。行きよりずいぶん短い時間で過ぎた気がするが、どうもエヴァンスを警戒して何度も遠回りしたり、後戻りしたせいらしい。まっすぐ行けばあっけないほどの短さだった。

そうして前に通ったセテータン町、エヴァンスを間一髪でかわしたあの町にたどりついた。

「ま、ここなら交易要所だし、半年も経ってるんだ。あのときの門番だって俺たちの顔なんか覚えちゃいないさ。二日も野宿でしんどかったら、宿に泊まるうぜ」

ベンベル人は心配だったが、フギンの見立ては今まではずれたことがない。信頼してゆっくり休ませてもらうことにした。アラールハはあのとときと同じく近くの森に潜んでいる。

宿に馬を預けて荷物を置き、帽子を目深にかぶって食料調達に出かけた。町の様子は半年前とほとんど変わらない。夏服の人々がせわしなく行きかう市場。武器を運び、一定の距離を置き無表情に立ちつくすベンベル人たち。

ベンベル人たちからここもち距離を置きながら首を伸ばし、行く手にある前に犬笛を買った店の方を見やったウラルは、雑踏の中

に色素の薄い髪を見つけた。ぎよっとフギンのそでを引こうとして
思いとどまる。相手は一人。それに、なんとということはない。ただ
の白髪のリーグ人のようだ。

ほっと視線をはずそうとしたがなにか引つかかるものがあった、
ウラルはそのまま初老の男をぼんやり見つめながら歩いていた。

白髪の、この暑いのになぜか鋼色の毛皮を身にまとった男。まる
でアラーハだ。アラーハもどんなに暑かろうが毛皮が自前なものだ
から脱げず、いつも汗びっしょりになっていた……。

男が視線を感じたらしく顔をあげた。ウラルを見つめ怪訝そうに
顔をしかめて。

そして、横を通り過ぎようとしたウラルの腕をふいにつかんだ。

「娘、どこかで会ったな」

思わずウラルは身を引いた。

「ひ、人違いです」

「いや、確かに会った。イッペルスのおいがするな、やつは近く
にいるのか」

イッペルスのにおい、とオウム返しにつぶやき、ウラルははっと
して男の姿を再び確かめた。鋼色の毛皮。白、いや、銀の髪と灰色
の瞳。腰にはサーベルがあるがおそらくは鋼鉄製ではない。牙と同
じ素材の。

「ウラル、どうした？」

ウラルがついてきていないことに気づいたフギンがぎよっとした
表情を浮かべ、駆け寄ってきてくれた。鋭い目をしてウラルと男の
間に割りこもうとするフギンを制す。

「大丈夫、アラーハの知り合いなの。でもどこで会ったか記憶が曖
昧で。お名前をお聞かせ願えますか？」

「ケナイ。アラス森のオオカミ、といえばわかるか」

アラーハがはじめて人でない姿をウラルの前に見せたときにいた、
あのオオカミだ。月光の中、巨大なイッペルスと恐れ気もなく向き
合い、人の声で器用に笑ってみせた鋼色のオオカミ。

「ベンベル人じゃないのか？」

うさんくさげなフギンの目。たしかにケナイの髪は銀、目も灰色で、色素が薄い。

ケナイは歯をむき出して笑った。人の姿をしていても鋭い八重歯がきらりと光る。

「リーグ人と胸を張って言えるかどうかは別物として、少なくともベンベルとは関係ない。さて、娘。アラーハのところへ案内してもらおうか。久々に顔を拝んでやろう」

「でもケナイ、アラーハは……」

ウラルは町を取り囲む城壁、その向こうに広がっている森を見やっ
った。

「アラーハの知り合いって、人のアラーハだろ？ 獣のほうに案内してどうするんだ」

口を挟んだフギンにケナイが怪訝そうな目を向けた。どうい
うことだとはかりの視線が突き刺さる。ウラルは答えずきびすを返した。
「歩きながら話します。アラーハは、森にいます」

町を出る門の方へぶらぶら歩きながら、ケナイにアラーハが森の
守護者を退いてしまったことを話した。人の姿をしたオオカミは大
きく目を見開き、喉からかすかなうなり声を漏らす。

「それが、どれくらい前のことだ」

「去年の秋。もうすぐ一年になります」

「ならば、心ももうだいぶ獣に戻っているだろう」

「心が、獣に？」

ウラルはぎょっとケナイを見返した。

「知らなかったか。守護者を退いた獣は、少しずつ人の心を失って
ゆく。人語を解す能力も衰え、ただの獣に戻ってゆく」

アラーハの変化を思い出し、ウラルは胸に手をやった。胸のペン
ダントをにぎりしめる。

アラーハはいつから人の多い場所を避けるようになっていただろ
う。最初は人を驚かせないために町を避けていた。けれど、それが

いつの間にか、人そのものを避けるようになっていた。誰かが触れようとすれば鼻にシワをよせ、払いのけ、そしてフギンに威嚇までして……。ずいぶん怒りっぽくもなった気がする。

無意識のうちにはフギンの後姿を見つめていたのだろう。手持ちぶさたそうに前を歩いてきたフギンが振り返った。暑苦しい毛皮を着た初老の男を気にいらなそうに見つめ、ついと目をそらす。

ケナイは続けた。

「これからは古いも速くなるはずだ。守護者になった獣は、人と同じ速さで歳を取る。守護者から降りれば、その獣本来の歳の取り方に戻る。イツペルスの寿命は大体三十年だ、やつの歳から考えて、あと四、五年もすれば寿命が来るだろう」

ウラルは上の空でうなずいた。

「やつが死んだら体の一部、ツノか、重ければたてがみでもいいだろう。今の守護者に頼んでヒュグル森の聖域へ持って行ってもらえ。生まれた森へ骸を返すのが、地神の定めた森の掟だ。どうせやつは最後までお前と共に旅をする気なんだろう」

城壁を抜け、小麦畑に出た。小麦畑を取り巻くようにしている森の中にアラールハは潜んでいる。

「ケナイ、耳をふさいでください」

ウラルが犬笛を取り出したのにならずき、ケナイは耳をふさいだ。フギンがいぶかしげにケナイを見ている。

犬笛を吹くと、ケナイはうるさそうに顔をしかめた。さすがはオオカミだ。人には聞こえない音がやむと彼は耳から手を離し、耳をそばだて鼻をひくつかせる。

「近くにいたようだ。来たぞ」

やがて草を踏むためらいがちな足音がウラルにも聞こえてきた。木立の中に一對の枝角が見え隠れしはじめる。じつとこちらを見つめているようだ。

「アラールハ」

ケナイが呼びかけた。アラールハは木立の中で身を震わせ、ぱつと

森から飛び出して、ウラルとケナイの間に立った。ウラルをケナイから守るかのよう。落ち着きなく足踏みをしながら困惑を色濃く浮かべた瞳でウラルとケナイ、フギンを交互に見やる。

「俺とはわかつてるな。だが」

ケナイが手を差し伸べる。とたん、アラーハの喉からうなり声が漏れた。反射的にツノを下げようと、それを必死にこらえている。このオオカミが友人ケナイであり戦う必要も逃げる必要もないことはわかつているが、それでもオオカミは子どもや弱ったイツペルスを襲うおそろしい獣、刻みつけられた本能が反応してしまうのだ。森の守護者として人の心を持つていた今までのアラーハは抑えることができた。けれど、今は理性で本能を抑えることが難しくなりつつある。

「こいつはもう、ただのイツペルスだ。認めてやれ。そして寿命が尽きるまで思うようにさせてやってくれ」

「なあ、ウラル。お前さつきから一体何の話をしてるんだ？」

フギンが我慢の限界に達したのだろう。ウラルはフギンに一瞥をくれ、ケナイに向き直った。

「ケナイ。フギンに、彼にオオカミに変身するところを見せてくれませんか」

ケナイは鼻を鳴らし、じろりと灰色の瞳でフギンを見やる。反射的であろう、フギンがぎょっと身を引いた。人の姿をしているとはいえケナイの目はまぎれもなくオオカミの長のもの、人を畏怖させるのに十分な覇気を帯びている。

ケナイはさつと左右に目を走らせ、耳をそばだてて人が来ないことを確かめた。

「よかるう」

低く答えた次の瞬間、ケナイはオオカミの姿に変わっていた。フギンの喉から漏れる息の音。そのまま腰を抜かしそうになり、あわてて地面を踏みしめたようだ。真っ青な顔でオオカミを凝視している。

「認めてやれ。こいつがアラーハだということも、今はただのイッペルスでしかないことも」

オオカミは人の声で言い、イッペルスに向き直った。

アラーハは歯を食いしばっている。何かを振り払うようなしぐさをしてなんとか喉のうなり声を抑えると、そつと首を下げて鼻先をケナイに近づけた。本能に刻みこまれた怒りと恐怖から耳を伏せ、体中の筋肉を八工を払うときのようにつるつる震わせながら、やつとこらえてケナイの挨拶に応じたのだ。

「さらばだ、アラーハ」

オオカミは最後に人の言葉でこぼすと、ぱつと森の中へ駆けこんだ。しばらくすると悲しげな、ひどく尾を引く遠吠えが遠くから繰り返し聞こえていた。ケナイの別れの声。アラーハが馬のそれを低くしたようないななきで応じた。ケナイが森の奥で吠えるたび、アラーハもいなくなき。

何度も、何度も。えんえんと。

「なんだったんだ、今の……」

ウラルは答えず、慟哭するアラーハの首をそつとなでた。

第二章 1「邂逅」 中

アラーハが落ち着いてから人に見られぬよう、街道からは見えな
い位置まで森に分け入った。まったく、あのいななきと遠吠えの応
酬の間、よく誰一人道を通らなかつたものだ。もしかすると通行人
はみんな異変を感じて迂回していたのかもしれないが。

「ウラル、説明してくれよ。あの男、なんだったんだ？」

「ケナイは森の守護者。アラーハと同じ」

「違う。アラーハは人間だ。守護者なんかいるもんか」

首を振るフギンにウラルはため息をついた。

「目の前で変身までされて、まだ信じないの？」

思わずあきれ声になった。フギンの目が怒気を帯びる。

「百歩ゆずって守護者がいて、あの毛皮の男が本当にそれだったと
してもだな、アラーハは違う。アラーハは人間だ」

ウラルはため息をついた。まさかここまで頑固だとは。

「町、帰ろうぜ。もういいだろ、ここは」

「もう少しアラーハのそばにいさせて」

アラーハがフギンと一緒に言いたげに鼻先でウラルをつつ
く。ウラルはその鼻面をそつと押しのけ、アラーハの肩のあたりに
身を預けた。

アラーハは今、すさまじく落ちこんでいる。旧友ケナイにツノを
向けかけ、自分がいかに人の心を失っているかしらしめられ、フギ
ンにまた「アラーハ」だということを否定されて……。とても一人
にはしていかない。よりそっていたかつたし、ウラルもウラルで
アラーハと向き合い、気持ちを整理する時間が必要だった。

「付き合ってられねえ。俺は行くからな。まだ買物があるんだか
ら」

とうとうフギンは声を荒げ、きびすを返してしまった。街道に向かつて数歩踏み出し、ウラルがついてきていないのを確かめるように振り返る。アラーハのそばで動かないウラルをじっと見つめ、それからゆっくり悲しげなため息をついた。

「適当に宿、帰ってこいよ。閉門時間には気をつけるんだぞ。壁の外に荷物もなしに取り残されるなんてことになったら」

「うん。晩ごはんまでには戻るから」

ちゃんと具体的な時間を言ったのがよかったのだろう。フギンはほっとしたような顔になり、ゆっくりと街道の方へ歩いていった。

下草を踏む音が遠ざかるのを聞きながらアラーハのたてがみを指で軽く。

「フギン、どうしたら信じてくれるんだろう。もう諦めた方がいいのかもしれない……」

ほかの守護者に目の前で変身してもらおう。アラーハのことを語ってもらおう。それよりいい手段がほかにあるとは思えない。万策つきたと言っても良さそうだ。そして、アラーハはこれからますます人の心を失っていく。人の言葉も忘れていく。

なでられるままじっとしていたアラーハがぐるりと振り返り、ウラルの目をのぞきこんだ。

フギンのことはもういい。気にするな。

ありがとう。

まっすぐに向けられた瞳は、はっきりとした言葉を宿していて。「そうよね、馬だって犬だって心を持つてる。イツペルスだって。

完全に獣になっても、全部わからなくなるわけじゃない。完全に人の心をなくしても、私やフギンがわからなくなるわけじゃない……」

ああ、とアラーハが嘆息するような声を出した。ウラルは涙をこらえ、ぐっと額をアラーハの首に押しつける。

ケナイが言っていた「認める」というのは、きつとそういうことなのだ。

結局閉門ぎりぎりまでアラ―八と一緒にいたウラルは日暮れ直後の薄明の中、宿に向かっていた。夕飯までに戻るとは言ったが、食べる先は屋台なのだ。具体的な時間を言ったつもりが妙に幅のある表現だったなと苦笑いしつつ、まあべつに真つ暗にならないうちに戻ればフギンも怒らないだろうと思いつつ。

思えばこうして一人で町を歩くのは本当に久しぶりだ。あの森の隠れ家を旅立って以来、フギンがずっとそばにいた。ウラルがどこか知らないところへ行ってしまうないように、恐怖の色さえ浮かべてウラルのそばを片時も離れなかった。

ひとりでぶらりと散歩に行きたい衝動にかられたが、ぐっとこらえた。これ以上遅くなつてはフギンが心配するだろうし、暗くなつてからの女の一人歩きは危ない。今まで本当に窮屈だったが、フギンも本当にウラルのことを思ってくれているのはわかつている。今回こうしてちゃんと戻っておけば、次からはもう少し自由にさせてもらえるだろうか。

今夜の宿は、この町では中規模の酒場の二階にあつた。荷物を置きに昼間来たときは酒場の入り口からフギンと一緒に入ったが、今その入り口は仕事帰りの一杯をひっかけようと来た男らでにぎわっている。その中を女一人でつっきっていくのは怖くて、ウラルは酒場のすぐ脇にある路地へと回った。酒場を通らず二階の部屋に戻るよう、建物の脇に階段が取りつけてあつたのだ。

狭い路地に入ろうとしてウラルは首をかしげた。階段のわきに何か光るものがある。夕暮れ後の赤い薄ら明かりに照らされて、ぼんやり金色に光るもの。

近づいてみれば、金色の小さな短剣だった。チュユル、八枚花弁の金百合が刻まれた真鍮のアサミイ。ぐっと胸元のペンダントを握りしめる。見覚えのありすぎるアサミイに胸がどくどくと高鳴っていた。なくしてしまったジンのアサミイに瓜二つ。

なぜここに。似ているだけの別物だろうが、なつかしかった。ゆつくりとかがみ、拾い上げようと手を伸ばし

ふつとアサミイを輝かせていた光がさえぎられた、と思った瞬間、口元になにか湿った布があてられた。慌てて振り払おうとしたが、すぐさま背後から羽交い絞めにされる。暴れた拍子に大きく吸いこんだ息、鼻から入ってくる嫌なにおいとぼやける頭。

眠り薬だと直感し、とつさに息を止め体の力を抜いた。それでも緊張に体はこわばっていたはずだが、背後の男は気づかなかつたらしい。そつとウラルの口元を覆っていた布をはずした。

「Mesze・Ural… Iuime serxu.（ウラルさん…：申し訳ない）」

降ってきたベンベル語にぎよつとしたが、なんとか驚きの声は出さずにいられた。

シャルトル。ヒュガルト町に帰ったのでははなかつたか。いや、それはただの予想だ。本当は執念深く追い続けていて、チャンスがつかっていたに違いない。ウラルとフギンが油断する、互いに単独行動に出る、その機会を。

シャルトルがここにいるということは、エヴァンスも近くにいないはずだ。けれど声はしない。足音も、気配もない。どこにいるのか。まさか、フギンのところにいるのでは。

シャルトルはウラルを背負おうとしている。ウラルを一度壁にもたれかからせ座らせて、ウラルの両腕をとって自身の肩に回し。

立ちあがりかけたその一瞬、ウラルはシャルトルの腰のあたりを思いきり蹴りつけた。油断していたらしいシャルトルはあっけなく前につんのめり、体勢を崩す。その一瞬にウラルは立ちあがり、路地の入り口に向かって駆け出した。

「助けて！ 助けてください！」

酒場の男らに大声で助けを求める。シャルトルは追ってこなかった。分が悪いと判断したのだろう。それとも呆然としていたのか。

「どうしたね、お嬢さん」

「フギンを、連れを知りませんか！ この宿に泊まってる片腕の男なんです。ベンベル人の二人組みに命を狙われているんです」
酒場がざわつきはじめた。

「あの男なら馬のところに行くと言っていましたかねえ。本当ですかい？」

馬、とつぶやき、ウラルは中庭に続くドアに手をかけた。宿や酒場の客の馬はみんな中庭につながれているのだ。

ドアを一気に押し開ける。とたん、フギンの怒声が飛びこんできた。

「ベンベル人のくそつたれが！ ここで会ったが百年目だこの野郎！」

恐慌状態の馬の群れの中、剣を振りかざした金髪の男と義手で剣を受けているフギン。フギンも油断していたようだ。武器は何も持っていない。左手に誰かの乗用鞭を持っているだけだ。

「フギン、危ない後ろ！」

フギンが身をひるがえた瞬間、今までフギンがいた場所に矢が音を立てて突き刺さった。ウラルを諦めたシャルトルが路地の間から弓でフギンを狙っている。

「お嬢さん、中へ。大丈夫か！」

こうなれば酒場の男らも黙っていられなかったようだ。勇気のある男らが十人ばかり武器を手にフギンの加勢に出てくれる。

「もう大丈夫だ、まあ座んなよ。なにか飲み物、いれてやるうか？」

店の主人が椅子を持ってきてくれた。座ったとたん眠気が襲ってくる。さつき一瞬吸いこんでしまった眠り薬が効いてきているのだ。眠りこみそうになるのを必死でこらえ、中庭の音に神経を集中する。エヴァンスは凄腕だ。シャルトルもあの弓の腕。大丈夫だろうか……

…。怒声の応酬と馬の悲鳴。

眠ってはいけない、いけないと思いつつ少し寝ていたらしい。

中庭に面するドアが開く音でウラルはあわてて顔をあげた。

むっと血と汗のにおいが香る。フギンの加勢に出てくれた男らが

うめきながら酒場になだれこんできた。

「くそつ、なんて野郎だ……」

うめいた男にウラルはあわてて駆け寄った。傷の具合を確かめる。右腕に大きな傷を負っていた。

「ごめんなさい、今すぐ手当てを」

あわてて荷物の中にある薬を取りに走ろうとしたウラルを男が止めた。

「ここにいなさい。一人にならない方がいい」

ウラルはうなずき、震えながら自分のシャツを破いて止血をする男を手伝いはじめた。

「おい兄ちゃん、動けないやつが二人、外にいる。手当てしてやってくれ」

呼びかけられた若い店員がうなずき、走り出ていった。フギンの顔はなだれこんできた男らの中にない。その「動けない二人」のどちらかだろうか。

「嬢さん、あの片腕は自分がベンベルどもを引きつけるから、嬢さんを頼むって馬で逃げていったんだ。やつはほとんど無傷だったし、剣も渡したんだが」

男の言にウラルは息をのみ、奥歯を噛みしめた。

ひとりにしては危ない。二対一でまともに戦うことになれば、フギンに勝機はないのだ。それでも何の関係もないのに体を張ってくれた彼らには文句の言いようがなかった。ごめんなさい、ありがとうございます、を繰り返しながら手当て道具一式を持ってきてくれた酒場の主人に礼を言い、縫合用の針を強い酒に浸して消毒する。

「あのベンベル人……十人がかりでもかなわないなんてな。すまんなんとかしてやりたかったんだが」

自嘲する男の傷を、ウラルは真っ青になりながら縫い始めた。

第二章 1「邂逅」 下

中庭で動けなくなっていた二人は足を切られていたが、他の者は全員が全員、ものの見事に利き腕を傷つけられていた。

村で育った娘として手当ての基本は身につけているし、アラール八のおかげで薬草の処理はひと通りできるウラルだが、こんな大人数のひどい切り傷を手当てするのは初めてだ。途中からは呼び出された医者がやってくれたが、ウラルは肉体的にも精神的にもへとへとになっていた。

もう真夜中もいいところ、一日に八度色を変えるナタ草は赤からオレンジに色を変えている。これが次の色、黄色になったら夜明けだ。フギンは無事だろうか。

「お嬢さん、疲れてるとは思っただが宿を変えたほうがいい。通り一本隔てたところのキャラバン亭に話を通しといたから。その名の通り隊商がよく泊まる宿で、ちょうど今も一組泊まっているのかな。腕の立つ護衛も何人か一緒に泊まっているらしいから、やつらも簡単に手が出せないだろう。あの片腕の男が帰ってきたらそっちに行くよう伝えっから」

「本当に何から何まで申し訳ありません」

頭を下げるウラルに酒場の主人は笑い、荷物をとっておいで、と優しく言ってくれた。

部屋に置いてあった二人分の荷物を取って返し、迷惑料と怪我を負った人の治療費としてカウンターに銀貨二枚を置く。フギンが馬で逃げたことを教えてくれたあの男と、あの一騒動が終わった後に来た無傷の二人がキャラバン亭まで送ってくれることになった。

「荷物、持ってやろう」

ウラルは申し訳なさそうな顔をしていたのだろう。右腕に包帯を

巻いた男は笑った。

「そんなしけた顔、せんでくれよ。男ならみんなああするさ。助け求めて駆けこんできたお嬢さん助けて、騎士みたいにちゃちゃっと相手を返り討ちにして万々歳、なんざ誰でも一度はやってみたいと思つよ。そうできなかつたのは悔しいがなあ」

異国の騎士と酒場のちんぴら、相手とこちらの立場が逆だったら男の言うとおりになつただろう。相手が相手だとわかつているのに助けを求めてしまった。ひどい怪我までさせて、今はもうただひたすら申し訳ない。

「あの片腕、無事に逃げ延びてるといいな。そりゃそうだ、連れが行方不明に生死不明じゃしけた顔にもなる。嬢さんの旦那か？」

「いえ。昔の仲間で、今は一緒に旅をしてるんです」
「恋愛関係はない？」

うなずくと男は「それはないよなあ。本当か？」とおおげさに眉をあげてみせた。

会つて間もないのにそんな突っこんだ話をされるのには面食らつたが、歩きながらぼつぼつ話すうち、単に話を明るい方向へ持つていこうとしているだけだと気がついた。さりげない優しさに思わず涙が出そうになつた。

「さ、あれがキャラバン亭だ」

真夜中でも明りが入っている宿屋を指す。さすが隊商御用達とだけあつて大きな宿だつた。

「宿に入つたら、とりあえず眠りな。ホットミルクにブランデーをちよこつと入れたやつでも飲んでよ。明るくなつてもあの男を探しに外へ出ちゃいけない。なにか情報が入つたら教え……」

男の声は、もうひとりの男の悲鳴にかき消された。とつさに右腕に傷のある男の背後にかばわれた一瞬、二人目の悲鳴があがる。そこでやっと二人の右の二の腕に矢が突き立っているのが見えた。

「走れ！ 逃げるんだ！」

裏路地に向かつて突き飛ばされる。瞬間、男の右の包帯の上にさ

らに矢が立った。明るい宿の脇の路地、明るい光の脇でひときわ黒々としている闇の中、こちらを狙う矢尻だけが強く輝いている。傷つきながらも路地のウラルの前に立ちふさがろうとした男を、闇の中の矢尻は狙っていた。

「ごめんなさい。ごめんなさい……」

狙いはウラルだ。男がこれ以上傷つけられないようにするには、ウラルがここを離れるほかがない。

ウラルは路地の奥へ走り始めた。何事かと宿から飛び出してきた者の足音と悲鳴、それに混じって聞こえてくる冷静な靴音。重いブーツが石畳にぶつかる音。追って、きている。

目的地のキャラバン亭の脇から矢が飛んできたのは偶然ではないだろう。もとの宿からここまでの道中で襲われていたら、ウラルは迷わずキャラバン亭を指して逃げていたはずなのだ。つけられていた。話の内容を聞かれていた。先回りされて、逃げこめる場所から正反対の方へ逃げざるを得ないよう、仕向けられた。

ウラルはこの町の地理はまったくといっていいほどわからない。がむしゃらに逃げるほかなかった。けれどそうして逃げていては、いいように追いつめられるのは目に見えている。あれだけ追跡に長けたエヴァンスとシャルトルだ、この町の地理くらい昼の間に調べつくしているだろう。うまくウラルを誘導して、袋小路に追いつめて……。

どうにかして安全な場所に行かなければ。でもそんな場所がどこにある。どこかの頑丈な建物？ 町が寝静まっている今、開いているのは酒場くらい。じゃあ酒場？ さっきの男のような人を増やすのか。ウラルのせいで傷つく人を。キャラバン亭？ がむしゃらに逃げてきたおかげで、とうに帰り道などわからない。

なんとか逃げ隠れして朝まで時間を稼ぐしかなかった。夜が明ければ門が開く。たくさんの人の中にまぎれていればエヴァンスも剣を振りかざすことなどできないし、見つかりにくい。そしてなんとか町の外へ出られれば、森に逃げこんでアラールに助けを求められ

る。

一度立ち止まってあがった息を整えた。耳をすます。ブーツの音は聞こえなくなっているが、それがかえって怖かった。はじめのうちこれみよがしにブーツの音を響かせていたのは、「近づけばブーツの音がする」とウラルに思いこませるためだったのではなからうか。途中で音の立たない靴にはきかえ、すつと背後から忍び寄りられてもおかしくない。

立ち止まって路地の壁に背中をつけ、左右に目を走らせながら息を整えた。

「フギン……」

フギンもこんな逃げ隠れを続けているのだろうか。それとも、もう。

ポケットに入れてあった犬笛を唇に当てた。フギンは気づかなくとも、フギンが乗っている馬が気づくことを祈って。気づいたところでどうしようもないのはわかっているのだが。

(気づいて)

吹かずにいらなかった。人の耳にはかすかにしか聞こえない音が響き渡る。

とたん、周りの家で飼われていたらしい犬の一匹が狂ったように吠え出した。一匹が吠え始めればあとは一気だ。周りの家の犬たちも呼応して吠え立てる。

逆に目立つ結果になってしまったのにウラルは内心悲鳴をあげた。うるさい！ とあちこちで犬を叱る声が聞こえてくる。あわれな犬が鞭で打たれる音、そして一件の家にぽつりと明かりが灯った。

目だってしまった恐怖に体は震えていたが、人の気配に、明るさにほっとして思わず涙が出そうになった。けれど追ってくるエヴァンスか、あるいはシャルトルには、ここに自分はいるぞと大声で伝えてしまったようなものだ。

(人の気配のあるここにとどまるか、離れるか。……そうだ)

ウラルは一瞬迷い、ぱつと駆け出した。興奮した犬たちが鳴きや

まぬうちに二度目の笛を鳴らす。犬たちはいつそうやかましく吠え立て、それを何度も何度も繰り返していると、かなり広範囲の犬たちが一斉にけたたましく吠えるようになっていった。

犬にも人にも迷惑な話だが、犬の鳴き声に気をとられてくれれば霍乱になつたはずだ。鳴き声で起き出してくれた人々が家に明かりをともし、口々に犬をののしっている。わざわざドアを開けて犬を飼っている家に怒鳴りこむ人までいた。心の中で謝罪しつつも、人の気配の多さにほっとした。

これだけにぎやかなのだ。ずいぶん探しくなくなっただろう。犬が吠えている間は休むことにして、ウラルは路地の物陰にずるずると座りこみ、痛む足をさすった。

空を見上げれば東の空がうすばんやり明るくなってきている。もう少した。もう少したで門が開いて、町の外に出られるようになる。

騒いでいた犬たちが少しずつ、少しずつ静かになっていった。家に灯っていた明かりがひとつ、またひとつと消えていく。ざわついていた未明の町が、未明らしい静けさを取り戻していき……ざわざわしていた空気の中では気づかなかつたブーツの重々しい足音が、遠くからカツン、カツリ、と聞こえてきた。

ぎよつと荷物をかき抱く。ウラルがここにいることはまだばれていないはずだ。猟師がシカの足跡を探すようにウラルの気配や痕跡を探しているだけ。実際、ゆっくり歩く足音だ。見つかっていれば足音を忍ばせ一気に近づいてくるはずだから、まだ見つかっていないのだろう。見つかっていないはずだ。けれど足音はずいぶん近い。逃げるべきか、素通りしてくれることを祈りながらここにとどまるべきか。

ウラルはそろりと立ちあがり、忍び足で歩き出した。と、前方になにか白いものが転がっている。布、どうやら服のようだ。

近づいてみてぎよつとした。フギンの服だ。

思わず手に取ろうとしたが、ぐつとこらえる。フギンは今日、どの服を着ていただろう。この服でなかつたのは確かだ。これはフギ

ンの荷物、キャラバン亭に行く道中、送ってくれた男たちが持ってくれた荷物の中に入っていた服。

畏だ。昼間シャルトルがアサミイでウラルの注意を引いたように、次はフギンの服で同じことをやろうとしている。

ウラルはすばやくあたりを見回し、耳をすませて足音のリズムに変化がないのを確かめ、さっと服をまたぎ通ろうとした。

ち、りん。

突如鳴った鈴の音にウラルはぎよつと足元を見た。黒い糸が足に引っかけり、その先に鈴がついている。服を手取るうとしても、無視して通ろうとしても、ここを通れば鈴が鳴るしかけ。

静かに歩いてきた足音が一瞬止まり、駆け足に変わった。あわててウラルも走り出し、にぎりしめていた犬笛を走りながら口に当てる。数匹の犬が吠え始めたが、追いつがる足音は乱れない。

がむしやらに逃げるしかなかった。もう、この手は使えない。

狭い路地の向こうにぼつかりと開けた場所が見えていた。町の中央広場だ。こんな緊迫した状況でなければわかる場所に出てほつとしたらう、ここから記憶を確かめながらキャラバン亭か、泊まっていた宿にそつと戻ろうとしたらう。けれど今は開けた場所、見つかると可能性の高い場所に行きたくなかった。それでも曲がれる角はない一直線の路地、広場へ飛び出すほかがない。

路地を一步出た瞬間、ぐつと腕をつかまれ壁に押しつけられた。

先回りされていたのだ。路地の出口のすぐ脇、ウラルの死角になるところで待ち構えられていた。

「半年ぶりか、ウラル」

ああ、とウラルはあえいだ。青い瞳が至近距離にある。夜目に鮮やかな金の髪がウラルの息でかすかに震えていた。

「エヴァンス……」

「やってくれる。よくぞここまでわたしから逃げおおせたものだ」
とうとう獲物を捕らえたのだ、笑うくらいはしてもよさそうだがエヴァンスは無表情だった。走ったために息は荒いが平静のまま、

淡々と。

「フギンは」

「シャルトルが追っている。わたしが追うべきだったのだろうが、シャルトルはお前に甘い。任せられなかった」

場違い、相手違いに思えるほど詳しい答えにウルルは震えた。この男は茶飲み話をしながらでも人を殺せるに違いない。もつとも、エヴァンスが茶飲み話をするかどうかはかなり疑問だが。

「どうしてあなたが。私やフギンがあなたを殺そうとするのはともかくとして、どうしてあなたが私を殺そうとするんですか」

「宗教上の理由だ。お前たちは一年前、わたしに切りかかり、応戦したわたしは聖なる祭壇を血で穢してしまった。その罪を問われ、わたしは教会から追放されたのだ。ウルル、フギン、ダイオ、この三人の命をこの手で絶ち、我らの神にささげるまで、わたしは赦されぬ。お前の命が必要なのだ」

「そんな」

ウルルを壁に押しつけていた手の一方がはずれ、ウルルの首にかかった。

「死ぬ前に言いたいことがあれば、言うがいい」

エヴァンスの指はぴたりとウルルの頸動脈を押さえている。ウルルはその手首を両手でつかみ、全力でひきはがそうとしたが、太い男の腕はびくともしなかつた。

「死にたくない……」

エヴァンスは動かない。

「死にたくない。ジンに助けてもらった命、こんなところで、失いたく、ない……」

言い終えたその瞬間、エヴァンスの腕に力がこもった。正確に頸動脈を押さえられ、一瞬で視界が暗転していく。息ができない。体が冷たく痺れていく。ベンベル人が祈りのたびに唱えていたあの歌のような祈りの言葉がぼんやり聞こえた。エヴァンスが低く、低く唱えながらウルルの首を絞めているのだ。死の感触がウルルを押し

つつむ。

エヴァンスの手首をつかんでいたウラルの手が力を失い垂れ下がった、そのとき。

急に息苦しさが消え、ウラルはがっくりと地面に倒れこんだ。弱弱しく咳きこんだ瞬間、地面に当たっている頬からすさまじい地響きが伝わり、ウラルは驚きに目を開いた。

剣を抜いたエヴァンス、それに対峙する巨獣。激怒し巨大な枝角を振り回すその姿は。

「アラーハ」

どうしてウラルの危機がわかったのか。

「そつだ、犬笛……」

石畳に転がった犬笛を握りしめ、ウラルはよろよると上体を起こした。この真夜中、何度も何度も鳴り響く犬笛の音に事情を察し、城壁を飛び越えるか強行突破するかして来てくれたに違いない。

オオカミに子どもを襲われたとき、イッペルスの親はこうして戦うのだろうか。耳をびったり後ろに伏せ、歯をむきだし、うなり声を漏らすさまはとても草食の獣とは思えなかった。エヴァンスの剣を右のツノで受け、瞬間首をひねって左のツノで横殴りにする。転がって避けたエヴァンスを前足の蹄が襲う。アラーハの背後に逃げれば必殺の蹴りが飛ぶ。

これにはエヴァンスといえども反撃の暇がない。さつと後ろに跳び、ウラルが出てきたばかりの細い路地に入った。アラーハが追うが、狭すぎてとても入りこめない。

「ウラル、その獣はお前に従っているのか」

路地の奥でエヴァンスの苦々しげな声が出た。アラーハは悔しげに路地への体当たりを続けている。

「ウラル、無事か！」

「スー・エヴァンス！」

激しい蹄音と共に、鞍上のフギンとシャルトルからそれぞれ声が飛んだ。一晩中駆けながら戦い続けていたのだらう、馬もゴーラン

も口から泡を吹き、鞍上の二人も満身創痍になっている。それでも無事だ。無事だった。

「ごうん、ぎいい、と遠くで城壁の開く音がする。はっと空を仰げば夜明けを迎えていた。市場に出される野菜を満載した大八車の音がいくつも迫ってくる。」

「Chartre, lia ieouw. Utte marperse. (シャルトル、撤退だ。仕方あるまい)」

再び路地の奥から苦々しげなエヴァンスの声が響いた。

「ウルル、また会おう。次はその獣ぬきでな」

路地の奥でエヴァンスがきびすを返した。全身の筋肉を緊張させ枝角をゆすりながら、どんな肉食獣でも震えあがりそうなすさまじい目つきでアラールがその後姿を見送っている。シャルトルも剣をおさめ、さっとエヴァンスが去ったほうへと駆けていった。

「たす、かった……」

ウルルは締められた首に手をやった。ウルルの手の動きを追ったフギンがぎよっと目を見開く。くつきりアザが残っているに違いなかった。

「アラールが来てくれなかったら、来てくれるのがあと十秒でも遅かったら、私、私……」

いまさらではあるが体が震え始めた。涙がひと筋こぼれ、ふた筋こぼれ、あふれて止まらなくなる。

呆然としていたフギンが鞍から降り、そっとウルルの前にかがんで頭をなでてくれた。

「あの野郎」

憎悪に満ちた呟きとは正反対に、フギンの手は優しさといたわりに満ちていて。

座りこみ、震えながら泣いていたウルルの肩を、そっとアラールがつついた。周りを見ると言いたげに顔をあげる。

市場に野菜を運んできた人々か、あるいは買い物に来た人々か。野次馬がぞろぞろと集まり始めていた。

「ここはまずい。立てるか？ とりあえず隠れないと」

フギンは路地裏へ入りこもうとしたが、アラーハの巨体を見て顔をしかめた。ただでさえ体の幅が馬以上に広く、枝角の幅は片方だけでウラルが両手をいっばいに広げた広さはあるイツペルスだ。アラーハが入りこめる路地などない。通れる道は大通りだけ。

「強行突破で町の外に出るしかないな」

苦笑しながら差し出してくれたフギンの手にすがり、ウラルはよろよろ立ちあがる。

さつきフギンが入ろうとした路地の入り口に黒い布が落ちていたのが目に入り、ウラルはゆっくりと歩み寄った。かがんで取りつけられていた鈴つきの糸を引きちぎり、広げてみる。

ジンの黒マントだ。フギンの荷物の底に入っていたものをエヴァンスが畏に使ったに違いない。ウラルはそれを丸めて胸にかき抱いた。

「えー、ごめん、みんな。このイツペルスを森に帰してやりたいんだ。道、あけてくれないか？」

ウラルの後ろではフギンが声を張りあげている。野次馬たちは目を丸くしながら道を空けてくれた。残るは何事かと門から駆けつけてきたベンベル人だけだ。

「ウラル、一気に門を突っ切るぞ。なに、そのイツペルスの巨体なら誰も前に立ちふさがろうとなんかしないさ。さ、乗せてもらえ」

ウラルはアラーハを見つめた。この大群衆の中でイツペルスに、人に慣れない獣の背に乗る？

「ディアンと一緒に乗せてもらえない？」

「ディアンは疲れきってて、どうも二人乗りは無理そうなんだよ。さ、早く。ベンベル人に取り囲まれるぞ」

恥ずかしいが他にどうしようもなさそうだ。ウラルはアラーハに向き直った。

「アラーハ、乗せて」

四肢を折ってくれたアラーハの背にまたがると、野次馬たちから

いつせいにどよめきがあがった。

「地神さま……！」

どよめきは数瞬で歓声に変わった。

フギンが馬腹を蹴る。神の到来と勘違いした群集の大歓声を受けながら、ウラルとフギンはセテーダン町で一番大きな門に突っこんだ。

第二章 2 「布に覆われた顔の下」 上

ウラルとフギン、アラールは森の中に座りこみ、地図に見入っていた。

大あわてで町を出てきたはいいが、あの混乱の中でフギンの荷物、ジンのマント以外の荷物をまるまる失っているのだ。軽いパンや干し肉はウラルの荷物の中、今ここにあるのだが、重い鍋や水は全部フギンの荷物の中に入ったまま。特に水は大問題だった。せめて水筒があればいいのだが、いまさら町に買いに戻るなどできるはずがない。

不幸中の幸いというべきか、フギンもウラルも貴重品はベルトにつけたポケットの中に入れていたからお金の心配はないのだが、一刻も早くどこかの町に立ち寄って補給をしなければならなかった。

「でも、どうにかあの金髪野郎を巻かなきゃならないからなあ。くそっ、右腕があつたらあの栗毛だけは仕留められたのに。できれば一番近い町に今日にでも駆けこみたいところなんだけど、俺はなんとしてでもダイオに会いたい。あんなとんでもないオマケをつけていくわけにはいかないから、なんとしてでも振り切らないとだめだ」

フギンは一本しかない腕でいらいと地面を叩いている。

「俺の案はこうだ。やつが予想もつかないほど遠くの村まで補給なしでつつきつて、大回りで隠れ家へ向かう。ウラルにはすごい強行軍になつちまうけど、足跡は多分くらませる」

「補給なしでつてどうするの？ 水なしじゃ限界があるでしょう」

フギンは地図の一点を指した。森のど真ん中をつつきるように指を動かす。

「ここに川つて言えるかも微妙な細い川が通つてるんだ。いかにも湧き水つて感じの、一歩でまたげるような細い川。もちろん地図には載つてない。で、このあたりに」

さらに森のど真ん中、細かな木で埋めつくされた一点を指した。

「隠れ里、っていうのかな。すごいちっちゃい村があるんだ」

「どうしてそんなことがわかるの？ フギン、もしかしてこのあたりの地理、詳しい？」

「いや、とフギンは首を振り、ちらりと笑った。

「その隠れ里、実はネザの故郷なんだ。一回だけみんなで行ったことがあってさ」

ウラルは目を見張った。

「どうして隠してたの？ 私が行きたがることくらい想像ついたでしょ？」

「今まですっかり忘れてたんだよ、地図見て考えてたら思い出した。うってつけだろ？」

ウラルはうんうんうなずいた。

「行きたい。もしかしたらネザがいるかもしれないし」

「いや、それはないと思う。ネザ、自分の村に帰るの嫌がってたんだ。一度俺たちと行ったときも否応なくというか、なんとというか状況でさ。村に帰っても赤の他人みたいなふりして、ネザかって聞かれても違うって答えてた。親兄弟もいないみたいだったし」

そうなんだ、とウラルはうつむく。となれば本人の知らないところで故郷に立ち入るのは、家主のいない家に無断で立ち入るとそんなに変わらない、ばつの悪い感じがした。それに、もしネザの消息を聞かれても答えられないのだ。それを思うと寂しい。

フギンは腰をあげて帽子をかぶり、尻についた土をパンパン払った。

「よし、とりあえず決まりだな。早いとこ小川へ行こうぜ。俺、喉渴いちゃった」

森の中を進むとフギンが言った通りの小川があった。水の流れを擬音で表現するなら「ちよろちよろ」だ。「さらさら」や「ごうごう」からは程遠い。あとはそれに沿って下流へくだっていけばいいという。

水筒はないが真横に川があるのだから水には困らないし、鍋がな

くて煮炊きはできないが、そのまま食べられるパンや干し肉はウラルの荷物の中にある。用心のため夜は火をたけないが、さいわいまだ寒くはない。むしろ暑いくらいだから、数日くらいなら問題なくしのげるはずだ。

馬とイッペルスの歩きやすい道を探しながら二人は歩き始めた。

*

「隠れ里」に到着したのはそれから一日半後の夜だった。そろそろ野宿する場所をと探し始めたときに村からあがる炊事の煙を発見、それを頼りに向かってきたらすっかり遅くなってしまった。夕食時が終わり、もうみんな寝支度をはじめるところあいだ。

「こんな時間に村入ったら怪しまれるよなあ。こんな偏狭なんだ、よそ者には厳しい村だろうし。やっと着いたけど適当な場所探して村の外で野宿した方がいいかもな」

たしかにそうだ。長いこと森の中を歩いてきたから人恋しかったが、怪しまれ叩き出されては元も子もない。

いくぞ、とフギンが馬首を返す。ウラルも続こうとしたのだが。

「アラーハ、どうしたの？」

アラーハが動かない。首をあげ立派な枝角を高々かかげて何か、村の中の何かを見つめている。

「フギン、ちよつと待って」

フギンを呼び止め、ウラルもアラーハの見ているほうに目を凝らした。アラーハがかすかに鼻を鳴らし、それからゆっくりと村へ向かって歩き出す。

「ちよ、おいおいウラル、こんな時間に入っちゃまずいって」

フギンの制止などアラーハは聞いていない。止まるどころか足を速め、ついには走り出してしまった。

「アラーハ、止まって。どうしたの、今まで人のいるところ避けてたのに！」

あわてて叫んだがアラールはむろん止まらなかった。耳をぴんと前に向け、一目散にどこかへ突っ走っている。アラールが走る理由を見つけるほうが先決だと判断し、ウラルはアラールの向かっている方に神経を集中した。

「笛の、音？」

かすかな音だが間違いない、聞き覚えのある楽器の音色。

「このバカイツペルス！　なんでまた急に走り出すんだ！」

「フギン、耳をすませてみて。フルートの音が聞こえる」

「フルート？」

追いかけてきたフギンが鞍上で首をかしげたそのとき、アラールが急に走るスピードをゆるめた。前に放り出されそうになるのをウラルは慌てて立て直す。

アラールが止まったのは村はずれにぽつんとある小さな家の前だった。フルートの音はこの家から聞こえてくるようだ。

しばらく鞍上で耳をすませていたフギンが血相を変えて馬から飛び降りると、ドアの前に駆け寄った。慌てている割にはすぐノックをしない。混乱しているのかもしれない。

少しばかりドアの前で落ち着きなく足踏みをしてから、コンコン、と軽くノックをする。

「どなたです？」

フルートの音がやみ、落ち着いた男の声が返ってきた。聞き覚えのある声。

「イズン、イズンなのか？」

「その声、まさかフギンですか？」

「そうだよ、フギンだ！」

ぱっとドアが開いた。フルートを持ったイズンがドアノブをにぎり笑っている。

「イズン！　イズンだ、イズンだ、イズンだ……！」

イズンの姿を認めるなりフギンが飛びつき抱擁した。

「フギン、アラール、ウラルさんも」

アラールも嬉しそうに鼻面をイズンに向けて伸ばす。ウラルもアラールの背から飛び降り、イズンの手をにぎった。

「本当に三人とも無事でよかった。フギン、その腕はあの戦ですか？」

「お前こそ、その顔」

これですか、とイズンは顔の半分を覆う布に手をやった。白と何種類かの灰色でキルトのような模様を描いた布がぐるりとイズンの鼻から右の耳、後頭部までを覆っている。額には金属の輪のようなものはまっっており、布はそこから垂らされているらしい。

イズンはほんの少し、口元の布をはだけた。赤黒くただれた皮膚をわずかに見せ、すぐに布を元通り垂らす。明らかにひどい火傷だった。

「火薬の攻撃を受けましてね、顔の右半分と右肩までが全部これなんです。右目は見えませんし、右耳の鼓膜も破れているので、右側から僕に話しかけるときは気をつけてくださいね。聞こえづらいんです」

「ひえー、よく生きてたな」

間拔けた声をあげるフギンにイズンはからからと声をあげて笑った。

「それはお互い様でしょう。さ、立ち話もなんです。入ってください。アラール、珍しいですね、ずっとその姿でいるなんて。いつから趣旨替えしたんです？」

ウラルはぎよつとイズンを見返した。そういえばイズンは最初から、このイツペルスのアラールだと知っているようだ。

「イズン、お前までそう言うのか？ このイツペルスをアラールだっつて？」

顔をしかめるフギンをイズンは困ったように見つめ、ウラルに目をやって、はっと何かを思い出した顔つきになった。

「まさか、人の姿に化けたくとも化けられなくなっただんですか？」

「イズンは知ってたの、アラールのこと？」

やっぱりそうですかと言いたげにイズンは悲しげな顔をして、それからふつと微笑した。

「僕を誰だと思っているんですか、森でアラーハと一緒に暮らしていた野生児のジンを引き立てて、スヴェルを作った男、ジンの最初の仲間ですよ？ アラーハは当時、人の姿をしていたても行動がほとんど獣で、しかも頻繁に人獣姿を入れ替えていましたからね。僕としてはなぜアラーハがウラルさんに正体を明かしたのか疑問なくらいで」

「そうだったの？」

全部初耳だった。フギンは隣で頭をかかえている。

「もしかして、アラーハのことはフギン以外みんな知ってた、なんてことじゃないよね？」

「まさか。ちゃんと知っていたのは僕とジンとウラルさんだけです。でもみんな薄々感じていたんじゃないかな。まったく知らなかったのはマームさんくらいで。どうしても家で食事をとらないのか、って機嫌が悪くなるたび怒ってましたもんね」

アラーハがため息のつもりか軽く鼻を鳴らした。

「フギンは感じていてる方だと思っていましたが。だってほら、一度アラーハが暑い盛りでも毛皮を脱がないのを面白がって、リゼと二人で毛皮を脱いだところを見てやるうって池で待ち伏せしていたことがあったでしょう。あれにはアラーハも参ったと言っていましたよ」

ウラルは思わず吹き出した。たしかにフギンならやりそうだ。フギンは「なんのことだよ」と目を泳がせている。

「さてと、アラーハが家に入れないならどうしましょうか。窓際で話しますか、それとも椅子でもここに持ってききましょうか？ 今日泊まっていきますよね」

アラーハがとことこと家の側面へ歩いていき、窓の前にどっかと腰をおろす。フギンは馬のディアンを手近な木につなぎ、鞍をおろしたり水を持ってきたりと世話を始めた。

イズンが家の中へ入るよううながしてくれたので、ウラルはありがたく入らせてもらった。イズンを手伝ってお茶を沸かし、軽食を準備し、窓際に三人分の椅子を持っていく。ちょうど準備が整ったところでフギンが家に入ってきた。

「そっぴやイズン、この村の人、全然起きてこないんだな。この夜中にあんな蹄の音たてて、絶対どなりこまれると思ってたんだけど」
ああ、と、イズンは村の中心部を見やった。

「ここは普通の村じゃないんですよ。地図に載っていない隠れ里、別名を『まじない師村』。占い師か預言者が薬草土が一家に二人はいる村なんです」

「まさか、占いで俺たちが来るの、わかってたって？」

「占い師ふたりと預言者ひとりが今朝、今夜僕に來客があると言っていたんですよ。三人が同時に同じ予言をするのはめったにないのです。これは当たるだろうと今朝から村人みんなで覚悟していたんです。やっぱりな、イズンのところへ行くんだな程度にしか思っていないはずですよ」

フギンが本当かよと言いたげに窓から外を見やった。

「フギン、この村には一度來たことがあるんじゃないの？」

「あの時は村のはずれにテント張って泊まって、次の日には出たかな。この村の中のことまでは知らないんだよ」

「このあたりの森は薬草の宝庫、この村で育った者は男も女も薬草の使い手です。幼少のネザもそうして薬草や毒薬の使い方を学んだんでしょうね」

あの猫背の軍医にも、とても想像できないが子ども時代があった。そしてこの不思議な村が生まれ育った町なのだ。

「ネザが育った家、まだ残ってるかな」

イズンが微笑した。

「この家ですよ」

「え？」

「僕たちが今いるここがネザの生家です。長年空き家になっていた

のを僕が借り受けていたんですよ。これも何かの縁だろうと」

ウラルはぼかんと家を見回した。こぢんまりした小さな家。家具らしいものといえば四人がけのテーブルに椅子が四脚、ベッドが三台、キッチンに食器のほとんど入っていない食器棚がひとつ、それだけと、あとはイズンが持ちこんだらしい書物が何冊か置いてあるだけだ。家主が出ていって何年にもなるのだから殺風景なのは当たり前なのだろうが。

「さっぱりしているでしょう。ところが、ここがネザらしいところだね」

イズンは部屋の真ん中に置いてあるテーブルをずりずりと部屋の隅へひきずっていった。テーブルのあったところには小さな穴がふたつ、あいている。イズンはそのどこからか持ってきた金具を持つてくるとはめこみ、ぐつと力をこめた。

「ネザのお父さんはこういう仕掛けが好きだったらしくて」

地下室だ。イズンがランプをにかけてみれば、地上の殺風景さは打って変わり、本当にごちゃごちゃしていた。何かの薬草か薬品かのおい、散乱する書物とぎっしり詰まった本棚。どれも誰かから借りてきた書物を手で羊皮紙に写し、自分で綴じたものらしい。字の読めないウラルにも乱筆だとわかった。ほかにはテーブルクロス、銀食器などの家財道具もたくさん詰まっている。

「これ、全部ネザの持ち物なのか？」

「いや、ネザは十歳すぎですぐに行方知れずになったそうなんでね、ほとんどがネザの父の持ち物ですよ」

「そりゃまた。ネザがあんな変人になるわけだよなあ」

イズンは笑って地下室への扉を閉ざした。

「ところでイズン、ネザの行方、知ってる？」

鍵代わりの金具をまたどこかへ戻し、再び椅子に座ろうとしていたイズンの動きが止まった。

「イズン？」

「死にました」

「え？」

イズンは微苦笑を浮かべ、ゆっくりと椅子に座ると窓の外、のぞきこんでいるアラームの方を見やった。

「亡くなっただんです、ネザは。あの戦で」

イズンはウラルに顔の右側、布に覆われ表情のうかがえない側面を向けながら静かに息をついた。

第二章 2 「布に覆われた顔の下」 中

予言が当たってしまった。猫背で蛇顔の軍医ネザはもう、この世にいない。

ある程度近況報告を交わした後、夜が更けきらないうちにイズンは「疲れているでしょう、話はまた明日でもできますよ」と寝床の準備を整えてくれた。野宿しながら森の中を突っ切ってきたのだ、疲れていないはずがないのだが、ウラルは眠れず寝返りばかり打っていた。

あの戦のとき。

伝令として飛び回っていたイズンは敵の攻撃を受け、落馬して頭を強く打ち、気を失った。意識を取り戻したときには救護テントに運びこまれ、ネザの治療を受けている最中だったという。イズンが目を開けたのに気づいたネザが何かを話しかけようとした瞬間、爆音が鳴り響き、目の前が真っ白になった。ベンベル人が爆弾を投げこんだのだ。

そのまま再び長いこと気を失っていたようで、戦いが終わった後に駆けつけたエルディタラの面々に頬を叩かれて意識を取り戻した。右の肩と顔にひどい痛みがあり、痛みのない部分は何か重いものにのしかかられて苦しかった。

その「重いもの」が、変わり果てたネザだったという。イズンを守ろうとしたのか、あるいは単に爆風でなぎ倒されたところがイズンの体の上だったのかは定かではないが、ネザが盾になってくれたお陰でイズンは奇跡的な軽症で生還できたのだ。

その後はエルディタラの世話になり、無事回復した後ヒュグル森の隠れ家へ向かったが、ウラルとはすれ違いになってしまった。シガルに教えられてジンのケルンに向かったイズンは、そこで

自分の命を救ってくれたネザの故郷へ、この隠れ里へ向かおうと決めたそうだ。

隠れ里には少し立ち寄り、またすぐ旅立つ予定だった。が、この村の長老、預言者である老婆に「探し人は半年後にこの村を訪れる。それまでここにいなさい」と言われた。半信半疑ながらも言葉に甘えてネザの家を借り、子どもたちに字を教えたり、本の複写をしたりしながら暮らしていたのだそうだ。

預言者の老婆。この村の長老なら夜が明けてから挨拶に行った方がいい。そのときに予言のこと、あの丘の夢のことを尋ねてみよう。とウラルは思った。この「まじない師村」ならきつと誰か知っているだろう。

眠れないなと思いつつ、しばらくとろとろと眠っていたらしい。気がつけば夜明けを迎えていた。

ウラルはベッドから起き上がり、ぼんやりと部屋を見渡した。ネザはどうも三大家族だったようだ。ちょうどベッドは三つあり、ウラルが使っていない二つのベッドでフギンとイズンがそれぞれ寝息をたてている。

イズンは眠るときは顔の布をはずすようだ。ずっと隠していた顔の右側があらわになっていた。端正な左半分と、赤黒いごつごつした石のマスクでおおわれたかのような左半分。その傷ついた左半分の顔はぼんやりとした闇の中に沈んでいたので怖いとは思わなかったが、悲しかった。フギンの腕を見たときの悲しさと同質のもの。

ウラルは二人を起こさないよう足音をそばだて外へ出た。井戸へ向かい、冷たい水で顔を洗う。タオルで顔をふきながらアラーハの姿を探したが、どうも草を食みにどこかへ行っているようだ。

アラーハは見当たらなかったが、かわりに家の前の道を歩いてくる小柄な人影が目に入った。どうやら朝の散歩中のおばあさんらしい。

「おはようございます」

声をかけてみると、その老婆は顔を上げた。めしいているのだろ

うか、目を閉じていたが声でウラルの位置ははっきりわかったようだ。こちらを向いて微笑した。

「おやおや、年寄りなみに早起きの子がいるようだね」

親しみのこもった口調にウラルもほえんだ。

「はじめまして、イズンの友人のウラルと申します。昨日は蹄の音をたてて申し訳ありませんでした。起こしてしまいませんでしたか？」

「大丈夫だよ、むしろ昨日は蹄の音がしなければむしろ不安だったろうから。イズン君もさぞかし喜んだろう。半年、おまえさんらを待ちわびていたんだからねえ。ひとまず隠れ里へようこそ。おまえさんが来るのは不思議なくらいよく見えた。三人で来たんだね？」

ウラルは目をしばたいた。どうやらこの老婆はイズンが言っていた預言者の一人らしい。来るのが見えたのはすごいが、人数が。

「いえ、二人なんです。私と、もうひとりフギンという男の人と」
老婆が目を閉じたまま顔をしかめる。

「じゃあ、そこにいるのは誰だね？ 地神に守られた人の気配があるけれど」

老婆が閉じた目をウラルの後ろに向けた。ウラルも肩越しに振り返ってみれば、木立の中に潜んでいたアラハが観念したように出てくるところだ。どうやら草を食みに行っていたのではなく、人の気配を感じて身を隠していたらしい。

「なんとまあ、人ではなく獣だったのかい。これじゃあ三人とはいわないわけだ」

老婆は愉快そうに笑ったが、ウラルはぼかんと口を開けるしかなかった。そこまでわかるとは、これは本当に只者ではない。アラハも困っているかみえ、ウラルの後ろで老婆をじつと見つめている。と、家のドアが開き、顔の布を整えながらイズンが出てきた。

「おや、長老。おはようございます。後で挨拶にうかがおうと思っただんですが」

「そうかね。じゃあ、朝食をとつたら来るがええ。その子にもその子の連れにもあまり時間はないようだからねえ。お茶でもいれて待っていよう」

老婆はくるるときびすを返し、ゆっくりゆっくり道を歩いていった。

「イズン、今の方が長老？ イズンに半年後に私たちが来るって言った？」

「そうですよ。びっくりしたでしょう、いろいろと」

ウラルは老婆の後姿を目で追いながらぼんやりうなずいた。

「いろいろ言い当てられちゃって。私たちには時間がないってどういふことだろう。できればゆっくりしたいんだけど」

「まあ、とりあえず朝ごはんにしましょう」

うながされ、イズンと二人で朝食の準備を始めた。

「なんか、台所に誰かが立っているのってほっとしますね」

「そう？ イズン、料理ちゃんどできるのね。もっと汚いのを想像してた」

きれいに整頓され、必要なものがちゃんとそろったキッチンはとも男の一人暮らしとは思えない。イズンは照れ笑いしながら卵を焼いていた。

食事の気配を感じたのだろう、フギンが遅ればせながらむっくり起きあがり、キッチンのウラルとイズンを見てにかりと笑った。

「おはよ。あー、夢じゃなかったんだ。イズンだイズンだ」

よつぽどイズンに再会できたのが嬉しいらしい。幸せそうな笑顔にイズンも笑って顔を洗ってくるよう勧めた。

三人でおしゃべりしながら朝食をとり、三人は外へ出た。出会う人ごとに自己紹介をし、昨晚うるさくしてしまったことを詫びながら長老の家へと向かう。さすがまじない師だらけの村だけあって、薬草のにおいをぶんぶんさせている人やら刺青を体じゅうにいった人やら、普通の町や村ではかなり目立つであろう格好をした人が多かった。家も家で、窓際にずらりとすだねのように薬草がかけてあ

るのはむしろ普通、動物の骨がさがつていたり、呪物らしきものや水晶のきれいな彫り物が値札つきで並べてあつたりしている。

そんな家々の一角にあつた長老の家は案外と簡素だった。ドアは開け放たれており、暗がりの中にちよこんと座った老婆と、いれたてのお茶が置かれているのが見える。

「待つていたよ、お入り」

お邪魔します、と一歩室内に入ってウラルは驚いた。外からは見えないドアの横の壁に大きな鏡がかけてあつたのだ。普通の鏡ではなく、なめらかな黒曜石でできた真つ黒な鏡だ。

「遠見の鏡だよ」

老婆が見透かしたように言ったので、ウラルは驚いて鏡から老婆に視線を移した。この人はめししているはずなのに、どうしてウラルが鏡を見ていることに気づいたのだろうか。

「私はめししているがね、目でない別の感覚でお前さんが見えるんだよ。なにも感じようとしなければ視界は真つ暗だ、けれど見ようと思えば光の点のようなものが見えてね。おまえさんの居所がわかる。さ、お座り。さっきの獣は連れてこなかったのだね？ イズン君の家の周りを手持ち無沙汰そうに歩いているようだ」

そんなことができるのかとウラルはしげしげ老婆を見つめた。フギンも声が出ない様子でじいっと老婆を見つめている。

「アラ―ハは人の多いところを嫌うので。それに、イッペルスを村の中に連れこんで、村の皆さんを驚かすのも」

「なるほど、あれはイッペルスかい。人にいつかな慣れぬ雄々しい獣。今の時期ならさぞかし立派な枝角をしているのだろうねえ。こういうとき、このめしした目が嫌になる。セーダン町でイッペルスに乗った地神の娘が出たと噂になっているが、お前さんのことだね？」

「わけあつて街中でアラ―ハに乗らなければならなくなつて。地神の娘なんて。恐れ多いばかりです」

「そうだろうとも。あの獣は間違いなく地神の息子、けれどお前さ

んは風神の娘だ」

どうやら信仰のことを言っているようだ。アラーハは守護者の地位を失ったといえど地神をあがめているだろうし、ウラルモリーグの女の一員として女と病人の守護神、風神を信望している。

老婆が急にふつと笑った。

「これ、フギン君とやら。そんなつまらなそうな顔をするんじゃないよ。せつかちな子とみえるね」

は、はいつと急にフギンが居住まいを正した。本当にさつきからうさんくさげに老婆を見ていたのだ。老婆はやれやれと肩をすくめた。

「せつかちな子にはとつとと情報を与えて送り返すとしようかね。なんにも気長な女同士の話に無理やり鼻先をつっこませることはない本題に入るう。さつきウラルさんにはちらりと云ったが、お前さんらには時間がない。その時間をなくさせている人間が、今日の昼にはこの村へ来るようだ」

フギンとイズンが体をこわばらせ、互いに顔を見合わせた。

「この国で生まれ四大神の加護を受けた者は多かれ少なかれ光として見えるものだ。人であれ獣であれね。けれど、四大神の加護を受けていない、わたしのめしいた目の裏側より暗い点がこちらへ向かってくる。ベンベル人だね」

急激にフギンの顔が険しくなった。

「本当か、婆さん」

「信じるか信じないかはお前さんの自由、けれど私には見えている。ひとまずイズン君の家の地下室に隠れてやりすごして、先へ行ったのを確かめてからこの村を出るのがいいだろう。尋ね人である者には、お探しの人はここへ立ち寄り、すぐに先へ行ってしまったと答えるのがこの村のならわし。漏れる心配はしなくていい」

フギンがイズンを見つめた。イズンは肯定の意をこめてうなずいてみせる。

「さ、せつかち者にあげられる情報はこれだけだよ。さ、行った行

った」

急につっけんどんになった長老の口調にフギンがむっとした顔になった。けれど情報をくれ、しかもかくまってくれることになったのだ。

「ありがとう、婆さん」

ただ礼を言つと、さ、帰るぞとばかりフギンは立ちあがった。

「あ、フギン、ちょっと待って。私、この方にちょっと相談したいことがあって」

「え。なんだよ、相談って」

フギンの視線が居心地悪くてウラルは目をそむけた。

「せつかちでない子はいてもいいんだよ。せつかち者は早く帰れとはそういう意味さ」

老婆が穏やかに言ってくれた。けれどフギンはウラルに問いかける目を向けたままだ。

「結局、ダイオ、イズン、ネザ、三人が生きているかそうでないか、全員当たったでしょう。気味が悪くて。長老に相談に乗っていただきたいの」

それが、とフギンが壁にかかった大鏡を見つめる。

「でも、昼にはやつらが来るんだぞ。早く帰って身を隠した方がいい」

「その心配はない。ベンベル人が来る前には十分な余裕を持って彼女を帰すからね」

老婆はおかしそうに笑った。そうだった、この老女がいるからには逃げ遅れる心配はないのだ。

「でもなあ」

「お前さんが渋ってどうするんだね、相談したいと言っているのは彼女なのに。それとも、彼女と一緒にここで残るか出て行くかで迷っているのかい？」

「まあ、そりゃもつともだけどさ」

フギンはため息をついた。

「わかった、それでウラルの気が済むんなら。イズンと二人で適当に服装かき集めたり、なんだかんだしながら待ってる。早く帰って来るんだぞ。で、帰ったらここでどんな話したか教えてくれよ。せっかち者の俺が飽きない程度にかいつまんでさ」

「ありがとう、心配ばかりかけてごめんね」

ずっと黙って話を聞いていたイズンがほほえんだ。

「では長老、ありがとうございました。失礼します」

「イズン君、村を出て行くときには言いなさいね。みな寂しがるだらうから」

イズンの笑みが寂しげになった。

「ええ、もちろんです」

イズンはどうやらウラルらと一緒に来る気であるようだ。老婆も目を閉ざしたまま寂しげな顔をして、さあ行った行ったと二人を追い立てた。

二人が出て行き、ウラルは預言者の老婆と二人きりで小さな家に取り残された。

「さ、もう少し近くへおいで。話をちゃんと聞かせてもらおう」

第二章 3 「布に覆われた顔の下」 下

ウラルは語った。昼にはエヴァンスらが来ることを考慮し、手短かに、あの不思議な夢のこと、三人の生死を当てた予言、そして北へ行かなければという強い直感のことを。

老婆は黙って聞いていたが、最後に「やっぱりねえ」と小さく呟いた。

「道理であんたたちが並々ならぬ強い光として見えたわけだ」

「強い光で見えるのはどういう時なんですか？」

「四大神の加護を強く受けている人だと、そう見える。あんたと、あのフギンという男、それにあのイツペルスは強い加護を受けているようだ。感謝なさいね」

自分が神々から特別な加護を受けていると思うと不思議な気分だ。もしかすると危ない目にあいながらもウラルが今まで無事に切り抜けてこられたのは、風神のおかげなのかもしれない。

「長老には、どうやって未来が見えるんですか？」

「近い未来は、未来自体を見ているんじゃない。さつきも言った光の点だよ。視界の隅で光の点がちらちらしている時がある。そういう時に意識を集中すれば、その光、つまりはその人が今どのあたりにいるかがわかるのさ。この隠れ里に向かってくるようなら、今の位置と光の近づく速さからあとどれくらいでここに着くかわかるね」
ウラルがここに来た時や、今回のエヴァンスが昼に来るといふ予言もそうして出したものなのだろう。

「では、遠い未来は？ イズンから、半年後に私たちがこの村へ来ると長老から予言されたとうかがったんですか」

「遠い未来は、そうだねえ、夢に近い。眠る寸前が多いね。ぱっと映像が見えるんだよ。わたしはめししているがね、それはそれは鮮

やかに見える。だから私はイズン君やあなたの顔をすっかり知っているんだよ。どれくらい先の未来かはわからないことも多いが、大抵は一緒に見える木の葉の色や、子どもたちの背丈で見当がつく。昔はあの鏡もよく使ったが、今はたいていそれで見えるね」

ウラルにはまったく想像もつかない感覚だった。本当に世の中にはいろんな人がいるものだ。

「夢の中に棺と死んだ人が出てきて、棺を指してその人の生死を教えてくださいというわけではないんですね」

「まったく違うね。まあ、預言者もみんながみんな同じようにして未来を知るわけじゃないよ。むしろ十人十色とっていいくらいだ。あなたのような預言者がいてもまったくおかしくはない。ただし、あなたの例は少しばかり特殊のようだ」

「特殊、ですか」

老婆はじつとウラルを見つめた。

「あなた、墓守 という言葉を知っているかい」
ウラルは目をしばたくしかない。

「王様なんかの大きな墓所で、番人をやっている人のことですか？」

「それももちろん墓守なんだが、私が言っているのは別のことだ。

夢の中に墓をもつ人のことを墓守と呼ぶ。あなたはその夢の墓の番人なんだよ。番人というより主人かもしれないがね。そして、そんな人は往々にして不思議な力を持つとされる」

「長老もその、墓守なんですか？」

「私は違うね。墓守の知り合いもない。先代の長老に少し話をうかがっただけだ」

「普通の預言者とは違うんですか？」

「違うようだが、私はどう違うか知らないんだよ。知っているのは、墓守は夢に墓を見ること、そして神々の加護をとりわけ強く受けているということ、この二つだけだ。この村に誰か墓守のことを知っている人がいないか探してもいいが、どうもあなたたちには時間もないようだしねえ」

ウルルはうつむいた。それだけでは、わけがわからない。

「私、怖いんです。なんだか自分だけが他の人とは違う、遠い場所に行ってしまうみたいで。長老や預言者の方々にもそういうことって、ありませんか？」

「もちろん、ある。というより、そんなことを感じた人がここに集まって暮らしているんだよ。自分で来たり、不気味がった親が預けに来たり。この村ではそんな人がごろごろしているから、さして気にならなくなったがね。あなたにも時間があるなら、引き取ってあげたいところなんだが」

老婆は静かにため息をついた。

「でも、あなたが墓守だとすると、ほかの二人、いや一人と一頭だね。あの子らも墓守ということになりそうだねえ。獣が墓守というのもありえるのかね。ひとまず、あのせつかち男に会ったら墓の夢を見ないか聞いてごらん」

「でも、フギンは予言なんて」

「予言をする墓守もいる、ということらしいからね。みんながみんなというわけではないようだ」

ウルルはますますわけがわからなくなってしまった。ウルルは三人の生死を言い当てたのが気味悪くて、ここに相談に来たはずなのに。

「さて、あなたもそろそろ行く時間のようだよ。最後にその鏡の前に立ってみなさい」

ウルルはぎょっと外を見た。気がつけば随分長く話しこんでいたようで、太陽は空高くのぼっている。

「おや、あなたもせつかち者になっちゃったのかい？ さ、鏡の前へ。それくらいの時間はある」

ウルルは長老をちらりと振り返り、言われるまま黒曜石の大鏡の前に立った。鏡の中のウルルの肩越しに老婆の姿が見えている。

「一度目を閉じて、深呼吸して。それから目を開いてごらん」

ウルルは言われたように目を閉じ、深く息を吸いこんだ。とたん、

目を開けてもいないのに目の前に光が広がった。強い真っ白な光が視界の中央に浮かんだかと思うと、そのそばに小さな光がぼつりと宿り、遠くにぼつぼつと赤い光と、澄んだ緑の光が強く浮かぶ。赤い光のかたわらに小さな光。

ウラルはぎよつと目を開く。とたん、黒曜石の鏡の奥にも同じものが透けているのに気づき、思わず一步身を引いた。

視界の中央に浮かぶ強い光がウラル自身だ。そのそばの小さな光がこの老婆。赤い光がフギン、緑の光がアラハ。フギンの近くの点はイズン。教えられてもないのにはっきりわかる。

光の点はどんどん増えていく。きつとこの隠れ里の村人をあらわす光だ。そしてやがて、村の入り口から少し離れたところに、ぼかりと穴が開いたように暗い点がふたつ浮かんだ。まっすぐ村の入り口へと近づいてくる。この速さではすぐ、本当にもうすぐここにへ来てしまう。

「見えたようだね、私と同じものが」

とたん、光の点でいっぱいになった鏡の奥に老婆の顔が浮かび、老婆の顔に視点を移した瞬間に光が失せた。

「今は」

「自分の夢とまったく違うことがわかったろう。さ、お行き。ここにおいていいなら置いてあげたいが、あんたは行かなきゃならないよ
うだ」

ウラルは礼を言つて頭を下げ、ぱつと外へ飛び出した。

「風神の娘。あんたに母神のご加護がありますように」

出際に聞こえた長老の不思議な言葉が気になったが、もう立ち止まって意味を問うゆとりはなさそうだ。さっき挨拶を交わした村人たちの間を、不思議な家の間を村はずれのイズンの家めがけて駆け抜ける。

「ウラル、お帰り」

フギンとイズンは家の前にいた。ちょうどどこからか帰ってきたところのようだ。

「今、馬とあのイツペルスを森の中に隠してきたところだ。ベンベル人も来るのか？」

「もう村の入り口まで来てるはず。隠れないと」

二人の顔が険しくなった。

「なんでまたこんなに早いんだ。荷物は地下に移しといたぜ」

イズンが地下室への扉を開けてくれた。フギンと二人で中に入る。

「イズンは入らないの？」

「外から閉める人が必要なんです。さ、そのランプをつけて。真っ暗になりますよ」

イズンはかすかに微笑して扉を閉めようとし、ああそうだ、と部屋の隅から何かをとってきてウルルに渡した。

「念のため、持っていてください。あとこれも」

どこから持ってきたのか、イズンが渡してきたのは細身の剣だった。続けて渡されたのはフルートだ。どうして、と尋ねる前にイズンは地下室の扉を閉めてしまった。しばらくは扉の隙間から細い明かりが漏れていたが、イズンが適当な絨毯でも敷いたのだろう。真っ暗になり、さらに机と椅子を扉の真上に持つてくる音が聞こえた。「念のため、つて。普通、念のために武器をくれつて言うところじゃないのか？　ウルルに渡してどうするんだ」

ウルルも首をひねりかけ、それからイズンの真意を悟って頭上の扉を見あげた。イズンは自分がエヴァンスに切りかからないよう、ウルルに剣を渡したのだ。

イズンもエヴァンスを殺したいほど憎んでいる。イズンがここで向かっていけないのは、ウルルとフギンを隠さなくてはならないから。相手がかなわないほどに強いとフギンに聞かされているから。

ウルルは灯されたランプの明かりにフルートをかざした。磨きこまれた小型のフルートには、よく見ればいくつもの傷がある。どこかにぶつけた程度のものではない、深く刻みこまれた傷跡。刀傷。これは楽器としてイズンのなくさめになりながら、一方では護身用の金属棒としてイズンを守ってきたものなのだ。

「そついやウラル、あの婆さんに何の相談してきたんだ？」

いきなりフギンに話しかけられ、ウラルはびくつと肩を震わせた。「静かにしておいた方がいいんじゃない？」

「やつが来てないときなら大丈夫だろう。まずかつたら適当にイズンが合図してくれるさ。で？」

たしかにそつだ。ウラルはためらいながら口を開いた。

「フギン、墓守って知ってる？」

「はあ？」

「よくわからないけど、私はそれなんだって。夢の中にお墓を持っている人をそう言うらしいの。それで、フギンとアラーハもそつだつて言われて。フギン、フギンはお墓の夢、見る？」

フギンは不思議そうに目をしばたいていたが、やがてこっくりうなずいた。

「そりや見るけどな。墓というか、あの戦場の夢。ほら、だいぶ前にお前にもちらつと話したろ。夢に戦場を見て、なんで俺だけ生き残ったんだって死者の声か俺を責める」

ウラルは驚いてフギンを見やった。たしかにフギンとあの戦のあと、はじめて再会したとき、フギンは眠りながらひどくうなされていた。夢の中に悪魔が出るというて泣いていた。それが二年以上もたつ今まで続いていたとは。

「俺を責めたり、ベンベル人を殺せとそそのかしたり。でもさ、最近はその風に責められだしたら、なんかお頭とかお前とかの声が聞こえてさ」

「私の声が？」

「うん。お前が復讐はやめてくれ、生きてくれ、って懇願するんだよな。それで、その声にだんだん亡霊の声がかきけされて、何も聞こえなくなつて、そのままぐっすり眠っちゃうんだ」

ウラルは微笑した。

「うん。私がお前もその場にいるもそつ言うと思う」

「だろ？ とフギンも笑う。」

「でもさ、それってある種、自然なことだろ？ 墓守だのなんだのってのは無関係だと思っただけ。トラウマになってないほうが不思議だろ」

たしかにそうだ。フギンはそもそもからして「墓」ではなく「戦場」なわけだし、きつと無関係だろう。ただ、あの老婆の鏡で見たフギンの光、強い赤い光が気になるのだが……。

と、上からドン、ドン、と靴のかかとで床を鳴らす音がした。イズンの合図だ。

「お出ましかな」

フギンがぎろりと扉をにらんだ。

地下にいるせいだろうか、耳を澄ませば足音がよく聞こえる。馬の蹄の音。それに馬の蹄とは違う妙な音がかすかに聞こえた。人の足音に似ているが、違う。ひたひた、ぺたぺたと。きつとこれがゴランの足音だ。

ややあつて足音がすぐ近くで止まり、二人の人間が下馬する音が聞こえた。ノック。

「はい、どなたです？」

イズンの声が聞こえた。ウラルとフギンが訪れたときとはまったく違う、妙に淡々とした乾いた声。続いてドアの開く音がする。

「突然申し訳ない。人を探している」

丁寧なリーグ語にフギンの目がつりあがった。もしフギンが獣なら牙をむきだし全身の毛をさかだてているところだ。

「ベンベル人の知り合いはいませんがね」

イズンの声は冷たい。さっさと目の前から消えてほしいとばかりに。

「リーグ人の男女二人連れだ。名は女がウラル、男がフギン。心当たりはないだろうか」

「あの二人なら来ましたよ。つい昨日のことですが」

え、とウラルは思わずイズンがいるであろう方を見つめた。まさか、そんなあっさりと居場所を？ まさかウラルら売る気だろうか、

か？

「本当か」

「ええ。ここに一晚泊まっけていきましたかね、先を急ぐということ。今朝早くに発ちましたよ」

ウラルは胸をなでおろした。まったくはらはらす。

「ここで一泊したのか。では聞かせてもらいたいのだが、二人は食料と水をまともに持っていなかったはずだ。売ってくれと頼まれなかったか」

「売りましたよ。水筒ごと、袋ごとね。さあ、もういいでしょう。ベンベル人にリーグ人の情報を売るようなまねはこれ以上したくない。お引取り願いたいのですが」

「最後にひとつ、聞かせてほしい。次にどの町へ行くか、言っていないかったか」

「追われている人間が行き先を明かすと思えますか？」

あからさまな棘のある口調にエヴァンスが苦笑する気配がした。

「ありがとう」

「ええ」

ボタンと激しくドアの閉まる音がした。

「びつくりした。イズンがあんな物言いをするなんて」

「相手が相手さ、無理もない」

ひそひそ言い交わしながらも、フギンも驚いているようだ。

エヴァンスと、外で話を立ち聞きしていたらしいシャルトルがベンベル語で何事かを言い交わしながらそれぞれ馬とゴーランに乗る気配がした。馬が歩き出す音。けれどゴーランの足音がしない。

シャルトルの不思議そうな声。それに何事かエヴァンスが答え、ややあつてゴーランと馬の双方の歩き出す音がし始めた。

足音は遠ざかっていく。遠ざかっていく。遠ざかっていく。それがいよいよ、地下からでも聞こえるか聞こえないかぎりぎりのところで足音が止まった。

「聞こえたか」

フギンの緊張した目にうなずき返す。

どうやら書き物机の前に座っていたらしいイズンが地下室の扉の真上に来た。扉の上に移動させてあるテーブルの前にいるようだ。ギギイ、と軽く机を動かしかける音がする。

「イズン、待ってくれ。まだ近くにいる」

イズンはテーブルを動かすのをやめ、何事もなかったかのようにテーブルとセットになっている椅子に座ったようだ。

「どのあたりにいるか、わかりますか？」

聞こえるか聞こえないかの声。イズンの声はまだ固く冷たい。

「わからない。変な感じに足音が止まった」

「わかりました、様子を見ましょう。動く気配があつたら教えてください。動きがないようなら、外へ出て井戸を使うふりでもしてみます」

「怪しまれたかな」

「さて、どうでしょうね」

イズンはそのまま適当に本でも広げたようだ。判断基準が聞こえるか聞こえないかぎりぎりの足音、互いに小声で話すこともできずじつとしていると、やがて、かすかな足音の遠ざかっていく気配がした。

イズンが椅子を立ち、テーブルと絨毯を扉の前からどかした。フギンが内側から扉を押しあげる。

「イズン」

イズンはうつむき、布で覆われた左の顔だけをウラルとフギンに向けていた。

「馬とアラール八を迎えに行ってください。ついでにまだやつらがいないか見てきましょう。二人は、適当にしてください」

「イズン、私も一緒に行つていい？」

「よせ、ウラル」

フギンにまじめな顔で引き止められ、ウラルはうなずいて引き下がる。かすかに見えた口元は微笑の形を作っていたが、イズンとは

うとう生身の顔を見せないまま出て行ってしまった。

「なんか、泣いてるみたいだったな。あいつ」

イズンの出て行ったドアを見つめながら、フギンは妙に寂しげな顔をしている。

「泣いてたの？」

「いいや。そう見えただけだ」

ウラルはずっと手に持ったばかりだったイズンの剣とフルートをもう一度胸に抱いた。イズンのフルートがジンの形見のペンダントに当たり、かちやりとかすかな音を立てる。そんなウラルの様子を見ながらフギンはため息をつき、どっかりと椅子に座りこんだ。

窓から見えるイズンの後姿は普段とさして変わりなかった。近くにまだエヴァンスらがいる事態に備え、変に見えないよう自然に、けれど油断なくあたりに目を配りながら歩いているに違いない。

風が吹いたらしく、イズンの顔を覆っている灰色の布がふわりとまくれあがる。ウラルとフギンには見せられない顔が、そこにあるはずだった。

第二章 3 「獣の心、人の心」 上

イズンは何事もなかったかのような顔でフギンの馬ディアンに乗り、帰ってきた。かたわらにはアラーハがいる。いるのだが。

「アラーハ、どうかしたの？」

アラーハは目をぎらつかせ、家のドアのあたりにしきりに鼻を近づけては耳を伏せ、いらいらと地面を踏み鳴らしていた。相当機嫌が悪そうだ。

「考えるまでもない。あいつの匂いが残ってるんだろ」

フギンが旅装のチェックをしながらぶっきらぼうに答えた。イズンがあつらえてくれた荷物をフギンとウラルそれぞれが持つ分に分け、それぞれ丁寧にリュックに詰めこんでいく。

ウラルはそつとアラーハの首筋に手を添えた。アラーハの毛はものの見事に逆立ち、一本一本がウラルの手に突き刺さってくるほどだ。

「アラーハ、落ち着いて。ね？ エヴァンスはもうここにいないし、私もフギンも無事だから。怒ったって仕方ない。わかるでしょう？」

アラーハがやつとうなるのをやめ、ぎらぎらした目でウラルを見つめる。ウラルがじつと見返し、首をなでていると、アラーハの目からゆっくりと鋭さが失せていくのがわかった。

「アラーハもよっぽど恨んでいるみたいですね。あのベンベル人に出くわすたび、いつもこうなんですか？」

「ううん、こんなのは初めて。たぶん、セーダン町で私がエヴァンスに殺されかけて、アラーハに間一髪で助けてもらったあの一件のせいだと思う。私まで殺させてたまるかって。それに、人の心を失いつつあるのも、からんでる」

アラーハは首をうなだれている。オオカミ守護者に教えてもらった人の心でんでの話はもうイズンに伝えてあった。いくらアラーハがエヴァンスを憎んでおり、娘のように思っているウラルを殺さ

れかけたとはいえ、人だつたところのアラーハはこれほどの怒り方はしなかつたはずだ。もつと静かに、冷静に、じつとエヴァンスをにらんでいるだけに違いない。それでも怒っている度合い自体は変わらないのかもしれないが……。

フギンがボンと軽く荷物を叩き、立ちあがつた。

「あとはウラル、自分で適当に詰めてくれな。あとはお前の服とかそのへんだけだから。なあ、イズン、本当に一緒に来ないのか？」

「え、イズン、来ないの？」

てつきり来るものだと思っていたが、そういえばフギンが用意している荷物はウラルとフギンの二人分だけだ。イズンも「ええ」と悲しげにうなずいた。

「この家をほっぽりだして行くわけにもいきませんから。頼まれていた写本を片づけて、きちんと掃除をしていかないと」

「それくらい。終わるまで待つよ、私たち」

「早く身を隠さないとやつらに見つかつてしまつてしまうでしょう。ひとところにとどまつては危ない」

たしかにそうだ。寂しかったが、ウラルらは行かないわけにいかない。

「じゃあ、またしばらく会えなくなるね」

イズンは笑つた。

「そんな深刻そうな顔をしないでください、すぐに僕も後を追つて隠れ家へ向かいますから。向こうでまた会えますよ」

うん、とウラルはしょんぼりうなずいた。せつかくこうしてまた会えたのに。

「二人とも、本当に道中お気をつけて。あのベンベル人二人は本当に只者ではなさそうですし」

「そうだな。もしあいつらをまき損ねて、足止め食らつて遅くなるようならダイオに詫びといてくれよ。絶対、ちゃんと帰るから」

「思つんですが、ダイオ將軍は体調万全、しかもエルディタラから何人か応援に来ているんでしょう？　もうむしろ引き連れて帰

つてきて、返り討ちにするというのは」

「あー、それもあーか」

「じゃあ、もし僕が先に隠れ家へ着いたらそういう可能性もあるというので、伝えておきますね」

フギンはうなずき、「怖いのは待ち伏せだな」と続けた。

「ここを通ったのはばれた。やつらは俺らが先へ行ったと思いで、俺たちが行くであろう町へ行こうとするだろう。普通ならそれでいい。反対方向へとつと逃げちまえばいいんだけど、やつらの追跡は本当にやばいんだ。勘が鋭すぎるのか、あるいは、なにか俺たちの痕跡でも追っているのか。俺たちより先行していると知ったら容赦なしだろう」

「たしかに、よそ者がこれほど早くこの隠れ里に来るのはちょっと不自然ですね。一度来たことがあるならともかく、来たことのあるはずがないベンベル人が」

「ベンベル人って、リーグ人にはない能力でももってるのかしら」
「ウラルもため息をついた。」

「ウラル、お前あのベンベル人とも一緒に暮らしてたんだろ。なにかそれらしい力でも持ってたか？」

「そんなの。髪と目の色が薄くて骨格も少し違って、地下に住んで、ゴーランに乗ってて。リーグ人と違うといわれて、ぱつと思いつくのはそれくらい。そんな特殊能力らしいものなんて、持ってなかった」

「地下室ならリーグ人も作りますよ、たまにはね」

イズンが微笑しながらコンコンとかかたで床を叩く。それから表情を引き締め外を見やった。

「ベンベル人の能力でないなら、ゴーランかもしれませぬね」

「ゴーラン？ あのとカゲが？」

「ええ。そこに止まっている間、ちろちろ頻繁に舌を出し入れしたり、馬とアラハのいたあたりをうろついたりしていましたから。妙だと思っただけです」

「猟犬みたいにゴーランを使って俺たちを追っかけてきた？ そりゃ無理だろ。トカゲだぜ？ あんなあるのかないのかわからないよ。うな鼻で？」

「へビは鼻ではなく舌でにおいを感じるそうです。トカゲやゴーランも同じだと思いますよ。精度はさすがに犬より劣るでしょうが、たしかなのは言えません。もしかすると犬なみか、あるいは犬以上の嗅覚をもっているのかも」

「でもよ、仮にそれだとしても森の中とか人がめったに通らない場所ならともかく、人の多い場所も通ってるんだぜ。そんなところじゃ、どんなすぐれた猟犬でも一人を追うなんざ無理だ」

「そこは人の目じゃないですか。城壁警護のベンベル人への聞きこみで」

まさかと思ったが、実際イズンから情報を得てエヴァンスらが遠ざかっていくときゴーランの足音が妙な感じに止まっているのだ。もしあのときウルルらのおいをゴーランがかいで、それが原因で足を止めていたのだとしたら。

「あくまで仮説ですが、用心に越したことはないでしょう」

「そこまで真面目な顔で言い、イズンはふつと笑った。

「猟犬から逃げるウサギの手を使ってみたらどうです？」

「ウサギ？」

目をぱちくりさせるウルルにイズンの笑みが深くなる。

「たとえば、森の中で木の間をぐるぐる駆けてみる。たどった経路がぐちゃぐちゃになつた糸玉みたいになるように駆けて、追つてくる猟犬を混乱させるんですよ。あるいは川の中を歩いてみる。流れる水においは残りませんし、足跡もぷつぷり途切れます。それに僕らは人間なんだから、服を適当に木にこすりつけたり、あるいは靴を交換してみてもある程度の効果はあるでしょう。相手がおいを頼りにしているならね」

「試す価値はありそうだ」

フギンがぎろつとドアの方をにらみ、けれどそこにいたアラールハ

とともに目があつてしまったようで、気まずそうに視線をそらした。

「イズン、靴、交換してくれよ」

「サイズが合いますかね」

二人はその場で靴をぬぎ、はきかえた。

「うん、よさそうだ。ウラルも靴はきかえればいいんだけど、さすがに合わないだろうな」

言つてフギンにはやりとする。

「イズン、お前、水虫じゃないだろうなあ？」

「フギンこそ。相当臭いですよ、この靴」

二人は顔を見合わせて大笑いした。ウラルもつられてひとしきり笑つてから、アラーハも多少は緊張が解けたかな、とドアのあたりを振り返る。アラーハはこちらにわき腹を向け、じつと暮れる森の方を見つめていた。ウラルの視線に気づいて振り返つた目はいつもの穏やかさを取り戻している。

風が強くなつてきた。風下の森の中にちらりと金の髪が見えた気がしたが、エヴァンスを恐れるあまりの錯覚だったらしい。まばたきをした一瞬の間に見えなくなった。

第二章 3 「獣の心、人の心」 中

*

翌朝早く、イズンに見送られて二人は隠れ里を後にした。

村を出るなり「ウサギ戦法でいくぞー！」と適当にそこらの木の周りをぐるぐる回り始めたはいいが、馬はともかくイツペルスは巨大なツノが邪魔して小回りがきかない。ここは巨木ばかりのヒュゲル森ではないのだ。

結局、フギンだけがディアンを駆り、ウラルとアラールは立ちつくしてそれを眺めているだけになったから、効果があるのだからなのだか。うまくフギンに誘導されてくれればよし、二手に分かれたと思いついて入んでくれてもありがたい。けれどウラルとアラールのおいを追って何事もなくついてきそうな気がする。

ひとまずフギンは遊んでいた。思いつき馬を駆り、足場の悪い森をわざと急角度でつつきり、倒木を飛び越え、急旋回を繰り返す。ウラルがディアンに乗っても、とてもじゃないが同じことはできない。さすがは騎馬盗賊団の若頭。その後は火照った体を冷ましながら、少し水量と幅を増してきた小川に入りザブザブ水を蹴立てながら歩いた。

「風、強いね」

川は風の通り道とはいえ、昨晚からやまない強風で森の木はひっきりなしに揺れている。普段は静かな森の旅、これだけ葉鳴りの音でざわざわしているのは妙な気分だった。揺れる木の陰や葉裏になにかがいて、じつとこちらを見つめているような、そんな気になる。ウラルはそわそわあたりを見回したが、一番勘の鋭いアラールが無反応だ。なにもいない。わかつてはいるが落ち着かない。

ある程度歩いたら香りの強い野草の上にあがって息をつく。そこからは川を離れて森の中を歩いた。次の町はそちらにある。

隠れ里から一番近い町は里から半日歩いたところにあるそうだが、フギンはそこを選ばず、東へ、森の隠れ家へ一直線に向かう道中にある町へ行くことに決めていた。また森の中を野宿一回、二日かけて旅をする。その町に無事着けば、ヒュガルト町、ひいては森の隠れ家まで残すところ一日で着けるはずだ。

「ん、なんか印がつけてある」

前に行くフギンが立ち止まって馬上から何かを手を取った。木の枝に結び白い布と、そのすぐ近くの木肌に刻まれた矢印型の傷。布は暗い森の中で目立つ程度には白く、傷もそれほど古くはなさそうだが、昨日今日につけられたものではなさそうだ。

「この先に何かあるのかな。いや、隠れ里からの帰り道の道しるべと考えた方がよさそうか。そういやこのあたりの地面、ちょっと踏み固まつてるしな」

道なき道をきたつもりだったが、たしかに言われてみればウラルらの前後はきれいな獣道で、草がほとんどはえていなかった。

「このまま道しるべをたどっていったら、追ってこいって言いながら逃げてるようなもんだよな。でも印もいい感じに古いし、もしここをすぐに別の誰かが通つたらにおいもごまかせるかも。それずに行くか」

フギンはひとりでうなずき、矢印のさす方へ歩き始める。そうこうしている間に日が傾いてきたので、できるだけ地面の乾いたよさそうな場所を見つけて野宿のしたくをすることになった。したくといっても用心のために火をたけないので、荷物をおろし、地面の湿気を避けるための口ウ引き紙と毛布を敷くだけだ。食事はパンと干し肉とイズンが用意してくれたお菓子が少し。

「イッペルスはいいよなあ、食事は草がありや困らないんだもんね」
さすがに干し肉に飽き飽きしてきたのか、フギンがうらやましげにアラーハを見た。アラーハはどこ吹く風、ディアンと並んでのんびり草を食んでいる。

と、アラーハが急にびくりと顔をあげた。

「アラーハ？」

アラーハはじつとどこかを見つめていたが、気のせいだったと言いたげに再び首を下げて草を食み始めた。やまない風のおかげでアラーハもウラルと同じものを見たらしい。

「今日は念のため、交代で見張りしといたほうがいい。俺、起きて見張ってるからさ、ウラルは先に寝てくれ。適当に起こす。変な音とかしたらすぐに起こすんだぞ」

不意にふうつと風がやんだ。フギンにうなずきかけたウラルの視界の隅でアラーハが再び顔をあげる。

あげた顔が、一瞬にして変貌した。一瞬驚いたように目を見開き……すぐに耳が伏せられ、歯がむきだしになる。警戒態勢だ。アラーハがこれほど敵意をむきだしにする相手はこの世でただ一人。

「フギン！」

叫んだ瞬間、アラーハのしている方、風下の藪の中に銀の矢尻があらわれた。まっすぐフギンを狙って放たれる矢、持ち前の機敏さでフギンが避ける。

「危ない！」

避けた拍子に体制を崩したフギンを狙い、さらに別の箇所から放たれた矢の前にアラーハが立ちはだかった。ツノを下げ矢をからめとったその姿勢のまま突進する。

さしものイツペルスの五感でも、この強風ではにおいはおろか音さえわからなかったのだろう。襲撃者は風下の闇の中に身を潜めていた。そして、ウラルとフギンが寝静まるのを待ち構えていたのだ。アラーハの突進する先で、抜刀音と共に金の髪がひるがえった。「ばれてしまったか。やはり、その獣を先に引き離れた方がよかつたようだな」

顔は見えず姿も見えず、けれど聞き間違いのようなない声がする。エヴァンスは後ろへ下がって木を盾にし、アラーハの攻撃を防いだらしい。

エヴァンスに気をとられた一瞬、背後で弓弦が鳴った。木製の義

手に矢の突き刺さる音。さらにフギンの抜刀音。

「ウラル、下がれ！ 馬の陰へ！」

シャルトルの矢はウラルを狙わない。エヴァンスがアラールと対している今、狙われるのはフギン一人だ。

「フギン、お願い。無茶しないで」

「そんなこと言ってられるか。死にたいのかよ！ 余裕があるなら鞍とハミをつける。いざとなったら俺のことは気にせず逃げるんだぞ！」

怒号の間にも矢は飛んでくる。サーベルを構え木陰のシャルトルに突進しようとするフギン、足手まといになつてはならないと言われるまま馬の方へ後ずさるウラル。

と、ピシッ！ と鋭い音が耳を叩いた。燃えた生木がはぜるような音。音のした方からなにか巨大なものが倒れかかってくるのに気づき、ウラルは声もなくそれを見つめた。ウラルの一抱えの太さはある木が途中で真つ二つに折れ、びしびし、めりめり音を立てながらウラルの目の前に倒れこんできたのだ。思わず身をすくめたウラルのわきを馬に乗った男と巨獣が駆け抜ける。アラールが体当たりで木をへし折り、馬に乗ったエヴァンスを開けたところへ追い出したのだ。

エヴァンスが骨格の細いベンベル馬を駆り、剣を構えてアラールに突進する。狼の要領で馬上から串刺しにする気だ。ただしイッペルスは馬よりはるかに大きな獣、上から下へ貫くことはできない。ランスを扱うかのごとく斜め前方に剣を構えて。

対するアラールは殺気を体中にみなぎらせ、眼光は鋭すぎるあまり目全体が赤く見えるほど。エヴァンスの突きは人と戦ったことのない獣が相手ならその命を一瞬で奪つたろうが、あいにくとアラールは普通の獣ではない。ツノで剣をからめとり、へし折ろうとする。折られてはたまらないとエヴァンスが剣に力をこめ、ツノを振りほどこうとしたが、アラールはそうそう簡単には離さなかった。アラールは剣どころかエヴァンスの腕を折る機会をうかがっている。た

まりかねたエヴァンスが剣を手放したその瞬間。

馬が、エヴァンスを乗せたまま派手に横転した。アラール八がちやぶ台返しよろしくツノを馬の腹の下に差し入れ、力任せにひっくり返したのだ。これには馬もエヴァンスもたまったものではない。エヴァンスはかるうじて寸前で飛び降り馬の下敷きをまぬがれたが、馬は悲鳴をあげ一目散に逃げ去ってしまった。

「スー・エヴァンス！」

「でかした、イツペルス！ そのまま殺っちまえ！」

主君の危機を察したシャルトルがアラール八に弓を向ける。そうはさせじとフギンが阻む。と、シャルトルが不意にウラルの方へゴールンの足と剣を向けた。ウラルを人質にとる気なのだ。フギンが慌ててウラルを守る姿勢に入る。とたん、シャルトルはゴールランを急旋回させ、どこからか投げナイフをするりと出してアラール八を狙った。

放たれるナイフ、ぱつと後ろ足を跳ね上げてアラール八が矢を蹴落とした一瞬の隙をつき、エヴァンスがアラール八の蹄をかくぐつて落ちた剣を手にする。中腰の姿勢のままアラール八の首を下から上に貫かんとする剣は、とっさにツノで防御できない死角から。

けれどアラール八はお見通しだ。長い鼻面でエヴァンスの右腕を殴打して切っ先をそらし、続けて前足の蹄をその腹部めがけて振りおろす。エヴァンスはすんでのところまで後ろに跳び、全体重のこもる一撃をかわした。

アラール八が激しく枝角をゆすり、エヴァンスに突進する。エヴァンスは闘牛士のように寸前でかわし、突きを繰り出すのだが、そのつどお見通しとばかりツノや蹄にさえぎられ、すさまじい反撃をお見舞いされる。右手首を狙った横蹴り、フェイントをまじえた枝角での横殴り、首をまっすぐに狙った噛みつき、横っ飛びからの体当たりと回し蹴り。

「Maonna uze busena…！（こいつは本当に獣か……！）」

色素の薄い肌には玉の汗が浮かび、もうさすがに疲労の色が濃い。けれどアラーハは一瞬たりとも休みを与えず、獣の体力で向かっていく。

アラーハはシャルトルには見向きもしないのだ。血走り三角につきりあがった目は、エヴァンスのほかにも見えていない。

「アラーハ」

怯えてしきりに足踏みする馬のディアンの陰で、ウラルは震えながらペンダントをにぎりしめた。

「殺したくないって、そう言っただのに」

それでもアラーハの本心は。腕をぶるぶる震わせながらこらえていたあの怒りは。

（ジンを殺したやつは、もちろん憎い。だが、ここで、こんな形で出会わなければ、おそらく俺が一生を終えるまで、復讐しようとは思わなかったはずだ。目の前にいれば憎くなるが、殺さなければ殺されるとか、そんなものではない）

出会ってしまった。

「シャルトル！」

とうとうエヴァンスが声をはりあげた。ウラルにはとても聞き取れない早口のベンベル語、シャルトルがフギンを振り切り、ゴーランを駆って主君の援護に回る。フギンは馬に乗っていないし、片腕なので弓も使えない。振り切るのは難しくなかったようだが、ずっとエヴァンスに気をとられていたせいか、フギンがほぼ無傷なのに對してシャルトルの体には細い傷が幾筋も走っていた。

鞍上のシャルトルが手を差し出す。エヴァンスがその手を取り鞍上へ引き上げられたと思った瞬間、エヴァンスはさらに鞍を蹴って頭上の木の枝へ跳ねあがった。そこで弓を構え、アラーハを狙う。

が、アラーハも負けてはいない。いきなり後ろ足で立ち上がったかと思うと、ウラルの身長のはるかにある高さの枝にいるエヴァンスをツノで串刺しにしようとする。さすがにエヴァンスもそこまでは届かないと思っていたとみえ、なんとか持っていた弓ではじく

ことしかできなかつたようだ。はじいたとたん弓が真っ二つに折れ、木っ端が舞った。

さらにアラールは一撃を加えようとしたが、シャルトルが真後ろから矢を射ってアラールの注意をそらした。その一瞬でエヴァンスはさらに高い枝へ逃げ延びる。

アラールは悔しげに頭を振り、蹄で地面をひっかいた。一度頭をあげてエヴァンスをにらみすえ、そして再び頭を下げ、ケンカツノを前に向ける。攻撃態勢。

どうん！

激しい体当たりが木をゆるがした。高いところにいるエヴァンスはかなり揺さぶられたが、その木はこのあたりで一番太い木だ。そうそう簡単に折れはしない。エヴァンスも戦いながら、どの木が一番丈夫か、逃げ場になるかを見定めていたのだろう。

ばこん！

アラール自身もかなり痛いだろうに、それでも容赦は一切ない。巨獣の全体重をこめたすさまじい一撃が。

どがん！

シャルトルが弓でアラールを狙うものの、アラールの視野はおそろしく広い。飛び道具はほとんど効かないといってもよかった。音と目とですぐに気づいて、避けるか叩き落すかしてしまうのだ。

どうん！ ばこん！ どがん！

フギンもシャルトルがエヴァンスを助けることしか考えていない今、不意打ちのしどきだろうに、あつけにとられた様子でアラールを見つめている。剣を手にぶらさげたままウルルの方へ歩いてきて、どっかりと腰までおろしてしまった。

どうん！ ばこん！ どがん！

どぎちゃん！ どうん！ ばどん！

へぎっ！

「アラール……」

血走った目。殺すまで決して収まらない殺意。

「もうアラー八じゃ、なくなった、の？」

びっし！ へぎぎぎいっ！

とうとう木が悲鳴をあげた。一度傾き始めればもう止まらない。

エヴァンスが傾く木の上でじつとアラー八を見つめた。妙なほどの冷静さ。こんな状態で額に汗の玉をびっしり浮かべていても、いまだエヴァンスの目は恐怖の色を映していない。かわりに映しているのは、困惑の色。

アラー八が最後の一撃を木に加える。断末魔の悲鳴をあげた木が横倒しになる寸前、エヴァンスが枝を蹴った。アラー八が待っていたとばかりツノを下げ、突進する。かなり高い場所から飛び降りたエヴァンスはまだ体勢を立て直せていない。

寸前、シャルトルがゴーランともども主君と獣の間に割りこんだ。捨て身でエヴァンスの盾になるつもりだったのだ。けれどゴーランと一緒にいたのが幸いしたのだろう。アラー八の目には全身灰色、ごつごつのウロコに覆われたゴーランが突如出現した大岩に見えたらしい。とっさに急停止、横に飛びすさった。

アラー八がエヴァンスの姿を求めてぐるりと周りを見回すその一瞬でエヴァンスとシャルトルの位置が入れ替わる。エヴァンスはゴーランの鞍上に、シャルトルは鞍を降りて地上へ。

攻撃態勢をとるアラー八、けれどエヴァンスはゴーランに脚をいれ森の中へ全力で駆けこんだ。アラー八が追う。

ゴーランはあくまで二足歩行するトカゲ、足は馬ほど速くない。普通ならすぐにアラー八が追いつくはずだが、エヴァンスはわざと細い木の密集した、大角をもつイツペルスには通りづらいところを選んで駆け抜けていった。ゴーランは小回りがきくのだ。アラー八が怒りの声とともに細い木を体当たりでたたき折る。

馬を失い、主君を見失ったシャルトルはただひとりでウラルとフギンを見つめていた。静かに光る緑の瞳。フギンがウラルの前に立ちはだかる。

剣を手にすうっと間合いを詰めてきたシャルトルは、フギンに切

りかかると見せ、不意に体を反転させて地を蹴った。あつと思つた次の瞬間には、シャルトルの体はフギンの馬ディアンの上にある。ディアンの陰にウラルがいるのは知っていたはずだが、目もくれずに馬腹を蹴った。

「おいこらてめえ降りろ！」

馬を盗まれフギンが怒鳴つたが、まさか愛馬の足を攻撃して止めるわけにもいかない。一目散にエヴァンスを追い駆けていくシャルトルの後姿を見送るしかなかった。

「追うぞ」

フギンが舌打ちしながら剣をおさめた。

馬もアラー八もいないので徒歩になったが、後を追うのはたやすい。地面を踏みにじつた跡や、怒りに任せてアラー八が叩き折った木、エヴァンスを援護するためシャルトルが放った矢。目印がいくらかでもある。

「フギン、これ」

ぼろぼろになった木のかげに白い布と矢印の傷を見つけて指差すと、フギンが顔をしかめた。

「あれ、次の町は正反対だぞ。こっちには町も村もしばらくないはずだ。さっきまではちゃんと町へ向かってたんだけどな」

矢印の示す方へエヴァンスらはまっすぐに向かっていた。

「なにか、あるのかな」

「あるんだろ。たぶん、逃げこめる場所が」

どうん、とかすかにアラー八の体当たりの音が聞こえてきた。またエヴァンスが木に登つたのだろうか。

「急ぎましょ」

足早に夜の森を歩く。さほどの距離はなかった。

「猟師小屋だ」

丸太作りの荒っぽい、けれど頑丈そうな小屋があったのだ。きつとこのあたりの猟師が共同で使っているものだろう。あの白い布と木の傷は秋の猟期のためにつけられたものだ。

その屋根にはゴーランが四足でトカゲらしくへばりつき、かたわらにエヴァンスがかがんでいた。アラーハはむなしく小屋の壁に体当たりを続けている。ディアンはつなぐれもせず馬具をつけられたままで小屋の周りをうろろろしていたが、フギンの姿を認めるなり駆け寄ってきた。

と、煙出し用の小窓が小屋の内側から開けられた。シャルトルだ。エヴァンスはじろつとアラーハを見、ウラルらを見て、そこからずるりと小屋の中へ入っていった。ゴーランだけが屋根にぴったりへばりついたまま取り残されている。

アラーハはまだ小屋への体当たりを続けていた。

「アラーハ、やめて」

呼びかけたが、アラーハはやめない。何度も自ら叩きつけていた肩の毛はすりきれ、ずいぶん短くなって、血がにじんでいる。毛とあとは皮膚の色が黒いのでわからないが、ひどい打ち身もできているに違いなかった。

「この丸太はさすがに折れない。小屋は壊せない。わかってるでしょ、アラーハ？」

危険を承知でアラーハの首、怒張した血管がくつきり浮かび上がる首に手をやり、イズンの家の時のように説得する。最初はまったく聞こえていないようだったが、体当たりの威力が少しずつ弱まっていき、やがてやめてくれた。

が、やめた後もウラルの方はちらりとも見ない。小屋をぎろぎろ横目で見つめながら、雨どいの下で糞にたまった雨水を飲み、そこらの草をめちやくちやに食み始めた。エヴァンスが出てきたときに備え、力を蓄えておくつもりなのだ。オオカミのように、疲れきった獲物が焦れて向かってくるのを待っている。

「アラーハ……」

この獣が、本当にアラーハだろうか。

エヴァンスへの報復を厭い、森へ帰っていったあのアラーハだろうか。

「なあ、ウラル」

フギンが遠慮がちに声をかけてくる。

「あの、この獣がアラール八でんでんの話、もう一度ちゃんと聞かせてくれないか？」

え、とフギンを振り返る。フギンはぶいと顔をそむけ、ディアン
の腹帯をゆるめにかかった。

「あ、違うからな、信じるってわけじゃないからな！ ただ、こいつの戦い方が気になったんだ。あれは獣じゃない、人間の戦い方だよ。少なくともこいつは人間の戦い方を知りつくしてる。でないよ、あんなお見通しとばかり綺麗に受けられるわけがない」

ウラルは黙っていた。フギンはなおも続ける。

「それに、栗毛には見向きもせず金髪野郎ばかり狙ってたろ。ついでにあれば、ウラル、お前を守ってるわけじゃなかった。憎しみだよ、あきらかに。でもさ、アラール八は金髪野郎に向かっていく勇氣もない腰抜けだった。だろ？」

ウラルはまだ黙ってアラール八を見つめていた。フギンも黙って答えを待っている。

「フギン、言おう言おうと前々から思っていたんだけど、なんだか言えなかったことがあるの」

口を開いたウラルに、フギンは黙ってうなずいてくれた。

「アラール八はね、ジンのお父さんだったの」

「は？」

すつとんきよんな声をあげたフギンから目をそらし、ウラルはもう一度アラール八を見やった。

「いや、お頭の父親って、あのリーグ騎士のフェイスって人なんだろ？ お前、前にダイオと二人でそう言ってたじゃないか」

「そう、生みの親はフェイス將軍。ジンも騎士さまで……でも、十歳のときに盗賊にさらわれて行方不明になったの。それを助けて、育てたのが、アラール八」

「うそだろ。だって、俺、お前よりもずっと長くあの二人と付きあ

つてたんだぜ。なんでお前が知ってて俺が知らないんだ」

「どうして二人が隠してたのかは私も知らない。でも、ひとつだけ、ちゃんとわかってる」

なんだと言いたげにフギンがウラルの横顔をのぞきこむ。

「アラーハは腰抜けじゃない。誰よりもエヴァンスを憎んでた。でも、あれ以上誰も失いたくなかったの。フギンも、私も。それから、それからね」

ウラルはゆっくりと目を伏せる。アラーハがめちやくちやに食い散らした草の束。

「爆発してしまうのが怖かったんだと思うの。報復しか頭にない獣になってしまうのが」

おいおいおいとフギンがまだ何か言いたげにしたが、ウラルはよほど暗い顔つきをしていたのだろう。口を閉ざし、黙ってアラーハを見つめていた。

「嫌がってたのに……」

アラーハはこちらをちらとも見ず、草を腹に詰めこんでいる。

第二章 3 「獣の心、人の心」 下

夜明け時、小屋の中からエヴァンスとシャルトルの二人分の読経が聞こえてきた。アラールは四肢を折り、目をらんらんと輝かせて小屋を見つめている。

ウラルとフギンは小屋の近くまで荷物を移動させ、休みをとっていた。エヴァンスはアラールがいる限りこちらを襲えないし、何か行動を起こすにしろその前にアラールが暴れるはずだから警戒の必要なく眠れたのだが、安心して眠れるかどうかは別問題だ。フギンはよく眠っていたが、ウラルは何度も浅い眠りから目を覚まし、そつとアラール八の様子をうかがっていた。

一晩たってもアラール八の殺気には変わりはない。おそらくウラルがここを離れて次の村へ行ったとしても、エヴァンスがここにいるかぎりアラール八もここに居座り続けるだろう。あのゴウランラの戦場跡でエヴァンスに再会したとき、ウラルとフギンが逃げる時間を稼ぐため、それでも手加減しながら殺さぬように戦ったアラール八はもういない。これだけの憎しみを抑えてよくそんなことができたものだ。

「どうだ、なにか動きあったか？」

起きだしてきてウラルの隣に並んだフギンに首を振ってみせた。

夜の間、動きらしい動きはなかった。あるとすれば行方不明になっていたエヴァンスの馬が主人のところへ足を引き引き帰ってきたくらい。アラール八の姿をみとめておるおろし、ウラルらを警戒して蹴るぞ囃むぞと脅しをかける神経質な馬を捕まえ、アラール八にひっくり返されたとき負ったらしい捻挫を手当てしてやり、今はディアンの隣で休ませている。手当てをしたのはフギンだ。仇のもでも馬は馬、馬好きフギンには馬まで憎む道理がないらしい。

「このまま何日もにらみあいが続くのかな」

「いや、多分違うだろ。あいつ食い物は草でいいし、飲み物は雨どいの下の水でいいだろ。いくらでも居座ってられるけど、ベンベル人どもは違う。あの小屋の中になにか食い物があるにしても、水にくみにも行けないし限界があるさ。早いうち、今日明日には逃げるなり反撃するなりするんじゃないかな。俺だったらそうする」

「その一日二日であの二人を巻こう、今がチャンスだなんて言わないよね？」

フギンの口が「あ」と言いたげに開くのに、ウラルは不安になってフギンの目を見返した。

「考えてもみなかった。ああ、でもそうだよなあ」

フギンならとうに考慮していると思っていたのだが。言わなければよかったと思いつつ、ここにいさせてと目で訴える。どうあっても今のアラール八から目を離したくなかった。フギンが苦笑する。

「わかったわかった、離れないからそんな目で見るなよ。俺だってやつがくたばるなら見届けたいし」

フギンの了解を無事に得てアラール八をじっと見守った。

しばらくは何の動きもなかった。状況が動き出したのは、この日の昼だった。

この晩夏、木陰にいるとまだ良かったが、日なたの温度は半端ではない。アラール八は小屋から一番近い木陰に場所を移し、ウラルも木陰で涼をとっていた。小屋の中にいるエヴァンスらは窓も開けられずかなり蒸し暑い目にあっていたはずだが、それでもまだ陰にいるだけましだったろう。

一人、いや一頭だけ木陰に入れなかった生き物がいた。屋根の上のゴورانだ。変温動物なだけにこれは命にかかわる重大事。ほとんど少なくなっていく日陰を追いかけて巨大トカゲは必死に逃げ、

最後には唯一日中でも影になる雨どいの下の壁に貼りついていただけ、これを目ざとく見つけたアラール八が打って出た。十分に鼻先の届く位置に貼りついていたゴーランを攻撃し、日なたに追い上げてしまったのだ。前門の直射日光、後門のアラール八。命の危機にさらされたゴーランは必死の声をあげ始めた。

「ゴーランって鳴くのね」

「トカゲのくせしてカエルみたいな鳴き声なんだなあ。ウシガエルみたいだ」

ウラルとフギンは暢気にかまえていたのだが、わざわざベンベル本国から連れてきた貴重な家畜が死にかけているのを前にしてはベンベル人たちも動かざるを得なかったらしい。

武装したシャルトルが水の入ったバケツと、小屋の中にあっただしい大ぶりの鉈を手に外へ出てきた。二人もアラール八が狙うのはエヴァンス一人だとわかっていたのである。シャルトルが鉈でアラール八を牽制しながら、ゴーランをなんとか森に逃げこめるようにしてやること。

が、アラール八は容赦がなかった。迷うそぶりもなくシャルトルに襲いかかり、急所の鼻先を狙って振り下ろされる鉈をかくぐつて蹴り倒す。うつぶせに倒れたシャルトルの背、心臓の真裏を前足の蹄で押さえ、じろりと小屋のドアを見やった。

「本当に獣のやることじゃねえ。人質をとりやがった」

シャルトルがかすかに身動きし、悔しげなうめきを漏らした。アラール八の力と体重だ。踏みつければ、シャルトルの心臓くらいやすやすと踏み潰せるはずだ。

「Yamasner. (化け物が)」

低い声とともにドアが開いた。その奥から見える鋼の切っ先。

「Iu see znnayookuremuu. (よほどわたしの命が欲しいらしいな)」

アラール八がシャルトルを放しドアへ突進する。エヴァンスは小屋の奥へ飛んで体当たりをかわした。ドアへぶつかったアラール八が木

つ端を撒き散らしながら横へ跳ぶ。瞬間、アラーハのいた場所を銀の閃光が薙いだ。

が、エヴァンスはドアより外へ出ようとしなない。狭すぎてアラーハが入ってこれないのを利用、体当たりのときに剣を使う、あるいは弓で狙うだけだ。まともに戦っては勝てないと思っただけらしい。

アラーハはエヴァンスの意図をすぐに悟った。くるりと振り返るなり、まだダメージでうまく身動きの取れないシャルトルに襲いかかるしぐさを見せたのだ。

「栗毛をおとりにして、金髪男をおびき寄せてやがる……」

当然エヴァンスは見殺しにできない。アラーハの思いつきだった。エヴァンスが小屋を離れるなりアラーハは急旋回、小屋のドアの前に立ちふさがって退路を絶つ。

馬は足を捻挫してフギンにつながれ、ゴーランはアラーハがトラウマになった上に暑さにへばって森の中へ逃げこんでいる。ベンベル人二人は小屋の中へ逃げこめず、森の中の追走劇に持ちこむこともできない。真正面からの戦いを余儀なくされていた。

アラーハは最初のころほど怒りをあらわにせず、平静の顔で、ただ耳だけを伏せている。シャルトルをはじめに人質にとったときからアラーハは無表情になっていた。うなり声はやみ、けれどその目が。

死ね。

「止め、なく、ちゃ」

真つ青になつて立ち上がったウラルを怪訝そうにフギンが見やつた。

「殺させちゃいけない。止めなくちゃ」

「いや、おいちよつと待て。なんで止めるんだよ」

引つつかまれた手を振り払う。

「フギン、耐えられるの？ アラーハが、あのアラーハが憎しみで人を殺すのを目の前にできるの？」

「だって、相手は奴だぞ？」

「私は耐えられない。アラーハが嫌がってたの、こうなることを一番恐れてたのを知ってるから。人のアラーハがここにいたら、絶対に自分を止めるはず」

「だからってな、お前あの中に素手でつつこむ気か？ 冷静になれよ」

それでも振り切って行こうとすると、さすがにフギンの顔色が変わった。

「待て、とりあえず待ってくれ」

待たずに一步踏み出すウラルの襟首をフギンがひつつかむ。

「どうしてもってなら俺が行く。とりあえずお前は行くな！」

耳元で怒鳴られ、ウラルはぎよっとフギンを振り返った。突然の大声と内容とに、何がなんだかわからずぼかんとする。

「フギンが？」

「やっと待ったな。俺が行っちゃ悪いのかよ」

ウラルが捨て身で行くよりはいいだろうが。

「フギンがエヴァンスを守るの？ アラーハから？」

「あんな、お前が言い出したことだろ。嫌だっとなら最初から行かないけど。俺だって嫌だしさ」

まさかフギンがそんなことを言い出すとは思わなかった。

「いいの？」

「とりあえずやつを止めて、金髪野郎から引き離す。それでいいな？ そこからの説得はお前やれよ。俺には無理だ」

行ってくる、とフギンが戦いの中へ向かっていく。シャルトルがぎよっと振り返った。

「てめえの主人を助けてやるうってんだ、感謝して後ろに下がりがれ！」

一喝するフギンに何がなんだかわからないという顔をしつつ、けれど迫力に押されたのだろつ。シャルトルが弓を下ろす。

「アラーハ」

フギンの呼びかけにウラルは耳を疑った。フギンがこの姿のアラ

「八を。」

それでも耳すら向けず、ただひたすらにエヴァンスを襲い続けるアラール八にフギンは追いつき、たてがみをひつつかむと地を蹴った。棒高跳びのように綺麗に足を跳ね上げ巨獣の背に飛び乗るやいなや、首を跳ね上げたアラール八のツノをひつつかむ。さすがにぎよつとしたようでアラール八は暴れたが、フギンは頑として離れなかった。

「チビのころから暴れ馬に乗ってるんだ、なめるんじゃねえぞ！」
が、フギンは背中にしがみついているだけだ。馬具があるわけでもなく、アラール八の動きを制御できるわけではない。アラール八も一瞬驚きはしたが、やがてフギンを背に乗せたまま再びエヴァンスに向け突進の構えを見せた。だつと駆け出したその瞬間。

ぐらりとアラール八がよろめいた。フギンが渾身の力をこめアラール八のツノをひねったのだ。不意をつかれたアラール八はバランスを崩し。

轟音と共に倒れた。

「ウラル、今だ！」

派手に舞い上がった土ぼこりの中からフギンの声が聞こえた、と思った刹那、空気がうなつた。切り裂かれた土ぼこり、そこからフギンの体が弧を描いて飛んでくる。

「フギン！」

フギンは倒れ伏し、うめきながら腹を押さえている。アラール八に枝角で殴り飛ばされたようだ。反射的にアラール八の方を見れば、アラール八は既に立ちあがっていた。こちらをちらとも見ない。ただ大角をかがげエヴァンスをねめつけている。

「くそ、転ばしたくらいじゃ駄目だったか……」

かすかにうめき、フギンは気を失った。フギン、フギンと呼びかけながら軽く揺さぶったが気づく様子はない。震えながらフギンの手をとって脈を確かめ、まぶたをこじあげ怪我の具合を確かめる。フギンの腹はひどいアザになっているが、吐いてもいないし、危な

い状態ではなさそうだ。

顔を上げる。何事もなかったかのようにアラーハはエヴァンスを襲い続け、エヴァンスはシャルトルの援護を受けながら応戦している。たださっきまでと違うのが、アラーハの腰の辺りに矢が一本、深々と刺さっていた。それに首のあたりに浅いが長い傷跡がある。フギンが作った隙で攻撃を加えたのだ。そのせいでアラーハの動きが少しにぶっている。形勢逆転しかかっていた。

ウラルは唇を噛んだ。なにもウラルはアラーハを不利にしたかったわけではない。ただ、アラーハを止めたかった。エヴァンスを殺させたくなかった。それだけなのに。

「止めなきゃ」

気を失っているフギンに心の中で謝り、ウラルはポケットから犬笛を取り出した。

小さな笛に思いきり息を吹き込む。アラーハがびくりと動きを止める。シャルトルが間髪いれずに矢を放つ。ウラルがその前に両手を広げて立ちふさがる。

矢が、ウラルの二の腕に突き立った。

「ウラルさん……」

呆然と後ろでシャルトルが呟くのを耳にしながら、痛みをこらえてアラーハと向かい合う。否、向かい合おうとしたが矢の痛みは予想以上だった。立っていらなくなり膝を折る。

目の前にいたのに、アラーハにはウラルが見えていなかったらしい。いや、見えてはいるが木や石と同じただの障害物としてしか映っていなかったのだろう。アラーハは何もなかったようにエヴァンスに突進する。アラーハとエヴァンスの間にうずくまるウラルを無視して。

迫る蹄に踏みにじられる寸前、ぱつと体が浮遊した。

「なぜ割って入った。さがっている！」

エヴァンスがとっさにウラルを小脇に抱えて横に跳んだのだ。

アラーハは少し離れたところで頭を下げ、再び突進の構えを見せ

ている。応戦しようとして剣を構えたエヴァンスとの間に、ウラルは再び立ちふさがった。右の二の腕に矢をつきたてたまま。大きく両腕を広げて。

「アラーハ」

アラーハの熱い鼻息。突進の機会をうかがう黒い蹄。空を切り裂き振るわれる尾。無表情の顔。びったりと後ろに伏せられた耳。らんらんと光る目。

エヴァンスに向けられた強烈な怒気を、殺気を、ウラルが真っ向から受け止める。

「何を。どけ！」

エヴァンスの上ずった声も耳に入らない。ウラルの腰をかかえ横に突き飛ばそうとするエヴァンスの腕。足を踏ん張ってこらえるウラル。

もみあう二人にお構いなしに、アラーハが地を蹴った。

やめて、アラーハ。

やめて！

エヴァンスが舌打ちとともにウラルの足を払い、小脇に抱えて横へ跳ぶ。アラーハの枝角が容赦なく追いつがる。

強烈な一撃をエヴァンスは紙一重で避けた。エヴァンスも騎士、だてに死線はくぐっていない。

だが、ウラルは。

気を失っていたのはわずかな間、けれどウラルにはそれがわからなかった。時間の感覚を失っていたのだ。

誰かの腕に抱かれている。ウラルの頬にはその左胸が押しつけられており、心臓の音がよく聞こえた。疾走する馬の蹄音のような、激しく力強い心音。それにまじって本物の馬の足音に近いカポ、カポという音や、獣のうなり声が聞こえていたのだが、ウラルは気づ

かなかった。

誰に抱かれているのだろう、とウラルはぼんやり思い、ああ、これはジンの腕だ、と思い出して納得した。硬い剣ダコのできた、あたたかで大きな手。広く厚い胸板。

目を開けると、思ったとおりジンの顔があった。前方を鋭い目でにらみすえている。その首筋やひたいにはじっとり汗がうかんでいた。

「ジン」

嬉しくなつて呼びかける。ジンがはつとウラルの顔をのぞきこみ、慌てたように前を向いた。真っ青な顔、激しくなる心音。何にそんなに焦っているのだろう、とウラルは顔を少し傾けてその視線の先を見やる。

顔を傾けた拍子に頭がひどく痛み、ウラルはうめいた。一瞬白くなる視界、あがる息。けれどその視界が元に戻ってみれば、なんといいことはない、そこにいたのは獣の姿のアラーハだった。

「なんだ、アラーハじゃない。ジン、アラーハをそんなに怒らせるなんて何をしたの？ だめよ、ちゃんと謝らなきゃ……」

普段のウラルなら明るい声が出たはずだ。それなのになぜか、かすかなかすれ声しか出ない。なぜなのか、ウラルにはわからなかった。考える力も残されていなかった。

ウラルを横抱きにした男の袖はウラルの血でぐっしり湿っている。二の腕の矢傷と、側頭部の傷からの血で。そう、ウラルはアラーハの巨大な枝角で頭、右耳の上のあたりを横殴りにされていたのだ。打撲傷というにはあまりに重い、ツノでえぐれた傷跡から血が絶え間なく流れ落ちていく。

ふいにアラーハのうなり声がやんだ。伏せられた耳がおきあがり、ウラルの口元にぴたりと向けられる。不思議そうに耳を動かすアラーハ、まばたき数回分の間。

うめき声、うなり声ではなく痛みにうめくような苦しげな声のアラーハの喉から漏れた。

我に返ったアラーハはウルルを抱いた男がよける間もない素早さで一直線にウルルのそばへ駆け寄った。ウルルの口元に、側頭部に、右肩にあわてて鼻先を寄せ傷の程度をさぐる。さっきまで憎い仇の姿しか目に入っていなかったアラーハだが、もうウルルしか目に入っていない。一瞬にして怒気も殺気も失せていた。

ウルルはほほえんだ。アラーハのひたいをなでようと手に力をこめたが、指先がぴくりと動いただけだった。

「許して、もらえた？ よかった、ね、ジン……。……。ねえ、どうして、あんなに、怒ってた、の……。アラーハ……。？」

安堵すると同時にまぶたが重くなった。じわりじわりと闇がウルルを覆っていく。ひどい頭痛がしていたが、心は穏やかだ。ジンがそばにいてくれる。ウルルをこうして抱いていてくれる。ウルルは目を閉ざした。全身の力が抜け落ちていく。

ウルルを覗きこんでいたアラーハが顔を上げた。言葉を発せない口に代わり、目にめいいつぱいの感情をこめて。

助けてくれ。

ウルルを、助けてくれ……。！

第二章 4 「仇にまで祈られて」 上

なにか苦い水を飲まされた気がした。

まぶたをこじあけられ、ランプの光をあてられた気がした。

側頭部に痛みを感じ、ひどくうめいた気がした。

誰かが怒鳴る声を聞き、ついでしたっかりと手をにぎられた気がした。

「ジン、そばにいて」

のぞきこんだジンの目が青く見えた気がした。

「……ああ、ここにいます」

優しく髪をなでられる感触に安心した気がした。

*

ウラルは丘に立っていた。

ジンがいる。前と同じように水晶の棺に腰かけ、夕日を眺めていた。ジンの視線の先でふたの開いたイズンの棺と、ふたの閉まったネザの棺が金色の光を反射していた。

黙ってジンの後ろに立つと、ジンの手がぼんぼんと水晶をたたいた。ジンの隣に、ジンの棺に腰かける。

「さつき、来てくれた？」

話しかけると、ジンは「いいや」と首を振った。

「俺はもう、現実にはいない。俺は俺の世界にいる。わかっているだろう、ウラル？」

やっぱり、とウラルは目を伏せた。

「あれはエヴァンスだ。エヴァンスと俺は体格が似ているからな。背丈も、肩幅も、胸の厚さも、腕の太さも。俺とエヴァンスと、ついでにサイフォスもあわせて三人で同じ服を着て並んだらなかなか見ものになったろうな。三人そろって声まで似ている」

サイフォスもジンと体格が似ていた。殺され森の中で首をつられていたサイフォスをおろすとき、はじめて気づいたのだ。よく覚えている。

「ウラル、アラール八を止めてくれてありがとうな。だが、あんまりにも無茶が過ぎる。もっと自分を大切にするんだ。もしお前が自分の手にかかって死んだとなれば、アラール八はどうなると思う？ 発狂しかねんぞ」

「でも、あれ以外にどうすればよかったの？ あのままエヴァンスかアラール八のどちらかが死ぬまで放っておくなんて、私にはできなかった。アラール八なら私は殴らないと思ってたんだけど」

「フギンもやられてしまったしな」

ウラルはぎょっとフギンの棺を見た。ファイヤオパールの棺は空っぽだ。アラール八のアレキサンドライトの棺、エヴァンスのサファイアの棺、シャルトルのペリドットの棺もそれぞれ空で、持ち主が死にかけてときに現れるという人影もない。

「お前を除いて、みんな無事だ」

「私、そんなにひどいの？」

「死にはしないが、あの戦いに慣れた連中がそろって青ざめるくらいには」

怒りで我を失った巨獣の前に立ちはだかったのだ。ツノの一撃をまともに食らえば即死はまぬがれなかっただろうから、命があっただけよかったと思うしかないだろう。

ジンが立ち上がった。

「お前が起きられるようになるにはまだ時間がかかる。少し歩かないか」

うなずき、手をとられて立ちあがる。ジンの手は生前と同じくあたたかだ、やはりエヴァンスの手に似ていた。

「やっぱりここ、私の夢の中なのね。ね、ジン、墓守って知ってる？ 夢の中にお墓を持つ人をそう呼ぶんだって」

「ああ、お前は墓守だ」

「フギンとアラールも？」

「アラールはそうだ。フギンも、まあ似たようなものだな」

フギンが「似たようなもの」なのは、墓ではなく戦場の夢を見ているからだろうか。

それにしても、アラールも墓の夢を見ていたとは。そういえば隠れ家で「北へ行かなきゃならない」と強い直感に見舞われたとき、アラールは何か言いたげにしていた。あれはもしか、墓守と関係があるのではないだろうか。

「墓守って、何なの？」

ジンの足が止まった。

「この墓を心に持つ人だ、という説明では物足りなさそうだな」

「うん。だから聞いてるの」

すぐに何らかの答えが返ってくると思っていたが、ジンはうつむき何かを考えるそぶりを見せた。

「すぐに答えられないようなことなの？」

「ああ。申し訳ないんだが」

「複雑だからどう説明しようか考えてるの？ それとも単純に話せないこと？」

「後者だな、説明しようと思えば一言で済むんだが。もうしばらく待つてくれないか？」

「じゃあ、いくつか質問するから、答えられるところだけ答えて」

ジンは苦笑しながらもうなずいてくれた。

「墓守は予言をすることがあるの？」

「ああ。ただし、お前もわかってる通り未来が見えるわけじゃない。この墓所から読み取れることだけに限られるが、予言は予言だな。知らないことを知る」

「じゃあ、ふたつめ。私、前にここであなたに会ってから、妙な直感をすごく感じるの。北へ行かなきゃ、とか。それも墓守と関係しているの？」

「それは、そうだな。墓守だからといえるだろう。ここから見えてい

る俺の心がお前に伝染していたんだ。すまん。ちなみに、アラールをどうしても止めなきゃならんとお前が思ったのもそれだよ。ただ、あんな無茶に出るとは思っていなかった」

そうだったんだとジンの目をのぞきこみ、ウラルはほほえんだ。

「じゃあ私が急な直感に襲われたら、それはジンがそう言っていると思えばいいのね」

ジンも微笑を返してくれる。

「そうだな。ただ、無茶はくれぐれもするなよ。ほかには？」

「今のところはこれだけ。ほかはまた、次に会うときに。ごめんね、遺言もあまりちゃんと実行できなくて。少しずつ伝えていくから」

ああ、とジンは寂しげにうなずいた。

お墓参りにつきあつて、と二人で墓地をそぞろ歩く。時々立ち止まっては花、そこらじゅうに咲く青いナタ草をつんだ。

この墓地はいつも夕方だ。ナタ草は時間によつて赤、橙、黄、黄緑、緑、水色、青、紫の八色に色を変えるにもかかわらず、このところいつも夕方の色、青いナタ草ばかりをつんでいる。ジンの無骨な手にも青い花は思いのほか似合っていた。

途中、両親と兄の棺が見つかった。病死した母は看取ったが、父と兄はリーグの老騎士カフスに死んだと聞かされただけで遺骨も戻つてきていない。まだどこかで生きているような気はしていたが、二人の棺のふたはぴっちり閉まっていた。

棺のふたに刻まれた家族の名前を指でなぞるウラルの後ろで、ジンはぼんやりと棺を、スヴェルのメンバーたちの棺の群れを見つめている。

ここには本当にたくさん棺があった。ウラルが一度だけしか話をしたことがない人も、顔だけ知っていて名前は知らなかった人もふたの開いた棺の群れをのぞきこんで見れば、エルディタラのメンバーたちだった。あの二重人格一步手前なムニン団長やロク騎手のマルクの棺もある。このふたが閉まりませんようにとウラルは心から祈った。

「それは誰の棺だ？」

ジンに声をかけられたのは、小さな黄水晶の棺の前でウラルがぼんやりたたずんでいる時だった。

「ジン、私と初めて会ったとき、私、陶芸窯の中で赤ちゃん抱いてたよね。あの子」

ジンが手に持っていたナタ草をそつと棺の前に置いた。

「アラーハがエヴァンスを殺そうとするのを私は必死に止めただけ、私も人殺しなのよね……」

ジンの大きな手がウラルの肩に乗せられた。それきり何も言わないうジン、ウラルもまた黙ったまま黄水晶に透ける小さな影を見つめていた。

「ウラル」

長い追悼の後、ジンが口を開く。

「そろそろ帰ってやれ。フギンが心配している」

忘れていた。ウラルは瀕死の重傷を負って気を失っているのだ。

「帰ったらその棺の持ち主のことをフギンに聞いてみるといい。知っているはずだ」

ジンがすぐそばの棺を指す。

ウラルは首をかしげた。今までここになかった棺だ。乳白色の石、そのところどころが青くぼんやりと光っている。ブルームーンストーン、の棺がフギンのファイヤオパール、の棺とマライのタイガーズアイの棺にはさまれる形で出現していた。

「近々、お前が知り合いになる相手だ」

空っぽの棺にたてかけられたふたには、メール、と刻まれていた。

ウラルはぼんやりと目を開いた。視界は薄暗い。日没後か夜明け時か。薄青い光が粗造りの部屋を照らしていた。

顔を動かし部屋を見渡そうとしたとたん目の前に火花が散った。

頭に走る激痛にまた気を失いそうになり、ウラルはうめいた。

そのうめき声を聞きつけたのだろう。すぐそばで何かが身じろぎする気配がした。ウラルの横たわるベッドのわきの窓が外側から開かれる。冷たい空気と共に大きな獣の鼻面がすべりこんできた。

「アラーハ」

痛みをこらえて無事な左手を差し伸べる。アラーハはそれに鼻面をすりよせ、ウラルの顔に鼻先を近づけて、よかった、と言いたげに長いまつげを伏せた。すまなかった、と言ったかったのかもしれない。

「気がついたのか？」

アラーハとは反対側から椅子を引く音と共に男の声がある。ウラルは驚いて反射的にそちらを振り返ろうとし、痛みにうめいた。

「ずいぶん痛むようだな。待ちなさい、すぐに痛み止めを持ってくる」

男の足音が頭にひどく響く。声ですぐエヴァンスだとはわかったから振り返らなくてよかったのだが。目を閉じて必死に痛みをこらえていると、エヴァンスがかたわらに来る気配がした。

頭を持ち上げるぞ、と声をかけられかすかにうなづく。薬を飲むのに最低限必要な程度に慣れた手つきで顔を傾けてくれた。うまく起こしてくれたのだが、それでも振り向くだけで激痛が走る頭だ。痛いものは痛い。歯を食いしばって痛みをこらえ、薬を飲むどころではないウラルをエヴァンスは辛抱強く待ってくれ、痛みが引き余裕が出てくるのを見計らってうまく薬を飲ませてくれた。

「これでだいぶ楽になるはずだ。ゆっくり横になっただけいなさい」

薬を飲み終え、再び枕に頭をつけるところで走った激痛にぐったりしているウラルの髪をエヴァンスはそっとなでる。覚えのある感触にウラルはぼんやり目を開いた。おずおずとした、けれど思いのほか優しいしぐさ。青い目と薄い唇には笑みさえ浮かんで。

「ありがとう、エヴァンス……」

エヴァンスの目が不思議そうにウラルを見、次の瞬間、いつもの

冷たさと鋭さを帯びた。

「ようやくはつきり目が覚めたようだな」

声もいたわりに満ちた穏やかなものから、普段の鋭いものに変わっている。ウラルは目だけで小さくうなずき、エヴァンスの変化を素直に寂しく思った。

エヴァンスはジンのふりをしていたのだ。エヴァンスにジンを重ね、安堵して笑うウラルに「俺は違う」と言えなかったのだろうか。「ジンと呼んで、返事をしてくれましたね」

「ジンとは誰だ」

「私の大切な人です。死んでしまったんですが」

そうか、とエヴァンスは短く答えてそっぽを向いた。

即効性の薬なのだろう。痛みがだいふ楽になり、余裕が出てきた。シャルトルとフギンのものらしい二人分の寝息。どうやら今は夕暮れ時ではなく夜明け時らしい。

窓から鼻先をのぞかせているアラーハに目をやり、ウラルははつと息をのんだ。エヴァンスとアラーハが至近距離にいる。アラーハは枝角が邪魔でそれ以上入ってこれないのだが、それでも十分に鼻先の届く位置。噛みつくぐらいはできる。

それでもアラーハは耳も伏せず目も穏やかなまま、静かにウラルを見下ろしているだけだ。そのアラーハの耳の横では血止め草の束が逆さに吊り下げられている。

「この獣とは休戦状態だ。あの片腕の男とも」

見透かしたようにエヴァンスが答えてくれた。

「互いの武器は袋に入れ、鎖で縛りあげてこのベッドの下にある。鍵はお前の枕の下だ。包丁や薪割り用の斧はそのままだから、いざとなればどうしようもないが、ひとまず武器をとらないことはわたしもシャルトルも示したつもりだ。わたしたちから攻撃はしない。安心して休むがいい」

「私を殺さなくていいんですか？」

エヴァンスは苦笑する。

「命の恩は命で返す。そうするべきだと我らが神は説いておられる」
おごそかに言い、それに、と続けた。

「それに、お前を殺す気が失せたというのが本当のところだ。なぜわたしを助けた」

「あなたこそ。なぜ私を」

「お前に助けられたからだ」

だから理由を聞いている、とばかりエヴァンスは顎をしゃくった。
「あなたを助けたかったわけじゃない。ただ、アラーハがあなたを殺すのに耐えられなかった。アラーハを止めたかった。それだけです」

ほう、とエヴァンスの目が細くなる。

「ついでで仇の命をかばうのか。自分の命を捨ててまで」

「大切な人が、目の前で人殺しをするのを黙って見ていられますか？」

言うてから目の前の男が人殺しに慣れていることを思い出したが、エヴァンスはそうだなと真面目な顔でウラルの顔をのぞきこみ、それきり何も言わなかった。

「少し話しすぎたようだ。休んでいなさい。何か欲しいものは」

首を振るとエヴァンスはうなずき、ウラルのベッド脇から離れかけて立ち止まった。

「そうだ、これを返しておこう」

エヴァンスは机に置いてあった金色の短剣を取り、ウラルの布団ごしの胸の上に置いた。

「シャルトルからお前の大切なものと聞いている。刃は、つぶさせてもらったぞ」

ジンの形見のアサミイを無事な左手でぎゅつとにぎりしめる。片手で苦労して刃をわずかに抜いてみれば、言われた通り金槌かなにかで丁寧に刃がつぶされていた。

エヴァンスが少し離れたところの床で眠っているらしいシャルトルを起こしている。すぐにシャルトルは飛び起き、目を開けている

ウラルを認めて笑顔になった。

「ウラルさん、よかった！ お加減はいかがですか？」

息せきって尋ねてから、自分は今までウラルの命をつけ狙っていたことを思い出したのだろう。シャルトルは気まずそうな顔になり、居心地悪げに目を伏せた。

「だいぶ楽です。痛み止めを飲ませてもらったので」

答えてほえむと、シャルトルはほつとした様子で再び笑顔を見せた。

エヴァンスはシャルトルを起こしてそのままフギンの横にひざまずいている。ウラルが目を覚ましたのを知らせてやるうと思っただしい。が、エヴァンスがフギンの肩に手をかけたその瞬間。

フギンの左こぶしがエヴァンスの顔のあつたところを薙いだ。エヴァンスは顔をのけぞらせて避けている。

「何しやがる」

フギンの声はいかにも不機嫌だった。休戦状態だろうが同じ部屋で寝起きしていようがフギンはフギンだ。

「ごあいさつだな。ウラルが目を覚ましたぞ」

だが、この一言に眠気も不機嫌さも吹っ飛んだらしい。「ウラルが」と呟くなりウラルのベッド脇に駆け寄ってきた。

「よかった。バカ野郎、心配させやがって」

ごめん、ごめんねと謝るしかない。本当に死ぬほど心配していたに違いなかった。

「お前の意識は戻らないし、このベンベル人ども追い出そうとしたんだけどさ、てんで出て行こうとしないし。ウラルの世話をするなら両手がいるだろ、だと！ そりゃそうだけどさ。なんとかなるしお前らがいない方がウラルのためだって言っても、追いかける相手がここにいるのにごこへ行けというんだって。なんか俺、妙に納得しちまって言い返すチャンス逃してさ」

まくしたてながらフギンは嫌そうにベンベル人二人をにらむ。

「お前がちゃんと回復して、この小屋を出れるようになるまで居座

るってさ。どうするよ。お前、出ていけって言ってくれよ」

え、とエヴァンスとシャルトルを見てみれば、二人は顔を見合わせ苦笑していた。

「そういうことだ」

こともなげに言い放つエヴァンスに、フギンの目元がびくりとひきつった。

第二章 4 「仇にまで祈られて」 下

かくして妙な共同生活が始まった。

ウラルはベッドからまともに動けない状態、たとえフギンがエヴァンスに殴りかかってもアラール八が再び暴走しても止める力はない。最初はひやひやしながら見守っていたのだが、意外や意外、さして事件は起こらなかった。フギンは敵意をむきだしにしつつも戦闘に発展するほどには殴りかからないし、アラール八も穏やかなものだ。

「だってさ、お前が嫌がるだろ」

どうしてと聞いてみればフギンの答えはこれだった。ジンが言っていた「メール」のことはまだ尋ねていない。エヴァンスに聞かれて行き先の手がかりにされては困る。

「それに、悔しいけど俺ひとりじゃないそうにないしさ。アラール八と二対一なら勝てる見こみあるけど、アラール八にその気はないみたいだし、第一お前を人質にされたらどうしようもないしさ。今は何もしないのが得策みたいだ」

「アラール八はどうしてエヴァンスを襲うの、やめたんだと思う？」

「さあなあ。お前の命を助けたの、恩に着てるんじゃないか？ いや、でもそれだけであの恨みが鎮まるとは思えないよな」

「なんか、正気に返ったって感じよね。獣から人に戻った感じがする」

ウラルはアラール八が採ってきてくれた果物のカゴに目をやった。

アラール八にはまた、言葉が通じるようになっていた。何かを話しかければうなずき、首を振ったり嫌そうな顔をしたり何かしらの反応を返してくれる。フギンをせっついてはカゴをツノにかけてくれと頼んで、止血や化膿止めの薬草を大量に採ってきてくれたり、食料を調達してくれたり。むろんフギンが触れても背に乗っても嫌な

顔はしない。

ウラルの血がアラールを正気に返したのだろうか。それとも、ウラルを守ろうとしたエヴァンスのしぐさや面差しにアラールもジンの面影を見たのだろうか。アラールに言葉が話せれば一番に聞いてみたいことだったが、聞いても答えてくれない気がした。

「ね、フギン。どうしてアラールを、あの姿のアラールをちゃんと名前で呼ぶようになったの？」

フギンは居心地悪げに頭をかく。

「なんというか、うまく言えないんだけどな。あいつの戦い方、アラール八そのものだった。余裕があれば腹を狙う、本気で戦うときは首や頭ばかり狙う。フェイントのかけ方とかもまったく同じだ。それにさ」

フギンは少し口ごもり、窓から外を見た。アラール八は二頭の馬と共にのんびり草を食んでいるはずだ。

「お前、あの金髪男に報復したくないって言うアラール八を俺がのしったとき、すごい剣幕でアラール八は腰抜けじゃないって言ったよな。あの理由、アラール八はお頭の父ちゃんだったっていう話も、よくよく思い返してみたら心当たりがないわけじゃなかったし、イズンもそんな感じのこと言ってたし。早い話が、お前の話がやっと腑に落ちたんだよ」

否定する理由はないのかもしれない、でも心が追いつくまで待つてほしい。隠れ家を出る前、シガルに言われた言葉がウラルの脳裏をよぎった。あれはフギンにも言えるのではなかっただろうか。やっとならフギンの心が追いついた。一年をかけて、やっとなら

「ごめんな、ずっと気違いよばわりして」

「ううん。私こそ、ごめん」

「なんでお前が謝るんだよ」

ウラルにも非はある。フギンの心が追いつくのを待たず、ひたすら信じてほしいと押しつけ続けた。だから余計にフギンは反発してしまっただけだ。自分のほうがアラール八と知り合ってから長い、自分

が知らないのにウラルが知っているはずはないと。

「アラーハにも謝つたらさ、お前とおんなじだ。声が出るわけでもないのに、口だけ動かして『すまなかつた』って言うんだよ。でさ、背中に乗れって言うんだ。座りこんで鼻先で自分の背中をつついで。乗せてもらつたら、あいつ、本当に足が速いんだな。すげえ勢いで川まで走っていくんだ。水汲んで帰ってくるまで、あのベンベル人もが行く時間の半分もかからなかつたぜ」

傷のせいでベッドにはりつけ状態のウラルは起きている時間の大半、こんな調子で小屋で暮らしている三人と語らつて過ごした。特にエヴァンスは「暇だろう、話し相手になろう」と頻りにウラルの脇に置いてある椅子に座つた。どうもエヴァンスの側でもウラルに山ほど尋ねたいことがあるらしい。

「なぜゴーランがおいを追っていることに気づいた？」

「前の村で泊めてくれた人が、馬やアラーハのいたあたりでゴーランがうろろしているのを不審に思ったみたいで。家の中に隠れていた私たちに後から教えてくれたんです。その後、私たちはおいを消しながらここまで来たのにどうして二人とも追つてこられたんですか？」

「お前たちがあの家に隠れていることは察しがついた。地下に隠れていただろう。わたしたちベンベル人も地下室をよく作るし、追われたときはそこに隠れる場合が多い。それを暴くためにわたしたちはゴーランの感覚を利用するのだ。ゴーランは嗅覚だけでなく、獲物の体温も感知することができる。犬はごまかせてもゴーランはごまかせぬ。だから風下に忍んで、お前たちの姿を見ながら跡をつけたでなければ振り切られていただろう」

「ずいぶん親切に教えてくれるんですね」

「ひとつ教えてもらえれば、ひとつ教え返す。命には命を、情報には情報を」

おかげさまで随分疑問が晴れた。

あの仇討ち未遂の後、すぐエヴァンスは教会へ行き、身を清めな

がら泊まりこみで神官の裁きを待っていた。その「裁き」の結果が、その異教徒三人、つまりはウラル、フギン、ダイオの三人の命を絶ち神に捧げるべし、だったそう。その上、その「罪がつくなわれ」まで騎士権の剥奪、という厳しいものだった。

門番たちまでいかなかったのは、その裁きが重過ぎると総出で減罪嘆願に出かけていたかららしい。だからまるで夜逃げのように屋敷が静まり返っていたのだ。

エヴァンスがいなくて、こっさりシャルトルが話してくれたことによると、エヴァンスはどうもお偉がたからひどく嫌われているそう。異例の若さで騎士となった、媚びることを知らず付き合っても非常に悪い、戦うことしか知らない男。十万を統率するだけの力を持ちながら千人の部下しか与えられず、危険な戦場ばかりへ回された。その千人を少数精鋭として育て上げれば、育てるそばから引き抜かれてほかの騎士のもとへ回される。功をあげれば片っ端からかすめ取られる。

それでもなんとか生き残れば、次は小さな偏狭の町の君主に封じると言われた。実質上の幽閉だ。さすがにエヴァンスが自分は戦うことしか知らないのだと突っぱねれば、屋敷ひとつに五百人の部下だけを与えられてヒュガルト町の警護を任された。とても一国の騎士の仕事ではない、とシャルトルはひどく怒っていた。

そんな調子だったから、エヴァンスの足元をすくいたがっている連中にとってはいい機会だったのだろう。容赦なくエヴァンスは追い出されてしまった。神の裁きだ、実行できねば死後煉獄へ落とされて永遠の苦しみを与えられるぞ、と言われれば敬虔なウセリメ教徒であるエヴァンスには否の言いようがない。

そんなわけでエヴァンスはシャルトルと共にウラルとフギンを探し始めたのだが、ヒュガルト町じゅう探しても見つからない。当然だ、エヴァンスがウラルを探し始めたのはウラルの傷がある程度癒え、森の隠れ家へ戻った後だった。

困ったエヴァンスらは捕らえていたダイオを尋問した。だが、ダ

イオも決して口を割らない。拷問で無理に聞き出す案も出たが、とても屈する相手ではなかつし、嘘を吐かれてまんまと踊らされる可能性もあった。

そこでエヴァンスが教会にいる間も屋敷に残ってダイオの世話をしていたミュシエが言い出したのだ。うわ言でダイオがなにか地名らしいものを言っていた、手がかりではないかと。

エヴァンスが教会にいる間、囚われのダイオは生死をさまよっていた。エヴァンスに負わされた重傷と、その傷のための高熱がダイオの心をあの戦場に引き戻していたらしい。主君フェイスを逃がせなかったことを嘆き、フェイスの息子たるジンのもとにも行けるものなら助けに行きたかったと、意識のないまま嘆きに嘆いていた。そのなかにルダオ要塞や、ゴウランラ 周辺の地名がまじっていたそうだ。

まったく手がかりもないわけだし、片道四日もあれば着く。行ってみるか。とエヴァンスらは北へ向かい、そこでウルルらにはったり出くわしてしまった。

ウルルも見返りにエヴァンスを恨む理由やジンとの関係、エヴァンスらが探していたときどうしていたか、エルディタラ との関係を乞われるまま語った。アラール八がなぜエヴァンスをあれほど恨んでいるかも尋ねられたが、これは答えるに答えられない。守護者でんでんのは話さず、ただアラール八の息子をエヴァンスが殺したのだ、とだけ話した。イッペルスを殺した覚えはないが、とエヴァンスは不審げにしていたが、話したところで信じてもらえらると思えないし、信じてもらう必要もない。

ウルルが意識不明だったのが二日、自力で体を起こせるようになるまでさらに二日。小屋の中なら歩き回れる程度にまで回復するのにもう四日かかった。三人と一頭はよくウルルの世話をしてくれたし、シャルトルが持っていたベンベル国の薬はリーグのものよりよく効いたが、それでもウルルのダメージは重い。

「これでお前が倒れているところを見るのは三度目だな」

エヴァンスも苦笑していた。

「監獄の拷問を受けてわたしの屋敷へ来たとき、わたしが頭を殴って昏倒させたとき、そして今。わたしの立場だ、心配することはできないが」

おかげさまでウラルの体は傷だらけだ。特に頭の傷は焼いて止血したものだから見た目も派手だった。包帯がとれても髪が伸びるまで帽子がいりそうだ。

そして、イズンと隠れ里で別れてから十二日目の昼前。

小屋の外で壁にもたれ、座ってエヴァンスと話をしていたウラルは、アラーハが急に空を見上げたのにつられて空を見た。何も見えないが、アラーハには何かが聞こえているらしい。座りこんだ姿勢から立ち上がり、耳をどこかに向けている。

アラーハが空を見上げたまま高くないな。イツペルスのいななきは馬のそれよりはるかに低い独特のものだ。何かと馬のところにいたフギンとシャルトルがすっ飛んでくると同時に、空に鳥影が現れた。誰かを背中に乗せたロク鳥だ。

「シガル？」

ぼかんと呟き、フギンを見る。シガルだな、とフギンもうなずいた。

「どうしてここに？」

「いい加減遅いから心配したんだろ。まいったなあ」

シガルはぐんぐん近づいてきて、小屋の上で旋回を始めた。降りる場所を探しているらしい。

それから、不意に急降下してきた。

「Lia ieouw・Chartre!（避ける、シャルトル！）」

突然のベンベル語にウラルは驚いてエヴァンスを見つめた。エヴ

アンスは言うなりシャルトルを小屋の方へ突き飛ばしている。瞬間、巨鳥がシャルトルのいた場所のすぐ脇を滑空していった。シャルトルがいたまさにその場所には、投槍がまっすぐに突き立っている。

「次は当てますよ。二人から離れなさい、ベンベル人」

今まで聞いたこともないほど冷たい声が空から降ってきた。

「シガル、やめて！」

叫んだが、大きな声を出すのは今のウラルには無理だった。頭に走る激痛。ふらついたウラルをフギンが支えてくれる。エヴァンスは身構え武器をとろうとしたが、武器は全部袋に入れて隠してある。エヴァンスは舌打ちし、シャルトルをうながして小屋の中に入った。巨鳥が暴風ともに降りてくる。鋭い目をしたシガルは投槍を油断なく構え、ロク鳥に騎乗したままでウラル、フギン、アラー八のところへ歩み寄ってきた。

「何がどうなっているんですか？」

「その、いろいろわけがあつてさ。とりあえずお前、そんないきなり槍ぶん投げることはないだろ！」

シガルは苦笑した。

「襲撃されている真っ最中かと思つたんです。どうやら違つみたいですね」

「休戦中なんだよ、今は平和に話をしてただけさ。で、お前なんでもここがわかつたんだ？ 久しぶりだなあ」

「本当に久しぶりですね、ダイオ將軍はカンカンですよ。帰ってきたイズンさんが二人は待ち伏せにあつたかもしれないと言つていたので、マルクさんと二人で飛び回って探していたんです」

「げ。やっぱりダイオ、怒ってるか？ そりゃ怒ってるよなあ」

危機感のないフギンの様子に多少安心したのだろう。シガルは槍を下ろし、ロク鳥の鞍に固定された鎧の皮ベルトを解き始めた。

「ウラルさん、その怪我はどうされたんですか？ やっぱりあのベンベル人たちに？」

驚いたのや大声を出したのがいけなかったのだろう。ウラルはず

きずきする頭を押さえながらへたりこんだ。アラール八が大きな体で日陰を作ってくれ、心配そうにのぞきこんでくる。

ウラルはとても事情を説明できる状態ではないと判断、フギンがシガルにかいつまんで状況を話した。ベンベル人二人に襲撃されたこと、ウラルがアラール八の枝角で誤って殴られ重症をおったこと、どういうわけやらベンベル人二人がウラルの手当てをしてその後も居座っていること、ウラルの傷ではしばらく動きがとれそうにないこと。

「そんなに酷いんですか」

シガルが心配そうにウラルをのぞきこむ。

「動けるようなら、僕が連れて帰るんですが……」

「シガルが？　ロク鳥で？」

「ロクは滑空しますからね、揺れは馬よりずっと少ないです。ここでベンベル人たちと一緒にいるよりは、森の隠れ家へ帰れるなら帰ってしまった方がゆっくり休めるでしょう。どうですか？」

帰れるものなら帰りたいが。アラール八とフギン、そして窓から様子をうかがうエヴァンスとシャルトルを見た。二人もこちらに耳をそばだてている。

「ウラル、それがいい。シガルと一緒に行けよ」

「でも、フギンとアラール八は？」

大丈夫だ、とばかりフギンはアラール八の肩のあたりを叩いた。

「全速力で俺たちも隠れ家へ向かうよ。なに、やつらの足は捻挫した馬とゴーランド。俺とアラール八にやどれだけががんばってもかなわないさ。お前のいないところで向かっていったりはしないからしないから安心しろ。実際、この何日もやつらを殴ったりしてないだろ？」

任せてくれ、と言いたげにアラール八もうなづく。今のこの二人ならウラルがそばを離れても大丈夫そうだ。もう一度フギン、アラール八、エヴァンス、シャルトルの顔を見て、最後にシガルと向かい合う。

「じゃあ、シガル。明日の朝に出るってことでいい？」
了解です、とシガルはうなずいた。

具合が悪くなったらすぐに言ってくださいね、とシガルに言われながら命綱がとりつけられる。それで準備は終わりだった。

馬上のフギンが「また後でな、何もなけりや三日かからないから」と言いつつ手をにぎってくる。それを握り返し、ウラルは少し離れたところで見守っているベンベル人二人を見やった。

この二人は本当に最後まで手を出さず気がないようだ。武器入れ袋の鍵は開け、それぞれの武器は取り出したが、それを帯びているのはフギンだけ。二人のものはどうやら、まだ小屋の中にあるらしい。別れの言葉を言いたかったが、どう言っているのやらわからない。元気で、とかまた会いましょう、というのも変な話だ。

ウラルが複雑な顔で見つめているのに気がついたらしい。エヴァンスが無表情に口を開いた。

「また会おう、ウラル。これで借りは返した。次に会うときは容赦しない、覚悟するがいい」

フギンが鋭い目を向けたが、エヴァンスはむろん動じない。

「さよなら、できるならもう会いませぬように。薬、ありがとございました」

それがお前の別れの言葉か、と言いたげにエヴァンスは苦笑した。シャルトルはただ微笑っている。

もういいですかとシガルに尋ねられ、痛みが走らない程度に軽くうなずく。ロク鳥が力強く羽ばたいた。

旋回しながらフギンとアラハの出発を見守る。フギンはアラハに何事か話しかけると、猛スピードで獣道に走りこんでいった。エヴァンスとシャルトルは空を舞うロク鳥を見上げながら何事か話している。フギンを追う気はなさそうだ。

旋回をやめて森の隠れ家へ飛び始めたシガルの背にもたれかかる。帰ったら一番にダイオに謝ろうと思いつながら、エヴァンスの視線を背中に感じながら、ウラルはぐったりと目を閉じた。

第三章 1 「暗雲きたる」 上

ウラルはベッドに横たわっていた。久々の自分の、森の隠れ家にあるウラルの部屋の布団。カビまみれを覚悟していたが、この隠れ家にとどまっている エルディタラ の誰かが定期的に干してくれていたようだ。あるいは誰かがこの部屋を使っていたのかもしれない。ウラルがこの部屋を使っていたときとさして変わらない、懐かしい暖かさだった。

今の今まで眠っていたのだが、なんととはなしの居心地の悪さを感じて目が覚めた。具合も悪いことだしもう少し眠っていたくて、ウラルは目を閉じたまま寝返りを打つ。

「わ、起きちまったか」

「だから言っただじやないの！ ドア閉めて！」

「寝返り打っただけかも」

「いいから閉める！」

押し殺した怒鳴り声が聞こえ、ウラルは今度こそはつきり目を覚ました。ぱたんとドアの閉まる音がする。

ウラルは横になったまま閉まったドアをきよとんと見つめた。ひそひそ声の主たちはまだドアの前でなにやら言い争っているようだ。聞き覚えのある声が三、四人分。いや、もつといる。

「エルディタラ の人たち？」

ぴたつとドアの前の話し声やんだ。体を起こし黙ってドアを見つめていれば、そろりそろりとドアが細く開く。その隙間から縦一列に何人かの顔がのぞいた。一番上はシガル、間に三人の顔をはさんで一番下がナウトだ。

思わず目をしばたき笑みを漏らすと、今度こそ本格的にドアが開いてわらわら人が部屋に入ってきた。さらに、さっきの覗きこみには参加していなかった数人がリビングから来る足音もする。いったい何人集まっているのやら。

「ごめんごめん、起こすつもりはなかったんだ。ただウラルが帰ってきたって聞いてさ、どうしても顔が見たくなっちまって」

へらへら笑いながらマルクが言う。だから止めたのと言いたげにシガルが肩をすくめたが、シガルも人のことは言えないのだろう。シガルのかわりに姉さまがたの一人がぺしりとマルクの頭をひっぱたいた。いや、姉さま「がた」とは言えなさそうだ。ウラルのほかには彼女だけだった。

「なに笑ってんのよ、ウラルの顔色見なさい。とつとと出る！」

名前はセラ。ゴウランラ の要塞で初めて会い、エルディタラ 目前では森の中まで迎えに来てくれた。そのほかにもなにかと付き合いがある。

「でもよ、ウラルだぜ？ ほんつと久しぶりなんだからちよつと話くらい」

「いい加減にしなさい、あんた蹴りたいの？」

言うや否やセラのほっそりした足がうなりをあげてマルクの尻を蹴りつけた。

「この暴力女！ オトコオンナ！ いいじゃんか少しくらいウラルと話させてくれたって！」

再びセラの足がうなった。あつという間にマルクを部屋から蹴り出し、きろりと腕組みしながら部屋に入りこんだ男らをねめつける。男らは「おっかねー」とばかりに肩をすくめ、「じゃ、この怖い姉ちゃんが出て行った後でな」とこそそ部屋を出ていった。

「これでよし。具合どう、ちよつとはまし？ 帰ってくるなり倒れちゃったって聞いて心配してたのよ。なににあの男もときたら」
まったく美人なのにすごみがある。セラの視線の先、ドアの向こうでマルクが尻をさすりながら飛び上がるのが見えた気がした。

そうなのだ、森の隠れ家に帰ってくるなりウラルは倒れた。もともと具合の悪いところに、慣れないロクに長時間乗っていたものだから揺れに酷く酔ってしまった。誰に会う余裕もなくこの部屋に転がりこみ、気を失うように眠りに落ちて、起きてみればこの大歓迎

というわけだ。

「とりあえずあなたは絶対安静！ どうしたっていうのよ、こんな酷い怪我こしらえて。頭を打ったときって本当に怖いからとにかく休むこと！ わかったわね？ 男どもの方は私がなんとかするから何か欲しいものあったら言って。包帯かえる？ お粥作ったら食べられる？」

「セラ、私は大丈夫だから。寝たらすつきりした。マルクも居てくれたって大丈夫だったのに」

「なに言ってるのよ、あなた自分がどんな顔色してるかわかって言ってる？ 鏡もってきてあげましょうか？ なのにあんなスケコマシを部屋の中に入れても大丈夫なんてどうかしてる。あなたが寝間着でベッドに横たわってるの見て喜んでる男よ？ まったく男って生き物はなんであんなのかしらね、そろいもそろって！ えっと、傷薬はこれで、包帯はこれっと」

ウラルは軽く笑った。これがセラ流の優しさだ。ありがたく手当てをしてもらい、無茶すぎだと叱られるのと心配されるのを繰り返しながら作ってもらったお粥を食べる。

「ね、セラ、お願いがあるの」

「なに？」

「ダイオに会いたい。呼んできてもらっていい？ スケコマシじゃないんだからいいでしょう？」

ドアの向こうで笑い声があがった。まさかウラルの口から「スケコマシ」などという言葉が出てくるとは思わなかったのだろう。相変わらずこの部屋は壁が薄いのだ。

「なにいやらしい笑い声あげてんのよ！」

セラが目吊り上げて部屋の外に出るなり、派手な平手打ちの音が何度も響いた。

「はー、すつきりした。ナウト、ダイオ將軍呼んできて。ウラルが話したがってるって」

大慌てで階段を下りる軽い足音、わざとらしく手をさすりながら

戻ってくるセラ。ドアの隙間から顔を押しさえて悶絶するマルクの姿がちらりと見えた。その横では頬に見事な紅葉をくつつけたシガルが困ったように笑っている。

「セラ、まさかとは思うけどダイオにまでこんな振る舞いしてないよね？」

「してないわよ、紳士だし。私だってだめな相手はわきまえてるわ」「シガルはひっぱたくのに？」

「あの人はだめなの？」

「騎士さまよ、一応」

「一応」のところでドアの向こうからかすかに苦笑の気配が伝わってきた。セラがふんと鼻を鳴らす。

「威厳の問題ね、たぶん。シガルにもダイオ將軍みたいな威厳があったら殴らないわよそりゃあ」

「じゃあイズンさんはどうなんです？ あの人も殴らないみたいですが」

ドアの向こうからの質問にセラは軽く鼻を鳴らした。

「たしかに威厳があるって感じじゃないわね。要は私の直感よ、直感。理由なんて考えるだけ無駄だわ。食べ物好みとおんなじ。イズンはだめ、あなたはオーケー。頑丈で性懲りのないマルクは半殺しでもよし」

マルクのブーイングが騒がしく返ってきた。シガルはおやおやと肩をすくめているのだらう。気分で殴られてはたまったものではないだらうに。

やがてナウトとダイオの足音が階下から聞こえてきた。階段ののぼりきったところでダイオの太い笑い声。

「あのご婦人だな。そろいもそろって見事な紅葉だ。さて、ウラルはどこにいます？」

「こちらです！」

セラが席を立ってドアを開けた。開け放たれたドアの向こうから相変わらずの派手な格好をしたダイオが顔をのぞかせる。貧血の体

には見ているだけで頭がくらくらしってくるほどの赤づくめ。

セラはダイオと、一緒に来たらしいイズンだけを部屋に招き入れ、ぴしゃりとドアを閉ざした。これに乗じて入りこもうとしていたらしいマルクがドアに腕を挟まれて苦痛の声をあげる。顔をしかめるマルクにセラはドアの隙間から蹴りを入れ、次こそぴったりとドアを閉じた。

「よくぞ戻った、ウラル」

ウラルはよろよると立ちあがった。座っていないさいとダイオがウラルの肩を押さえる。ウラルはその手をとって自分の頬に押し当てた。やっと会えた。

「帰りが遅くなって本当にごめんなさい。フギンも謝っていました」
「そんなことはいい。横になっていなくて大丈夫か？」

大丈夫、とウラルは笑った。セラがベッド脇から咎める視線を送ってよこす。イズンの顔も心配そうだ。よほど酷い顔をしているらしい。

「その怪我はどうした？ エヴァンスにやられたのか」
「ちょっと妙なことになってしまった」

エヴァンスに襲われたことからアラールハの暴走のくだりを話そうとして、ウラルは黙りこんだ。ダイオはまだアラールハが人でなくイッペルスという獣だと知らない。そこから話さなければならぬだろうが、信じてくれるだろうか。しかもダイオはよりにもよって一番人間らしかったときのアラールハしか知らないのだ。

ウラルはそこまですごい思ってたから、そうだとダイオと話している間に静かに部屋に入っていたイズンを振り返った。アラールハのことを確実に信じてくれる人がいた。

「この怪我はエヴァンスにやられたんじゃない、事故なの。アラールハが」

イズンの方を見ながら言ったのだが、その隣でダイオが怪訝そうな顔をした。

「おや、アラールハはフギンと一緒にいるのか？ この森で何度かア

ラーハらしき男を見ているんだが」

「え？」

「この暑いのに毛皮を着こんでいる人間などそうはいない。もっとも本当にあの御仁ならばこそこそ隠れずに出てくるだろうから、妙だと思っただがな」

ウラルはイズンを見上げた。イズンが肯定の視線を返してくれる。イズンがいてくれて本当によかった。間違いない、この森の新しい守護者だ。

「知り合いか」

「ううん、でも心当たりはある」

ダイオは答えを求める目をしている。そのままはぐらかそうとしていたウラルは苦笑して居住まいを正した。相手は幾度も死線をかいくぐってきた將軍、警戒心が強いのは当然かもしれない。

「大丈夫。たしかに怪しい人かもしれないけど、悪い人じゃないと思うから。アラーハのお仲間」

「紹介してもらうことはできないか？」

「私もまだ会ったことがないの。でもアラーハが帰ってきたら」

でも獣の姿のアラーハでは。イズンを見る。

「彼も人語は話せるでしょうから大丈夫ですよ。ただし、アラーハ以上に偏屈なのは間違いないでしょうね。アラーハの前ならともかく、我々の前に出てくれるかどうか。とりあえず話を戻しましょうか。僕らもシガルからあらかた話は聞きましたが、ウラル、その怪我はアラーハに？」

ダイオが不満げな目でイズンを見たが、これ以上押ししても二人は答えないと判断したらしい。「つらかったら遠慮なく言いなさい」とウラルに優しい目を向けた。

「なんと説明したらいいか」

ウラルは休み休み、乞われるままにいきさつを語った。

ウラルの情報にダイオとイズンが満足したころ、セラが割って入って二人を部屋の外へ追い出し、ウラルに横になっているよう指示

して出て行つた。聞き耳を立てていたマルクがまたも尻を蹴飛ばされる音、笑い声、そして平手打ち連打の音。

「マームさん、生きてるよね。元気かな……」

蘇ってきた思い出に悲しい笑みを浮かべ、ウラルはドアの向こう、マームとサイフォスの部屋だった所を見つめた。セラとマームは似ている。マームも スヴェル の男らの台所を一手に引き受ける肝っ玉母さんだった。

ふと、誰かに呼ばれたような気がして、ウラルはそちらを振り返った。

「ジンね？」

あの墓からの声に耳を澄ます。

「次は南西？ マームさんに会いに行けばいいの？」

南からの呼び声は、今はまだ強くない。

「私の体が癒えてから、ね」

ふうっと呼び声が消えた。

「そうだ、ムーンストーンの棺の人のことを聞かないと。メールさ
んだったっけ。無事に帰ってくるかしら、フギン……」

第三章 1 「暗雲きたる」 下

フギンは帰ってきた。予告していた三日間から遅れ、またもシガルがロク鳥で探しに行ったもののその他は何の問題もなく、ウラルと別れてから五日後に無事戻ってきた。

「小僧、何ヶ月待たせるのだ！ ウラルにこんな怪我までさせて何をしておった！」

ダイオの雷。もうフギンは平謝りだ。相手がダイオだけに誰も止められず一同ただ目を白黒させている中、ダイオはフギンを怒鳴り散らし、最後に鉄拳を一発お見舞いしてどこかへ歩き去っていった。「ウラルの時とはえらい違いだ。やっぱり騎士様って女の子に優しいもんなんだなあ」

「でもやっぱりダイオ卿、相当ふたりのこと心配してたし」
フギンはしよんぼりうなだれている。

「遅れに遅れた上に、最後に会ったときが瀕死のダイオを見捨てて逃げちまつてるんだもんな。そりゃ怒るさ……」

「お前が反省？ うっわ、にあわねえ」

「似合わなかるうがなんだろうが、反省しなくちゃならん時ってるだろ」

「それでもやっぱり似合わねえ」

「黙ってるお前」

「うわー、重症だわこりゃあ」

なぜか茶々をいれたマルクまでしよんぼりしてしまった。まあまあ、とウラルが割って入る。

「とりあえず無事に帰ってきてくれてよかったわ。遅かったからまた何かあったのかと思っちゃった」

「あー、そうなんだ。帰ってくる途中でちよいと面倒に巻きこまれ

てさ。ウラルも俺と別れた時よりはちょっと元気になったみたいだな。よかったよかった」

「セラにちゃんと介抱してもらってたからだいぶ良くなったよ。面倒倒って？」

うん、とフギンは神妙な顔でその場の面々を見回した。

「なあみんな、南の方の税金がやたらめったら高くなったって話、知ってるか？」

初耳だ、と言いたげな大多数の中、マルクがうなずいた。

「アラス岬のあたりだろ？ ムールの巣があるあたり一帯が閉鎖されて、税金がやたらめったら跳ね上がって。やつら、ムールを減らしてリーグ人の力を削ぎたいんだ」

「さすが巨鳥乗り。でさ、この閉鎖地域が最近どんどん広がってきてるらしい」

「海岸線だけじゃなくてか？ なんのために？」

「知らねえよ。とりあえず俺はここに帰ってくる前に南から逃げてくる一家に会って、案内兼ボディガードみたいなことやりながら遠回りで帰ってきたんだ。ほら、アスコウラ の近くに鉄山があったらろ？ その鉱夫の一家だった。その鉄もベンベル人に押さえられてたらしい」

「なるほど、鉄か」

「いや、それだけじゃない。ムールに鉄、それならリーグ人の力を削ぐってことで話はわかる。でもその鉱夫によるとそれだけじゃない、農地が押さえられた。作りかけの作物をめちゃくちゃにされて、かわりにこれを作れとベンベルの作物の種を押しつけられてるそう。治安もどんどん悪くなってる。おまけに南部と中部の間を区切るうかつて計画まであるらしい。コーリラとリーグの間にあった国境線みたいなのを」

場が静まり返った。

「アスコウラ はどうしたんだ？ ゴウランラ の戦いでほとんど人はいなくなっただと思うけど、まだ何人かいることはいらんじ

やないか？ エルディタラ みたいにさ」

「皆にはベンベル人どもが居座ってるよ。あのあたりは国を取ったベンベル人どもが真つ先に攻め立てたところだからな。ゴウランラの戦いで主力が出払ってる時だったし、たいした抵抗もできず皆を手放さざるをえなかつたんだ。生き残った連中は ジュルコンラ に逃げこんだ」

「ということは、 ジュルコンラ は無事なのか？」

「ありや、フギンに話してなかつたか？ エルディタラ、 ジュルコンラ、 ナヴァイオラの三組織は無事だぞ。そりやあゴウランラの戦いで壊滅的な打撃は受けたけどな……。でも少しずつ修復してるぜ。規模だって元リーグ軍人も迎え入れてどんどん大きくなってる」

フギンの顔がぱつと明るくなった。

「じゃあ南の様子を知るためには ジュルコンラ と連絡をとるのが一番だな。そっかそっか、みんな生きてるかあ！」

「生きてるやつも、生きてないやつもいる」

暗くなった仲間の声にフギンは顔を歪め口を閉ざした。

ウラルは少し離れたところの椅子に座り、黙ってフギンを見つめていた。

フギンは ジュルコンラ へ行く。それにウラルもついていくのだ。ジュルコンラ にはマームと、ブルームーンストーン の棺の主メイルがいて……。

「ウラル、気分が悪いのか？ 横になつてなくていいか？」

気がつくともマルクがウラルの目の前でひらひらと手を振っていた。「怖い話だと思って。そういえばフギン、メイルって人を知ってる？」

フギンが眉をひそめた。

「なんでお前がメイルを知ってるんだ？ マライの妹だよ。すつこい美人の」

スヴェル の頼れる女将軍。ベンベル人の監獄で拷問を受け、

首をつられて死んでいった仲間。妹がいたとは。

「まさか、また夢に見たのか？」

「うん。たぶんマームさんと一緒に ジュルコンラ にいる」

「そりゃあマライとメイルの父親は ジュルコンラ の頭目だったから、生きてりや当然 ジュルコンラ にいるだろうけど」

フギンはゆっくり歩み寄ってきて、ウラルの正面にしゃがみこんだ。

「ウラル、もうさすがの俺もお前の予言は信じるよ。百発百中だもんな。でもさ」

悲しげな顔でウラルの部屋のドアを指す。

「休めよ、そうすりゃちよっとは気分が良くなるさ。顔色悪いぞ」
大丈夫と答えようとしたが、フギンの目があまりに不安げなのでウラルはおとなしくうなずき、「ウラルはたまに予言をするんだ」と仲間に説明するフギンの声を背中に自分の部屋のドアを開けた。

空けた瞬間、ウラルは硬直した ドアを開けた真正面にある窓から、向かい合う二頭の巨獣が見えたから。

「ウラル、次はどうしたっていうんだ？」

ウラルの背後から窓を覗き込んだフギンも硬直する。

「なんてこった、アラーハが二頭に増えた！」

フギンは冗談めかしたが、一頭はアラーハ、そしてもう一頭はイツペルスではあるものの、幼い子供でも見分けられるほどにはアラーハと異なる姿だった。アラーハよりもやや小柄で、明るい鹿毛のアラーハとは違い全身が黒く、アラーハよりやや骨細だ。とはいえそれはアラーハが骨太すぎるだけで、黒いイツペルスは決して華奢ではない。硬く硬く引き締まった体つき。野生の獣の体。

視線に気づいたようだ。黒いイツペルスがウラルを振り仰いだ。

「出て行け、人間ども」

よく透る若い男の声は、黒いイツペルスの口から。

「ここは俺、ヒュグル森守護者ノアラーハが地神より賜った領地。アラーハ大叔父がなぜお前らをここに住まわせたのか、俺には皆目見

当がつかん。出て行け、人間ども。ここはイツペルスの領地だ」

ノアーハは自分を見下ろす人間をねめつけ、ついでアラーハをねめつけて、悠然と森の中へ消えていった。

「なんだなんだ、今しゃべったの誰だ！」

大騒ぎを始めた仲間の中、ウラルとフギン、それに人垣の後ろに立っていたイズンは困惑の視線を交わしあつた。人ごみをかきわけイズンが二人に近づいてくる。

「いい機会ですから言わせてください。実は、ここを引き払う計画はちよつと前から出ていたんです。彼の言い分がなくても」

思わず再び顔を見合わせたウラルとフギン。イズンは一拍をおいて続けた。

「この森の木は頑丈で、太くて、まっすぐの良木ばかり。ベンベル人が神殿を建てるのに目をつけましてね。かなりの数のベンベル人が出入りするようになったんです。幸いにして僕たちはまだ見つかっていませんが、こんなところに隠れているのがばれたら。ここは砦ではありません」

灰色の布の隙間、唇が悲しげな笑みを作る。

「あれだけダイオ將軍がお怒りだったのも、それが一枚噛んでいるんです。ここは危険だ、もう少し早く移動したかった。ウラルさんが回復したらこの家は離れることになるでしょう。その心積もりでいてください」

再びしよげるフギンの背をマルクがべしりと叩いた。

「おいフギン、お前は答え知ってんだろ？ ウラルとイズンもそんな慌てもせずに当然みたいな顔してさ。なんなんだよ今のしゃべるイツペルス……」

心底不安げな顔をしている柄の悪い男らにウラルは困り顔を向け、「信じられないなら無理に信じなくていいんだけど」と森の守護者について話し始めた。

第三章 2「見つけた」 上

ウラルの体もかなり回復し、隠れ家では総出で エルディタラへ移るための準備を整えていた。おのおの荷物をまとめ、処分あるいは売りに出し、掃除をする。ウラルはシガルと一緒にロク鳥で一足先に、他はそれぞれ分散して エルディタラ へ向かう手はずになっっていた。

出発を間近に控えたある日のことだ、ナウトの行方がわからなくなっただのは。

「なんでナウトを町に出したんだ！ あいつは顔が割れてる、行かせるなって言ってたろ！」

「ナウトはこの町で生まれ育ってる。友達もたくさんいるし行きたくないって昨日の晩ずっとダダこねてたんだ。やっぱりこいつ子供だなと思ってたら、朝の買出しのとき、いきなり俺らの前に仁王立ちになってさ。自分も連れていってくれて。せめてお世話になった人に別れくらい言わせてくれって……。俺らびっくりしちまってよ。連れて行かないわけにいかないだろ、そんな風に言われちまったら」

そして買出し組はナウトを町へ連れていき、最初はナウトと一緒にお礼参りをしていたのだが、路地裏でナウトが友達、つまりは昔のスリやかっぱらい仲間を集めて真摯に別れを惜しむ様子にいたたまれなくなり、待ち合わせをして別れたらしい。

ナウトは待ち合わせ場所に来なかった。暗くなってきたも戻らないので適当な子どもを捕まえて尋ねてみるも、「じゃあ待ち合わせがあるからって帰っちゃったよ」という答えしか返ってこなかったという。

「友達と別れてから、待ち合わせ場所までに拉致されたってことだな。ダダこねて友達の家に住座ってなきゃ」

「それはない。俺らが遠慮して席はずすくらいの気迫だったんだぞ」

「そもそもお前らがナウトと別れたから悪いんじゃないか」

「その場にお前がいてもそうしたさ。十二歳にしてあの気迫、只者じゃねえぞあのボウズ。早く助けてやるうぜ。拉致されたとなれば相手は限られてくる。だろ？」

フギンと買出し組の男、ふたりの話を聞いていたダイオが將軍の面持ちでうなずいた。

「六人、エヴァンスの屋敷に張り込み。屋敷内の人数、警備把握、そして可能ならばナウトの安否確認と場所を特定せよ。残りはここで待機。一昼夜後に見張りの二人と待機の二人を交代する。戻った二人は状況を報告せよ。張り込み時に何かあればすぐさま退避」

よく揃った返事。すぐさま張り込みの六人が選ばれ、夜の街へ繰り出していった。ヒュガルト街を取り囲む城壁、その関門が夜は閉ざされているが問題ない。彼らは突破する方法をよく心得ている。

ダイオはウラルとフギンに向き直った。

「状況から考えてエヴァンス周辺の人間による拉致と考えるのが妥当だろう。とすれば重要なのは相手の目的だ。どう思う」

フギンはちらりとウラルを見、口を開いた。

「今までは何の動きもなかったんですよね？ あのベンベル人どもは」

「なかったな。念のため顔の割れている者は買い出しにも行かせないようにしていたが」

「俺とウラルがエヴァンスの野郎と別れて二十日経ちます。ゴーラんと脚をくじいた馬とでも十分ここまで来れる日数が経ちました。屋敷に戻って、俺やウラルとつながりのある人間を拉致するよう指示したんじゃないでしょうか」

「妥当な線だな、とダイオがうなずく。

「とすれば狙いはウラルとフギンの二人の居場所を知ること、ナウトは無事であるだろう。よし、残った者は交代で眠れ。奇襲に備えよ」

再び揃った返事。隠れ家の外で話を聞いていたアラールも目を光

らせている。

ふつとダイオが目元を和ませた。

「これであるボウズ、友達の家にいるなどということになってみる。百叩きにしてくれるわ」

*

隠れ家の男らは武器を運び、窓からの侵入に備えて木戸がぴつたり閉めきられた。ウラルは普段通り眠っていていいと言われたが、そんな状況で堂々と熟睡できるような精神をウラルは持ち合わせていない。

そわそわしながら迎えた翌日。夕方、ソファーでうつらうつらしていたウラルは外からの怒号に飛び起きた。

「ダイオ將軍、報告いたします！ ヒュガルト町から戻る獣道でエヴァンスの門番を発見、その場で捕らえて連れてきました」

夜、張り込みに出て行き、報告に帰ってきた二人だった。

「捕虜はどこだ」

「玄関前で三人に見張らせています」

「すぐに行こう」

ダイオが階段に向かう。とたん、階下からフギンの怒号が聞こえてきた。

「お前らなんで連れてきた！ ゴーランがこいつのにおい追ってくるぞ！」

「なるほど、道理でやすやすと捕まったわけだ」

ダイオが苦笑を漏らした。

「ついでに」

階段を下りていく。

「フギンがこやつの前に出てしまったては、二人はまだ帰っていないとしらを切ることもできなくなつたな。I u h c e a , n a s

i e a y o h e a e w a g e c h u m e , T e a r u

se・Siake yo heae yoinribero・

(久しぶりだな、ティアルース。以前は世話になった)「

流暢なベンベル語だ。後ろ手に縛られた灰色の目の男がダイオを見、ついでウラルを見て眩しそうに目を細めた。

「(こんなところに隠れていたのか)「

「(二、三点確認したいが、いいか)「

ティアルースの肩が緊張する。

「(見返りは)「

「(お前の当面の命だな)「

「(礼拝の自由を与えてもらえないだろうか。祈る間だけでもロ―プをはずしてもらいたい。どこかの部屋に閉じこめても構わない)「

「(いいだろう。きれいな水も届けよう。ちなみに東は向こうだ)「
ダイオが東を指差すと、ティアルースはほっとした顔になった。

「(ナウトは無事か)「

「(こここの場所を言わないものだから多少殴った。それから、この場所を口で説明するのは難しいから案内すると俺たちを森まで連れてきて、上手く逃げだした。逃げた後どうしたかは知らない)「

「(なるほど。それでお前はなぜこの隠れ家への獣道にいた?)「

「(手分けして子供を探そうということになって、俺たちは分かれた。いくら探しても見つからんから、ひとまず帰ろうと町に向かっていたら、いきなりその二人が飛び出してきた)「

「(なるほどな。ナウトを拉致しろと指示を出したのはエヴァンスか?)「

「(いや、拉致自体はわれわれ部下が独断でやったことだ)「

ベンベル語を聞き取れる面々が怪訝そうな顔をする。

「(スー・エヴァンスが剣を汚さず帰ってこられた。だから微力ながらお力になるうと思っただのだ)「

やはり、エヴァンスはヒュガルト町に帰ってきている。

「(『二、三点確認したい』と言っていたな? これで答えた質問は三つだ)「

ダイオはうなずいた。

「その部屋に連れていけ。手のロープははずして構わない。ドアには鎖をかけて外から鍵をかけよ。ドアの前と窓の前、一人ずつ見張りに立て」

ティアルースが連れて行くのを見送り、ダイオはため息をついた。

「これでエヴァンスがここまで来るのは時間の問題だな」

「ナウトは？」

「逃げ出したのに今まで帰ってこないのは妙だな。大回りで帰ってくるか、あるいは森に迷ったか。弱ったな、森で迷っていても人数を裂くわけにいかぬ」

アラールハが「探してくる」とウラルに目配せし、森の中へ消えていった。

第三章 2「見つけた」 中

日没の読経が終わるのを見計らい、ウラルはティアルースの部屋へ向かった。ティアルースの夕食、凶器にならない木製の椀に入ったシチューとパンを見張りにつけていたシガルとマルクに渡す。

「部屋の奥の壁に背中が当たるようにして座れ。変な動きしたら後ろのこいつがブスリとやっちまうからな」

マルクが指示し、その背後でシガルが槍を構える。ドアの鍵を開ける窓に板を打ち付けたせいで真っ暗な部屋の中、一番奥で、ティアルースが眩しげに目を細めた。

夕食の盆を置いてすぐにドアの鍵をかけなおす。シガルが槍の穂先を鞘にしまったところで、ウラルはつめていた息を吐き出した。普段から荒っぽいマルクはともかく、普段は穏やかで気のいいシガルの殺気には思わずドキリとしてしまう。彼も伝令とはいえ、フェイス大將軍に仕え第一線で活躍してきた騎士。しかも数年にわたって歳の離れた弟のように育ててきたナウトを攫われ、殺気立っているのだ。

「明かりは無しな。火いつけられたら困る」

閉ざされたドアの向こうで足音が聞こえた。

「シチュー」

扉の奥からの低い声、食器が触れ合い立てる音。

「作った、ウラル？」

下手なりীগ語にウラルは目をしばたいた。

「おいしい。これ。リーグの味」

「ティアルース」

「元気？ ウラル」

子供のような片言、異国の男の低い声。ウラルは頭の側面、傷の

上を手でさすった。痛みはなく、もう包帯もとっているし、一度刈った髪もだいぶ伸びてきた。

「うん、元気よ」

「うれしい、かなしい、よくわからない。話、すこし、いい？」

席ははずさねえぞ、と言いたげにマルクがにやにやウルルを見る。シガルは話したければどうぞとウルルに微笑を向け、また険しい顔に戻ってドアをにらみつけた。

「ウルル、いい女。でも、スー・エヴァンス、ケガした。一年すこし前」

「ベンベル語で言ってください。聞き取るだけは大体できるから。でもこちらでもベンベル後はあまり話せないから、リーグ語で言っている？」

しばらく間があった。ウルルの言葉を頭の中で翻訳しているのだろう。

「（ありがたい。ウルル、あなたに会ったらずっと聞こうと思っていたんだ。主人をなぜ襲った？ あなたのような、異教徒とはいえ優しい女性が、なぜ？）」

ウルルも翻訳のためにしばらく間を置く。ベンベル語をまともに聞こうするのは久しぶりだ。エヴァンスも最近はずっとリーグ語を使っている。

「大切な人がエヴァンスに殺されたの。戦いの中で」

「（主人と、断言できるのか？）」

「目の前で見ていた人がいるの。それがフギンなんだけど」

「（あの片腕の男か。そういえばダイオも主君をスー・エヴァンスに殺されたと言っていた）」

「ここにいる人はみんな、私の言った大切な人の仲間か、ダイオのご主人の部下なの」

「（なるほど。主人は本当に敵が多い）」

ドアの向こうからかすかに苦笑の気配が伝わってくる。

「（あの襲撃の時、『門番を殺すな』と言ってくれたのは、あなた

だね？」

「どうしてそれを？」

「（リーグ人はベンベル人を憎んでいる。殺すチャンスがあれば逃すはずがない。なのに自分は当て身を食らわされただけだ。誰かが殺すなと言ったんだろう……そう言ってくれる人は、あなたを除いてほかにいない）」

頬がすこし火照るのを感じた。ベンベル語のわからないマルクが何を話してるんだと言いたげにニヤニヤしながらウラルを見ている。「（ダイオモスー・エヴァンスに引けを取らないほど強く立派な男だ。異教徒なのが本当に惜しい。ひとりひとりと付き合えば何もかも上手くいくような気がするのに、なぜこんなことになるんだろうな）」

かすかなため息。ウラルは黙っているほかがない。

「（それとウラル、もうひとつ聞いてもいいか。この森に入ったベンベル人、自分の知り合いが何人も、獣のような大男に襲われて大怪我をしているんだが、これはあなたの仲間、アラー八という男のしわざか？ この隠れ家にはいないようだが）」

ウラルは首をひねった。

「（あなたが監獄で捕まった時、西門で暴れていた男だったと言っている者が何人かいるんだ。あなたを主人の屋敷から連れ出したのもそうだろう？ ミュシエさんが庭でそんな男を見かけている）」

「ええ、私を屋敷から連れ出したのはアラー八。でも森で？ どれくらい前のこと？」

「（半年前から時々だな）」

「じゃあ別人だと思う。アラー八は私と一緒にこの森を離れていたから」

アラー八と同じ背格好なら新しい森の守護者ノアー八だろうか。おそらく彼も人間に変身したら毛皮姿の大男になるはずだ。ウラルらにはまだ友好的、警告だけで去っていったが、森の木を切りに許しもなく入ってきたベンベル人を追い出そうとして戦っても不思議

はない。

「帰ったらもう一度聞いてみて。たぶんその人はアラールより若かったはずだから」

「（わかった。シチュー、うまかった。食器を持っていくだろうか？自分はさつきみたいに残りに下がっている。そうお仲間に伝えてくれないか）」

ウラルはうなずき、シガルとマルクに伝えた。ティアルースが後ろに下がる足音。再び槍を構えるシガル。

マルクが鍵を開け、ノブを回す。

瞬間、ドアが外側に吹き飛んだ。

「うおわっ！」

ドア越しながらもティアルースのタツクルをもちに受け、マルクが吹き飛ぶ。こぶしを固めドアの外へ躍り出たティアルースとウラルの目が合った。すまない、と言いたげに灰色の瞳が揺れる。

次の瞬間、ティアルースのほうがドアの奥へ吹き飛んだ。シガルが鞘つきの槍で鳩尾を突いたのだ。さほど力を入れたようにも見えないのに、大柄なティアルースの体がものの見事に吹き飛んだ。

「鞘を抜いておくんでしたね、油断しました。大丈夫ですか、マルク」

「あんやろ、なめた真似しやがって」

「鍵をかけて。早く」

物騒なことを言いながらドアを全身で押さえるシガル、マルクがあわてて鍵をかける。

「（……いい腕だ）」

ドアの向こうから苦笑交じりの声が聞こえた。

「明日の祈りは無しですね。ダイオ将軍に報告しなくては」

冷え冷えとしたシガルの声。ティアルースは無言だが、おそらく痛いものをこらえるような顔をしている。ベンベル人にとっての毎日の祈りがどれだけのものか。どんな状況であっても必ず一日五回祈り、祭壇を血で穢したというだけで身分を奪われ 想像がつく

というものだ。

「食器は僕らが後で持っていきます。ウラルさんは戻っててください」

シガルの声にうなずき、そろりときびすを返したとたん。

かぁんかぁんあぁん。

響き渡った警鐘の音に外を覗いてみれば、闇の中に金の髪が見えた。

ゴーランにまたがった男は逃げも隠れもせず、まっすぐに隠れ家へ向かってくる。その後ろには馬が一頭、その鞍上にシャルトルと手足を縛られているらしいナウトがいた。どうやら逃げ出した後、また捕まってしまったようだ。さらに後ろには徒歩の二人の門番。

「また都合よく現れましたね」

シガルが猛禽さながらの鋭い笑みを浮かべる。シガルってこんな人だっけ？ とウラルは思わず目をこすりたくなった。

「女の子に対しては紳士で、捕虜に対してはサド……こいつ、やっぱり二重人格だ」

エルディタラ 団長と同じだと言いたいらしい。そういえばシガルと団長が初めて会ったとき、フギン、マルクと三人でこの話をして大笑いした気がする。シガルも思い出したらしく、鋭かった目元がいきなり情けなくなった。

「この程度でサドですか？」

「責め足りないとか言い出さねえだろうな？」

「責めたうちにも入らないと思うんですがねえ」

「うわ、こいつ怖えよ！ すっげえ怖え！」

「冗談ですよ」

「絶対違う。今の恐怖はホンモノだ」

そうこうするうち隠れ家から武器を手に男らが飛び出してきた。ナウトを呼ぶ声、ののしり声。フギンの姿は見えない。「ここに帰ってきていない」と一時的にでも思わせるためどこかに隠れているのだろう。ウラルもうかつに出ていかないほうがよさそうだ。

人垣が割れ、ダイオが現れると、さすがにエヴァンスの顔が険しくなった。

「こんなところに隠れていたか」

朗々と響く声。さすがというべきか、ティアルースと同じ一言目だ。

「よくぞ三人だけで乗り込んできたな。袋叩きにされるとは思わなかったのか」

「わたしが剣をとったときの犠牲を考えれば、お前にそんなことはできまいよ」

たしかに分はこちらにあるとはいえ、エヴァンスが抵抗すれば死人が出るのは確実だ。

二人のもと高位騎士は肉食獣のように互いを見つめ合う。にらみ合うというほど激しくなく、仰々しく構えを取るわけでもなく。自然に、けれど嵐の前の静けさのような不穏さをたたえて。

「こちらは部下さえ無事に返してもらえれば、この場を退こう。子どもと引き換えだ」

ダイオは「なにが『さえ』だ」と言いたげに苦笑した。

「帰りの道案内は必要か？」

ダイオの皮肉にエヴァンスが唇の端を持ちあげ応じる。

「シガル！ マルク！ ティアルースを連れてきてくれ。ザンク、トラン、援護に回れ」

ダイオに呼ばれた屈強な二人がウラルらの方へ向かってくる。エヴァンスに見られてはいけないとウラルはドアから死角になるところに隠れた。

ティアルースが縄で縛られ、四人がかりで連れ出されていく。部屋から出るとき、ティアルースはウラルの姿を求めてかあたりを見回したが、ウラルと目が合う前に四人に小突かれ外へ連れていかれた。

ナウトが馬からおろされ、足のロープを切ってもらっている。

二人の人質が向かい合う形で立たされた。三、二、一、の掛け声

で互いの人質の背を押し、仲間を受け取って後方へ下がる。

「また会おう、ダイオ」

エヴァンスは薄く笑ってきびすを返した。

ダイオはナウトに駆け寄って手首に巻かれたロープを切り、その頭をくしゃりとなでた。

第三章 2「見つけた」 下

ナウトを探しに行ったにもかかわらず、ナウトが戻ってきても帰ってこなかったアラーはが姿を見せたのは、翌日の朝だった。

エヴァンスの一味はすべて隠れ家へ来てそのまま帰ったにもかかわらず、アラーハはあきらかに戦闘後の風体をしていた。いたるところに小さな切り傷を負い、ツノが血のりで汚れている。

「アラーハ、誰と戦ったの？」

人語を失ったアラーハは首の動きでしか答えを返せない。ウラルはアラーハの傷に薬を塗りながら質問を続けた。

「エヴァンスの一味？」
ちがう。

「新しい森の守護者？」

アラーハは少し間をおき、ゆっくりと首を横に振る。

「リーグ人？」

ちがう。

「ベンベル人ね？」

そうだ。

「エヴァンス以外のベンベル人となると、ティアルースが言っていた人たちかな。森の木を切りに来ていた人？」

そうだ。

「どうして？ ベンベル人は森の中に入れたくないから？」

アラーハは黙ってウラルを見つめているだけだ。こうして「話すのは本当にまどろっこしい。が、今回はウラルが答えを言えていないというより、アラーハが迷っているようだ。断言できないらしい。もしかして巻き込まれたの？ たとえば新しい森の守護者が戦って加勢したとか？」

アラールは強くうなずいた。ウルルが「たとえば」で挙げたことがずばり真実だったようだ。

ベンベル人の神殿を作るために森の木が切り倒される。アラールにとつても黙っていられなかったのだらう。だが、エヴァンスですら逃げ惑うしかなかったアラールを相手に、森の木を切り倒しに来たベンベル人らは軽症とはいえ傷をおわせた。しかもその場には現守護者ノアーハもいたはずなのに。エヴァンスほど腕の立つ者が相手にいたか、あるいはそれだけの大人数だったか。普通に考えれば後者だ。

「聖域 は守れそう?」

ばかなことを言うな、と言いたげにアラールの目が怒気を帯びる。「アラールはこの森を離れないほうがいいんじゃない? 新しい守護者は経験が浅いし、万が一のことがあったら」

ばかなことを言うなと言っているだらう、と言いたげにアラールが鼻面でウルルを小突いた。まっすぐウルルを見つめる。「俺はお前と一緒に行く」

「そう言うだらうと思ってた」

ウルルはかすかに息をつく。そうでなければ森を放り出してまで最後までジンについていったはずがない。ウルルが森に残ればアラールも残るだらうが、そう言えばフギンやダイオになんと言われるやら。ウルルとしても二人にこれ以上心配をかけたくない。そしてやっと再会できたみんなと別れたくないのだ。

「アラール、出発は明日の朝、ナタ草が黄色になる時だから。その時までには戻ってきてね」

アラールはうなずき、森の中へ消えていった。

ウルルは胸元のペンダントをにぎった。この隠れ家に戻ってきた直後、感じたものが戻ってくる感覚をおぼえながら。

南へ。

ごめんなさいジン、もう少し待って。私はみんなと離れたくない。

「エヴァンスの襲撃が予想される。もし出くわしたら無理に戦おうとするな。逃げて構わん、自分と仲間の命を優先せよ。はぐれたらオーランド町へ向かえ。そこでシガルとマルクが待機している」

ウルルは馬車の中でダイオの言葉を反芻していた。

エルディタラの一群は隊商とその護衛のふりをし、堂々と街道を進んでいる。髪の毛の長い者やヒゲのあるものはぱつぱりと切り、髪の毛の短い者はかつらやフードをかぶって多少人相を変えた。

なかでも見ものなのは御者台に座った妙齢の美女だ。長い髪で顔の左半分を隠し、その隙間から痛々しいヤケドの痕が垣間見える。女にしてはいささか背が高すぎるが、線が細いので違和感はない。声も低いが、酒で漬れたハスキーボイスといってもぜんぜん通用する範囲だ。腰のベルトにはフルートがさしてある。

「……イズン？」

朝、突然この格好で隠れ家の前に現れたイズンを前に、一同思わずぼかんとした。女神のようにほほえむイズンの後ろから化粧道具を持ったセラがにやにやしながら現れる。「ねえ、源氏名つけてあげてよ」。早朝の森が大爆笑に包まれた。アラーハまで蹄で地面を激しく叩き、笑い死にそうになっていた。

「ウルル姉ちゃん、なに笑ってるの？」

「え？ ああ、イズンの女装が本当に似合うなと思ってね」

「イズンじゃなくて、イエラさん。でしょ？」

そうね、とウルルはもう一度笑った。その場ですぐさま決まってしまう「源氏名」だ。カーテンで仕切られているだけの御者台に話は筒抜けのはずだが、イズンは黙っている。今になって恥ずかしくなってきたのかもしれない。

馬車には多少背格好を変えてもすぐばれてしまう二人、片腕のフギンと子どものナウトが乗っていた。本当は顔に大ヤケドをおっているイズンも馬車に乗る予定だったのだが、まさかの女装で晴れて

御者台にいるというわけだ。この変貌ぶりではヤケドがあるうが同一人物には見えない。

ウラルは背格好くらいどうにでも変えられるし、もと盗賊の野次馬たちもウラルの男装やら仮装やらを見たがっついていたが、本当に襲われたとき前線には真っ先に狙われるからと馬車に乗せられた。背格好の変えようがなく馬車にも乗れないアラールは街道に接する森の中を静かに進んでいる。

「服を貸してほしいって言われた時にはどうしようかと思ったけど、よく服が見つかったよな。あきらかにサイズ違うだろ」
フギンが親指で御者台を指す。

「うん。でもイズンって本当に線が細いのね。肩幅が私とそんなに変わらなかったから、裾と袖を伸ばすだけでよかったの。でも、なんであんなことになったの？」

「罰ゲームだよ。珍しいことにカードゲームで負けたんだ。負かしたのはこいつ」

ナウトの頭をぼんぼん叩く。

「子ども扱いするなよ」

ナウトが不機嫌に言い放つが、フギンは無視して続けた。

「他のやつは丸刈りとかだったんだけどな、イズンは馬車に乗る予定だったろ？　なのに格好変えても仕方ないからさ、『とりあえず面白いことやれ』ってことになったんだ。まさかここまでやるとは思わなかったなあ」

「めつたに負けないから程度がわからなかった？」

「かもな。エルディタラに着くまであれ続けるつもりかな」

「そんなわけないでしょう。明日になったら戻しますよ」

ようやく御者台から本人の返事があった。フギンはげらげら笑っている。

「今日一日はやるつもりなんだ？」

返事が返ってこなくなった。三人で馬車の中、笑い出す。

「なあイエラちゃん、歌ってくれよ。やっぱり美女といえば歌だろ

歌

「なんですかその基準は。御者やりながらフルートは吹けませんよ」
「だから歌だつてば。ごまかすなよ、これも罰ゲームの一環だ。な、
ナウト。今日一日『イズンが面白いことする』ってルールだったよ
なあ？」

さすがに悪乗りが過ぎる。が、止めようとしてもウラルの方まで
笑いが止まらない。ナウトも同じでげらげら笑いながらうんうんう
なずいた。

イズンがあきらめた様子でハミングし始める。

「だから歌えつてば！ なんでハミングなんだよ！」

「いくら僕が女声でも歌えばさすがにはれますよ」

「酒焼けか潮焼けした声なんだよ大丈夫だ」

「僕は酒飲みでも海岸出身者でもないんですがねえ」

しぶるイズンにフギンどころか周りの男らからも野次があがる。

いつも参謀のめつたに見れない面白おかしい姿だ、荒くれ
男らには野次をあげるなというほうが無理らしい。

イズンは苦笑しながらコホンと空咳をした。

「ではお応えして。何がどうなつても知りませんよ？」

わあつと歓声があがり、驚いた馬車馬が一瞬速足になった。それ
をなだめながらイズンが口を開く。

「時は神話時代の終わり、リーグ国とコーリラ国がふたつの島国だ
つた時代です。二つの国は戦のさなか、互いが互いの利を我が物に
と海戦を繰り広げ、間の海は戦士の血と火責めの炎で昼夜を問わず
赤く染まっていたといいます……」

「『アレントの叙事詩』か」

馬車の外からダイオの声。ウラルも旅芸人の歌語りで何度か聞いた
ことのある有名な伝説だ。

このたび重なる戦で消えゆく命を風神が嘆き、海のように行き来
ができない巨大な壁を当時島国だった二つの国家の間に作ってほし
いと地神・水神に頼む。二神はこれを聞き入れて海を埋め、かわり

に万年雪を抱くほどの高山ヴァーノン山脈を間に築いた。

が、海が埋め立てられた際、海戦中だった兵士が大勢生き埋めになってしまった。これによって多くの部下を失った騎士アレントは嘆きのあまり気が狂ったようになり、王に楯突いたり他の騎士を切り殺したりと大暴れする。拳句の果てにろくな装備もなく神々を呪いながらヴァーノン山脈を登り始めた。そんなアレントの前に不思議な女が現れる。

女は「あなたの嘆きを風神は聞き届けました。神々への畏敬の念を取り戻し、もう戦をせぬと誓い、私を妻とするならばあなたの部下を蘇らせましょう」とアレントに申し出る。部下が戻ってくるならアレントが受けると、みるみるヴァーノン山脈の東側が崩れだし、できた平野にアレントの部下らをはじめとする兵士たちが立っていた。大喜びでアレントが女の手を取ろうとすると、すでに女の姿は消えていた。こうしてリーグ・コーリラ両国は今の姿になったという伝説だ。

ちなみにこの後、アレントが両国をつなぐことになったスカール町の領主になるまでの話や、町娘にちよっかいをだしたアレントを消えたはずの女が不貞だとなじりに来て一触即発になる話やら、王との軋轢に苦しむ話やら、刺客を放たれコーリラ国に拉致される話やら、続編が山ほどある一大叙事詩になっている。

最初の一小節を語ったイズンに拍手の雨が降り注いだ。

「お前なんで男に生まれてきたんだよ！ イエラでいいだるもうずつとこの姿でいる！」

イズンは赤く染まった頬で黙っている。ノリノリだったわりにはかなり恥ずかしかったようだ。

「ちなみにダイオ卿はアレント卿直系の子孫だそうですよ」

え、とその場の全員がダイオをまじまじ見つめた。ダイオは笑いながら肯定する。

「スカール町の領主は代々アレントの裔、今の領主は我輩の兄だ。もつともベンベル人が攻めてきてから一度も会っていないから安否

もわからんのだが」

誰もが知っている英雄の末裔がこんな身近にいて、しかも自分たちの指揮をとっているとは。誰もが興奮してささやきあった。

その時だ。

アラーハの太いいななきが聞こえた。「警戒しろ」。

「やっぱり追ってきましたね。揺れますよ、しっかりつかまって。

フギン、僕は弓をとるので御者をお願いします」

「ちえ、せつかく変装したのにな」

「フギンが僕を男だ男だ言うのが聞こえたんでしようよ」

曲がり角の死角から剣を構えたベンベル人が飛び出してくる。隠れていたところをアラーハに追い出されたのだ。とたん、街道の脇の木がつきつき街道をふさぐ形で倒れてきた。

馬車が急停止する。あやうく前に放り出されかけたウラルをフギンが、ナウトをイズンが支えた。暴れる馬をフギンが抑える。

エヴァンスは応援を頼んでいたらしい。ベンベル人ばかりかなりの大人数だ。

「なんでこうしつこいかな、あいつは！」

フギンに手綱をたくしたイズンはつきつき矢を放っている。が、返ってくる矢も襲ってくる敵もない。「美女」を攻撃するのを相手がためらっているのか、女装した男に近づきたくないのかどちらだろう。

敵をなぎ倒し味方を助けながら、アラーハが馬車へ向かって駆けてくる。

「ウラルさん、例の場所ですよ。そこまで振り返らずに逃げてください」

イズンの声にうなづく。そうするしかなさそうだ。視線を感じて振り向けば、さっき「子ども扱いするな」とフギンに生意気な口調で言っていたはずのナウトが心細げな顔をしてウラルを見つめている。

「大丈夫、また会えるから」

ぎゅっと口元を引き結んだナウトに笑いかけ、ウラルは御者台からアラーハの背に飛び乗った。ついさっきまで荷物を鞍に乗せられていた三頭の駄馬、いや、駄馬に見せかけていたフギン、ナウト、イズンの馬が後方から追われ駆けてくる。それぞれの手綱を持ち主がつかみ、鞍上に飛び乗った。

「いくぞ！」

ダイオの号令で仲間すべてが駆け始める。襲われ、身動きが取れなくなったら全員で逃げる。そう示し合わせてあったのだ。

さつと森に入り、ばらばらの方向へ駆ける。腕に覚えのないものはまっしぐらに逃げ、多少腕の立つ者は相手を返り討ちにしてから再び駆け出す。エヴァンスとの正面衝突を避けながら西へ西へと。

「ウラル、きたぞ！」

フギンの声に振り向けば、木々の間に金の髪。まだ遠いが、相手は確実にウラルとフギンを目指している。

不意にウラルらとエヴァンスの間に一騎が割って入った。弓を構えたイズンだ。これにはさすがのエヴァンスもひるんだらしい。

「女を手にかけるつもりはない、どけ！」

よく言うよ、とフギンが苦笑した。ウラルをつけ狙ってるのはどこのどいつだ。

「はぐれるなよ、ウラル！」

「わかつてる！」

ウラルとフギンは疾駆する。

第三章 3 「サヨナラ」 上

ウラルとフギンはその日の夕方、オランダ町にたどり着いた。すぐさまロクを連れて泊まれそうな大きな宿を探したが、シガルとマルクは見つからない。もう少しわかりづらいところで息をひそめているのだろう。

どうやら仲間はまだこの町に着いていないようだったし、ウラルは昼間の追走劇で疲れきっている。今日のところは適当に宿をとり、朝になったらまた探そうということになった。アラールはいつものように町の外で待機している。

「また追われるハメになっちまったな」

宿で重い荷物をおろしながらフギンがぼやいた。普段は一階が酒場か小料理店、二階が客間になっている宿に泊まっていたのだが、今回は一階に客間がある宿をフギンはわざわざ探していた。部屋に入るときも出口をしっかりと確認していたところを見ると、どうやら襲撃を覚悟しているようだ。

「心配するなよ、念のためだ。ただ今回は味方の誰かがとっつかまっつてこの町で待ち合わせなの吐いちまうかもしれないからな。襲われた場所から距離もあんまりないし。ま、そんな簡単に捕まる連中じゃないし、大丈夫さ。あー、イズンがさらわれてないかだけ心配だな。美女と違ってさらってみたら男だった、なんてコント以外の何者でもないぞ」

言いながらフギンは夕食の包みを開けた。さっき物乞いの子どもに小遣いをやって買いに行ってもらったものだ。

「なんだ、妙に重いと思ったら。あいつちよっと前までいいこの坊ちゃんだったんだな、ビールの瓶までついてるよ。その分の小銭、ポケットに入れちまえばいいのにさ」

歯でビールの栓を抜く。しゅぽつと軽快な音がした。

「ウラルも飲むか？」

「うづん、私はいい」

「そっか、酒はあんまり好きじゃないんだっただな」

「フギンは強いからいいけど、私はすごくお酒に弱いだよ？ 酔っぱらって逃げられなくなったら」

「そんな心配するなよ、大丈夫だから。いざとなったら逃げられるようにちゃんと準備してあるだろ？」

穏やかに笑いながらビールをあと、「食べよ」と言いたげに袋の中からパンをとってウラルに渡す。自身は羊の骨付き肉にかじりついた。もう一度ビールをあと、「足りないな」と言いたげに瓶を振ってみせる。

「そうはいつでも、あいつらはやっぱり心配だな。ウラルお前、あの金髪男の居場所とかわからないのか？ あの隠れ里の長老みたいだよ」

ウラルの「妙な力」を嫌っているはずのフギンからの予想外のセリフにウラルは驚き目を見張った。フギンは名案だとばかり一人であなづいてる。

酒に強いはずのフギンだが、すきつ腹に一気にビールを流し込んで少し酔ったのかもしれない。ウラルは困って肩をすくめた。

「そっか、マームさんや会ってもいないメールのことだっかわかるんだ。金髪男やダイオの居場所くらいすぐわかるんじゃないか？ 試してみてくれよ」

「だめなの。前にも言ったでしょ？ きれいな石の棺がたくさん並んでいて、ジンのいる場所、あれから読み取れることしか私にはわからないの」

「じゃ、その墓とやらに自分から行ってみればいい。ちゃんとコントロールできれば問題なくなるさ」

フギンの優しい笑顔にウラルはきょとんとした。随分変わったものだ。アラーハを認められたことで、ウラルの予言も認められるようになったのだろうか。

「さ、やってみろよ」

ウラルはうなずき、目を閉じた。

真鍮色に輝く丘を思い浮かべる。水晶の棺。ツタのからみついた陶芸窯。揺れる青いナタ草。ウラルは心の中でため息をついた。ここはいつもの墓ではない。ただのイメージ、ウラルが心の中で思い浮かべている映像にすぎない。けれど。

南へ。

あの 墓 を思い浮かべたせいだろうか。聞こえないふりをしていた南からの呼び声がもろにウラルを打った。

「どうだ？ 何か見えたか？」

フギンの声にウラルは目を開き、無理に笑みを作って首を振ってみせた。

「そんな変なもの、こうやって笑ってやりすごしてりゃいいのに」
フギンは笑っている。が、ウラルが何かを隠したのは察したようだ。

「ウラル……」

ふっと真顔になって、フギンは片方しかない腕をウラルに伸ばした。空っぽになったビール瓶がごとんと倒れる。

「忘れちまえよ。な？」

突然の抱擁にウラルは驚き、何もできずフギンを見あげた。とろんとしたフギンの瞳が文字通りの目の前にある。

「ずっと、こうしてお前を抱きたかった。ずっとずっと我慢してたんだからな」

鼻と鼻がぶつかりそうな距離。アルコールを含んだ甘い吐息が耳にかかる。

フギンは男だ。当たり前前のことを今さら思い出し、ウラルは震えた。

「知らなかったとは言わせねえぞ」

フギンが耳元で甘くささやく。

「ウラル、おまえのこと、ずっと好きだった。だからここまで一緒に来たんだ。でも、もう限界だ。片思いじゃ、俺、もうお前につい

ていけない」

わかつていた たしかにわかつていた気がする。フギンのウラルへの執着は異常だった。あきらかに友人の域を超えていた。けれどウラルは黙ってやり過ごすだけだった。見えてはいた、フギンの気持ちもおそらく知っていた。けれど無意識に重い蓋を被せていた……。

「お前は頭目が好きだったんだよな。わかってるよ、頭目の次でいい。でも今、生きている人の中では俺が一番だって、そう言ってくれないか？」

「ちよつと、フギン」

「キスしていいか？」

名残惜しそうにウラルの体に回した腕に力をこめ、するりとほどこいて、ウラルの頬を手のひらで覆った。親指がそつとウラルの唇をなぞる。その手がウラルの側頭部の傷跡をなで、後頭部へ回った。熱い吐息が顔にかかる。

唇と唇が重なり合う寸前。

「……なんでだ？」

ウラルは自身の手のひらをじつと見つめた。フギンの頬を力の限りひっぱたいした手のひらを。呆然としているフギンの隻腕の隙間から抜け出し、ドアの方へ後ずさる。

「なんでだ、ウラル？」

フギンの顔が紅潮している。反対にウラルは青ざめて、後ろ手にドアノブをにぎった。

「お前も俺のこと、受け入れてくれてると思ってた。違うのか？」
ウラルは恐怖と混乱で何も答えられなかった。フギンが唇を噛み締める。

「じゃ、これにてお別れだな。俺は勝手にやるよ。お前はお前で好きにしてくれ」

静かな声だった。怒りっぽいフギンの声とはとても思えない、静かな、感情のこもらない声。床に座りこみ、うつむくフギンの目は

見えない。

ふっと嫌な気配を感じ、ウラルはドアノブに手をかけたまま、まじまじとフギンを見つめた。フギンの、感情を失ったフギンの内側から声がする。低い低い男の声。少年から老人まで、何人もの男が同時に呟いているような。

(……殺せ！)

ぎよっとドアを開け逃げたそうとした瞬間。

(だめだ、フギンから離れるな！)

突然脳裏に響いたジンの声にウラルは全身を震わせた。なぜここでジンの声が。ウラルは唇を噛みしめる。

「あなたのせいでしょ、ジン！」

叫んでドアの向こう、真紅の夕暮れの街に飛び出した。

「サヨナラ、ウラル」

第三章 3 「サヨナラ」 中

*

(ウラル、戻ってくれ！ 頼む！)

頭の中に響くジンの声。ウラルは固く目を閉じ耳をふさぎ、全力で町を突っ走っていた。

「どうしてよジン！ どうしてあなたの声が聞こえるの！」

とうとう本当に頭が壊れてしまったのだろうか。一人で誰かと話しながら走るウラルを道行く人が妙なものを見る目で見ている。

(俺もこんなことをする気はなかった。だが、お前が今離れたらフギンが危ない。奴に吞まれる)

「奴って誰よ」

(戦場の悪魔 だ)

ウラルははたと足を止めた。

「どうということ？」

(戻ってくれ)

「ジン、どうということよ？ 説明して」

呼びかけたが、それきりジンの声は返ってこなくなった。耳に手を当て、じつと脳裏に耳を澄ませても返ってくる声はない。

「そんなこと、言われても……」

今戻ったら、殺される。

ウラルはしゃくりあげながら、とぼとぼあてもなく歩き始めた。

どうして今日、こんな急に。決してフギンが嫌いだったわけではないのだ。ただ言い寄られ方が強引すぎた。ウラルは何の準備もできていなかった。もう少し、もう少し考える時間をもらえたら、受け入れていたかもしれないのに。

受け入れる以前に、怖かった。考えるより先に体が動いていた。フギンの頬を張った時、一番驚いていたのは間違いなくウラルだ。

重い足を引きずりウラルは歩いた。どこをどう歩いてきたのかは覚えていない。

気がつくとも教会の中にいた。参拝時間は過ぎているはずだが、ウラルのただならぬ様子に神官が入れてくれたらしい。

人気はなく、正方形のがらんとした神殿の中、四方の壁にそれぞれ二枚ずつの絵がかけてあった。見覚えのある八枚の絵だ。

東に「豊穡の地神」と「逆鱗の地神」。

南に「希望の火神」と「狂気の火神」。

西に「祝福の風神」と「憎悪の風神」。

北に「慈悲の水神」と「絶望の水神」。

王都の神殿でジンと共に見たあの絵だった。ベンベル人から守るためにここまで運ばれてきたのか、あるいはただの複製だろうか。

荒れ果てた村の中、片手にドクロを持ち、どう見ても憎悪ではなく悲嘆の表情を浮かべた「憎悪の風神」。そして結婚式で新郎新婦の手を取り穏やかな微笑を浮かべた「祝福の風神」。ウラルは二枚の風神画をじっと見つめ、ベルトにつけたポーチをさぐった。真鍮のアサミイを握りしめる。

（お前は頭目が好きだったんだよな。わかってるよ。頭目の次でいい。でも今、生きている人の中では俺が一番だって、そう言ってくれないか？）

フギンの声が耳に蘇る。ウラルは絵の前にひざまずいた。

「風神さま。どうかお助けください」

深く頭を垂れたウラルの後ろ、神殿の入り口の方で、カツンと高い靴音がした。

靴音だけで誰かわかった。前に真夜中の町でこの靴音からさんざん逃げまわったことがある。立ちあがり振り返ってみれば、思った通り青い瞳がぴたりとウラルを見据えていた。

「何があった」

エヴァンスが歩み寄ってくる。風神画の前のウラルから五歩の距離を置いて立ち止まった。

「探す手間が省けたのはありがたいが、無用心に過ぎないか？ 泣きながら歩く女ほど目立つものもない」

記憶はほとんどないが、宿から教会までの道中、何人もの直立不動のベンベル人の横を通っていたはずだ。エヴァンスは彼らから情報を得てウルルを追ってきたのだろう。

無言のウルルにエヴァンスは息をつき、二枚の風神画を見あげた。「祈りを邪魔したようだ。続けなさい。待ってしよう」

ウルルはゆっくりと水神画の前へ向かった。気は進まなかったが、ウルルの命を狙う男がここにいる。死ぬ前にちゃんと神々に祈っておきたかった。

地神画、火神画と回り、エヴァンスの隣、風神画の前に戻ってくる。

「終わったか」

「エヴァンス、あなたは私とフギンの命を狙っているんでしょう？ 私をこの場で殺してしまうの？」

やっと口を開いたウルルにエヴァンスは目を細め、「いや」と首を振った。

「わたしの罪を償うためには、ウルル、フギン、ダイオの三人を我らが神の祭壇に引き連れ、まとめて贄としなくては。ここで殺したところで何にもならない」

「セテーダン町では私の首をその場で絞めたのに？」

「殺してほしいのか？」

ウルルは黙って首を横に振った。エヴァンスがもう一度息をつく。「同行願おう」

抵抗する気は起きなかった。ウルルは黙ってエヴァンスの手を取った。

第三章 3 「サヨナラ」 下

エヴァンスについて教会を出た直後、急な悪寒にウラルははつと顔をあげた。

「どうした？」

南で大きな火が燃えているような感じがある。頬を炙る熱い風、そして生き物が燃えているような嫌なにおいと禍々しい気配。故郷の村が丸ごと燃えるのを陶芸窯から見ていたときとそっくりの感覚に全身が総毛立った。

「ウラル、聞こえるか！ どうした！」

エヴァンスの手が肩を揺さぶっている。教会の外で待つていたらしいシャルトルがベンベル語で主君に何かを問いかけた。

「南で、なにか……」

だが、うめきながら見あげた空には炎どころか煙の一筋さえ見えなかった。

悲鳴が聞こえる。狂気の雄叫びが聞こえる。ウラルの目からひとりでに涙が流れ始めた。

エヴァンスとシャルトルが困惑の視線を交わす。二人はこの襲撃の気配を感じていないのだ。とうとう本当に頭がいかれてしまったらしい。

「（エヴァンス卿！）」

突然の声にベンベル人二人が顔をあげる。ゴーランに乗った兵士が数人駆けてくるところだ。先頭の兵士がぱつと鞍を降り、エヴァンスの前に膝をついた。

「（客人にこんなことを申しあげるのは心苦しいのですが、剣の勇士と名高いあなた様をお願い申しあげます。どうぞ我々にご助力ください！）」

「（何があつた）」

「（南門でリーグ人の男が暴れているのです。相手はたった一人、しかも隻腕なのですが、悪魔が乗り移っているとしか思えません。既に死者数十名、負傷者は数えきれぬほど出ております。お助けください！）」

「隻腕のリーグ人」と言つたところでエヴァンスの視線がウラルに向く。無言の問いかけ。「お前の連れか?」。ウラルもまた無言の返事をした。凍りついた顔で。

悪魔が乗り移っているとしか思えない。

「（ゴーランを借りられるか? シャルトル、ウラルを頼む）」

エヴァンスはすぐさまゴーランにまたがり、ウラルにしか感じられない炎の中へと消えていく。

（とうとう起きてしまつたな）

耳の奥に戻つたジンの声に、ウラルは目を見開いた。

「やつぱりフギンなの?」

（ああ。本当はまだこんなことはしたくなかつたんだが……体をしばらく借りる。フギンを止めんとならん）

「それはどういう」

（すまない。事情はこれがひと段落してから話す）

ふつと体に力が入らなくなった。よろけたウラルをシャルトルが慌てて支える。ウラルは戸惑い、もがいた。いや、もがいたつもりだったが、体がまつたく動かない。

（本当にすまない……）

「ウラルさん? だ、だいじょうぶですか?」

ウラルはシャルトルにほほえみかけた。ウラルの意思とは無関係に。ウラルの顔をのぞきこんだシャルトルが熱いものに触れたかのようにビクリと体を震わせた。

南を見つめる。襲撃の気配はジンの声が聞こえる前に比べ、圧倒的に強い。

ウラルは炎の中心に向かって歩きはじめる。町の外から同じ方向

へ矢のように駆ける森の気配を感じ、ウラルは目を細めた。

「地神の忠実なる僕、森の守護者アラーハ。この声が聞こえるならば、どうか私に力を貸してください」

凜とした声。決して大きな声ではない、しかし声には力がこもっていた。矢のように鋭く、標的に向かってまっすぐ飛ぶ声は、巨獣にぶつかり、その頭の奥を震わせる。

息をきらし全身汗だくになったアラーハが現れるまでさほど時間はかからなかった。アラーハは今度も全てを承知しているようだ。ウラルがウラルでないことを知り、その体を動かしているのが誰かを知っている。信じられないとばかり目をむきながらもうやうやしく顔を寄せるアラーハ、その額をウラルはなでた。

「ありがとう」

助走もなしにイツペルスの背をまたぐ。普段のウラルには、いや常人にはありえぬほどの身軽さだ。

「セテーダン町の魔女だ……」

武器を向けたベンベル兵をアラーハがねめつける。シャルトルが「かなう相手ではない、やめなさい」と同胞を制した。ウラルに向けて何か言いたげな顔をしたが言葉がでてこないらしい。立ちつくしている。

アラーハの蹄が石畳を激しく打った。道は拓けている。リーグ人は「人には慣れぬ獣を従えた神の使者」のために道を開け、ベンベル人は南門で暴れる狂人の相手で手一杯だ。

疾駆する先、大通りの南の果てに人だかりが見える。ベンベル人の人垣の中で戦う二人の男の姿があった。一方はゴーランにまたがったエヴァンス、もう一方は馬に乗った、赤い、小柄な、片腕のリーグ人。

背格好はたしかにフギンだが、にわかには認められないほどフギンは変わり果てていた。返り血に重く塗れたボロ服、憎悪にぎらぎら光る狂気の瞳。人垣の外には死傷者の山、かなり暴れたはずなのにまったくの疲れ知らずで戦い続けている。

(……殺せ。殺せ！)

その内から響く亡霊の声に導かれるまま、すさまじい勢いで剣を振るい、振り下ろす。二人の力量差がどれだけあったか、フギンと共に長い間逃げまわっていたウラルは知っている。が、今の二人は対等に戦っていた。いや、むしろエヴァンスが押されている。見開かれた青い瞳には戸惑いの色。

(ちがう、前のこの男ではない！)

「アラーハ！」

ベンベル語の悲鳴があがった。アラーハは駆ける勢いをそのままに人垣を飛び越えるや、二人の男の間に割り込み、双方の剣をツノでがっちりからめとった。

「双方、剣を収めてください。私、風神の墓守 が調停します」
アラーハのツノから剣を取り返そうともがいていたフギンの動きが止まった。とたん、その剣の刃先がぼろぼろにこぼれ、ヒビが入り、四つに砕ける。フギンの周りに渦巻いていた襲撃の気配、禍々しい炎の気配も薄れて消えた。

エヴァンスは険しい目でウラルとフギンを交互に見つめている。

「戦場の悪魔」

フギンの狂気の瞳をまっすぐ見つめたウラルは、何事かを続けようとして、口をつぐんだ。フギンの目を見つめながらわたらの南門をまっすぐ指し示す。とたん、フギンは視線を断ち切り町の外へ突進した。

止める者は誰もいない。赤い男はすぐに見えなくなった。

「ウラル。あれは、何者だ？」

ウラルは答えない。否、今まで体を動かしていた人物がそれを聞いている気配さえない。

ウラルは体の自由が戻ったことに気づき、そろりそろりと両手を目の前にかざした。声にならない悲鳴をあげ頭を腕で覆う。アラーハの背から落ちた。アラーハがあわてて鼻先を伸ばしたが間にあわず、背中をしたたか打ったが痛みは感じない。

「ウラル」

ゴーランの背から降りたエヴァンスが手を伸ばした。ジンの手とよく似た手。ウラルは再び悲鳴をあげ、振り払おうと必死になった。気がつくともエヴァンスに羽交い絞めにされ、悲鳴をあげながら暴れていた。体の自由がきかない恐怖と、あの襲撃の恐怖、突然変わってしまったフギンへの恐怖、とうとう狂ってしまった自分への恐怖。ないまぜになったいるんなものから逃れようとして、けれど、力の限りもがき、暴れても、その腕からも胸からも逃れられない。「ジン、ジン……いや、離して。やめて！」

ずいぶん長く暴れていたはずだが、エヴァンスはただウラルを後ろから羽交い絞めにして耐えているだけ、それ以外には何もしなかった。やがてウラルが疲れ果て、暴れたくとも動けない状態になると、エヴァンスはウラルを抱えあげてアラーハの背に乗せた。

「休める場所へ連れていきたい。ついてきてくれ」

アラーハはおとなしくエヴァンスの後についていった。ウラルはただアラーハの背でぶるぶる震えていた。

第三章 4 「悪魔の狂気、守人の祈り」 上

ベンベル式の建物に連れていかれ、どこかの部屋に導かれる。窓からは建物の入り口で別れたアラーハがひよつこりと顔をのぞかせていた。ソファアに座らされ、いつの間にかエヴァンスの後ろに従っていたシャルトルがカップをウラルに手渡す。ホットミルクが入っていた。

「飲みなさい。少しは気分がよくなる」

ウラルはおずおずと口をつけ、ほんの少しだけ飲んで、カップを両手の間に抱いた。

「誰か人がいたほうがいいか？ あいにくだがここには女がいない。わたしたち二人がいることになるが」

ウラルはただぼんやりしていた。エヴァンスのため息。

「何があつたのかは、今は聞かない。隣の部屋にいるから何かあれば呼びなさい。アラーハ、ウラルに何かあれば知らせてもらえるか」
アラーハがうなずくのを確認し、二人は部屋を出ていった。

(ウラル)

脳裏に響いた声に身じろぎする。もうジンの声は聞きたくなかった。ウラルは黙ってカップを置き、耳をふさいでうずくまる。

不意に頭の上に手のひらの感触を感じ、ウラルは顔を跳ね上げた。目の前に体の透けたジンが立っている。ウラルは悲鳴をあげて飛びすさろうとした。だが暴れに暴れて疲れきった体がついてこない。今まで座っていたソファアに再びがくりと座りこんだウラルの顔をジンのぞきこんだ。

「さつきは本当にすまなかった。怖がらせたな」

ウラルは震えていたが、静かなジンの目を見てみると気持ち少し静まった。ウラルはあえぎながらるようにジンの目を見つめる。もうエヴァンスの時のようにパニックは起こさなくて済みそうだ。ジンがふつと苦しげな笑みを浮かべた。

「心配するな、幻覚じゃない。お前は夢を見ているんだ。わけあって今回はあの丘に呼べなかった。さつきはろくな説明もせずにはなかつた。だが 戦場の悪魔 を止めるにはああするしかなかった。わかってくれ」

ジンの透けた体が実体になり、あの鼓膜を素通りして脳裏に響くような声も肉声に変わった。

「あなたは誰なの」

ジンは傷みをこらえるような顔をして、それからウラルの隣に座った。ウラルはジンの目をまっすぐ見つめ、繰り返す。

「あなたは誰なの？ フギンはどうしてしまったの？ もういい加減教えてくれるんでしょう？」

「俺は、お前にできうるかぎり選択肢を残したいんだ」

「どういうこと？」

「ここで教えることはできる。だが、知ってしまったら、もう後には引けない」

「もう引けないでしょう」

一瞬黙り込んだジンの目をウラルはまっすぐに見つめる。恐怖はもう消えていた。

見返した目は不思議なほど静かな色をたたえて、そうだな、とうなずいた。

「わかった。話せるところまで話そう。俺がなぜお前の夢に現れたのか、フギンがどうなってしまったのかは話そう。だが、俺が何者であるかは伏せる。 戦場の悪魔 がフギンを選び、俺がお前の体を借りた今、もう隠そうが隠すまいがお前は後に引けないのかもしれないが……俺が名乗ると、そこに力がこもる。その力を受けたら、お前は今のままではいられない」

「はぐらかさないで」

「俺はお前にできうるかぎり選択肢を残したい。それだけだ。悪意はない」

その瞳と同じく静かな声に、ウラルは息を呑んだ。これだけ怒っ

てもなじつても乱れない声には迫力がある。少しばかり不安になつてウルルは目に込めた力をゆるめた。

「とりあえず、話せること話してよ。ね？」

ジンの顔がほっとしたようにゆるんだ。

「そもそも俺がお前の夢に現れたのは、戦場の悪魔 からお前とフギンを守るためなんだ」

「戦場の悪魔 って前に私を自殺させようとしたり、フギンを暴走させた？」

「そうだ。あの戦に出た者のうち、かなりの人数が 戦場の悪魔 に憑かれた。それが原因で自殺した者、ベンベル人に無謀に食つてかかつて殺された者がかなりいる。俺は、そうだな、 戦場の悪魔 の対極にいる者だと思つてくれればいいだろう」

「あなたの力を借りれば 戦場の悪魔 を退けられる？」

「飲み込みが早いな、そういうことだ。俺はお前のほかに何人かの夢にその人にとって近しい死者の姿で現れて、その夢を見る人とその周りの人を 戦場の悪魔 から守つてきた」

墓守 がほかにもいた？ ウルルは目をしばたいた。

「そのひとりがアラーハ？ アラーハはあなたのことを知ってるみたいだったけど」

「いや、アラーハはまた別の者の管轄だ。そうだな、今は 墓守 と 守護者 には共通するものがあると言つておこう。だから長年守護者の役についていたアラーハは俺のことを知っているし、敬意も払つてくれている」

ウルルは窓を振り返つたが、そこでじつとウルルの様子をうかがつていたはずのアラーハはいなかった。立ち上がつて窓の外を見てみたが、アラーハどころか生き物の気配がまったくなくない。そこらじゅうにいるはずのベンベル人の気配もなかった。

「戦場の悪魔 に憑かれた人も、墓守 も、お前の周りには意外に多い。代表格が エルディタラ だな。あの場所には 戦場の悪魔 が好む短気な武人が多い。お前が知っているだけでも憑かれ

「た者が十数人はいる」

「そんなに？」

「ああ。だが 墓守 になれる者も多いから大事には至っていない。五人に 墓守 になってもらった。セラもその一人だ」

「セラが？」

「実はダイオとマルクも 戦場の悪魔 に憑かれている。マルクが大丈夫だったのはひとえにセラのお陰だな。ダイオは心がかなり強い。俺が何もしなくとも自分で 悪魔 を遠ざけていたんだが、一度だけ、エヴァンスに殺されかけて生死の境をさまよっていた時だけ屈してしまった。悪魔 もその一瞬しかチャンスがないと知っていたから、ほとんど意識のないダイオの口しか使わなかった……『うわごと』の形でエヴァンスにフギンの居場所を教えただ。フギンとエヴァンスを戦わせて、いずれフギンを殺すためにな」

やはりあのときエヴァンスがウルルを追ってきたのは偶然ではなかった。ダイオが熱に浮かされうわごとを言った、その裏にもさらに理由があったのだ。

「ちなみに、前に北へ向かってもらったのはフギンをエヴァンスから遠ざけるためだ。ヒュガルト町に置いておいたら、いつなんどきフギンがエヴァンスの屋敷へ向かうことになるかわかったものじゃなかった。それを知って 悪魔 はエヴァンスにフギンを追わせた」つまり、あのときウルルらは目の前のこの男と 戦場の悪魔 の手の上で踊らされていたわけだ。いや、あの時だけではない。おそらくはその一件から後、逃げまわっていた間もずっと。

「あとは、俺が近々会うだろうと言っていたメールだ。メールには ジュルコンラ で 戦場の悪魔 に憑かれていた者を守ってもらっていた。だが、南部の雲行きが怪しくなってきた、 ジュルコンラの男らは焦っている。普段以上に気が短くなり、メール一人では守りきれなくなってきた。そこでお前を南へ呼び寄せて、助けてもらおうとしたわけだ」

「どうしてそんな回りくどいことをするの？ 直接そう言ってくれ

れば私はちゃんとフギンに理由を説明して動いたし、フギンもこうして 悪魔 に屈することはなかったんじゃない？」

ジンはすまなそうにしばらく黙りこんだ。

「俺も迷っていたんだ。俺は 戦場の悪魔 が誰かに憑いて、こうして現世に出てきてもらわないことには干渉できない。だが 悪魔 がそうしてひとたび現れれば大勢の死傷者が出るだろう。もし媒体がダイオだったらこの程度では済まなかった。片腕のフギンだったからこの程度で済んだんだ」

「フギンなら犠牲にしてもよかったというわけね？」

「ほかに方法がなかった。その上、フギンにはお前がついている。

ほかの 墓守 より頻繁に接しているお前なら俺が干渉しやすい」

「体に乗っ取りやすい？」

「申し訳ないがそういうことだ。俺はお前とフギンを逃がしたいと思いつながら、 悪魔 をなんとか止めたいと思いつけてきた。どちらの気持ちも本当だ。だからお前がフギンのもとへ戻らなかったとき、それ以上引き止めなかった」

「だからって、と言いかけて、ウラルは口をつぐんだ。あのときウラルが戻っていればフギンはこんなことにはならなかったのだ。

「自分を責めないでくれ、全部俺のせいだ。お前の怖がることはさせたくないんだが、俺はお前の協力なくしては身動きがとれない。

フギンを解放することもできない。もう一度お前の体を借してくれ」

「また？」

「 戦場の悪魔 を正気に戻して、フギンを解放する。そのために俺が出る必要があるんだ。

それが終われば 戦場の悪魔 は消える。 墓守 の役目も終わるはずだ」

「 戦場の悪魔 を正気に戻す？ 被うじゃなくて？」

「ああ、あれはもともと悪魔と言われるものじゃない。本当のところはな。俺と同じく人を守るためにいるんだが、ベンベル人に国土をめちゃくちゃにされて、たくさんの人間を失って、悲しみのあま

り気が狂ったような状態になっているだけなんだ。俺が声をかければ、やつは正気に戻る。今回見逃したのはフギンが正気に返った途端にベンベル人に串刺しにされてはかなわないと思ったからだ。わかってくれ」

確かにそれはまずい。

「よし。じゃあ、しばらくエヴァンスらと一緒にいてくれないか。そう日数はかからないだろう。戦場の悪魔はエヴァンスを狙ってくるはずだ」

「そう言い切れる？」

ふっとジンが笑う。ああ、と答えた声がぼやけているのに気づき、ウラルは慌てて呼び止めた。

「待って。あなたのことを何て呼べばいい？　今まで通りジンってわけにはいかないでしょう？」

「ジンでいい。嫌なら『あなた』でも何でも、今日みたいに呼んでくれ。俺は確かにジン本人じゃないが、お前の中のジンの記憶が形をとったものであることも間違いない。つまりはお前がジンならこうするだろうと思ったことをする」

ウラルは目をしばたいた。

「あんまり心配するな。大丈夫だ」

ジンはほほえみ、黒衣のすそをひるがえして立ちあがるとドアの方へ歩いていった。歩いていく後姿がだんだん薄れていき、ドアの前でふっと消えた。

第三章 4 「悪魔の狂気、守人の祈り」 下

不意に明るくなった視界に目をしばたく。ジンが消えると同時に朝が来ていた。首や腰が少し痛い。自分の体を見下ろしてみれば誰がかけてくれたのか毛布があり、首の下にはクッションが置いてある。近くのテーブルには眠る前に渡されたミルクが手付かずで残っていた。ソファーに座ったまま眠りこんでいたらしい。

ウラルはミルクを飲み干して立ちあがり、ドアノブを回した。鍵はかかっているようないようだ。部屋の外へ出ようとすると窓から鼻を鳴らす音がした。アラールが窓から心配げな顔をのぞかせている。

「顔を洗いに行くだけ。大丈夫、だいぶ落ち着いたから」

アラールがうなずき、窓から顔を引っこめた。ウラルは部屋の外に出て適当にベンベル人を捕まえ、下手なベンベル語でトイレの場所を聞いた。相手は話したら呪われるとも思っているのか、おろおろ視線をさまよわせながら身振り手振りで教えた後、大慌てで逃げていった。

「逃げてもいいのかしら」

ウラルはのんびりと身だしなみを整えた。終わって出てくると、ドアの前にむつつりとエヴァンスが立っていた。さっきの男がアラール八かに呼ばれて来たらしい。

「エヴァンス、櫛を貸してくれない？」

エヴァンスはあっけにとられたらしい。無表情のまま黙っている。「そんなに髪が長いんだから持つてるでしょ？ 荷物、宿に全部置きっぱなしで」

「ああ」

エヴァンスに渡された櫛は何かの骨で作られたらしい真っ白な、無骨なものだった。持っているだろうとは思っていたが、実際こうして見せてもらうと妙な気がする。ウラルは礼を言っ髪をくしけずった。

「昨日のお前が嘘のようだな」

エヴァンスがまじまじとウルルを見ている。ウルルは苦笑して櫛を返した。

「嘘だつたらよかつたんだけど」

「落ち着いたなら教えてもらおう。昨日のあれは何だ？」

いつもの鋭い視線がウルルを貫く。こちらが弱つているときには不思議なほど優しいのに、やっぱりエヴァンスはエヴァンスだ。

「私は狂ってしまったの。フギンも。狂人の話だからあなたが理解できるとは思えない。それでも話したほうがいい？」

「今のお前はそう見えないな」

「今も。というより、あなたに会ったあたりから少しずつ狂い始めていたみたい」

「とりあえず昨日と違ってまともに話は通じるようだ。聞かせてもらおう」

「そうね、昨日よりはまともよ。どこから話したらいいんだろう」

「あの男となにがあった？」

問われるままにウルルは語った。が、まるで答えにならない。当たり前だ、ウルル自身もよくわからないことを誰かに説明するのが無謀なのだ。

説明なけばで黙りこんでしまったウルルにエヴァンスはため息をついた。

「とりあえずあの男には正真正銘の悪魔が憑いていて、殺し損ねたわたしをもう一度襲ってくるというわけだな？」

「それを私に憑いている正体不明の精霊が被ってくれる、そういうことみたい」

「まるでおとぎ話だな」

「おとぎ話で終わらせてくれる？」

エヴァンスは無表情で黙りこんだ。

「いいの。私の作り話で終わってくれればどれだけいいかと思ってる」

「ばかにしているわけじゃない。ただ、突飛に過ぎるな」
わかつてる、とウラルは笑った。信じてもらいたいわけじゃないし、私も話せば話すほどばかばかしく思えてくるの。

エヴァンスはウラルの目をじっと見つめた。狂気の色を探すかのように。ウラルがほえんでみせると、ついつと視線がそらされた。「だが、あの男がもう一度襲ってくることは十分考えられるな。用心しておこう」

少しは信じると言いたいらしい。エヴァンスは「遅くなったが朝食を運ばせよう」といつもの無機質な声で続け、きびすを返した。

*

昼過ぎにはベンベル兵が宿の荷物を持ってきてくれた。ご丁寧に食べかけのサンドイッチと空っぽのビール瓶まで入っている。

ウラルの荷物のみならずフギンの荷物もまるごとウラルの元に戻ってきた。フギンはいつもベルトにつけているポケットとサーベルそれに馬のディアン以外は何も持っていかなかったようだ。町の外にたった一人、荷物もなしに血まみれの服で、どうやって夜を過ごしたのだろう。

腐るようなものが入っていないかのチェックのためにウラルがフギンの荷物を開けると、一番上には真っ黒なマントが無造作に丸められて入っていた。

「取りに行った者いわく、ベッドの上に大きく広げて置いてあったそうだ」

フギンがジンへの嫉妬から眺めていたのか、あるいはいずれ宿へ帰っていたらウラルに見せつけるためのものだったのか。

マントを膝に置き、ウラルはかぎ裂きや裾のほつれを丁寧につくろっていった。夢に現れるジンも毎回必ず身につけているこの黒マント。ウラルが最後にジンに会ったとき体にかけてくれたもの。ジンの腕。胸。ポケットに入っていたアサミイの重さ。ウラルは胸の

ペンダントをそつと握り、ベルトに挟みこんだアサミイをなでた。

ふと、窓を軽く叩く音にウラルは顔をあげた。

「ウラル姉ちゃん！ 助けに来たよ！」

小声で叫ぶ声にあわてて振り返れば、アラーハの巨体に隠れるようにしてナウトが立っていた。行方不明になったウラルらをダイオは探してくれていたのだろう。昨日あれだけ派手に目立ったことだし、アラーハという格好の目印がここにいるのだから探す手間もかからなかったはずだ。だからといってここまで堂々と入ってくるとは！

「ま、僕なら少々入りこんでも『子どもが遊んでるんだらう』で済ませてくれるだろうし、いざとなったらアラーハが僕ひとりくらい逃がしてくれるだろうってことでさ。それに外にマルク兄ちゃんたちもいるからちゃんと助けてくれるよ。フギン兄ちゃんは？」

「フギンはここにはいないの。町の外にはいるはず」

「離れ離れたったんだ。わかった、じゃあ早く探さなきゃ」

ナウトが窓越しに手を差し伸べる。ウラルはその手をとって窓枠を乗り越え、ナウトをぎゅっと抱きしめた。

「ナウト、ありがとう。立派な騎士ね。でも」

ナウトが意外そうに目をしばたいた。

「私はもう少しここにいますつもりなの。この通りひどい仕打ちはされていないし、見張りもついていないから心配しないで。その気になればアラーハに暴れてもらって逃げることもできるし。知りたいことがあるの」

「姉ちゃん、みんな心配してるよ」

「本当にごめん。でもフギンを取り返すにはこれしかないみたいで、ゆらりと建物の脇、ナウトの真後ろ、ウラルの正面からエヴァンスが現れた。立ち聞きしていたらしい。アラーハがナウトをかばって立ちふさがる。」

その時だ。

門の方からベンベル語の悲鳴があがった。漆黒の馬、赤い男。た

だ一本の腕にはベンベル式のシャムシール。利き腕を失ったフギンが両手使いの重い剣を振り回す。門のところまで待機していたらしいダイオやマルクが啞然とした様子で、けれどフギンに加勢しようと思っただのか、あるいはウラルとナウトを守ろうとしたのか、飛び出してきた。

「お前の話の通りだな、ウラル」

エヴァンスが剣に手をやる。やっとその存在に気づいたナウトがぎよつと身を引いた。

「わたしの命が欲しいか、悪魔憑き！」

（ウラル、二人を戦わせるな！ エヴァンスの手を押さえるんだ。剣を抜かないように）

声にぎよつと胸元のペンダントを握り締める。胸の奥でジンが笑う気配がした。

（ああ、そうだ。俺はお前の中のジン ジンならお前が本気で嫌がることを無理強いはいしない。俺の指示通りに動いてくれ。すまんが最後のところだけは口を借りるぞ）

ウラルはうなずいてエヴァンスの前に立ちはだかり、その手元を押さえた。

「剣を抜かないで。戦わないで。私の言う通りにして」

（フギンと目を合わせるんだ。怖いだろぅが我慢してくれ。視線を通して俺が守る。目が合っている間はやつの方から攻撃してこない）

フギンが剣を振りかぶる。エヴァンスがウラルの腕を振りきって剣を抜く。

「さっき言った『精霊』が助けしてくれてるから。戦わないで、エヴァンス」

ウラルはフギンの目を見据えた。光のない虹彩、どこにも合っていない焦点。開ききった瞳孔、その奥の闇。

（目をそらすな。そのまま間合いを詰めてくれ）

フギンが剣をおろした。まるで死人の目だ。まるで……。まるで……。ジン。サイフォス。リゼ。ネザ。父。兄。フェイス將軍。カフス

將軍。欠けていった仲間の面差しが次々と重なる。その声が。殺せ。ベンベル人を殺せ！

そうだ、戦場の悪魔 は、この戦で死んでいった男らの集まりだ！ ジンさえ 悪魔 の一人なのだ！ ほら見るベンベル人のキヤンプに蜂の巣を投げ込ませて襲撃した後のジンの面差しが透けている！

（ウルル、そうだ。お前が見ているのは幻だが、真実でもある）
わなわな震えている肩に大きな手のひらが置かれている。エヴァンスの手だ。自分の後ろに下がれと言っている。

（目をそらすな。終わらせてやる）
ウルルは肩に置かれた手をそっと握り、離すと、一步を踏み出した。

亡霊の目の前へ。ウルルの口がひとりでに動く。突風がウルルの言葉をかき消した。

「何を言ったの？」
（やつの真実の名だ）

ふつとフギンの顔から陰が消えた。まぶたが閉ざされる。壮絶な死に顔から安らかな死に顔へ。そして頬に赤みが戻り、固く刻まれたシワにみずみずしさと弾力が戻り、生気が宿った。死者が生き返ったかのようにだ。

閉ざされた眼が開かれる。爛々とよく光る目がウルルを見つめた。
だが。

「あなたは、誰」
戦場の悪魔 とは違う。けれどフギンでもない。体の震えが止まらない。

「敏い娘だ。礼を申そう、お前の内に宿る者にも」
ぐいと血塗れの顔を手でぬぐい、フギンの姿をした男はエヴァンスをねめつけた。

終章 「あなたは誰」

「異国の者どもよ、戦うとなれば容赦はせん。試してみたければ遠慮はいらぬぞ！」

鋭い恫喝に遠くから弓でフギンを狙っていたベンベル兵がぎよつと弓をおろした。

この男には大將軍や英雄のような雰囲気がある。生氣にあふれた堂々とした姿、朗々と響き渡る威厳ある声。声だけ、あるいは視線だけでも人をねじ伏せられそうだ。それでいて多くの人を率いるだけの力に溢れている。

「あなたは誰なの」

重ね訊ねる声も自然、弱気になってしまふ。エヴァンスをにらんでいた目がやつとウラルに向けられた。

「ウラルだったな。お前の内にいる者は名を教えていないな？ お前の墓に現れる者が名乗らぬのと同じ理由で名乗ることができぬ。今はとりあえずフギンと呼ぶがいい」

ウラルは生唾を飲みこんだ。戦場の悪魔のときもそうだったが、とてもフギンとは思えない。

「私がジンに口を貸したみたいにな、あなたもフギンを？」

「その通り。ただし意識を保っていたお前と違い、フギンは墓所にいる」

「墓所って、私が見ているような、ですか？」

「そうだ」

前に尋ねたとき、フギンは「墓じゃなくて戦場の夢なら見る」と言っていた。それはやはりウラルと同じ墓所だったのだ。そしてフギンはやはり墓守で、ウラルにとってもジンに相当するのが目の中のこの男であるらしい。ウラルは悪寒をこらえ、自分の内にいるはずのジンに意識をこらす。説明がほしい。だがジンは沈黙したままだ。

フギンの目が再びエヴァンスに向けられた。

「異国の騎士よ、名を聞こう。俺はフギンの記憶を借りられる、聞かずとも知っているがお前の声を聞いてみたい」

エヴァンスもまたフギンをにらんでいる。無表情で口を真一文字に結び、目には肉食獣に似た鋭利な光。

「エヴァンス・カクテユスだ」

ぴゅん、と弧を描いてフギンのシャムシールが鞘におさまった。「利き腕を失った体でなければ一刀のもとに切り捨てたものを。それに加えてウラルの内の者が守っていないければ、せめて一太刀くらいは負わせたのだが。お前はこの国のつわものどもを殺しすぎた」エヴァンスは無言だ。が、こころもち青ざめて見えるのはウラルの気のせいではないだろう。

「ウラル、フギン！」

いつの間にかダイオらがそばまで来ていた。ただただ呆然としていたらしいナウトが仲間の中に転がりこむ。

フギンがダイオを振り返る。瞬間、ダイオの肩が雷にでも射抜かれたかのようにびくと震えた。

「俺は南へ行く。南部の惨状を黙って見てはおれん。ダイオ、マルク。供をせよ。俺が誰か、お前たちにはわかつているはずだ」

大勢の目がダイオとマルクに向けられた。ざわめき。戦場の悪魔に憑かれていた二人、もとい 墓守の二人は青ざめたまま黙っている。

「是か否か、どちらだ」

ダイオがぐつと唇を引き結び、フギンの前に片膝をついた。

「お従いいたします」

しんとあたりが静まり返った。誰もが呆然としていたのだ。大將軍ダイオがフギンの前に膝をつく？ マルクもダイオの後ろで同様に膝をついている。

フギンは当然とばかりうなずき二人に立つよううながすと、周りのリーグ人たちを振り返った。

「共に来たい者は来るがいい。そうでない者は エルディタラ へ
向かえばよかるう」

「何をしている、応えよ」

ダイオの叱咤にもともと軍人だった男らが戸惑いながらも膝をつき、お従いいたします、と唱和した。もと軍人ながらシガルだけはそれに加わっていないかった。ナウトの肩に手を置き、歯を食いしばってフギンを見つめている。

「何が起こってるんだ……？」

もと盗賊の男らはすっかり逃げ腰だった。あれだけ気の強いセラまで少女のような不安げな顔をしている。

軍人でも盗賊でもないイズンは人形のように表情ひとつなく立ちつくしていた。アラーハもまたウラルを守るように立ちつくしている。

「また会おう、エヴァンス・カクテュス」

フギンが馬を入り口に向けた。ダイオをはじめとした十余人が去っていく。ベンベル兵は誰も止めようとしなかった。

「な、なにしてんのよ！ 私たちもとつとずらかるわよ！ ウラルも来なさい！」

我に返ったセラが隣の男に怒鳴る。とたん、魔法が解けたかのようになりベンベル兵がセラらの周りを取り囲んだ。アラーハが激しくツノを振りながら前に立ちふさがり威嚇する。

「ウラル、取り引きをしないか」

エヴァンスの声。「あんな男に耳貸すんじゃないよ」とセラがウラルを引き寄せ細身の剣を抜いた。

「お前には聞きたいことが山ほどある。お前がわたしと来るならば仲間は無傷で解放しよう。だが拒否するならば、おそらく無事に切り抜けれない者が何人か出るだろう」

エヴァンスの目がナウトをちらりと見る。ナウトが犬のようにうなった。恐怖に尾を巻きながらも激しく吠え立てる犬そっくりに。たしかにあの異様な雰囲気をもとったフギン、そしてダイオがいな

い上に人数が減った今、非戦闘員のナウトとウラルを抱えた状態でベンベル兵に襲われれば。

「セラ、エルディタラ に戻って団長に何があったか伝えて」

「ウラル！ あんたは一緒に来るの！」

「私はあの人を追って南へ行く。エヴァンスの狙いもフギンとダイオだから一緒に来てくれるし、エヴァンスがあの人を捕まるまでは私の命も安全だから心配しないで」

「ウラル！」

「本当に大丈夫よ、エヴァンスはアラールにはかなわないの。逃げようと思えばアラールが逃がしてくれるから。私の意志で行くの」
勝手なことを言うなとばかりにエヴァンスが苦笑した。

「（門を開けてやれ。無条件で出て行くそうだ）」

「（ですが、エヴァンス卿）」

「（これ以上の被害を出したいか）」

門が大きく開け放たれた。ウラルがセラの背を軽く押すと、セラの目から涙がこぼれた。

「マルクはあんなだし、ウラルもこんなだし。どうすればいいのよ！ フギンと一緒に行くなら行くであんたなんで今ここに残ったのよ。もうわけわかんない……」

「ありがとう、セラ」

セラの体をぎゅっと抱きしめる。もう一度背を押すと、セラはとぼとぼと門に向けて歩き出した。シガルが、イズンがウラルの手をとり「気をつけて」と言っただけでセラに続く。最後まで黙ってウラルを見つめていたナウトもシガルに背を押されて歩き出した。

ウラルはエヴァンスの青い目をまっすぐ見つめた。さすが肝が太い。青ざめていた顔はすっかり元に戻っていた。

「ひどい顔色をしている。少し休みなさい」

逆に言われてウラルは自分の頬に触れる。指も頬も冷えきっていた。

「フギン……」

今さらながら歯がカチカチ鳴り始める。

「ジン。フギンが戻ってくるって、嘘だったの？」

答えは、返ってこなかった。

終章 「あなたは誰」 (後書き)

第三部 完 第三部 第四部間章へつづく

間章 1「森の呼び声」 上

その晩、またジンが夢に現れた。状況はその前の日とさほど変わらない。ただエヴァンスにあてがわれた部屋のベッドで眠れず寝返りを打っていたウラルの肩に大きな手が置かれた、振り向いてみればジンがいた。

「フギンはどうなったの？ 戻ってくるって嘘だったの？」

もうパニックは起こらなかった。起き上がってジンの姿をした男の目を見つめる。ジンは相変わらず苦しげな顔で「俺にとっても予想外だったんだ」と答えた。

「今までもこういうことはあった。『アレントの叙事詩』を思い出してくれ。地神と水神が海を埋め立て山脈を築いた時、アレントは狂ったように暴れた。このときアレントには 戦場の悪魔 が憑き、彼の体に乗っ取っていたんだ。そして山の中腹にいた娘には俺が憑いていた」

つい何日か前に女装イズンが語った物語、有名な神話時代の叙事詩。

「ちょっと待って。神話時代から 戦場の悪魔 もあなたもいたの？」

「俺たちは人間じゃないからな。こんなことは多くはないが、神話時代から数えれば十数回はあったんだ。俺が今日やったようにやれば大概 戦場の悪魔 は宿主を離れた。アレントの時も無事に離れたんだが……今回はフギンが自らやつに体を明け渡したんだろう。もう何も見たくないし考えたくない、誰が自分の体を動かそうが構わないというわけだ」

ウラルに拒まれたのがそんなにこたえたのだろうか。ウラルはうつむいた。

ウラルもいきなり引っぱいたしたのは悪かったかもしれない。その後ちゃんと弁解していればよかったのかもしれない。けれどフギン

ももう少しやりようがあったらうに。けれどウラルがあの後ちゃんと戻って仲直りできていれば。

ジンがふうつと重いため息をついた。

「ウラル。もうすぐアラール八が大慌てで窓をノックしてくるだろう。急に変わった話にウラルはついていけず、首をかしげてジンを見た。

「ヒュグル森に何かあったようだ。経験の乏しい今の守護者では対応できない。守護者の主人がアラール八を呼んでいる」

「大変じゃない」

「アラール八と一緒に森へ行ってくれ。森の聖域で俺が何者であるか、俺の兄が何者であるかを話そう」

ウラルはぎよつとジンの目を見た。あれだけ正体を明かすのを渋っていたのに。

「さすがにここまで巻き込んだ以上、俺はお前の協力を仰ぐほかないし、そうしなければすべてを伏せて黙っているわけにもいかない。だが覚悟はしておいてくれ、前にも言ったように俺が名乗ればお前は今のままでいられなくなる。ダイオがフギンの前に迷わず膝を折ったように、あるいはアラール八が地神に従うように、お前は俺に従って俺の役目の一部を代行してもらうことになるだろう」

「そんな」

「俺が名乗るといふのはそういうことなんだ。名乗る時はしかるべき場所、つまり墓所 に入る必要がある。森の聖域 からお前を傷つけずに 墓所 に入れるからな」

「私を傷つけずに、ってどういうこと？」

「そうだな。どうせすべてを話すならこれくらいはここで話してもいいだろう」

ジンは一度口を閉ざし、ウラルの目をまっすぐ見つめた。

「あの墓所、貴石の棺と夕暮れの丘のあるあの場所は、お前の死後の世界だ」

ウラルは絶句した。ジンは黙って、自分の言葉がウラルに染みこ

むのを待っている。

あの丘。たしかに死に近い場所だった。けれどウラルはここにいて。ここでちゃんと生きているのに。

「いわゆる臨死体験というやつだ。お前はいつ 墓所 に行った？ 思い出してみろ」

最後はアラールに頭を殴られて倒れたあの時。その前はエヴァンスへの仇討ち未遂、後頭部をかなり酷く殴られて気を失った。その前はジンが死んだあの日、眠り薬を飲まされて。

「二回目と三回目はたしかに死にかけてたけど、最初の一回はそうでもないよ？」

「お前は薬が効きやすい体質な上、あのときは一気飲みなんぞしただろう。薬が体に入りすぎたんだ。アラールがそばについて世話していなければ凍死していた」

再びウラルは絶句した。

「なにはともあれ、お前が死にかけてたときにしか 墓所 には行けない。俺が今、ここにいるのもそういうわけだし、ほかの 墓所 よりお前のほうが干渉しやすいのもそのせいだ。ここまで何度も死にかけて 墓所 に来る 墓守 も珍しい」

何か言いたいの言葉がまったく浮かばない。ジンはしばらくウラルの言葉を待っていたが、ウラルがあきらめて唇を閉ざすと再び話し始めた。

「さあ、もうすぐアラールが窓をノックするぞ。 聖域 の近くでは必ずアラールの指示に従うんだ。それからエヴァンスは連れてきてもいいが、絶対に 聖域 には入らせないでくれ。一步でも入ればアラールが問答無用で殴り殺すことになるだろう。それが森の掟だ」

「ジン……」

ふっとジンの目が和らいだ。黙ってくしゃりとウラルの頭をなでる。ウラルは思わずその大柄な体に抱きつきたくなった。生前のジンはそんな関係ではなかったのに。ましてやこの男はジンの姿を

した別人なのに。

「不安なようなら先延ばしにすることもできる。その場合は 聖域に入らなければいいんだ」

「本当にあなたが誰かを知っただけでそうなってしまふの？」

ジンはかすかに笑った。

「ちよつと脅しが過ぎたか。心配するな、アラーハが地神を恐れているか？ そんなことはない。お前も俺の正体を知ること、守護者と似たような存在になるだけだ。ただ、アラーハは普通のイッペルスじゃない。守護者を降りた今でもな。お前も普通の人間ではいられなくなる。それが俺としては心配なだけだ」

今でも十分「普通の人間」ではなさそうだし、十分ウルルは不安なのだが。これ以上どうなるというのだろうか。心配するなという方が無理な相談だ。アラーハは守護者になりたてのとき不安を感じなかったのだろうか。フギンやダイオは。

窓の方からノックの音。

振り向いた一瞬の間にジンは消えていた。ついさつきまでジンが座っていた場所を見るが、人が座った跡も、そのぬくもりも残っていない。ただウルルが寝乱したただけのシートがある。

もう一度激しいノック。ウルルが窓を開けるとアラーハがいた。説明したくとも声を出せないいらだちが目にはつきり透けていて、それでもなんとか説明しようとウルルの質問を待っている。

「アラーハ、事情はわかってる。森に何かあつたんでしょ？ すぐ準備するから待ってて」

アラーハが目をいっぱいに見開いた。なぜ知っているんだ、と目で問いかけるアラーハにウルルは笑い、「着替えるから」と窓を閉めた。

「ジンが来たの。アラーハに 聖域 へ連れていってもらえってアラーハが窓の向こうで息を呑む心配がした。

さつと着替えて荷物をまとめ、窓枠を乗り越え外へ出る。

「こんな夜中にどこへ行く気だ？」

ウルルは隣の部屋を振り返った。エヴァンスだ。この男は本当にいつ寝ていつ起きているのやら。アラーハなみに睡眠時間が短くて耳もいいに違いない。

「ヒュグル森へ。ごめんなさい、急用ができたの」

「急用？」

「例の精霊が私にささやいたのよ」

エヴァンスがかすかに顔をしかめ、アラーハに目をやった。

「本当に狂っているとしたか思えんな。せめて出発は朝にしたらどうだ」

アラーハがいらいらと足踏みし始めた。ウルルの目をのぞきこんで地面に伏せる。「背中に乗れ、行くぞ」。

「朝まで待っている時間はないみたい」

「どうしても言うならわたしも行こう」

アラーハが体でウルルの膝裏を押した。かくりとその背に座りこんだウルルを乗せて強引に立ちあがる。これ以上待っている余裕はないと言いたげだ。ウルルは慌ててたてがみをひつつかみ体勢を整えた。

「ごめんなさい、用が済んだら戻ってくるから」

エヴァンスが後ろで何か怒鳴ったがウルルに聞いている余裕はない。すさまじい勢いで駆けはじめたアラーハの背から落ちぬよう必死でバランスを保った。

みるみる町を取り囲む城壁が近づいてくる。アラーハの揺れが大きくなった。飛び越える気だ。アラーハの脚力なら階段を飛び越え見張りやぐらの屋根を蹴り、たやすく塀の向こうへ跳べるはずだ。だが。

ウルルが身構えたのを察したのか、あるいはウルルを乗せてそんな軽業をやつてのけるのは危険だと感じたのか。アラーハはスピードを落とし、ベンベル人の門兵にツノを振り下げ脅しの姿勢をとった。門兵が槍を構える。が、こころなしか腰が引け気味だ。

「（門を開けてください）」

このままだとアラハが門をぶち破りかねない。ウラルは下手なベンベル語でできるだけ丁寧に話しかけた。

「（エヴァンスの許可はもらってきました。急いでるんです）」
バレバレなのは百も承知だ。門番の槍が牽制の形で動く。アラハもどすんと前に一歩踏み出し威嚇した。

今にも飛びかりそうなアラハ。その耳が不意にくるりと後ろを向いた。馬蹄音。

「（二人とも槍をおろすがいい。この獣と戦って犬死することはない）」

エヴァンスが馬で追ってきたのだ。ウラルが去ってから着替えて荷物をまとめて剣をはき、馬小屋に駆け込んで馬具を整え……いくらなんでも速すぎる。まさか普段着で剣を腰に帯びたまま眠り、荷物はこんな時のために飛び起きて紐を握ればいいようまとめてあり、馬も馬具をつけたまま寝ていて指笛ひとつで飛んでくる、などということはないだろうが。なにはともあれとんでもない超人だ。

「（門を開けてもらえないか。二人のうちどちらか、明日の朝わたしの部下が起きてきたら、わたしはヒュグル森へ向かったのでゴールランを連れて追ってくるよう伝えてほしい。ウラルの用が済んだら屋敷へ戻るからそこで待っているように、と）」

どうやらシャルトルは主人と違って常人らしい。ウラルはこっそりと胸をなでおろした。

門番がうなずき門を開ける。アラハが猛スピードで駆けだした。

間章 1「森の呼び声」 下

*

日中、ウラルの休息とエヴァンスの祈りの時間のほかはほぼ止まらずに駆け続けた。森が近づくにつれその呼び声が強くなっているのだろうか、アラーハは疲れているはずなのにぐんぐんスピードをあげていく。

ウラルはへとへとだった。疲れきった足が時々痙攣をおこす。さすがのエヴァンスも疲れきってフラフラ川へ向かおうとする馬の扱いに手を焼いているようだ。

（もう少しで森だ。がんばれ、ウラル）

アラーハが時々視線を送ってよこす。

「そろそろ日没の祈りの時間だ。止まってもらえないか」

エヴァンスの声に心底ほっとした、その時だ。

火薬のおいがふつと鼻をかすり、ウラルはぎょつとしてそちらを見た。なぜこんな畑のど真ん中であるの忌まわしいにおいがするのだろうか？ アラーハも気づいたらしくそちらを見、不意に今まで以上のスピードで駆け出した。

「アラーハ？」

アラーハの目指す先に異様なものを見つけ、ウラルはぎょつと目を見開いた。

ジャガイモ畑の一角が崩れ、水をたっぷり含んだ真っ黒い泥がむきだしになっている。その中に黒い小山があり、そこからよつきりと短い木がはえていた。いや、木ではない、イッペルスの枝角だ。その周りには人、それもベンベル人らしい人の体がごろごろ転がっている。十数名はいた。うめいている者もいればぴくりともしない者もいる。

（ノアーハ！ くそ、遅かったか！）

絶望の響きが脳裏に轟き、ウルルはぎよつとアラー八を見た。今の声はジンではない。もう随分聞いていないなつかしい声、あの大男アラー八の声が。

蹄の音が聞こえたのか、黒いイツペルスがかすかに頭をもたげた。その瞳にはいらだちと安堵、相反する二つの色。

(生きていたか……！)

アラー八が見るからにほつとした様子でウルルを乗せたままノアー八に駆け寄った。ノアー八が四肢を動かすも、とても立ちあがる力はなさそうだ。

ウルルは思わず喉元を押さえた。左の脇腹が大きくえぐれ、そこから血と腸独特の発酵臭が漏れている。火薬の傷らしく傷口の周りがこげていた。その上、あばらが折れて肺に刺さったのか口と鼻から血を吹いていて、ふいごのような呼吸音の中にごろごろ嫌な音が混じっている。

これではとても助からない。目に力が残っているのが不思議なほどの重症だ。

(ノアー八、人の姿になれ。森まで連れていく)

アラー八がそつと鼻先でノアー八の額に触れた。ウルルが聞いた声と同じもの、アラー八の思念がそこからノアー八に流れこんでいく。

守護者が森を離れて死ねば、森が滅びる。不意にゴウランラの戦場にアラー八が残らなかった理由を思い出し、ウルルは震えた。ノアー八がここで、森ではなくこのジャガイモ畑で死ねばヒュゲル森が枯れ果てるのだろうか。

ノアー八がぶるりと身をゆすり、毛皮をまとった大男の姿になった。アラー八によく似た、けれどアラー八の赤茶とは違い漆黒の毛皮をまとった若い男。人の姿になると傷の酷さが際立って見える。変身が負担になったのかアラー八の姿にほつとしたのか、目がどんよりと淀んできた。

「その男は、何者だ」

そこらじゅうに転がったベンベル人たちに応急処置をほどこしていたエヴァンスが剣の柄に手をかけ、じっとノアー八をにらんでいる。いくら豪胆なエヴァンスとはいえ目の前で獣が男の姿になれば驚くほかがないらしい。

（ウルル、時間がない。こいつを俺の背に乗せてくれ）

アラー八がウルルを鼻先でつつきつついた。あわててノアー八の腕をとったが、ウルルでは到底運べそうにない。なにせエヴァンスよりも背が高い大男なのだ。しかも重症を負って体に力が入らないとなれば。

ノアー八はもうぐったり目を閉じている。

「エヴァンス、お願い。この人をアラー八の背中に乗せるのを手伝って。知り合いなの。望む場所で死なせてあげたい」

エヴァンスはじろりとノアー八を一瞥し、たしかに助かりそうにないなとばかり眉をひそめた。背中に差し入れられた男の腕に驚いたのかノアー八がかすかに目を開き、不意にぐるぐるうなりながらエヴァンスの胸倉をつかんだ。エヴァンスがとっさにノアー八の手首に手刀を叩きこむ。骨の折れる音が響き渡った。

（やめる、ノアー八！）

アラー八の静止も聞かず、ぐるぐるうなりながらノアー八が再びイッペルスの姿になった。立ち上がりツノを振りかざそうとするもその力はなく、けれど血をしたたらせながら歯をむき出す口から、びったり後ろに伏せられた耳から、激しい怒りと憎しみの感情がほとばしる。

ベンベル人は侵略者、この若き守護者の敵なのだ。

エヴァンスが剣を抜き放つ。が、それを振るうまでもなくノアー八が横ざまに倒れた。

「……アラー、八、大、叔父……。森、を……。やつらに……。渡さない、で……」

かすかな声が絶え絶えに聞こえてくる。今ので力を使い果たしたのか、その瞳から、全身から、命の灯がついに消えようとしていた。

ノアーハの黒い体からふわりと翠の光が湧き上がる。ウラルは思わず目をしばたいた。ほじくり返されたジャガイモ畑の中にもかかわらず、ヒュグル森の春のにおい、新緑のにおいとかすかな花の香りがする。

（許せ！）

突如アラーハの後ろ足が跳ね上がり、ノアーハの角の付け根を蹴りつけた。その立派な枝角の一本が折れて飛ぶ。ノアーハの体を離れても翠の光はまだツノに宿ったままだ。

（ウラル、それを持って俺に乗れ！）

ウラルが枝角をひつつかむと同時にアラーハがウラルの体をすくいあげる。腕にしっかりと抱いた枝角から漏れる光がどんどん暗くなつていくのにぎよつとしつつ、森へ向けて全力疾走するアラーハのたてがみをつかんだ。

この光が消えた時がノアーハの最期、そして森の終わり。

アラーハがヒュグル森の最初の木の脇をすりぬけた瞬間、もう消える寸前だった翠の光がツノを離れ、ふうつとアラーハの体に吸いこまれた。

「間に合った、か」

ちゃんと鼓膜を震わせる声かぼそりと響いた。

「ちゃんと声も出るらしいな。ウラル、また話せてよかった」

「アラーハ！」

ウラルは思わずアラーハの太い首を抱きしめた。どうやら今の光を受け継いだことでアラーハは再び守護者になつたらしい。

アラーハはウラルの顔に鼻面をすりよせ、ぶるりと身をゆすつた。アラーハの姿がかげろつのように薄くなったかと思うと、あのなつかしい狩人姿の大男が現れ、広い胸にウラルをかき抱く。

「俺はヒュグル森守護者、イツペルスのアラーハ！ これより地神の命にてノアーハよりその任を引き継がん！」

アラーハの大声、腹の底をゆるがす大音声が森に響き渡った。

間章 2「明かされたもの」 上

「聖域 へ行かんとならん」

アラール八はそう言って再びイツペルスの姿になり、ウラルを乗せて歩いてきた。エヴァンスは倒れていたベンベル人の手当てのために残ったのか、追ってくる気配はない。

「ノアー八を埋葬しなくていいの？」

「イツペルスの死骸は土に埋めるべきものじゃない。いろいろな獣に食われ骨をかじられて森の一部になる、そういうものだ。たしかに森じゃなく畑に置いてきたのはしのびないがな。惜しいやつを亡くした」

ウラルは光を失った枝角をぎゅっと抱きしめた。ジャガイモ畑に横たわった軀はベンベル人に切り刻まれるのだろうか、それとも畑の持ち主が冬の食料にでもするのだろうか。どちらにせよノアー八が望むであろう最期、森に還るという選択肢は迎えられそうにない。「そういえばノアー八はずっとアラール八のこと『大叔父』って呼んでたけど、甥なの？」

「いや。弟の孫って何ていうんだ？」

「さあ。そんなに歳が離れてるの？」

「そうだな、守護者の俺はイツペルスとしては随分長生きだ。曾孫も何頭か生まれている」

「アラール八の曾孫？ イツペルスの奥さんいたの？」

アラール八が笑った。

「何を言ってるんだ。イツペルスの守護者はヒュグル森最強のイツペルス、つまりはハーレムの主だぞ。この森のイツペルスはほとんど俺の血を引いている」

「ちよ、ちよつとまって、ハーレム？」

なんとまあ。俺にも若くてやんちゃな時代があったんだよ、と笑うアラール八にウラルはぼかんとするほかがない。ということはアラ

「一八の義理の娘であるウラルにはイツペルスの義理の孫がわらわらいるということだろうか。頭が痛くなってきた。」

「変だな。人の姿になっただらお前に言いたいこと、こんなバカ話じゃないことが山ほどあったはずなんだが、何も思い浮かばんよ。」

ウラルはくすりと笑みを漏らした。

「私も同じこと思ってた。」

「まあいいか、おいおい思い出すさ。疲れたろう？ 飯はちゃんと荷物に入ってるか？」

荷物をさぐって硬く焼きしめたパンとチーズ、水を出す。

「俺はそこらの草でも食ってるよ。そんなに量は持つてきていないだろう？ 水ももう少しいけば湧き水の出ている場所がある。」

「えーっと、アラーハ？ 座って食事にしない？」

アラーハは一瞬黙り、苦笑した。

「すまん、このまま歩き続けてもいいか？ 立ち止まる気になれんのだ。聖域 が呼んでいる。」

「ノアーハを助けるために走ってたんじゃないの？」

「もうあれほどの衝動はないさ。今あるのは守護者としての本能みたいなものだ。」

アラーハの背中の上で食事を取り、そのうなじに突っ伏してウラルは眠った。疲れていたから随分長く寝ていたはずだ。気がつけばアラーハは人の姿になっており、夜明けの薄明かりの中をウラルをおぶって歩いていった。

「何度かお前が落ちかけたもんだからな。もうすぐ着くぞ。」

アラーハの広い背中中は居心地がいい。人外だからなのか、はたまたアラーハの性格か。ウラルは幼子に戻った気分を目を覚ましてからも長いことうつらうつらしていた。

しばらく人の姿になれない間にアラーハは老けたらしい。黒かった髪は半分ほど白くなり、顔のシワも増えている。それでも筋骨隆々の堂々たる体は不思議に変わっていなかった。

大神殿の柱のごとく間隔を置いてそびえ立つ巨木の森、腰まで届

く下草を踏みしだきながらアラールハは進む。ウラルも来たことがないヒュグル森の最深部だ。

「歩いている間に思い出したんだ。俺はずっとお前に謝りたかった」
ぼつりとアラールハがこぼすのに、ウラルはようやくはつきり目を覚まして首をかしげた。

「なにを？」

「まずは俺の正体をフギンに明かしていなかったことだな。あれは本当に申し訳なかった。それから、お前が俺を必要としている時に人語が話せない状態だったことだ。墓守 になっただろう？俺が相談に乗ってやれば、お前はこんな苦しまずに済んだかもしれない」

ウラルはふうつと息をついた。

「私もずつと聞きたかった。あの人は誰なの？」

アラールハは黙りこんだ。

「教えられない？」

「俺の口から言っていていいんだろうか。だが、もうお前も察しがついてるんじゃないか？」

察しなんてついてない、と答えようとした口をウラルは閉ざした。無意識に埋もれていた答えが意識にのぼってくる。

「 守護者 の主人は地神と水神。それなら 墓守 の主人は誰だ？」

誇り高きイツペルスのアラールハが敬うのは守護者の主人、地神だけ。そのアラールハが ジン をも敬うのはなぜ？

「 墓所 、つまり『死後の世界』にお前を呼び、お前の心の中からジンの姿を借りて現れる。そんなことができるお方は、この世に一人しかおられないんだよ。逆に言えば一人だけおられる」

あの夕暮れの丘が初めて現れた時、まだジンが生きていた時。あの墓にいたのは、誰だった？

「まさか……」

アラールハがうなずいた。立ち止まり、ウラルを背からおろす。

「さ、着いたぞ。ここが 聖域 だ」

ウラルは驚いて前を向いた。

花の香りが鼻をかする。見てみれば金色の百合がぼつり、ぼつりと木の根元に咲いていた。ウラルはペンダントを手のひらに乗せ、じつと模様を見つめる。 聖域 にしか咲かないという地神の花、八枚花弁の金百合チユル。

「彼らが見えるか？」

アラー八が前を指す。巨木と深い下草の間から何頭かのイツペルスが興味深そうにこちらを見ていた。一頭、二頭、三頭 数える間にもどんどん増えていく巨大な枝角をかけたイツペルスたち。アラー八と同じ鹿毛、あるいはノアー八と同じ黒鹿毛、それに栗毛神秘的な純白のイツペルスもいる。

「見えるようだ。彼らが見えるならお前が 聖域 に入ることを地神がお許しになったということだ。彼らは俺の父祖、代々の守護者たちだ」

「代々の守護者って、みんな死んでるんじゃないか……」

「守護者死すのち風神のもとへ還らず。つまり俺たち守護者は人間やほかの動物のように風神によつて『心の中の世界』へ還らない。俺たちは務めを終えたら地神によつて 聖域 へ還り、若い守護者に知恵を授け、森を守り続けるんだ」

巨木の陰にぼつり、ぼつりとイツペルスの骨が転がっている。

「守護者 もまた 墓守 、ここが俺たちの 墓所 だ」

「アラー八も死んだらここに来るの？」

「ああ。お前はここに入る資格があるから、来てもらえればまた会える」

「ノアー八は？ ここにいる？」

「いや、ここに来るには四年以上守護者を務めなきゃならん。ノアー八は任期一年だったからな」

アラー八がウラルの手を引いた。ウラルの足が最初のチユルスの葉をかすめる。ふうつと水面に体をつけたような感覚と共にむつと

するほどの森の香りがウラルを押し包んだ。青葉と花と霧、ヒュグル森の春のにおい。そこにふっと貴石の丘と同じ不自然なほど静かな、墓所の気配が漂っている。

「みんな、紹介が遅れたが 風神の墓守 ウラルだ」

もはや目の前には何十頭ものイツペルスが押し合いへし合い集まっていた。その中からぴよんとツノのないイツペルスが飛び出し、ウラルらの前へ小走りに駆けてきた。

「彼女は俺の先代、雌イツペルスのエレーンだ」

「初めまして、ウラル。ここに人が来たのは何十年ぶりかしら」

エレーンは小動物のように耳をぴくぴくさせた。ウラルよりははるかに大きい獣なのだが、ほかのイツペルスよりは小さく華奢でかわいらしい。

「風神の墓守 が現れたということは 戦場の悪魔 はどうしたの？」

「彼女の主人が鎮めた。が、かわりに 火神の墓守 が現れた。彼女の主人は荒ぶる 火神の墓守 を鎮めようとしていて、俺たちの主人がこれに協力することになった」

「聖樹 へ連れていくの？」

「そのつもりだ」

さあつと道が拓けた。先に立って歩くエレーンに続き、ウラルとアラールは守護者たちに見守られながら 聖域 の中心部へと進んでいく。

巨樹があつた。周りはすべて巨樹だが、そのどの樹よりも抜きん出た大木だ。遠くから見れば木、近くで見ればもう苔むした岩壁にしか見えない。その周りには多くの苔むしたイツペルスの頭蓋骨が並んでいた。

木にはところどころに裂け目があつて、中がきらきら光っている。どうやら中は大きな空洞になっていて、どこからか光がさしているようだ。その最も大きな裂け目、観音開きの扉ほどもある裂け目の前にウラルとアラールは立った。

うろの中は花園、金色の百合が咲き乱れる大広間だ。エレインが
一歩後ろに下がる。アラーハが中へ入った。ウラルも続く。

「アラーハ」

呼びかけに振り返ったアラーハは、今まで見たことがないほど穏
やかな顔でほえんだ。聖域 に入ってからアラーハは驚くほど
安らいで見える。風呂あがりのようなほっこりした、穏やかな顔。

「そこに立ってくれ。ちよいと失礼するぞ」

アラーハが視界から消えたと思うと、背後からやんわりと抱きし
められた。

「何をするの？」

相手がアラーハだから不安はないが、まさか聖樹の中で愛の告白
というわけではないだろう。身をよじってアラーハの顔を見ようと
すれば、かすかに笑う気配と共に大きな手がウラルの目をふさいだ。
「お前をお前の主人のところに導く。目を閉じて俺の体にもたれか
かってくれ。力を抜いて。そうだ」

アラーハの腕は優しくウラルを包みこみ、触れているところから
暖かな光のようなものがゆるゆると流れこんでくる。アラーハが人
ではなくイツペルスでもなく、陽だまりのようなものに変わってし
まった気がした。このヒュグル森の奥地にはえる大樹の根元で、木
漏れ日の中のんびり昼寝をしているような居心地のよさ。

眠たくなり、ウラルは自然にアラーハの胸へ身を預けた。かすか
な獣脂のにおいと太陽のにおい。耳に当たる毛皮がくすぐったかつ
た。

「よし、目を開けてくれ。俺もすぐに行く」

耳元でささやかれ、ウラルは驚いて身じろぎした。

「すぐに行くって、アラーハ？」

*

目を開けたそこには真鍮色に染まる丘があつた。ウラルのまぶたの上に置かれていたはずの手は失せ、後ろから抱きすくめていたはずの腕や胸も失せている。ウラルは呆然としてあたりを見渡した。

貴石の棺が並んでいる。アラーハの姿を求めて振り返ったそこにはアレキサンドライトの棺があつた。棺の蓋は棺の脇にたてかけられ、空っぽの中が見えている。ふたには「アラーハ」の文字。

「ウラル」

アレキサンドライトの棺の隣には水晶の棺、そこに腰かける大柄な男の影がある。夕日に向かって座り、肩こしにウラルを振り返った影。その穏やかに低い声に胸がぎゅっと縮まった。

「ジン……風神さま」

ウラルはジンの前に膝を折った。

じつと顔を伏せるウラルの肩に手が置かれた。女の手だ。顔を上げれば喪服の女神が目の前に立っている。王都やオーランド町の神殿にある絵画と同じ姿 喪服姿で豎琴を胸に抱き、長い髪を風に揺らす若い女の姿だった。

ウラルがまばたきをする間に風神は再びジンの姿に戻った。

「かしこまらなくていい、こういうことになりたくないから俺はこの姿で現れたんだ。アラーハは来るのか？」

「すぐに行く、とは言っていました。でもどうやって？」

ガタン、と固く重いものの動く音がした。振り返ると、アラーハがアレキサンドライトの棺の中から起きあがるところだ。たてかけられていた蓋にアラーハの腕が当たったらしい。重い音をたててふたが滑り落ちる。

さっきまで確かに空っぽだったはずの棺の中でアラーハは視界を

めぐらし、ウラルとジンを見つめた。棺の外へ出ると、アラーハはその場でジンに向けて膝を折り深く頭を下げる。

「アラーハ、ありがとう。聖域を貸してもらったこと、それにオーランド町でのことにも礼を言わせてくれ」

大きな体を縮めているアラーハの肩にジンは手を置き、立ちあがらせた。

「風神さまのご用命とあらば」

「俺たち神々が不甲斐ないばかりに、多くの人に迷惑をかけた」

ジンがフギンの棺に目をやった。ウラルも振り返って棺を見、目を疑った。

フギンの棺が燃えている。ファイアオパールの棺が輝き揺らめいて、炎の光を放っているのだ。

「もう察しがついているだろうが、フギンには火神がついている。あれはその証だ」

「火神が。どうして……」

「どうしてこんな酷いことと思うかもしれない、でも火神もこの国に良かれと思ってやっているんだ。彼は軍神、武をもってベンベル人からリーグとコーリラを取り返そうとしている」

「でも」

思わず口を挟んだウラルに、ジンは大きくうなずいた。

「そう、俺も同じ意見だ。もし今から武力でどうこうなるなら、みすみすここまでベンベル人の侵攻は許さなかった。それに、もう戦いたくはない。これ以上のものを失いたくはない。リーグ人、コーリラ人はもちろん、ベンベル人の命もな。フギンの人生も火神が横取りしていいはずがない。俺たち神々が仲間割れをしている場合でないのは重々承知しているが、ここは譲るわけにいかないんだ」

戦いを選んだ本物のジンとは違う、けれど根本は同じ意見。アラーハが静かに、深くうなずいている。

ジンが不意に、ふうつと悲しげなため息をついた。

「こんな不甲斐ない神で申し訳ない。俺たちは残念ながらできるこ

とは人とそんなに変わらない。この世界すべてを隈なく見渡せるし、歳を食っているから知識がある、それに多少はこうして影響を及ぼすこともできるが、それだけだ。本当はもっとお前たちに楽しく生きてほしいと思っっているし、そのためにどんどん力を使いたいんだが……。俺が正体を明かしたくなかったのにはそれもある。お前にこの情けない姿を見せたくなかった。お前が神殿で静かに祈りをささげる相手でありたかった」

悲しげな、それでいてどこかさっぱりとした声。隠し事を明かす声、伏せていた本音を明かす声。

「もうひとつ突拍子もない話になるが、お前に明かさなければならぬことがある」

ウラルはジンの目を見つめた。今までの話も十二分に突拍子もない話だったのだが……。

「俺たち四大神は全員が二重人格だ。王都の絵画を見ただろう？」

風神の絵は『祝福』と『憎悪』の二枚組みになっている。今の俺は『祝福』の状態、人々の幸せを祈り祝福する者だ。ところが何かのきっかけで反転し、『憎悪』の状態になることがある。この状態の俺は 墓所の悪魔 と呼ばれる。疫病を巻き起こし、人々を死に至らしめる魔神だ」

墓所の悪魔。ウラルはぎょっと目を見開いた。

「気づいたろう。火神にも『希望』と『狂気』、二つの人格がある。

『狂気』の人格が 戦場の悪魔 だ」

「そんな……」

戦場の悪魔、そして 火神の墓守 となったフギンの顔を思い出し、ウラルは震えた。フギンを破滅へ追いやるうとした 戦場の悪魔 がまがりなりにも神だったとは。しかも目の前の風神にも、そして地神や水神にも 悪魔 の人格がある……。

「心配するな、地神と水神は 反転 しない。 反転 を抑えるのが 守護者 の真の役割なんだ。守護者制度ができてからこの二神は一度も 反転 していない」

ウルルは隣のアラーハを振り返った。アラーハがうなずく。

「巨大な獣はロープで縛り上げて固定していられる、ロープが森の守護者、くさびが聖域にあたる。巨大な魚は樽を作ってその中に入れておける、樽を形作る板の一枚一枚が海の聖域、それをとめる釘の一本一本が海の守護者にあたる。だが、相手が風や炎ではどうしようもない。だから風神・火神は守護者制度が使えず、互いに互いを抑えることで成り立っている、と先代から聞いています」

アラーハの説明に「その通りだ」とジンがうなずいた。

「互いに互いを抑えるための制度が 墓守 だ。 悪魔 の力の及ぶ範囲を制限し、あるいは関係のない者を 悪魔 から守る。そして前にお前が 戦場の悪魔 を正気に戻したように 悪魔 を反転させ、 神 に戻す。ちなみに俺と火神が同時に 悪魔 になることはない」

今までの世界観ががら崩れる感覚に、ウルルはもう何も答えられなかった。真っ青になったウルルの顔をアラーハが横から覗きこむ。

「すまない、今日は一度に話しすぎたな。 戦場の悪魔 が何者か、

墓守 とは何か、これで説明になったか？ 前は聞かれても答えられなかったからな」

「ごめんなさい、頭がぼうつとしてしまって」

思えばさつきからうわ言のようなことしか言っていない。頭を抱えたウルルにジンがほほえみ、ぽんと大きな手のひらをウルルの頭の上に置いた。

「無理もない。戻って休むといい、また何か疑問があれば、ある程度はアラーハやヒュグル森の守護者たちが答えてくれるだろう。それからフギンを追って ジュルコンラ へ向かってくれ。何かあればまた夢に現れる」

わかりました、とウルルは軽く頭を下げた。今は本当に頭がいっぱいいっぱい、倒れてしまいそうだ。

「風神さま、最後に我が主からお尋ねせよと申しつかっていること

があります。よろしいですか？」

アラーハの敬語はなんだか妙だ。敬語など使いそうにない人なのに案外流暢に話す。ジンがアラーハを見、うなずいた。

「火神を止めて、その後はどうなされるのか、と」

「ジンはアラーハをびたりと見据えたまま、唇を引き結んだ。」

「ウルル。フギンに追いついたら、また口を借りられるか」

ウルルはうなずいた。ジンの正体を知った今、もう以前ほどの抵抗はない。

「それなら四人で集まって話し合おう。取れる方法はいくらもないはずだ。そう伝えてくれ」

わかりました、とアラーハが丁寧に礼をする。瞬間、すつと目の前が暗くなった。

間章 2「明かされたもの」 下

ウラルはぼんやりと目を開けた。優しい緑の光が目の前でちらちら踊る。聖樹のうろの中にできた窪みか、あるいは張り出したところか。ウラルはほかより一段高くなっているところに横たえられていた。

頭が重い。体も筋肉痛でぎしぎしきしむ。起き上がりたくなくて、首だけを動かして辺りを見てみれば、すぐそばにアラーハが横たわっていた。チュユルの花に埋もれるようにして両手両足を投げ出し、仰向けになって眠っている。

こんな無防備なアラーハを見るのは初めてだった。どんな時でも警戒しながら途切れ途切れに眠り、物音ひとつで飛び起きるアラーハとは到底思えない。地神と会っているのだろうか。どうやら心がまだ戻ってきていないようだ。

急にさつき感じた恐怖と不安が戻ってきて、ウラルは横たわったまま自分の体を抱いた。風神が一瞬にしてジンに変わるさまが、そして燃えるファイアオパールが目の奥に蘇る。

俺たち四大神は全員が二重人格だ。

火神の「狂気」の人格が 戦場の悪魔 だ。

「ウラル、戻ってきてるか？」

降ってきた声に我に返る。いつの間にかアラーハが目覚まし、ウラルを覗きこんでいた。アラーハの体に染みついたのだろうか、チュユルがむっと香る。

「アラーハ……」

「そんな不安げな顔をするな。そんなにショックだったのか？」

体を起こしたウラルの頭をアラーハの大きな手がなでる。ウラルは両手で顔を覆った。

「何が不安なのか私にもよくわからない。でも今は……」

「大丈夫だ、時間がたてばゆっくり染みこんでくる。今は無理をしなくていいんだ」

「アラーハは守護者になったとき、不安は感じなかったの？」

「俺にとつては守護者になるために戦うのが当たり前だったからな。なれたときは、ただただ嬉しかった。そこから不安がなかったわけじゃないが、この通り 聖域 には先代たちがいるし、ほかの森にはほかの種類の守護者がいる。俺が仕えているのが安定した地神だからというのもあるだろうが、お前のような不安は感じたことがないよ」

けれど、ウラルの不安を少しでも理解しようとしてくれているのはわかる。アラーハが言葉を話せるのがこんな大きなことだったとは。

ウラルはチュユルの紋章が刻まれたペンダントを手のひらに乗せた。そこにそつと唇を押し当てる。

「きれいなところね、ここ」

少し落ち着きを取り戻してあたりを見回すと、アラーハはほつとした様子でほほえんだ。

「お前の 墓所 もきれいだった」

アラーハにうながされて立ちあがる。 聖樹 を出たところには エレーンをはじめ、たくさんのイッペルス守護者たちが待っていた。夢の中に迷いこんだ気分ではんやり歩いていけば、ウラルの指先、足先を、あるいは鼻先、口元をイッペルスたちがかすめていく。これらの体は透き通っていて、触れてもちよつと風が吹いた程度にしか感じられなかった。興味しんしんでのぞきこんでいるのか、あるいは祝福してくれているのか。こんな大きな獣に至近距離で囲まれているのに不思議と嫌な感じはしない。

「そうだ、アラーハ。この中に私以外の 墓守 を知っている守護者はいない？」

アラーハが首をかしげて隣のエレーンを見やる。

『直接知っているかはわからないけど、年代がかぶっている守護者は何頭かいるはずだわ。クレーセ!』

少し離れたところにいた漆黒のイツペルスが顔をあげた。

『いかにも、俺は騎士アレントが 火神の墓守 となった時代の守護者だ。だが国境は遠いし、俺は誰かさんと違って森をほとんど離れなかったからな。墓守 についてはほとんど知らん。知っているならシラীগじゃないか?』

クレーセの視線の先で純白のイツペルスがウラルを見つめている。

『ええ、僕はクレーセとアラール、ちょうど中間の年代の守護者です。横暴な王が国を治めていた時代でした。崩御とともにその名は抹消され記録も全て焼かれたというので、あなたは知らない歴史でしょう。王は戦いを好み、コーリラ国へ攻め込んで、さらってきたコーリラの美女の血で入浴をたしなんだといいます。これを嘆いた風神が 墓所の悪魔 と化した時代がありました』
ウラルは思わず喉もとを押さえた。

「墓所の悪魔 が現れると、どうなるんですか?」

『墓所の悪魔 が 反転 する、あるいは 墓守 を介した火神の力を受けない限り決して治らない、おそろしい病が流行します。僕は地神の命で 火神の墓守 をお助けしました。ちょうどアラールがあなたを助けているように』

ウラルはアラールを振り返った。アラールもまたウラルを見つめている。

「最後はどうになりましたか? ちゃんと王は斃れて、墓所の悪魔

は 反転 したんですよね?」

ええ、とシラীগはうなずいた。何か言いたげに口を開き、けれどすぐに何も言わないまま悲しげに口を閉ざしてしまう。

「何かあったんですか?」

『こんなことをあなたに言うのは酷かもしれない。けれど僕がここで言わなければ、おそらくあなたにはもう聞くチャンスがないんでしょう。ええ、暴君は 悪魔 の病を得て崩御し、 悪魔 は 神

に戻りました。そしてその後、墓所の悪魔の依代となつていた墓守の娘は狂死したんです」

「狂死？」

『飲まず食わず眠りもせず。一言も話さず、何日も何日も途切れることなく涙を流し、衰弱しきって死んでいきました』

「そんな……」

さつき 墓所で感じた不安がまた蘇ってきて、ウラルは震え始めた。アラーハの太い腕がウラルの肩を抱く。

「まさか、フギンもそんなことになるんじゃない……」

一度 悪魔を身に宿せば、依代になつた人の精神は破壊されてしまうのではないだろうか。フギンも同じ墓守だ。今は火神が体に乗っ取っているが、フギンが戻ってくれば同じように狂い死ぬのではないだろうか。

「おそらくそれは事故だ。フギンはちゃんと戻ってくる」

「もしそうだったら？ それでフギンが戻ってこられないから、火神がフギンの体に乗っ取ってるんじゃないの？」

アラーハの顔がこわばつた。シラীগ、エレーンと顔を見合わせ、再びウラルに向き直る。

「仮にそうだとしても、神々は必ず何か策を講じてくださるはずだ。ひとまず今はフギンを追おう。火神に直接尋ねるほかないだろう」

アラーハの声に力なくうなづくことしかできない。もしフギンが狂死するようなことがあれば、それはウラルの責任なのだ。ウラルがあの場合で突き放してしまつたから。宿へ戻らなかつたから……。

不意に隣でエレーンが身をゆすり、人間の娘に変身した。

『随分しんみりしちゃったわね。わからないことを暗い顔で話していてもしょうがないわ』

アラーハとそっくりの毛皮の服を着た、ウラルと同じ年頃の娘。華奢な手がウラルの頭をなでるが、手の感触はなく、ただふわふわと風が吹きつけるような感じがあるだけだ。

「変身できたの？」

『ええ、この姿になるのは何十年ぶりかしら。本当はおばあさんな
んだけどね、一度死んでここに来ると守護者になった当時の姿に戻
るみたい』

エレーンが後ろを振り返る。集まっていた守護者たちが一斉に人
の姿に変身した。そろいもそろって筋骨隆々の大男ばかり、女はエ
レーンだけだ。

『私は唯一の雌イッペルス守護者なの。前の守護者が事故で死んだ
あと、地神が私に守護者になれとおっしゃったのよ。滅多にないこ
となんだけどね』

林立する大男たちにどきまぎしているウラルにエレーンがいたず
らっぽくウインクする。

『おかげさまで私が死ぬまで誰も守護者争いを挑めなくてね。私の
死後は荒れたわねえ、一年か二年で守護者が交代する時期が十数年
も続いちゃって。そこを勝ち抜いたのが森一番の暴れ者、アラーハ
だったというわけ』

「エレーン」

アラーハが苦笑まじりの声を出したが、エレーンに話を途中で切
る気はなさそうだ。

『そりゃあもう凄かったわねえ、秋になったらどんな雄イッペルス
でも突つかかって叩きのめして。この森のイッペルスのほとんどが
アラーハの血を引いてることからもわかるでしょう？ とんでもな
い暴れ者だったの。でもジン君が来てから変わったわね。本当に丸
くなった』

「エレーンはジンを知っているの？」

『直接は知らないけど、アラーハからたくさん話を聞いてる。昨日
のように覚えてるわ、アラーハが困り果てた顔で、小さな男の子が
迷いこんできたって相談しに来たときのこと』

アラーハは黙って苦笑している。

『最初は邪険にしたアラーハも、一年もたつころには立派な養父
になったな。あれには俺たちも驚いた。あのやんちゃ坊主がなあ』

黒づくめの精悍な大男、神話時代の守護者クレーセが低い声で笑っている。本当になあ、とその場にいた守護者たちがアラー八を小突き始めた。

「さて、ウラル。エヴァンスがどうやらお前を探しているみたいだ」
さすがに恥ずかしかつたのか、アラー八が強引に話題を変えた。
いきなりエヴァンスの名前が出たのにウラルは驚き肩をこわばらせた。

「あの男のことだから帰り道くらいは把握しているのかもしれないが、俺の基準からすると迷っているとしか考えられん動きをしている」

「え、どうしてわかるの？」

「ああ、話していなかったか。聖域 にいれば森の守護者は森にいる全ての生き物が大体どこにいるか把握できるんだ。特に人間に対しては感度が高い」

うそでしょ、とウラルは目を見開いたが、アラー八はただ苦笑するだけだ。

「地神は地面に足の触れている生き物全てを把握しておられるからな。守護者は 聖域 にいればそのお力を貸していただけるというわけだ」

隠れ里の長老の力のようなものかしら、とウラルは首をかしげる。あの時、長老は遠見の鏡に村人全ての居場所を映し出していた。

アラー八が不意ににやりと笑った。

「ついでに言えば話しかけることもできる。エヴァンスを迷わせて殺す絶好のチャンスだが、どうする？」

次はウラルが苦笑する番だった。

「そんな嬉しそうな顔して。私の返事くらいわかってるくせに」
「わかった、適当に誘導しておこう」

アラー八は適当な巨木の根元に腰をおろし、頭をうなだれた。

「静かにしていてあげてね。今話しかけると、いくら彼でも混乱してしまうから」

エレインがウラルの耳元でささやく。ウラルはうなずき、また心と体を切り離してしまったアラーハを見守った。

(エヴァンス、聞こえるか)

ふっとアラーハの音が耳をかすめる。鼓膜の震えない声。エレインを見てみれば「大丈夫よ」と言いたげなウインクが返ってきた。耳をぴくぴくさせているところを見ると、エレインをはじめとした守護者たちにもこの声は聞こえているようだ。

(誰だ)

エヴァンスの声まで聞こえてくるとは思わなかった。アラーハの声に比べれば小さく、けれどはつきりと聞こえてくる。

(ウラルのことなら心配いらぬ。方向がわかるなら森の隠れ家へ向かえ。夜にはウラルを連れていく)

(……ウラルの言っていた『精霊』か?)

(違うが、似たようなものだと思ってくれていい。樹形や獣道はあてにするな、この森は迷いやすいからな。太陽と星、それから馬の勘を信用するといひ)

エヴァンスが何かを言い返す声がふうつと遠ざかった、と思ったとたんアラーハが顔をあげた。口元には笑みがある。

「どうしたの? にやにやしちやって」

「につつき男の命運をこの手に握っていると思うとな」

「冗談めかした口調に思わずふきだした。」

『ジン君を殺した人?』

「ああ、そうだ」

『本当に穏やかになったな、アラーハ。なぜ殺さない?』

クレイセの問いに、アラーハの口元がふつとゆるんだ。

「ウラルが止めるからな」

アラーハの大きな手のひらがウラルの頭の上に載せられる。どっしりとした重さと共に「ありがとうな」と言いたげな暖かなものが流れこんできた。

「ウラル、そろそろ行くか。ぐずぐずしていると真っ暗になる。ほ

かに聞いておきたいことはないか？」

ウラルはうなずき、アラールハに手を取られて立ちあがった。

『アラールハをよろしくね。いつまたやんちゃ坊主に逆戻りするかわからないから』

『今度こそハツピーエンドになることを心から祈っています。僕らにできることがあれば遠慮なく言ってください』

エレーンとシラーグの声にうなずき、獣の姿に戻ったアラールハの背をまたぐ。一度は人の姿になっていた守護者たちがイツペルスの姿に戻った。

巨木の間を泳ぐように駆け始める。アラールハと共に 聖域 の境界をまたぐと同時に、隣を駆けていたエレーンの姿が、見送りに来てくれた大勢の守護者の姿が消え失せた。

間章 3 「俺は守護者だ」 上

深夜の森にノックの音が響いた。家に明かりはついていないが、人が出てくる気配はない。隠れ家に入ったウラルにアラールが続く。二階にあがれば暖炉の前にエヴァンスが立っていた。

明かりもついていたいいるだろうとは思っていたが、実際ここにいるのにはやはり驚いてしまう。まさかこの隠れ家にエヴァンスを招くことになるとは。

エヴァンスが口を開く。金の髪が暖炉の炎に照らされ揺らめいた。
「昼間の声の主か」

鋭い声。「ああ」と短く答えるアラールの声も低かった。

「ウラル、紹介してもらえるか」

「ウラルの父だ」

ウラルが答える前にアラールが名乗った。名前は言わない。「名前を伏せてエヴァンスと話してみたい」とウラルもしばらく名前を呼ばないよう言われていた。

エヴァンスは無表情のまま黙ってそこに立っている。けれどさすがに驚いたのか、心なしかまばたきが増えていた。

「見ての通り血はつながっていないがな。俺とウラルはしばらく二人で旅をしていたことがある。そのときお互いの関係を説明するのが面倒だから、父と娘ということにしていたんだ。以来、俺はウラルのことを実の娘のように思っているし、ウラルも実の父のように慕ってくれている」

エヴァンスの視線がウラルに向く。無言の問いかけにウラルはうなずいてみせた。

お茶でもいれたほうがいだろうか。二人の雰囲気はぴりりと険しい。だが、ウラルはここから離れたくなかった。台所は部屋の隅。そこで湯を沸かし、軽食の準備をしても二人の話は十分聞こえるが、今は二人のそばにいたかった。

「ちなみに、俺にはウラルのほかにも息子がいてな。こちら血はつながっていないんだが」

アラーハはしばらく言葉を続けなかった。自分が「息子」の話を持ち出したのを忘れてしまったかのように、黙って暖炉を見つめている。

やっぱりお茶をいれたほうがいいかもしれない。ウラルがやっと「お茶いれる？」と声を出そうとした、その「お茶」と「俺の」とアラーハが言い出した言葉が重なった。

「俺の息子の名は、ジンだ」

あわてて口をつぐんだウラルに構わずアラーハが続ける。瞬間、ぱりりと空気が変質した。

アラーハの様子がおかしい。止めなければ。だが動けない。

エヴァンスが深く息を吸い、ぱりりと背筋を伸ばしてアラーハの目を見据えた。

「……息子の仇討ちに来たわけではなさそうだ」

「ああ。憎んではいるが、もうお前を殺したいとは思わない」

びっしり鳥肌がたった腕をさすりながらウラルは二人を見つめた。これは殺意ではない。殺意に似た別のものだ。けれどそれは憎しみでも怒りでもなく　いや、憎しみや怒りなのかもしれない。アラーハの内に渦巻く多くの感情、悲しみや祈りや、あるいはやっとエヴァンスと話せる喜びや……。部屋に充満しきってもまだ足りないほどの感情の波。

「俺はジンを十の歳から育ててきた。二十六年、共にいた」

「ごとりと暖炉の中の薪がくずれ、アラーハの瞳孔が赤く光る。」

「エヴァンス。ずっとお前と話せたら一番に言おうと思っていた。ジンの最期を、お前の口から聞かせてくれ」

一度強く輝いた熾火が落ち着き、部屋が暗く沈む。さすがのエヴァンスも迫力に押されたようで、アラーハから目をそらし暖炉の炎を見つめた。

「それを聞くために、わたしをここへ来させたのか」

「森で迷っていたんだらう？ 見殺しにしようかとも思ったんだが、ウラルに止められてな」

エヴァンスがかすかに苦笑した。本当に迷っていたらしい。

「どこから見ていた」

「森の奥だ」

「ウラルも一緒にいたのか」

「ああ」

青い目が鋭さを帯びた。

「お前は何者だ？ ウラルの父、ジンの父、それはわかった。それ以外にお前は何者だ？ 名を聞かせてもらおう」

「この話が終われば明かす」

エヴァンスはウラルを見たが、ウラルが目をそらすとそれ以上あえて尋ねようとはしなかった。ため息。

「道案内の礼にさっきの質問に答えたいところだが、わたしはあの戦で大勢のリーグ人を斬った。わたしはその大多数の名を知らない」
「黒いマントを着た義勇軍の大將だ。歳のころはお前と同じ、背格好もよく似ている。フギンからはお前と激戦になった末、斬られたと聞いている」

沈黙がおりる。当時を思い出すようにエヴァンスが目を細めた。腰につるした剣の鞘を握り、離す。今まで不思議と意識しなかったが、おそらくこの剣がジンの命を奪ったのだらう。

「この家と、隣の家の中はひととおり見させてもらった。隣の家にルダオ要塞周辺の地図があったな。ジンが指揮をとったのはルダオ要塞近くの別の要塞だな？ 山の中腹にある、周りの森に山ほど罠がしかけられていた」

「その通りだ」

「あの要塞のことはよく覚えている。その前に襲撃したルダオ要塞より死人が出たからな。後から敵が千人たらずだったと知って驚いたものだ。何人かと切り結んだ。たしかに、敵の大將らしき男とも剣を交えた。たった一人で打ちかかってきて、しかも若かったら、

戦っている最中はただの將軍だろうと思っていたが……。あの男を倒してから一気に崩れたことといい、今の話といい、あれがジンだったのだろうな。マントは着ていなかったが、黒い皮よろいをつけて、黒い馬に乗っていた」

アラーハが肯定のうなずきを返した。

そうだ、黒マントはウラルが持っている。ジンが戦いるときに着ているはずがない。

「わたしから見れば彼は愚将だった。わたしなら勝ち目もないのに斥候を殺して敵を挑発などしない。少々時間がかかっても正規軍が出てくるのを待って挟み撃ちにするだろう。その方がわたしたちも打撃を受けたはずだ。要塞での戦いでも相手はこちらを甘く見すぎている。もう少し、特にゴーランの力を知っていれば戦いは長引いただろう」

アラーハは口を挟まず、黙ってエヴァンスの言葉を待っている。

「だが、大将としてではなく一人の男としては脅威だった。同じような服装の一団の中にいたにもかかわらず、大将であるわたしにまっすぐ襲いかかってきた。こちらへ斬りかかってくる者をおそろしいと感じたのは久しぶりだ。わたしが斬られていてもまったく不思議はなかった」

「だが、ジンは敗れた」

「そうだ。わたしがこの剣で、あの男の胸を貫いた」

アラーハが目を閉じた。固く固く目を閉じ、かすかなうなり声を喉から漏らした。

「アラーハ……」

思わず呼んでしまったから、ウラルはしまったとエヴァンスを振り返った。

アラーハが目を開き、驚くほど穏やかな顔でウラルを見つめた。

「ウラル、いい。名前を伏せて聞きたいことはもう聞いた」

「まさか」

低い声。ノアーハの変身が頭に浮かんだに違いない、さすがに顔

色を変えたエヴァンスにアラーハは静かな笑みを向けた。

「そうだ、俺はアラーハだ。こんなことは起こるまいと思っていたが、地神に感謝するほかがないな。座って茶でも飲みながら話そう。酒のほうがいいか？」

アラーハはヤカンに水をくみ暖炉の上につるすと、どさりとソファーに腰かけた。今までずっと立ち話だったのだ。エヴァンスはその場に立ちつくしたまま、険の消えた顔つきでアラーハを見つめている。

急に膝から力が抜けて、ウラルはその場にへたりこんだ。

*

「（いや、ちよつと待つてくださいスー・エヴァンス。あなた冗談言えるお人でしたか？）」

屋敷の入り口でシャルトルはすっかりパニックになっていた。真夜中に主君がウラルと子ども突然消えたかと思えば、指示通りに屋敷へ戻つても音沙汰なし。やつと帰つてきたと思えばとんでもない大男を伴つていて、しかもそれがあのアラー八だと真顔で言われるのだから混乱して当然だ。だからといって「あなた冗談言えるお人でしたか」はないと思うのだが。

「（わたしもさすがに驚いた。まさかウラルを捕らえたとき監獄で大暴れしていたあの男と、アラー八が同一人物だったとはな。しかもウラルの父親なのだそうだ）」

「（ウラルの父親？ 本当にはばらくお会いしないうちに冗談がうまくまりましたね、スー・エヴァンス。まさかウラルさんと結婚する気になったから父親の許可をもらいに行つてきた、なんて言わないでしようね？ あの夜、僕が寝ている間にウラルさんと何があつたんです？）」

「（シャルトル、お前は本気で私が冗談を言っていると思いたいらしいな）」

笑いを押し殺しているウラルの横にはティアルースがあっけに取られた様子で立っている。ベンベル語がわからないアラー八も困り顔で立ちつくしていた。門番はティアルースともう一人しかいない。残る一人はミュシエと買い物に行っているようだ。

昨晚、あれからエヴァンスは拍子抜けするほどあっさりアラー八のことを信じた。「初めに目があった時からこの男と戦ったことがあると思っていた」とも言っていたし、対峙した者だけがわかる気

迫というものがあるのだろう。それに、エヴァンスにとってここは常識の通じぬ異国。「リーグにはそんなこともあるのだろう」と納得してくれたようだ。

「シャルトル、お前とはこの姿でも一度会っているだろうに。変身してみせるのが一番か」

ウラルのただとどしい通訳を聞いたアラール八が苦笑し、人が来ていないのを確かめるとイツペルスの姿になった。

シャルトルの顔から血の気が引く。悲鳴すら上げられなかったようだ。二人の門番が即座に剣を抜き放ち主君を守るように立ちふさがった。

「（化物！）」

「（お前たちにかなう相手ではない。剣をおろして下がれ！）」

ティアルースが打ちかかる。寸前、エヴァンスの怒声が飛び、ティアルースは危ういところで踏みとどまった。

「ベンベル人なら驚かないというわけじゃなさそうだな。エヴァンスを基準にした俺がバカだった」

苦笑のつもりか鼻を鳴らしたアラール八を、驚いたことにティアルースが今まで見たことないほど苛烈な視線でにらみつけた。

「（森の化物。獣に変身する人間。俺の友人はお前に重症をおわされた）」

エヴァンスが眉をひそめ、アラール八に通訳して「心当たりはあるか」と尋ねた。

「それは俺の甥、ヒュグル森の守護者だった獣だ。三日前に死んだそいつに代わって今は俺が守護者を務めている」

アラール八が人間の姿に戻る。険しい顔、鋭い眼光。大柄な自分より頭ひとつ大きな男、いや森の主から見下ろすように睨まれ、ティアルースが息を呑んだ。

「お前に森の木を切ろうとする友人がいるなら伝えてくれないか。森の木を片っ端から切るのはやめてくれ。お前たちの国ではどうだったか知らないが、この国の森は人間のものじゃない。地神のもの

だ。地神の命を受けて俺たち 守護者 が管理しているものだ。もしお前たちがこのまま森を好き勝手にしようとするなら、俺のほうも強硬手段をとらせてもらう」

ティアルースの顔から萎縮が怒りに突き飛ばされ失せるのがわかった。

「（今まで何人も殺しておいて何を言う）」

アラーハが唇の端に薄い笑みをひらめかせる。アラーハもまたアラーハの死に様が目の奥に蘇ったのかもしれない。

「俺は今までの若い守護者とは違う。老獪な獣をなめないでくれ。ある一定のところを踏み越えたら、俺は霧をおこしてお前たちを迷わせる。心配するな、最初はちゃんと誘導して帰してやる。だが、もし森で火事が起こったら森に立ち入るな。焦げた木々のさらに奥へ進んだ者は、もう二度と帰さない」

淡々とした声にウラルの方が震えあがった。守護者の力はどうやらウラルが思っている以上に強大らしい。

「（ティアルース、その通りに伝えてやれ）」

アラーハの言葉をベンベル語に翻訳した後、続けたエヴァンスにティアルースが抗議の声をあげた。

「（異教の悪魔に屈するおつもりですか、スー・エヴァンス!）」

「（そんなつもりはない、我らが神は偉大だ。だがこの男に力があるのも確かだ、立ち向かうには十分な準備と力がある。お前たちも覚えているだろう。こやつはウラルが監獄で捕まった時、南門で暴れていた男だ。五十人がかりで火薬を持ち出してもろくな傷を負わせられなかった怪人だ）」

ぎよつと門番二人が顔を見合わせた。彼らもあの場にいたらしい。「アラーハ、あの時そんな大変なことになってたの?」

「なにがだ?」

ベンベル語を解さないアラーハは首をちよつとかしげるだけ。いくらアラーハでもまさか真正面から戦ったわけではないだろうが…

「（この国にはこの男のためだけにそんな労力を裂く余裕はない。ならば今は捨て置くべきだろう。騎士権を剥奪された今のわたしに命令は下せぬ、お前から噂の形で広めるしかあるまい）」

ティアルースががっくりと肩を落とし、ようやく了解の返事をし
て引き下がった。

これで満足かと言いたげにエヴァンスがアラーハを見る。アラー
ハがうなずき、ウラルを振り返った。

「帰るか。エヴァンス、俺はいろいろと用事があるし、ウラルも疲
れている。出発は何日か待ってもらっても構わないか？」

「このままウラルを連れて逃げるつもりだとばかり思っていたぞ」
エヴァンスが薄く笑う。アラーハも軽く笑って応じた。

「俺とウラルは森の隠れ家にいる。用があるなら訪ねてくれて構わ
ない」

アラーハがきびすを返す。ウラルも軽く会釈して門を出た。

そういえばミュシエに会い損ねたな、とウラルはエヴァンスの屋
敷の隣の小ぢんまりした家を見あげた。ミュシエがアラーハを見た
らどんな顔をしただろう。「今日は巨人族の彼も一緒なのね」とウ
ラルに笑いかけてくれただろうか。

「市場で野菜でも買って帰るか。サラダを作ってくれ」

よろこんで、と答えようとしてウラルは首をかしげた。微笑を浮
かべたアラーハ、その優しい目にかげりがあった。

「どうかしたの？」

アラーハが足を止めた。悲しげな目でウラルを見、次の瞬間、ウ
ラルはアラーハの大柄な体に包みこまれていた。

「アラーハ？」

「お前はいつもお見通しだな」

抱擁は一瞬だった。けれど今までにないほど力強かった。まっす
ぐ覗きこんだアラーハの目は悲しい色を帯びている。

「ウラル。俺は四日後、ほかの雄イッペルスから挑戦を受けようと
思っている」

「それって、まさか」

「守護者は地神の許しを受ければ森に霧をおこすことができる。雷を落として火事を起こすこともできる。だが、そうするためには、守護者が 聖域 にいる必要があるんだ」

「守護者をおりるつもりなの？」

それはすなわち、人の姿を失い、人の言葉を失うということだ。

「俺を倒せるほど強い雄がいれば、そうするつもりだ。そして今やつらに言ったことを実行させる。だが、もし俺を負かせるほどのイツペルスがいなければ」

アラーハの大きな手がくしゃりとウラルの頭をなでた。

「俺は、森に残るつもりだ。いくらさんざん森をほつぽらかして旅に出ていた俺でも、さすがに今、森を離れることはできん。エヴァンスがうまく脅してくれたようだが、やつらは森へ入ってくるだろう。やつらには地神への畏敬がない」

アラーハはもう、今にも泣き出しそうな顔をしていた。死んだジンを前にしても見せなかつた顔だ。アラーハがこんな顔をするのかとウラルは素直に驚き、それからじわりと胸に沁みてきた悲しみに顔をゆがめた。

ジンが死んだときも、その後も動乱も。ずっと一緒にいて、大きな体で守ってくれたアラーハ。

ウラルは無意識のうちに精一杯の笑みを作っていた。

「アラーハ、娘離れがそんなに悲しい？ 娘はいつか嫁いで父親のもとから去っていくものよ、別に私はエヴァンスに嫁ぐわけじゃないけど。私もお父さん離れるから。ね？」

アラーハは一瞬きよんとし、それから低い声で寂しげに笑った。「止められるもんだとばかり思っていたが。そうだな。それにまだ結果が決まったわけじゃない。たくさん野菜を買って帰って、たくさん話をしよう。どちらにせよお前とはまたしばらく話せなくなる」

ウラルはうなずき、また無理に笑みを浮かべてみせた。アラーハはもう一度ぎゅっとウラルを抱きしめ、それから市場へ向かってゆ

っくりゆっくり歩き始めた。

間章 3 「俺は守護者だ」 下

翌日にはエヴァンス、シャルトルに伴われてミュシエが隠れ家を訪ねてきた。きつと笑顔で訪ねてくれると思っていたが、予想に反してミュシエの顔は硬かった。

「(ウラル、元気そうで本当によかったわ)」

画材カバンをシャルトルにあずけ、ミュシエはそつとウラルの手を取った。

「(こんなに酷いことになるなんて。私、あなたたちが憎しみあっているでも最後にはきつとうまくいくと思っていたの。あなたがスー・エヴァンスを憎んでいることは知っていたけれど、あなたにナイフが握れるとは思えなかったから。なのに、あなたたちが本当に殺しあうことになるなんて。ああ神様、この二人が何をしたっていうんでしょう)」

「ムソセ・ミュシエ(ミュシエさん)」

「(後悔だけはしないでください、なんてよく私も言えたものだわ。スー・エヴァンスに与えられた裁きを知る前だから言えたわけなんだけど。あなたにとっては取るべき道なんてほとんどなかったんでしょう? あれからも、その前も。ずつとずつと)」

思わず口を閉ざし目を伏せたウラルの肩に、アラーハがそつと手を置いた。

「玄関で立ち話もなんだ。あがってもらったらどうだ?」

ミュシエは画材カバンの中にクロッキー帳を入れてきていた。ウラルの姿を木炭や水彩で軽く描写した習作をたくさん綴じたもの、ウラルがエヴァンスの家でメイドをしていたときのものだ。まずは熱に浮かされベッドに横たわるウラル、警戒心から目を光らせるウラル、それからシャルトルと並んで笑うウラル、花を持ってはにか

むウラル、窓からどこか遠くを寂しげに見つめるウラル。アラーハが興味しんしんでウラルの肩ごしに覗き込んでいる。

エヴァンスとシャルトルはウラルが閉じ込められていた地下室から抜け出す寸前に描いた絵を見ていた。ウラルが慣れない筆で描いたジンの、リゼの、サイフォスの、マライの死に様。あまりにつたなくて、もはや何が描いてあるのかウラル自身にもわからない。ただかろうじて人が刺されたり、首をつられたりしていることだけがわかる、黒を基調にした何枚かの絵。

「（ウラル、あなたには絵心があるわ）」

ミュシエは部屋の隅にイーゼルを立て、四人の様子を木炭でひたすらデッサンしていた。

「（またあなたの絵を見せて。あなたに何があったのか描いてみせて）」

三人が帰った後もウラルはもらった絵を胸に抱き、アラーハと一緒に長いこと眺めていた。

「アラーハ。こうしてちゃんとお別れできるって、貴重なことよね」「どうしたんだ、やぶからぼうに」

「ジンもお別れできたようで、できてないし」

「ああ」

「サイフォスやりぜ、マライ、ネザとも」

「そうだな」

「もっとみんなと話をしたかった。もっと一緒に過ごしたかった」

「……」

「ごめん。ちよつと心細くなって」

「すまない」

「アラーハは死ぬわけじゃない、それが救い。私は大丈夫。だからめいいっぱい戦ってきて」

「本当にすまない……」

イツペルスは吼えた。待たせた、と声を張りあげたようだ。馬のいななきやシカの求愛歌は似ても似つかない声。かつて彼がエヴァンスに向けた怒りのうなり声とも、オオカミの遠吠えとも違う。大太鼓の音色さながらだ。どろろううう、と低い威厳をともなった吠え声が巨樹の間を吹きすさぶ。

受けた雄の一団はどよめきに震えた。足をすくませる者、畏怖に肩を震わせる者、武者震いに足を踏み鳴らす者。

アラール八は王なのだ。地神の祝福を受け、三十年もこの森を統べた守護者。堂々と七頭の雄を見返すアラール八の姿は威厳にあふれている。

アラール八がツノを下げ、鋭く前に突き出したケンカツノを雄たちに向けた。応えるように、一斉に雄のツノが下がる。いきりたった一頭が打ちかかってきた。二頭のツノががつきとからむ。アラール八が足に力をこめると、雄も応えて力を強めた。アラール八が不意に、すつと力を抜く。たたらを踏んだ雄に討ちかかり、一気に押す。

勝敗がついた。まずは一頭。アラール八は負けを覚悟するようなことを言っていたが、今の彼にそんな様子は微塵もない。おのれを誇示するかのように尾を高く上げ、二十四にも枝分かれした巨大なツノを堂々とかかげている。

来い、とばかりにツノを下げる。二頭目が踊りかかった、直後、アラール八に跳ね飛ばされていた。迎え撃ったアラール八が深く身を沈め、相手の腹の下に枝角をさしこむや否やおそろしい勢いで枝角を振ったのだ。前にエヴァンスを馬ごとひっくり返したことがあったが、この力はこの戦いの中で培われたに違いない。

三頭目、四頭目。アラール八は次々と挑戦者を退けていく。が、アラール八も年だ。今までそうは見えなかったが、やはり老いはアラール

八に忍び寄っていた。息を切らし始めたアラール八に五頭目が打ちかかる。これも難なく退けたが、六頭目は苦戦した。相手はアラール八に負けず劣らず大柄なイツペルスだ。がっきと互いのツノをからませ、互いに一步もゆずらぬ力比べ。なんとか勝ったものの、アラール八はもう見るからにフラフラだった。

七頭目、最後の頭目アラール八に打ちかかった。足をもつらせつつアラール八が応戦する。ぱっと敏捷に飛びのく若いイツペルス、アラール八が後ろ足で立ちあがり、体重をかけてツノを振り下ろした。相手が受ける。アラール八が押す。力比べになる。若いイツペルスがふりほどき、アラール八の側面から再び打ちかかる。アラール八の蹴りが飛ぶ。激しい蹴りあいになる。ぐうう、と人間とも獣ともつかぬ声でアラール八がうめく。

じわりじわりと、しかし確実にアラール八は押されていた。相手はその若さからは考えられぬほど落ち着いて、慎重に、疲れきったアラール八を攻め立てる。これが一頭目の挑戦者ならアラール八は難なく退けただろう、しかし状況が悪かった。

尖った枝角で腹を何箇所も傷つけられ、これ以上ないほど息をきらせて、とうとうアラール八は挑戦者に背を向けた。負けを認めただ。

挑戦者のイツペルスは傲然と六頭のイツペルスを振り返った。立派な枝角を下げる。守護者に勝った挑戦者は、他の挑戦者と戦う。これを全て打ち倒して初めて守護者となるのだ。もしこの挑戦者がどこかで負けた場合、一晩おいて疲れを癒し、守護者との挑戦者の二頭で再び争うことになる。

若いイツペルスはさっきまでの慎重さはどこへやら、信じられぬほどの勢いでほかのイツペルスに打ちかかった。この挑戦者はアラール八ほどの怪力ではないが、状況判断に優れているらしい。緩急をつけ、相手の苦手とするペースでの確に打ち倒す。

アラール八は四肢を折り、息を整えながら、じっとその若いイツペルスに目を注いでいた。負けてくれと祈っているのか、あるいはこ

のイツペルスなら森を任せても安心だと思っているのか。そしてとうとう、挑戦者がその場のイツペルス全てを打ち負かした。

ヒュグル森守護者の座を譲るときが来た。アラーハは立ちあがり、そつと自分のツノを相手のツノに打ち合わせた。翠の光が、アラーハの思念が、枝角から枝角へと受け継がれる。

ゆらり、と挑戦者の姿がぼやけ、アラーハよりはやや小柄な、若い、けれど同じ赤茶の毛皮をまとった大男が姿を現した。

「俺はヒュグル森守護者、イツペルスのウズーム。これより地神の命にてアラーハよりその任を引き継がん！」

頼んだぞ、と言いたげにアラーハがウズームを見つめた。ウズームはアラーハに向けて静かに、深く頭を垂れ、聖域のある方へと去っていった。

離れたところから見ていたウラルにアラーハがゆっくり、ゆっくりと歩み寄る。

地神がウズームに力を与えた。あいつになら森を任せられる。

再び言葉を失い人の姿を失ったアラーハの長い首を、ウラルはぎゅっと抱きしめた。疲れきったアラーハはその場にくずおれ、けれど穏やかな面持ちで、ウラルの肩にくったりと頭をもたれかけた。

地神がお前と一緒にに行けと言ってくださった。これで心置きなく一緒にに行けるな。行こう、南へ。

間章 3 「俺は守護者だ」 下（後書き）

第三部 第四部間章 完 第四部へつづく

序章 「大いなる壁」

「こんなことになってるなんて。三年前はこんなじゃなかったのに……」

丘の上からの景色にウルルは息を呑んだ。

アラス地区を流れるフェラスルト川の土手に大量の土囊が積みまれている。そして大勢のリーグ人が鞭打たれ働かされていた。おそらく大半は戦で捕虜にされたリーグ国軍の兵士だろう。

「あの壁が完成したときが、リーグの終わりだ」

「どういうこと？」

「ベンベルの常套手段だ。あの壁で南部の一部をリーグ国全体から分離する。そしてそこに圧力をかけ、恨みをあおる。そしてその恨みを比較的楽な暮らしをしている北部に向けさせる」

あまりに淡々とした声だった。思わず振り返れば、青い目は普段以上に冷え冷えとした光を放っている。

「内乱を起こすってこと？」

「そうだ。だが、それだけでは少数かつ疲弊した南部が負ける。そこで我々ベンベル人が影から手を下す。まずは麻薬を栽培させて疲労をごまかす。それから改宗を迫り、改宗した者には減税する。子どもを教会に差し出させ、その子どもを洗脳していく。むろん北部の反撃もある程度妨害する。そして南部が勢力を拡大していくにつれ、そのいわば洗脳地域を拡大していく」

エヴァンスが乾いた声で話しながらウルルの隣に立った。

「数年後には、リーグは完全にベンベル国に変わる」

びゅおう、と崖の下から風が吹き上げる。風は風神の眼だ。風を通してこの世界を見守る女神はエヴァンスに抗議したのかもしれない。

「そんなことをしてベンベルはたくさん国を滅ぼしてきたの？」

「わたしが関わったのはリーグとコーリラだけだが、ベンベル国が

滅ぼしてきた国は両手で足りないだろうな。お前にはまだ実感がな
いかもしれないが、リーグ王国はもう存在しない。王や大臣も既に
処刑されている」

「そんな」と言いかけ、けれどウラルは口をつぐんだ。エヴァン
スに言ったところで仕方のないことだ。エヴァンスは予定を話して
いるだけ。過去あったことを話しているだけ。いくら一国の騎士と
いえど変える権限は彼にない。変えられるとすれば。

火神はおそらくフギンの記憶を頼りに ジュルコンラ へ向かつ
たはずだ。けれど一度ジンに連れられ行った記憶を頼りに、アラ
ハの案内も受けて ジュルコンラ へ向かったのだが、そこはベン
ベル人が占拠していた。エヴァンスがベンベル人に事情を問いただ
したがその責任者は何も知らず、近所の住民に尋ねてみれば「一
年ほど前、ベンベル人が来る前に総出で南へ向かった」と答えが返
ってきた。

ジュルコンラ はどこへ行ったのだろう。そしてフギンはどこ
へ行ったのだろう。行き先を見失ったウラルは、胸の奥から呼びか
ける声に従って南へ、南へと歩いてきた。

「フギンは壁の中にいるのかしら。ここ以外に橋は？」

「わたしはこのあたりの地理に疎い。だがベンベルが監視できない
橋は落とされ、浅瀬も監視されているはずだ。夜陰に乗じて川を渡
る男ではなからうから、誰かが見ているか、さもなければ壁のこちら
側にいるだろう。あの男は目立つ」

本物のフギンが壁の向こう側へ行くなら、間違いなく夜に川を渡
つたろうが。エヴァンスも今までのフギンと今のフギンを完全に別
人と考えているようだ。

もう休憩はいいだろう、とエヴァンスがゴーランの手綱をとる。
ウラルもアラハの背に乗せてもらった。

ある程度橋へ近づき、アラハが身を隠す場所がなくなったとこ
ろでウラルはアラハの背を降りた。そこで一旦別れる。ウラルが
壁の向こう側から日のあるうちに戻らなければ、夜にアラハが川

を渡ってくることになった。

ベンベル兵にエヴァンスが話を通し、壁の向こうへ続く橋を渡る。渡り終えたところでちょうど、ごうん、と正午の祈りの時間を示す鐘がどこからともなく鳴り始めた。

エヴァンスとシャルトルが橋の脇に荷物を置き、祈り始めた。橋の横にある詰め所にいたベンベル人も出てきて祈り始める。

ウラルは目を見張った。地面に倒れこむようにして祈るベンベル人の中にリーグ人が混じっている。一人や二人ではない、振り返ってみれば十人や二十人でもない。

ウラルは思わず後ずさった。その場で祈らず立っているのはウラルひとりだ。さすがに川で土木工事をしている男らは祈っていないようだが、この橋のたもとにある村のほとんどの住人がベンベルの神に祈りをささげている。たどたどしく経文を唱えながら、時々忘れるのか言葉をとぎらせながら。村の家々の向こう側には畑、そこには見慣れない野菜が植えられていた。エヴァンスの家でメイドをやっていたときに何度か使ったベンベルの作物。

胸元のペンダントを握り締めた。ここはどこなのだろう、間違いなくウラルは異邦人だ。風神はリーグ全土がこんなになっても火神を止める気なのだろうか。風神の気持ちはわかる、けれどこんなになつてまで手をこまねくのは辛すぎる……。

祈りを終えたエヴァンスがウラルを見つめた。感情のない目だった。

あきらめて受け入れる。これがこれからのリーグだ。

どうしていいかわからない。ウラルはエヴァンスから目をそらし、風神に助けを求めながらぎゅっと目を閉じた。

第一章 1 「秘めた怒りはどこへゆく」 上

「（おい、カクテユス卿ではないか！）」

親しげな声にウラルはびくりと肩をすくめた。ベンベル人に聞き込みをしていたエヴァンスがびくりと眉を動かし振り返る。

エヴァンスと同年代の男が部下を引き連れ立っていた。腰にシヤムシールを帯びた精悍な男だ。シャルトルが胸に手を当て丁寧に礼をする。

「（アウレヌス卿。お前がここの責任者だったとはな）」

「（こんなところでその仏頂面を見るとは思わなかったぞ、しかもこのカタブツが女連れとは。人違いではなかるうな？）」

上から下までじろじろ眺められる。「知り合い？」とエヴァンスに小声で尋ねてみれば「ウイグード・アウレヌス。もと同僚だ」と短く返事が返ってきた。

「（王国騎士を廃業したらしいが本当か？ 血を血で清めるべく旅に出たと？ こんなところをそんな格好でほっつきまわっているところを見ると本当らしいな。そのリーグ女はもしや？）」

「（残りの二人をおびき寄せるため、生かしてある）」

「（縛りもせずか、相変わらず甘い男よ。喉から血柱を上げさせれば黙っていても相手が寄ってくるだろうに）」

ウラルは思わずエヴァンスの陰に隠れた。ウイグードがおかしそうに笑う。そしてウラルの目の前へ来ると、ウラルの顎をつかみ、ぐいと上を向かせた。

「（ベンベル語がわかるのか。どれ、なかなかかわいいらしい娘ではないか。このカタブツをたぶらかすとはたいしたものだ）」

思わず悲鳴をあげた瞬間、エヴァンスがウイグードの手を引き剥がし、ウラルの前に立ちふさがってくれた。

「（人の連れを脅かさないでもらおう。シャルトル、ウラルを連れましてしばらく離れている）」

「（『捕虜』ではなく『連れ』か。やれやれ、お前の煉獄行きは決まったも同然らしいな）」

行きましよう、とシャルトルがウラルの手を引いた。震える足を叱咤しながら距離をとり、馬とゴーランの陰に隠れるようにして息をつく。

「あの人は何者？ 騎士なの？」

「正真正銘のベンベル王国騎士ですよ」と答えるシャルトルの声は苦かった。ウラルは今のところリーグでもベンベルでも騎士道精神のちゃんとした騎士にしか会っていない。ダイオ、シガル、エヴァンス、フェイス將軍とカフス將軍、それにジンを加えても。あの人には騎士より盜賊の親玉の方がよっぽど似合う。

「普段はもう少し騎士らしいお人なのですが、アウレヌス卿はスー・エヴァンスをどういうわけやら目の仇にしておられるんです」

ウラルもそのとばっちりを受けたのだろう。体がまだ震えている。「スー・エヴァンスに限って堪忍袋の緒を切らすことはないでしょうが……。騎士権を剥奪された今のスー・エヴァンスは、アウレヌス卿よりも弱い立場になってしまった」

ウイグードはウラルが離れるとからかいがいもなくしたのか、不承不承エヴァンスの話を開始したようだ。

「（フギン・ヘリアンという片腕の男と、ジュルコンラ というリーグ人の反乱軍を探している）」

「（お前が殺さねばならん男か。なんだ、片腕の男ひとりにてこずっているのか？）」

エヴァンスは仮面のような無表情、けれど目と声だけは絶対零度の冷たさだ。ウイグードが何か言ったたびエヴァンスの内面が冷えていくのがわかる。ただでさえ感情表現に乏しいエヴァンスなのに、それが傍目からこれだけはつきりわかるということとは。

「相当怒ってる……」

ですね、と答えたシャルトルの声がうわずった。

ウイグードは不気味な笑みを浮かべている。

「まあ仕方あるまい、償い行の者に施しをするのはウセリメ教徒の務め。お前が情報の施しを乞い願うとはな」

頭の芯が冷えた。言っではいけない言葉を言っではいけない相手にぶつけた。怒りのあまりか驚きのあまりかシャルトルの顔が真っ青になっている。

施しを乞い願うとはな。

じわりとエヴァンスの顔が紅潮した。無表情は変わらない、指一本動かさない。けれど明らかに頭に血が上っている。

カチ、とエヴァンスの腰で金属音がした。斬る。思わず顔をそむけたウラルだが、聞こえてきたのは断末魔ではなく、ぞっとするほど静かなエヴァンスの声だった。

「シャルトル、ウラル。ここに来たのは間違いだったようだ。戻るぞ」

とつさに声が出ない二人に構わずエヴァンスはきびすを返し、村の外、さつき渡ってきた橋の方へと歩き始めた。

「待て、カクテユス卿。まだ何も答えておらんぞ」

エヴァンスは無視して歩き続けている。ウイグードがわざとらしくため息をついた。

「(片腕のリーグ男は知らないが、ジュールコンラとかいう目障りな要塞は知っている。この川を西へ下るがいい。せいぜい俺が潰す前に済ませることだ)」

エヴァンスが足を止めた。振り返りもせず口を開く。

「(情報の見返りに教えてやる。フギン・ヘリアン、たったひとりで屈強のベンベル兵三十を死傷させ、わたしも互角以上に渡り合った男がその要塞にいるはずだ。もうすぐここにも『オーランド町の悪魔』の噂が流れてくるだろう。戦うならば十分注意するがいい。やつは人の扱いにも長けているはずだ)」

「貴様の施しなど受けぬ」という意思表示。対価の情報を話し終えると、エヴァンスは再び歩き始めた。

第一章 1「秘めた怒りはどこへゆく」 下

*

その日は近くの兵舎に泊めてもらった。壁の中から逃げる者がいないか監視するベンベル兵の兵舎だ。兵士らはどうやらウィグードではなく別の騎士の部下らしい。

エヴァンスは静かに頼んでいた。今夜一晩泊めてもらえぬかと。そう頼むところにウラルが居合わせるのは初めてだった。エヴァンスは「リーグ人、しかも女が一緒だと洩られる」といつも話がつくまでウラルとシャルトルに席を外させていたのだ。

あれだけ矜持の高いエヴァンスだ。いくら必要なこととはいえ、毎晩宿を頼むのは辛いだろう。いくら対価は金銭や剣の稽古で払っていても、ここは宿ではなく兵舎。頭を下げた宿を乞うていることには変わらない。

ウラルがいても兵士らは怪訝そうな顔こそしたものの洩りはしなかった。相手が償い行中の高位騎士だと知ると平身低頭し、客室ふたつと食事を提供してくれた。エヴァンスは「礼に剣の稽古をつけよう」と兵士らを連れ外へ出て行ってから、しばらく帰ってきていない。

カン、カカン、と激しく木刀で打ち合う音が聞こえてくる。窓から外を覗いてみれば月明かりの中、十五人ばかりの兵士を次々相手にするエヴァンスがいた。闇の中でエヴァンスの金髪は目立つ。いや、エヴァンスという男自体がよく目立つ。豹のようにしなやかにそして獰猛に。五人ずつ打ちかかるのをエヴァンスが低く怒鳴りながら蹴散らしていく。

エヴァンスのあまりの強さに兵士らが怯え始めると、エヴァンスは五対一から一対一に切り替えた。

「わたしは打つ前に狙う場所を言う。防御するなり避けるなりし

て反撃してこい。手加減する気はない、もしお前たちに闘志がないようなら容赦なく滅多打ちにする。かかってこい！」

おずおずと一人が木刀を構える。瞬間。

「（右手首！）」

エヴァンスの木刀が跳ね上がり、兵士の木刀に激しくぶつかった。エヴァンスの声で反射的に防御していなければ手首が折れていたに違いない。

「（ぼやぼやするな、次は胴を突く！）」

打ち倒した兵士には「攻撃に夢中になって防御を忘れるな」だの「足腰をもつと鍛えろ」だの簡単な助言を与える。腰の引けている者は本当に容赦なく滅多打ちにした。骨にヒビくらいは入れたのではないだろうか。

「（左脇が甘い！）」

「（首！）」

夜が更け、窓辺のウラルが座ったままうつらうつらし始めたころ、ようやくエヴァンスは解散を命じた。

半分は体をひきずるようにして兵舎の中へ入っていった。残る半数は疲れのためか痛みのためか、その場に座り込んだままぐったりしている。そこへエヴァンスに呼ばれたのか軍医らしき男が現れ、具合を診始めた。

しばらくして廊下からエヴァンスのものらしい足音が聞こえてきた。今まで周りが静かだったから気づかなかったが、びっくりするほど壁が薄い。内装は新しいが、どうやらリーグ人夫のやつつけ仕事のようなものだ。

「（あの八人はまだのびているか？）」

隣のドアが開く音と共に声がした。一応は心配しているようだ。

「（ふたりは戻りましたよ。でも六人はまだ動けないようです）」

「（少しやりすぎたようだ）」

「（珍しいですね。スー・エヴァンスが口に出して反省するなんて）」

「

エヴァンスは黙っている。シャルトルが笑い混じりのため息をついた。

「（あなたが敵しいのは今に始まったことではないでしょう。『十人の兵士がカクテユス卿の稽古を受ければ、ひとりには再起不能となり、二人は顔も見たくないほど嫌い、六人は恐れて距離を置き、最後のひとりが教えを受け入れ大きく伸びる』。昼間の八つ当たりをしたわけでもないでしょうに）」

エヴァンスは再び黙りこんだ。

「（……八つ当たりだったんですか？）」

「（無意識にそうなったかもしれない。ウラルはどうした）」

「（もうお休みのはずですよ。足音も聞こえませんか）」
ウラルはまだ窓辺の椅子に座ったままだった。

エヴァンスが椅子かベッドかに腰をおろしたらしい音、続けて別の場所から椅子を引く音。シャルトルが椅子を動かしてエヴァンスと向き合ったらしい。

「（本当にあなたらしくもない。どうされたんですか？ とりあえず上から見た分では普段と変わらない様子でしたよ。そんなに昼間のことが尾を引いているんですか？）」

「（アウレヌスの暴言はいつものことだ）」

「（それならなぜ？）」

「（言葉にできるならわたしの苛立ちはもう静まっているだろうよ。苛立ってたまらんのもいつものことだが、これほど後を引くのは初めてだな）」

「（本当によくあの場で剣を抜きませんでしたね。施しを乞う、ですか。そんな発想をする時点であの人は煉獄墮ち間違いないですよ）」

「（ああ。……それに加えてウラルのことだ）」

急に自分の名前が出てきたのに面くらい、ウラルは壁を見つめた。

「（ウラルさんですか？）」

エヴァンスのため息。

「（そうだな、これが『痛いところを突かれた』という感覚なのかもしれない。たしかに今までウルルを殺さなかったのは間違いだった）」

ざっと鳥肌がたった。殺さなかったのは間違いだった？

「（ウルルについて、わたしは嘘を塗り重ねている。ウルルには『三人を集めて同時に神にささげねばならぬ』と言い、アウレヌスには『ウルルはほかの二人をおびき寄せるために生かしてある』と言いついた）」

オーランド町の神殿でエヴァンスは「三人まとめて生贄に捧げなければ意味がない」と言っていた。少なくともウルル、フギン、ダイオの三人が揃うまで殺す気はないと。……あれは嘘だったのだろうか。

たしかに違和感があった。エヴァンスはオーランド町でウルルの首を絞めているのだ。夜の街での逃走劇。間一髪で逃れたものの、エヴァンスは確実にあの場でウルルを殺そうとしていた。

「（実際のところウルルを生かす理由は、わたしの甘さ、それだけだ。昔からわたしは自分の意思で命を救った者を殺すことができない。我らが神はお笑いになっておられるのだろう。そしてわたしに試練を与えたのだ。ウルルを殺すことでその甘さを砕いてみせよと）」

殺す、殺すと。何度も言われていたはずなのに。それを知りながらついてきたはずなのに。エヴァンスはもうしばらく手出ししてこないと安心してた。アラーハがいるからと油断していた。殺意を向けられて平然としていられるほどウルルは肝が太くない。

あれが嘘なら、本当にいつ殺されてもおかしくない。

歯を食いしばりながらポケットをさぐった。犬笛。

（アラーハ）

けれど震える指先に、頼みの綱は滑って落ちた。

からん、かららら。

「（今のは隣の部屋か。……ウルル。まさか聞こえているのか）」

血の気が引いた。

「（ウルルさんはお休みのはずですよ）」

「（いや、なんとなく気配は感じていた。気のせいかと思っていたが）」

たん、たん、と壁が軽く叩かれた。これは壁どころではない、薄い板一枚で部屋が区切られているだけ。エヴァンスが殴ったら簡単に穴が開くのではないだろうか。舌打ちの音。

隣のドアが開いた。エヴァンスの足音がウルルのドアの前へ迫り来る。

「ウルル、返事をしろ。ドアを開けるぞ」

ドアノブが回った。一応ウルルが眠っている可能性も考えたのか、そつとドアが開く。

「なぜ返事をしなかった」

自分で自分の体を抱き、震えを必死に押し殺す。今まで死にかけたことも殺されかけたことも何度もあったはずなのに、どういうわけやら今が一番怖かった。冷静な状態で、たった一人で。今もエヴァンスの腰には長剣がある。このまま何もできないまま胸を貫かれてしまうのだろうか。

エヴァンスが床に転がった犬笛を見、ため息をついた。

「わたしは野蛮人ではないし、いささかお前に情も移っている。お前を今すぐどうこうする気はない。殺すにしても身辺整理をするくらいの間はやる。アラールを呼びたいならば呼ぶがいい。お前がこの部屋を出ていっても止めはしない」

安心させるつもりで言っているのだろうか。それではいそうですかとぐっすり眠れるとも思っているのだろうか。ウルルは椅子に座ったままうつむき、ぎゅっと目を閉じているほかがない。

不意に、肩にふわりと優しい感触がした。かたわらのベッドから取り上げた毛布をエヴァンスがかけてくれたのだ。

「……なぜ、あの時わたしを殺そうとした」

完全に虚をつかれ、ウルルはぼんやりとエヴァンスの顔を見上げた。

「お前があの場合にいなければ、わたしはお前を狙わずに済んだ」
押し殺した声、引き寄せられた肩。伏せられた瞳、引き結ばれた唇。唇間の一件でエヴァンスの感情はどうかしてしまったのだろうか。感情表現に乏しい彼が今は驚くほど苦しげな、悲しげな顔をしている。

ウラルの視線に気づいたのかエヴァンスは気まずそうな顔できびすを返すと、そのまま足早に部屋を出ていった。

「エヴァンス」

迷っている？

第一章 2 「孤児院の母」 上

硬い木と木が打ち合わされる音でウラルは目を覚ました。

結局、出ていきそこねた。アラールも呼んでいない。とても眠れないだろうと思っていたのに、エヴァンスが出ていったとたん酷い疲れを感じて肩にかかった毛布ごとベッドへ倒れこみ、そのまますこんと眠りに落ちてしまったのだ。

手櫛で髪を整えつつ窓から外を見てみれば、エヴァンスが兵士らに稽古をつけていた。筋肉痛のためか兵士らの動きは悪い。そこをエヴァンスが鋭く、的確に打ち倒していく。

エヴァンスの動きは昨晚よりずっと落ち着いていた。豹のような鋭さ、荒々しさはあるが、どことなく余裕がある。一晩休んでエヴァンスの激情は鎮まったらしい。もう昨晚のようなことは言わないだろうし、悲しそうな顔はおるか表情というものをまともに見せないエヴァンスに戻っているのだろう。

なぜ自分は逃げなかったのだろう。ウラルは床に転がったままの犬笛を拾いあげ、ポケットに入れた。

わかっている、昨日のエヴァンスは夢や幻のようなもの。きつと今、本人になにか問いかけても「忘れる」で終わりだろう。現実のエヴァンスは「何日後に殺す。覚悟しておけ」と無感情に告げ、ウラルが泣いても喚いても予定の日はこの首を握り、くびり殺す男だ。（死にたくない……）

以前、エヴァンスに言った自身の声が蘇る。

（ジンからもらった命、こんなところで、失いたく、ない……）
忘れようもない。夜明け前の町で、エヴァンスはウラルの首を握ったのだ。

*

顔をあわせてもエヴァンスは案の定、何もなかったようにウラルと接した。シャルトルは気まずそうにしていたが、彼もまた主君にならって何も言わなかった。

昼前には兵舎を発った。今はフェラスルト川をさかのぼる形で東へ向かっている。

エヴァンスいわく、ジュールコンラまでは馬で一日の距離だという。兵士らに尋ねたのかエヴァンスの地図には、ジュールコンラの正確な位置が書き込まれていた。地図自体はとても実用的で書き込みを前提とした最低限のことしか書かれていないのだが、海や森の部分には美しい帆船や森の獣が描かれている。方角を示す羅針盤の模様も凝っていた。ミュシエ婦人のお手製に違いない。

日が暮れ始めた。出発が遅めだったから日暮れも当然早い。エヴァンスとシャルトルが沈みゆく太陽に向かって祈り始めた。響く読経は二人のものだけ、このあたりにベンベル軍の施設はないらしいとすると今夜は野宿になりそうだ。小さな村はたくさんあるが、ベンベル人ふたりと共に宿を乞うことはできない。

夕暮れの川に夕飯の支度をしているらしい村々からの煙がたなびいている。体は正直なもので、ウラルのお腹が小さく鳴いた。

「ごはんよー」とどこからともなく声がする。駆けていく子供たち、農具をおろして腰を伸ばすご老人。働き盛りの男が一人もいないことを除けば、思わず泣き出してしまいそうなほど平和な光景が広がっていた。対岸では男らが鞭打たれながら働かされているというのに……。

「あらロウン。あなたは今夜のご飯抜きじゃなかった？」

子供がたくさん向かった先から女の声がする。どうやら孤児院らしい。

「えー」

「冗談、冗談。今日は畑仕事たくさん手伝ってくれたから見逃してあげるわ」

ウラルは首をかしげた。こんなやり取りをどこかで聞いた覚えが

ある。ウラルは目を細め、子供を叱り付ける小柄な女を見つめた。距離はそんなに離れていないのだが、西日で顔がよく見えない。

「でも今度またジェシをいじめたらわかってるわね？ 覚えてらっしゃい、マーム母さんはあんたがどこにいたって見てるのよ」

マーム母さん？

太陽が地平線の下に沈み、エヴァンスたちの祈りが終わる。直射日光のさえぎられた中、やっと女の顔がくつきり見えた。

「マームさん……」

間違いない。サイフォスの妻、スヴェルの隠れ家を守り台所を預かる肝つ玉母さん、三年前に森の隠れ家で別れたきり生死もわからなかったマームがそこにいる。

「どうした、ウラル」

「マームさん！」

エヴァンスが問いかけてくるのも無視してウラルは声を張り上げた。マームが怪訝そうにこちらを見ている。ウラルはたまらず駆け出した。

「マームさん……！」

やっとウラルとわかったのだろう。マームが目を見開き ついで西日の中でもそれとわかるほど真っ青になった。マームの様子に異変を察したのか、ロウンと呼ばれた子供が誰かの名を叫びながら奥へと駆けていく。

怯えられている。勢いのままその胸へ飛び込もうとしたウラルは、慌てて速度をゆるめ、ゆっくりとマームの前に立った。

「マームさん、無事でよかった。ウラルです」

できるだけ冷静に言っただつもりだが、喉が腫れふさがったようにかすれた声しかでなかった。

「ウラル？ 本当にウラルなの？」

マームは今にも卒倒しそうな顔つきだ。まるで死人を見たようなマームはウラルが死んだものと思っただけだ。ウラルはマームの手をぎゅっとにぎった。

「大丈夫、私は生きてます。あつたかいでしょ？」

言いながらマームの手も暖かいのに心底ほつとした。じわりとマームの目に涙が浮かぶ。

「これは夢？ 夢よね、きつと。あんな戦でウルルが、あんなか弱い女の子が生きてるはずないもの。スヴェル のみんなだって誰一人戻ってこないし」

「アラーハがちゃんと守ってくれたの。フギンとイズンも生きてる」
「本当に？」

ウルルはうなずく。くしゃりとマームの顔がゆがんだ。瞬間、ウルルはぎゅっとマームの胸に抱き寄せられていた。

「本当にウルルなのね？ 夢じゃないのね？」

ウルルはマームを抱き返しながらうなずいた。

最初はぼろぼろと、それから声をあげて盛大に泣き始めたマームを孤児院の中から飛び出してきた数人の女と子供たちが、そしてウルルのはるか後ろからエヴァンスとシャルトルが呆気にとられた様子で見つめていた。

「おかえり、ウルル。おかえり……」

「ただいま、マームさん。ただいま……」

第一章 2 「孤児院の母」 中

どれくらいそうしてマームを抱きしめていたのだろう。はっと我に返り背後を振り返れば、エヴァンスはまださっきの川辺に立っていた。

「エヴァンス、あの……」

「明日の朝、迎えに来る」

それだけ言っただけ返すと、ゴーランを引いて去っていった。ウラル、あれはベンベル人じゃないの？ どういうこと？」

再び顔色を変えたマームにがしりと肩を捕まれる。どう説明したものかとウラルは内心頭を抱えた。

「その、すごく複雑な事情があつて」

「そうでしょうとも。あなたがフギンでもアラールでもなく、よりにもよってベンベル人と一緒にいるんですもの。理由によってはあなたをここで門前払いしなきゃならないわ。わけはわかるでしょう？ ここはベンベル人の圧力が強い土地なの」

当然といえば当然だ。けれど命を狙われているとは言えない。せっかく再会できたマームに心配はかけたくなかった。通訳、メイド、適当な嘘が出てこないかと考えるのだが、マームに納得してもらえそうな理由が出てこない。

「話せないようなことなの？」

「おおざっぱに言うと、目的は違うけど目的地が同じだから一緒に行くことになった、ってことになるのかな」

マームは「なぜベンベル人と一緒にいるのか」を聞いたがついてくるのだ。答えになっていない。マームの視線が痛かった。

「目的地は ジュルコンラ 。 ジュルコンラ ってこの近くよね？ 前とは違う位置みただけだ」

「すぐそこよ。南部を乗っ取るうとするベンベル人にらみをきかせるために移動してきたんですって。どうして？」

「そこに最近フギンが来たって話、聞かない？」

「マームは目をしばたいた。なんとなくその目が揺れたように見えたのは気のせいだろうか。」

「ええ、何日か前にフギンって人が来たわよ。もとリーグ国兵を何人が連れて。ここに泊まっていったわ」

「ここに？」

「ウラル、まさかあの人が スヴェル のフギンだなんて言い出さないわよね？」

ウラルは言葉を失った。

「たしかに背格好も顔もフギンに似ていたけど、性格も話し方も完全に別人だったわよ？ それに片腕を失ってたし」

ウラルは目を伏せた。長年一緒に暮らしていたマームでさえ別人だと思っただけ変わってしまったフギン。いくら中身が別人とはいえ、ここまでとは。

「ウラル？ まさかよね？」

「マームさん、信じられないかもしれないけど今のフギンは二重人格なの。心は完全に別人だけど、体は間違いなくフギンよ」

「うそでしょ？」

「私は彼、フギンじゃないフギンを追ってる。喧嘩別れしちゃったし、フギンが二重人格になるきっかけを作ったのは私だから、どうしてももう一度会って話したいの。あのベンベル人ふたりは何かフギンに恨みがあるみたい。それでフギンをよく知っていて、居場所を知っている私についてきた」

「逃げられなかったの？ あの二人からは」

「あのゴーランが私のおいを覚えているの。何度か逃げただけど追いつかれちゃって。でもあの二人は紳士的だし、私が少しくらい勝手してもこうして許してくれから。大丈夫」

マームは真つ青になっていた。これだけ伏せて話してもマームに

こんな顔をさせてしまうのだ。ウラルがいつ殺されてもおかしくないこと、風神の使者になったこと、フギンの「もうひとりの人格」が火神であること　ここまで話せばマームは卒倒するかもしれない。けれどこれは伏せるにしても、話さなくてはならない大切なことは山ほどある。サイフォスの死に顔を脳裏に浮かべ、ウラルはもう一度目を伏せた。マームと別れてからの時の重さに押しつぶされる思いだった。

「その顔、何か隠してるでしょ？」

ウラルは思わず苦笑した。

「ごめんなさい、でも嘘はつきたくないから。とりあえずあの二人にとって用があるのはフギンだけ、この孤児院には何をやる気もないから心配しないでね」

マームがふんと鼻を鳴らした。

「気に入らないわね。でも嘘は言っていないみたいだから、これあなたを門前払いする理由はなくなったわ。入りなさい。こんなところにいちや風邪ひいちやうでしょ」

たしかに日が沈んでだいぶ冷えてきた。マームが後ろ手にドアを開ける。

とたんドアによりかかって聞き耳を立てていたらしい子どもらが「わわわ」とか何とか言いながら何人も倒れかかってきた。ウラルは反射的にふたりを両腕で受け止め、ぽかんとその子供らの顔を見つめた。

「いや、その、エリスさんがマームさんの隠し子見てこいって言うもんだから……」

子供の一人がぼそぼそ弁解し、それからやっとウラルに笑いかける。思わず吹き出すウラル、マームの顔が急に血の気を取り戻した。

「だれが隠し子ですか、お客さんに失礼でしょご飯のしたくに戻りなさい！」

「隠し子じゃないんだ？」

「こんな大きな子供いないわよ！ さ、戻った戻った！」

子供らがばたばた駆けていく。しょうがない子ね、と腕を組んでからマームはしみじみウラルを見つめた。

「ウラルくらいだったら私の子供でもおかしくないかしらねえ。ま、とりあえず早く入りなさいよ。あの分じゃ夕飯のしたくは全然できてないんでしょうけど」

腰に手をあて、わざとらしくため息ひとつ。ウラルはほっとほえんだ。やっぱりマームは変わっていない。この動乱だ、何もなかったわけではないけれど。

ウラルはうながされるまま廊下の先、にぎやかな声のする方へと歩いていった。食堂らしい部屋のドアを開けると、中で食器を並べたりサラダを盛り付けたりしている子供らが手を止め、好奇心むきだしの目でウラルを見つめた。

「こんばんは、今夜一晩お世話になります。マームさんの古い知り合いのウラルといいます」

軽く挨拶をすると、奥でオープンの様子を見ていた女がエプロンで手をぬぐいながらウラルに歩み寄ってきた。

「ただの知り合いなの？ なんだ、生き別れの娘さんじゃないんだ。さすがに血を分けた娘ならほっぴりだすのは気の毒だと思ってたけど。ベンベル人に尻尾ふってる雌犬をここに入れてどうする気なの、マーム？」

警戒心をむきだしにされ、ウラルはたじろいだ。マームがウラルをかばう形でずいと前へ出る。

「ひとの友人を雌犬よばわりとは勇気が有り余ってるみたいね、エリス」

「有り余ってるのは勇気じゃなくてベンベル人への敵意よ、正当でしょ？」

「私はあなたの言い方を問題にしてるのよ。だいたいあなたはね…」

「おやめ。子供たちの前だよ」

第三者の声が割って入ったのに驚き振り向くと、廊下の脇にあつたドアから一人の老婆が出てくるところだ。老婆の顔。ウラルは驚きに目を見張った。

「まさか隠れ里の長老、ですか？」

老婆はおかしそうに笑ってみせた。

「おや、わたしの姉をご存知か。これは珍しい、あれは簡単に行ける村ではないからね。姉は元気だったかね？」

隠れ里の長老はめしいていた。彼女は歳のせいか角膜がほんのり白く濁っているものの、ウラルとすっかり目を合わせている。別人なのはわかったが、こんなに似ているとは。もしかすると双子なのかもしれない。

「はい、私が隠れ里に行ったのは少し前ですが、お元気そうでした」「遠いところからよくいらした。何か事情を抱えておられるようだ、ひとまずここではゆっくりお休みください。よければ子供らと一緒に食事のしたくを手伝ってくださいませんか」

老婆の微笑。全てを、マームに隠したことはもちろんウラルの知らないことまで見透かされた気がして、ウラルは思わずたじろいだ。それをこらえて「ありがとうございます」と頭を下げる。彼女も予言の力を持っているのだろうか。

「エリス、そろそろオーブンの中身を出さんと焦げてしまうぞ。子供たちも休んでいないで準備をなさい。腹が減ったろう」

ちらりとウラルに苦々しげな一瞥を投げかけ、エリスがオーブンの方へ歩いていく。

「じゃあウラルはスープを配って」

マームがぼんとウラルの背を叩いた。

「悪い人じゃないのよ、ただあの口の悪さだけはどうかにならないかしらねえ。さ、動いた動いた！」

つまみ食いしようとしていた男の子の頭を小突き、マームはスープ皿をぐいとウラルへ押しやった。

第一章 2 「孤児院の母」 下

子供らの笑い声を聞きながらリーグの料理をのんびり食べる。これがこんなに幸せなことだとは思わなかった。ヒュガルト町からここまでの道中はベンベル兵舎に泊めてもらっていたのだが、リーグ女のウラルはそんな場所では目立ちすぎる。部屋まで食事を運んでもらって一人で食べることが多かった。乳製品とスパイス、パンとコーヒーのベンベル料理にもやっと慣れたつもりでいたが、やつぱりウラルにはたっぷり具の入ったシチューと香草をたっぷり使ったサラダ、それにハーブティが肌に合う。子供らの後に湯を使わせてもらいさっぱりすると、すっかりリーグ人に戻った気分になった。

マームは湯からあがったら自分の部屋へ来るように言っていた。重くなった気分をこらえつつマームの部屋へむかったが、どうしたのだろう、留守だ。食堂とリビングを覗いてみたがマームの姿はない。トイレだろうか。ウラルは首をかしげ、もう一度マームの部屋へ行ってみようと引き返し。

「あの子は何か隠しているはずなんです。それがいいものなのか悪いものなのかだけでもわかりませんか？ あの子はたぶん相当面倒なことに巻き込まれてる。私にできることを知りたいんです」

マームの声。尋常ではない響きにウラルはどきりと足を止めた。振り向いてみれば明かりの漏れている部屋がある。

「彼女をここに泊めてちゃんと世話をしてやること、明日の朝は笑って送り出してやること。それだけだね」

老婆の声が答えた。そんな、と言いかけたマームの声がさえぎられる。

「心配せんでいい、彼女は風神の強い加護を受けている。おそらく風神から何らかの仕事をおおせつかっているのだろう。何かの火種

にはなるうが、それは神々のご意思。わたしたちがどうこうする
ことではない」

やはりこの老婆には予言の力があるようだ。何かの火種。どうい
うことか尋ねたい気持ちをこらえて壁に手をあてる。

その時だった。上の階から子供の甲高い泣き声が出た。続いてド
アが開く音とエリスのものらしい足音がする。子供が悪夢でも見た
のだろうか。

「……ウラルさんとやら。立ち聞きでいいのかな？ どうぞ中へお
入りなさい」

ウラルはびくりと肩をすくめた。振り返ればウラルの隣でドアが
開き、老婆の顔が覗いている。その後ろにはマームも立っていた。

「申し訳ないです、立ち聞きなんて」

「あなたには悪いが、今夜悪夢に泣く子は少なくなかろう」

その言葉の真意を悟り、ウラルはもう一度上の階を見つめた。エ
リスがあれだけ怒ったのも無理はない。子供たちはベンベル人を、
家族を皆殺しにした人々を久しぶりにすぐ近くで見たのだ。

「本当に申し訳ありません」

老婆はうなずき、ウラルを部屋に招き入れた。

「子供らのことはエリスに任せよう。気性は激しいが情の深い女だ、
心配はいらん。今マームと話しておったんだが」

老婆はびたりとウラルを見据え、けれどウラルの後ろにいる何か
を見つめる様子で目を細めた。

「マームはひどくお前さんを心配しておるようだ。心配をかけまい
とするお前さんの心はわかるが、マームの性格も考えるがよい。一
度言い出したら何があるうと引き下がらん女だ」

ウラルはマームをまじまじと見つめた。マームが怒ったような目
で強いうなずきを返してくる。

「わたしは姉のような予言の力は持たないが、そのかわり感情を讀
み取る力がある。いや、感情というよりはその人の雰囲気进行分析で
きると言ったほうが正しいか」

「雰囲気というのはつまり、喜怒哀楽だけでなく風神の加護やなんかを感じ取れるということですか」

「飲み込みが早くて助かるよ。あなたは隠したがっているようだが、マームの不安を解消するためにも単刀直入に聞かせていただこう。」

セテーダンの聖女 はあなたのことだね？ イツペルスを従え風神の墓守 を名乗る娘が現れたというが」

ごくりとウラルの喉が鳴った。やはり噂は広まっているようだ。

マームをちらりと見る。言いたくない。だが人の感情を読む老婆が相手でははぐらかすこともできない。

ウラルは窓の外に目をやり、腹をくくった。

「イツペルスは近くの森に潜んでいるはずですよ。私が呼べばすぐに来ます」

「ウラル、イツペルスなんてどこで」

マームがウラルの腕をつかんだ。ウラルはほんの少しだけ笑ってみせる。絶対に言うまいと思っていたのに、認めてしまうと案外楽だった。

「呼んでも構いませんか？ 彼もマームさんに会いたがっていると思っから」

「私に？」

窓を開けて犬笛を鳴らす。それからマームに向き直った。

「マームさん。信じてもらえないと思うけど、そのイツペルスはアラールハなの」

ウラルは今まで幾度となくしてきた説明をする。マームは開いた口がふさがらない様子だ。

アラールハは近くにいたようだ。すぐそばの林で二つの眼が光っている。人家のそばとあってアラールハもためらっているのだろう。

「アラールハ！」

ウラルが呼ぶと、アラールハは林を出てまっすぐこちらに向かってきた。ウラルに危険はなさそうだと安心した様子で歩いてきたアラールハだが、マームのにおいを嗅ぎつけたのか途中からは血相を変え

て駆け寄ってきた。

ウラルはそつとマームの背を押した。窓から顔をのぞかせるアラ
ーハ、マームが恐怖の色を浮かべて後ずさる。アラールハは悲しげに
耳を垂れ、けれどわかっているとはかりに身を引いた。

「信じがたい話だが」

老婆がゆつくりと立ち上がり、イツペルスに手を伸ばす。アラール
ハが不思議そうに老婆の手をしわくちなやな手を見つめ、首を伸ばし
て鼻先をなでられるに任せた。

「このイツペルスの心は驚きと喜びに満たされておるよ。暖かい気
持ちだ、お前さんは好かれておったようじゃな。少なくとも今が初
対面ではないようだ」

「そんな」

「動物の感情がこれだけはつきり見えるのは初めてだよ。このイツ
ペルスはどうも人間と同じ思考回路を持っているらしい。それにこ
のイツペルスは地神の強い加護を受けている。森の守護者か、初め
てお目にかかるが」

アラールハが説明を求める目をウラルに向ける。軽く紹介すると、
納得した様子で老婆を見つめた。

「おや、わたしに感謝しているのかね？ 雄弁なイツペルスよ」

アラールハがぶるりと鼻をふるわせ応じる。ウラル以外の人間とも
意思が通じるのが心底嬉しそうだ。

「アラールハ……」

ようやくマームが気を取り直したようだ。

「本当にアラールハなの？ ウラルとおばあちゃん、二人がグルにな
ってびっくり大作戦やってるなら容赦しないんだから」

アラールハが困った様子でウラルを見やる。

「アラールハなら当ててみて。私とサイフォスは結婚暦何年？ 蹄を
鳴らして答えてよ」

ウラルは老婆と思わず顔を見合わせた。

アラールハは首をかしげ、しばらく悩む仕草をしてから蹄で地面を

ひっかきはじめた。一回、二回、三回……。蹄の音は八回で止まった。

「それは今年まで含んでる？」

アラーハがうなずくと、マームは髪をぐしゃぐしゃに引っかきまわした。

「正解、じゃあ次よ。森の隠れ家を建てたのは誰？ 一番、スヴェル のみんな。二番、ジュールコンラ に手伝ってもらった。三番、ナヴァイオラ に手伝ってもらった」

マームはわざとウラルにもわからない問題を言っているに違いない。アラーハは迷いなく蹄を三度鳴らした。

「これも正解ね。わかったわ、最後の問題。私がアラーハに対して思っていたことは次のうちどれでしょう。一番、土足でリビングにあげりこまないで。二番、夏のうちは毛皮脱ぎなさい。三番、たまにはうちでご飯食べなさい」

アラーハは目をぱちくりさせている。

「四番、全部」

カツカツカツカツ。マームは両手を腰にあて盛大にため息をついた。

「わかってるなら直すなり訳を話すなりしなさい。驚かすのもたいがいにしなさいよ、ばか。馬と鹿があわさった生き物、よくいったものだわ。ばーか」

苦笑のつもりだろう、アラーハがぶるりと鼻を鳴らす。マームは拳を作るとその額をこつりと小突き、それから優しい仕草で鼻先をなでた。

「イッペルスになっても生きているなら、それで御の字よ」

すねたような声にアラーハの目元が和む。マームがアラーハの首をぎゅっと抱きしめた。アラーハも目を細め、長い首でぎゅっとマームを抱き返した。

ウラルは老婆に向かって頭を下げた。この老婆がいきなり セテーダンの聖女 のことを暴露しなければ、ウラルは結局アラーハと

マームを会わせないまま立ち去っていたはずなのだ。マームはフギン以上にアラーハのことを信じそうにないからと。イツペルスとしてのアラーハを否定されるのをこれ以上見たくないからと。

「ウラルさん、風神の墓守 としてのあなたにひとつ尋ねていいかね。わたしは神を信じないわけではないが、風神があなたを遣わしベンベル人を助ける理由がわからない。セーダン町に顕れた時間も 戦場の悪魔 に憑かれた男からベンベル人を救ったというし、今のあなたもベンベル人を連れている。神々は何をお考えだね？」

「風神はもう誰一人として死なないことだけを願っています。リーグ人はもちろん、ベンベル人も。そのためはどうするかは他の三神とこれから話し合う予定です。私がベンベル人と一緒にいる理由は……」

ウラルがエヴァンスと一緒にいる理由？ 自分で言い出した言葉にウラルは戸惑った。フギンを追うため、そしてエヴァンスにいつか殺されるため。いや。

「いつか、きたるべき和解と融和のため、ベンベル人の視点が必要だからです」

例の「強い直感」だった。胸の奥でジンが呟く言葉。なるほど、風神がエヴァンスに好意的なのはそういうことだったのか。

「だが、火神はそれをお望みでない」

ウラルはちらりと西を見やった。フギンがいるはずの場所、ジユルコトラ。神々の加護を感知できる老婆が火神その人を見誤るわけではないだろう。

「だから彼のもとへ向かっているんです
なるほど、老婆が静かにうなずいた。

「ウラル」

マームがアラーハの隣でおそれを含んだ目を向けている。

「マームさん、見守ってくれますか？ それ私にとって力になるから」

「アラーハもアラーハだけど、二人して突拍子なさすぎるわよ。我

に返つたら大騒ぎしそう」

力なく笑うマームにウラルも笑い返した。

「フギンもね。まともなのはイズンだけ」

「イズンはどこにいるの？ 元気なのね？」

「エルディタラ に向かったはず。また会ったらマームさんがここにいて伝えておくね。でもあとの人は……」

言いかけたウラルをマームがさえぎった。

「その先は言わなくていいわ」

でも、と続けたウラルをマームがもう一度さえぎる。

「薄情な女と思わないでね。サイフォスがどこでどんなことを思いながら死んでいったか聞きたい気持ちもあるけど、聞きたくない気持ちのほうが大きい。サイフォスはもう二度と帰ってこない、それだけで私にとっては十分よ。わかってくれる？ それよりは生きている人がどこで何をしているか聞きたいわ」

強い人だ。この大混乱の中で絶望から目をそらし希望を見据えるのは並大抵のことではない。きっと今夜マームはベッドの中で泣くのだろう、けれど明日からはいつものように子供たちを愛情たっぷりに怒鳴り散らしているのだろう。

老婆に礼を言って部屋を辞し、マームの部屋に移ってアラハを呼んだ。そして夜遅くまでウラルの身にあつたことやダイオとシガルのこと、それに賑やかな エルディタラ のことを話し続けた。

第一章 3 「揺れる心」 上

翌朝、孤児院の門のわきに現れたエヴァンスらに伴われ、ウラルは振り返り振り返りしながら孤児院を後にした。

「よく私の単独行動を許してくれたわね」

「逃げればまた追っただけだ」

無感情な声にウラルはほほえんだ。そういうことじゃないのに。

「お世話になった人と再会できたの」

エヴァンスは無言だ。ただ青い目をちらりとウラルに向けるだけ。

「会えて本当によかった。ありがとう」

「それでお前の未練が晴れるなら構わん」

ついと目がそらされた。彼の向こうでシャルトルが微笑んでいる。ウラルも微笑んでみせ、けれどひとつ思い出して真顔になった。

「エヴァンス、そういえば聞こうと思ってたんだけど ジュルコンラへ着いたらどうするつもりなの？」

彼のことだ、まさかノープランはないだろう。かといっていきなりジュルコンラへ潜入してフギンに剣を向けるとも思えない。

「要塞付近は城下町になっているそうだ。しばらく潜伏して様子を見るつもりでいる。ウラル、お前には先行して町の様子を見てきてもらいたい」

「町の様子を？」

「今まで通り街中にベンベル人がいればよし、いないようならジュルコンラがベンベル人を排除しているということだろう。のこのこ入るわけにはいかぬ」

孤児院でさえあれだけベンベル人を警戒していたのだ。ジュル

コンラのお膝元の町ではベンベル人を排除していて当然だろう。

「もしベンベル人がひとりも町にいなかったらどうする気？」

「わたしたちは町の近くで待機する。お前はフギンに会ってくるがいい。いくらか情報を持って帰ってきてもらえればありがたい」

「フギンをあなたに売れというの？」

「いや。わたしがベンベル軍人として欲しい情報、軍事力の判断や布陣の把握がお前にできるとは思っていない。純粹に今のあの男を知りたいだけだ。それなら構うまい？」

「フギンに不利になるようなことは言わないわよ？」

わかつていいると言いたげにエヴァンスは唇の端を歪めてみせた。

「どちらにせよ 壁 が完成間近だ。いくらもせずアウレヌスが動くだろう」

ベンベル軍が動く、つまり ジュルコンラ も動かざるをえない。一度動けばエヴァンスならその規模や力はひと目で判断がつくのだろう。フギンとダイオも前線に出てくるはずだ。もしかするとそこを狙って斬りかかる算段かもしれない。

「町が見えましたよ」

シャルトルの声に林の隙間を見れば、崖にへばりつくようにして大きな町が広がっていた。

フランメ町。川から攻め寄せる敵から町を守って立ちふさがるように、長く厚い壁のような城砦が展開している。もとはこの町の領主のものだったのだろうが、今ここを守っているのは ジュルコンラ だ。

背後には馬蹄形の崖。町に入ろうとする者は必ず ジュルコンラの門を通らなければならぬ仕組みになっている。門番はひとりひとり呼び止めているわけではないが、通行人はほとんどが顔見知りなのか愛想よく挨拶したり世間話をしたりしているようだ。

「わたしたちはここで待つ。夕方にはこちらに戻ってきて町の様子を報告してくれ。宿の予約もしてくるといい、ベッドで眠りたいだろう」

「私ひとりで泊まっていいいの？」

「あの様子ではわたしたちはとても町に入れそうにないし、かといってお前を引き止めておく理由もない。明日はフギンのところへ行ってもらうことだしな」

平然とした顔でエヴァンスは言うが、この二人はこのあたりで野宿することになるのだらう。ウラルひとり暖かい宿でぬくぬくしているのは気が咎める。

エヴァンスがかすかに笑った。

「お前に自由を与える見返りとして、使いを頼む。シャルトル、残りの食料は」

「パンとベーコンが六食分、それにこぶしほどの大きさのチーズが二つあります。それに岩塩とスパイスが少々」

「ゴーランと馬の餌は」

「ああ、足りなくなってきましたね。ゴーラン用の干し肉があと三食分です」

「ウラル、肉屋で一番安い干し肉をこの袋に入る分だけ買ってきてくれ。それに男物の、わたしとシャルトルが着れるリーグの服を一着ずつ。そのうちわたしたちも街に入る必要が出てくるかもしれない」

エヴァンスらが危険を犯してまで町に入るとき。フギンとダイオを殺しに行くときだらうか。わざわざ町に入らなくても町の前にでんとそびえる ジュルコンラ には入れるが……。それに栗毛のシャルトルはまだしも金髪のエヴァンスは目立ちすぎる。変装程度でリーグ人にまぎれられるわけがない。

「髪を隠せるものも買ってくるね」

「髪染めの染料は持っている。それよりも目を隠せるような、目深にかぶれるものを頼む」

エヴァンスが髪を染める？ ウラルは思わずまじまじとエヴァンスを見つめた。この金髪が褐色に？

「おかしいか」

「ううん、ただ意外だったの。きつと似合うと思う」

「世辞はいらん。必要なものはそれだけだ、行ってくれ」

ウラルはうなずき、アラーハの背から降りた。「何かあったら呼ぶから」とアラーハにささやき、町に向かって歩き始めた。

二人、アラーハも含めれば三人も連れがいるのに、一人だけで町へ向かうのは寂しかった。振り返ってみれば二人と一頭はもう姿をくらましている。

「服と帽子かなにか、ね。どんなのがいいんだろう。好みを聞いてこればよかった」

ひとりごちつつ ジュルコンラ を見やる。もし変装して街中から ジュルコンラ に侵入、フギンとダイオを殺すなどという計画をエヴァンスが立てているなら。ウラルは唇を噛んだ。あの二人を危険にさらしたくはない。エヴァンスに背後を突かせる手伝いなどしたくはなかった。

けれど、ともう一度さつきエヴァンスのいた場所を振り返る。エヴァンスはそんな卑怯なまねをする人ではない。何かほかに理由があるのだろうか。

町門をくぐる。崖に張りつくような町なのだから当然なのだが、本当に坂と階段の多い町だ。門をくぐってすぐのところから大きな気の遠くなるほど長い上り階段が続いており、その両脇にずらりと店が並んでいる。きよるきよるあたりを見回したが、ベンベル人は当然ひとりもいなかった。

目についた服屋に入り、男物の服を手にとった。

「どんなのにしよう。似合うかな……」

エヴァンスには青が似合う。髪を染めても似合うだろうか。ごてごて装飾がついているものはきつと嫌いだ。シンプルで動きやすく、でも品のいいものがいい。かといってサイズが合わないのも問題だ。ふところも決して豊かではない。ウラルが作ればいいのだが。男物の服ひとそろいくらい、時間さえあれば十日で縫える。

「何かお探ですか、旅のお嬢さん？」

店員に声をかけられウラルは飛びあがった。大きな荷物をついだ娘が男物の服を見ているのだ、目立って当然だった。

「もしかしてプレゼントですか？」

顔が耳まで真っ赤になるのがわかった。

「えっと、その、兄のなんですが」

にっこり笑顔の店員。確実に見抜かれている。

「どんなものをお探しですか？ 色やデザインのご希望は？」

「背丈はこれくらい、肩幅はこれくらいなんですが。できれば青系統の色で、品のいいものを。あ、それからもう一着。背丈がこれくらい、肩幅これくらいの人の人も欲しいんですけど」

「え、二人分ですか？」

あやうくシャルトルの分を忘れるところだった。露骨に意外そうな顔をする店員に「そうなんですよ、二人分です！」と半ばやけっぱちで返す。笑われた。顔が火照る。

「二人兄弟に妹ひとりなんです！ せっかく相談に乗っていただいたんですが、ほかの店へ行かせてもらいますね！」

「待つて待つて、ちょうどいいのがあるから。これとかどうですか？」

店員は次から次に服を出してくれたが結局決まらず、時間をかけていくつも店を回った。こんなとき田舎娘のセンスのなさが嫌になる。だれか相談できるおしゃれな男の人、王都育ちのイズンあたりがいてくれたらいいのに。

ため息をつきつつ店を回り、やっとふたそろいの服を買った。次は帽子だ。つばが広くて目が隠れるもの。室内でかぶっていてもそれほどおかしくないような、おしゃれなもの。

帽子屋を出て、適当な階段の隅に座る。二人分の服を胸に抱き、長い階段に疲れた足と慣れない買い物に疲れた胸を休めた。
「喜んでくれるかな」

二人の反応を想像してほんのり赤くなる。きつとウラルがよほど奇抜な服を持っていかない限り、エヴァンスは無表情で「ご苦労だった」と受け取り、シャルトルは笑って礼を言ってくれるのだろう。考えてみれば頼まれたとはいえ男の人に何かを買うのは久しぶりだ。

いや、下手をすると初めてかもしれない。昔の恋人にはいつも何かしら手作りしたシャツやら何やらをプレゼントしていた。

階段の上から町を見下ろし、そろそろ他のものも買いに行かなくちゃ、と立ちあがる。瞬間、あたりが暗くかげった。空を仰いでみれば兵士を乗せたムールの群れが町の北へ飛んでいく。町を囲うようにしている崖の上へ次々舞い降りていくから、もしかするとそこにムール禽舎があるのかもしれない。

さっきの騎手の中にマルクはいただろうか。フギンについていたのだから彼も間違いないこの町にいるはず。そして巨鳥に乗れる人は貴重な戦力だから、ムール部隊にいるはずだ。さっきの巨鳥の群れにロクはいなかったはずだが……。

「ウラル？」

いきなり名前を呼ばれ、ウラルははつと我に返った。前を見てみれば今ぼんやり考えていたマルクその人が帽子屋の隣、道具屋の店先に立っている。

「うそだろ、なんで君がこの町に？ 人違いじゃないよな？」

なんとという偶然だろう。ウラルはめまいをこらえて微笑んだ。

「マルク！」

「うわ、本物だ！ ひとりか？ 他の人は？ セラたちもいるんだろ？」

まくしたてながらマルクが駆け寄ってくる。フギンはあれだけ変わってしまったが、マルクはまるで変わっていないらしい。ウラルは心底ほつとした。

「セラたちは エルディタラ へ向かってるはず。今はわたし一人よ。町の外にエヴァンスとシャルトルとアラールがいるけど」

「あのベンベル人もが？ もしかしてあの時、あのまま捕まっちゃったのか？」

「うん。でも心配しないで、この通り自由にさせてもらってるから」

「あの方に頼んで討伐隊を出してもらおう」

「『あの方』ってフギンのことね？」

マルクはうなずいた。

「うん。みんなはフギン様、ヘリアン様って呼んでる。でも俺は一応フギンの幼馴染だからさ。なんか気まずくってそう呼んでる」

「マルクもムール部隊にいるの？ さっき通ったけど」

「うん、本当ならあの中に俺もいるはずだったんだけど。そっか、あの方はこの時間にウラルが来るのを見越して俺を早退させたんだな。使いを頼まれたんだ」

マルクはインク瓶が入っているらしい包みを振ってみせた。さっきの道具屋で買ってきたらしい。

「ジュールコンラ に来るだろ？ あの方が俺をここによこしたのも君を案内しろってことなんだと思う」

「その前にエヴァンスに頼まれていた荷物を届けないと」
マルクが目をむいた。

「なんでベンベル人に荷物なんか届ける必要があるんだ？ 相手はジンさんを殺した人なんだろう？」

それを言われるとつらい。でもウラルはきつぱり首を振った。

言ってしまうのか。マルクはウラルが 風神の墓守 だと知らないはずだ。同じ 墓守 である彼になら言ったところで問題ないだろう。風神にはどうやらエヴァンスが必要らしいのだと。だから討伐隊など出さないでほしい、ウラルも決してエヴァンスの死など望んでいないと。けれど、いったいどんな顔をして説明すればいいのだろう。

「私が戻らなきゃ怪しまれるから。アラーハもいるし」

結局当たり障りのない説明をして、ウラルは階下に広がる町を眺めた。

「どうだっというじゃないか、そんなこと。行こうぜ」

けれどウラルが黙って微笑んでみせると、マルクは気おされた様子で黙りこんだ。今、説明しなかった理由がほかにもあることを感じ取ってくれたらしい。

「ね、門のところまで買い物につきあってくれる？ 安い店を教え

てもらえると嬉しいんだけど」

もうすっかり日は傾いていた。まだ干し肉やらなんやらを買わなくてはならないし、このままでは閉門までにエヴァンスに会って荷物を渡して戻ってこられる保証がない。

「何を買うんだ？」

「質はそんなに良くなくていいから、とにかく安い干し肉どっさり」「それなら任せとけ。こっちだよ」

ひよいとウラルの荷物を抱えて階段を下り始める。いい案内人が見つかってよかった。

「なんかウラル、変わったな」

うつむきながらぼつりとこぼす。ウラルはきょとんと首をかしげた。

「前はなんか、いつも何かに悩んでるみたいだった。笑っててもどことなく不安げでさ、いつも心配してたんだ。でも今の君はなんか吹っ切れたみたいだ」

「そう？」

「もしかしてフギンがフギンでなくなったから、せいせいしてる？」まさか。苦笑しようとしてウラルは踏みとどまった。その声が驚くほど不安げだったから。

マルクも怖いのだ。おねしょの回数まで覚えているような幼馴染が突然火神に変わってしまったのだから。しかも「本物の」フギンの心はどこへ行ってしまったのかもわからない。聖域で守護者たちの話を聞いたときの不安が蘇ってきて、ウラルは震えた。

「そうだよな、フギンは君をすごく拘束したがってたもんな。ウラルはいつかどこかへ消えてしまいそうで怖い。だから俺が守らなきゃってずっと言ってたし」

「そういうわけじゃないの。たしかにフギンの振る舞いは私も窮屈だったけど、でもそこまで嫌じゃなかった。好きだった、フギンのこと。今はもうそんなこと言ってる場合じゃないけど」

マルクが驚いた様子でウラルを振り返った。

大丈夫、フギンはちゃんと戻ってくるから。連れ戻すから。そう言いたいのに言えない。本物のフギンにもう一度会いたい。ちゃんと会ってお詫びを言いたい。けれど正直フギンともう一度会うのも怖い。それにウラルやマルクの気持ちだけで火神をフギンの体から追い出していいものだろうか。壁の内側。ベンベルと化した場所。火神の力は今、この国に必要なだ。けれど。けれど。

「エヴァンスに荷物を渡したら、すぐフギンに会いに行きたい。案内してくれる？」

「なんか今日の君には逆らえる気がしない」とマルクがぽりぽり頭をかく。取り繕うように笑ってみせてから、ウラルは延々続く階段の下、ジュールコトラを見下ろした。

そうだ。今はとにかく「もうひとりの」フギンに会わなければ。

第一章 3 「揺れる心」 下

本当は門のところまで待っていてもらうつもりでいたのだが、マルクは「ウラルが心配だから」とエヴァンスの前までついてきた。マルクを見てもエヴァンスは別段驚きも咎めもしなかった。ただいつものように挨拶もなにもすっぱかし、「巨鳥乗りの男か」と一言確認しただけだ。マルクの方はエヴァンスのそっけない反応に驚いたのか、気まずさをたたえた視線でエヴァンスを眺め回している。アラハもどこからともなく現れた。

「さつき町で会ったの。これからフギンのところに連れて行ってくれることになってる。これ、頼まれていた荷物ね。お弁当も買ってきたから冷めないうちに食べて」

うさんくさげにマルクを見つめているシャルトルに荷物を渡し、約束通り町の印象を語った。ベンベル人はひとりもいなかったこと。階段と坂がとにかく多く、路地の多い入り組んだ地形をしていること。崖の上にムール部隊がいることはマルクが横にいるし言わなかったが、エヴァンスならおそらくもう気づいている。

「よかつたら服、あててみてくれる？ 好みに合うといいんだけど」
マルクが目の前にいるのに、背後からフギンを襲撃するつもりなら格好を伝えられるのがわかっていているのに、二人は躊躇なく袋から服を出した。

「よかつた、似合う。サイズも大丈夫そうね」

ひと目で旅人とわかる格好のほうがいい。エヴァンスにはキャラバンの用心棒が着るようなござっぱりした服、シャルトルには商人風の服にした。色は目立たないよう地味めにエヴァンスが紺、シャルトルが茶色。けれどあまりシンプルすぎるのも似合いそうにないから、両方飾り布をついたものを選んだ。

これなら二人並んで歩いていても薬か貴金属か、値の張るものを運ぶ商人と護衛に見えるはずだ。エヴァンスがシャルトルの護衛に見えるのはいただけないが、服はエヴァンスのほうが少し豪華だから問題ないだろう。たぶん。

「私に服を買いに行かせた理由、聞いてもいい？」

これなら面と向かって尋ねても問題なさそうだ。エヴァンスは案の定、気にする様子もなく答えた。

「お前は ジュルコンラ に入ればしばらく出てくるまい。となればわたしたちは自力で食料を調達せねばならん」

なるほど、言われてみればそうだ。でも、それならなぜさつきウラルに保存食を買いに行かせなかったのだろう。現時点でそれほど量はないはずなのに。

不意にエヴァンスが大きく息をつき、あらたまった様子でウラルと向き合った。

「ウラル。昼間はフギンに会ってその印象を話せと言ったが、お前はもうここに帰ってこなくて構わない」

ウラルはきよとんと首をかしげた。

「本来なら今日ここに帰ってくる必要もなかった。髪染めを持っているのに服を持っていないわけがなかるう、急ぎで買ったものだからサイズが合わなかったのも確かだが。使いを言いつけて戻ってくるよう仕向けたのは、単にわたしがお前の顔を見たかったからだ」

いきなり何を言っているのだろうこの人は。今回の買い物は無意味だった？ 私の顔が見たかったから？

「この感情はどこから来るのか。シャルトルに尋ねれば、それは恋だと返ってきた」

え？

「スー・エヴァンス、僕はほんの冗談で……」

おろおろするシャルトルをエヴァンスは黙殺する。

「わたしに愛だの恋だのという感情が備わっているとは思っていなかったが、このところお前を見るたび落ち着かない気分になってい

たのも確かだ」

低いささやきにすうつと頭の芯が冷えた。エヴァンスの姿しか見えなくなる。エヴァンスの声しか聞こえなくなる。動けない。何か言わなければと思うのに何も考えられない。ただ耳の先まで真っ赤になるのを感じるだけ。

「きっかけはお前がアラ―八に殴り殺されそうになった時だ。お前は半ば意識を失いながらわたしのことをジンと呼び、わたしにはほえみかけた。わたしに向けられたものではないのはわかっていたが、その笑顔が、たまらなくいとおしかった」

エヴァンスの口元がまだ見たことがないほど優しい微笑を浮かべた。いや、この顔は一度だけ見たことがある。あのうす青い夜明けの小屋で、やっと目覚めたウラルに薬を飲ませてくれたエヴァンス。ジンのふりをしていたあの時の顔。

「あれ以来、わたしはお前に焦がれているのだ。ウラル」
不器用に髪をなでる感触が蘇った。

エヴァンスがその優しい瞳をゆっくりと閉ざす。次の瞬間、開かれた青い眼は嘘のように鋭かった。普段のエヴァンスの顔。鋭利な光を放つ肉食獣の瞳。

「これ以上近づけば、わたしはお前を手にかける機会を永遠に失う。お前を殺したくはない、これがまごうことなき本心だが、わたしはわたしの神に逆らえぬ。生きる時には限りがあるが、死後の時は永遠に続く」

火照った頬がすうつと熱を失った。エヴァンスは静かに続ける。

「覚悟をしておけ。わたしがフギン、ダイオの二人を手にかけるとき、勢いでそのままお前を斬る」

「スー・エヴァンス！　いくらなんでもそれはないでしょう！」
不意にシャルトルが割って入った。ものすごい勢いで主君にまくしたてる。

「告白したその口で次は殺すと？　いったいウラルさんにどんな顔をしてもらいたいんですかあなたは！　本当に、本気でウラルさん

が大好きだったんですね？ 僕は嬉しいですよ、そうなればとどれだけ思っていたか。ウラルさんがメイドをやっていたらしたときからずっと思っていました」

「シャルトル」

「このままずっとお二人が一緒におられれば、そして最後にウラルさんが老衰でお亡くなりになるときに、いまわの苦しみをスー・エヴァンスがお断ちになればと……。僕はずっと思っていました。どうしてそれができないんですか？ 一緒におられればいいじゃないですか！ 神は期限を定められなかった！」

シャルトル、とエヴァンスがもう一度さえぎった。なおも続けようとするとシャルトルに「黙れ」と険しく低い怒声が飛ぶ。

「たしかに神は期限を定められなかったが、厳しい方であらせられるのは確かだ。一刻も早く全ての始末をつけなければ。それにジンに続き、フギン、ダイオの命を絶ってそれができると思うか」

昏い光をたたえた双眸。エヴァンスは本気だ。シャルトルが唇を噛み、目を伏せる。

「命は、一度絶てばもう戻らないんですよ？ あなたはジンを殺したことを後悔している。違いますか？ 彼と出会わなければ、あるいは殺さず捕虜にしておけばウラルさんの命を狙わずに済んだ。そうですね？ このうえウラルさんを手にかけてしまえば。……僕はもう、見ていられません」

エヴァンスの目が揺れる。それを悟らせまいとするかのように固く両目が閉ざされた。

「ウラル。シャルトルが何を言おうがわたしに予定を変える気はない。フギンのところへ行くがいい。そろそろ門が閉まるぞ」

「スー・エヴァンス！」

「ウラルが行った後で話し合おう、シャルトル」
行け、ともう一度うながされる。

「エヴァンス」

びくりとエヴァンスの全身が震えた。まるでウラルが話せること

を忘れていたかのようだ。エヴァンスともあるう人が名前を呼んだだけでこんなに動揺するなんて。

「あなたみたいな人に想ってもらえて嬉しい。さっきも頭が真っ白になっちゃって。こんな状況じゃなかったら手放して喜んでたと思う。あなたは怖かった。すごく。でも紳士的で、優しかった」

エヴァンスの目が揺れた。けれど今度は目を閉じずそらしもせず、悲しみの色を浮かべた瞳でウルルを見つめたままにいる。

「殺されるときは私、全力で抵抗するからね。前にも言ったけど、私の命は沢山の人に守られたものだから。そんな簡単に手放したくないの」

「苦しませたくはない」

そう言うエヴァンスの方が苦しげだ。ウルルは精一杯笑みを浮かべてみせた。

「ありがとう」

おそらくはエヴァンスに向ける最後の笑顔。エヴァンスはじつとウルルを見つめ、それからゆっくりとまぶたを閉ざした。まぶたの奥に焼き付けるかのように。

金色の睫毛に彩られたまぶた、高い頬骨、薄い唇。ウルルもじつとエヴァンスの顔を見つめ、不意に湧き上がった衝動をこらえながらきびすを返した。

なぜ口づけしたいと思ったのだろう。こんな状況でなければ彼を愛したかもしれない。けれどこんな状況でなければウルルはエヴァンスに出会わなかった。それが今は、たまらなく悲しい。

慌てた様子でついてくるマルクとアラーハの気配を感じながら、追いかけてくださいと怒鳴るシャルトルの声を聞きながら、じつと追ってくるエヴァンスの視線を感じながら。

ウルルは ジュルコンラ へ歩き出した。

第一章 4 「ジュールコンラの灯火」 上

マルクに伴われて ジュルコンラ に入り、馬蹄形の崖の口をふさぐ形で長々と続く城壁の中を歩いた。驚いたことに、城壁の端は崖の内部につながっていた。このあたりの岩は赤い。鉄がとれる。だから無数の坑道が走っており、そのうちのいくつかを改装して要塞にしているという。

整えられてはいるが複雑に入り組んだ通路の先。無数のランタンに煌々と照らされた室内にフギンは座していた。かたわらにはダイオと見覚えのない男がひとり。

ウラルは静かにひざまずいて突然約束もなしに訪れた非礼を詫び、ほかの仕事を放り出してまでウラルに会ってもらえたことに礼を述べた。ダイオとマルクが困惑の視線を交わす。二人ともウラルがフギンを追ってきただけだと思っていたのだろう。まさかウラルが当然のようにひざまずくとは思っていなかったに違いない。

「勇敢な娘だ。この戦地へ単身乗り込んでくるとは」

フギンは笑ってウラルに立つようながした。

このひとに会った瞬間、心の中でもとのフギンを求めていた部分が消し飛んだ。包み込むような力強さと、身のすくむような畏怖。その名にふさわしい炎の気配を、そして軍神にふさわしい覇気をまとった男がそこにいた。フギンは男としては小柄だが、今の彼はかなり大きく見える。錯覚とは知りつつも畏れるほかがない。相応の時間が経ってフギンの体に火神の心がなじんだのか、あるいはウラルが風神を受け入れたせいだ。その神気は前回会ったときよりはるかに濃く、強く感じられた。

「紹介しよう。この男は ジュルコンラ 団長のイーライ。マライの父であり 火神の墓守 だ」

ジュールコンラ の団長も 墓守 だったのか。ウラルは「マライにはとてもお世話になりました」とイーライに頭を下げる。イー

ライはウラルがどういう人間かわかっていないとみえ、少し迷った末に丁寧な礼を返してきた。

マライは彼が若いときの娘だったのだろう。四十台の後半といったところだろうか、白髪が目だつてきているが顔のシワは少ない。マライは父に似たようだ。大柄な体格、普段は優しいが変事があればおそろしいほどの殺気を帯びるであろう瞳。きつと性格もマライと同じくさばさばしている。雰囲気がるきり同じだった。

「イーライ。この娘はウラル、スヴェルの一員であり、風神の墓守だ」

フギンの紹介に、ダイオとマルクの方が驚きに目を見張り立ち上がった。イーライが驚いた様子で二人を見つめる。

「ヘリアン様、今なんと？」

お前の口から説明してやれ、と言いたげなフギンの視線がウラルに向けられた。

「秘密にしているつもりはなかったんだけど、おいそれと話せることじゃないから。私も二人が墓守だと聞いたときはびっくりした。フギンは薄々わかってただけだ」

「普通の女の子じゃないとは思ってたよ、俺らも」

な、とマルクが同意を求めると、ダイオも苦笑まじりにうなずいた。

落ち着いて座りなおした二人にちらりと視線をやってからフギンはウラルに向き直る。

「単刀直入に尋ねるが、お前がここに来たのはお前の意思か、それとも風神の意思か？」

「両方です」

「ではまずお前の目的を尋ねよう」

ウラルは沈黙した。真つ向から「フギンを返してください」とは言いづらい。壁の向こうの状況を見ばかりなのだ。けれどフギンに会いたいのも本心だ。

「……フギンの心は、無事ですか」

「無事とはどういう意味だ？ 消滅したわけではないのか、俺が離れた後に戻ってこられるかということか」

「はい。森の守護者たちに 墓所の悪魔 に乗っ取られた娘がその後、狂い死んだという話を聞きました。不安なんです、フギンがちゃんと戻ってこられるのか」

フギンはしばらく何も言わずにウラルを見つめていた。まさか、とおずおずフギンの目を見つめたウラルに、フギンは苦い笑みを浮かべてみせた。

「そういう意味ならば、フギンは無事だ。心を壊す場合もないではないが、フギンは大丈夫だろう」

ウラルは火神をじっと見つめた。過去に一人でもいたならば、フギンがそうならない保証はない。

「墓守 が心を壊すのは 悪魔 そのものが原因ではない。自分が乗っ取られている間に行ったことに潰されるのだ。俺は基本的に武勇に長けた者を 墓守 にする。それに 悪魔 が暴れて惨殺するのは 墓守 にとっても憎んでいる相手であることが多い。心を壊した何人かは、暴れ狂っている間に自分の家族や恋人まで殺した者だった」

哀れな。けれどそれならフギンは大丈夫そうだ。気になつてはいたが聞くに聞けなかったのか、隣でマルクも安堵の息をついている。よかった。あれだけ強引にフギンに乗っ取ったのだ、道具のように体を使われているかもしれないと心配していたが、ちゃんと案じてくれている。

「俺が離ればフギンは戻る。俺がこうして体に乗っ取っている間のこともある程度は覚えているはずだ。機会があればフギンを離れてダイオに移るつもりだが、俺が 墓守 の体に乗っ取るにはいろいろと制限があつてな。そうそう簡単にはいかぬのだ。俺が 戦場の悪魔 となつたときの対策だから仕方ないのだが」

ウラルはぎよっとダイオを見つめたが、ダイオはただ無言のうなずきを返してきただけだ。了解済みらしい。小柄で片腕しかないフ

ギンよりは大柄で部下からの信頼も篤いダイオのほうが火神の寄代としてはふさわしいだろうが……。フギンの体でさえ 戦場の悪魔はおそろしい力を発揮したのだ。利き腕を失っているにもかかわらずエヴァンスと対等以上に戦うだけの技量、両手使いの重いシヤムシールを振り回すだけの馬鹿力。火神がダイオの体を使えばどれだけの戦力になるだろう。けれど。

ダイオ。悩みはしなかったのだろうか。相手は軍神、悩む前にはと答えたのではないだろうか。自分の人生を何年も、下手をすれば何十年も犠牲にすると知りながら。まっすぐフギンを見つめた瞳からは何の感情も感じられない。

ウラルは目を伏せた。少なくともダイオには覚悟がある。けれどフギンには悩む間も、覚悟もなかったはずだ。ちゃんとした同意があったかも怪しい。

「では、一時だけでもフギンに会わせてほしいというのは無理そうですね……」

やはりそれか、と言いたげにフギンは唇を引き結び、「今は無理だ」とうなずいた。

「では、フギンが戻るまでここに居させてください。掃除や洗濯のお手伝いをしますので。薬草の扱いにも慣れていきます」

「ウラル！」

マルクが怒鳴った。隣のダイオの顔も険しい。壁 の向こうからベンベルが攻めてくる以上、ここも近いうち戦場になる。となればウラルの身の安全は決して保障できない。

ウラルはぎゅっと胸元のペンダントを握りしめた。どうか断らないで。

「確かに戦中である以上、安全とは決して言えぬ。だが、今の俺にはお前が必要だ」

ダイオとマルクが火神に咎める視線を送る。が、相手が相手だけに何も言えないようだ。

「俺は人に取り憑いている間、ほかの神との疎通ができない。お前

には風神への窓口になつてもらいたい」

「風神もそのために私をここへ来させたのだと思います」

「ああ。だが、さつきも言ったようにここは戦場だ。お前の身は可能な限り守るが、手が回りきらぬこともあるだろう。お前の側でも早いうちに脱出路を覚えて備えておきなさい。イーライの娘、医師師のメイルに話を通しておく。薬草師が一人増えればメイルも心強かるう」

メイル。やはりここにいた。

「娘を呼んでまいりましょうか」

ずっと黙つて静かに座つていたイーライが声をかける。フギンがうなずくとイーライは立ち上がつて一礼し、部屋の外へ出ていった。「今まで黙っていたが、メイルも 風神の墓守 だ。本人も知らぬだろう。知らせるか否かは風神に任せる」

再びダイオとマルクがぎよつと腰を浮かせた。

「風神の用は今夜聞く、おおかた予想はついているが。ナタ草が紫になる時間に俺の部屋へ来るがいい。お前は意識をなくしておいたほうがいいかもしれんぞ、おそらく押し問答になつて終わるだけだ」苦笑を浮かべたフギンにうなずき一礼する。たしかにこの二神の話し合いは長引きそうだ。もう誰一人死なせたくないと願ひ融和を望む風神と、この惨状を黙つて見てはいられないと戦を選んだ火神完全に相反し、けれどどちらを選ぶ気持ちもわかるだけにウラルも辛い。うまく折り合いがつけばいいのだが。

ノックの音。フギンが返事をするどドアが開き、イーライと美しい娘が姿を現した。

彼女が。彼女がマライの妹であり、風神がウラルに会わせたがつていた月長石の棺のメイル。メイルは大柄で男勝りなマライとはあまり似ていなかった。女性らしい華奢で色白な娘だ。けれどすつきりと通つた鼻筋や強い光をたたえた切れ長の瞳は姉とそっくりだった。

フギンからウラルの紹介を受け、メイルはひたとウラルを見つめ

た。

「ウラル様。フギン様からお話はうかがっております。お時間のあるときにでも姉の最期をお聞かせください」

静かで丁寧な口調とは裏腹に、その瞳は鋭く不穏な光をたたえていて。

この人はベンベル人を相当憎んでいる。そう直感した。

第一章 4 「ジュールコンラの灯火」 中

*

「この要塞はかなり特殊なつくりになっています。迷われた場合はためらわず、近くの者にお尋ねください。もうお聞きしたかもしれませんが、ここは坑道を改装したものです。誤って深部に入りこめば出てこられる保障はありませんので」

フギンらと別れ、ウラルはメイルに要塞を案内してもらっていた。とりあえずはウラルがよく使うであろう場所、ウラルの部屋としてあてがわれた客室やトイレ、メイルの部屋や医務室を紹介してもらった。

「ここから先が非常時の脱出路です。迷いやすいので非常時以外は立ち入らないでください。万が一ここを使う場合は私や他の者も一緒ですので。上へ上へ登っていくと、いずれ町を囲む崖の上に出られます」

メイルが小さな扉を開ける。と、真っ暗な通路があらわれた。ほかの場所はかなり整えられているが、ここはツルハシで岩盤を削ったそのままという感じだ。追っ手対策なのか通路に入っただけのところは狭くなっている。女のウラルやメイルなら難なく通り抜けるが、大の男では肩がつかえるだろう。まして武器を帯びた状態では抜けるだけで時間がかかる。

「準備万端といった感じですね。坑道を改装って ジュルコンラがしたんですか？ この短期間で？」

「まさか。百年前のこの町の領主です。このあたりは古くから領地争いの絶えぬ土地でしたので」

メイルは岩壁のところどころにある細長い窓のひとつから外を見つめた。

腕しか通せない程度の細い穴、その脇にはひとつひとつ箱のよう

なものが置かれている。何かの道具なのかもしれない。窓からはフランメ町の家並みがすぐそばに見えている。この要塞は馬蹄形の崖の内側をぐるりと取り巻く形で展開しているらしい。

「ウルル様、おかしいとは思われませんか？ この要塞は町の内部を攻撃する形で作られているのです。この窓は弓兵用のもの、この箱は矢筒です」

ウルルは首をかしげた。町の中を攻撃する形で作られた要塞？

「この要塞のみならず、この町自体が特殊なつくりをしています。不思議には思われませんでしたか？ このいつ戦が始まってもおかしくない時に、この町の住民が普通に暮らしていることに」

たしかに服屋も帽子屋も肉屋も普通に営業していた。昼間は服選びに夢中でまったく気づかなかつたけれど。

「ここでならリーグ人らしい暮らしができる、フギン様を頼って近隣住民が集まってきているのです。フギン様は北へ逃げるよう何度も触れを出しているのですが、無理に追いついたりしないのはこの町の地下にも脱出路が無数に設けられているからです。金物屋が多いのには気づかれませんでしたか？ この町の金物屋には必ず隠し扉があり、崖の上への通路につながっているのです」

まったく気づかなかつた。なるほど、そんなしかけが隅々まで行き渡っているこの町だから、フギンはウルルをここに残しておいても大丈夫と判断したわけか。

「脱出路を使って住民を逃がした後、ここに敵兵を誘いこむ。そして文字通りの袋のネズミにします。過去にこのしかけを動かしたのは二回だけです、その二回で十分でした。このフランメ町は決して市街戦に持ち込めない城砦町として恐れられ、領主同士の争いの只中にありながら平和を守ってきたのです。フランメ町には手を出すな、これは戦に関わりのあるリーグ人なら誰もが知っていることです、ベンベル人はどうでしょう。上手く引つかかってくれればいいのですが」

ちらりとマイルの唇に笑みが浮かんだ。さすがはマライの妹、た

おやかな見かけからは想像がつかないほど好戦的らしい。

「そんなことを私に話していいんですか？ 私がベンベル人に告げ口するかも」

「フギン様に一目置かれるあなた様だからこそお話したのです。不安要素があるならば、私があなた様を見張りましょう」

ウラルはただただ苦笑した。

「わかりました、この要塞から出る気はないです。それから『様』づけはやめてもらえると。私は高貴な身分でもなんでもないので、いくらなんでも「ウラル様」と呼ばれながら教授されて脅されては。もう苦笑するほかがない。

「けれど、あなた様は セテーダンの聖女。そうでしょうか？」

「人には慣れぬイツペルスを従え、奇跡を起こすとしても言われていますか？」

「そう聞いております」

ウラルはため息をついた。風神の声を聞き、戦場の悪魔を正気に戻したのだからウラルは聖女と呼ばれるべき人種なのだろう。

そう思っただけで孤児院のおばあさんの問いかけにも セテーダンの聖女として答えたのだが……。やっぱり抵抗がある。

「イツペルスはただの友人だし、彼には人語が通じるからその気になれば誰の指示でも聞いてくれるはず。私はただの人間、あなたのお姉さんの友人です」

「ですが」

「それ以上は言いつこなし。ウラルと呼び捨てにしてください。じやなきや、せめて『さん』づけで。いい？」

メイルは露骨に顔をしかめた。主導権をとられるのが嫌いなタイプらしい。

「わかりました、ウラル」

せつかくの美人が台無しだ。眉間に深いシワを刻んでいるメイルにウラルはただ笑ってみせた。

「あとはどこを案内していただけますか？」

「今日のところはこれで全てです。フギン様からナタ草が赤くなる時間に部屋へお連れするよう申しつかつておりますが、まだ時間がありますので、どうぞ私の部屋へお越しく下さい。さっきも申しましたが、姉の最後をお聞かせ願えますか」

ウラルはうなずき、先を行くマイルに従った。気分が重く沈む。

戦のさなかに命を落としたジンやサイフォスのことはまだ話しやすかった。けれど戦で捕虜になったとはいえ生き残ったマライが、一年後に処刑されるさまを語るのは……。

「お父様はお呼びしなくていいですか？」

「ああ、そうですね。では先に父の部屋へ参りましょう」

二人で部屋へ向かったはいいものの、どうやらイーライは忙しい人らしかった。部屋でお茶をいただきながら待たせてもらって、けれど雑談のひとつもない事務的で重苦しい雰囲気。ウラルが疲れ果てたころ、やっとイーライが奥さんを伴って部屋に入ってきた。

イーライもウラルに対して恐縮しきりだった。とりあえずマイルと同じように「様」づけはやめてもらったが、おおむね敬語で話しかけられた。

三人に応え、ウラルは一通りのことをできるだけ淡々と語った。一応フギンやダイオが何か話していないか尋ねてみたが、二人とも何一つ話していないようだ。フギンがそこにいたと話せばイーライはともかく他の二人は混乱するだろうから、「仲間」がもう一人いたことにして話させてもらった。

百人を超える看守に守られた監獄。拷問を受け続けたマライの惨状。深夜の絞首台で揺れていた体。あとほんの少し、ほんの少し早く助けに来ていれば。マライ。あの戦場で生き残ったのに。マライ……。

「場所はヒュガルト町北部の監獄ですね？」

「ええ」

「お父さん、南が落ち着いたら皆殺しにしましょう」

この美女の口から皆殺しなどという言葉が出るとは。それはさす

がに、とイーライと共に言いかけたところでメイルの目がうるんでいるのに気づき、二人して黙りこむ。

「火薬庫に火種を投げ込んで暴発させてやればいい。パニックになつて逃げ回る者を捕らえて、マライ姉さんの受けたものの倍の拷問をして、城壁の外に吊るしてやる。一人ずつ鈴なりに吊るして見せしめにしてやればいい。フギン様、どうか奴らを許さないで……」

ぼろりとメイルの頬を涙が伝った。母親は真つ赤な目をしてメイルの背をなでている。

がたん、とメイルの椅子が横倒しになった。目元を押さえながら部屋を飛び出していく娘を母親が追った。

イーライも腰を浮かせかけたが、ウラルと二人きりで残されていると気づくと再び座りなおした。

「追つても構わないですよ、フギンの部屋はわかるので。そろそろ時間になると思いますし」

「いや、お送りしましょう。娘が失礼いたしました」

こちらへ、とイーライがドアを開けてみせる。ウラルも立ち上がつて外へ出た。

「メイルさん、お姉さんを慕っていたんですね」

「そうですね。歳も離れて性格もまったく違っていましたから、憧れていたのでしょう。あんなじゃじゃ馬になつたのもマライがここを出ていってからです。それまではいたって大人しい、本ばかり読んでいるような子だったんですが」

今までの人の反応の方がむしろ異質だったのだ。黙つて静かにサイフォスの死を受け入れたムニン、聞きたくないのと笑つたマーム取り乱し、怒り、泣きじゃくる。そうなつて当然だ、肉親が死んだのだから。

「あの、マライを救えなくて申し訳ありませんでした。監獄から脱獄して私に伝えてくれた仲間というのは、その、フギンなんです。

火神の墓守 になる前の。私たちがあと一日でも早く助けに向かつていればマライを助け出せたのに……」

「どうかお気に病まれないでください。もしを口に出したところで仕方ありますまい」

感情を殺した声。それ以上かける言葉をなくしてウルルは口をつぐんだ。

「ウルルさん」

ふと前に立って廊下を歩こうとしていたイーライが振り返り、あらたまつた様子でウルルに向き直った。

「ひとつだけ教えていただきたい。娘は最期するとき、どんな顔をしていたろうか」

ウルルは目を閉じた。首をつられる寸前のメール。遠目で、しかも目をえぐられ腫れ上がった顔だったが、これだけははっきりと言える。

「とても、悲しげな顔をしていました」

「……それだけが心残りです」

イーライが再びきびすを返し、ウルルに背を向けた。ウルルはその背に黙って頭を下げる。

かすれた声は、たしかに娘を喪った父親のそれだった。

第一章 4 「ジュルコンラ の灯火」 中（後書き）

更新ストックが尽きました。次回からは毎週1回（土曜）更新となります。

第一章 4 「ジュールコンラの灯火」 下

「来たか。イーライ、ご苦労。下がって構わん」

イーライが礼をして下がる。ウラルはフギンと二人、深夜の部屋に取り残された。

「マライのことを話したのか」

「はい。ご家族三人に」

「そうか。あとはムール部隊にリゼの兄がいる。ラザという男だ。マルクと面識があるはずだから紹介してもらおうといい」

リゼの家族もいたとは。彼にリゼの最期を話せば、スヴェルは生きていることが確認できたか家族や知人にその最期を話せたかになった。サイフォスの最期を エルディタラ 団長とマームに話し、ネザの故郷である隠れ里にも行った。マライの最期も家族に話せた。ジンは もう多くの人がその死を知っている。

部屋の奥で座っていたフギンが不意に立ち上がり、ゆっくりとウラルの目の前まで歩いてきた。ぶわりと熱波が頬をかすめる。これが火神の神気というものだろうか。そういえば 戦場の悪魔 が現れたときも似た気配がした。あのときはもっと禍々しかったけれど、ウラルは思わず一歩後ずさった。

「俺がおそろしいか」

フギンが低く笑った。

「当然の反応だが、我慢してもらおうほかないな。風神と代わってもらえるか」

とたん、ふっと後ろから抱きしめられるような感覚がした。背中に突風を受けたような、けれどももっと優しいそよかぜの気配。風神が来た。

（ウラル、いいか）

耳の奥にジンの声がして、ウラルはフギンを見た。うなずいてくれたフギンにうなずき返し、ウラルは「はい」と声に返事した。

(意識は残しておくか?)

「お二人が私に聞かれたくない話をされるなら。意識がなくなるのは怖いですが……」

(気を使うことはない。それなら聞いていい)

体から力が抜ける。大きくふらついたウラルをフギンの左腕ががつしり支えた。

脱力したウラルの体にふつとウラルのものでない力がこもる。しっかりと自分の両足で立ち直したウラルをフギンがぎゅつと胸に抱いた。

「久しいな、風神。人の姿でこうして抱き合うのは何年ぶりだ」

「やめてください、ウラルが怯えますから」

「先に俺の胸へ倒れこんできたのはお前の方だろう。本当はキスのひとつでもしてやりたいところだが」

けれどフギンとあんな別れ方をしたのに、不思議と嫌な感じはしなかった。抱きしめられているのが「自分」ではないからだろうか。ウラルの気持ちを感じたのか、ウラルの体はそつと体重をフギンの胸に預けた。

神話では火神は父神、風神は母神と呼ばれることも多い。地神と水神も男神だが、この二神はどちらかといえば中性的に描写される。だからなのか火神と風神は神話でもセツトで登場することが多く、考え方や司るものが真逆なせいか反発することも多いが、おおむね仲むつまじく描かれている。

「お前によく似た娘だな」

「あなたはまったく違いますね」

ようやく腕を放してくれたフギンにウラルは微笑で応じ、ゆつくりと体を離れた。

「火神。私の言いたいことは重々承知していると思いますが……」

「俺の言いたいこともわかっているようだな、風神」

ウラルは沈黙した。

「やはりいつものように言い争っても埒が明きそうにないですね」
「俺もそう思う。言い争いが無駄だとは思わないが、今回は時間をかけるわけにいかない。状況は悪くなるばかりだ。風神、風の眼をもつお前に尋ねたい。壁の内側はどうなっている」

ふつとウラルは目を閉ざす。まぶたの奥に風神の記憶であるう風景が広がった。

鳥になって飛んでいるかのような光景。壁を飛び越え木々をすりぬけて町へ入りこむ。祈りの時間を告げる鐘が鳴る。鐘の響きに呼応して視界が震える。ひざまずきベンベル語で祈るリーグ人たち。教会の前には子供たちが集められ、祈りを捧げている。教会の中にはやや年長の子供たちがベンベル語を習っている。祈りの文句の読み方を。視界一面に広がる赤い花。葉や種子を乾燥させたものをベンベル人が高額で買っていく。ベンベル人がリーグ人農夫の目の前でキセルに詰め、吸って、吐く。農夫がまねをする。咳き込む。ベンベル人が笑って農夫の肩を叩き、キセルを農夫に握らせて去っていく。農夫は一応ベンベル人を憎んでいるとみえ地面に唾を吐くが、金とキセルを大事に抱えて家へ帰っていく。

「コーリラ国はどうだ」

こちらでも祈りの鐘が鳴っている。同じように教会に集められた子供たちが食事をとっていた。肉と乳とスパイスたっぷりの食事。コーヒー。ひき肉を詰めた無発酵のパンを子供たちが頬張っている。たっぷり、お腹いっぱい。ベンベル人の兵士は嫌われているが、神官たちは慕われている。ここに連れてこれば子供は飢えずに済む。風は教会を抜けて郊外に出る。山へ。ベンベル人に気炎をあげつつ何もできずに山野に隠れ暮らす遊牧民。俺たちの故郷に、デイスティア荒原に戻りたい。風は荒原に出る。ゴーランとベンベル馬の群れが占拠している

「これを見てなおお前は戦いを拒むのか。俺たちはこの世界の父と母。なんとしても家を、子等を守らなければならん」

「何人もの我が子を犠牲にしてもですか」

「そうしなくては全てを滅ぼすことになる」

「滅びるわけではありません、形を変えるだけ。けれど……」

「人は死なずとも、この 家 は滅びる」

「人が生きていればいいではありませんか」

「生きているとも言いがたい、それは緩慢な死だ。 家 は人々の

基盤、それを失えば人は揺らぐ」

「戦ってどうこうできる時期はとうに過ぎていくのです。軍神であるあなたにこれを言うのは酷でしょうが」

フギンが口を閉ざした。

「南部の人々があなたを心の拠り所に行っているのはわかります。あなたへの賞賛や祈りを私はたくさん耳にしてきました。けれど、こも時間稼ぎでしかありません。この国に次から次へと移住して行くベンベル人を止めることはできない。リーグが、コーリラが滅んだときよりも多いベンベル人を相手に、あなたはどうか戦うおつもりですか？」

「ひとまずはこの町を守る。リーグ、コーリラの全ては守れないにせよ エルディタラ や ナヴァイオラ にも協力を申し出て、ベンベル人に屈せず生きられる場所を守るつもりだ。不本意だが仕方あるまい。戦わずして全てをベンベルに委ねるよりはいい。お前はもう誰ひとり殺しも殺されもしないことを願うが、そのために何をするといいのだ？」

「話し合いです」

「リーグ人、コーリラ人が圧倒的に不利な状況ですか？ 聞き入れられるとはとても思えん」

次はウラルが口を閉ざす番だった。

「地神、水神は何と言っている？」

「地神はもともと人のことにはあまり関心がありませんから。森を守るので手一杯のようです。水神はベンベルの神に会いに行きます」

「ベンベルの神に？ それは本当か」

「ええ。でもかなり高圧的な神のようですよ、状況は私たちの方が圧倒的に不利なので、交渉に応じてくれるわからないんですが」

「何を交渉するつもりだ」

「ふたつの世界の分断を受け入れてもらうことが目標です」

「ふたつの世界の分断？ どういうことだろう。」

「それができれば世話はないが。交渉はどんな具合だ？」

「水神はなかなか帰ってこないのです。ですが、あなたが帰ったことを海の守護者に伝えさせると、また守護者の体を借りて話し合おうと返事をくれました。あなたの都合がいいなら明日の夜、四人で話しましょう」

ぱつとフギンの顔が輝いた。

「大歓迎だ。フェラスルト川の大魚は健在だな？ だが、地神の器になれる守護者はこのあたりにはいないはずだ。守護者争いが絶えず、任期が短いものばかりと聞く」

「大丈夫、イツペルスのアラーハがいます」

「アラーハは守護者の任を降りたはずだ」

「アラーハが二度目に守護者になり、その任を再び解かれたとき、私が地神に頼んだのです。ウルルにはアラーハの力が必要だと。地神も三十年も仕えてきた守護者をこの非常時に失うのは痛い、アラーハにある程度の力を残してくれたのです」

「それは珍しい。法の神がよくぞ宗旨替えしたものだ」

本来のフギンに似た無邪気な笑顔に笑い返し、ウルルは「じゃあそろそろ夜も遅いし、戻ります」と告げた。

「その前に風神、壁の向こうのことをもう少し教えてはもらえないか。そろそろ壁が完成するはずだ、何か動きがありそうだろうか」

「話し合いはやはり建物の中でされるので。夏のさかりなら窓から入りこめるでしょうが、今は何も聞き取れていません。ただ、橋の近くに人が集まっているようですよ」

どうやら風神の力にも限りがあるようだ。風が通れなければ風神の目は届かない。

「ベンベル人か？」

「いえ、リーグ人です。でも何か異様な雰囲気です。みんな押し黙って橋の向こう、つまり川のこちら側を見ていました」

「リーグ人が？ 念のため聞いておくが、武器は」

「持っている様子はなかったですよ。ベンベル人は別段集まるでもなく、普段とそれほど変わらない状態でしたが。また何かあれば伝えます」

「頼む」

うなずき、「ではまた明日」とウラルは部屋を立ち去った。

第一章 5 「戦ってはならない戦」 上

風神はその後すぐ体の主導権を返してくれたが、ウラルにはもう何をやる気力も残っていないかった。なにせマームと別れたのが今朝だ。一日で物事が動きすぎた。心身ともに疲れきり、ウラルは風神の説明やねぎらいの言葉を夢の中で聞く余裕もなく深い深い眠りについた。

目が覚めたのは昼過ぎだ。「疲れているようだから寝かせておきなさいとフギン様はおっしゃっていましたが……」と言いつつ渋い顔をしているメイルに詫び、マルクに、そしてリゼの兄に会いに行きたいと言ってみた。

だがマルクはこの要塞の中で暮らしているが、朝早く崖の上にあるムール禽舎に出勤してしまっただけという。メイルは渋々といった様子で、けれどすぐにムール禽舎に伝書鳩を飛ばしてくれた。すぐに歓迎すると返事がきた。

ウラルはメイルに案内され、ジュールコンラを出てムール禽舎へ向かった。町の中を上へ上へと登っていけば、いずれ禽舎に着くという。

「昨日はずいぶん遅くまでフギン様とお話されていたようですが、何を話しておられたんですか？」

メイルの部屋はフギンの部屋から与えられた客間に帰るとき、前を通っている。ジュールコンラに女は多くないから、足音だけでウラルとわかったのかもしれない。

「起こしましたか？」

「いいえ。起きていました。眠れなくて」

姉の死に様を聞いた直後だ。当然かもしれない。もしかすると起きてきたウラルと会ったとき機嫌が悪そうな顔をしていたのも、自分は一睡もできず朝を迎えたのに話した本人のウラルが昼までぐっすり眠っていたからかもしれない。

「質問に答えていただけですか。フギン様と何を話しておられたんです？」

「尋ねられたことにお答えしただけです。壁の向こうの様子、とか」

「それだけではないでしょう」

「メイルの声が固くなった。」

「何が言いたいんですか？」

「メイルは沈黙した。」

「もしかして、立ち聞きしたんですか？」

「メイルの肩がこわばった。」

「そうなんですネ？」

「あなたは何者なんですか？」

「どこからどこまでを聞いていたのだろう。聞き返した声は震えていた。」

薄暗い路地の階段にメイルの足音が重く響く。近道なのか、道はえんえん薄暗くて細くて急な階段ばかりだ。

「メイル。あなたはフギンが誰か、知っていますか？」

「わけのわからないことを聞かないでください、フギン様はフギン様です。私はあなたが誰かを知りたい。フギン様があんな親しげに誰かと話すのは始めて聞きました」

「おやっと思つた。メイルは何に怯えているのだろう。内容ではなくフギンの口調が気になつているのだろうか？」

「どこまで聞いたんですか？もしかして内容は聞こえていないけれど、口調の雰囲気だけわかつた感じですか？」

「前を歩いていたらメイルが急にくるつと振り返つた。」

「はぐらかさないでください。あなたはフギン様とどういうご関係なんですネ？」

煌々と光る瞳。話さなければここにあなたを置いていく。迷つてしまえばいい。そう脅された気がして、ウラルはため息をついた。この人は行動がいちいち過激だ。

「ごめんなさい、私の口からは話せません。私にも複雑な事情があるんです。わかってください」

「フギンと呼び捨てにする程度には近い関係なんですね？」

「ウラルはしばらく黙りこんだ。どう説明すればいいのだろう。たしかに今のフギンは軽々しく呼べる相手ではない……」

「近かった、です。フギンは変わってしまったから。でも今さら様づけにするのは違和感があるから、そのままにしているだけ」

この答えでウラルがフギンの幼馴染か何かだと思ったのだろう。メイルは顔の険を少しゆるめ、再び前に立って歩き始めた。

*

きつい階段を何度も登ってやっとたどり着いたムール禽舎は崖の中にあつた。町の中腹にぽかっと洞窟のようなものがある思ったら、そこが禽舎の入り口だった。崖の上だと聞いていたからもっと上にあるものだと思っていたが、首をかしげつつ禽舎の中へ入って、ウラルは度肝を抜かれた。

中は巨大な竪穴だった。岩の中が円柱状にくり抜かれて、一番上からはぽっかり空が見えている。壁には人工的な窪み、小部屋のようなものがたくさんあつた。半分はぽかっと穴が開いているだけだが、残りの半分には鉄格子がはまっていて、その奥からムールが琥珀色の瞳とクチバシの先を覗かせている。

「いらつしやい。ラザさんはもうちよつとしたら来るはずだからちよつと待ってくれ。やっぱり美人さんが二人も来ると華やかなあ。階段きつかつたる？」

ここへ来るまでメイルとふたり、ずっとあの殺伐とした雰囲気だったから、マルク的笑顔に心底ほつとした。マルクがウラルの視線を追って上を見あげる。

「ああ、これな。ほら、ムールって海辺の断崖絶壁に巢を作る鳥だからさ。こんな禽舎の方がムールも落ち着くんだったさ」

「雨が降ったらどうするの？」

「ちゃんと排水溝があつて水が溜まらないようになってるんだ。ほら、俺たちが立つてるこの床もちよつと斜めになつてるだろ？ 穴の真ん中が高くて、周りにいくほど低くなつてる」

へえつとウラルは息をついた。

「あの小部屋にはどうやって行くの？」

「岩壁の中に通路がある。騎手が乗つたらあの鉄格子を開けて、竪穴をくぐりぬけて空へ飛び出すつて寸法さ。鉄格子がはまつてないやつは出かけてるムールの小部屋。出て行くときはともかく帰つてくるときはスリルあるぜー。なんせ竪穴を急降下してからトンボ返り打つて小部屋に飛び込むんだからよ。正直、最初は怖くて目も開けてらんなかつた。にしても、ウラルつてムールに好かれるよな。前から思つてたんだけどさ。ずっとこつち見てる」

ムールは風神と深いかわりのある鳥だ。特に純白のムールは風神の使い鳥とされ、大切にされている。ウラルに与えられた風神の加護がムールたちを惹きつけているのかもしれない。

「本当だ、ムールの目の色が変わつてる。新鮮な魚でも持つてるのか、お嬢さん？」

急に割つて入つた声に振り向くと、体中に羽毛をたくさんくつつけた男が立つていた。

「リゼの兄、ラザだ。ムール調教師で、ここの責任者のようなことをやっている。弟のことで話があるらしいと聞いたが」

ラザは小柄だががっちりした男だった。あの巨鳥を調教するのだ、これくらい筋肉がなければ勤まらないのだろう。背が低いのはきつとムール騎手の家系だから、顔も兄弟とあつてリゼとよく似ている。けれどリゼはほっそりしていた。ウラルが服を借りられるくらいにがっちりしているかほっそりしているか、それだけでも随分印象が違つて見えた。

「スヴェルのウラルです」

「ああ、ジンのところの」

ラザの顔が曇った。

「まあ立ち話もなんだ、お茶くらい出そう。こっちへどうぞ」

ラザに連れられ壁沿いの明るい小部屋、休憩室らしいところへ連れていかれた。手伝いか、あるいは見習いだろうか。そこらをちよこまかしている少年に茶の準備を言いつけると、ラザはウラルらに椅子をすすめ、どつかりとソファに座りこんだ。

「ウラルさん。実は俺は、君に会わないことにしようと思っていたんだ。マルクのやつが勝手に返事を出したから、そういうわけにいかなくなっただが」

ラザさん、といさめたマルクをラザはじろりと横目で見た。

「俺はリゼが死んだとは思っていない」

きっぱりとした声で告げられ、ウラルは言葉を失った。

「君はリゼの死を見取ったと聞いている。でもそれは別人だと、俺は思う。君は スヴェル の一員だとさっき名乗ったな？ でも俺は君のことを知らない。リゼとは出会って日が浅かった。そうじゃないか？」

「一年ほど、森の隠れ家で一緒に暮らしていました。ジンやマライと一緒に」

ぴくりとメールが反応し、ウラルの顔をじっと見つめた。ラザが歯を食いしばる。

「そうか。じゃあ思い込みだろう。あれほど小柄な男はあまりいないから、きつと見間違えたんだ」

「ゴウランラ の戦いに出たムール騎手はリゼ一人でした。アスコウラ は連絡が遅れて、戻ってこられなかったんです。ムールに乗った遺体でした。ごめんなさい、顔もちゃんと確認したし、見間違えたはずはないんです……」

「それが思い込みなんだ。君はそれまで戦場に行ったことなんてなかったらう？ 動転していた。冷静さを失っていた。君の証言は正直、あてにできない」

ウラルは固く目を閉じた。まぶたの奥にクロスボウに喉を貫かれ

ていた薄茶色のムールが蘇る。カルロス。その鞍上で幾本もの槍に貫かれていた小柄な男の遺体。アラールがその頬にべつとりとついた血のりをぬぐう。リゼ。

まぶたの奥にターコイズの棺が浮かんだ。ぴったりふたの閉まった、リゼの棺。

「そうですね。たしかに私はかなり動転していたし、見間違いで不思議はないです……」

ラザが見るからにほっとした様子で息をついた。

リゼ、ごめん。きゅっと胸のペンダントを握り締めてウラルはうつむいた。けれどあなたのお兄さんが認めないというなら、私がここであなたは死んだともう一度言ってもお互い辛いだけだと思うから。事実はどうあれ、受け入れると言える筋合いではないから。

少年がお茶を持ってきた。ラザがぐびぐびと一気飲みする。

「ウラルさん。話は変わるんだが、もうひとつ質問して構わないだろうか？ スヴェル にはフギンという男がいたはずだ。リゼと仲のよかった、もと盗賊の青年。あの男はどうなった？ 俺にはどうもあのフギンとこの要塞にいるフギン様が同一人物に見えて仕方がないんだ。双子の兄弟かなにかか？」

びくりと肩が震えるのがわかった。メールが怪訝そうな目でウラルを見ている。ウラルは思わずマルクと顔を見合わせた。

「どうした？」

軽々しく答えられるような内容ではない。けれどどうやってごまかせば。

「い、いや、あんまりにも似てたんで俺たちも驚いてたんですよ。

俺、スヴェルのフギンの幼馴染だったんで。な、ウラル？」

マルクに言われておずおずうなづく。

「フギンは生きています。戦のあと何年か私と一緒にいました。でもその後、行方不明になって。入れ替わるようにして今のフギンが出てきて、でも性格もなにもかも変わって……」

「けれどウラル、あなたはフギン様とお親しいんですね？」

メイルの声が割って入って、ウラルは再び肩を震わせた。ラザが眉をひそめている。

ウラルはマルクを見つめたが、マルクもどうフォローすればいいのやら困っているようだ。落ち着かない笑みが返ってくるだけ。

「ごめんなさい。本当に事情が複雑で、軽々しく言っではいけないことが山ほどあって。どうか聞かないでください」

「そんな曖昧な答えでこちらが納得すると思いですか？」

ウラルはみたび肩を震わせた。「まあまあ」とマルクがなだめたが、メイルはキツと猫さながらの鋭い視線でマルクをにらみつけるだけだ。

どうしよう。別に口止めをされているわけではない。けれど全てを言っただけではない。どこまで話せばいいのだろう。

「すまないが、ここは戦時中の軍施設だ。フギン様が立派な方なのは理解しているつもりだが、正直どこから現れたのやら、謎が多い。このままでは君やフギン様を疑わなくてはならなくなる」

そう言われると余計に答えづらい。ウラルは唇を噛んだ。

「ごめんなさい、でも私が軽々しく口に出していいことではないので。どうか聞かないでください」

結局ウラルはそれだけ言って、頭を下げた。

夕方、釈然としない様子のラザに見送られ、ウラルたちは帰路についた。マルクはどうやら一仕事終えて、ウラルたちが来たら一緒に帰っていいという許可を得ていたようだ。マイルとまた二人きりで帰ったら道中何を言われるかわかったものではないから、ウラルは心底ほつとした。

外は見晴らしがよかった。フランメ町とフェラスルト河が一望できる。町と川の間になにか黒っぽい筋のようなものが見えるが、何なのだろう。昨日帽子屋から町を見おろしたときにはなかったと思うけれど。

「ジュールコンラ に戻ったら」
歩きながらの声に振り返ると、マイルがウラルをまっすぐ見据えていた。

「あなたのことをフギン様にお尋ねするつもりです。構いませんね？」

「ええ。ただ何をどの程度話していいのか、私には判断がつかないだけだから」

ウラルが動揺するのを予想していたのか、マイルが怪訝そうに眉をひそめる。ウラルは苦笑を浮かべてみせた。

「私のせいでフギンまで疑われるとは思ってなかった。たしかに私は怪しい存在かもしれない。でも……」

「私はフギン様に全幅の信頼を抱いています」

きつぱりとした声にウラルは首をかしげてマイルを見た。マルクもきよとんとしている。

「フギン様の信頼を受けているあなたも悪人だとは思わない。ただ、あなたはなんだか気に食わない。それだけです」

つんとそつぽを向かれ、ウラルはなにがなんだかわからず目をしばたいた。マルクがいきなり腹をかかえて笑い出す。

「なにがおかしいんですか！」

「いやー、ほんと正直だなあと思っただけ。いろんな意味で」

「悪いですか」

「いいところ半分、悪いところ半分ってとこだな。とりあえず普通は言わない」

にやつと意味深な笑みを浮かべたマルクをメイルがにらみつける。平手打ちでも食らわせてあげましょうか？ マルクが両手をあげて降参のポーズをした。

「でも、私はちよつと悲しいな」

ウラルは軽くメイルに笑ってみせた。

「私、半分はフギンに会うためにここへ来たんだけど、もう半分はあなたに会うためにここへ来たの。だから嫌われるのはすごく寂しい」

「私に、ですか？」

そう、同じ 風神の墓守 に。そう答えかけ、あわてて口をつぐんだその時。

ウラル、聞こえるか。

いきなり耳の奥にジンの声がして、ウラルは耳に手を当てた。マルクとメイルが怪訝そうにウラルの顔を覗き込む。

「ウラル？ どうした、何か聞こえたか？」

「ごめんマルク、少し黙っていてくれる？ すぐ説明するから」

マルクが戸惑いを色濃く浮かべた瞳でウラルをじっと見つめている。メイルはといえば、もう完全に不審者を見る目だ。

壁 の方で動きがあった。百人近くのリーグ人が橋を渡ってこの町へ向かっている。ほぼ全員が 壁 を作っていた人夫だ。

「壁 の向こうから人が、ですか？」

マルクとメイルがぴくりと反応した。さすがに聞き捨てならない台詞だったのだろう、「いったい誰と話しておられるんですか」と

詰め寄りかけたメイルを、ウラルが話している相手を察したらしいマルクが血相を変えて止めた。

工事が終わったから町へ行く許可を出すと言われたようだが、どうも様子がおかしい。爆笑していたかと思えばいきなり殴りあいの喧嘩が始まる、かと思えばいきなり道端に倒れて眠り込む。おそらくほとんどが麻薬中毒者だ。

「そんな。この町へ入ってきて大丈夫なんですか」

大混乱になるのは間違いないだろうが、あれはリーグにはない薬だ。具体的にどうなるかは俺にもわからない。俺はもう一度、様子を見てくる。お前は ジュルコンラ に戻って火神に連絡の取りやすい位置で待機してくれ。

風神の声は人に憑依した状態の火神に届かない。ウラルら 墓守を通じるしかないのだ。

メイルにはお前が俺の声を聞いているということとは説明して構わない。だがフギンのことは火神本人ではなく、お前と同じように火神の声を聞いているとでもごまかしてくれ。できるだけ何も話さないでほしい。頼んだぞ。

突風とともに耳の奥の声が遠ざかった。

「マルク、大至急フギンに伝えて。一番足の速いあなたが行くのがいいと思う。私たちもすぐに後を追うから」

ウラルは急いで風神に言われたことを伝えた。ウラルの相槌で大体的内容はわかっていたのでマルクはすぐに理解してくれた。が。

「女の子ふたり残していけるか！ 急いで禽舎に戻るぞ。伝書鳩を飛ばす」

「私は ジュルコンラ に戻らなきゃならないの。フギンのそばで待機するようにって指示を受けてるから」

「なんだって」

「マルク、とにかく一刻も早く急を伝えて。急いで伝えなきゃ何もできないままあの人たちが来ちゃう。見て、川のほう。あの黒い筋みたくに見えるの、壁 の向こうの人たちじゃないの？」

マルクがそちらを見、ぎよつと肩をこわばらせた。さすが巨鳥乗り、目はかなりいいようだ。

「メール、話は聞いてたろ？ 禽舎に行つて伝書鳩を飛ばしてくれ。俺はウラルと一緒に ジュルコンラ へ戻るから！」

メールは医師、読み書きもできるはずだ。水を向けられ、メールが固い顔で後ずさつた。

「わかるな？ 壁 の向こうから百人弱の人が出てきて、この町に向かつている。ほとんどが麻薬中毒者らしく様子がおかしい。警戒されたしと、ヘリアン様宛てでそう書いてくれ」

「どうして彼女の言い分を信じるんですか？」

固い声。マルクはわけがわからないらしく顔をしかめた。メールの顔が青ざめる。

「いきなり立ち止まつて声が聞こえると言い出した、そんなわけのわからないものを、どうしてあなたは無条件に信じられるんですか？」

ウラルの頭がおかしいと言いたいらしい。マルクの顔に納得が浮かび、ついでいらだちが浮かんだ。どうする、と言いたげにウラルを見やるマルク。メールの綺麗な顔が歪む。

「メール。許可が出たから明かすけど、私は……」

「すみませんが私は帰らせてもらいます。ついていけない」

ウラルが言い出したのを聞きもせずメールは身をひるがえし、ものすごい勢いで路地に駆け込んでしまった。

「メール！」

思わずマルクと顔を見合わせる。この非常時にいきなり一人で駆け出すなんて。

「追おう。一人にしちやまずい」

二人して急いで追ったが、メールの足は女とは思えないほど速かった。マルクは始めこそウラルを気にしていたものの、置いていかれそうになると慌ててスピードをあげた。ウラルは長旅の疲れもあって息が続かない。あつという間に置き去りにされてしまった。

「悪人だとは思わない、でも狂人だとは思う。近づきたくない。そういうこと?」

メールが消えていった方へ話しかけてみる。むろん答えは返ってこない。いくらメールの足が速く土地勘があるといても、男のマルクにはかなわないはずだ。もついい加減追いついているだろう。

息を整えつつ家々の間から町を見下ろした。黒い筋はかなり町に近づいている。

「ごめんマルク。私、行くね」

マルクもウラルの考え方くらい分かっているはずだ。止める人がいなくなれば、ウラルは一人で ジュルコンラ へ向かう。どうかメールの時のように追ってこないで。本当に急用なのだから、急いで禽舎に戻って伝書鳩を飛ばして。ウラルは祈りながら再び駆け出した。

第一章 5 「戦ってはならない戦」 下

「お嬢さん、そんな急いでどこ行くんだい？ ミント水飲んでいきな！ 安くしとくよ！」

のどかな町を息の続く限り走って走って。ウルルが町門前の大階段にさしかかると、麻薬中毒者の群れが町門にさしかかるのがほぼ同時だった。

間に合わなかった。マルクの連絡も遅れたらしく、ジュールコンラの門は蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。見張り台には指示を飛ばすダイオの姿もある。

壁 の向こうから来た麻薬中毒者を締め出すか？
けれど相手はまごうことなきリーグ人だ。武器を持っているようにも見えない。

マルクからは警戒せよとの手紙が来た。風の眼を持つ女神からの指示という。

だが相手は単純に酔っ払ったリーグ人にしか見えない。麻薬？
なんだそれは。花の汁をなめると妙な具合に酔っ払う？

どうする。どう対応すればいい？

指揮を任されたらしいダイオの混乱が見えるようだ。この町の守りは鉄壁、けれど誰もかもがそれに依存しすぎた。ジュールコンラの大将はリーグの軍神だ。リーグ人相手の戦いは避けなければ。戦ってはいけない。けれどあの見るからに異常な集団を相手にどうすればいい？

ウルルは急いで大階段を駆け下りる。だが大階段は野次馬でいっぱいだ。階段で人を突き飛ばすわけにもいかず、ウルルは疲れた足を叱咤しつつ必死で人ごみを掻き分けた。

どうしてこんなに人が集まっているの。死ぬかもしれないのに。

ジュールコンラ の門兵が門前の広場から野次馬を追い出している。追い出された野次馬が見晴らしのいい大階段に居座つて一部始終を見ているというわけだ。

大階段の両脇に目を走らせる。昨日は気づかなかつたが、たしかにびっくりするほど金物屋が多かつた。鍋をはじめとした調理器具を扱う店、刀を扱う店、カナヅチなどの工具を扱う店。三軒に一軒は金物屋だ。隣り合った店やほとんど品物を置いていない店も多いけれどどれだけ儲からなくても決して店は潰れない。金物屋はこの町の避難所だ。それがわかつているから人々は堂々と野次馬をやつていられる。

「門の前に立て。一度止める」

結局ダイオはそう指示したらしい。町門の前に木でできた簡単な柵が並べられ、その前にジュールコンラ の門兵が五人ばかり並んだ。

「我輩はこの門の指揮を任されているダイオ・エタオクと申す。話を伺いたいのだが」

ダイオの張りあるバリトンが大階段に反響した。

応じる麻薬中毒者の声は聞こえない。ただ酔っ払いそのものの様子でこねているのはわかる。壁 の向こうのことは何も知らない、自分たちはここで楽しく酒が飲みたいだけなんだ。久しぶりの休みなんだよ。金もあるし。何がいけないんだ？

ダイオが「話を聞かせてほしいんだ」ともう一度食い下がる。その瞬間だつた。

麻薬中毒者の顔つきが豹変した。にこにこしていたのが一瞬にして悪鬼の形相に変わったのだ。さしものダイオも一步身を引いた。そのダイオの、かなり上背のあるダイオの胸倉をひとりぐいとひつつかむ。

「何が悪いんだ！ ああ？」

すっとんきょんな大声に野次馬が静まり返つた。ダイオの胸倉をつかんだ手は十分に力がこもっていなくつたとみえダイオがすぐに

はじき落としたが、彼の大声は止まらない。下品な罵声が大音響で溢れ出る。三秒前までへらへら笑っていたのに。

つられたのか、その場にいた別の男らも急に肩をいからせ門兵につめ寄り始めた。

「警戒態勢！ 門を閉じろ！」

ダイオが声を張り上げる。とたん、麻薬中毒者が門に殺到した。むろん ジュルコンラ の門兵も黙ってはいない。待機していた男らが武器を手に門の両側から飛び出してきた。さすがに身の危険を感じたのか野次馬が悲鳴をあげて逃げ出した。

「くそつたれ！ お前たちだけ甘い蜜吸いやがって。面倒ごとは全部 壁 の向こうに押し付けて自分たちだけのうのうとしてる気かよ！ てめえら殺す！」

罵詈雑言の中からちゃんと意味を成した言葉が耳に飛び込んできて、ウラルは人波にもまれながら声の主を探した。顔を真っ赤にして門兵に詰め寄る若者。

てめえら殺す。何かウラルの胸を突いた。

「なにをしている、警鐘を鳴らせ！ 避難を呼びかけるんだ！」

ダイオが怒鳴る。瞬間、崖の上でのエヴァンスのセリフが蘇り、ウラルは目を見開いた。

（あの壁で南部の一部をリーグ国全体から分離する。そしてそこに圧力をかけ、恨みをあおる。そしてその恨みを比較的楽な暮らしをしている北部に向けさせる）

エヴァンスは警告してくれていた。

「ダイオ、だめ！ 警鐘は鳴らさないで！ 鳴らしちゃいけない！」

ウラルはとつさに叫んだ。が、野次馬の悲鳴やら罵声やらでかき消されてしまう。

「敵襲の合図は鳴らしちゃいけないの！ ダイオ！ その人たちを敵とみなしちゃいけないのよ！ だって、ベンベル人の狙いは……！」

ウラルの声が届いていたはずもないのにダイオが振り返った。群

集にもみくちやにされながらも振り向き、まっすぐに、やっと階段を下りきったウラルを見つめた。野次馬が駆け去った大階段の最下部にひとり立つウラルを。

不意に、まともに立っていられないほどの暴風がその場の全員を包みこんだ。

「ベンベル人の狙いはリーグ人同士をいがみあわせ、戦わせること。これは最初の布石。だからダイオ、戦ってはいけない。この人たちの恨みを買ってはいけない」

聞こえていることを信じて続けた。

風が耳元でうなっている。興奮した頭を冷まし、冴え渡らせていく。

風神が味方してくれている。

「ウラル……。いや、あなたは風神か？」

低い、ごくかすかな吹きが耳の奥にこだました。暴風に髪を乱しながらウラルはダイオに微笑んだ。

「私、風神の墓守 が調停します」

急にその場が静まり返った。麻薬中毒者も含め、だれもかれもが口を閉ざし、動きを止めて、ウラルを見つめている。聞こえるのはただ、風の音。

「武器をおさめてください。門も閉めないで。彼らを町に入れてから、門を閉ざしてください。彼らはベンベルのスパイでもなんでもない。ただ薬のせいで情緒不安定になっているだけなの」

「あのかわいいねーちゃんも言ってるじゃないですか。通してくださいよだんなア」

彼らは再びダイオに媚び始めた。

ダイオがウラルを見つめる。ウラルがうなずくとダイオはうやうやしく礼をし、門を開けるよう門番たちに命じた。互いに困惑の視線を交わしつつ門番たちが門を開けると、奇声をあげながら麻薬中毒者たちがなだれこんできた。

「でも普通の状態でないのも確かだから、教会で保護するのがいい

でしょう。一日二日、麻薬の効果がきれるまで。禁断症状といって、麻薬がきれると暴れます。そこさえ乗り切れば、彼らは普段の状態に戻るはずですよ」

「へー。俺あバカだから難しいことわかんないけど、ねーちゃんと一緒に教会でお祈りすりゃいいってわけかい？」

「ええ、一緒に行きましょう」

「そりゃないよお、酒場に行かせてくれよお。ビールかけて『風神万歳！』って叫ぶからさあー。それでいいだろ？」

自分が普通の状態でないことは説明しても認めてもらえそうになり。ウラルが困って黙っていると、彼の顔から笑みがすーっと消えた。

「俺らをどこへ連れていく気だ？」

また急に肩をいからせ、彼はウラルに詰め寄った。

「教会へ。今のあなたは普通の状態じゃない。だから」

「ふざけんじゃねえ！」

襟首をひねりあげられた。

「ウラル！」

「刺激しないで。静かにしてください」

ウラルが静かに門番を制すると、また彼の表情が急展開した怒りから、恐怖へ。

「あんたは誰だ？ あんたこそ普通じゃない！」

「ウラル、危ない！」

なぜか大階段の上のほう、野次馬の中から警告が飛んできた。瞬間、彼は声にならない絶叫をあげながらポケットに手をつ込んだ。短剣。武器は持っていないと思っていたのに。

刺された。

「ウラル！」

「来ないで。急な動きはしないで」

もう一刺し。

「うわあああああなんでも死なないんだよ！ 刺したのに！」

刺したらすぐに死ぬんじゃないのかよおお！」

さらに振り上げられた手を誰かがつかんだ。振り返った男の腹に鋭い蹴りが入る。声もなくすぐおれた男を突き飛ばし、彼はよろめいたウラルをがっしり支えた。

「なぜこんな無茶をした！」

彼の髪は褐色、リーグ人よりやや明るいが目立ちほしくない。暴風に飛ばされたのか帽子はかぶっていなかった。さえぎるものを失った青い瞳が。

「エヴァンス……」

「どうして」と続けようとした喉は、声の代わりに血を吐いた。まずい。このままでは。

「この野郎っ！」

仲間を傷つけられ、麻薬中毒者たちが沸騰した。エヴァンスに向かってくる。おぼつかない足取りで、近くの金物屋から持ってきた武器を手に。

エヴァンスの腰のあたりで金属音がする。ウラルはその腕をぎゅっと握った。

「エヴァンス、剣を抜かないで……。あなたはベンベル人、この町を混乱させる側の人間だとはわかってる……。でもお願い……」

エヴァンスの体がぴくりと震えた。ウラルも震えている。刺されたショックで体がどんどん冷えていく。息もちゃんとできなくなってきた。

エヴァンスが剣の柄を離し、ウラルのポケットに手を突っ込んだ。犬笛。

悲鳴とともに人垣が割れる。異変を感じてそばにいたのか、エヴァンスが犬笛を吹くなりアラール八が駆け込んできた。

「アラール八、ウラルの命にかかわる。乗せろ！」

エヴァンスが叫ぶなりウラルを横抱きにし、かたわらにあったベンチを蹴る。アラール八は戸惑った様子でエヴァンスを見つめたが、事情を問いただす余裕はないと判断したのだらう。エヴァンスを背

中で受け止めると、猛然と門へ駆け出した。

「いてえ！ いてえよごらあ！」

ふらふらしながら剣を振り回しているのだ、誰かが誰かを切ってしまった。

「なにしやがる！ いてえ、いてえよお……。殺す！」

同士討ちが始まった。興奮しきった頭では敵味方の区別もつかないらしく いや、もはや敵味方などないのだろう。斬る。斬られる。報復する。その人がまったく無関係であっても剣を振るわずにいられない。攻撃された門番たちが慌てて剣を抜き応戦し始めた。

「やめて……」

ベンベル人たちが描いた布石。これがいずれ、リーグのいたるところで見られるようになる。

「戦わないで……！」

ウラルはもうかすかなうめき声しか出せない。けれどその瞬間、争っていた人々がほんの一瞬、手を止めてウラルを見た。まるで耳元で怒鳴られたかのように。

「兵を配す！」

その一瞬の沈黙の中、朗々と声が響き渡った。いつからいたのか門の上に隻腕の軍神の姿がある。

「カール隊、階段と周辺の路地を固めよ。アズ隊、半数は武器屋の前を固めよ。残る半数はそのイッペルスが出た後ただちに門を閉じよ。ダイオとその部下は彼らから武器を取り上げ、沈静化せよ。抜刀は許さぬ。行け！」

フギンはウラルの言葉をちゃんと聞き届けてくれていた。

アラーハが門を駆け抜ける。ごぼ、と今までこらえていたものが喉を突いた。反射的に押さえた手指の間から噴水のように血がほとばしる。

「ウラル」

背中越しにエヴァンスの体が固くなるのがわかった。

口と鼻からあふれた血が胸や腹まで汚していくのを感じながら、

ウルルはエヴァンスの胸にくずおれた。

第二章 1 「交錯のとき」 上

エヴァンスはその後すぐアラール八を止め、道端に上着を敷くとウラルを横たえた。

エヴァンスはものも言わずに傷口の周りの服を破くと傷を診、傷口をきつく縛った。

「ウラル。まだ聞こえているか」

ウラルは閉じていた目をぼんやり開いた。視界はひどく濁っていて、エヴァンスとアラール八のシルエットしかわからない。ウラルの額に浮いた脂汗を、口元の血をエヴァンスが不器用にぬぐっていた。

「……致命傷……そうでしょう……？」

「これだけ時間が経っているが、お前の意識ははっきりしている。大丈夫だ」

ウラルはうつすらと笑ってみせた。

「……じゃあ、これだけ言わせて……」

「あまり話すな。力を残せ」

言いつつエヴァンスはウラルの口元に耳を寄せた。長い髪がウラルの胸元にかかる。

「もし私の容態が……危なくなったら……そのときは……」

「何を言っている」

「そのときは……いいよ……私の命が……いるんでしょう……？」
ぱつとエヴァンスが顔を離し、ウラルを見つめた。

至近距離の青い瞳。

「……わかった」

ウラルの瞳に何を見たのか、エヴァンスは不思議なほど静かにうなずいた。

「楽にしてやる。その時がきたら」

ウラルはうなずき、目を閉じた。

見慣れた丘が眼前いっぱいに広がった。

*

エヴァンスはフェラスルト町を振り返った。町門は閉ざされ、中からはまだ奇声が響いている。とてもウラルの治療を頼める状況ではない。

森の中にはシャルトルがゴーランを連れ、身を潜めている。だがそこへ戻ったところでウラルの治療ができるとは思えない。

第三者の協力を仰ぐほかがない。ならば。

「アラーハ、一昨日の孤児院へ向かってくれ。全速力だ！」

アラーハは疾駆する。その背に息子を殺した男を乗せて。虫の息の娘を乗せて。孤児院へ。マームのもとへと。力の限りに駆け続ける。

**

丘は夕暮れの中にあつた。丘を下りきった先、村があつたところも林があつたところも草原になって、ずらりずらりと棺が並んでいる。

ウラルはこれだけの人に出会った。一緒に暮らした人、友達だった人、顔しか知らない人。地平線のかなたまで埋まるほどの人に出会った。

ウラルは棺の前にひざまずいた。フギンの棺をのぞきこみ、ダイオの棺を見つめる。フェラスルト町の門を守っていたひとりひとりの棺を探す。麻薬中毒者たちの棺を探す。

どの棺の蓋も閉まっていなことを確認して、ウラルはほっと息をついた。

**

マームが孤児院の前でいたずらっ子のジェシを叱っている。しどろもどろに視線をさまよわせていたジェシが孤児院に向けて疾走してくる巨獣を見つけた。

「見るな。今すぐ家の中に戻れ。ほかの子供にもこちらを見ないよ。言うてくれ」

立ちすくむ少年にエヴァンスは言い、マームの前に降り立った。

「アラーハ！ どうしてこんな人を連れてきたの？ ここは孤児院よ！ わかってるでしょ！」

マームがジェシの腕を引っ張って背後にかばう。死体を抱いていると思っただろう。孤児院のドアの前に仁王立ちになってエヴァンスをにらみつけた。

「迷惑は重々承知だが、どうか助けてもらえないか。ウラルが瀕死だ。場所と治療道具を借りたい」

「ウラル？ 聞き間違いじゃなきゃ、あなた今ウラルって言ったわよね？」

「ウラルが瀕死だ、助けてほしいと言った。一分一秒を争う」

「ウラルが、瀕死？」

マームがエヴァンスに駆け寄った。もうウラルは脂汗すらかいていない。乾ききり冷えきった土気色の顔。マームが声にならない悲鳴をあげ、ウラルの頬を両手で挟みこんだ。

「まだ生きている。場所と道具を貸してくれ！」

エヴァンスが声を荒げた。おびえてマームの背にすがったジェシの手を握り、マームは唇を引き結ぶ。肝っ玉母さんは子供の前で動揺してはいけない。

「ジェシ、おばあちゃんとエリス呼んできて。こっちよ！」

だっとマームが廊下を駆け出した。

後ろに人の気配を感じて振り返ると、黒衣の男が立っていた。ウ

ラルはそつと歩み寄り、その大柄な体を抱きしめる。

「泣かないで」

ジンの姿をした人の胸に顔をうずめ、そのぬくもりを腕に抱いて。「これは私の意志だから。あなたが手伝ってくれて本当にありがたかった。私ひとりだけじゃ止められなかった」

「無茶をするなど言っただはずだ」

胸から悲しい振動が伝わってくる。ぬくもりが伝わってくる。けれど、鼓動が聞こえない。

ごぼ、とラルルが血を吐いた。血のかたまりが喉につまらないよう顔を横に向けてやりながら、エヴァンスは奥歯を噛み締める。

エヴァンスはすらりとシャムシルを抜き放った。

「なにをするの」

「ラルルの遺言だ。もう助からなくなれば、わたしの手で殺してほしいと」

「何言ってるのよ！ 助からないなんてどこをどうやったらわかるっていのー！」

「瞳孔を見てみる」

マームがおずおずとラルルの目を開かせ、ランプの光を当てた。

「光を当てても収縮しないだろう。もう息もしていない。心臓だけがかろうじて動いている状況だ」

「うそ……」

「そこをあけてくれ。ラルルの遺言だ、とどめを刺す」

目を見開き唇を震わせるマームをそつと押しつけ、エヴァンスはラルルの胸の上に剣をかかげた。

「ごめんなさい。あなたは私の生を願っていたのに」

けれどエヴァンスはウラルの胸の上で剣を掲げたまま、微動だに
しなかった。

「わたしの負けだ、ウラル」

剣をおさめ、ウラルの首筋をさぐる。ごくかすかな鼓動をさぐり
あてると、静かに目を閉じた。つぶさぬようにそっと、けれどごく
弱い鼓動を感じるだけの力で。二本の指にすべての意識を寄せて。

エヴァンスがウラルの首筋から指を離した。右の手首に指をあて
がう。もう一度首筋をさぐる。丹念に脈を探す。けれど。

「わたしの負けだ、ウラル。わたしはお前を殺せなかった……」

第二章 1 「交錯のとき」 下

ウラルはジンを見上げた。かすかに笑って、かすかに泣いて。

今まではその気になればこの丘から出られる感覚があった。以前アラール八に殴られた直後は「戻れない」のがわかったが、ちゃんと体が回復すれば丘を出られた。けれど今は。

ジンがウラルの髪をやさしくなで、ウラルを手とってかたわらの白い大理石の棺に触れさせた。マームの棺だ。空っぽの底に触れたとたん、ひとりでウラルの頬をぼろぼろ涙が伝い始めた。

「マームさん……」

ウラル、ウラル。マームがひたすら呼んでいる。棺にはマームの感情が詰まっていた。呼んでいるのに実感がない。そこにいるのがウラルでないことをひたすら願っている。なのに涙が止まらない。

ウラルはジンを見た。ジンが肯定のうなずきを返してくる。

この棺には力がある。人の生死を知る力が。そして人の想いを伝える力が。

ジンにうながされ、次はアレキサンドライトの棺に触れた。

「アラール八」

孤児院の外にいるアラール八はウラルの状態をよく知らない。だがマームの号泣を聞いていた。ウラルの傷の深さを知っていた。だから必死に悲しみを押し殺し、地神と風神に祈りながら、静かにそこに伏せている。本当は立つだけの力が四肢にこもらないのに気づかないまま頭をうなだれ、力なく垂れ下がった耳を震わせながら。

ジンがサファイアの棺を見る。ウラルはゆっくりと棺に手を乗せ、目を閉じた。

*

エヴァンスは静かに場を譲った。マームがそこにぺたんと座り込

む。ウラル、ウラル、と名を呼びながらウラルの頬を両手で挟みこんだ。ウラルは応えない。何の反応も返さない。

マームはウラルの胸元に直接耳を押し当てた。長いことそうして耳を押し当て、鼓動の聞こえる位置をと細かく頭を動かしていたが

やがてマームの目じりから耳にかけてを透明な雫が流れ落ちた。

「なんでよ。一昨日別れたときには元気だったじゃない！ ウラル、ウラル……！」

わあっと子供のような声をあげ、マームはベッドに突っ伏した。

「何するつもりだったか知らないけど死んでどうするのよお、うわああああん！」

遠慮がちなノックの音。マームの泣き声を聞きつけたのだろう。

エヴァンスが返事をする。と老婆が部屋に入ってきた。

「存分に泣いておやりなさい、マーム」

老婆がしゃくりあげるマームの背を優しくなで始めた。

「あなたも。泣くことはなんら恥ではない」

深い憐れみを含んだ目でエヴァンスを振り返る。エヴァンスはゆつくりと首を振った。

「今さら人のために泣くなど、わたしにできはしない」

「おそれることはない。あなたがベンベル人の兵士で、多くの修羅場をくぐってきたことくらいはわかっているよ。警戒することも、取り繕うこともない。リーグの娘に涙するのも、ここでは恥ではない」

エヴァンスはまっすぐに老婆を見おろした。只者ではなさそうだとはいたげに。エヴァンスは髪を染めている。日没後の暗い室内では瞳の色もわからないはずだ。人の感情を読む老婆はそつとエヴァンスの手をとり、ウラルの手に重ねさせた。

「あなたは泣いている、それは間違いない。ただ心で泣くのと体で泣くのは、似ているようだが違うもの。本当にかなしいときには、両方が必要だ。でなければ押しつぶされる」

「それはこの娘に言っしてほしい。……かなしみに潰された娘だ」

老婆が意を問う視線を向けたが、エヴァンスは黙ってウラルの顔を見つめるだけで答えない。けれど老婆は何か納得したようにひつつつなずき、ねぎらうようにウラルの髪をやさしくなでた。

「ごめん、おばあちゃん。おちつくまで外、でてる。ささえてくれる？」

「無理に落ち着くことはないんだよ」

「でもこのままじゃ私、気が狂いそう。ちょっとひとりになりたい」老婆がうなずき、マームに手を差し伸べる。エヴァンスが老婆をさえぎりマームの脇の下に手を差し入れると、ぐいと立たせた。よろよろしているマームを支えて廊下まで連れていく。「どこの部屋へ行くんだ」と尋ねるエヴァンスにマームは力なく首を振り、老婆に支えられてふらふら食堂の方へ歩いていった。

エヴァンスは静かにドアを閉め、ウラルを振り返った。重い靴音を響かせて血みどろのベッドの脇に立つ。

ゆっくりと身をかがめ、エヴァンスはウラルの側頭部の傷跡に触れた。我を失ったアラールに殴られ、エヴァンスが焼いて止血した傷。髪に隠れてはいるが、ひきつれた傷跡はかすかにもりあがり、消えることはない。

エヴァンスの手がゆっくりと下へおりていく。かつて絞めた首、頸動脈を軽く押さえてありもしない脈を診た。服の上から二の腕の矢傷に触れる。アラールを狙ったシャルトルの矢が立ちはだかったウラルに刺さった。背中に残る鞭の傷。わざわざ起こしてまで触りたくないが、監獄で鞭打たれ、派手に化膿した傷が今も無数に残っているはずだ。

そして乳房のやや上にある真新しい傷。麻薬中毒者に二度刺されたうちの一回で、肋骨に当たって深くは刺さらなかった。けれどあとの一回、腹部の傷は深い。相当に、深い。

ぶるる、と窓の外で音がした。

「アラール」

窓を開けて巨獣を呼ぶ。窓の下で座り込んでいたアラールがよる

めきながら立ち上がった。エヴァンスはそつとウルルを抱き上げ、アラール八の鼻先が届く位置へ連れていった。

「出血がひどすぎた。手遅れになってしまった」

ウルルの口元に鼻を寄せ、ウルルの胸元に耳をあてがう。めまいを感じたのだろう、アラール八は四肢をしつかり踏ん張ると、固く固く目を閉じた。黙祷するかのように。痛いものをこらえるように。

エヴァンスはウルルを再び横たえるとベッド脇の椅子に腰かけた。「アラール八。わたしは、ウルルは本当は死にたかったのではないかと思う」

ぶるり、と咎めるようにアラール八が鼻を鳴らす。耳を伏せ、控えめな怒りを浮かべたアラール八に見向きもせずエヴァンスは続けた。

「フギンと共に逃げるウルルをわたしは二年、追い回した。お前も知つての通り、セテーダン町ではあと一步のところまで追いつめた。ウルルは必死に抵抗した。『ジンに救われた命をこんなところで失いたくない』と。だが」

エヴァンスはもう一度、ウルルの側頭部の傷に触れた。

「その一方で、ウルルはぞつとするほど簡単に命を投げ出すことがあった。怒り狂ったお前の前に飛び出した。麻薬におかされ理性を失った百人の前に立ちはだかった。必死だったのだろう、だがそれだけで命は掛けられない。わたしも新兵のころは戦場がおそろしかった。ウルルは白刃の前に無防備な身をさらしながら、何も恐れていなかった」

アラール八が咎めるように鼻を鳴らした。さつきよりは控えめに。

「ウルルにとつて、死なないことは義務だったのでないかと思う。アラール八が四肢の力を抜き、どっかりと窓の下に座り込んだ。へたりこんだのかもしれない。エヴァンスがウルルの髪をなでる手を止め、ゆつくりと目をそむけた。

「ウルルの人生は凄惨すぎた。お前は怒るだろうが、ここで終わりを迎えられるよかったのかもしれない。ウルルは最期に死を願った」

「私、本当に死んだのね……」

ジンがウラルの背をなでている。ぼろぼろ涙をこぼすウラルの顔を覗きこみ、不意にぎゅっと抱きすくめた。

「いや、お前はまだ完全には死んでいない」

低いささやきにウラルは顔を跳ね上げた。

「寸前で俺が引きとめた。心臓は動いていない、息も止まっている、けれど命がまだ失われていない状態だ。俺が息を吹き込めば、お前はまだ生きられる」

風神は生老病死を司る。その息吹はすなわち、命そのものだ。けれどジンの声は暗かった。

「だが、そうすればお前は今度こそ普通の人間には戻れなくなる。今まではお前に拒否権を残せるぎりぎりのところを守ってきたつもりだ。お前が記憶をすべて失えば普通の人間に戻れるところを越えないようにしてきた。だが、俺の息吹を受ければもう戻れない。お前は生と死のはざまに常に身を置き、死者の声を聞くようになる。俺と一心同体になり、歳をとらず、子を成せない体になって」

固く抱きしめていた腕をほどき、ジンはまっすぐにウラルを見た。「この状態が保てるのは一日だけだ。わずかな時間しか与えられなくてすまない。それを過ぎれば、お前は自動的に死ぬ」

強い目だ。険しい目だ。けれどどこまでも悲しい目だ。

「選んでくれ。生きるか、死ぬか」

びゅおっ、と風が鳴った。

第二章 2 「はざま」 上

やがて「ウラルの体を綺麗にしてやりたい」と湯や着替えを手にマームと老婆が戻ってきた。エヴァンスは黙って席を外し、窓の外にアラールと並んで座りこんだ。

マームと老婆は血みどろになったウラルの服を脱がせ、体をアルコールで清めて、喪服に着替えさせた。葬送される者もする者も共に風の女神と同じ服をまとう。それがこの国のならわしだ。

死化粧をほどこし、マームが涙をこぼしながらウラルの腕を風神の加護を願う形、豎琴を抱くような格好に整えた。ウラルの体が硬直しないことに、その胸がぬくもりを残していることに　この時点では誰も気がついていない。

*

「俺は席をはずしたほうがいいか？　それともいたほうがいいか？」

ウラルは答えようととして、口をつぐんだ。

ひとりになるのは不安だった。ジンの袖をつかんで「ここにいて」と言いたかった。けれど。

（ウラルにとつて、死なないことは義務だったのではないかと思う）
ジンの顔を見られない。このひとはジン本人でないことはわかっている。けれど、「生きる」と言い遺して戦場に散った人の目を、今はとても見られない。

（ウラルは最期に死を願った）

エヴァンスに殺されかけたときは全力で生きたいと願っていたのに。

ウラルの気持ちを知ってか知らずか　いや、相手は「流れ移るう形のないもの」、風や命や心を司る女神だ。当然ウラルの心くらい読めているのだろう。ウラルと背中合わせになるよう水晶の棺に

腰かけた。

「ジン。もし私が死ぬと言ったらどう思う?」

「哀しいな、もちろん。だがお前はそれを選んでいい」

「うそつき」

ジンは黙り込んだ。

「あなたは選択肢を与えてくれているつもりかもしれない、でも私には最初から選択肢なんてないの」

「それなら一日という時間は用意しなかった。お前の同意がいるにしても、最初から生きると言っている。今この時点で選択を迫っているさ」

でも、とウラルが反論しかけると、ジンが哀しげに笑うのが背中越しにわかった。

「そうだな。お前が生きることと死ぬことと、両方選べる立場にいると知ったら、エヴァンス、フギン、アラール、マーム……誰もがお前が生きることが望むだろう。俺もお前に生きてほしい。それを全部振り切って死を選ぶほどお前は無情じゃない」

マームの泣き声が耳の奥に蘇り、ウラルはぐっとうつぶむいた。

「でも、私は」

ジンは黙っている。ウラルはそこからの言葉が浮かばないのに、ジンが待っているのが伝わってくる。

「ジン。どうして私を選んだの?」

ジンは答えない。ウラルは構わず続けた。

「私は一度だつてちゃんと迷わなかった。生きていた本物のあなたもそういう風に私に選択を迫ったことがあった。北で何かあったと言われて、私はジンと一緒に行くか、どこか暮らせる村を探すか、選択を迫られた。でも、私は迷わず一緒に行くと言えた」

「ああ、そうだな」

「そんなこと、沢山あった。もう一度同じ選択を迫られても、私はやっぱり迷わずに同じ答えを出す。でも」

ジンは黙ったきりだ。

「どうして私はここにいるの？ 私、ごく普通の選択しかしてない。なのにどうして私は 風神の墓守 になったの？ 私はやっぱり生きる選択をすると思う。普通の選択しかしてないのに、どうして私は『人ならざるもの』にならなきゃならないの？」

無言。

「私はずれはじめたのはいつ？ 村が襲われたあの日から？ ジンと一緒にいく決断をしたあの日から？ この墓所に初めて来たゴウランラの戦い のときから？ もう、わからない。私、普通に生きたい。普通の人生を送りたい」

視線。

「普通に生きられるなら生き返りたい。でも今までよりも『普通じゃない』ことになるなら、私……」

「生き返れば、どうあっても『普通』には戻れない」

断言された瞬間、涙がこぼれた。わかつている。けれど。

「選択肢はあるのに、私は絶対にひとつしか選べないの。迷うことさえできないの。今も生き返る前提で、でも怖くてたまらない……」
ジンがまた肩越しにこちらを見たが、そのまま動かないでくれた。ウラルはゆっくり涙をぬぐう。

「ジンが生きていて今の私を見ていたら、生きろって言うと思う？」

「ああ」

涙に濡れた指でそつと水晶の棺をさする。ガラスのような透明な棺を。その中に含まれた白い霧を。

「自分が先に死んでしまったのに」

本来なら棺におさめられた遺体の顔のある場所を、何度も何度も指でなぞる。

* *

「くそつ。ウラル、エヴァンス！ どこにいるんだ！」

どこからともなく聞こえた呼び声にアラールハが高くないなき返答

する。あの直後からウラルを探し回っていたのだろう。蹄音とともに汗だくのマルクが姿を現した。

「アラーハ、ここにいたか！ エヴァンス、ウラルは……」

「いま、屍衣に替えているところだ」

エヴァンスの低く押し殺した声に、高潮していたマルクの顔がさあつと青ざめた。

「そんな。嘘だよな、ウラル」

窓枠をつかんだ手をエヴァンスがつかんで引き戻す。振り払ってさらに手を伸ばそうとしたマルクをエヴァンスがもう一度引き戻した。

「着替えの最中だ。死者をはずかしめるな」

マルクの全身から力が抜けた。

「火神の使者よ、こちらは済みましたゆえどうぞ入られよ。異国の方も」

カーテンの向こうから声がした。何の紹介もしていないのに「火神の使者」と呼ばれているにも気づかぬまま、マルクはエヴァンスと共に部屋へ入った。

薄化粧をほどこし、黒衣をまとって、ベッドに横たわるウラルの姿。部屋の隅には血を溶かした湯やタオルの小山がある。

「ウラル……」

そつとウラルの首筋に手を当てる。

「本当にいつちまったのか？ 俺があのとときお前をひとりで置いていったから？」

ウラルは何も答えない。マルクがぎりりと奥歯をかみ締める。

「おい風神、聞こえるか！ あんたの大切な 墓守 が死んじまつたぞ！ なんて死なせたんだよあんた死の神なんだろ！ 助ける力くらい持つてるんだろおっ！」

急に言っってはならないことを叫びだしたマルクに、けれど老婆、マーム、エヴァンスは反応しなかった。

「火神は俺たちを救ってくださいさるぞ！ なのになんであんたは、あ

んたはっ……！」

「火神の使者よ。お気持ちはわかるが、ここは孤児院です。子供たちはもう寝支度に入っておりますゆえ、気持ちを静めてくださらんか」

静かな声に、マルクがびくつと身を引いた。

「孤児院だったのか、ここ。そりゃあ悪いことをした」
ぐしぐし頬を手でぬぐう。

「『あの方』から伝言を預かってきたんだ。ウラルが生きていれば無理はせず報告のみでいいと。だがもし息がなければ、ジュールコ
ンラへ連れ帰れと。間違っても焼いたり埋めたり、ウラルの体を損なうようなことはするなと。縁起でもないとは思ってたんだが、わかっていらしたんだな……」

「『あの方』とは誰だ。フギンのことか」

「ああ、そうだよ。フギンじゃないフギンだ」

エヴァンスは何か言いたげに口を開き　マルクが言った「お前をひとりで置いていったから」の意味、火神や風神のこと。聞いた
いことはあるのだろうか、結局何も言わずにウラルを振り返った。

「ウラルは、フギンに会いたいだろうか」

「会いたいだろ、ずっとそばにいたんだ。すまないけど連れていかせてもらうぞ」

「わたしも行こう。フギンにももう一度会っておかなければ」

マルクが目を見開く。それからゆっくりと気まずそうに顔をゆがめた。

「エヴァンス、悪いんだがお前は　ジュールコンラ　の中に入れられない」

「わたしも狙われるのはご免こうむる。門の前までしか行かぬ」

なおも顔をしかめるマルクに、エヴァンスは薄く笑ってみせる。

「安心するがいい。ウラルを失った今、わたしがフギンとダイオを
狙う理由はなくなった。ウラルを送り届けたら部下と共にヒュガル
ト町へ戻り、神の裁きを待つ」

「神の裁きつて。何があるんだよ」

エヴァンスは答えなかった。ただ黙ってウラルの顔を見つめるだけ。

「私も行くわ」

「なんでおばさんまで」

「誰がおばさんよ、私はマーム！ あんたも ジュルコンラ の人間なら名前くらい聞いたことあるでしょ、スヴェル の一員よ！」
えええ、とマルクがすつとんきよんな声をあげた。マームが腰に手を当てふんぞりかえる。

「スヴェル だつて？ うそだろ」

「何を根拠に嘘だつていうのよ。ウラルが私を知っていた、証拠はそれで十分でしょ。フギンにも会わせてくれたらはずきりするわ」

「でもフギンは今」

「二重人格だつて言うんでしょ？ でもフギンは私のこと胃袋で覚えてるはず。心はふたつあつても腹はさすがにひとつでしょ。それにウラルの葬儀くらい参列させなさい」

「めちやくちや言わないでくれよ」

「いいわね？」

マルクが力なく降参のポーズをする。マームが「そうこなくつちや」と鼻を鳴らした。

「おばあちゃん、勝手に決めてごめんなさい。エリスにも。そこにいるのはわかつてるのよ。私が帰ってくるまで子供たちをお願い」
遠慮がちなノックの音とともにエリスが顔をのぞかせた。

「別に立ち聞きするつもりはなかったのよ。さっきの大声でジェシが起きちゃって」

「言い訳なんかしないでいいわ」

「戻ってこなくていいわよ、ベンベル人とつるんで。マーム、あんたがそんな風になるとは思わなかった」

「じゃああんたの憎まれ口を聞くのもこれで最後つてわけね。笑つて見逃してあげる」

エリスが目をつりあげ何か言い返そうとして、けれど毒気をそがれた様子でそっぽを向いた。そっぽを向いた先にはエヴァンスがいる。もろに目が合い、エリスは小さく悲鳴をあげると部屋の外に飛び出した。

「ばだん、とドアが閉まる。けれどそこから先の足音は聞こえなかった。まだ聞き耳をたてているのだろう。」

「エリスったら」

「怯えているんだよ。マーム、忘れ物はないかね。もう帰ってこれないかもしれないよ。」

「財布を忘れたわ」

老婆は「とつておいで」とうなずいた。ウラルの横たわるここがマームの部屋、財布もこの部屋のどこかにあることを知りながら。

「おまたせ。行きますよ」

さつきまで元気のよかったマームの顔が再び憂いを帯びていた。子供たちの部屋をそつと覗いてきたに違いない。あるいはまだ閉じられたドアの横に突っ立っているエリスともうすこしましな別れをしてきたのかもしれない。けれど本当に財布を取りに行くだけの間だけで帰ってきたマームは、何気ない仕草で上着をひっかけ部屋の隅のバッグをつかんだ。

エヴァンスは自身のマントでウラルを包み、そつと抱き上げた。腕の中でウラルの体が頼りなく揺れている。

「迷惑をかけた」

エヴァンスは老婆と廊下に立っていたエリスにひとこと詫び、外へ出た。

「アラーハ。乗れというのか」

玄関の前でアラーハはじつと伏せ、エヴァンスとウラルを見つめていた。エヴァンスはウラルを抱きなおし、アラーハの背をまたいだ。アラーハはふたりを振り落とさぬようそつと立ち上がると、ジュルコンラへ向け歩みだす。

少し前に全力疾走してきた道を、ゆっくり、ゆっくりと。マルク

とマームがその後を追った。

第二章 2「はざま」 下

「ウラル、今までも何度か話そうと思っていたんだが、お前が望むなら記憶を消すこともできる」

「そんなことができるの？」

「俺は心を司る。ここまで深く関わったお前なら一部でも全てでも自在に消せるだろう。お前を 墓守 から解放する最後の手段にと思っていた。こんな後に退けない状況になる前に言っておくべきことだったんだが」

ウラルが唇を引き結んだのがわかったのだろう。ジンは深くうなずいた。

「記憶を消したところでお前は見かけ上歳をとらないし、子供を産むことができない。この 墓所 にも自在に來れる。どうにかして誰かに話をつけて、お前をネザの故郷に連れていけばある程度は普通に暮らせるかもしれないが……。もしそれを望むなら、俺はもうお前にはできる限り関わらないつもりだ」

ネザの故郷、あの不思議な力を持つ老婆に守られた隠れ里。光を失った、いつたい何歳なのかもわからない、ウラルを 風神の娘 と呼び続けた老婆。

「まさか隠れ里の長老って。マームさんの孤児院にいるおばあちゃんも」

「あの二人はもと 墓守 だ、俺が記憶を消した。記憶を失って五十年、実年齢は百をゆうに超えている」

あの老婆はウラルが風神と深いつながりがあることを知っていたけれど 墓守 のことは忘れていた。記憶は失ったが力は残された 墓守 。あの二人には何があったのだろう。

「記憶を失ったところでお前が幸せになれるかはわからんが。記憶を消してもお前はお前だ。周りに 聖女 として求められれば、お前はためらわずその役を果たそうとして、また苦しむことになるだ

るう。だが、そういう選択肢もあるということは知っておいてほしい」

「あなたはいつたい、どれだけの人がこうして迷うのを見てきたの？　いつたい何人こうして生き返らせてきたの？」

「はるか昔から、何人も」

「その人たちはどうなったの？」

ジンは答えない。

「答えて」

「答えたいのは山々だが、俺は風の神だ。俺が何かを口にすればそこに力がこもってしまう。ひとたび口にすれば、きつとそれが起るだろう」

「悪いことが起きたのね？」

ジンはうなずき、けれどそれ以上答えようとはしなかった。

「俺を恨め」

答えの代わりにジンはうめく。

「お前を殺したのは俺だ。危険と承知しながらお前を向かわせた俺の咎だ」

*

フェラスルト町の城壁にはあかあかと灯がたかれていた。閉ざされた門の脇には多くの兵。門の中央にはフギンとダイオの姿がある。エヴァンスは剣帯をとき、柄と鞘とをしばりあげて地面に落とす。ウルルを抱いてアラール八の背から飛び降りる。

「ウルルを連れてきた。こちらの方法で弔ってやってほしい」

ジュルコンラの兵がざわめいた。彼らにとってウルルは町を救った聖女だ。ダイオも奥歯を固く固く噛みしめ、食い入るようにウルルを見つめている。その場の責任者でありながら、かつウルルに近い人の中で最も近くにいながら、ウルルを救えなかったダイオ。

フギンはダイオの横顔をちらりと見ると、深紅のマントをひるがえしエヴァンスの正面に立った。

「顔を見ても構わないか」

フギンはウラルをエヴァンスの腕の中に残したまま、その体をくるんでいるマントをまくった。血の気を失い、土気色になったウラルの顔。フギンはウラルの頬に手をやり、そつとなでさすった。額に手をやり、まぶたをこじあけて瞳孔を見た。

エヴァンスが怪訝そうにウラルの顔を見、フギンの顔を見る。

違和感。

「お前が気づかぬとは、よほど動転していたとみえる。この娘の息がなくなってからどれくらい経つ？ ウラルの腕を貸せ」

フギンは左腕一本でウラルを包んでいるマントをはだけ、その左手をとった。こぶしを作らせる。指を一本ずつ開かせる。腹を軽く押して内臓の硬さも確かめた。

「やはりな」

死後かなりの時間が経っているのに、硬直がまったく始まっていない。

「どついつことだ」

「この娘はまだ完全には死んでいない。生きてもいないが、死の神たる風神が引き止めているのだ」

「ウラルが生き返るとでもいうのか」

「生き返るか、ここまま死ぬかはまだわからぬ。だが望みはある」

「世迷いごとを。ウラルはわたしが看取った。一度死ねば二度と生き返らぬのは神のことわり、知らぬお前ではなかるう。いままでに何人の戦友を喪ってきたのだ」

「『生きてはいないが死んでもいない』と言っただろう。ウラルは『生き返る』わけではない。死の寸前で時間が止まっているのだ。少なくとも心臓が止まって一日、死が確定するまで硬直は始まらない」

エヴァンスの眼が苛烈な光を帯びた。

「信じよと言っても、リーグの神の存在すら認めぬお前には無理が

ある。だが一日だけでも様子を見る気はないか」

門兵がざわめいた。エヴァンスはウラルを胸に抱き、黙ってフギンをにらんでいる。

「部屋を用意せよ」

フギンは知らぬふりで身をひるがえすと、ジュルコンラ 内部へ歩き始めた。

「いまダイオの棺が光らなかつた？」

フギンのファイアオパールに宿る炎の光が一瞬弱まり、ダイオのガーネットの棺が赤く燃えた。けれど一瞬のことで、再びダイオの棺は沈黙し、フギンの棺が元通りに燃えている。

「火神が人に宿るときには爆発的な感情がいる。お前の『死』を利用して、火神がダイオに移ろうとしたんだらう」

「どうしてやめたの？」

「おそらくこの難しい状況下でフギンからダイオに移れば、信用を一気に失いかねないからだらう。そうそうこんなチャンスはない。火神にとつても惜しい機会だったはずだが」

リゼの兄ラザもいまのフギンには一目置いていたし、従っていたが、フギンのことを疑っている部分があった。ラザだけではないだらう。もっと多くの兵が同じ心境に違いない。

「フギン」の正体が人の体から体へ移り歩くようなものだと思えば。しかもかれは自分が「火神」だと明かしたくはないはずだ。いくらイーライやマルクが声をはりあげても兵は従うどころか化け物扱いして、討伐に躍起になるだらう。

「生き返れば私も化け物扱いされるのかしら」

「想像してみるんだ。お前が生き返ったあと、どうなるか」

記憶を失わず、このままのウラルで生き返ったとして。

フギンに予言されているとはいえ、驚かないのはフギン本人だけ

だろう。そのほかはウルルを畏れるに違いない。聖女として。決して後戻りできない道を逆向きに歩いてきた人間として。ウルルの親しい人も　アラーハはさほど驚かないかもしれない。守護者として先代たちの知恵を継いできたアラーハなら生き返った　墓守がいることを知っているだろう。けれどダイオとマルクは同じ墓守　とはいえウルルから距離をとるだろう。そしてエヴァンスは一時の気の迷いかもしれないが一度は好きだと言った女が、おのれの手で殺さなければ死後の安楽が約束されない女が生き返れば、多少なりと喜んでくれるだろうか。それとも異教の魔女としてウルルに迷わず剣を向けるだろうか。

そうでなくとも生き返るといふ奇跡をうけ風神の使者を引き受けるからには、これからのベンベル軍との戦いでフギンと共に矢面に立たなければならなくなるだろう。町を守護する聖女として。リーグ人の希望として。

ウルルは両手で顔を覆った。そうして生きるなら、きつともう一度どこかで、だれかに、殺される。

「思っていることを言葉にしてみてください」
ウルルは口を開きかけ、けれど首を振った。
「私は風神の使者だから。口に出したらきつと起こってしまつ……」
自分が言ったことをそのまま返されたのがつらかったのか、ジンは黙りこんだ。

肩ごしに振り返る。ジンは広い背中を丸め、うつむいていた。視線に気づいたのかちらりと横目でこちらを見る気配がしたが、そのまま動かない。

はたと気づいた。相手の顔を見れないのはウルルだけではない。ジンもまたウルルと視線が合うのを避けている。

ウルルは重心を後ろに倒し、ジンの背中にもたれかかった。

「ジン。あなたが口に出すことで悪いことが起きるなら、いいことも起こる?」

ジンが怪訝そうにウラルを振り返った。

「困ったことに起きるのは悪いことばかりだな」

ウラルはゆっくりと立ちあがり、棺をまわりこんでジンのかたわらに立った。黙ってウラルを見上げるジンに笑ってみせる。夕陽に照らされた褐色の双眸。

「それでもいい。ジン、言つて。私は幸せになるつて」

生き返ればきつともう一度どこかで、だれかに、殺される。もう一度殺されたとき、ウラルはまた生を願えるだろうか。

「怖くてたまらないんじゃないのか。俺にもつと言いたいことがあるだろう」

「うん、ちよつと愚痴らせてもらったら落ち着いた。私の幸せを願つて。気休めでもいいから」

覚悟はない。けれどこの人を恨めるわけがない。

「お前は神以上に慈悲深い。その言葉は嬉しいが、お前は人だ。無理をするな」

「あなたこそ神だからつて気張らないで。あなたの心は人とそんなに変わらない」

この人はジンではない。この人はウラルに似ている。

ふつとジンが笑った。

「わかつた、お前が決断をくだすときに言わせてもらおう。だが俺に意識を向けることで考えをそらすのはやめてくれ。俺はしばらく離れている。半クル（一時間）たつたらまた来よう」

本物のジンにはありえぬ悲しげな、けれどどこか力を秘めた笑み。

「迷え。そのときまで」

決断を迫る側と迫られる側と。

第二章 3 「朱の棺、青の棺」 上

消えるように去るジンを見送り、ウラルは胸のペンダントを握りしめた。

苦しんでいるのはウラルよりあの人だ。どんな思いで何人の 墓守 を見送ってきたのだろう。そのつどあんな目で、けれど今度こそはと望みをかけてきたのだろうか。けれど女神の祈りは、いまだ届いていないのだ。

かなえてあげたいと思う。ウラル自身も生きて幸せになりたい。けれどこの状況で、どこをどうしたら幸せに生きられるだろう。生き返ったウラルが風神のおそれるようなことになったら。ウラルが再び誰かに憎まれ殺されるようなことになったら。風神は今以上に傷つき悲しむに違いない。

記憶を消してもらって隠れ里に行こうか。おそらくそれが生き返った 墓守 が比較的まともに生きられる道なのだろう。逆に言えば記憶を失わずに生き返った 墓守 は風神のおそれることになり、死んでいったのだろう。

何が起きたのか知りたい。けれどあの様子の風神から無理に聞き出したいくない。

固く自分の体を抱きしめる。 それでも風神は生きてほしいのだ。 墓守 たちに。

*

ウラルの体は明るく風通しのいい、なおかつアラール八が気兼ねなく覗き込める場所に移された。ムール禽舎の一角だ。禽舎長のラザは当然いい顔をしなかった。どこからどう見ても死体にしか見えないうラルは当然として、エヴァンスを禽舎に入れることには激怒した。が、フギンがじきじきに説得し、エヴァンスがウラルを抱いて

うつむきがちに禽舎へ入ってくるのを見ては、さすがのラザも折れざるを得なかったようだ。

ウラルのもとには多くの人が訪れた。ラザ、イーライ、そしてメイル。

メイルはじつとウラルを見下ろし、医者だというのに脈のひとつも診ようとしなかった。ただ唇をわななかせ、細い肩を小刻みに震わせて。青ざめた顔できびすを返し、逃げるように去っていった。

マルクは普段通りの仕事に戻り、マームは「何かやってなきや気が狂いそう」と狂ったように食事の手伝いをしたり繕い物をしたりと駆けずり回った。ダイオは禽舎でフギンに渡された書類その他に目を通すだけだった。エヴァンスの見張りという名目でフギンから実質一日の暇を与えられたのだ。百戦錬磨の將軍とはいえウラルのことがよほどこたえたらしい。

エヴァンスはその間、ウラルのいる部屋のすぐ近くの鉄格子のはまった部屋でひとり静かに持ち込んだ本を読んでいた。エヴァンスは旅の連続にもかかわらず荷物の中に古びた分厚い本を入れていた。「アラールハ。何を読んでいるのか、と言っているのか」

鉄格子の外からのぞきこむアラールハにエヴァンスは半ば独り言のように話しかける。

「これは聖典だ。我々の神の定められた法が記されている。人は死後、神の法をよく守りよい行いをした者は楽園へ、そうでないものは煉獄へ堕ちる。戻ってくることは、無い」

タン、と音を立てて聖典を閉じると、エヴァンスはダイオに持ってきてもらった水で両手を清め、太陽の出ている方角に向けて祈り始めた。

* *

(神は楽園を祝福され、その御光で包み込み清き水をたたえられた。一方で煉獄は呪われ、闇と業火で包まれた)

(ウラル、俺の娘。生き返ってくれるなら嬉しいが、そのために前はどれだけの代償を支払うのだ？ ジンを喪ったときよりも辛い……)

(ああもうまったく、どこをどうやったらこんな大きな穴を靴下にあけられるのかしら。それにしてもあの台所汚かったわねえ。……ウラル、ここでしばらく過ごしてたのかしら。あんなところで作った食事食べてお腹壊さなかったのかしら。だめだめ、今は考えないようにしなきゃ。ウラルには悪いけどかなしみに呑まれるわけにはいかないから。ああ、このシャツもまた派手に破けてるわねえ)

そつと棺に手を沿わせ、黙って感情を共有する。ウラルが感じるのはあくまで感情だけ、考えていることまではわからないはずだが、感情と性格がわかっていれば考えることは大体わかってしまう。おそらく当人たちはウラルがこんなことをしていると知ったらいい顔はしないだろう。だが、こうせすにはいられない。

(ウラル。我輩はもつとも近くにいなながら助けられなかった。我輩は羊以上に臆病だった。ウラルが弱い娘以外の何者ではないのはわかっていながら。騎士の風上にもおけぬ。ウラルが蘇ったとしてもとても顔を合わせられぬ。ああ、けれど万の軍勢よりおそろしいものがあるとは)

ふとウラルはフギンの棺を振り返った。

この真つ赤に燃える棺に手を置いたら、火神の感情もわかるのだろうか。神の感情を覗き見るのはさすがに畏れ多い。が、相手は神なのだからウラルが一方的に感情を共有するだけでは終わらないだろう。もし火神もウラルに気づいて、話をする事ができるとしたら？

ウラルはこわごわファイアオパールの棺に手を載せた。

何も感じなかった。ただ鉄のにおいが鼻を突く。血と錆のにおい。

「フギン」

ウラルは呼びかけ、目を閉じた。

やはり神の心は人とは違うようだ。けれどこんな死のにおいしか

しないなんて。火神は残忍なところもあるが慈悲深い神だったのに。
「……ウラル？」

突如、手のひら越しに聞こえた声にウラルはびくつと目を開けた。
「なんだ、空耳か」

「フギン？」

がしつと手をつかまれる感触がした。驚いて手元を見たが、自分の手と燃える棺のほかには何も見えない。

「ウラル？ 本当にウラルか？」

「フギン？ 本物のフギンなの？」

「俺に本物も偽者もあるかよ！ それよりウラル、今どこにいるんだ。なんで墓の下からお前の声が聞こえるんだ？ というか、なんでこんなところにお前の墓があるんだ？」

不意に、ぼろりとこぼれた涙がウラルの頬を伝った。

フギンも今 墓所 にいるのだ。そこはきつとウラルの丘と違って、こんな金臭いにおいが充満している場所なのだろう。フギンは前に「戦場の夢なら見る」と言っていた。フギンは今、戦場跡の墓地にいる。そしてそこでは、死んだ人には墓がたてられる。死んだ人には。

「フギン……フギン……」

「おい、どうしたんだウラル」

フギンの声が慌てた。

「やっとあなたと話せた。話せたら一番に言おうと思ってたの。あのとき急にひつぱたいてごめんさい。私もあなたのこと、嫌いじゃないの。でも驚いちゃって」

「え？ ああ、あのときは俺も悪かったよ。こっちこそごめんな。泣かないでくれよ、な？ 俺、お前の笑った顔が見たいんだ。泣き声だけ聞かされるのはつらいよ」

フギンの声が弾む。けれどウラルの涙は止まらない。また大粒の涙が頬を伝って棺を濡らした。

「フギン」

「ん？」

「私、死んだの」

棺ごしにフギンが固まるのがわかった。

「こんな形だけど、伝えられてよかった。そうね、このまま死んでたら伝えられなかった」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ。お前なに言ってるんだ？」

「死んだの、私。麻薬におかされた人にお腹を刺されちゃって。エヴァンスが介抱してくれたんだけど、間に合わなかった」

「馬鹿言っなよ！」

怒鳴り声。

「フギン、火神は自分が乗っ取っている間の記憶も多少は残っているはずだって言ってた。だから見ようと思えば見れるはずよ」

「なんだよそれ！ ウラルお前な、いい加減に……」

急にフギンが言葉を切った。

沈黙。

「いま、この墓標に触ったらお前が見えた。真っ黒な服でベッドに横になってた。ぴくりともしなくて、顔とかも青白いどころじゃなくてさ。誰もいない部屋で、そうしてるお前が見えた。これ、まさか」

「……そう。それが今の私」

フギンの棺がぶわりと輝きを増した。

「何をしたんだ」

明るい赤橙色の炎をあげてファイアオパールの光は燃え盛る。

「どんな無茶をしたんだ、ウラル！ 何をしたんだ！」

問いかけの形をとりながら、フギンはウラルに答える暇を与えない。

「なんでだよ、なんでお前が死ぬんだよ！ アラーハはどうしたんだ、そばにいたんだろ？ ダイオやマルクも一緒にいたんだろ？

なあ！ 誰も止めなかったのか？ 黙って見てたのか？ お前が死ぬような無茶をするのを見ながら誰も止めなかったのか？」

激しく燃え盛るファイアオパールのところどころが暗く滲む。明るい色で燃え盛っていた場所が、不意に水滴でも落としたかのよう
に暗く沈む。

「止めないでって私が頼んだの」

「知るかよそんなの。それでも止めなきやならない時があるのはわかりきってるだろ。好きな女が崖っぷちに立って『止めないでください』って言ったら当然止めるだろ。必死こいて止めるだろおっ！」
それでも止められないときがある。ダイオもエヴァンスもウルルを止められなかった。間に合わなかった。けれど。

フギンがマルクの立場ならメールを放置してウルルを優先した。
フギンがダイオの立場ならウルルが階段下に立っているのを見つけたときに一も二もなく飛び出してウルルをかばった。フギンなら、ウルルを拘束しつつも必死に守ろうとしていたフギンなら、ウルルを生かせたかもしれない。

「ばかウルル！　いつか死ぬと思ってたんだよお前は！　お前は優しいすぎる。どうしようもなく優しいすぎるんだよ！」

「フギン」

「またアラーハのときみたいになったんだろ。捨て身で何かを守ろうとしたんだろ！　自分を大切にしてくれよ！　頼むから、頼むからよおっ！」

ウルルはそつとファイアオパールの棺をなでた。フギンの怒号を聞きながら、ゆっくり、ゆっくりと棺をなでる。

怒号が嗚咽に変わり、号泣に変わった。

「フギン、聞いて」

泣き声を聞きながら、ウルルは棺にささやく。

「私は死んだ。けれど私は　風神の墓守　、死神の使者。生き返るチャンスが与えられたの」

「……いま、なんて言ったんだ？」

「私は風神の条件を受け入れれば、生き返ることができるの」

「なんでそれを先に言わないんだよ！　派手に泣いちゃったじゃね

えか」

フギンが目をぐしぐしぬぐいながら笑うのが見える気がする。

「よかった。生き返れるんだな」

フギンの無邪気な笑顔が見える気がする。ぴん、と無意識に肩がこわばった。

「まさか、迷ってるのか？」

ウラルの動揺が棺と墓標ごしに伝わったようだ。フギンの声に怯えが混じった。

「生きる、生きるよウラル。なに迷ってるんだ！」

怒号が再びウラルを貫く。さっきまで生き返ろうと思っていたのに。迷う気もなかったはずなのに。

「ごめん、フギン。私、私……」

「生きる、ウラル！ 生きてくれ！」

ウラルは思わず両耳を押さえ、跳ねるように立ち上がった。

第二章 3 「朱の棺、青の棺」 中

「エヴァンス、夕方の祈りの水を持ってきたぞ。まだ少し時間はありそうだが」

ダイオの声にエヴァンスは聖典を閉じた。

「いつも思っていたんだが、ベンベル人は一日に五度も何を思って祈っているのだ？」

「自分を生かしてくださっている我らが神に」

「ウラルのことは祈ってやらないのか」

エヴァンスは黙りこんだ。

ダイオはため息をつく。

「話は変わるが、麻薬の禁断症状とやらが現れ始めたようだ。大暴れして手がつけられん。対処法を知っているなら教えてもらいたい。情報の対価が欲しいなら言ってくれ」

「部下に手紙を書かせる。案じているはずだ」

「シャルトルか、わかった。どうやって届ければいい？」

「アラーハ、頼めるか」

アラーハは不満げな目でエヴァンスを見ている。ウラルのそばを離れたくないが、自分以外にはシャルトルを探せない。しぶしぶといった様子でうなずいた。

「特効薬はない。あえていえば時間だけが薬だ。神経を鎮める薬を使ってしばらく大人しくさせておくがいい。暴れ始めてから一クール（三時間）ほどで症状は治まる。あとは一クールごとに何度か症状が出るだろうが、だんだん弱くなっていく。四日もすればほぼ完全にまともになる」

エヴァンスは話しながらダイオの差し入れた紙に三行ほどを書き綴ると、アラーハのツノに皮紐でくくりつけた。

アラーハは不機嫌そうにエヴァンスをにらむとウラルの部屋の方へと歩いていった。娘の様子を見てから手紙を届けに向かうつもりらしい。

「ウラルの様子は変わりないか」

「不気味なくらい変わらなないな。様子が見たいなら連れていく。今はちょうど誰もいないようだ」

ダイオは大きくドアを開け放った。

「手枷もつけず、か。構わないのか」

「必要あるまい」

エヴァンスが牢に閉じ込められているのは脱走を防ぐためではなく、ベンベル人が ジュルコンラ 内部にいるという不安から兵を守るためにすぎない。

「ダイオ、お前はウラルが生き返ると思うか」

「正直、我輩にも信じられぬよ。だがウラルの状態を見ると信じざるをえない」

二人は並んで廊下を歩いた。

燦々と降り注ぐ午後の中、黒衣のウラルは真っ白なベッドに身を横たえていた。顔は覆われておらず、ぱつと見には眠っているようにしか見えない。窓は開放たれ、そこからアラーハが顔をのぞかせていた。白髪まじりの大きな鼻面の横にはナタ草の小さな鉢がある。花は水色だ。

ダイオはウラルの手を取り、こぶしを作らせた。それを指一本ずつ開いてみせる。

「ウラルが息を引き取ったとき、ナタ草は何色だったのだ？」

「紫だ」

「となると、心臓が止まってから六クル（十八時間）も経っている。普通なら硬直は全身におよび、板のようにながちになっているはずだ。ダイオがまぶたをこじ開ける。瞳孔は開きっぱなしだが、角膜はきれいに澄んだままだ。

「ここへ来た直後ならば、おぬしが馬上で揺すぶっていたから硬直

が遅れたのだと言っただろう。昨日ウルルが刺される瞬間を見ていなければ、死後数日たって自然に硬直が解けたのだと言っただろう。だが……」

エヴァンスはウルルの首筋に手を当て、脈を探そうとした。硬直がおこらないのはウルルがかるうじて生きているからではないかと思っただのだ。が、やめた。

瞳孔が開ききって光をあてても反応しないのは、脳の命を司る部分が壊れてしまったことを意味する。呼吸が失せ、唾液を飲みこむこともできない。心臓だけはかるうじて動いているが、脳の制御を失った状態になる。そんな状態で長くもつわけがない。ウルルは真正銘、死の瞬間のまま時を止めているのだ。

「エヴァンス、お前はウルルが蘇れば嬉しいか？」

「人は一度死ねば生き返ることはできない」

「ウルルがこうして目の前にいるのに、か」

エヴァンスは答えない。

「我輩は、正直わからぬ」

「わからない、か」

「ウルルにあわせる顔がない。それ以上のことまで頭が及ばぬのだ」
「覇気のない彼らしからぬ声音に、エヴァンスはしみじみとダイオを眺めた。」

「ウルルは、何者だ？」

今なら押せば答える。そう判断してのエヴァンスの問いに、ダイオは畏れをふくんだ目でウルルを見つめた。

「ウルルは神々しかった。ウセリメ教徒のわたしから見てもな。人ならざるものに見えた」

「そうだ。我輩が畏れに身動きひとつできぬほどに」

ダイオは苦笑した。

「おぬしは異国民、少々話したところでさほど影響は出ぬだろう。だが他言はしないでくれ。これ以上の答えを求めようと質問しないでくれ」

不意に窓の外のアラーハが低い声を出し、歯をむきだした。話すな！

「ウラルは 風神の墓守 だ。風の女神の使者であり、ときに女神をその身に宿す」

開け放たれた窓から突風が吹き込み、ダイオの紅い衣装をぶわりとあおった。

エヴァンス。

ぱつとエヴァンスが顔をあげる。

「いま、ウラルの声がしなかったか」

ダイオはぎよつと目を見開き、開け放たれた窓の外を見つめた。

アラーハが表情に乏しい獣の顔で、けれど怒りと畏怖のないまぜになった形相を浮かべている。なぜ語った！

「するはずがないのはわかっていているが、たしかに」

エヴァンス！

ぐらりとエヴァンスの体が傾いた。

エヴァンスは歯を食いしばり足を踏ん張って抗うが、まぶたがどんどん落ちていく。

「何が起きている、ダイオ……？」

とうとうその場に膝をついたエヴァンスをダイオは声もなく見つめた。

アラーハが高々といななき、急を伝える。近くの部屋に待機していた兵士たちの足音が聞こえ始めるころには、エヴァンスはウラルのベッドに突っ伏す形で意識を失っていた。

「ウラル」

フギンの棺に背を向け、ジンの棺に腰かけてうつむくウラルの頭に大きな手のひらが載せられた。

「半クル（一時間半）経ったの？」

「少しばかり早いかな」

ジンはいつものようにウラルの隣に腰かけず、そのまま立っている。ジンを見あげて首をかしげたウラルに彼は手をさしのべ、立ちあがらせた。

「フギンと話をしたようだな」

「見ていたの？」

「気を悪くしたなら謝る」

ウラルは黙ってかぶりを振った。現世でも風の眼をもつ風神には隠し事などできない。ましてやここは死後の世界、風神の世界だ。

「ウラル。ほかの人とも話してみないか」

「ほかの人？」

ジンはいつもの悲しげな笑みを浮かべてみせた。

「そろそろ決着をつける頃合だ。折いいことにダイオがへまをやらかしてくれた」

「ダイオが何をしたって？」

「見ていてくれ」

ジンは一歩前に進み出た。

「エヴァンス」

かがんで目の前のサファイアの棺に触れ、ジンは呼ばわった。

「エヴァンス！」

ウラルは驚き目を見張った。ジンはさっきウラルがフギンと話したように、エヴァンスとも話ができるようにしてくれるつもりらしい。

が、ジンがやったのはそれ以上のことだった。空っぽの棺の中にもぼんやりと人影が現れる。ウラルが呆然とジンと棺を交互に見つめるうち、人影はエヴァンスその人に変わっていった。燦然と輝く金の髪、ウラルが贈った青い服。実際のエヴァンスはまだ髪を染めており、この服もウラルの血でとても着れる状態ではなくなったはずだが。

エヴァンスのまぶたが震え、棺と同じ色の瞳が現れた。

ジンがかがんだままそつとウラルの手を引く。ウラルはぺたんとエヴァンスのかたわらに座りこんだ。その動きでエヴァンスははつきりと目を覚ましたのだらう。半身を起こしてかたわらのウラルを、その隣のジンを見つめた。

「お前がジンだったのか」

ジンは武人らしいおおらかな笑みを浮かべ、エヴァンスに手を差し出した。

「覚えていてくれて嬉しいぞ、エヴァンス」

第二章 3 「朱の棺、青の棺」 下

ダイオはエヴァンスの肩を揺さぶった。目覚める気配はない。脈をとり、息を確かめる。異常はない。

眠っているだけだ。だが、なぜ？

最初は増援に、エヴァンスがただ倒れただけと知ってから野次馬に来ていた兵士らの合間をぬってフギンが姿を見せた。さっとエヴァンスの生死を確かめる。

「心配はいらん。この男はろくに眠っていないなかったのだろう、疲れが出ただけだ」

「フギン様」

フギンはわかっていると言いたげにうなずき、近くの兵にエヴァンスを運ぶよう命じた。

ダイオはしばらく黙っていた。野次馬がいなくなってからやっと口を開いた。

「申し訳ありません。エヴァンスに 風神の墓守 の話をしました」

「軽率なことを。エヴァンスは一時的に風神の支配下に入ったようだ。あの女神がこんな強引な手を使うとは珍しい。倒れる前に何か言っていないかったか」

「ウラルの声が聞こえると」

「ならばウラルの 墓所 に呼ばれたのだろう」

フギンがちらりと窓際を見る。ダイオもつられてそちらを見た。

フギンは窓際のナタ草を見ていた。その花の色は、白。

ダイオはぎよつとアラーハと顔を見合わせた。ナタ草の花は時間に応じて赤、橙、黄、黄緑、緑、水色、青、紫と変わる。何時であるのが白にはならないはずなのだ。

「ナタ草は風神の花だ。風神が力を行使するときナタ草は白に変わ

る。覚えておくがいい」

呆然としているダイオとアラハの目の前でナタ草はゆっくりと元の水色に戻っていった。

「ダイオ。ウラルが再び息を吹き返すとき、俺が予告していてもお前の心は激しく揺さぶられるだろう。その激情を利用して、フギンを解放しお前の体を借り受けようと思う」

「自分は覚悟できていますが。他の者への説明はどうします」

「俺は火神だと名乗るほかならう。多くの將軍の体を借り戦った拳句、敗北した軍神ではあるが。そして名乗るだけでは足りぬだろうから、 墓守 を増やす」

ダイオは 墓守 だったからフギンの体に火神が宿っていることを察し、その場にひざをついて忠誠を誓った。 墓守 ならば迷いなく信じられる。

「増やすといっても限度がありません。 ジュルコンラ すべてを信用させるには足りぬかと愚考いたしますが」

「 ジュルコンラ の者、条件に合う者すべてを 墓守 にする」
ダイオは目をむいた。 ジュルコンラ も三年前の戦いで大打撃を受けたとはいえ、 アスコウラ とリーグ軍の生き残りを吸収し、非戦闘員まで含めれば千人近い大所帯になっている。

「 墓守 を増やさないようにしてきたのは、俺が 反転 したときの対策だ。だが今はむしろ……」

フギンは何かを言いかけ、けれど「これは言わぬほうがよからう」と言いたげに首を振った。

「今なら 反転 したところで寄代になるのはフギンかお前、ウラルがすぐに止めてくれよう。十年後、二十年後までそう言えるかわからぬ危険はあるが、それより今は一兵でも多くが欲しい」

「それが可能ならば、自分に異存はありません」

「ほかの 墓守 には俺から話す」

行ってよいぞと手を振ったフギンにダイオは深々と頭を下げ、部屋を出た。

フギンは先が失われた右の肩口を見つめた。それから横たわるウラルに目を落とす。

「風神。何度同じことを繰り返す気なのだ？ お前がもたらすものは俺の比ではないのだ……」

フギンは低く呟き、それから窓の外のアラーハのことを今気づいたかのように見つめた。

「ゆらめきうつろうのが我らの本質。地神の守護者 アラーハよ、恨むな」

恨めるはすがございません。

あなたも地神のように地に根をおろした神であれば。

お前も行けと手を振られ、アラーハもシャルトルに手紙を届けるべくその場を離れた。言葉を話せぬことに、ほっとしながら。

ジンとエヴァンスは似ている、とウラルは思う。はじめは二人に共通する騎士の風格がそうさせるのだと思った。でも、違う。ジンはいつも明るく優しくだったが、ときおり人をすくませる覇気を見せた。エヴァンスはいつも冷たく鋭く近づきたい雰囲気だが、ときどき不器用な優しさが透けて見える。似ている部分が多いのはもちろんなのだが、違う部分はもの見事に正反対なものだから、逆に引きつけあって見えるのだ。

生前にたった一度だけ出会い、殺し合った二人が、この丘でこうして肩を並べている。

「ここはどこだ」

「お前にとっては夢の中、ウラルにとっては死後の世界だ」

「死後の世界？ ここは楽園にも煉獄にも見えないが」

「リーグ人の死後の世界はひとりひとり違う。その持ち主の『心の世界』だ。その人にとって思い出深い場所や、憧れの場所、記憶に焼きついた風景やなんかが入り混ざって、心の中にひとつの世界が

できあがる。そこに人は死後還っていくんだ」

ジンは棺の群れを振り返り、かすかに笑ってみせた。

「今すぐ信じると言う気はない。だがウラルは煉獄ではなく『ここ』にいると思うと、少しは気が楽にならないか」

エヴァンスも棺の群れを振り返る。それから「信じる気はないがとりあえず話を聞こう」と言いたげにジンに向き直った。

「お前も死んでからは『ここ』にいるのか」

「いや、俺の世界は別にある。ただ今は難しい立場にいるウラルの案内役として遣わされているだけだ」

エヴァンスに対しては、彼は「風神」ではなく「ジン」として振舞うつもりらしい。

視線に気づいたのか、ジンがウラルを振り返った。

「今の俺は、ただの案内人だ。ウラルと話してやってくれ」

ぼんと背中を押される。無意識のうちにジンの後ろに隠れるようにしていたウラルは思わず肩をこわばらせた。

自分はこのひとに看取られたのだ。このひとに看取られて息絶えた。

「なぜあんな無茶をした」

ぴしゃりと先手をきられた。

「……あなたこそ。どうして私にとどめを刺さなかったの？ 神様の意思に背くのをあんなに嫌っていたのに」

「質問したのはわたしだ。答える、ウラル。なぜあんな途方もない無茶をした。死にたかったのか？」

「私が無意識に死にたがっていた、って言いたいんでしょう」

なぜ知っている、と言いたげな視線。ウラルはそっぽを向いた。

「私はただ、自分がもう助からないってわかってただけ。あの傷だもの。それなら、と思ったの。それ以上のことを考える余裕はなかったし」

ウラルはエヴァンスの目を見据えた。青い瞳と真っ向から視線が合う。

「次は私の番。答えて。どうして私にとどめを刺さなかったの？」
青い瞳がそれた。

「エヴァンス」

不意にエヴァンスがすらりとシャムシールを抜き放った。
首をか上げたウラルに銀の刃が向けられる。ゆるゆると、しかし
まっすぐに。

「おそろしくはないのか」

ぬらりと光る切っ先があるのはウラルの心臓の前、指一本分の距離。
ウラルは黙って首を振った。既に死んでいるからか、エヴァンスに殺気がなくただただ悲しげな顔をしているせいか。恐怖は感じない。

「止めないのか、ジン」

ジンは答えない。ただ黙ってそこにいる。

「ウラル。わたしはお前がおそろしい」

ざ、とエヴァンスが大きく一步を踏み出した。たくましい腕がウラルの首に伸びる。

が、また指一本分の距離をおいて止まった。

「これ以上、どうしても近づけん」

エヴァンスの唇にじわりと自嘲らしきものが浮かんだ。

不意に、ぱつと横から手が伸びた。エヴァンスの手をウラルの首に押し付けるジンの腕。

「ジン？」

「こうすれば絞められるか」

反射的にであろう、エヴァンスが振り払おうとした。ジンは動かない。二人の体格は互角、しかもジンは腕一本で押さえているだけなのに、エヴァンスがどれだけ力をこめて腕を引こうがジンはまったく動じない。

現実世界では戦いの中でジンはエヴァンスに負け、殺された。だがここでは。

ウラルはエヴァンスの手首をそつと握った。抵抗する気はない、

ただその右腕を両手で包みこんだだけ。エヴァンスの固い手のひらがすうつと冷たくなり、しっとりとした湿り気を帯びた。男の太い血管がその手首で激しく脈打っているが、その指に力はない。ただ触れているだけ。ウラルの頸動脈に。脈のない、この首に。

「なぜこんな真似をする。お前はウラルの恋人だろう」

「残念ながら、そういう仲になる前にお前に殺された」

意外だったのか、エヴァンスは怪訝そうに眉をひそめた。

「ウラルのことは大切だが、お前の心を知りたかった。実際に生きてウラルのそばにいるお前の」

ジンが手を離すと、エヴァンスもウラルの首からゆっくりと手を離した。

「エヴァンス。突然突拍子もない話で悪いんだが、ひとつ伝えておきたいことがある」

この人の「突拍子もない話」は並大抵の話ではない。また世界を揺るがす気だろうか。

「ウラルに代理で話してもらうのも酷だ、ここで話さなければもう機会がないだろう　お前の神の目はこの世界に届いていない」

「なに？」

「お前たちベンベル人は俺たちにとって単なる異国人ではない。別の神が管轄する、別の世界の人間なんだ。事故が起きて本来触れ合わないはずの世界が触れ合い繋がってしまった。心当たりはないか。リーグとコーリラはある日突然、なにもないはずの海域に現れたはずだ」

なにもないはずの海域、とエヴァンスが低く呟いた。

「心当たりがあるの？」

「異世界がどうかは知らないが、たしかに何もなければずの場所にこの国は突然、現れた」

リーグ人にとってもベンベル国は突然現れている。だからといって異世界とは。どこで聞いたのだろうか。前に火神と話したときは、ベンベルの神がどんな人物なのかわからないようなことを言ってい

た。使者としてベンベルに向かった水神が帰ってきたのだろうか。さつきウラルを一人にしたとき連絡をとっていたのだろうか。

「神は自分の世界を把握することはできても、異世界までは見ることができない。お前たちの祈りは届いていない。お前を断罪することもできない。お前の罪は、でつちあげられたものだ」

エヴァンスの目が急に険しくなった。異世界云々はいいにしても、神様がからむのは許せないようだ。

「馬鹿げたことを」

「ウラルを殺さなくともお前は罰を受けない。それよりむしろお前の神は自らの教えが守られていないことに怒っているようだ。聖典を人の都合のいいように読むな、どこに異教徒なら殺してもいいと書いているのだ、と」

エヴァンスの目が細くなった。

「元の世界へ帰してもらえるか。とても聞く耳を持てん」

「お前が望んだときに帰れる。夢から覚めようと思えばいい」
ふつつとエヴァンスの姿が透けた。

「信じなくて構わない。だが最後にもうひとつ言わせてくれ。ウラルは生き返る。ウラルがまたこんな無茶をしないように、誰かにもう一度殺されぬように、そばで見守ってやってくれないか」

やはり彼はウラルの心を知っていた。エヴァンスの心も知っているのだろうか。知っていてこんなことを言うのだろうか。なんの、つもりで。

「エヴァンス、いいよ」

淡く透けながら、目覚めを願いながら、けれどこの世界にとどまっていたエヴァンスがウラルを見つめた。

「誓わなくていい。ジンが勝手に言っていることだから。あなたがここで返事しなくても、私はちゃんと生きていくから」

青い瞳が、揺れた。

唇がかすかに動く。待っている。

え、と漏れた声に金の髪が揺れた。

「信じることはできないが、お前のことは待っている」

「ごくごくかすかな声で言い残して、彼の姿は消え失せた。」

「目を覚ましたな、現実の世界で」

ウラルは呆然とサファイヤの棺を見つめた。

待っている？ ウラルが生き返ったら喜んでくれるということだろうか。どういう意味で？ もう一度殺せるから？ いや、もう殺せないと言っていた。二度とこの首を握ることはできないと。なのに？

「……どうしてあんなことを言うの。本物のジンなら絶対に言わない。死んだ自分の代わりに私を守れだなんて、そんなことを無理強いるような人じゃ、ない」

信じる意味がないから背を向ける。殺せないなら守れ。そんな簡単に変えられないのはわかっているのに。どれだけの気持ちで、なんのつもりで言ったかはわからないが、まるで彼らしくなかったのは確かだから。ただごとでなかったのは、確かだから。

「エヴァンスに言い損ねたことがある。シャルトルがアウレヌス卿に捕まった」

壁 の向こうから麻薬中毒者を送りこんだ、エヴァンスと犬猿の仲のベンベル騎士。

「いくらも経たずにアラールが伝えるだろうが、人語の話せないアラールではいろいろ不便があるだろう。伝えてくれるか」

生き返ってもう一度エヴァンスに会えと、婉曲的にそう言った。

ジンの褐色の瞳は優しく、けれどどことなく厳しい色を帯びている。いつもの目。生前も死後も変わらないその目で、まっすぐにウラルを見つめている。

その目がふっとそれたと思うと、ジンは身をかがめて足元のナタ草を手折った。夕暮れの中、時を止めたこの丘に咲く青いナタ草が見る見る間に夜の紫色に染まっていく。

「時間だ」

ウラルの心臓が止まって、ちょうど一日。

「俺の方から勝手に言ってしまったが、これでよかったか？」

「ウラルは生き返る」。エヴァンスに彼は断言していた。ウラルより先に。

「私の気持ちなんてわかってるのに」

「お前の口から聞きたい」

「その前にフギンと話させて。すぐ済むから。ひとことふたこと言う時間も、もうない？」

ジンはうなずき、ファイアオパールの棺を見つめた。

フギンにはこの会話が聞こえているのだろうか。このことフギンの墓所は互いの棺と墓標を通してつながっているらしいから、聞こえていてもおかしくない。

「フギン」

ぼつつと棺が炎の色に輝いた。

「ウラル。あの、その、さ」

しるどもどろになってるフギンにウラルはほほえんだ。

ほほえんだつもりが、泣き笑いになった。

「ごめんなさいを、いいたくて」

「え？」

「私は人でないものになるから。生きることと引き換えに、あなたが嫌っていた世界に行くことになったから。だから、だから……」
黙っている炎の棺をそつと両手でなでさする。

「気持ちには固まっているのに。こんな言い方をしては誤解を招く。なのに直接口に出すのがまだ怖い。」

「どれだけ考えても、死にたい理由なんてどこにも見つからなかった。生きるのが怖いって理由しか見つからなかった」

ウラルは人でないものになる。風神の使者になる。火神と手をたずさえて、人々を。

「生きててくれれば、俺はいいよ」

「迷いのない言葉に胸がぎゅっと縮まった。」

「生きるって言うってくれて、俺、嬉しいよ。お前がさっき逃げたと

き、俺すっごい怖かった。ウルルが死んだらどうしようって、それしか考えられなくて」

フギンはいつでもまっすぐだ。そのまっすぐさが嬉しくて、そのまっすぐさが時々怖くて。

「よかった、よかったよお……」

フギンの声に嗚咽がまじった。ウルルの頬にも涙がつた。ウルルは振り返り、ジンに向かってうなずいてみせた。

心の準備が、できました。

黒いマントがひるがえり、ウルルは広い胸にいだかれた。漆黒のマントは死の匂いがする。ゴウランラ の戦場跡で嗅いだ血と汗と金属の匂いがする。

「約束を果たそう」

かすれた声が耳を打つ。彼の手が後頭部に回るのに、ウルルは黙って目を閉じた。

創世記の一節が脳裏をよぎる。地神の土に、水神が塩辛い水を加えてこね、形を作った。そこに火神が心臓を与えると、水は血となつてその体をめぐりはじめた。そして最後に風神がキスをする、それらは命を持って動き始めた。

「お前は幸せになる。生きることを選んだその理由、決して忘れるな」

その唇が、ウルルの唇に重なった。

ウルルの体の外側から、内側から、風が包み込んで吹き荒れる。

風が。

命の風が。

第二章 4 「奇跡、希望、狂気」

はじめに気づいたのはムールだった。

ムールたちは一斉に高く鳴いた。歓迎の意を示すように。空を仰ぎ、熟練のムール騎手さえ聞いたことのない声で高らかに鳴いた。

何事かと飛び出してきたムール騎手や禽舎の世話係の体を、力強い、けれどどこか優しい風が吹き抜ける。その風に当たったナタ草は次々とありえぬ色に、純白に染まっていった。

ムールの大合唱にぽかんと口をあけるマルクのそばをすりぬけ、洗濯物を押さえるマームの裾を揺らし、 墓守 の自覚はないものの風の中にただならぬものを感じ顔をこわばらせるマイルの頬をなで 風はりようと吹き抜ける。

鍵のかかかっていない牢屋から駆けつけたエヴァンスと共に、風はウラルの部屋へ入り込んだ。時間を見越して来ていたダイオ、フギンの姿をした火神、窓際のアラーハの体を優しく抱きしめるように風は弧を描くと、そつとウラルの髪をなでさすった。

ウラルにかかった布団がふわりと浮いた。ふわり、ふわり。ウラルの体から風が吹いている。

外からの風とウラルの内側からの風。ふたつがからみあい、ひとつになった。

「ウラル……」

名を呼んだ声は誰のものか。

答えるようにウラルの口が開いた。胸がかすかに膨らんで、しばらくんだ。

かすかだが確かに、息をした。

誰もが息を殺し様子をうかがう中、ウラルの胸はゆるやかに上下する。

フギンが歩み寄り、ウラルの手をとって脈をみた。それからそつとウラルの頬に手をやり、優しく揺り起こすようにした。

「ウルル・レーラス。風神に愛されし娘よ」

ウルルのまぶたが震え、うつすらと目をあけた。目をあけて、焦点の定まらない目でフギンを見た。

「よくぞ戻った。俺からも祝福を」

フギンは布団ごしのウルルの胸、心臓の上に手を置いた。ぐつと力強く一押しすると、ウルルの頬に赤みが戻った。遠慮がちに、これでいいのかと言いたげに動いていた心臓が、火神につながされて力強く動きだす。

ウルルははつきりと目を開けた。フギンに助け起こされ、それから自分の足で立ち上がった。よろけながら、体の内外からの風に支えられながら。

ダイオとアラールハがその場に膝をつき頭を垂れる。エヴァンスはその場に立ち尽くしている。

「ウルルはほほえんだ。誰にともなく。」

「ただいま」

悲哀と慈悲と覚悟をたたえた、風の女神の顔で。

*

「ダイオ、覚悟はいいか」

ひざまずいていたダイオが青ざめた顔でフギンを見あげ、はい、としつかりした声で応じた。

フギンがその場に倒れる。ダイオは一瞬よろめいたが、すぐに体の力を取り戻した。すつくと立ち上がった双眸には強い、あまりに強い光がある。もとのダイオも持っていたが、これほど強くはなかったもの。威厳と覇気。今までのフギンに宿っていたもの。

「お前は」

押し殺したようなエヴァンスの声。チャ、とその腰で鳴った金属音にダイオは凄みのある笑みを浮かべてみせた。

「やめておけ。右腕のないフギンの体でさえ俺とお前は互角だった

ではないか。エヴァンス・カクテユスよ」

「やはり」と言いたげな色が、おそれと嫌悪感が、エヴァンスの目にじわりと浮かんだ。

「お前は何者だ。悪魔か、魔物か」

「どちらでもある。とりわけ貴様らベンベル人にとってはない」

ダイオが床に倒れたフギンを助け起こす。意識のないフギンのかたわらにウルルは膝をついた。

「フギン」

そつと両手で頬を包むと、フギンはぼんやり目を開いた。

「おかえり」

外からノックの音がして、何があったのかを問うマルクとイーライの声がした。

* *

禽舎の巨大な縦穴が静まり返った。両脇をフギンとダイオに挟まれ、ウルルはその中心へと歩み出す。エヴァンスはいない。この場にいれば混乱を招くとダイオに部屋へ帰されていた。

反国組織 否、反ベンベル国軍 ジュルコンラ、その数、一千。

「どうして」

ざわめきの中、マイルの声が細く響く。

「ウルルは、そのひとは確かに死んでたのに……！」

ウルルはぱたりと足を止めた。その顔をフギンが覗きこむ。

「心配すんな、お前はちゃんと生きてる。脈も触れるし、あったかい。ちゃんとここにいる。だろ？」

「フギン様……？」

フギンの仕草や口調があまりにも今までの「フギン」らしくなかったからだろうか。マイルが不安げな声をあげた。

「あ、お前マイルじゃないか！ マライの妹の！ 俺のこと覚えて

るか？」

振り返っての一声にメイルはぽかんと口を開けた。

フギンはしまったと言いたげに頭をかき、ダイオに指示を求める視線を送った。ダイオが「続ける」とうなずく。フギンは一礼し、再び ジュルコンラ に向き直った。

「ごめん、みんなに報告しとかなきゃならないことがある。俺は今までのフギンじゃない。古株のみんななら知ってるだろう、スヴェルのフギン、エルディタラのもと若頭だ。そして、今までの俺は」

ざわめき。

「このひとは、だれ」

かれはフギンではない。かれはダイオではない。

メイルは後ずさる。真後ろにいた父イーライにぶつかった。

「おとうさん」

これを、とめて。

イーライはかぶりを振った。厳しい目をして、きつぱりと。

「どうして。あきらかに異常でしょう」

血の気の引いた顔でキツとウルルをにらみつける。

「ウルルね？ そのひとが何かしたんでしょう。ばけもの！」

誰はばかりなく声をあげる。フギンがかばうように立ちふさがるが、ウルルは微動だにしない。凍りついたように、あるいは何も聞いていないかのように。そこに黙って立っている。

「ばけもの！ フギン様を返しなさいよ！」

メイルはウルルに詰め寄りかけ、はっと周りを見回した。

「なによ……」

メイルは周りを見回しぶるりと震え。

悲鳴をあげて身をひるがえした。

「イーライ、追え。部屋まで送って行ってやれ」

ダイオの短い命令に、イーライは娘を追って出ていった。

「メイルに限らずこの状況を不審に思う者も多いだろう。今まで隠

してきたことを先に詫びる」

この場の戦士は 墓守 として無条件にかれを信じられる。が、この場にいるのは戦士だけではない。それに戦士であつても女は火神の墓守 にはなれない。 墓守 でなければこの異様な雰囲気呑みこめない。

かれはメイルを武器に使つた。その反発をもつて他の者の反発を抑えた。だから誰も止めなかつた。父のイーライですら。

「俺は太古の昔よりこの国を守つてきた。ダイオの祖、英雄アレントをはじめ多くの将の体を借り受け、この力と祝福を受け、多くの戦いを勝利に導いてきた」

ぶわりと炎の気配がその場を包んだ。肌でも目でも感じることにできない、けれど確かにそこに存在する、光と熱気。

「ベンベル国は強い。俺もまた多くの将の体を借り戦つたが、その力の前にコーリラ国を失い、このリーグ国をも失つた。だが、ここにはまだ多くの戦士が残つている。一度は敗北したが、敵を知り優秀な味方を得た今、もう二度と負けはしない」

深紅のマントが風にあおられ荒れ狂う。

「聖女は蘇り、俺はここに最高の器を得た。今日は記念すべき日だ。ジュルコンラ は旧き名を捨て、ここに新しく フェスオ、ソルド 炎の剣 の名を与える。そしてこの場にいる戦士のすべてを俺直属の部下 火神の墓守 とし、我が力と祝福を授ける！」

「しゃらん、とダイオの剣が天を貫いた。」

「我に従え！ 我は火神、この国の軍神なるぞ！」

真つ先に続いたのは以前からの 火神の墓守 たちの剣。一瞬遅れて、今しがた 墓守 となつた男らの剣が天に掲げられた。

太い叫びが天を突く。メイルに煽られた不安を振り払うかのように。高い歓声が空を裂く。胸にわだかまるものを吹き飛ばすように。ウラルはそこに立っている。かれらを祝福するでもなく、戦いを諫めるわけでもなく。恐怖を浮かべたマームを見つけ、ウラルはかすかにほほえみかけた。喪服の裾がふわりと揺れる。

恐怖と不安は当然のこと、けれど今はかれに従うほかがない。
かれは火神、狂気と希望を司る戦いの神。
これは希望への渴望だ。

ウラルはなにも、できはしない。

第二章 5 「人ならざるもの」 上

盆の上で、たぶり、たぶりとスープが揺れている。縁いっぱい
でスープをそそぐのはマームの習慣だ。食欲旺盛の男らが喉を詰ま
らせないように、お茶とスープをいつもそうしてそそぐのだ。

こぼれて隣のパンやサラダにかかっては一大事、ウラルはひっそ
り足音を殺して歩いていた。それが気になったのだらう。通路の奥
からこちらをうかがう気配があった。

「エヴァンス」

名を呼ぶと、通路の奥から伝わってくる緊張が解けた。

「ウラル」

「朝ごはん、持ってきた」

エヴァンスは自分のポケットから小さな鍵を出すと、牢の鍵穴に
差し込んだ。軽い音と共に錠が開く。牢から出てきたエヴァンスは
ウラルから盆を受け取ると、机の上にとりと置いた。

ダイオの全軍鼓舞の後、エヴァンスは酷いとぼつちりを受けてい
た。罵られ、牢の鉄格子ごしに石を投げられ、あげく鉄格子ごしに
槍まで突きこまれ……。ダイオがそれを諫め、フギンとマルクをし
ばらく見張りに立たせて、やっと静かになったのだ。

「大丈夫だった？」

「よほど嫌われているようだな、ベンベル人は」

エヴァンスはただ背を向けて無視していた。槍を突きこまれたと
きだけ振り返って柄をつかみ、引きずりこんで、牢の隅に放り投げ
ていた。

「お前こそ大丈夫なのか。傷は」

「ふさがってた。傷跡は残ってるけど、痛くない」

服の上から傷跡を押さえる。もう包帯も巻いていない。

「貧血は。熱は出ていないのか」

エヴァンスはウラルの手をとった。脈を診る。それからウラルの

頬を手のひらで包むと、固まっているウラルなどお構いなしに下まぶたを指で押し下げ、色を診た。

ウラルの頬を包む固い手のひら。近くで火が焚かれてじゅうぶん暖かいのに、触れる指はひんやり冷えている。ウラルはどんな顔をしていたのだろうか。エヴァンスはウラルの目を覗き込み、怪訝そうに目をしばたいた。

「エヴァンス？」

ぱっと手が離れた。

「悪かった」

青い目がそれる。ウラルも赤くなつてうつむいた。

「容態を診ただけだ、悪気はない」

無意識にやっているのが問題だ。エヴァンスは今まで恋愛したことがあるのだろうか。あつたらあつたで驚くし、なかつたらなかつたで驚くだろうけど。

ふつとエヴァンスの横顔が笑った。

「少しばかり動転したようだ。あれだけの傷が跡形もなしか」

これで「少しばかり」なのか。彼の精神はどういう構造をしているのだろうか。それともこれがエヴァンス流の軽口なのだろうか。軽口などとても叩けそうにない男なりの。

「あの『夢』のことは。お前も覚えているのか」

すっかり平静に戻った声にうなずいた。ウラルは目をそらしているし、エヴァンスもそっぽを向いたまま。見えたかどうかは怪しいけれど。

「待つてるって、言ってくれたよね」

「そうは言ったが本当に生き返るとは思わなかった」

「あなたも私のこと、化物だと思おう？」

沈黙。青い目は冷たい石壁を見つめたまま。

ウラルは笑ってみせた。

「ごめんなさい、わかりきったこと聞いた」

エヴァンスが急にウラルの方を向いた。

「化物になりたいのか、お前は」

声が固さを帯びている。さっきまでそれていた青い目がまっすぐこちらを見据えている。手で触れないのが不思議なほどの、視線の圧力。

エヴァンスは怒っている。彼は嘘をつかない。「待っている」と言ったからには、本当に、義理でもなんでもなく待っていてくれたのだ。

「私、は」

火神と手を携えて、一人でも多くの人を救うために戻ってきた。けれどあの場でわかった。ウラルと今のダイオは決して対等ではない。彼にとつてウラルはあくまで道具だ。人々に希望を示すための風神と連絡をとるための。彼はそのあたりを事務的にぼつさり切り捨てる。となれば、人でなくなったウラルは別のものになるしかない。人として見てくれる人がいなければ、『人ならざるもの』としての自分を前面に押し出し、人としての自分を押し殺すしかない。「化物になりたいわけじゃない。でも……」

それも覚悟で戻ってきた。でも。でもやっぱり。

ふつとエヴァンスの目元がゆるんだ。

「正直なところ実感が沸かぬのだ。お前が一度死んだことが。何も起こらなかつたまま一日が過ぎて、ここにいるような気がする」

お前の体には傷ひとつないのだ。そう言いたげに向けられた視線が、ついと逸れる。ウラルの胸の傷跡から。

「わたしのほかにもお前に近い誰かがそう思っているだろう。あまり気に病むな」

気に病むな？ ウラルはきょとんとエヴァンスを見つめた。

「何かおかしなことを言ったか」

「あなたがそんなことを言うとは思わなかつたから。今まで私を殺すって口癖みたいに言ったのに」

じわりとエヴァンスの口元に苦笑が浮かんだ。ただ苦笑と言うに

は少しばかり穏やかな。

少し前にメイルに罵られたばかりなのに。化け物、化け物と、何度も叫ばれたはずなのに。エヴァンスにそう言われると、そんな気がしてくる。誰も数日前と今のウラルの違いなど気にしていない気がしてくる。今日のエヴァンスは妙に優しい。喜んでくれているのだろうか。ウラルがまたこうして目の前にいることを。うぬぼれだろうか。

「私を殺すのは、あきらめたの？」

またエヴァンスは目をそらした。口元の笑みが幾分苦い、どことなく何かを諦めたようなものに変わっている。

「私を殺さなければ、あなたはどうなるの？」

答えづらいらしい。質問を変えてみた。

「神の裁きを受けることになる」

「具体的には？」

「死後、神に約束された安息の地に行くのではなく、煉獄へ落とされ責苦を受けることになる。その前に教会を通し、できるだけ罪を軽くしていただけるよう嘆願することになるだろう。己の罪を数え上げ、認め、この身をもつて償う。軽罪なら教会への奉仕労働や財産の没収、重罪ならば教会からの追放や処刑が課される」

ウラルは顔を歪めた。エヴァンスは淡々と話しているが、ベンベル軍の上層部に嫌われているエヴァンスだ、重罪確定なのではないだろうか。となれば、この流れからして間違いなく命を奪われる。

「祭壇を血で穢したという、それだけで？」

「おおもとはそうだが、もはやそれだけの話ではなくなった。罰の拒否はまぎれもない神への反逆、それも理由が女にほだされたところでは弁解のしようもない。最高刑を受けてしかるべき罪状だ」

そんな、としか言いようがない。ほんとうに、本気でそう思っているのだろうか。あきらかに神様の裁断だけでないものが裏に見えるのに？

受け入れているはずがない。だからエヴァンスは口ごもったのだ。

ウルルを殺すのをあきらめたのかという問いかけに。彼もどうにかして逃げ出したいのだろう。けれど性格的にそんなことを言えないのだろう。だから。

「あなたに死んでほしくない」

エヴァンスの青い目がウルルに向く。

ウルルはぎゅっと胸元のペンダントをにぎりしめた。

「もう誰にも死なないでほしい……」

「ならば、どうすればいいというのだ」

低い声が岩壁にびりりと反響した。

死なないでほしい。誰も死なないでほしい。残酷な言葉だったのだ。ウルルと信仰の間で悩み続けている彼にとっては。ジンをはじめとした多くのリーグ人を殺してきた彼にとっては。

「リーグの聖女よ。わたしに答えを与えてくれるか」

エヴァンスが唇の端を歪ませる。皮肉だ。毒のない皮肉。与えられないだろう、お前は聖女と呼ばれているだけの人間だ。神や化け物ではない。

ぎゅっと目を閉じる。どうしてこんなことになったのだろう。どうして。

「わたしは今日の午後、ここを発つ。シャルトルと合流して屋敷へ戻るつもりだ。お前こそ、死ぬな。もう二度と」

これがエヴァンスの決断だ。これが最後だと思っていたから、彼は妙なほどに優しかった。納得が胸にすんと落ちてきて、それと同時に忘れていた本題を思い出した。

「エヴァンス、大切なことを伝え忘れてた。シャルトルがアウレヌス卿に捕まったわ」

「なんだと？」

彼の声がぴんと普段の固さを帯びた。

「アラーハはツノに手紙をつけたまま帰ってきた、あなたに何か伝えたそうにしてたけど、伝わらなくて諦めた。でしょう？」

「確かにそうだが。どこからの情報だ」

「ジンに聞いたの。あの人は千里眼を持っているから。風の通れるところならどこだって見れる。私の言っていた『精霊』があの人よ。私が麻薬中毒者の襲撃を知っていたのも、あの人が知らせてくれたから」

「今度こそ化け物だと思った？ 言いかけた言葉を飲みください。助けてあげて」

エヴァンスは動かない。もっとあかささまに疑われるか、さもなければシャルトルの居場所や状態でも聞かれると思ったのに。エヴァンス？ 視線で問いかけてみるが、エヴァンスは顔をこわばらせたまま、やはり何も言わなかった。

たしかにウルルは変なことを言ったはずだ。でもエヴァンスがこんなになるようなことを言っただろうか？ 今までの会話を思い返し、ウルルは悟った。ウルルは凧らずも「聖女としての答え」をエヴァンスに与えたのだ。常人にはない千里眼を根拠として。

シャルトルを助ける。死ぬな。
ここで答えを与えられる存在は彼にとって何なのだろう。尋ねるまでもなかった。

ウルルはうつすらと微笑んだ。エヴァンスが何か言いたげに口を開く。ウルルは首を振ってそれを制した。いいの、それで。事実だもの。

「シャルトルの居場所、ジンに聞いておくれ。わかっただらすぐ連絡するから」

「ジンとはいつでも連絡がとれるのか」

「ええ、いつでも。その気になればここでも」

目を閉じて呼びかければ、いつでもあの丘が目の前に現れる。そんな確信めいた予感があった。ジンが傍で見守っている感じもする。エヴァンスがシャルトルのことを知りたがれば、ここで彼に話しかけるつもりだった。

でも、どうやらエヴァンスにとってジンの名は禁句に近いものになったらしい。ジンの名を聞きたび彼の肩がかすかにこわばるのが

わかる。死してなお力を持つ彼に対しての畏怖だろうか。それとモジンの名を口にし続けるウラルに対しての嫌悪感だろうか。

どちらでもいい。今、あきらかにエヴァンスは引いている。もうここを出た方がいい。

ウラルは机の上に置かれたきり忘れられた盆に手をやった。スープカップを手で包む。すっかり冷えてしまっていた。ここに来たときは湯気をたてていたのに。

「ごめんなさい、長話しちゃって。暖めなおしてくるわ」

エヴァンスの手が伸び、ウラルの手首をつかんだ。スープがこぼれてかたわらのパンにしみこんでいく。

「構わん。しばらく火の傍に置いておけばいいことだ」

スープは木の椀に入っている。火の傍に置いておいたくらいで温まらないのはわかりきっているのに。

「ごめんなさい。また、来るね」

エヴァンスは返事をしなかった。「待っている」と言ってくれなかった。ウラルはきびすを返し、長い廊下を歩き出す。

何を期待していたのだろう。こうなることくらい、わかっていたのに。

わかっていたのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9841q/>

風神の墓標

2011年12月11日22時47分発行